

東方双雲録

天白雲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雲は漂う縛りつけるものも阻むものもなく自由に・・・

生まれたときより束縛されし双（ふた）つの雲は

隔絶された理想郷を今日も。

ただただ気ままに漂う・・・

目次

番外集。本編は第壹話から!!

第①話—さつきの想い。——1

第②話—廃れた神社。——7

第甘話—T r i c k o r T r

e a t (トリック・オア・トリート) !!! 15

第送話—幻想の人々の聖なる夜。

29

第???話—夢想の凡人——42

第元話—年未年始。新婚夫婦の初デ

ト——50

本編開始。まずは、こちらから・・・

第壹話—普通に平和な日常——64

第貳話—異常で理不尽な洗礼——70

第参話—風に祝われし者への暗雲

76

第休話—第1回キャラ設定のコナ

!!——83

第四話—旅立ちの朝舞上がる雲

87

第五話—神々の世界。太古の双雲

95

第六話—双雲。戦神と対峙する

103

第七話—白雲、祖神と相対す。

189	第13話―漂う先には諏訪の国!?		第14話―諏訪の国の幼女(?)な主。	194
	古代都市編終了! 諏訪の国編開始!!	174	第15話―諏訪大社の優雅な一日(一部を除いて)	201
	雲。		第16話―開戦! 諏訪大戦。	212
	第12話―都市との別れ。過ぎゆく	160	番外話―能力などまとめ。	223
	姫		第17話―決戦!! 諏訪大戦!	228
	第11話―激闘!! 神霊の依り憑く月の	148	第18話―神代の絆! 戦に生きし結	240
			神。	
			第19話―流れる浮き雲。諏訪を経つ	250
			諏訪の国編終了! コラボ! 知識と結の	
			二柱編スタート!!	
			未来都市?	136
			第10話―都市での生活。流れる月夜	148
			第9話―修行終了。 双雲降り立つは	123
			第八話―激闘!! 白雲 v s 黒雲	123

第20話―知識を司る絶対神。

260

第21話―結びの神vs影を統べる夜

の王

277

第22話―VS!!『繋がり』を尊ぶ結神

!!

297

第23話―全知神との別れ。双覇帰還

!!

319

コラボ終了!!妖怪の山編開始!!!

第24話―目の前に広がる天国、地獄。

330

第25話―妖怪の山での新たな日常。

345

第26話―風神少女との日常。

360

第27話―鴉と幼馴染。波乱の幕開け

?

372

第28話―最速天狗と恋の障害!!!

385

第29話―VS!!八咫 陽葉!!!

398

第30話―鴉舞う山、鬼笑う山

409

第31話―激闘へのカウントダウン。

決戦は3日後!

420

第32話―山の行方は!? 鬼子母神V

	S 結びの神。	428
	第33話―再会。そして決意。	450
468	第34話―山発つ浮雲、都に赴く。	
	番外話―妖怪の山登場キャラ能力について!	484
	妖怪の山編終了!! 幻想入りまで猛スピド!! 絶世の美女編。	
	第35話―到着! 平安の都。	490
	第36話―月夜に照らされし、絶世の美女。	502
	第37話―難題攻略! 姫に向日葵を献	583
	上せよ!!	513
	第38話―祥磨のイギリス放浪記①	527
	第39話―六つの難題結果発表!!!	535
	第40話―祥磨のイギリス放浪記②	548
	第41話―かぐや姫と月よりの使者。	558
	第42話―祥磨のイギリス放浪記③	571
	第43話―双雲、紅き王と月の精鋭。	583

番外話―絶世の美女編登場キャラ能力

まとめ!!

597

絶世の美女編終了。亡霊の舞う死の桜&

コラボ編!!

第44話―八雲の友人!? 悲劇の少女。

604

第45話―黒衣の神、舞い降りし死影。

614

第46話―死神と結神。①

624

第47話―死神と結神 ②

633

第48話―死影と共に狂イ咲ケ、墨染

の桜

647

第49話―死別、亡霊少女の微笑み。

番外話―亡霊の舞う死の桜&コラボ

編。登場キャラまとめ

674

亡霊の舞う死の桜編終了。知識と鎖の幻

想郷編開始!!

第50話―紅魔に來客。創造と鎖

678

第51話―再開とはじめまして。全知

と鎖と結神

第52話―陰陽異変。先代博麗の巫女

701

第53話―風神少女の想い。

第54話―Qここは人間の里ですか?

712

A いろいろ、ここは妖怪の里です。

728

第55話—知識と歴史の半獣。緑光纏

いし白き野獣。

743

第56話—博麗靈夢とは？結神と紫髪

の少女……

763

第57話—陰陽平等の拳！人妖を愛し

た人間。

780

第58話—博麗神社での宴会、陰陽異

変ここに終幕！

802

番外話—知識と鎖の幻想郷編陰陽異変

まとめ

829

神様と腐女子が出会ったら、修羅場フラ

グが立ちました!?

第59話—平和な郷。。。舞い降りるは

早な えっ!?

842

第60話—さてさてさく、お仕事を

しますかね。

855

第61話—結神様のお仕事①(デート

開始)

870

第62話—結神様のお仕事②(デー

ト回氷柱&?)

888

第63話—結神様のお仕事③(デー

ト回 椀)

899

第64話—俺と幼馴染と、舞い降りる

キューピッド……?

914

- 第65話—博麗靈夢の覚悟！力試しの
珍客？ ————— 932
- 第66話—黒翼の少女・・・結神の決意
と別れ！ ————— 950
- 第67話—お願い完了？安定のフラグ
回収乙でしたー。 ————— 969
- 番外話—神様の修羅場フラグ編まとめ
————— 985
- 神様のフラグ回収終了！原作入り&紅霧
異変開始！！
- 第68話—紅き霧と紅白の巫女
————— 993
- 第69話—白黒の魔法使いと紅白の巫
————— 1085
- 女+普通の神様 ————— 1005
- 第70話—時を操る瀟洒なメイドと
激昂する結神 ————— 1018
- 第71話—真つ黒剣士と結びの黒雲。
————— 1032
- 第72話—開戦！ 紅き館に集いし者
————— 1044
- 第73話—巫女と魔法使い・・・少女
達の絆！ ————— 1056
- 第74話—狂気の破壊姫。紅霧異変の
終幕！ ————— 1072
- 番外話—原作入り！紅霧異変まとめ。
————— 1085

白雲と黒翼の結婚式！参列者さん異世界
からいらつしやい編

第75話—突然の宴！ け、結婚式!?

1096

第76話—式典準備！参列者さん方ご
あんなくい。

1108

第77話—白雲に集いし乙女。決別の
結び！

1118

第78話—結びの神と天狗の結婚式！

く幻想に吹く愛の風く

1129

第79話—神の結婚？そんなことより

宴会だ！

1143

第80話—披露えん…宴会の終わり

？

第81話—結婚初夜つてナニすれば良

1152

いの…？

1169

第82話—祝宴の終わり。終わらない

冬。

1184

結婚式終了！コレで終わっちゃいます
ね… 『亡霊少女の想い 幻想に咲く

死の絆編』スタート！

第83話—白き春、開花する終わりの

桜。

1204

第84話—異変？ そんなことより家

の嫁！

1215

第85話—調査開始！ 白き世界に走

	る魔法。	1225
	第86話―恋の魔法使い。 異変調査	1234
	!	
	第87話―風纏て少年は翔る。	1244
	第88話―白雲流と魂魄流。	1255
	第89話―異変終結? く亡霊少女と	1265
	死の桜く	
	第90話―西行妖? いや、『ボク』だ	1281
	よ?	
	第91話―『創造』と『忘却』…『主	1293
	人公』	
	第92話―終わりが始まる	1301
	第93話―希望	1311
	第94話―希望の神風	1321
	第95話―風神。 さらなる希望	1330
	第96話―其は結びを司る『神』	1341
	第97話―幻想防衛戦線!	1357
	第98話―彼岸到着。 異形象る狂影。	
	第99話―HOPE…: DESPA	1373
	IR.	1389
	第100話―理想と絶望の終わり。	
	幻想の雲。	1412

番外集。本編は第壺話から!!

第①話―さつきの想い。

きくんこくんかくんこくん。・・・

きくんこくんかくんこくん

やる気のなさそうなチャイムが鳴った。

「おいしい。もうチャイムなったから、掃除当番以外は早く荷物まとめて帰るように」

先生の声が教室に響く。私も、教科書をまとめて、帰路に着く。

「双覇・・・。祥磨・・・。ごめんね？私がここに連れてきたせいで。」

目の前にはデパート「ヨウヨウ」。あの日といっても数ヶ月前、私の幼馴染。

『白雲双覇』と『神薙祥磨』が交通事故に会い亡くなった場所だ。あの日の事故以来、ここに来て手を合わせてはいるが一向にもやもやが晴れない。あのとき、ここにこなければ。私が別の場所に連れて行って上げていけば。

ああなる前に気持ちを伝えておけば……

後悔しても、遅かった。「時間は不可逆」とはだれの言葉だったか？
失ったものは帰ってこない。伝えられなかった気持ちは抱え込むしかない。

「双覇。どうして、逝っちゃったの？こんなに……好きだったのに。」

大好きだったのに・・・」

悲しみをこらえて歩き出す。私は最近下校の途中、いつも寄る所があった。守矢神社と言う神社だ。

「『今日も、早苗ちゃんのうちに寄ってくね。』と。」

お母さんへのメールは欠かさない。最近神隠しがあるらしく、気をぬくとすぐに心配して電話がかかってくるのだ。

「まったく、お母さんも。通り魔ならともかく神隠しなんて。」

私はこの手のオカルトにはあまり興味はない。

双覇の影響もあつて多少は興味もあるし、中2病と呼ばれる人たちを一概に非難したりはしないが。

「でも、自分でみたり体感したりはないもんな〜。」

そうこうしていると向こうから、緑髪の元気な女の子が歩いてきた。

「ああく。さつきさん。いつもありがとうございます。居間に上がってください。神奈子さまと諏訪子さましかいませんから。」

この子は東風谷 早苗。なんでもこの神社の風・^か・祝・^は・^ぜ・^ふ・^り・?をやつていて、ここの神さまの姿が見えるのだとか。

居間に座つて待つていると、早苗ちゃんが麦茶を持ってやつてきた。

「暑かつたでしょう。麦茶飲みませんか?お団子もありますよ。て、諏訪子さま!

麦茶はさつきさんのです!」

早苗ちゃんが、見えない何かとてんやわんやしていた。訂正。少し見える。

なぜかはわからないけれど、神に仕えてるわけでも無い、私にはなにか白い影のようなものが見えていた。

コレは早苗ちゃんには言つてないことだ。

「はあく。さつきさん。それでどうでしたか？双覇さんたちのご友人・それと、周囲の人たちは？」

「うん。私も含めてまだ完全にふつきれては無いんだけどだんだんと混乱はなくなってきたよ……。」

そうですか。と早苗ちゃんはすこし安心したような顔をした。

「ですが、周囲の混乱は無くなったとしても

依然として祥磨さんと双覇さんの『体』は見つかって無い。というのは……」

そう。今回の事故最も気がかりなのは轢かれたはずの双覇たちの体が無いのだ綺麗さっぱり。車体に血痕はなく、道路にももちろん残っていないかった。いくらなんでも轢かれた現場に血痕も無いのは不自然すぎる。

私と早苗ちゃんは今、その謎について考えていた。例えば……神隠し。

「ここまで来てオカルトに頼るのは嫌だがそうじゃないと説明がつかない。それに、

「そう、かんがえれば。まだ気持ちを伝えられる・・・」

「ん？どうしました？さつきさん。」

自分では十分小声だと思っていたけど早苗ちゃんにぼそぼそと聞かれたらしく・・・
何でも無いよ。と答える。

空の夕日に照らされ、顔が赤いことには追求されなかった。

第②話―廃れた神社。

すっかり日が暮れるまで早苗ちゃんといろんな可能性を話し合ったが、結局理論的に証明できるようなことは何一つ思い浮かばなかった。

「はく。今日もわからなかったな．．．」

いったい何がどうなって2人は消えてしまったのか2人が死んだと言う漠然とした情報だけが学校には行ってる。

でもそれだけだ。死体が無い以上、状況的に死んでるはずなのに行方不明で片付けられている。

だから、お葬式も行われていないし、学校も行方不明と言うことにしてる。クラスのみんなも最初は驚いていたが機転を利かせた誰かが、

「きつと、アニメのレアアイテム取りに行つて、ほつつき歩いてるだけだよ。」
と言つて、一応クラスは安定した。

まあそれで完璧に安定するわけもなく未だに何人かは双覇と祥磨の席を見ては

悲しげな表情をうかべるが・・・

「ただいま。ご飯は向こうで食べてきたからいらない。」

そうこうしてゐるうちに家についた。ごく普通の一軒家・・・双覇とはここで家族同然に過ごしてきたつけ。

わたしは、手洗いうがいを済ませた時刻はまだ7時・・・

少し早いながらも眠ることにした。どうせ考えても良い案はうかばないのだ。ならせめて夢の中でだけでもまたあの2人に会おう

そう思って、パジャマに着替えベッドに入る。しばらくすると睡魔に襲われ、ゆっくりと深い眠りにおちた。

「さつきさん。さつきさん。．．．夜神さつきさくん。」

「ん。んう?? (ぱちっ) ．．．え!?! なにここ!!!」

声が聞こえた目が覚めたら見知らぬ場所に居た。どこを向いても真っ白で輝いていて目に悪い気がする。

「あらら。面白い反応ね?。(くすくす)」

声が聞こえたほうを向くと女の人が口元を扇で隠して優雅に笑っていた。

『金髪』で『紫色の道師服』、『頭にドアノブ型の帽子』

あれ?この人見たことある?!

「・・・もしかして。あなたは、『八雲 紫』さんですか?」

そんなわけないとは、思っていたけどおそるおそる女性に尋ねた。

すると・・・

「あら?やっぱり私のことがわかるのね。『外の世界の人間』のはずなのに能力を持つていたから、接触してみたのだけれど。」

そう言うと、今度は丁寧な、

「あなたの言うとおり、私は八雲紫（やくも ゆかり）幻想郷と言う土地の賢者をしております。」

やはり、あの東方Projectのキャラクター。八雲紫さんだった。

信じたくは無いが・・・

「あれ？たしか紫さんの能力って。」

私は、ある一つの可能性を思いついた。

「もしかして！最近このあたりで起きた、死体の消失した交通事故!!

紫さんの仕業ですか？」

もう、この可能性にかけるしかない。オカルトが嫌だとか言ってられない。

また、祥磨に。。

双覇に会えるなら!!

「うふふふ。能力のことも理解してるのね本当に興味深い・・・

貴方達は私たちのことをどこまでしってるのかしらね？

まあなら隠しても、無駄ね。

ええ。双覇さんと祥磨くんは今、こちらの世界にいるわ。」

彼女はにんやりとうさんくさい笑みをうかべて、その場から消えた。

瞬間、現実の私の体は覚醒した。

そして、一目散にある場所に向かった。なぜか体は止まらない。ただそこにいけば何

かが変わる気がした。

そして、私はある山の山頂近くに居たそんなに高くない山ということもあり、息は切れるものの装備は軽装でも登れた。

なにも無い？そんなはずは無い。

いままでならただ見て諦めただろう。だけどそのときのわたしは何かが違った。

いままでに無いくらいに周りを『良く見た』。すると、

「みつけた。．．．

『博麗神社』・・・」

私はぼろぼろの鳥居をくぐり、『理論と科学の当たり前の世界』を棄てた。

第廿話—T r i c k

o r

T r e a t (トリック)

オア・トリート) !!!

「さあ!!みんなで仮装しようぜ!」

「ここは幻想郷・・・妖怪や神霊、妖精に魔法使いといった

科学主流の世界では存在が認められていないもの達が住む理想郷・・・以下略

「はあ・・・いつか、出てくるとは思ったけど、

お前の症状じゃここまで我慢できただけましなほう・・・か?作者。」

さらに言えば、その理想郷においてのほぼ中心。

博麗神社と呼ばれる神社にて今、二人の青年?が話込んでいた・・・

「あの・・・主?どなたと話してお出でなのですか?」

私には主の前には人どころか動物の影も見えないのですが・・・」

自身も存在感を扱う技『夢想天生』の使い手である

博麗の巫女人間の切り札とも呼ばれ、その実態は妖怪も人間も等しく愛する『博麗靈夢』。

かつて化け物と呼ばれ、異変を起こした経験もあるが誰よりも心優しい巫女さんだ。幻想郷内でも、トップクラスの強者にぶつちぎりであるであろう彼女でさえ彼の者の存在が認識できない。それもそのはずその者の名は・・・

「だ。そうだけ？」

そろそろ遊びをやめないと俺にしか見えない奇妙な幽体的な立ち位置になるぞ？初登場なんだからちゃんと言えよ天白雲さん。」

「ああ・・・分かったよ。これでいいかい結神？

それとこんにちは。靈夢さん俺の名は天白雲（あめのしらくも）本名じゃないし・・・
そうだな、『シロ』とでも呼んでくれるとうれしいな。」

双覇が声をかけた先の空間が歪み、一人の人影・・・

『天白雲』あめのしらくも。この作品の作者つまりは俺である・・・

容姿は目の前に居る、双覇に良く似ている

強いて言えば髪の色が白というより銀それと、ジャージにパーカーというなんとも

時代に合わない格好をしている。

「コレで良いかいつて俺に聞かれてもなあ、

まあ見えるようになったなら容姿とかは俺が口出すことじゃないが・・・
お前、なんで光ってんの？」

「ああこれ？気分。」

ちなみに、ウルト○マンテ○ガのグリッター状態を

イメージしてください目が痛くならない光です・・・

「あ・・・あの主？」

霊夢は困惑・・・まあ実際目の前に急に人間が現れたら

こんな反応にもなるだろう。

「ああ、霊夢さん今日これからちよつと此処（神社）使わせてくれない？」

なんの前触れも無く、突然の提案に提案者である俺ことシロ以外の

空気が瞬間的に冷却された。。。

「え．．なぜです!?

私まだお掃除しなきゃいけない．．．というかまずは主に許可を。」

困惑はしつつ、あくまで冷静にある意味事務的とも取れる

対応を返す靈夢さん．．．

「靈夢さん。そのことなら俺は別にかまわないよ、

こいつは俺らの害になるようなやつじゃない．．．．．」

お。どうやら双覇のやつも、ノリ気らしい．．

今日という日をちゃんと理解してくれてるようであれしいかぎりだ!

「さて、ならまずは．．．よっ!」

シロは空に向かい、手のひらを掲げる。。。

すると手のひらから黒いもやのようなものが発生し、やがてしつかりと形をなす。

「ん？うわあつ!!(どきっ)」

そしてその空間から落下する茶髪の青年。

「よっ。悪いけど今日一日だけこっちに居てもらおうぜ？

祥磨くん。」

どうやら黒い空間は、スキマのようなものらしい……

「だあああ!!何すんだよ双覇!

俺は、紅魔館の執事の仕事で手が離せねえからもう呼ぶなって言つたら……あれ?

おまえ誰？」

「よう。俺は天白雲・シロとでも呼んでくれ。

お前とはもう会ってるんだけどね『想像と創造の人間』神薙祥磨くん。」

微笑んで、手を差し出す。

ズバアツ！小気味良い音とともに俺の左腕が吹っ飛ぶ。

『武創』黒剣士の双剣。うるせえ！

お前がどこのだれかなんてどうでもいい・・・俺を元の場所に戻しやがれ！

「あはは。そのスペルもう使ってくれてるんだサンキュ！

それと超痛いね腕が斬れるって・・・まあ、もう終わってるけどな。」

俺のふざけたような口調にイラついたのか、祥磨が

剣を構えてさらに襲いかかってくる。。。

「だから・・・終わってるんだよ。雑魚が。」

俺の言葉が合図だったかのように、祥磨の体は吹っ飛ぶ。

「コレで分かったろ？」

君じゃあ俺には勝てない・・・というかこの世界に存在しているものになら俺は勝てると思った方が正しいかな。」

そう言っって左手を差し出す。無論起き上がらせるために・・・

「んぐっ・・・お前、何したんだ？」

「別に？ただ能力を使って時を止めさせて貰っただけだ・・・
いや、別の時間軸を創ったって感じかな??」

あくまで普通のことのように言っただけの俺・・・

「はあっ!?なんだそのチート・・・」

お前誰で能力ってなんなんだよっ
!!!!」

「うぐん・・・説明めんどくさいしなあ・・・」

瞬の能力でも使わせてもらうかな・・・プロフィール・インプット+クラフトメモリー
」。。。。」

俺の素情等の情報を一気に送り、メモリー（記録）を勝手に相手の記憶に作る。

これで昔からの知り合いという立ち位置確立。

「ん。ああ・・・なんだよ良く見たら作者じゃねえか。イタズラも度を超えるとそろそろ怒るぞこの野郎。俺が居ない間向こう（紅魔館）は大丈夫なんだろうなあ・・・」

ボキボキと腕を鳴らし祥磨がにじり寄ってくる・・・
いやあ怖い怖い。

「だいじょうぶだよ。『妄想を具現する程度の能力』

知ってるだろ？この世界内の俺は誰にも勝てないゲームで言うところの絶対に、負かされる敵みたいな立ち位置だからね。

つまりお前らは負ける事を強いられているんだっ！」

そう。俺が化け物だらけのこの世界にて此処までふざけられるのも

この能力のおかげだ・・・まあ俺の妄想の範疇にないと意味ないけど・・・

つまり別世界に仮に行つたとしてその世界では俺は妄想の力を使えないってことだ。

「それで、俺の妄想能力の一つ。」

ワールド・エンドで紅魔館周辺のみ時を止めてきたからこっちに居ても別に問題はないぜ。」

ほんとは、名前のとうり世界の時間を永久的に止める事が出来るけど・・・
さすがにそこまでやるようなことじゃない。

「さすがに、中二病末期の妄想は強さがカンストしてるな・・・」

そんな能力があつたらさすがに小説的に面白みがあつたもんじゃない・・・」

「いや、お前こそ二次元オタ設定どこに行つたんだよ・・・」

それにそんな設定で見たら読むのをやめたくなるような超カンスト能力者相手に
僅差にまで持ち込んだ化け物が言うなって・・・」

そう・・・俺と双覇は実は一回戦つたことがある。

まあその話はおいおい話すとしてその時に俺はこのチート能力を全開にして戦つた
にもかかわらず双覇相手にはちよつとだけ苦戦した思い出がある・・・

「まあ、んなことあどうでもいいや！」

設定に関しては俺の責任でしかないし・・・それより二人ともほいこれ。」

正直、野郎には渡す気は無かったけど一応・・・

二人ともこの作品の主人公キャラだしな。

「ん、なんだこれ死覇装（しはくしょう）か？

て。これ色合い逆じゃね？何で白に黒の羽織なんだよ・・・

かつこつけた死人みたいになってんだろうが。」

双覇には、死覇装（しはくしょう）の隊長バージョン。

ただし本家とはちがって白の和服に真つ黒の羽織それと背中に真つ白の字で『十』

「ほえく・・・あの天才のと同じようなのだな。

俺のはくく。。。なんだこれ？黒いローブ。。。こんなを着てるキャラ居たっけ。」

あれ？気付いてねえし・・・

そこまで改造してないんだけどな。

「それ、『コートオブミッドナイト』に似てねえか？」

確かに多少改造してローブにしてるッぽいけど……」

双覇のほうが先に気付いたか……

『コートオブミッドナイト』—SAOの主人公キリトが第1層ボスのラストアタックボーナナスで手に入れた装備品その改良版。

「ああ。魔法を使う割に完全に肉弾戦が板につきちまつてるから

魔法使いらしくローブをプレゼントしようと思つてな……『黄昏の魔導着』—

ローブオブトワイライトだ。一応着ると魔力増加の効果があるぜ。」

「まじかつ!?!なら俺のも……」ああお前のはただのコスプレ」

うおいつ!」

そんなキレられてもなあ……

大体その服よりこつちを創る方が時間かかったし。

「お前にはこつちをやるよ。「なんだコレ？物質・・・じゃないけど形があつて重い。。。。」
 どういうことだ？」そいつはお前だよ・・・「は？」」

理解が追い付いて無い様子の双覇に説明する。

能力で伝えても良いけどこれは、重要なことだしな・・・

「そいつはお前の能力に合うようにいや、お前自身にしか適合しないように

作られたもので、所謂『神器』ていうやつだ。名は『結刀』輪廻（むすびがたな

りんね）ちなみにそれにはきまつた形は無い・・・

数も重さも形も、どんな用途の武器にするかも

その時の想像次第で自在に変化する特別製だ大切に扱えよ？」

ほんつとに、コレを創るのは苦勞しかしなかつたな・・・

何万年もひたすら靈力で形をつくつて安定させて、そつから結びの力を加えて・・・

「へえ・・・綺麗だな・・・」

ありがたく使わせてもらおうとしよう・・・それはそうと野郎だけで

仮装パーティーしてもつまらねえんだから女子呼ばないとな。作者そのつもりで来た

ろ

「???」

「あつ。ばれてたか・・・」

まあね、この日のためにいっぱいコスプレ衣装買ってきたんだよ。

ミニスカサントに、ジャック・オ・ランタンに、秋姉妹に、ドラキュラに、悪魔に、
・・・
「うわああ・・・(冷)」

右の掌で黒い空間を維持しつつ左の掌でもう一つ創って

どさどさとコスプレ衣装(女性用)を取りだしていく・・・

「うわああ・・・(冷)」

「ひくなつ!!こつちも気まずかつたんだからなツ!!」

店員さんにじゃんけんで負けて友達の方も一緒に買ってるって言いわけして・・・
もういいけどさ。さて、んじゃ女子呼ぼうぜっ!」こうして、秋の豊穣と悪霊除けを祈願する一年に一度のお祭り『ハロウィン』は
幻想郷では男共の欲望のままに過ぎて行った・・・

余談だが、このすぐ後男3人の悲鳴が相次いで幻想郷中に響いたとの証言が出ているが・・・彼らは無事にハロウインを乗り切れたのだろうかその夜彼らを見たものは居ないとも言われている。

第送話―幻想の人々の聖なる夜。

・・・〈天白雲サイド〉・・・

「さて、やってきましたクリスマス!!!

今年は何を頼もうか悩んでいる天白雲です~~~~~」

「いきなり、呼び出されたからどうしたのかと思ったら・・・

おまえハロウインの時の惨状を覚えてないのか？俺もおまえも祥磨も、全員死にかけたじゃねえか・・・」

いきなりの呼び出しに、多少焦り気味で来た双覇が

盛大に溜息を吐いた懲りねえなコイツとでも言いたげだ。。。

「懲りねえな、おまえ。」

前言撤回。ほんとに言われた・・・

「懲りる？なにをわけのわからないことを!!

クリスマスは聖なる夜!その不思議な魔力を利用して俺はここで女の子のコスプレを

見るんだよ!プレゼントとしてな。」

「おまえ・・・まさか、文にまで着せようとしてねえだろうなソレ。」

「何言ってるんだよ!文こそ俺の本命!!

この日、この場所で俺は文にこの・・・・『ミニスカサンタ』を着てもらいに来たんだよ!!!」

例によって、近くのデパートの店員さんに冷たい視線を向けられながらやつとの思いで入手したコスプレ衣装を両肩にかけて袋に入れている・・・・

「ふざけんなよっ!!文は俺の妻だぞ。。

そんな勝手許してたまるかよ・・・・・・」

腰の結月に手を掛けながら、双覇の殺気が徐々に濃くなっていく……

「まあ、待て待て待て!!!安心しろ。

俺も一人の文愛好家として、文が傷ついたり嫌がることはしない……
それに考えても見ろよ?今、この幻想郷は時代が良くて明治あたりで止まってる……
つまり、ここの住人はクリスマスについて何も知らないんだ!」

なんとか、双覇を宥め刀の持ち手から手を放してもらおう……

そして今回のクリスマススの一番のポイントを切り札として切り出す!!!!!!

「なっ!?それはつまり……」

この土地のクリスマススのルールその他もろもろは俺らが絶対的な決定権を持つ……
そういうことだなっ!!!」

「そういうことだぜー!ふふふ……」

そんな俺は早速用意したプレゼントを配ってくるよ!!!おまえは、文のところに
でも行って来い……あ。

祥磨の奴にも声かけとけよ!」

俺はそれだけ忠告して、幻想郷中にプレゼントを届けることにした
先ずは紫たちのとこだな・・・許可とか取らねえとめんどくせえし・・・

「じゃ、黒門^{しくもん}。これで、

マヨヒガにつと・・・そんじゃあな。文によろしく！」

とりあえず言いたいことだけを言っつてプレゼントの『クッキー』をその場に置いて、
さつさと消えることにした。。。

・・・〈天白雲サイドアウト〉・・・

・・・〈双覇サイド〉・・・

「なんだアイツ・・・言いたいことだけ言っつてさつさと行きやがって。

まあいいやそんじゃ俺も山の皆とか霊夢の奴にプレゼントでも用意してくるかな・・・
もちろん文にも！・・・とその前に祥磨も誘うか。」

そう思つて飛ぶ・・・。

祥磨は最近魔法の森に、家を建てて住み始めている。

あの森から出ている瘴気は普通の人間にはもちろん有害だが、魔法使いには結構居心地の良い環境なのだとか。

「お〜い！祥磨〜〜〜〜！！

居るんなら、出てこー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！

やがて、祥磨の家の前まで着いたためとりあえずデケエ声を出して呼んでみる。

「うるせえよつ！！！！人んちの前で何を

大声出してくれてんだ！近所迷惑だろうが！！！！！！！！！！

正直、さつきの俺の声よりでけえんじやねえか？つてくらいの叫び声を上げながら玄関を開け放つ悪友。

「いや、お前のほうがうるさい。

それと文句言うならインターホンのな仕組みでも開発しやがれ・・・

ほれ。メリークリスマス！」

誘うにしても、まずはこつちが格式に従うという事で
祥磨につきさつき作ったプレゼントを手渡す。

「ん？おうメリークリスマス。」

そつか、今日がもうクリスマスか………とこころでコレ何？」

「ああ。そいつは月桂樹やサフランなんかを調合して作ったお香だよ。

人間の心を落ち着かせたりする作用のある植物で作ったんだ………
別に有害物質とかじゃねえから魔理沙のどこにでも持つてつて一緒に使ってみろよ」

そうか。ならありがたく……

そう言つてなんの疑いも無くお香をスキマにしまふ友人……。

実際は人間に対しては確かに沈静作用のあるお香だが……

少しでも妖力のあるものに対しては『強力な媚薬』になるという代物だ。

上記の材料のほかにもマンドラゴラやリキュール（酒）に漬けたカズラなんかが入つ
てる………

「さて、俺がここに来た理由としてはだ。

ずばりクリスマスプレゼントを作ろうぜ!!!!!!」

そんな俺の思惑を悟られないように、今回来た理由を

端的に説明する。

．．．．．〈少年説明中〉．．．．．

「ふうくん、天白雲がね〜。

なんか裏があるような気しかしねえな．．．．。このクッキー。薬とか混ぜてんじや

無いのか???

さすがの祥磨も、疑いを持ち始めた。。。

だが残念！薬が入ってるのはクッキーじゃなくお香のほうだ!!! じゃなくて．．．

「さすがの、アイツでもそこまでしないだろ。

俺の提案はただ純粹に俺とお前で文と魔理沙に贈り物でもしようぜ？って話だし」

「お前は婚約者だから、不自然じゃないにしろなんで俺が魔理沙にプレゼントを贈る必要があるんだ？」

「お前、ドリズルの転生先なんとなくわかってるんだろ？」

わざわざこんない로운な意味で面倒な森に住んでるんだし・・・それに外の世界で言ってる魔理沙が好きだって。ならこの機会に恋人にでもなってきたらどうだ？」

首をかしげて聞いてくる、友（バカ）に率直に提案する

「なっ！そんな急に言われても・・・」

解かったよ。どうせもうそろそろ逃げるのはやめようと思ってるだところだ・・・

俺は魔理沙も・・・ドリズルも好きだ！だれよりもな。」

その返事が聞きたかった！と、俺たちは拳を合わせて

さっそくプレゼント作りに取り掛かった。（二人とも一人暮らしが長く、クラスの女子よりも女子力は高かった。）

.....〈神様移動中〉.....

「祥魔のやつが、完成と同時にでてった所為で

片づけに時間取られちまった.....」

なに作ってたか、良く見えなかったけど

隠しながら持ってたし小さめのアクセサリーかな？

「まあ、どうでもいいか。

お、居た居た椀-----!!!」

目標の人物を見つけ、降下する。

「あ。双覇さん!!!

お帰りなさい待ってましたよ.....文さんが.....」

「そっか、じゃあ急いで帰らないとな。」

そうそう。楳はいこれ。」

クリスマスを知らない楳が、案の定なんですコレ？

と聞いてきたので。

「俺の居たところじゃ、今日はクリスマスって言って

友達や近い人物と宴会をしたり贈り物を送りあう日なんだよだから。中身は

ソツチの袋はクッキーってお菓子でソツチは開けてみてのお楽しみだ。んじゃな！」

それだけ言って、頂上目指して飛び去った。

文へのプロポーズからと言うものなかなか喜びを顔に出してくれなくなった

楳だけど、今回は顔は仏頂面のまま尻尾をぶんぶん振ってたから

嬉しかったんだろうきつと。

．．．．〈神様移動中〉．．．．

「たっだいまー！文。

遅くなってごめん!!!!」

文兼俺の家の扉を開け、声をかけると向こうから

ドタドタと足音がして・・・

「双覇ーーーーー!!!!

良かったです・・・ちゃんと帰って来てくれましたね!!!

もしや、山の途中で椈とかに襲われてないかと心配で・・・」

「椈は、俺を襲うほど凶暴でも理性が無いわけでもないだろう？

心配し過ぎだよ。」

「いえ！今夜は月も綺麗に上がり雲ひとつない空です。

こういう時、妖怪の理性は外れやすいんです！それに私だってまだシテ貰って無いのですから妻として先にとられるわけにはいきません!!!!」

ん？俺が心配すんなって言った部分と文の心配してる部分が

噛みあつて無いような・・・それになんか目がおかしいし・・・

「そ・・・そうだ文？今日は俺の居たところじゃクリスマスだって

言われてて贈り物を送りあう日なんだよ・・・コレ受け取ってくれ・・・」

そう言つてさつき作つてきたものを渡す。

まあ、なんだ？『指輪』だ結婚指輪。式の時にも使えるし良いかなと・・・

ちなみに宝石は風を固めて作つた石で黄緑色で綺麗だ。

え？女子力なんて次元じゃない??

気にスルナ!!!俺の分はもう自分の左手薬指にはめてある。

「ありがとうございます・・・」。

それよりも、双覇？今日はなんだか良い匂いがしますよく????

コレつてそう捉えて良いんですよね？」

文が妙に甘い声で、話しかけてくる。

良い匂い？まさか・・・

「クンクンっ）まさか、この匂い!？」

あ……やべえ……」

あの野郎……」

薬のなかみ解かってやがったのか、こつそり俺の持ち物に匂いを付けて……」

「ねえ双覇?今日は贈り物をする日なんでしよう??」

ならもう一つだけ、私にください……」家庭と私たちの……ね?」

その後、この二人に何が起きたかは此処ではあえて記さないでおく。

出来ることなら二人の眼にも届かぬことを願うばかり……」

第???話—夢想の凡人

「しろ。．．．居る?」

黒い長髪、俺の偏見で見れば可愛い顔、平均的な．．．それでいて魅力的な姿。ただしその姿は画面上のモノ．．．所謂アバター。

「ん．．．。ようルナ」。

インしたんだな昨日は調子悪そうだったけど今日は大丈夫か?」

真っ白く、ボサボサな髪青年。

この世界で『白雲双覇』と名付けられた．．．やはりただのアバター．．．

俺が本当の俺を隠したくて、被った皮。

『これは．．．。またずいぶん懐かしい記憶だなあ。』

俺．．．。天白雲は呟いた。

コレは俺の記憶、遠い昔の光景．．．。つまりこの声はあの二人には届かない．．．

「ん。だいじょぶ。」

ちよつと熱が出ただけなのに、心配し過ぎだよ?」

『しっかし。あの時は画面越しだったのに思いだす時はキャラが目の前で喋るのか、全

く・・・なんて酷い仕様だよ・・・』

その娘と『双覇』のやりとりを眺めながら、愚痴をこぼす俺。

「いや・・・だって、その・・・好きだから。」

そりゃ心配するよ!」

ほら。こんなこつ恥ずかしい過去の自分のチャットが全自動の音声で

流されるんだ。。。死にたくなるだろ？

「ん。。。ありがと・・・」

懐かしい。あの時、『ルナ』は俺がこうやって言うといつも

そう言ってたっけ。あまりにそれしか言わないからちよつと傷ついた時も合った

な

ん? 『ルナ』ってだれだつて? 新オリキャラかって?

違う違う。『とある少年』がそれまで経験したことがないくらいに好きになった・・・

当時『少年の心の抛り所』だった人だ。

「・・・さつて! それじゃ・・・今日は何話すか?」

昨日はほとんどアイツにもってかれたから今日はたくさん話すぞ〜!

話題無いけどw」

そう言いながら、そいつがいろんなことを伝えようと思ってること。

アレを話そう。コレを話そう。と思つていたことを知つてゐる……
少女に会える。少ない……でも、何よりも大事にしたい時間を少しでも幸せに過すために。

「ん〜。昨日話してたことの続きは……？」

それか……劇手伝つてほしい。」

少女は、ゲームのチャットでも口下手なのが良くわかつた。

それなのに自分では表現しきれないものを文章にしてしまえる力も有つた。

その言葉に少年は救われた。同時に、出してはいけない……持つてはいけない欲を……少女を何としてでも振り向かせて、全てを自分のものにしたいたいという欲を持つた。

「……ありがと。貴方を選ぶことは無いと思う。」

でも、それでも私を好きで居てくれるなら私を置いて勝手に死ぬなんてやめて……

これでも。私は貴方を頼つて居るのだから。」

何時からか、少年は少女にネットだからとリアル的事で嘘をつくのをやめた。

それが危険なことだとは理解していた。少女は自分の醜いところや弱いところをネットに晒そうと思えば晒せるし、言い振らそうと思えば言い振らせるのだから。

でも正直で居たかつた。リアルでは嘘をつく事に良くも悪くも慣れ……

辛かつたから……

「・・・わあ〜つたよ。俺は死なない。」

そもそも、死んだらルナを俺に振り向かせられないしなっw まあでもその代わり。
・おまえは俺に辛いこととか、苦しいこととか隠すな。

言いたいこと、話したいこと全部話してくれ。いつまでも話し相手になるから。」
『我ながら、かつこつけたな〜w この約束の後も何回か死にたくなることがあったな
心の殺し方とか真面目に検索かけたし、画面の前で泣きじやくつたし。』

泣いた後は冷静になって、ルナに会いたくなくなって・・・
会いにインしてはまた傷ついて。また、好きになって・・・

「・・・よっす! どした〜?」

「ふざけないで。よっすじゃないよ・・・。」

どうせ失恋するならと。諦めて退こうと・・・お別れのメッセを送った翌日
ルナは・・・すごく怒っていた

『思えば、あの時以外に真剣に俺に対して怒ったルナってあったっけかな?』
「ふざけずに答えて。さよならって・・・『消えたい』ってどういう意味?」

あのあとどうしようと思ってたっ!?!」

あの時も、もっと怒ると思っただけど馬鹿正直に答えたっけ。

「死のうとしてた。傷つくのなら、こんな想いを負うなら

命なんて・・・心なんていらなから昨日は心を殺そうとしてたよ・・・
結局無理だったけど。」

泣きながら、ぐちゃぐちゃの顔で・・・ずっと唱えた。

『自分はいらない存在だ』と。失恋したってじんわり認識して・・・ルナがあいつと
楽しく話してるんだらうって想像したら自分の存在が

ルナにとって邪魔以外のなんなんだらうってそれしか考えられなくなった。

『ルナが受け入れ、ある種許してくれた『自分の弱さ』を・・・』

肝心の自分は受け入れられず許せなかった。だから暴走した。。。』

「私を嫌いになったのなら・・・仕方が無い。でも、好きでいてくれてるなら。

私の話したことを聞いて・・・相談させてよ 死んでほしく無い。

それでも死ぬつもりなら、後を追っちゃうよ?」

たぶん、本気の心配だったのだろう・・・その時卑屈だった俺は

「やめておけw ルナには必要としてる人が居るだろ?」

俺なんかを追って来たら損しちゃうぞ。」

そう言った。

「私が貴方を必要としてる。それに、今貴方がそこまで思いつめてるのは

私の所為・・・でしょ?」

違う！とは……言えなかった。

女の子に責任をなすりつけるみたいだけど……実際にそうだったから……勝手に無理な相手を好きになったけど

ちゃんと好きで……だから傷ついた。それは事実だから。

「……わあつたよ。全く、死にたいくらい絶望させるのに

死ぬのは禁止つてとんでもないドSだなあ（苦笑）」

言葉ではふざけたけど、実際は怖かった。

自分で決めつけて絶望したのに実際にその口からもういらないと……

貴方なんか必要無いと言われるのが

だからちゃんと引きとめられて嬉しかった……。

『この後も、少年は少女を好きで居続けた。

周りに理解されなくても実らないだろうと思いつながら、それを殺し。

好きで居続け生き続けた……

画面の向こうの女の子が嘘をついているんじゃないかと、やはり自分には

少しも向いていないんじゃないかと不安を抱え込み。』

それでもなお、少年は叫ぶ。

頼つてると言ってくれた少女に少しでも安心してもらえるように……。

「お前・・・(がどう思つて居ようとも俺は) お前が大好きだ。」と。

少女の前で自然に見せてしまふ笑顔に・・・

ほんの少しの虚偽を混ぜ、自分の心を奮い立たせた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・なるほど、すごくテンプレで。 だからこそ俺らしいな。」

どうやら、なにもすることがなくボーっとしてたら眠つていたらしい。

つまるところ夢オチという奴だ。

「んあ? そーいえば、今日は5月17日。。。」

『あの頃の』俺の誕生日か・・・もう歳なんておぼえてねえな。」

背伸びをしながら、部屋着にしている。パジャマを脱ぎ散らかし替える。

すでに過去のものとはいえ自らの誕生日 この世界で俺を覚えているのは俺だけだ

が、

だからこそ祝わなければ。

「こういう小さなことを忘れると、すぐに人間じゃ無く成るからな。」

こまったもんだ『創造者』つてのも・・・
そう・・・俺の種族は創造者。。

気が付いたら何でもあり、何でも無くなった者・

「アレは・・・中坊の頃だったな。」

懐かしい、何回も時間旅行して何回も歴史にかかわって・何回も生まれ変わったけど

中学の頃だけは繰り返してないな。。」

そんなぼやきをしながら、アパートの一室のような空間の
出入り口と思われる扉?を開け放つ。。

「さあ、今日は『どんな役』で歩くかなく・・・?」

相変わらず、見てしまった夢のモヤモヤは晴れないが・・・

せめて洋菓子店につくまでには笑顔になりたいな。。

今日という一日を、いつも通りの薄っぺらい笑顔で・・・
俺は生きる。

第元話―一年末年始。新婚夫婦の初デート

．．．．〈双覇サイド〉．．．．

「速いもんで、アレからもう一年経つんだなあ．．．

レミリアたちは元気にしてんのかな？」

「もう。なに黄昏てるんですかっ！（クスッ

ほらっ行きませよ．．．」

背後から、声をかけられ振り向くと．．

そこに居たのはこの家主そして俺の恋人．．．事実上の妻 射命丸文。

その身はいつもの記者の格好とは違い、

『赤と黄色の楓が描かれた着物』、『帯の後ろには文花貼と葉団扇を差し』、

『頭の頭襟は無く、代わりに後ろの髪を少し束ねて結んでいる』

要するに．．．．

「か・・・可愛い。。。」

「な・・・なんですか急に。／＼／＼

イメーヅ変えたのに言う事は変わらないんですねもうっ。」

そう言つて、飛び立ってしまふ文。

今日は大晦日と元旦まとめて祝うための祭りの日・・・ちようど良いから婚約してから一回目のデートとして行こうつて話してた・・・

「わっ！ちよつと待つてくれ文々。」

ごめんつてもちろんイメーヅ変わつてるのは、気付いてるよただ純粋に何着ても可愛いなつて思つただけで・・・（びゅんっ！）

「も・・・もう解かりましたからっ！（カアア／＼／＼

それよりもうそろそろですよ？確か一度天魔様の屋敷に集まるんでしたよね・・・」

隣りに追い付き、声をかけるとさらに顔を赤くしてしまう。。。

「そうだな。なあ、今日は別に急ぐ必要は無いんだ・・・」

ゆっくり行こうぜ？（ギョウッ）」

急いで向かおうと体をひねる文に、制止をかけその手を握りしめる

そして二人でゆっくりと降りて行った。

「で。お前たち婚約して事実上もう夫婦・・・それも

もう何百年も一緒にくせにまったくもって見せつけてくれるなあ？（ニヤニヤ）」

俺たちががっしり手を繋いで、屋敷にはいると

出迎えてくれた天魔がそんなことを言ってきた・・・

「べつに、そういうつもりじゃねえよ。」

おれが文の手を握ってただけだ・・・つか天魔様。主自らが出迎えなんて

大丈夫なのか？」

「あつははは！そうかそうか!!」

うむ。べつにかまわんよ今回の事は私の発案なんだ。なら自ら迎えるのが筋というものだ……ところで、ちと射命丸を貸してくれ？

今回のけいかk……企画に必要な資格を持つてるか聞くからな。」

ん？けいか???

まあいいか、陽葉なら別段文になんかすることは無いだろうし。

「りよ〜かい。ちなみに、俺が聞いていい内容では？」もちろん無い。だからここで待つておけすぐおわる」了解。」

そうして、文と一旦別れること数分……

天魔に連れられて文がもどってきた。

「大丈夫ちゃんと、参加資格はあるみたいだよ。

それじゃ〜奥に進んでくれそこで今回の企画の説明があるからさ。」

なんか、引つ掛かることが多いが今はとりあえず

祭りを楽しもう・・・そう考えて文の手を取り進められた部屋に足を運ぶ。

「は〜い！この部屋にお入りになった方はまず、

こちらをお取りください！！」

その中には、なかなかの数の天狗が集結し

なにやら紙が配られていた。

「あ。どうも・・・」

コレは、スタンプラリー・・・か？」

紙には、一軒一軒出店の名前が書かれた大きめの枠が書いてあり・

ずくつと進むと『無料券』等の文字。全ての店を周ってお題をクリアすれば無料になつたりする・・・ということだろうか？

「者ども！見てのとおり、今回の祭りは

その紙の通りのルールで持って執り行う！コレに当たって仲間を決めてあるので

今一度取りに来て、整列！」

仲間？もしかして、二人でゆっくりはできないのだろうか？

それじゃあデートで来た意味が無い……そうだ！

仲間になる奴が、知ってる奴だったら……わけを話して

どうにか二人になれるようにすればいいんだ！よし。コレで行こう……

「なっ!?嘘だろ……オイ。。。」

こんな……ちよつと待て天魔……もういねえし……」

開かれた紙に書いてあるのは……。

『白雲双覇（黒狼天狗）』、『射命丸文（鴉天狗）』、『姫海棠はたて（鴉天狗）』

『犬走椀（白狼天狗）』上記の者を仲間とする。

……〈少年少女移動中〉……

「え．．．ええと。。。」

一応、聞いておくけど二人はどうして此処に？」

とりあえず顔合わせを終わらせ、（全員顔見知りのためほぼしてないのと同じ）
出店等が並ぶ屋敷の外、天狗の里の中心に出てきた．．

「そりゃあ、大天狗様及び天魔様に招集されたからよ。。。」

私はどこかの暴走鴉みたいに恋人と暮らすためだけに上の者に逆らうなんて命知らずな真似出来ないのよ。」

「え？それってどういうこと?？」

「は？まだ、言つて無かったの文。」

まあなら私の口からは言わないわよ．．．要はあんたと文の結婚を心配してんのは妖怪の賢者だけじゃないってことよ。」

なるほど、解からん。

文に聞こうにもさつき（天魔に連れてかれて）から赤くなつたままだし、

コレは、羞恥のほうなのかそれとも二人で周れない怒りからなのか。

「まあ・・・そういう・・・ことですから、

とりあえずこれで招集には応じたので私はその・・・失礼させて・・・」

椛が、言葉をつまらせつつも提案してくる・・・

「っそ。そうだな！

元々二人ずつのペアだったわけだし・・・いつしよに周るつてのものな？」

嘘だ。いや、嘘ではないけど若干嘘を混ぜてる・・・

一緒に周る理由は確かに無いがそれ以上に・・・このメンツで何より、椛はマズイ。前の古河音の一件以来まともに話せてないし。

いや、だからこそ今日ちゃんと話すべきなのか？

でもそうしちゃうと文とデートの意味が・・・

「だっダメです!!!椛達は、私たちと行動してください！」

俺が、思考を加速させていると今まで停止していた文がなぜか椀の提案をはねのけた。

「ん。どうしたんだよ文?」「良いから、とりあえず椀達と話してきます。」

本日二度目の放置タイムか……ん?アレは……」

女子3人が、内緒話のためどっかに言った時

ふと俺の眼に飛び込んできた光景が……

「ほら!向こうにも出店が一杯あるから……」

祥磨、こんなところでへばってないで走るんだぜ!」

「そんなこと、言われてもな魔理沙よ……」

俺の今の格好を見てくれないかどう考えてもお前の質量の10倍はあるんだから速度を合わせろというのはどうにも。」

ついでに聞こえてきた声が・・・アレは、
魔理沙と。。。紙袋の化け物・・・いやアレ祥磨か。良く見たら顔もあるし
紙袋も手で抱えてるし・・・

「よう。お前らデート中か？」

とりあえず、おもしろそうな現場に巡り合っただのは事実なので
声をかけてみる。。。。

「げっ！お前・・・なんでこんなところに。。。」

悪友に『げっ！』とか言われたので、質問に答えてやる。

「いや、ここ元々天狗の領地だからな？」

俺は妖怪としての分類天狗だから居てもおかしくねえだろうが。むしろ可笑しいの
は

お前らだよ。」

「・・・はっ。デ、デートとかじゃない!!

ボクはただ・・・面白そうなイベントを妖怪の山でやるって言うから・・・」

俺が声をかけてから、硬直してた魔理沙が口をようやく開いて訂正してくる。

「そ、そつかそつか悪い悪い
ん？今ボクって言ったのか
魔理沙の一人称って私だっ
???

「え。。。今、私なんか変なこと言ってたのか？」

「ん。。。まあ、魔理沙が解からないなら良いか。。。。」

「そんじゃあ俺はちよつと文達と出かけてるから合流してくるよ。。。」

「あそくだ魔理沙、「ん？」祥磨のことよろしくなっ！」

最後に、魔理沙に封筒を預けて

その場を去ること事にした。。。。

「なんだコレ？」

「俺と祥磨の昔の写真。もう一枚持つてるからなんとなく

渡しところと思つてな？そんなじゃっ！」

・・・・・・・・・・〈双覇サイドアウト〉・・・・・・・・

・・・・・・・・・・〈祥磨サイド〉・・・・・・・・

「なんだーアイツ。デート中なのはお前のほうじゃねえかよ・・・（チツ
えと・・・魔理沙？ソレ昔の写真なんだろう？ならちよつと向こうに座らないか？」

「ああ。そうだな・

それじゃあ競走だ
（ダツ!!!）

!!!!!!!!!

俺の返事を聞こうともせず、走り出すおてんば娘に苦笑いしつつ
抱えた紙袋を落とさないようにして歩く。

「それじゃあけるぜ？（ガサガサッ）」

おっ！外の世界にもこんな綺麗なところがあるんだなあゝ・・・
んゝどれどれ？

コレは確か・・・

「11か12歳の時だな。幼馴染とその家族でパーティした時の写真だったと思うけど・・・コレ。」

なんか、変だ・・・

なにか・・・わかんないけどちよつと引つかかる。。。

そう・・俺達のこの視線。。

誰を見てるんだろう？

撮影者？とすれば俺とさつきの親か？いや、双覇の親・

双覇の親っていつから居ないんだっけ？

孤児院にいた理由は？親に捨てられた・・それとも・・

「そっかあああ〜」。

私もいつか、行ってみたいなー！・・・」

そうやって、真面目にこの疑問に向き合おうとするが・・・

祭りの陽気と隣りに座る彼女の笑顔でとりあえずはいいか。と思ってしまう。

「ふふっ。そうだな？」

こうして、一度持ったはずの疑問は露と消えた・・

本編開始。まずは、こちらから・・・

第壹話—普通に平和な日常

『刃符』黒狼の辻!!!」・・・声が聞こえる。

「うおおおお!!!」とどけええー!!!」・・・

へ何かを守ろうと必死にもがくような。そんな悲痛な叫びがこだまする・・・

「・・・は!」 「・・・うは!」 「双覇!!」

「んんんふにゆ??」

なにやら大きな声で目が覚めた眼を開けるとすでに見慣れた風景があった。

【私立 村雲学園高等部 1—A】は今日もいつも道理に騒がしい・・・

「ふにゆ?じゃねえだろっ!早く覚醒しやがれ。今日は3人でぶらぶらするってき

めたる？」

「ああ、そうだったわいい。祥磨。」

中でも、とりわけやかましかったのは同じクラスで小、中、高といっしょの幼馴染
兼腐れ縁の。

【神薙 祥磨】—かんなぎ しょうまだった。

「たくつ。起きてる時は恐ろしいほど頭回るのに授業のたびに寝てちや世話
ねーだろ。」

「あははは。」

先に祥磨に言われた名前 双覇。それは俺の名前だ

【白雲 双覇】—しらぐも そうは
これが俺の名前。

「そんじゃ、さつきもまつてるし。いくぞつ。」

祥磨に急かされいそぎ机をあさる。

「おうーちよつと待ってくれ。すぐに帰り支度をとと・・・あれ？ノート落としたか??」

呆れたように祥磨が声をかけてきた。

「あのなくく。お前大概の授業寝てるんだから自分でノートとれるわけないだろ。さつきが持つてるから合流するぞ。」

「りよ〜かい!!!」(ダッツ!!)

俺はノートのある場所もわかったので全速力で走り出した。

「うおーおい、てんめつ!!」(ダッツ!)

俺に続いて祥磨も全速力で追いかけてきた。 うん!!さわやかだね!

これぞ青春!!良いことあるといいなあ〜。

これから何が起こるかもしれないこのときの自分を全力で殴り飛ばしたかった・・・

??? 「・・・で。どうしたらいきなり目の前で幼馴染2人が保健室に運ばれる事態に遭遇

するはめになるのかナ〜?」

現在俺たちは公衆の面前具体的に言うとは昇降口前で正座させられていた・・・
もう一人の幼馴染

【夜神 さつき】—やがみ さつき によって・

「もお〜いいかげんにしてよ？ いったい二人は1年で何回怪我すれば気が済むの？」

「いやっ今回の場合は双覇がフライングなんて姑息なまねをするから。」

「あつ祥磨てめえ1人だけさつきの説教からぬけだそうとすんなよ！ 元はといえばお前
があんな狭いところで追い抜こうとしなけりゃこんなことには！」

「ふたりとも静粛に!!」

(あ。これはマズイ。...) 2人ともこのキーワードを聞いて身震いした。

「そう。あなたたちはちよつと幼すぎる・・・」

(きたっ!!! 2人はもう一度身震いし戦慄した・・・)

・・・少女説教中・・・

「いや〜〜今日も長かったな〜。」

時刻はすでに双覇たちが昇降口に正座させられてから1時間が経とうとしていた。

「約1時間息継ぎもほとんどしないで説教つてまじで映姫かよ・・・」

「だから、ごめんつてば・・・あの状態に入ると自分でもなかなか

止められなくてさ?」

いちおう、止めようとは努力していたらしい。(努力して約1時間正確には50分足怪我してる人が人を正座させていたことをここに記す・・・)

「ところで、ぶらぶらといっても目的がなきやきついで。当てはあるのか?」

祥磨、さつき。」

「俺は得にこれといった用事は・・・ねえな。」

「そっか。」

まあ自分が計画した場合でも行き先がしまつてたりでグダることの多い男連中だ。

まるで計画性というものが無い。

「はあく。そんなことだろうとおもってわたしがちゃんと考えてきたよ。」

呆れつつ半ば諦めたようにさつきが呟く。男二人はそろって（相当迷惑かけてきたんだなあ）とプチ反省しつつ・・・

さつきの意見に同意（さつき以外意見がないため）して

さつきの後を追って歩き出した・・・

第弐話―異常で理不尽な洗礼

「な、なんでこうなったんだっけ？祥磨？」（がさごそ

俺は近くにあるゴミ箱やかごを片っ端からあさつてたずねる。

「しらねえよ。あえて言うならさつきがこの辺を探しまくって指示を出したからだ。」（がさごそ、がさごそ

同じく祥磨も近辺のかごやゴミ箱を荒らす。もちろん、好き好んでこんな馬鹿みたいな真似をしているワケではない。

それというのも。

現在俺たちは村雲学園から徒歩で約20分ほどのデパートに来ていた。それというのも……

・・・（10分前）・・・

「あれ？ここってたしか……」

「このあたりの住人なら知らない奴はいない超大型マーケット『ヨウヨウ』だな。」

祥磨に言われ改めて思い出した。『ヨウヨウ』は確か。生鮮食品、日用雑貨はもちろ
ん。ゲームや衣類、漫画、アニメと。何でもござれのこのあたりでは一番客足の多い
スーパーだ。俺も家から近いこともあって、昔から頼りにしていた馴染み深い場所
だ。だがさつきはなぜこんなところを？

「なあ。さつき？……になにしにきたんだ？新作の漫画もゲームもまだめぼしいものは
高いつていつてたのに。」

ふっふっふ。そう言いたげに口元を歪め、俺の質問に答えた。

「ふっふっふ。(言ったw) 聞いておどろきなさい。今日午後4時つまり、今からここで
大宝探し大会があるのよっ！」

やけに自信たっぷりにドヤ顔でさつきが言う。宝探しか。あんまり回りのことを聞
いてない俺は初耳だった。

「ふくん？でもそれにでてほしいものでもあんのか？宝探しなんてたいしたもの無いん
じゃないか？」

おれの質問に対し祥磨も同じことを考えていたらしくさつきに視線を向ける。する

と

またしてもドヤ顔で一枚の紙を見せてきた。どうやら景品表らしい。

「なんだ？景品一覧？」祥磨も後ろから覗き込む。

「新作ゲーム3品無料、生活用品台所セット（包丁、オーブン、フライパン等）、新作小説ならびにライトノベル10冊無料などなどまさにお宝とり放題？・・・」

祥磨と俺は沈黙しそして次の瞬間には瞳を輝かせて言った。

「台所用品や、ゲームが無料!?!?!」叫んだ内容が1字1句おなじで若干恥ずかしがりつつ、いつそう瞳を輝かせてさっ!?!?!きを見やる。

ちなみに俺と祥磨は1人暮らしだったりする。理由？あまり話したくは無いので割愛する。

きらきらとした瞳で見つめる幼馴染2人をみてにやつき、さつきはさげんだ。

「決まりね。それじゃ！稼ぐぞおおおおおおお！！！！」

とさつき

「おおおおおおおおお！！！！」

とうまく乗せられた馬鹿2人

・・〈そして。最初につながる〉・・

というわけで宝探しに参加している俺らだが、なぜかさつきはこの広いスーパーで散らばるといふ常套手段はつかわず。「こつちにある。」と妙に自信ありげに全員で3階の雑貨、インテリアコーナーをあさらせている。

1人だけ展示されてる、オフィス用デスクに腰掛けて。・・・

「で、いっくかさつきもてつだってくれよ。」

俺はたまらず声をかけるも

「そ、そそそんなの男の仕事でしょ。私だつてつだいつじやなくてつかれてるの!!」

と、聞いてもらえない。

基本的に悪い奴じゃないのでたまに、「ほんととはつだいたいのにくうう」とか、きこえてくる。おそらくかさつきも苦惱してるのだろう。

「さつき!つかれてるんなら無理しなくてもいいよ。確かにこういうのは男の仕事だもんなつ(にかつ)」

なるべく責任を感じさせないようにその声をかけると「ううう。」と顔を真っ赤にして机に突つ伏す。

ほんとにだいいじよぶかな?熱でもあるんじゃないかな?ちよつと心配になつてき

た・・・

その後も俺たちは3人(?)でそのフロアを時間いっぱい荒らし続けなんと、残り10分というところで3人とも目当ての商品を手に入れた。・・・

店員さんがドヤ顔から青ざめてた。

・・・〈帰り道〉・・・

「いや〜それにしても一箇所にまとまってるなんてあるんだな〜。」

俺は無事、新しい包丁とほしかったゲーム、ラノベを調達して、ほくほく顔だった。

「それにしても、なんであそこに固まってるってわかったんだ? さつき。」

「ふえ!? わ、わかったワケじゃないよ。なんとなくあのフロアを見渡したらありそうだなって感じて・・・。」

何に集中していたのか突然話しかけられたさつきがかわいい悲鳴をした。

「ふくん? ありそうとかんじた。ねえ〜?。」

腑に落ちない様子の祥磨も両手いっぱい戦利品だった。俺たちが戦利品をもつて歩いていくと交差点に差し掛かった。そこで俺は偶然みえた、景色に自分の目を疑った。

「さつき。これ頼むっ!」短く言葉をつむぎ、さつきに戦利品を託した俺は交差点にむかって。

いや、交差点の横断歩道を渡ろうとした『緑髪』で『蛇のアクセサリー』をつけた俺のよく知るキャラクターに似た女の子めがけて走った。

「双覇!!あれつて。まさかつ!」おそらく『女の子』を同じく見たのだろう祥磨が後ろから迫ってきた。

そして・・・俺と祥磨はその『女の子』を思いつきり突き飛ばした。・・・

最期、俺が覚えてるのは今まで受けた覚えの無い強烈な痛みだった。

ここで、おれの記憶は途絶えた。

・・・

第参話―風に祝われし者への暗雲

・・・〈祥磨サイド〉・・・

俺は、手に宝探しの戦利品（ゲームや包丁、鍋など）を持ち、幼馴染であり、おなじく戦利品を抱える白雲 双覇、夜神 さつきとスーパーを後にしていた。いつものように3人で学校のハナシをしたりゲームや趣味のハナシなど他愛もない雑談をしながら肩を並べて歩いた。

「さつき！コレ頼む！っ」（だっっ!!!）

突如として双覇が一目散に走り出し、となりのさつきが目を見開く。そして双覇のほうを見やり俺も言葉を失った。双覇の目線の先、ちょうど横断歩道のある交差点には、

『緑色の髪』、『白い蛇のような髪飾り』など巫女服じゃないこと意外はすべて俺や双覇の知る人物、『東風谷 早苗』が歩き出していた。見ると歩行者用の信号は青、なんら問題は無い、礼儀正しい優等生のようなたたずまいの東風谷は手までびしっ！とあげている。本当に彼女自身にはなんら問題は無い。

ただ一点向こうから迫るトレーラーの運転手が電話に気をとられてること意外は・
迷わず俺も双覇の後を追って全速力で走った。

「双覇!!あれって・・・」

双覇は黙って首肯した。おそらくこいつも考えることは同じなのだろう。自分の命を投げ捨てても救いたいとおそらく感じたはずだ。

双覇と自分の考えに「イカれるw」と思いつつ俺は双覇に追いつき、ほぼ同時に前のめりに跳躍するように、目の前の『彼女』を突き飛ばした。

『少女』はものすごい勢いで飛ばされ、おそらくいろいろ怪我したろうなと俺はちよつと苦笑いした。その後今まで受けたことの無い衝撃が半身に加わり

『ベッキ』、とか『ごきやつ』とか言うおそらく骨が折れたのだと思われる音を聞いて意識が暗転した。

・・・〈祥磨サイドアウト〉・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・〈早苗サイド〉・・

その日は、今思えばどこか不思議な日でした。朝はいつも喧嘩しているはずの神奈子さまと諏訪子さまは、少し暗い表情でしたし、今だって、あのスーパーは少し遠いはずなのにこちらまで出てきちゃいましたし。

それに、なぜか皆さん私のほうを見てくれません。まるで、友達に、世間に、
いいえ世界全部から『忘れられちゃった』みたいになんか……

「しよげていても始まりませんね。こんなときこそ元氣を出さなくちゃ！神奈子さま。諏訪子さま。みていてくださいっ！早苗行っきまゝす。!!」

と、からげんきをだし、あのお二人に心配をかけないように横断歩道に踏み出し、渡ろうとしたそのとき、

(どんっ!!!)

突然、背中強い衝撃を受けて押し込まれ、思い切り転びました。・・

「いったあ~~~~!!!!何するんですかあ~~~~!!!!折角、これからもがんばって風祝(かぜはふり)のお仕事がんばろうとした矢先に!!!!」

怒りをこらえきれず、後ろを向き全力で文句を叫ぼうとしたところ、・・

突き飛ばしたと思われる人影はもう無く、ただ無常に目の前をトレーラーが通り過ぎ、あたりには錆びた金属のような匂いが充満していました。

・周りの人は泣き叫んだり、救急車を呼ぼうか躊躇していたり、向こうからはおそらく引かれた方の友達の女の子が泣いて走ってきています。・救急車を呼んでも無駄なことは周りは理解しているようで、いまだに呼ぶか決めあぐねています。

わたしは・・・

「わたしのせいで?・・・」

いきなりの光景に衝撃が強く、落ち着かない頭で、ただ困惑し、目の前で泣きじやくる女の子に罪悪感が増し、ワケのわからないまま、意識を手放しました。

・・・〈双覇サイド〉・・・

目が覚めたら、俺はなぜか真っ白い空間にいた。・・・

「いやいやいやいや、なんだこりや？おかしいつーかおかし過ぎるだろっ!!ここはどこだ？あれか、死後の世界ってやつか??だとしたら天国か？雰囲気的に地獄じゃないよな？でも、俺仏教だよな？なら浄土か。いや、そもそもまだ閻魔の裁きも・・・」

ワケがわからず、めっちゃ困惑しうろたえる俺に。

「うるせえ!!やかましい。そのくだけはさつきもう俺がやったんだよ!!」(すばぁーん!!
とんでもない速度でどこからか、靴がとんできた。。)

「へぶっ!!!!いってええな・・・あれ？痛くない???」

あの速度なら顔面ひどいありさまでもおかしく無かったのに不思議と痛みは無かった。

そう、ただの空気のようにまったくだ。

「ふうくやつとおちついたか。さつきから、その女が話したそうだから、さつきと座れ。ここの茶結構うまいぞ?」

妙に落ち着いたそぶりで話しかけてきたのは、先ほど俺と一緒に感動的な死に様を演じた神籬 祥磨だった。

なぜ、こうも軽い再開を果たすのか？妙に落ち着いてるのはなぜか？とかめつちや気になったが、まあそれはおいといて祥磨の言う『女』を見る

そこには端整な顔立ちで目、鼻はすつきりし、顔も細く、俗に言う『大和撫子』がいた。

「きれいだ。」

思ったことを隠さず感想にし、伝えると柔らかな笑みを返され・

「私がこの世界、転生の間を担当する、イザナミだよ〜!!よろしくねっ!」

と初見の感想すべてを台無しにするフレンドリーな挨拶をされた。。。

「よ、よろしくお願ひします。．．．」なぜか、無性に泣きたくなった。

「ん？イザナミ?? それって確か。．．もしかして日本神話における最古の女神

イザナミさまですか？」

信じたくはなかったが、おそらく死んだだろうという感じはした。というか、あのサイズのトレーラーに引かれて死んで無いわけ無いよな。

という感じで死後の世界とわりきって考えることにした。論理で考えるだけじゃ解決できないこともある。

「うん！そっだよ！君たちの世界じゃそういわれてるよ。実際は私よりも強い神様も多いんだけどね。」

この言葉を聞いて俺は、若干日本史や神話の知識を放り投げたくなった・・・

第休話―第1回キャラ設定のコーナー!!

まずは、1人目。われらが「東方双雲録」主人公! 『白雲 双覇』くんです!!

身長・・・160cmくらいで男子平均の真ん中くらい。15歳

体重・・・53kgほどで筋肉質ではない。中肉中背で中性的な顔立ち。

外見的特長

髪の色が地毛で白く、そのことで気味悪がられ孤児となる。(自分がもともと持っていたものなのでいやでは無いらしく染めてもいない。)

目や耳も良く特に体調は問題なし。持病なども無い。

内面的特長(性格など)

性格は極めて温厚であり人見知りをしないタイプ。

困ってる人を積極的に助ける性格。だが、過去に自分が起こした事故で周りからはあまりいい評価がない。

事故を知らない生徒、事故をしても受け入れてる生徒には人気が高い。

祥磨よりもさらに2次元にのめりこんでおり。周囲いわく、残念な人。今のクラスに

はその事故を知らないものが多く、目に見えていやな態度をとる人はおらず、むしろ好意的。

でも、『残念な人』なので、びつくりするほどでもない。とゆ〜か近寄ってくる物好きが少ない。

はい。こんな感じですね。大体、テンプレートキャラですが、残念なことに性格と白髪ダブルパンチでもてないし、むしろ現実をみる。と諭される感じの主人公ですw
それではつぎに、双覇くんの右腕というかつツコミ役兼理性担当の『神薙 祥磨』くんです！

身長・・・170cmほど、クラスの中では、少し背が高い。面倒見がいい。15歳
体重・・・57kgですこし肉付きが良くかつちりしてる。双覇に比べたら体格もよく男らしい(若干w)

外見的特長

めがね(もともと伊達だったが最近本気で少し視力が落ちたのでレンズも入れた。本人以外気づかれない。)

髪の色は茶髪でところどころ金髪になってる。

内面的特徴(性格など)

こちらも比較的温厚だが、物事を論理で考える理性派で許容範囲を超えるとツツコミをいれる習性がある。

また、とても友達思いでもだちになつたものはたとえ人じゃなくても危害を加えられれば怒り狂う。

双覇、さつきの中でも冷静で2人の暴走を止める役割。双覇に現実を見せるために彼に恋をしている、夜神 さつきをけしかけるもそもそも双覇がデートを理解しなかつたり、さつきの「ツンデレ」が発動して、大惨事になつたりと本人も結局振り回されるが楽しんでるからいいそうだw

物事を論理で考えるからこそ、自分の過ごしている世界に退屈し、なにかべつの非常識な世界に憧れ、『東方』にはまりこんだ。

次は3人組の紅一点バカ二人をまとめるも結局最後はハメをはずしちやつたりする『夜神 さつき』です！

身長・・・ 163cmでスラツとしてる。 15歳

体重・・・
??? (双覇さんに聞いてきてもらったところ殴り飛ばされたそうです)

外見的特徴

黒髪の前にかかるとのショートカット。東方のキャラクターである射命丸文に

すごく似ていて、授業の時はめがねをかけている。

内面的特長

スパツとした特徴（恋愛以外は）男女ともに人気が高く勉強もできる。なにげに学年主席。

スポーツや家庭的なこともしつかりこなせるタイプでがり勉強では無い。

双覇、祥磨とは幼馴染で小さいころは良く双覇の面倒をみていたが勉強に集中しすぎてふらついたところを保健室に連れて行ってもらったり、

やりたくない仕事を周囲の期待で引き受けそうなところを変わってもらったり、

いい息抜きをおそわり、勉強はやり続けるだけじゃ身につかないとおそわったり、

いろいろあって双覇にほれた。（本人いわく。カアア、「ほれてないよ!!ちよつと最近にかかるとっていうか、みとられないっていうか。いやいや!!とにかく私は双覇にほれてなんか無い!!」と否定（w）中である。）

祥磨にたきつけられ、デートに誘うも、相手に気づかれない。肝心なときにツンデレが発動する。と散々である。

好きなキャラクターは博麗 霊夢で同じ匂いがするから。だそう・

第四話―旅立ちの朝舞上がる雲

「〜と言うわけでお前たちにはこれから転生を行つてもらおうと思う。」

最初の残念さもどこ吹く風。きりつとした目つきでいやに凜々しく話してきた。

「え〜と、とりあえずまとめると俺と祥磨には向こうの世界じゃ存在を否定されている不思議な力、東方で言うところの能力を持つていておまけに死に方も特殊だから地獄にも天国にも直球で送れないってことか？」

聞いた話を要約するとだいたい、そんな感じらしい。『彼女』イザナミは凜々しい目つきで元氣いっぱいサムズアップした。無駄に天真爛漫なのが逆に残念だった。

「だが、にわかには信じらんねえな。こんな変な空間きてまで全否定するつもりはねえが。」

祥磨が納得のいかない様子で話す。コレに関しては俺もそう思うそんな能力があるにしては、今まで人と違う生き方をしたことなんて・・・

いや、あった。ただ一回俺の人生で不可解なことが1つだけ。たしかあれは孤児院に

入る少し前だったか・・・

「はい。そこまで。」

突如イザナミが声をかけてきた。どうしたのだろうか？

「どうかしたのか？」

「私は神様だからな。読心くらいたやすいものだ。今、声をかけたのはちよつとお前らが考えちゃいけない方向に考えを進めてたからだ。」

ふむ、考えちゃいけない方向に。か、あれ？なんのことだったか。

「忘れたならわすれたでいいよ。とりあえずまずは転生先なんだけど。もう決まっちゃつててね「東方Project」って世界だよ。まあ2人も好きそうだし大丈夫でしょ？」

なんと！これから行くのは、かの東方の世界らしい。2次元の世界でずっとあこがれていたキャラクターたちと逢えると聞いて俺の心はすでに舞い上がっていた。

おそらく、祥磨も同じ気分なのだろう。傍目には至極冷静だが俺にはわかる。だいぶ楽しみという顔だ。

「ぜひっ！お願いしますっ!!!」

2人そろって大声で叫び、イザナミが耳をふさいで小さい子の用にびくつとしていた。

「わかった。ならいくつか質問に答えてもらおうかな。」

そう言っつてイザナミが質問しようとしたそのとき、イザナミの奥の方から一人の人影が歩いてきた。

「???」おい。イザナミ。そろそろ能力を目覚めさせてやれ。こっちの術式はとつくにできてんだから。」

向こうから歩いてきたのはがたいのかつちりした男の人だった。年齢的にはイザナミと同じくらいだろうか？

「まあ、神に年齢とかあんま関係ないか。ところでもしかしてですが、あなたはイザナギさん。ですか？」

俺の問いはほぼ確信に近かった。その確信とうり彼は言った。

「ああ、はじめましてだな。俺は伊邪那岐命（イザナギノミコト）そこの伊邪那美命（イ

ザナミノミコト)は俺の妻だ。と、このくらいは予備知識かな?白雲双覇くん。」

余裕綽々といった感じで応対するイザナギはまさに神様といった感じだった。

奥さんのイザナミとは大違いだ。

「はじめまして。こちらこそ。名前を知ってるのは神だからだろうし、つつこまないが、とりあえずイザナギさんは威厳にあふれていて本当によかった。俺は神話の知識捨てずに済む。」

俺は、気がついたらイザナギの手をとって号泣していた。ちよつと気味悪がられたりしたがそのうち泣き止んで今度はイザナギさんが質問をはじめた。

「それじゃ、いくつか質問するぞ。」

- 1つ目・・・転生先の時代はどうする?
- 2つ目・・・種族や容姿の設定をどうする?
- 3つ目・・・外の知識を次の世界にも干渉させるか?」

質問は上記の内容だった。俺と祥磨はそれぞれ答えた。俺は・

「1つ目の質問は超古代。永淋たちが現れる1000年位前。」

2つ目の質問は、容姿は気にいってるから変えない。種族は半人半妖にしとくか、

面白そうだし。

3つ目の質問は干渉させる。理由はそのほうが面白そうだから。以上。」

続いて祥磨は・・・

「1つ目と3つ目の質問は双覇とあわせない理由は無いし、同じでいいぜ。」

2つ目は容姿は同じく両親から受け取った大切なものだ。絶対に変えない。

種族は、そうだな？普通の人間でいいが、魔法を使うために俺にも妖力を使わせてくれ。容姿をなるべく変えてほしくは無いが東方キャラの魔理沙の様に髪の色が変わる程度なら許容範囲だ。」

とこんな感じで、答えた。ついでイザナギが「ふむ。こんなもんか？」となにやら術式に新しく組み込んでいた。

入れ替わるようにイザナミが・・・

「ふう〜。じゃ、そろそろ能力を開放させるよ！」

と大きな声で元気に言った。何度も言うが外見は美人な大和撫子なのでじつに残念なしぐさだった。

「え？イザナミ。そんなことできるのか!？」

とすっげえ驚いた。

「あなた、神を舐めすぎですよ。私は「万物を生み出し育む程度の能力」を持つてるんですよ。」

わりと、トンでもないほどの能力を持っていた・まあ神だし、その辺の妖怪にはま
ず負けないほどの力を持っているのだろう。そう理解した・

「はい！あなたの方の中の能力を『育み』開放させましたよ。」

だいぶ軽い感じでイザナミが告げた。

「もう。終わったんだな。はあく。」

隣を見ると祥磨もなんか釈然としなさそうな感じのため息をついていた。

すると頭の中に突然単語が2つ現れた。

『契約を司る程度の能力』、『繋がり、昇華する程度の能力』

「な！なんだこりやつ!!突然頭に文字が!？」

隣で祥磨も同じことが起きたらしく、すっげえ挙動不審になってた。ものすごく笑えた（www）

「2人とも成功したみたいだね。よかった、よかった、よかった！それじゃ、後は頼んだよっ！イザナギ！」

そう言うのと、イザナミは欠伸をして、奥の恐らく床の間に消えていった。・
ほんとに、大丈夫かな。あの神。

半ば諦めて、あきれつつ、イザナギのほうをみた。

すると、イザナギが、

「それじゃ、これからお前らを向こうの世界におくるぞ。」
と、言ってきたので俺は、慌てて質問をした。

「そーいや、イザナギの能力はなんなんだ？」

すると、イザナギは・・・

「それは、向こうで嫌と言うほど教えてやるよ!!それじゃおくるぞ。」

ものすごくいい笑顔のイザナギを見た直後。

俺の意識は無限の白に遠のいていった。・

第五話―神々の世界。太古の双雲

「ん？んんんんん。ふわあゝゝゝゝ、ここはどこだろう??？」

イザナミとイザナギに送られてから、どうやら俺は寝てしまっていたらしい。それが一瞬のことだったのか、それとも長い月日が経っているのかはわからない。

ただ、ざつと周りを見回して気づいたのは、どうやらもう転生の間などではなくどこかの洞窟であること。それに、獣の鳴き声もするから恐らく森とかの中であることか。

「ふう〜〜。とりあえず身体がなまっていたらまずいから。洞窟内部を歩き回ってみるか。」

それから、洞窟内を見回してどんどん明るい方角に進んでいった。明るいのは恐らく出口が近いからだろう。

「ふい~~~~~!!!。つつかれた。やっぱり結構長く寝てたのか？貴重な体験なのにもつたいないな。」

案の定だ。いぶ眠っていたらしく、身体はかなりなまっついてもう少しで出口という所で筋肉が悲鳴を上げダウンし、今は近くの岩（石？）に腰掛け休憩している。すると。

「ん。お~~~~~い!!! やつと目が覚めたのか双覇!! お前が起きない間の10年間すつげえ暇だったんだぞ~~~~。ww」

出口（と、思われる方角）からいやに能天気で俺の親友。祥磨が歩いて満面の笑みで右手を振って来た。

左の手に化け物（熊と思われる超巨大生物）と炎をともして・・・。

「いやいやいや、お前なんだそれ??俺が寝てる間にいつの間にかお前は超サ○ヤ人にもなったのか???!?!?!」
というか、何サラつと気楽にきてんだよ。そして、10年!!???!?!?!俺は10年も寝てたのか?!?!?!」

まあ、当然ながら俺はテンパった。ツツコミがここまで難しいものとは思わなかった。前まではさつきに全部回してて、若干反省した。

んで、その後祥磨から聞いた話によるとどうやら祥磨の超人化の原因は俺の寝てる10年のあいだ能力の制御を練習して、能力を使っているからだそうだ。

ちなみに祥磨の力は「万物を呼び出す程度の能力」と「想像する程度」の能力という聞いただけで「うっわ。。。」って引くレベルの能力だった。

あと、俺が10年も寝ていたのは異常ではなく、多少特異な種族を所望したので身体をじよじよに作り直すのにそんだけかかったらしい。

「ん？てことは。俺もあの時頭に浮かんだ能力が祥磨みたいにつかえるのかっつ!!

あ。でも俺自身良くわかんないんだよな。」

俺の能力は「契約を司る程度の能力」と「繋がり昇華する程度の能力」だ。

能力の名前はわかってても「炎を使う」とか「風を操る」とかと比べるとイマイチどう使うのかがわからない。

「それなんだけども、双覇。俺はお前が眠つてるときにイザナミ様から、お前の能力の使い方と性質を聞いたんだが。

はつきり言ってお前の能力は俺の能力が笑えちまえる位チートの能力だぞ。」

祥磨はそういうと真剣な顔つきで俺に、能力の説明をした。

聞いた話をまとめてみると大体こんな内容だった。

〈契約を司る程度の能力〉

司るとはつまりその物の象徴の意で本来は象徴する神が得る能力なのだがなぜか自分には半人半妖なのに得てしまった。(今はじゃあ、『契約神w』とか呼ばれてる。

能力の内容は、

- 1、契約をしたものから、3つの条件を出してもらおう。
- 2、その条件をすべてクリアし、親睦を深める。

- 3、相手からの信頼を得て、了承をもらい相手の体にふれる。(握手等)

なお、1はもともと信頼を得ているものでもクリアしなればならず、3つクリア(契約成立)すると。

相手から能力を借りたり固有の力(魔力、神力、霊力、妖力)を供給してもらえ。上下関係の無い式のようなもの。

なるほど、他人の能力を自分の物として借りて使えるとは確かにチートだ。でも、ほんとにチートなのは2つ目だった。

〈繋がり昇華する程度の能力〉

この、能力は契約の能力を教えられたときに恐ろしさに気づいた。この能力は契約を成立させた数だけ自分の霊力などの力を強化し、さらには、契約した能力を自分の力として、改造できるのだ。

つまり、どこかの王道ファンタジーに出てきそうな老師が言いそうな

「能力とは個人の象徴」とか、「力は自分自身でしか引き出し従えられん」といった台詞をすべて「へえ〜く〜ななにそれ？美味しいの??」とか言いながらニヤニヤできるといふ他人の努力を全部ぶち壊すような能力なのだ。

「そっか。マジでチートだな。まあでも、まだ俺には扱いきれないんだからそんな深くは考えないようにするか、とりあえず霊力の使い方を教えてくれ。」

結局、その日は祥磨に霊力の増やし方は『瞑想』で、使い方はとにかく想像を強固に持つことだ。と教えてもらいとりあえず瞑想で霊力を増やしてみることにした。

(10年寝てる間もイザナミの気遣いで瞑想状態で、力は溜まっていたが。)

瞑想中は、確かに霊力を感じられたしそれと似ているけど、どこか真逆のようでもある恐らく妖力も感じられた。

俺が起きて最初の10年(祥磨はこっちに来てから20年)はひたすら瞑想と俺のイメージを鍛える練習で過ぎていった。(ちなみに祥磨は能力もつかい、すぐに霊力が使えたとか。)

・・・少年たち修行中・・・

そして瞑想の開始からさらに50年経ち、俺も祥磨も戦闘練習をするようになっていた。もちろん、瞑想は日課で1日3時間はやってるがそれだけでは退屈なので、戦闘も取り入れた。

勝率はどちらも五分五分といったところだ。最初のほうは扱い方のハンデもあつて祥磨の圧勝だったが俺も巻き返した。

ちなみに、その間に祥磨とは、契約を成立させた。条件は

- 1、食い物を狩るのを手伝うこと。
 - 2、1個目の洞窟が全焼したので、別のを見つけてくること。
 - 3、ずっと、幼馴染3人の顔を忘れず友達でいること。
- だった。全部すげえ簡単だったのは恐らくあいつなりの気遣いだらう。

そして、現在俺たちはとある場所に向かっていた。10年くらい前に飛べるようになったのでいまは大して感動しない。

「なあ。双覇！ほんとにこっちの方角であつてんのか？なんもみえてこねえぞ。」

「うるせえ。お前より俺の方が霊力捕らえるのうまかつたんだから文句言うな。」

それより用心しとけよ？この靈力だいで殺気も混ざってるんだから。」

第六話―双雲。戦神と対峙する

「うおつつ!!あぶねえ!!」

「おいおい、双覇。何でお前だけ打たれまくってんだよ!ぶぎやあww」

「うるせえ!!!よっほっやべっ!!」

霊力の渦の中心に向かうこと数10分。俺と祥磨は謎の霊力弾の嵐にあっていた。

・・・訂正俺だけがあっていた。

「畜生!!一発もそっちに行かないのはどういうことだよ!!!」

律儀に祥磨のほうを向いて不満を言いつつとにかく避ける。

理由?なぜか殺気が込められてんの中妖怪なら一発で塵になりそうな威力だから

だ。

正直言つて超怖い。。。

「あひやひやひやひや。お前いつの間に恨みもたれてるんだよあひやひや。」

隣で浮遊しながらとにかく笑いこける祥磨がすげえ腹立つ。もうこいつを盾にしよ
うかな？

「うお！何だ!!!ぎゃあああああああああああああ。」

物騒な考えを実行に移そうとした矢先に祥磨が消えてしまっていた。 ちっ！

じゃなくて。

「どうしたんだ。どこにいるんだ祥磨く〜く〜く!!!」

返事は無い。それどころか、俺は目の前まで迫っていた霊力弾に気づくのが遅れて合
えなく被弾。

まつさかさまに落ちていった。

〈祥磨サイド〉

「は。ハハハはどこだ？」

開口一番。転生の間に着いたときのようなことを言ったがまあ気にしない。

「さつきまで、双覇をあざ笑いながら気分良く飛んでたのに夢から覚めた気分だけ。」

おれがそう言っつてしよんぼりしていると・・

「あら。私たちではその良い夢の続きにはなりませんか？」

「そんなこと言われたら、ボク傷ついちゃうな〜。」

突然、見知らぬ女の声が聞こえてきた。

「んあ？誰かいるのか。誰だ……？」

尋ねようとして絶句した。俺の目の前には今まで見たことも無いような美しい女性が2人立っていた。(イザナミはどっちかといえは雰囲気的に女の子だし・)

1人は陽光。万物を導きすべてのものに癒しと温かみを与えるような雰囲気の高い女性。

もう1人は月光。見るものに冷静さを与え、静かな水面を思わせる『陽光の女性』とは別の癒しを与えてくれる雰囲気だ。

「申し遅れました。私は『伊邪那岐命』、『伊邪那美命』の長女にして神名を

『天照大御神』(アマテラスオオミカミ)と申します。」

「ボクは姉さまと同じく『伊邪那岐命』、『伊邪那美命』の次女。神名は

『月読命』(ツクヨミノミコト)だよ。ボクつてのは昔から使いなれてるだけでチャンと女の子だよ」

あなたはここで私たちと一緒に精神の修行を行っていただきます。」

俺の質問にアマテラスが答えた。説明を詳しく聞くと瞑想を行い、ツクヨミが集中を乱してくるので、それに耐え瞑想を続けると言うもの。

「ふっ！この80年ずっと瞑想し続けてきた俺にその試練は楽勝すぎるぜ!!」

「それはすごい！それでははじめますよ。」

アマテラスの言葉を合図に俺は瞑想を始めた。即座に『想像』を開始。俺の精神を体から離して誘惑に負けないように・・・

「あっ!!!アマテラスおねえちゃんが水浴びしようとしてる!!」

「なにいつつつつ!!!
!!!(ぎん!!!
!!!

あ」

10秒も持たなかった。『想像』の最中に横槍がはいるとそれに対してもすごい『想像力』を発揮することがわかった。

当面の課題は『想像』の力を1つの向きにのみ発動させること。だそうだ。

それにしても、アマテラスの右ストレート腰が入ってて痛かったなあ・・・

〈祥磨サイドアウト〉

〈双覇サイド〉

「くっ!!! イツテテテ骨折して無いのもう自然治癒が始まっているのが救いだけど、良くあそこから落ちて無事だったなあ。」

俺は空を見上げつぶやいた。俺が落ちてきたところははるか上空、人間の体のままだったら間違い無く『人間ミンチ』なんていう名目で妖怪に食われてただろう。

「そこか!! 父上、母上に反逆しようとする妖怪は!!!」

「俺が痛むわき腹を抱えていると向こうからなにやら若々しい青年の怒号が聞こえてきた。」

「なんだ? どういうことだ。俺はただこの辺からすごい霊力を感じたからその主に会って戦ってみたいと思っただけだ。」

「嘘をつくな! 白々しい。人の皮をかぶってはいても所詮妖怪、そのまがまがしい本質である妖力は隠しきれぬようだな!!」

青年。恐らく俺の探していた霊力の主だろうが、彼は透き通るような碧眼で髪は背中までのび、右肩から斜めに剣を背負っていた。

「まあ、まあ確かに俺は妖怪だがお前の父や母に手を出す気は無い。信じなくてもいいがとりあえず名を聞かせてくれ。」

俺の名は 白雲 双覇だ。」

「ふむ。妖怪に名乗るは癪だが武人として名乗らずに切るのも流儀に反する。

良いだろう!!心して聞け!!

かの大神。『伊邪那岐命』、『伊邪那美命』が長男!父上に負けずとも劣らぬ靈力と

この『天叢雲劍』(あめのむらくものつるぎ)をもつてしてこの地にはびこる妖怪を滅する『戦神』(いくさがみ)」

ここまで言つて青年は大きく息を吸い、天地にとどろく声で言つた。

「『須佐乃袁尊』(スサノオノミコト)とは俺のことだ!!!」

言うが早いか『青年』。スサノオは背中に携えた『天叢雲劍』を抜き放ち某明治劍客浪漫譚の新撰組よろしく。牙突の構えをしている。

しかし、スサノオ。『戦神』か。。。。

俺は衝突が避けられないことを悟り、いやあるいは本能的に目の前の相手と戦いたく

なつたのか。

「な、、なんだ!!!その馬鹿げた霊力とおぞましい妖力は!!!」

目の前のスサノオが震えながら、こちらに切りかかってくる中ただの一度も攻撃を行わないまま、

霊力と妖力を全開にした、『重圧』でスサノオを叩きのめしていた。

「アハハハハ!!タノシイナ。ゼンリヨクデモツブレナイナンテ、

スゴクタノシイヨ。・・・」

第七話―白雲、祖神と相い対す。

・・・〈スサノオ視点〉・・・

「かはっ!!ぐほっ! げっほっげほっ!!! ハアっハアっ」

な、なんなんだ?あの化け物は!!

父上の話では『白雲双覇』は半人半妖のどっちつかずの存在という話ではなかったのか!!

「相手が妖力を持つ妖怪である以上俺のほうに分があるはず。なのに、今のこの状況は。」

ちつくしよおおおおお!!!

はあああああああああ!!!!!!
「

相変わらず奴からは、近づきたくも無いほどに禍々しい妖力が漏れ出していた。

だが、ここで俺が食い止めなければ誰が『高天原』を守るのだ!!

父上は母上の看病をしているはず。俺が止めるしかないのだ!!!

・・・〈双覇視点〉・・・

アハハハハ。コレガ神ノ力だと?笑わせル。

「アハハ。ソシナヒンジャクナチカラデナニヲマモツテルンダ???

オマエマダマダヨワイナ?モットタノシミタイ。セツカクオモテニデテコレタンダ

カラ!!!」

ボキッ!バキッ!バキヤッ!と鈍い音が響き渡る。目の前のスサノオは紅く染まっ
ていく。

ふくん、神といってもこの程度力。期待はずれだがバキバキするのもタノシイ
な。。。。

「モット!!モットモットモット!!!モット『ボク』をタノシマセテクレヨ!!!」

スサノオが倒れ、玩具の無くなった瞬間。近くに異常な霊力を感じた。
いや、この霊力には覚えがある。コレは多分・・・

「いやはや、双覇が力を使いこなせるように修行させるつもりでスサノオを送ったはずが、まさかここまで育っていたとはな。」

「アツハ！ツギハ キミガオモチヤニナツテクレルノ?? イザナギ?」

ボク ノ マエニハ マエニ会ったトキトハ アキラカに雰囲気ガチガウ イザナギガイタ。

「ああ。今回は俺も本気でいかせてもらう。前に知りたがってた能力も使って本当の全力でな!!」

解できたか?」

妖力が使えなかった!!?、なんで体が意思に反して抵抗をヤメヨウトシテル。
イヤダ。コワイ。怖い怖い怖い怖い!!

「怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い!!」

くるな繰るな繰る無くルナくるな繰る無くルナくるな繰る無くルナくるな繰る無く
ルナくるな

くるなああああああああああああああああああ!!!」

だが、イザナギは歩みを止めない。

「やっと、神に対する正常な妖怪の反応になったな。でもまあとりあえず気絶するま
ではやめない」

その後は、『どかつ』『ぎぎ』『パキヤッ』って音がして意識を手放した。

・ ・ ・ 〈スサノオ視点〉 ・ ・ ・

す、すごい！あの化け物をぼこぼこにしてるのもそうだけど、
いったい父上の能力は何なんだ??

あいつ相手に一切霊力を使わないなんて ・ ・ ・

しばらく呆然としていると父上から合図が来た。ここからは俺の仕事だ。

「天叢雲剣よ。この物の邪悪なる力を『断ち切れ』!!!」

詠唱を唱え剣を振る。俺の能力は『万物を断ち切る程度の能力』。

天叢雲に断ち切る対象を詠唱し降れば、どんなものでも切り伏せることができる。

父上に聞いたところ俺は神ではあるが、人間にも近い存在らしい。『現人神』というわけでもなく、

分類はむずかしいそうさ。だから俺は司っているものは無いあえて言えば『斬撃を司る程度の能力』だろうか？

「あ。父上この妖力はどうすれば？」

「力だけでは何もできまい俺が預かる。はあ!!!」

次の瞬間には、父上の手のひらに黒い球体が握られていた。

「あとは、双覇を看病してやれ。お前の能力ならば俺より向いてるはずだ。それと目を覚ましたら俺のところに通してやれ。」

そう、言伝を残し父上は『高天原』に黒い球体と共に上っていった。しかし、父上の能力とはなんだったんだらう??

第八話―激闘!! 白雲 V S 黒雲

「う〜ん。あれ? 何で俺はこんなところで寝てんだ??」

確か俺は、靈力弾に当たって落ちてきて。落ちた草むらでスサノオに会って・
だめだ、その後の記憶がはつきりしない。

「あ! 起きましたか? 双覇さん。」

「え〜と? スサノオのミコトだよな。」

なぜか、記憶があつたときはめつちや喧嘩腰だったスサノオが敬語+他人行儀だった。
た。

なんていうか、そう。超怖い獣を見るような恐れられてる感じ?

「まてまてまて。なんでそんなに他人行儀なんだ？もつと崩した感じでいいんだぞ？
歳も同じくらいだろうし?」

「いえいえいえいえいえいえ!!!双覇さんの相手になど私ごときがなれませぬよ」

余計に悪化した。俺は種族的にただの半人半妖なんだからいざとなればあつちに分
があるはずなのに。

あれ??

「俺の妖力が無くなってるな。それに良く見たらスサノオ、お前頬に傷ついてるぞ?」

「へ?」
(しまった!!少し残ってたのか!!!) ぼそつ」

ちよつと待てよ?

俺の妖力が無い ↓ 使ったor奪われた ↓ 使ったとすれば全開でスサノオに
向けて ↓ 奪われたとすれば暴走を食い止めるため

どの可能性にしろ、全部俺が迷惑かけてるじゃねえか!!!!
し、スサノオを傷つけた挙句妖力没収だが）
（正解は妖力全開にして暴走

まずい。まずいまずいまずい!! どうりでスサノオがおびえてるわけだ。ただでさえ

親父からチート能力もらってるくせにそれを暴走させるなんて!!

とりあえず謝らなきゃ!!!

「スサノオ!!ごめんなさい!!俺が普段ちゃんと妖力をつかいこなせないばかりに迷惑かけちゃって。」

「いいんですよ。とりあえず父上から目覚めしだい高天原に通せと言伝を預かってますから行きましょう。」

そういつて、スサノオはいやみひとつ無く許してくれた。ええ子や、さすが神さま俺みたいなねじれ曲がった人間とは段階が違う。

・・・〈少年移動中〉・・・

今、俺は高天原にある宮殿みたいなところの客室にいる。移動中に聞いた話によるとスサノオの能力は『万物を断ち斬る程度の能力』だとか。

説明の最中は使われてなくてよかったーとか自分の体が繋がってよかった。とい

う冷や汗でいっぱいだった。

「それにしても、イザナギ遅いなあ〜」

そう俺は今イザナギから妖力の扱い方を習い返してもらうために待機していた。

「おお。またせてすまなかつたな。双覇君早速だがコレを見てくれ」

やっとか〜と思いつつ俺はイザナギに目を向けた。

(ゾツツツツ)「イザナギ、な。なんだそりや????」

怖い。ソレを感じた瞬間俺はその感情しか感じなかつた。

「コレは、お前の妖力だ。いまは私が『支配』している状態だが。ものは相談だが双覇君。コレを受け取るかい??」

数秒の沈黙。。。俺は首肯した。こんな不気味な力いつ暴れるかわからないならさっさと自分で扱えるようにしたほうがいい。

「キミは相変わらず勇気があるね」

ふつと微笑み。イザナギから妖力を返された。

「ぐあああああああああ!!!!!!!!!!!
があああああああ!!

げほ!!げほっ!ぐはあ”!!!”!!

信じられない激痛とともに戻ってきたソレは10分程して静まった。

「それじゃ、双覇君きみにはこれから、僕の結界内で座禅をしてもらう。

僕の能力は『支配を司る程度の能力』といってね。

自分の結界内の物事や、現象生き物なんかをすべて支配する能力だ。」

「今回はその能力の1部を反映させた結界内で自分の妖力と語り合ってもらおう。」

力を制御するにはそれが一番早いからね。」

イザナギの言葉は用は恐らくいつも道理の瞑想ということだろう。

少しニュアンスが違うだけで大体同じ物のはずだ。

俺は、結界の中にさつさと入って瞑想を始めた。

「さてさて、どれくらい持つかな？」

そんなイザナギの言葉をまるで聴かずに

・・・〈数10分後〉・・・

結界の中はものすごく静かで少し暗かった。

最初は静かで薄暗いほうが集中できるからイザナギの気配りだろうと適当に考えて

いたがこのあと本当の意味を知るハメになる。

・・・
《??》日後
・・・

キインツ!!! ギヤンツツ!!!ガキイイイイン!!!!

「くっそおおおおおおお!!!
!!! おりゃあ!!!はあ!!!でいりゃあ!!!」

中段突き、袈裟切り、上段からの飛び切り。

もう何日たったか忘れてたが俺はいま戦闘している。相手は

俺だ。頭がイカレタと思うかも知れ無いが実際そうとしかいえない俺の眼前には
まったく持つて俺とそっくりなそれこそ本人と思われそうなヤツがたっていた。
ただし髪は黒く、体の一部に真っ黒な体毛が生え、犬いや狼にそっくりな耳、瞳、牙
を搭載した明らかに人間とは違う風貌だが。

「はあああああああああ!!!
!!!いい加減にしろや!!!」

俺はまたしても上段に切りかかるが横に飛びのいて交わされた。

この勝負は俺にとって契約を賭けた物でもある。

自分の力なのに契約関係?と思うかもしれないがそうしないと外に漏れ出すのだから仕方ない。

「くっそ!!うりゃあ!!からのあああああああ!!!
!!!」

横なぎ払いをジャンプで交わされ、突きを爪でガードされた。ちなみに相手は契約条件を言っで以来話しかけてこない。

くすくす笑っているくらいだ。

「こうなつたら!!おい!お前の契約条件。

1つ、結果から出たらお前用に体を与えること。

2つ、この試練を終えた後もたまには俺の体を使わせること。

3つ、この試練でお互いの全力をぶつけること。

だったよな!」

俺の問いにヤツは何日かぶりにその口を開いた。

「ええ。その条件であつてわ。で何の提案?勝てそうに無いからやめるってこと?」

オネエ口調で、いやもしかしたら女の妖怪の妖力がたまたま俺を宿にしたらだけかし

れないが。

もう、だいぶ泣きそう。。。。

「いや！そうじゃない！俺たちはまだ互いの全力を出せてない。だからそれぞれで全力の1発を打ち合って立っていられたほうの勝ちにしよう。」

「ふうくん？結構面白そうね？いいでしょううけてたちます!!!」

何とか挑発には乗せた。なら、次は

「はあああああああああああああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

俺は自身の持つ剣に渾身の霊力をこめた。相手も爪がどんどん黒くなってる妖力を集中させているのだろう。

そして、お互いの視線が合い。

「うおおおおおおお!! 『雲符』晴天漂う浮世絵!!!」

俺は、まだスペルは無いが一度言ってみたかったスペル詠唱をした。

「はあああああああああ!!! 『狼符』一夜の惨撃!!!」

向こうから漆黒の爪が迫り、俺の斬撃と衝突。

瞬間。結界が弾けとび。

辺りは、元どりの客間に。

煙の立ち込める客間にたたずむのは

真っ白い髪の毛

長髪の毛の獣耳が生えた美しい女性だった。

第⑨話—修行終了。 双雲降り立つは未来都市？

・・・
《??サイド》・・・

なにが起きたんだ？イザナギの作った結界を暴発させたのか?! いや！それよりもこの姿は？・・・

「どうだ??新しい体は？馴染めそうか？」

誰かが声をかけてきた。いや間違いなく私の主のはずだが・・・

「主様？あの。この姿はいつたいどういことですか??」

私は問うた。主もなにやら髪を一瞬で染めたように真っ黒だが恐らく妖力のせいだろう。

「どういふこともなにも、お前が出した条件じゃないか。あの結界の中以外でも動けるように体がほしいって。」

!!!私は耳を疑った。本来私は目の前にいる主の力に過ぎない。

故に個人の体など必要ないし、契約などしなくても制御できるはずなのだ実際目の前の主は制御しているし。。。

「なんだ？容姿が気にいらねえか？体を作るのは結構霊力使うんだがきにいらねえなら作り直すぞ？」

「いや。いいこのままで、このままがいい。」

否定し、私は何か不自然な感覚に襲われた。勝手に目から滴が落ちる・目の前の主を直視できない。なんとも言えない充実感に胸がいつぱいになる。

何だろうこの感覚は。今まで感じたことは無い不思議な暖かい感覚。

そうか!!!!
!!!!これが『恋』か!!!
(注 『喜び』、『歓喜』です。)

しかしどうしたものか、自分の感情を再確認しただけなのに、なにやら胸が高揚してくるな。

「ん?どうしたんだ?顔が赤いぞ?風邪か???'」

「あほう!!私は風邪などひかぬ!!そうじゃなくてえ〜とう〜んと

そうじゃ!!名前!まだこの姿の名が無いではないか!

「あ、そういえばそうだな。」

ふくなんとか、ごまかせたのう。とりあえずはこの気持ちは悟られぬようにせねば。
ん?なんか顔の前がくすぐったいのお・・・

目の前に主様がいた。・・・・・・

「ん な っ !!!
!! な に し と る ん じ ゃ
!!!!!!」

「なについて。名前付けるために特徴的な髪見てるだけだろ？」

うし！決まったお前の名は・・・」

主様が離れる。うれしいような残念なような。・・・いかんいかん。
今はただの命名式。おちつかねば。

「氷柱（つらら）だ。その青白い長髪と静かな雰囲気。まさに氷！よってこれからお前は氷柱だ。」

「よろしくな！氷柱！」

そう言うところ主人は笑顔で頭をなでた。

はううううう・・・じゃなかった!!!!

「はい！ご主人様!!!」

「ご、ご主人様??.」

呼ばれなれてなかったのか。ご主人様は苦笑いでしたが拒否はしなかったのこのまま呼ぶことにしましょう。

今回はなかなかいいお人に出会えてよかったです……。

……〈氷柱サイドアウト〉……

……〈双覇サイド〉……

とりあえず名前は気に入ってくれたみたいでよかったです。

どう考えても化け狐だなあくこの娘。耳と尻尾が狐のものだし、

その後、氷柱と10分ほど談笑していると、

「おお、双覇くん無事に制御できるようになったらしいな。」

イザナギが入ってきた。聞けば祥磨はもう試練をクリアして、ここを発ったというか、ツクヨミに気に入られて連れて行かれたらしい。

アマテラスも、今は休んでいてイザナミはもう少しで赤ん坊を産むそうなので、
安静にだそうだ。

俺はイザナギにだけ、別れを告げ高天原を発った。

ちなみに、契約の力で祥磨の居場所はわかるのでその方向に飛べばツクヨミのつくつた都市があるはず。

・・・〈数10分後〉・・・

「誰だ!!お前。なぜ外からやってきた!!怪しいやつめ」

俺は、まさに未来都市と呼べそうな車が飛んだりしてる場違いな場所の門で門番に絡まれていた。

心底うざいし、めんどいのでぶつとばしていきたいがどうにも問題が増えるだけの気がするので一応説明を試みる。

「私はこの都市で薬屋を営んでおります。永琳さまの家のものにして、珍しい薬草が門をでてすぐに生えてると聞き取りに来たところ妖怪に襲われてしまいました。」

「うむ。にわかには信じがたいが永琳どののところのものと言われている確認を取るしかあるまい。ついてこい。」

なんとか、第一関門突破。だがしかし、本当の恐怖はこれから本当に確認とられたら一発でばれちまう。どうしよう……

「永琳さま。永琳さま!!!永琳さまの所の薬師と申すものを発見しました故
ご確認ください。」

もう着いてしまったらしい。でけええええええええええ。なんだこれ?本当に個人の家なのか。総理官邸とかソレくらい迫力なのだが。

「はい。(がちや

あら?双覇じゃない。どこまで薬草を取りに行つてたの?あんまり遅いからおしお

き用の激薬作るところだったわよ?」

うおおおおおおおおお!!生の永琳だ!!
すっげええきれいだなあ。

「どうしたの? 双覇。早く入って? 中が冷えちゃうじゃない。」

そうだ! 見とれてる場合じゃない。なんで永琳が俺の名前を? しかもなんで匿ったんだ?

とりあえず。言われるがまま、中に入った。扉が音をたててしまる。

「ふうくさすと。ツクヨミさまに言われたから匿いはしたものの、君はだれ? なんで私の名前を? どうして私が薬師だと知ってるの?」

うん。予想どうりに質問がきた。ふうむ転生のことは黙ってボロが出ないようにごまかさなきゃな。

「えっと。僕・俺は白雲双覇と言います。永琳さんのことは、ツクヨミさまからかねがね聞いてました。できる娘だから頼れと。薬師の話もそのときに。」

「ふうん？腑に落ちないことも多いけどまあいいわ。ところで泊まるところは？」

祥磨くん。だっけ？はツクヨミさまが自分のところで養うって聞かなかつたけど。」

泊まるどころ。確かに無いけど女性の家に泊まるのは思春期男子としていろいろまずい。と、いつでも都合よく男の家も無いだろうし・・・

「どうしたの？良ければうちに泊まる？一人暮らしにはどうせひろすぎるし、もちろん家事とか仕事とか手伝ってはもらうけど。」

すごく魅力的な提案だがううん・・・

「やっぱり、いいですよ。男が女性の家に泊まるのはあれですし、なんか野宿できそうなところおしえてももらえれば・・・」

「ふうん？なら・門の外に放り投げちゃうよ?? (にや)」

なんて提案してきやがる。どうする？楽園（永琳さんの家）に行くか、地獄（門の外）に締め出されるか？

「……泊めさせてください。」

10秒も迷わなかった。なんて意思が弱いんだ……

「なんか嫌そうな返事ねえ。そんなに私が嫌？まだあんまり歳とって無いと思うんだけど……」

「永琳さんを嫌なんてそんなわけ無いじゃないですか!!!僕の見てきた中でダントツに魅力的な女性なので。間違いがおきないか不安なだけ……あ」

気づいた時にはもういろいろアウトだった。初対面の女性に『間違い』って完全に言葉を選び間違えた。

もうだめだ。締め出される……

そうおもっていたが。

「な、なに言ってるのよ！もういいからさっさと寝なさい！！ああ風呂は奥の突き当たりを右。着替えは自分でどうにかして！！それじゃ！！」

「自分でどうにかって……」

まあできるけど。風のように去っていった永琳さんの顔が赤くなっていた気がした。

第10話—都市での生活。流れる月夜

永琳との生活も1、2週間が経過していた。

いままではもう、家事の当番も決め、研究も慣れてきた。

(俺は大半新薬を飲まされては死にそうなのだが。)

「そうだ。双覇く。あなたこれからツクヨミさまのところに行つてきなさい。」

俺がいつもどおりに食器を洗い、洗濯物を干し(もちろん永琳の下着以外)、家の掃除をし、昼食を作つたあたりで永琳が声をかけてきた。

(かちや、かちや「ん?急だな。俺なんかまずいことしたつけなあ?」)

記憶にあるのは、ここに来た次の日に祥磨の様子を見に行つて盆栽を叩き割つたこと、次の日今度こそと入り着替えシーンを覚えてしまったこと。あとはく……

「うん、記憶にありすぎる!俺拾われてる身なのになにしてんだよ……」

ちよつとおちこんだ。でも、そのたびにツクヨミには怒られてたはずなんだが。

「いや、そういうことじゃなくて。ツクヨミさまじきじきに言伝があつたのよ。なんでも前にあんたが出向いたときに聞かされた能力の事で話があるって。

ねえ。あなたの能力って何なの？」

永琳が興味深々って感じで尋ねてきた。別に教えない理由もないか。

「俺の能力は『契約を司る程度の能力』と『繋がり昇華する程度の能力』だよ。

契約の能力は相手の願いを3つかなえる必要があるけどな」

「の、能力を2つ持つてるの!?!初めて聞いたわ。それは確かにツクヨミさまも重要視するわね。」

ほんとに驚いてるらしく目を見開いて、なにやらぶつぶつ思案している永琳真剣な表情もいいなあ。

「ねえ。双覇?それなら私も契約させてもらって良い?なにかと役に立つと思うわよ

？」

願っても無い提案に即効で首肯した。

「ありがとう。それじゃあ……」

永琳から出された条件は

- 1つ、なにがあっても永琳を忘れないこと。
- 2つ、必ず、元気で毎日を過ごすこと。
- 3つ、なにがあってもひとりりで背負い込まないこと。

「契約完了。ありがとな永琳！そんじゃいつてくる。」

ナー
永琳にお礼を言ってツクヨミのところへ急ぐ。お気楽そうな神なのにルールやマ

時間にはうるさいのだ。まあ都市の住民を家族のように思つて、見捨てたりはしないから、一国の長にはふさわしいのだろう。

威厳はまったく感じられないが。

「なぐんか失礼なこと考えなかつた？ 双覇きゆうん（怒）」
おっともうツクヨミの家についていたらしい。

「そんなわけ無いじゃないですか。ツクヨミさまはとてもすばらしい長としてふさわしい神ですよ！」

かわいい、かわいい、かわいい、かわいい、かわいい、かわいい、かわいい、

「んなつ!!かわいいとか言うな~~~~~!!!」

「おちついてください。ツクヨミさま、私はかわいいと思っただけです。言っただけじゃない。せん。」

どうやら、神は種類関係無く心が読めるようで、俺は心もかわいいだけで埋めてみた。結果は言わずもがなだ。

「はあく、もういいや。でボクのお願いつて言うのはね?ほら前に能力のことをおしえてもらったじゃん?それでさ、この都市はいま若い力が足りないんだよ。

そこで！」

ツクヨミが息を吸う。若い力で・・・

「キミをこの都市の防衛軍、最高防衛長に任命しようと思うんだ！」

提案するツクヨミはソレこそ少女のように天真爛漫に言い放った。チクシヨウ。良い笑顔すぎて断れない。と言うか断る気も無かったが。

「はあく。どうせ拒否権ないんですからやりますよ。でも肩書きどうにかしてくださいよ。分隊長じゃだめなんですか？」

ここにきてからと言うものツクヨミには やれ盆栽の弁償だの、やれ着替えを覗いた目の保養代だのとなんだかんだですべて拒否権がない。

「うくん。だめだめ双覇くんは今この都市で一番つよいんだからさ！」

「そんな！綿月隊長は！ あ。・・・」

うっかり口を滑らしてしまった。そうだ綿月隊長は1週間前に亡くなったんだ。こ

の辺に運悪く現れた大妖怪クラスの化け物のせいで。

綿月隊長が相打ちに持っていけなかったら、俺たちは死んでた。確か隊長には2人娘がいたはず。名前は……

「……豊姫と依姫は？あいつらもだいぶ強くなった。あいつらでも務まるんじや。それに隊長の思いも受け継げます。」

「言いたいことはわかるけど。依姫、豊姫を鍛えたのもあなたでしょう？それにあの男（ひと）もキミに託したんだと思うよ。」

そう言っつてツクヨミは少し悲しげな目をした。

「わかりました。謹んで受けさせていただきます。ツクヨミさま！

あのくところまで祥磨は？」

「ん〜ご飯食べたら寝ちやったよ？」と一室を指差すツクヨミ俺はそこに飛び込み

「だいじょうぶか!!祥磨!!!」

「う。ううゝ助けてくれ双覇。．．．」

果たして祥磨はがりがり痩せ細っていた。たぶん症状は栄養疾患．．．

「なんで、飯食べて栄養疾患になるんだよ!!!」

大急ぎでキッチンに向かう。ん？誤爆?!?!ちがうちがう。なぜかここには火で直接肉を焼くどころか性能が良すぎる家電のついたキッチンがあるんだ。

「えくと。材料は．．よし。炒飯でもつくろう。」

がさごそと冷蔵庫から食材やら調味料やらをとりだす。 パリーントツ

突然甲高い音が鳴った。

「ん。グラスでも割っちゃったかな？」

俺は落ちた先に首を向けた。

ビーカーが割れ、中から『シユー。グツグツグツ』と謎の紫の液体が出て、フローリングの床を溶かしていた。

「あぶねえな!!!何で謎の激薬作ってんだあの神!!!」

俺は急いで。正し丁寧に、そのピーカーを拾い上げた。ちようど粉々にならずにすんだ部分には。

『祥磨用。 惚れ薬!!私以外はふれちゃだめだぞ!飲食用』

とかかれており、それだけなら親友の尊い犠牲に自分の生を実感し、あざわら・・悲しめばいいが、

さらに恐ろしいのはず〜〜〜と端に『八意印』があつたことだ。

ぞつとつと一瞬で血の気が引いたがまあ気を取り直して炒飯をつくり祥磨に持つて行つてやつた。

泣きながらうれしそうに食つてた。ツクヨミは不服そうに頬を膨らませていて、俺が永琳の家に飛んでいる最中に案の定。祥磨の悲鳴が聞こえた。

家に着き、永琳に呼ばれた理由やコレからどうするか、ツクヨミのところの惚れ薬のことを話した。なんか「きづかれたか！」とか、ぼそつと聞こえたけど永琳が俺のこと好きかわけ無いし気のせいだな。

前世でももてなかつたし（顔は良いのに性格が変態だからです。気づいてませんが）その後は二人で談笑したり、人体実験されたり、買い物にいつて夫婦と囃し立てられたり、人体実験されたり、夕飯を済ませたり、人体実験されたり、お休みのチューと永琳が冗談を言つて、見覚えのある紫の液体を飲ませようとしてきたりした。

まあ今日も無事おわり、明日からは俺も都市の防衛軍だ。

「ツクヨミの話じゃ、俺に部下ができるらしいしな。かわいい後輩できるかなあ〜」

にやにや、うきうきしてたらメスとか薬品の入った注射器が飛んできた。

恐らく後ろの永琳だろうが、振り向いてもこちらをまるでみていない。達人なみの投

擲技術だ。

ものすごい、悪寒が走ったのでとりあえず寝ることにした。意識がなければ怖くない。

『シュゴンつつつつ
!!!!』

ツー、

訂正やっぱ怖い。

第11話—激闘!!神霊の依り憑く月の姫

「ねえ。双覇。あなたは どうするの? 『月移住計画』について。」

ある日の朝、いつもどおり家事をしていた俺に、永琳は聞いてきた。

なんでも、もうしばらくしたらこの都市のみんなは永琳が作ったロケットで月に行くのだとか。

「うくん。オレはどうしようかなあ? 月がどんなどころなのかも気になるけど、たしか、ちやうど打ち上げの日に妖怪の軍勢が攻めてくるんだよね?」

「ええ。そうよ。まさか、その軍勢をとめるために残るとは言わないでしょうね? 大丈夫よ。予測では十分打ち上げ時間は確保できるわ。」

永琳は自信満々に答えた。よほど自分の作った予測機に自信があるんだろう。実際問題、この都市がここまで発展したのは一重に永琳の手柄だし・

「うゝん。永琳のことは信頼してるしその装置を疑うわけじゃないけど、いつでもイレギュラーはおこるからね。オレもそのときに備えておかなくちゃ。」

そう永琳に言つて俺は、軍に向かった。

俺の今の仕事は、ここの防衛軍の総隊長、らしい。

ちなみに、俺が隊長を勤め、じきじきに鍛えてる分隊もある。『第10分隊』
依姫、豊姫も俺の分隊にいる。

「おゝす。今日もウオームアップ終わってんな？んじや、1人ずつかかってきやがれ」

「はい！それでは。1番 禎曇 優華（ていうんゆうか） 全力で行きます!!」

この妙に気合の入った子は優華。はつきり言つて戦闘経験もなく、あんまり戦いに向いてるとは言えない。が

「はあああああ!!!性質変化。「電符」!ヘイル・バレット!!!」

優華は宣言し、両手に2丁拳銃で、氷の弾丸を撃ってくる。

「おお!前来たときより、能力の扱い方がうまくなつてるな。その調子だ!」

俺は弾丸に対応しながら、優華をほめる。

優華の能力は『霊力を変換する程度の能力』自分の中の霊力をどんな形にでも変換できる能力だ。

ただし、変換し作ったものをいつまでも残すことはできないし、大きいものを作るとそれだけ時間と霊力がかかる。

いまは、能力の扱い方の練習だ。

「よしよし。今回は、もうそろそろ休め。ふっ！」

俺は脚に靈力を集中、一気に爆発させて接近。思いつきり掌底を叩き込んで、気絶させた。

「さて、次はだれだ？」

と、言ってもこの分隊、人数が俺を含め戦闘向きが5人しか居ない。

「俺だ！師匠!!今回は負けないぜ！」

「おう！大和。本気で来い!!」

こいつは、鳴神 大和（なるかみやまと）。衛生兵を抜けば、分隊で俺以外の唯一のおとこで、能力は・・・

「『創作』絶対無敵の英雄。」

そう呟き。大和が殴りかかってくる、俺は同じくこぶしをぶつけ、相殺し、

「も一発。もらってけ!!」

カウンターの膝蹴りを腹にぶち込んだ。

「いってええええええええ!!! 今日も勝てなかったー!ー!ー!ー!ー!ー!!!」

足元で、大和が悶絶していた。うるせえ……

「ったく。大和!!お前は どうして、自分の能力を理解しないんだ。お前の能力、『物語を刻む程度の能力』で重要なのは表面よりも中身だ!そこを優華におそわつとけっ!って言っただろ?」

大和の能力は言わば究極の自己強化だ。物語を想像し、自分や相手に配役を決める。その配役にそり、強さが上下する。

まあ、こいつはその想像力が足りてないわけだが。

「だって。そんなことする暇あったら、自分を鍛えたほうが良いだろう？」

「はあ。それじゃいつまで立っても能力を使いこなせないぞ？　優華。」

大和の特訓頼んだ。　じゃあ次!!」

遠くの方で、優華の元気な返事が聞こえた。あいつは霊力の扱い方、ひいては想像のしかたが群を抜いてるから、たぶんしっかり教えられるはずだ。

「はい！綿月　依姫（わたづきのよりひめ）参ります!!」

次の相手は依姫だ。能力は八百万すべての神をその身を依り代として、おろす。

『神霊の依り代となる程度の能力』

はつきり言おう。いまは強大な力を扱い切れてないが、このまま成長したら俺も負ける。神々の力とはそれだけ強大だ。

「依姫。今回は本当に手加減無用だよ。本気で殺しに来なさい。」

俺はそう告げ、一瞬で依姫に接近した。

「くっ！お出てください！『祇園様』!!」

依姫が告げ、刀を地面に突き刺すと突如白刃が生え、俺を取り囲んだ。

「祇園様。女神を封じし、スサノオの力か。下手に動いたら危険だろうけど、動かないわけにも行かないよね。ふっ！」

俺は、拘束を抜け飛び出した。刃が追いかけてきて、背に何本も刺さる。

「コレくらいなら、きにしないよ!! はああああ!!」

依姫の目の前まで接近し、優華にやったのより威力をあげて、掌底した。

「ぐはっ!! かはっ!けほ!」

ずぎぎぎぎ!!と勢い良く、後ずさった依姫に追撃のこぶしを当てようとさらに接近しかし、

「お出でくださいませ!! 『愛宕様!!』」

依姫の左右の腕が燃え、迫る。ほんの一瞬届く寸前に飛びのけなんとか事なきを得た。

「愛宕様。生まれしとき、慈母であるイザナミ神を焼き殺したとされる。

『火之迦俱槌神』（ひのかぐつちしん）の神殺しの焰か。」

「はあ!!!」

依姫が刀を構え、こつちに猛スピードで向かってくる。

「なら、こつちも行くよ!!霊力70%!!」

ためしに70まで開放してみた。周りのみんながなんかすごい顔してた。

「契約開放!神薙 祥磨!! 『具現』霊刀 天叢雲劍(あめのむらくものつるぎ)!!!」

俺は、天叢劍ではじき返し依姫と距離をとった。

「ふうふう。あぶなかったー!!んじゃそろそろ終わりにするか(につ)」

・・・〈依姫サイド〉・・・

これは。まずい、まさか愛宕様の火ですら返されるとは思いませんでした。

もう、霊力も底がみえてますし、双覇さんはこれだけやってなおまだ3割残っている
そうです。

それに、どうやら双覇さんには策があるようですし、

「ふうふう。負けてもしようがないなんて思ったら本気で来て下さってる双覇さんに
失礼ですね。やれるだけ、全力でやりきるとしましょう!!」

そう、思い次の一撃にありったけの霊力を込めた。愛宕様。力をお貸しください。

・・・〈依姫サイドアウト〉・・・

・・・〈双覇サイド〉・・・

さくて、あと俺にできるのは次の一撃を全力で向かい打つことだけだ。
依姫も、ありったけで来るみたいだし。

「ははは。死ぬかもな・・・。はあああああああ
!!!!!!」

コレが、俺の精一杯だ!

「『神斬』神を断ち切る竜の爪」

おれの霊力7割全部つき込んだ、斬撃だ。うけとれ!!

・・・〈双覇サイドアウト〉・・・

・・・〈依姫サイド〉・・・

双覇さんの刀の切っ先から霊力で作られた青白い龍が襲ってきました。でも!

「『神炎』陽炎おどる狂乱の舞」

こつちも全力です!!今日こそつ。双覇さんに勝ちます!!!

・・・〈依姫サイドアウト〉・・・

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!
!!!!」

俺の斬撃が生み出した龍と、依姫の焰を纏った斬撃がぶつかる。

「はあああああああああああああああああああああ
!!!」
私の焰の斬撃と双覇さんの龍がぶつかる。
!!!

「負けたく（無い!!）（ねえ!!）」

「はあああああああああああああああああああ
!!!」
「

そして、

私の焔は双覇さんの龍に飲み込まれた。

・
・
・
・

第12話—都市との別れ。過ぎゆく雲。

「・・・め！　・・・ひめ！　・・・依姫!!!」

「ん・・・んう？あれ。どうしたの？優華。」

私はどうやら気絶してしまっていたらしい。目が覚めたら優華に抱き抱えられていた。

「どうしたの。じゃないよ！隊長との戦闘のあと、依姫つてば気を失っちゃって、たいへんだったんだよ？隊長も倒れちゃうし。・・・」

やっぱり、気絶していたらしい、いやちよつと待て・・・

「た。隊長が倒れたの!?、どうして!?今どこに!!」

なぜか、勝利したはずの隊長も倒れたらしい、私のせいだ。早く行かなきゃ!!

「お。落ち着いて。ただの貧血だつて。ほら刀が背中に刺さったまま戦闘してたから……」

「そうなの？命に別条はないのね?？」

「う。うん。依姫に気にするなつて伝えてくれつて言われたし、ただ本調子になるまでは時間かかりそうだから俺が復帰するまでは依姫が隊長をやれ!つて。」

「どうやら本当らしい、いつまでかかるかはわからないけれど、なら下手に能力を低下させるわけにはいかない。」

「わかりました!及ばずながら綿月 依姫。この第10分隊をこの都市1の隊にするべく、精一杯やり遂げます!!」

高らかに宣言し、私は隊員に練習の指示を出した。双覇さんがまかせてくださった以上生半可にはしない！

．．．．〈1ヶ月後〉．．．

〈双覇サイド〉

おれと依姫の戦闘から1か月がたった。

「どうやら、俺はあいつの実力を測りきれてなかったらしいな。」

あいつの実力はもう俺を超えてた。たまたま霊力の量が大きかっただけで、あと少しでもおれが瞑想を怠っていたらあの時切られてたのは．．．

「はあく。こんなんでもよく隊長とかやれてるよな〜。 ん？」

俺は永琳の家で、血を補給しながら漫画読んでた。ここじゃ妖怪になれないから回復も時間がかかる。

「どうしたの？さつきから喚いたりセンチメンタルになったりして？似合わないわよ

「？」

「永琳は今日も平常運転だ。」

「なあ。永琳。ロケットのエネルギー補給にどれくらいかかる？」

「俺はなるべく真剣に聞こえるように言った。」

「え？うーん、少なくとも1〜2時間かしら？でも、どうして？」

「永琳が問いかけてくる。1〜2時間か・・・」

「永琳。すぐにエネルギー補給をして、ツクヨミ様に例の計画を実行させてくれ。もうすぐ、ここに妖怪の軍隊が攻めてくる!!」

「まずい。本当にまずい！この妖気。1000じゃ下らない。下手したら10000
や」

20000は行く。しかもどこどころ大妖怪クラスまで。

「え？予測じゃまだ1年以上先のことじゃ・・・」

「おれを信じろ!!!このままじゃ死者も出る！急いでくれ!!!」

ただならぬ感情を込めて言うと、永琳は解ったわ。と言つて、準備にかかった。数分後けたたましいサイレンと共にあちらこちらで避難が始まる。

「よし。あとは、襲撃に備えていつでも相手できるように。ん？」

俺が外に目をやるとおそらく権力をもつお偉いさんと思われるおっさんに、先に乗り込もうとしていた女の子が殴られて、倒れこんでいた。

「あの。屑野郎が。。。 (ひゅん!!!)」

俺は、全速力でおっさんに近づき、はり倒した。

「な。なにをする!!!私はこの都市の防衛の要である兵器開発のプロだぞ!!!もし私が
けがをしたら誰がここを守るのだ!!」

おっさんが何かをわめき散らしている。

「あ?兵器の開発?そりやすげえや。都市の防衛の要?そいつはありがてえなあ。

だがよお権力に溺れて、てめえは今その守るべき市民を傷つけたんだぞ!!!

てめえが兵器とやらで守りてえのは形だけの国か!?それとも薄汚ねえ権力か!」

言いたいことを言ったら、おっさんはこの侮辱の罪はすぐに断罪してやる!と言って
ロケットに乗り込んだ。

女の子も「おにいちちゃんありがと!」と言ってロケットに乗った。奥に手を振る女の

人の影が見える。あの人の娘さんだろう。

「さてと。もうそろそろか・・・」

たぶん、もう軍勢がこつちからも見えるはずだ。その時。

「双覇!!早くあなたも乗って!!!もう目の前までやつらが迫ってる!!

そろそろ打ち上げもいけるから!!」

なるほど、燃料は補給できたらしい、だが。

「悪い永琳。月には、おれ抜きで行ってくれ。」

「はあ!!あなたなに言ってるの?ここに残ってたらあなた死ぬのよ?もう穢れを遮るのも不可能なのよ?」

そう。今回の月移住の大きな要因は、『穢れ』である。穢れとはこの地上に妖怪が増

えすぎたせいで生み出されたもので、これを浴びすぎると『老化』や『寿命』が出来るしまう。

だから、ここの都市の人は穢れのない月に移住するのだ。

「だからこそだ。」

思いつきり地面を蹴り。跳躍 永琳の前まで行き、妖力を開放し変化した。

「っ!!あなた。その姿は。」

困惑する永琳。俺は無慈悲に告げる。

「ああ。俺は半人半妖だ。穢れの原因である妖怪(おれ)がお前らと一緒に行ったら意味ないだろう?」

あくまで軽い口調でふざけているように俺は問う。

「私をだましていたの?。」

憤怒の形相で見上げる永琳。

「ああ。お前をだましていた。あいつらをここに呼んだのは俺だ。悪く思うなよ? こいつちも生きるのに必死なんだ。」

さも当然のように言う。

ばんっ!!! 左の頬に痺れるような痛みが走り、俺は茫然とした。

「早く。私の前から消えなさい!!! 汚らわしい妖怪め!! 貴様らなど私の頭脳の前では一瞬で塵にできるのだ!! 命が惜しくば去れ!!!」

永琳が絶叫する。中をのぞくとさつきのおっさんやツクヨミも乗っていた。

「ありがとう。永琳。今まで楽しかった。」

俺はほかの誰にも聞こえない声で呟き、その場を離れた。瞬間ロケットが1台打ち上

がる。

「あと。3本か。てことは10分くらいかな？そんなじゃ ほ!!!」

靈力を足に溜め爆発。一気に妖怪の軍勢に突っ込み先頭に居たなんか良く分からぬ
い獣妖怪の頭と体を天叢雲劍でばいばいさせた。

「きー貴様!!!なにをやる!!!お前もこの先の人間を襲ってたんじゃないのか!!!」
雑魚妖怪が喚く。

「うるせえよ。俺は半分人間の人間大好き妖怪だ！言ってもわかんねえとおもうけどな
!!!」

言うが早いか。全速力で駆けだし付近に居たモブ妖怪を蹂躪する。
突き刺し、頭と胴体をばいばいさせ、真つ二つに切り。

「な！なんだこいつ!!数で囲め!!!」

1人（1匹？）が指示をだす。確かに数をそろえるのは有効ではあるが・・・

「それは、相手が1対多の技を持ってない時に。だぜ！」

この場合。俺はもちろん数万の妖怪用に鍛えてきた。つまり！

「はあー！『回天』乱気流!!」

その場で足を地面にめり込ませ、思いっきり回転。切っ先からは靈力斬のおまけつき。

「ぎえー！ぐぎやー！びやが!!」

それぞれ特徴的な悲鳴を上げ次々に腹をがっばーされる妖怪たち。かわいそー（棒）

「よつと！そろそろ10分だな！ 永琳たちのがちようど打ち上がってくし。」

どうやら、時間稼ぎは無事に達成できたらしい。なら、

「もう周りの被害はかんがえねえぞ!!」

俺はラストに自分の80%ほどの霊力と妖力を一気に固めて、目の前の妖怪に思いつきり叩きつけ、上に飛ばした。

一瞬、激しく発光し次の瞬間爆発!!

「よし!はああああ!!結界!!」

自分も吹き飛ぶ直前に結界を張り、凌いだ。

「ん?上のほうでなんか変な音したような?まあいいや。」

・・・〈双覇サイドアウト〉・・・

・・・???サイド・・・

あの小僧は、どうやら都合よくこちらに注意が向いてないようだ。

「ふん！妖怪と闘ってるように見せるなど白々しい。私はこの耳でたしかに聞いたぞ！この目で確かに見たぞ！お前が妖怪だと言う事実をな!!」

「そうだ。やつは妖怪だ。人間の敵だ！ならば人間が排除しようとするのも自然の摂理だ。」

「この、わたしを馬鹿にしやがって！これでもくらえ!!!」

私は、ひそかに開発していた『核爆弾』を投下した。

永琳様の声が聞こえる。ツクヨミ様の声も。

「ほめてくださりますか!!!この私めが、人間の敵を排除しました!!!

え。処刑?なぜですか!!!

いやだ!いやだいやだいやだ!!!!

私の意識はここで途絶えた。

古代都市編終了！諏訪の国編開始！！

第13話―漂う先には諏訪の国!?

「ん！んう〜。くあああああ〜。よく寝た。」

あの日、永琳達が月に行ってから大分、月日が経った。いちいち覚えるのも面倒だし、この時代にはまだ暦もないので、よくは思い出せないが、

「ん〜、あの花が枯れて、咲いてを300回くらい繰り返した気がするから、もう300年経つのかな？」

ほんとに何もなかったな。この数百年・いつまでたつても人類はアイアイだったし、

「でも、それも今日までだ!!まだだいぶ遠くにあるけど村が見える!!つまり

やっとな人類が進化したんだ!!」

おれは、喜び勇んで猛ダッシュした。それはもう、足がもげるくらいに。でも、そのおかげでぎりぎり深夜あたりには付いた!

「あつるえくく??ここまでの距離100kmはくだらなかつたはずなのに。

おれの体。まじで人間やめてるよなあ・・・」

ものすごく泣きたい気分だった。いや、自分の体がどうに人間じゃないことや、化け物だつてことはわかつてるつもりだった。でも。ね?自覚するところもきついのか・・・

(なくにを馬鹿げたことにセンチメンタルになっておるのじゃ?ご主人さま。)

「うお!!だ。だれだ!!!」

(誰だ。とはなんじゃ。失礼な!数千年前にその身に封印したきり、解放せずとはどういう了見じゃ!!)

「ん？その口調？．．まさか、氷柱か？お前どこに居んだ？」

（やっと、理解しおったか。わしならおぬしの精神の中じゃ。さつさと瞑想して、わしをここから出してくれ。退屈で敵わん）

「オーケー。（すつ）えくと。氷柱が目の前に現れるイメージで．．．」

すこし、精神を集中．．。何秒かして目をあけるとそこには。

「ふうく。やっと出てこれたのじゃ。数千年ぶりじゃのーご主人さま。」

おれは、お。おうとだけ話して、背を向けた。冷静になってよく見たら、驚くほどに可愛かったからだ。そして、とんでもないほどの妖気。

「無意識の内に封印してて、よかった。こいつの存在をすこしでも解放したら、あの都市から追い出されるところだった。」

十祥磨が妬みで人殺しになるところだった。

「どうしたのかの? ご主人さま。わし。どこかおかしいかのおく……」

そう言った氷柱は上目使い十ウルウルと言う黄金コンボを炸裂させていた。

「いや、そうじゃないが……。ちよつと動くなよ?。」

忠告をして、氷柱のおでこに触れる。霜焼けしそうなほどに低い体温は、みるみるうちに熱を帯び、すっかり人間と同じ体温になった。

「なんじゃ? ぼかぼかするが……。なにをしたのじゃ?。」

その疑問に俺は答える。

「別に大したことはしてねえよ。俺の契約の力はなにも借りるだけじゃない。与えるこ

ともできるんだ。

お前には、人の証である『靈力』をお前の妖力を覆い隠すように、与えただけだ。この国は人の国。妖怪禁制だからなw。でも、さすがにばれるかも知れないからできるだけ、妖力を隠すように靈力の練習と妖力を隠す練習をしとけ？」

それだけだ。と話をまとめた。氷柱は一応、理解できたらしく「わかったのじゃ！」と元氣よく答えた。

その日は、深夜まで氷柱の特訓につきあい。朝方に眠りについた。

第14話—諏訪の国の幼女(?)な主。

「・・・つと!!。・・・よつと!!!。ちよつと!!!」

「ん?んうくく。なんだよいきなり?」

なぜか俺は目が覚めた時、見知らぬ幼女にお説教を・・・いや。

『見知らぬ』幼女ではなかった。

「なんだよ?もいきなり。もこつちのセリフだよ!!どうして朝起きたらよその人間が私の国の前で倒れてるなんて報告受けなきゃいけないのさ!」

そう言うと、彼女。この諏訪の国の守り神、災いをもたらす『祟り神』の頂点にして『土着神』の頂点。

『洩矢諏訪子』（もりや すわこ）は怒ってますと全身で表現するかのようにプンプンしていた。

「あ。えーと。す。すまない！俺は旅の者なんだがちと、道に迷ってしまったてな。

どこでもいいから、休める場所をさがしていたら偶然ここを見つけたってわけで・」

おれは、とりあえず。できるかぎりひねり出した嘘でなんとかごまかしにかかった。
（ちなみに危険を察知したのか、気づけば氷柱はもう居なかった。）

「ふくん。そっか〜〜。」

や、やった。ごまかし成功か!?

「もうちよつとましな嘘をついたらどう? 君のなかに微細だけど妖力が見える。つまり、力を隠して人間に化けてるけど、君は妖怪だ。」

「言え。ここに何をしにきた?」

直後、諏訪子の霊力。いや、神力か。が爆発的にあがった。

「やつぱり、俺が妖怪ということはばれてしまうか。俺はたしかに半人半妖だ。だが信じてほしい。俺はこの国に対し、何か害になるようなことはしない。もちろん民も襲わない。」

できうるかぎり、誠意が伝わるように、降服を象徴する土下座でなんとか許しを乞う

た。

「ふうん。しかし、言葉だけで信じろと言われてもねえ。なら　ふつつ!!」

諏訪子がおもいきり神力を上げる。俺の腕の上に巨大な鉄の輪が落ちてくる。

だが、あえて除けない。

『ぼきっ!!ベきベきっ!!ぐしやつ!』明らかに、無事では済まない音をたてて、おれの腕は四方八方に曲がっていた。

「んぐっ!!ぐっ。ふー。ふー。」

たまらず呻き、荒い息を繰り返す。そのうちに、限界が来たらしく、俺は意識を手放した。

・・・〈少年意識回復中〉・・・

「ん?なには・・・どこだ?」

ふざけているわけではなく、まじで知らないところだった。目が覚めたらどこか見知らぬ建物の中に寝かされ、傷も治療されていた。

「あ!目が覚めましたか?よかつた~~~~」

かわいらしい高い声がする。もちろん、諏訪子じゃない。

髪は緑で早苗に近い風貌だけど、若干この人のほうが年上っぽい。

「あの?どちらさまですか?」

俺が聞くと「あ。失礼しました」と正座でかしこまり、

「私。この諏訪大社の巫女をしております。東風谷翡翠（こちや ひすい）と申します。神に仕える者のお仕事は大変ですが。」

これから、よろしくお願いいたします。」

笑顔で、俺にそう言った。

「は？俺が神に仕える!!?!え!!?そりやおかしいだろ。だつておれは!!」

その瞬間、うしろの襖をびしゃんつ！と開け誰かが・・・いや、一人（一柱？）しかないか。

「いやゝ。今朝は疑つてすまなかつたねえ。『旅人くん』今日から君をこの神社の者として、一緒に暮らすことにしたからさ。それで勘弁してくれないか？」

一応、悪いとは思ってくれてるらしい。しかし、いくら向こうから誘われたとはいえ

妖怪の俺が神社に身を置く?なんか変な話だな。まあいい。

「とりあえず。これからお世話になります。諏訪子さま。翡翠さん。おれの名前は『白雲双覇』です。双覇とお呼びください。」

こうして、俺の諏訪の国での生活が始まった。

第15話―諏訪大社の優雅な一日（一部を除いて）

「ほつ。ほつ。ほつ。ほつ。ほつ。ほつ。」

どういわけか、諏訪大社。ひいてはさつきから茶の間で茶を啜ってるこの洩矢神に仕えることになってから、

おれの生活は激変した。

「諏訪子様。そろそろ民に挨拶をする時間ですよ。いい加減だらけてないで正装してください。」

朝。まずはミジャグジ様と呼ばれる、土着神・崇り神にご飯を与える。

ミジャグジ様は、サイズがおかしい白い蛇の様に見えるが目は完全に無かったり大分エイリアンっぽい風貌だ。こりやみんなに怖がられるわな。

次に、社を隅から隅まで掃除する。特にご神体は汚れもなさそうなのに毎日。

ぴっかぴかをさらにぴっかぴかにしろ。と言うのだから諏訪子様も人使いが荒い。次に、毎日の習慣である瞑想。これは絶対に欠かせない。

次に、朝食を作り、最後に洩矢神と翡翠さんを起こしに行つてやつと朝の仕事が終わる。

「だから、必然。毎日3時起きになるわけで・・・」

の 言つて肩を落とした。こんなことをぼやいていても仕方がない。翡翠さんはこの辺

妖怪退治も受け持つてるんだし。

「おれが。多少キツくても俺がやるべきことなんだ!!」

そんなこんなで、ここに住み始めて10年が過ぎ去ろうとしていた。翡翠さんにも少しずつ大人の風格が付き始めて来ていた。

「おれと諏訪子は全然歳をとらないけどなあ〜。」

俺が、縁側で休んで日向ぼっこをしていると向こうから翡翠さんがやってきた。

「ふふ。それにしても、神様と『妖怪』さんって良いですね〜。歳をとらなくて。

私も女性ですから結構きにするんですよ?」

ふざけたように軽い口調で言う。

「いやいや、寿命が長いってのも暇が多いだけですよ?それに翡翠さんはまだ若くて美しいじゃないですか。あ。」

俺は、うつかり口を滑らせてしまった。気づいたときにはもう遅い。

翡翠さんは妖怪退治が仕事なのだ。半妖だろうと関係ない。

「え。え〜とすいません!確かに僕は半分妖怪です!け。けどこのみんなを襲う気は全然なくて!」

「どうなされました？ 諏訪子様。私たちや民にも関係のあることですか？」

おれは一応。わかつてはいるが確認のために聞いておく。

「と。ととと、とんでもないことになったよ~~~~!! 双覇~~~~。」

なにやら、諏訪子が紙を突き出しながら歩いてくる。

俺は泣きじやくる諏訪子を抱きしめ宥め、書状を読む。

「えくと？」

『このたび、我ら大和の領土拡大のため諏訪の国を貰い受ける。

抵抗するならば、大和の全勢力を持つての強襲も止む無し。

民のことを重んじるならば、賢い選択を心より希望する。

大和の神々より。』

ほ~~~~う~~~~
????」

なんかもう。いろいろ命令口調だったり、相手を見下してる感じがすごく気に入らなかつた。

「そ。。双覇？。。。。」

「そ。。双覇。さん？。。。。」

翡翠と諏訪子が何かに怯えたような口調で俺を呼ぶ。

「諏訪子様。翡翠さん。おれ、ちよつと大和の神のところに行つてきます。いろいろと話がしたいので。」

おれは、それだけ伝えてすぐに全速力で大和に飛び去つた。俺の速度なら1時間ほどで着くさ。

「な。なんだ貴様は!!どこの者だ!」

着地のときにスピードが思いのほか下がらず、一気に爆音が鳴ったため、門番に気付かれた。

「うるさい！ 諏訪の国の使者だ。早く案内するかこの書状を見せてこい。」

一応、客は客なのでしぶしぶといった表情で案内された。

「おい!! 諏訪の国のものだが。この書状を書いたのはどこのバカだ!!」

俺が、扉をぶち破った先には、大勢の神がいた。

中には、アマテラス、『八坂 神奈子』（やさか かなこ）

と言った見知った神から、見覚えのない神までびっしり。

「あら？ あなたは白雲双覇さん。ではありませんか？ お懐かしいですね。」

そう言つてアマテラスは微笑みながら話しかけてくる。

「今は。んな事聞いてんじゃねえ!!! 諏訪の国に対する無条件降伏の脅迫状について聞いてんだ!!!」

思いつきり怒声を響かせる。

「え？脅迫。ですか？失礼、双覇さん。みせて頂けますか。」

俺は、書状を手渡し、アマテラスはそれを確認。すぐに顔が憤怒に変わり、

「多岐都比売命（たぎつひめ）!!!この書状に関してはあなたに一任したはずです！

この文はどういうつもりですか!!!」

キレるアマテラスに対し、あくまでも冷静にむしろおちやらかしたようにタギツヒメは言い放った。

「ええ。私に一任されました。ですので、そこに書かれているとうりの文をしたためましたがどこがおかしいですか？」

さも、当然のように応え続ける。

「だって、あの程度の小さな小国に情けをかけるだけ無駄というもの。もちろん民はのこしますよ、信仰が得られませんから。ですが低級な神については消えて頂きますけど。」

ぶちっ。頭の中で確実に何かを外れた。目の前で笑いこけてるこのバカ女神だけはゆるせねえ。

「その、薄汚ねえ口を閉じろ。馬鹿神が!!!」

「はあく？神に対し暴言とは小国の民はとことん頭がおかしいのね。それともそこを納める諏訪の神が無能なのかしら？」

だんっ!!!俺は一瞬で接近し、天叢雲剣を抜き斬り伏せた。が

キーンツツツ無残にも、一人の男神によつて防がれた。

「てめえ!!何しやがる!!!」

おれが叫ぶと、男は

「このたびの書状。こちらも知らなかつたこととはいえ、すまなかつた。だが、彼女を君に斬らせるわけにはいかんだ。」

そう言うと、男はくるりと振り返り、剣を構え振り下ろした。

女神のうめき声が響き、女神は消えうせた。

「これで、許してはくれないか?不服なら、私をバラバラにしてくれても構わない。しかし、タケミナカタとアマテラス様には手をださないでくれ!」

男は地に伏せ、許しを乞うた。

「よせよ。神が半妖なんかに許しを乞うてたら民に顔向けできないぞ。まあ。この件は水に流す。ただし、条件だ。」

タケミナカタ。お前と洩矢神の一騎打ち。民を狙おうとするならおれが容赦なく殺す

同じく、洩矢神を民からの信仰以外で殺した時も殺す。

わかったな。」

タケミナカタ（神奈子）と男。アマテラスを睨みつけ、丁寧言葉紡ぐ。

「わかった。勝負はお前が決めたルールでいいだろう。洩矢神にもよろしく伝えておいてくれ。」

男神は力強く宣言する。

「わかった。お前とは一度じっくり戦いたいもんだな。」

男神はそうだな。と自嘲気味に、神奈子もわたしもだ。とつぶやいた。

俺は、まっすぐに諏訪へとかえって行った。

第16話—開戦!諏訪大戦。

俺が大和の神々に喧嘩を売ってから、数か月が経った。その間諏訪子にちよつかいを出すやつはいなかったが、何回か建御名方(タケミナカタ)。

つまりは、八坂 神奈子がここを訪れた。武神としてタギツヒメの暴走は目に余る。このことだ。

「あはは。でね。この前防衛団長の家でさく。」

「なんと。それはほんとうか!? あっはははは!!」

居間のほうから2人の声がした。そう、なぜかものすごく仲良くなってしまったのだ。

前に一度「そんなんで、戦闘なんてできんのか?」と聞いてみたところ。「当然!私の力を大和に見せ付けてもうなめられないように叩きのめすよ。」

「無論。武神である以上、だれが相手でも戦うときは全力で決める。親しき仲であろうともな。」

と2人とも意気込んでいた。

「はあく。八坂様。もうお帰りの時間ですよ？それ以上居るのならこちらの内情を探っているともみなし攻撃しますよ？」

「わかった。わかった。それじゃあな諏訪子。明日の試合全力で行かせてもらおう。」

かなりの威圧で言った神奈子に「いいよ。」と軽く答えた諏訪子。

おいおい、中級クラスの妖怪だったら消滅してたぞ。

「おれも、軽く冷や汗かいちまった・・あれでもまだ本気じゃねえんだもんな。」

大丈夫か。諏訪子？と言おうとしてやめた。我らが洩矢神が珍しく真剣に瞑想していたからだ。

「ふ。あれなら大丈夫か。ならおれはおれで修業するでしょう。」

最近、俺はある修業をしている。それは優華の能力「霊力を変換する程度の能力」の習得だ。

「と。言っても優華とは契約してないから、完璧につかいこなすのはむずいだろうな…」
霊力を腕にまとわりつかせるイメージで、それに形を与える。

「ふっ!!……………」

だ
ある程度の器を作って一気に流し込み生成する。これが優華から聞いた能力の全貌

「ん?これは?… 弾丸!!」

いつの間にか握りしめられていた。青白い弾丸。

作ってすぐに消失したが。

「よっしやあああ!!!ようやく霊力弾の形状変化できたー!ー!ー!!!」

「んもう!うるさいよ!双覇。いったいどうしたのさ?」

あ。叫びすぎた。諏訪子の修業の邪魔したら元も子もないよなあ。

「ああいやすまん。邪魔しちまったな。ちよつと霊力の形状変化の練習をしてたんだよ。」

気まずそうに答えると。

「霊力の形状変化?そんなのかんたんじゃない?」

そんな爆弾発言をかまされた。

実際、俺は霊力の扱いそれも形状変化が下手だ。その人のセンスもあるし、原因はいろいろ考えられるが、俺の場合は・・

「ああ。確かに楽なほうだろうけどな。俺は能力で人の才能を自分と結びつけられるからな。必然的に自分自身は技能にすぐれないのさ。」

俺の答えに諏訪子は、ふうくんそんなもんなんだー。とどこぞの闇妖怪顔負けの棒読みで去って行った。

「んたくつ! あいつ。こんなすぐやめちまったけどほんとに万全なんだろうなあ。ま、本人に言ったら試してみる? とか言われそうだけだな。」

実際、俺は半分妖怪なので神と戦いたくはない。いや、諏訪子はそんな肉弾派じゃないけどね。

「あいつ、なぜかずっと酒勧めてくんだよなあ。勝負だ！つて。」

そう、あいつの勝負は飲み比べだ前に一度安請け合いしてお神酒を飲まされ、酔いで死にかけてことがある。

「まあ、妖怪だから普通の酒や妖酒は飲めるんだがなあ・・・」

その日は結局ずーっと瞑想をして夜を明かした。

・・・〈次の日〉・・・

「ふわぁ〜あ。さて!行くとするか。」

俺はある人から呼び出しがあったため現在諏訪子とは別行動で国の門のほうに向かつて飛んでいる。

「あの、寝ぼすけ神様の諏訪子が早起きして先に行ってるなんて今回の戦いに相当賭けてるんだなあ。」

ま、そりやそうか。さてそろそろ見えてきたな。

「お〜い!建御雷神(タケミカヅチ)。こんなお互いの一世一代の日に何の用だ?」

「おお、双覇。確かに建御名方神(タケミナカタ)と洩矢神の戦いも重要だが、

こつちはもつと重要な話だ。」

この、男神がタケミカヅチ。雷と剣。武の象徴である2つを司る神だ。

あの、タギツヒメの一件以来気にいられて結構仲良くしている。

「重要な話？俺に関係してるってことか。」

俺が聞くとああ。とうなずき、

「お前。神になってるぞ？それもかなり格の高い神に。」

そう答えた。
はあ？

「あのなく。お前も知つてのとうり俺は半人半妖だぞ？妖怪なんて、神の対極だ。それなのに、どうして神に為れる？」

俺が半妖であることはタケミカツチには一瞬でばれた。武神なら当然。とのことだからたぶん神奈子にもばれてると思う。

「はあ。そんなこともわからないのか? いいか。種族的に言えばむしろ、人間が神になるほうがおかしい話だぞ。」

「そ、そうなのか?」

「ああ。仏はともかく、神は修業した人間よりむしろ強力な力をもつ妖怪のほうがあり得ることだ。むしろお前は神になる素質を最初からもっていた。」

俺に神の素質だと。まさか

「『契約を司る程度の能力』のことか。」

「そのとうり。この世界の八百万の神の中には森羅万象を左右するような、とんでもない神から、俺みたいに特技を伸ばして神になったものもいる。」

そして、一拍置いて、続けた。

「お前は、前者だ。契約ということはすなわち万物における『結びつき』の概念そのもの。ゆえに神としてのお前の名は『結神』（むすびがみ）だ。」

そう言つて、タケミカツチは1つの黄色い球を差し出してきた。

「それは、私の神力だ。取り入れて自身の神の力を解放すると良い。必ず役に立つてくれるはずだ。」

「そうか。ならありがたく、使わせてもらおうぜ。」

俺は黄色い球を取り込んだ。次の瞬間。

へおめでとうございます。あなたは半人半妖の現人神となりました。

現在、あなたの能力は『結を司る程度の能力』です。∩∩

どこか、無機質な感じの声の頭が頭に響き俺の意識はそこに吸い込まれていった。

番外話―能力などまとめ。

びっくりした。双覇居たの？

双「お前が能力の説明のために呼んだんだろ？」

まあそうだけど……。いかんいかん!!脱線した。それじゃまずは双覇の新能力から
いってみよう。

双「あいよ。確か『結を司る程度の能力』だったか？1つになっちゃったんだな。」

まあ、そうだけどがつくりしなくても2つを合わせたような能力だよ？

んじゃ説明にいかがか！

『結を司る程度の能力』（ゆいをつかさどるていどののうりよく）

双覇が現人神となり、新たに覚醒した能力。神名は『結神』でありその名の通り万物

の結びつきを操れる。

自身と移動場所を結びつけ移動したり、逆に自分と何かの繋がりを断ち切れる（自然法則や、相手からの不満など。）

また、いままでに繋がりをもった者の能力や力はこれまでどうりに使えるが、契約のときとは違い、相手が自分に対しどこまで信じているかで使えるランクが異なる。

神になった所為か、周りの人とのつながりが見えるようになった。そのため神としての仕事はほぼ縁結び。

こんな、感じかな。

双「なんだこの、チートとチートを足したら案の定超チートになりました〜。みたいなの。」

まあまあ。自分が強くなるんだから良いじゃない。

双「まあ。弱くなるよりは良いけどさ。それにしたって縁結びはひどくね？」

まあな。俺もものすごく嫌だけどさ。結神って名目上そういうのしか思いつかないもん。

双「しょうがねえな。・・・はあく。」

そんなにかよ・・・。気を取り直して次は原作キャラ2人！いつてみよー！！

洩矢 諏訪子 土着神の頂点

『坤を創造する程度の能力』

坤（こん）とは八卦における大地の意であり、大地に関するさまざまな事柄を創造し操れる能力。

まさに土着神の頂点の力である。

八坂 神奈子 山坂と湖の権化

『乾を創造する程度の能力』

乾（けん）とは八卦における空の意であり、諏訪子と対極の能力である。

「詳しい内容は判明していないが、おそらく諏訪子同様空に関すること雨乞いや突風などが行えると思われる。」

こんなかんじかな。

双「にわかだから全部調べてたけどな。」

余計なこと言うな〜〜〜
はあ。じゃあつぎ。タケミカヅチいつてみよ〜。

タケミカヅチ 雷鳴轟く大和の剣

『剣と武を司る程度の能力』

神剣、神刀、妖剣、妖刀、霊剣、霊刀。名刀から神代のものまですべての剣を作り出し使いこなすことができる。

また、武の力では古来より武の象徴とされてきた『雷』を操り、自身の身に纏い雷速で体術を繰り出せる。

こんな感じですよ。

双「ふくん。武を司ると言っても近代武力の象徴でもある銃や重火器は使えないんだな。」

ああ。と言っても神剣とかのほうが銃なんかよりよっぽど脅威だと思いませんか？

双「だな。んじゃそろそろ終わるか。」

おう。これで能力の説明が終わります。

第17話—決戦!!諏訪大戦!

……〈諏訪子サイド〉……

私は、諏訪と大和のちょうど中間にある野原で神奈子と相對していた。

「やあ。神奈子! 負けたときの心の準備はちゃんとすませてきたのかい?」
強がってみるけど、たぶんわたしじゃ神奈子には勝てない。

相手は武神。こっちは崇り神。

「それは、こっちの台詞だよ! 諏訪子。お前こそ負けた時にいつものように泣くんじやないぞ?」

神奈子も挑発を。いや神奈子のほうは事実か。……

でも!!

「それでも!!私は諏訪の国を治める者として負けるわけにはいかない!

来なよ!タケミナカタ。武力じゃ克服できない崇りの力をみせてやる!!!」

渾身の力を込めて言い放った。

「そうかい!なら遠慮なく全力でやるよ!諏訪の神よ!!」

神奈子が御柱（オンバシラ）を出現させ殴りかかってくる。

「はあ!!! 喰らわないよ!!!」

ガキイイイ!!! と鈍い音が響いて私の生み出した鉄の輪が御柱を遮る。

「現段階で作れる最高峰の鉄だ。壊せる物は存在しないよ!」

カウンターで思い切りたたきつける。

「そうかい!! ならこれでどうだ!!!」

神奈子は跳んで回避し、雨のように神力の弾幕を降らせてくる。

「なんの!!!」

「がはっ!？」

はじいているうちに謎の衝撃を喰らい、前のめりに吹っ飛ぶ。

振り向いた先には御柱が突き出されていた。

「まだまだ。行くよ!!! 『神祭』 エクスパンデッド・オンバシラ!!!」

無数の御柱が襲いかかってくる。

「負けるかああああああ!!! 『崇符』 ミジャグジさま。」

崇りの力をすべてぶつける。諏訪の国の民のために絶対に負けられない!!!!

.....

.....〈諏訪子サイドアウト〉.....

．．．．〈双覇サイド〉．．．．

「ん。ここは、えくと確か．．．」

暗闇に飲み込まれた意識が目を覚ましたのはどこかで見たような真つ白の空間だった

??? 「よう。双覇元気にしてたか? いや、今や『結神』か?」

どこか厳格なそれでいて気さくな声が聞こえた。この声はたしか．．

「あれ。イザナギじゃないか。ここは転生の間か? どうしてこんなところにまた来ちゃまったんだ?」

そうだ。思い出した確かここは

初めに来た転生の間だ。でも2回死んだわけでもないし、そもそも2回目の転生とかは聞いてないのだが．．

「ああ。別に死んだから呼んだわけじゃない。どうやらお前らとはまた違った方法でこつちの世界に來ちまったやつがいるみたいだから教えといておこうと思つてな。」

微笑し、イザナギは「それと。」と続ける。

「お前が新たな神となつた祝いに能力をやろうと思つてな。」

は？ いやいやいやおかしいだろ。もう俺十分すぎる能力をもつてるし。

「安心しろ、新しくやるつてわけじゃなく記録するだけだ。お前の『能力』に俺の『能力』をな。」

そもそも、新しく能力を作るのはイザナミの仕事だ。
と笑いながら言ってくる。

「ん。まあそういうことなら・・・」

了承し、握手する。

「あれ？新しく追加された感じがしない。」

契約のときはそんな感じがあったのに。

「おい。お前の霊力と俺の霊力を結び合わせるイメージでやってみろ。」

イザナミに言われたとうりにとりあえずやってみる。

「ええくと。『結ぶ』『結ぶ』。」

うおー!

一気に霊力が上昇した。これが祖神の力か・・・

「よし。契約完了だな。それじゃ、後はまかせたぜ？」

その言葉を合図に景色はもう一度暗転。

「・・・は!!、・・・うは!!、双覇
!!!!!!」

目の前にタケミカツチがいた。

「わりい。ちよつと気失つてた。んでどうした? そんなにあわてて?」

「それが、先ほどタケミナカタ達の戦が終わり傷ついた双方を治療しようとしたのだが、天界よりスサノオが現れ、大変なことになっておるのだ。」

「なんだ?! スサノオ?! 最高クラスの武神じゃねえか。」

「それで!?今スサノオはどこにいる!!諏訪子と神奈子は無事なんだよな!」

焦って問いかける。まずいぞここで2人が死んだら原作が変わる。

この世界が変わってしまう。

「お前こそ、落ち着け。2人は無事だ。だがスサノオの力の前では私も無力でな。今は姉君のアマテラス様が応戦してるのだ。」

頼む!アマテラス様をお守りしてくれ。スサノオを止めてくれ!」

スサノオは確か、『万物を断ち切る程度の能力』か。

強敵だがやるしかない。

「まかせろ。俺がスサノオのバカ野郎をとめてやる。タケミカツチは諏訪と大和の防衛をやれる範囲で任せる。」

タケミカツチがおう。とうなずいたのを確認し、アマテラスの神力を探る。

「見つけた!! 『結い』 — 結神 + 太陽神」

自分と太陽神の間隔を結び、一気にその場から消える。

「大丈夫か! アマテラス!!」

そこに居たのは。

血だらけのアマテラスと
同じく血だらけのスサノオだった。

第18話―神代の絆!戦に生きし結神。

「白雲双覇か。ひさしぶりだな。その様子だと父上が案じておられたとうり、神に目覚めたか・・・。」

どこか、冷たい口調でスサノオが話し掛けてくる。

放っている殺気には妖怪を退けようとする神の物ではなく、何もかもを飲み込んでしまいうような妖怪の力がこめられていた。

「お前、妖力に吞まれやがったな。昔から責任感が強い奴ってことはわかってたけどお前一人でしよい込みすぎるなつてんだよ。」

俺も人のことは言えないか・・・。都市にいたころも良く永琳に心配かけてたし。でもまあ、今は。

「双・・・覇・・・さん。」

「大丈夫か？アマテラス。あいつに一体何があつた。確かに一人の神が狩るにしては妖怪を狩り過ぎてはいたが。それでもあんなになるまでじゃなかったはずだ。」

それに、あいつには万物を断ち切る『天叢雲剣』がある。可能性としては断ち切るのが間に合わないほどの量の妖力を一気に浴びたか・・。

「わ・・私の所為です。スサノオはあなたと別れてからしばらくしてすっかり乱暴者の傲慢な神になってしまったのです。」

それで、自分の傲の深さを知らしめるため下界に送り八岐大蛇（ヤマタのオロチ）という怪物を退治し人間に感謝されることで神としてのあるべき姿を取り戻させようとしたのです。。。」

アマテラスは俯き泣きそうな顔をしている。

俺はアマテラスの傷に能力を使い治療を施した。そして続けた。

「結果は失敗。むしろ他の神と違い何も司っていない自分への負い目を暴走させて

大蛇に乗っ取られたか。」

はい。と悲しそうに答えるアマテラス。

「たく。スサノオ!てめえの信念は。てめえの目標はその程度の絶望で壊れちまうようなもんだったのか。

そうだ。と言うならもうお前を神とは見なさねえ。悔しかったらてめえの信念を俺にみせてみやがれ!!」

俺はアマテラスの周りに結界をはり、スサノオに呼びかけた。

「うるさい。うるさいうるさいうるさいうるさい!!!」

お前に何がわかる!?元より神として生まれ、絶対的な力をもつおまえが俺の何をわかるというのだ!」

スサノオが怒り狂い襲ってくる。

「わかるさ。悔しいんだろ?苦しいんだろ?家族を守るためにつけた力がいつしか国を守る戦力として扱われ、あまつさえ家族には下界へ行けと命じられる。」

寂しかったよな？ いまも自分を見失ってるだけなんだろう？
なら俺が教えてやるよ。」

「黙れ!!死ね。この世にはびこる悪しき妖怪よ!!!」

スサノオが天叢雲剣を構えて上段に切り込んでくる。

俺はよけない。

ズブシヤアアアアアアアという音が耳元で聞こえ右腕がずり落ちる。

今にも意識が遠のきそうだがこらえて、眼前のスサノオを強く見る。

「お前は!!須佐乃袁尊だ。最強の戦神でも、妖怪を殲滅する者でも最高戦力でも無い!!
ただの!父親を尊敬し、姉に頭が上がらず、母親のように優しくなろうと思ひ。」

家族が大好きなスサノオのミコトだ。」

スサノオの動きが止まる。頭を押さえ、懸命に闘っている。

「今だ! 『喰結び』 結神—八岐大蛇。」

『喰結び』は一方的に引き寄せる。指定したものを相手から引き寄せ譲り受ける。

しばらくして、スサノオの顔には穏やかな表情が戻っていた。

「ん・んう。は! 双覇さん! すみません! 俺が弱いばかりに大蛇に呑みこまれてしま
い。・・・」

「良いよ。そういうことは誰にでもあることだ。自分を見失いだれかに当たってしまい
孤独に耐えられなくなる。」

それは、神だろうと人間だろうと妖怪だろうと変わらないことだ。

だから・・・」

スサノオによく聞いとけよ? と行って続ける。

「だから。俺たちは『繋がる』んだ。たとえ傷つけられても、傷つけても許しあえるよう
に、そしてその人の道を照らしだせるように。」

もう二度と、家族から離れるなよ? お前は一人で戦ってるんじゃないんだ。」

アマテラスも遠ざけてばかりですみません。と謝り、スサノオはアマテラスとイザナギ、イザナミを守護することになった。

「双覇さん。今回は本当にありがとうございました。」

これ、『天叢雲剣』草薙の剣と名を変えましたが、僕の万物を断つ力が込められたものです。双覇さんの使いたいようにお使いください。」

スサノオは剣を献上するようにそう言った。

「受け取りたいのは山々だけどな。それはお前の相棒だろ？」

ならこつちもそれなりに覚悟をもって受け取らなきゃな。どうだ？」

試合でもしないか？」

スサノオはぜひ！と答え、俺と距離をとった。

「スサノオ。迷いのないお前ならどんなものでも切れるはずだ。本気で来い!!」

はい！と返事をすると同時に俺は能力を発動。スサノオとの距離を0距離で結び

殴りかかる。

「おらあ!!!おらおらおらおら!!!」

そのまま連打。スサノオはそのすべてを見切り剣ではじく。

「いまだ!!!ていやあ!!!」

あれ?」

切りかかろうとしたスサノオの腕は動かない。当たり前だ普通に剣を振ろうとして

人。一人分の重さは振りおろせない。

「殴ってる最中にお前の剣と拳を結びつけたんだ!!

そろそろ終わらせるぞ!!!」

俺の腕に風が集まる。そよ風は強風に突風に台風にと繋がっていく。
この能力の必殺技。パート1ってとこかな？

「くっ！あれを喰らうのはまずい!!!」

バツツツと飛びのき避けようとするももう遅い。

飛びのくスサノオに手を牽かれるように、俺の体は同じ軌道で宙を舞い着地と同時に
足に集中させていた霊力を爆発。

「喰らえ!!! 『風衝』 風結び!!!」

スサノオの体に台風を纏った掌底を叩き込み、
吹っ飛ばした。一応一撃喰らったら負けってルールだから

「俺の勝ちだなスサノオ。 いやゝ。能力の良い練習になったよ。
もっと応用が利きそうだけどな。」

にっ!と笑って話しかける。

「そうですね。では。約束どうり受け取ってください。

『草薙の剣』（かちや）

スサノオのほうは衝撃を断ち切ったらしくノーダメージだ。

俺はおう!と言って受けとり抜いてみた。鞘から解き放たれた姿は見事な光沢を放ち、見る者すべてに圧倒的な威圧感を与えた。

「お。こいつは俺と相性抜群だな。ありがとな。スサノオ」

礼を言うとのあの、相性って?と聞いてきた。

「ああ。なんか神力に目覚めてからいろんなものの相性が見えるようになったんだ。もちろん生き物もな。たとえばスサノオ。お前最近恋してるな?!”

スサノオは一気に表情を変え、何を馬鹿な!と言ってきた。

「結神は縁結びの神らしいな。お前から桃色の線がまつすぐ大和のほうにのびてるから人間にでも惚れたか？」

スサノオはさらに顔を赤くしてさつきと去ろうとした。

まあ相手が櫛名田姫（クシナダヒメ）であることは古事記で知ってるんだが。

「安心しろ。その恋は実るよ、お前のほうにも伸びてるからな。大切にするんだぞ〜〜!!。」

正確には、俺が少し介入してちよつと興味ある。程度だったクシナダヒメの線を気になる。もう一度会えたらなあ位にランクアップさせたのだ。

「でも、うれしそうだし別に悪いことはしてないよな。」

夕日に照らされ、去っていくスサノオたちを見送り俺は諏訪の国に戻ることにした。

「あ。腕くつつけとかなきゃ・・・。」

第19話―流れる浮き雲。諏訪を経つ

俺はスサノオに切られた腕を細胞同士で『結んで』修復（ちなみにアマテラスの治療も細胞に植物の『成長』の概念を結びつけた。）

「ま。手元に概念を象徴する『なにか』が無いとうまくイメージできないのが難点だな。」
ため息をつきながら諏訪の国に飛んでいく。諏訪子は無事だろうか。……

「ああ!! 双覇〜。お帰り〜〜!!」

居間でミカンを食いながらうちのバカカエル神が神奈子と談笑していた。

おれ? 思いつきりこけたよ? そりやね身の安全を心配した神様がすげーのんきにこつちや来いってやってるもん。

「あのな〜。諏訪子。俺がどんだけ心配したと思つてやがる。」

んで? 結果は・・・あ・・・」

諏訪子の手元には赤茶色に錆切った『鉄の輪』と『蛙』と刻まれた文様

「負けちゃった！　すごいんだよ！！神奈子が空に手をかざすとさ・・・。」

雨がザーザーと振ってきてさ、全部錆ちやっつて。。。」

諏訪子は笑顔で神奈子をほめたたえる。しかし、こいつは俺が神になったことを知らない。

本当の感情は・・・。

慰めて……。か

「諏訪子。良く頑張ったな。もう泣いて良いんだぞ？神奈子の神力は俺でもビビっちゃまった。それにお前は立ち向かったんだ、もう弱音を吐いていいんだぞ？」

俺がそう言っただけで瞬間諏訪子は泣いた。

「うわああああああん!!!勝ちたかった!!みんなのために勝ちたかったよ!でも駄目だった。ごめんごめん!!!」

俺はそうか。頑張った。と声をかけながら泣きやむまで撫で続けた。

しばらくして、泣き疲れ眠ってしまった諏訪子を寝所に運んだ俺は神奈子と向き合っていた。

「んで？さつきお前らは何で悩んで話しあつてたんだ？」

「ああ。実はな・・・」

話をまとめるところだ。

1、諏訪子に勝つたため神奈子がこの国の信仰をいただきたい。

2、しかし、民たちは土着神であり崇り神であるミジャグジ様を恐れどこから来たかよくわから無い神奈子は信仰出来ないという。

3 どうしようか？

こういうわけだ。しかし簡単な話だ。少なくとも原作を知つてる俺には。

「なら、お前ら2人でこの土地を納めれば良いじゃないか？」

たとえば表向きは神奈子が妖怪を討伐したり、民の願いを聞いたりして信仰を募る。

でもミジャグジさまの力もきつと必要だ。そこでミジャグジを操れる諏訪子は裏の神となり、神奈子にはかなえられない願いを担当する。

「これでどうだ？」

神奈子は2、3度うんうんとうなずき

「それならば、諏訪子も消えずに済む！ありがとう。双覇！」
と声を荒げて喜んだ。

やつぱりここまで、仲の良い友達同士を離すもんじやないな。
ちなみに俺の能力で見える線は〈暖色系〉と〈寒色系〉がある。
暖色は良いイメージであいつらの間に見えるのは、

「『黄色』友好と信頼の象徴。か」

最初はいがみ合い、命掛けの戦いをしたはずなのにこの色は奇跡に等しいレベルだ。
素晴らしいね。

「ん〜。何か言ったの〜。双覇・・・。」

目をこすって諏訪子が起きてきた。あたりはもうすっかり暗い。

よし！ならここは！！

「なあお前ら？ここはこの出会いを祝して、宴会をしないか？」

「宴会？？？！！！！」今日は朝まで飲み明かそうよ！（明かすよ！）！！

しかし、この時『結神』は気づいていなかった。神が飲む酒はお神酒であり、この人はとんでも無い酒豪であることを。

その晩、諏訪大社に響いた声

「も、もう無理~~~~！！」

「や、やめてくれ！くるな。くるな~~~~！！」

「消える。・・・存在自体が消滅する・・・。」

すべて、双覇である。

．．．．夜が明けて

「ふう〜。昨日は散々だったな〜。頭がガンガンする．．。
さて、諏訪子たちにはわるいけど俺にはほかのどこよりも行きたいところがあるんだ

！
」

俺、白雲双覇は旅仕度を整えていた。おそらくもう生まれてるであろう。
『あの人(?)』に会いに行くために。

「お世話になりました!!置き手紙も置いたし。。。さつさと出発するか!」

この日。半人半妖の現人神 白雲双覇は飛び去った。
次なる目的地は『とある山』

.....
〈双覇サイドアウト〉.....

.....
〈神奈子サイド〉.....

「．．ああく頭が痛い。昨日飲みすぎたかねえ．．ん？」

朝、痛い頭をあげて起き上がると謎の置き手紙があつた

「なになに．．？」

『拝啓 神奈子、諏訪子へ

突然だが、俺は旅に出ることにした。こつちは気ままに元気にやるから心配すんな！
それと、2柱のために新しい神社の名前を考えてやったぞ！

『守矢神社』かっこいいだろ!!

それじゃあな！また抛るかも知れないからそんなときはよろしく。

たぶん、先に読んでんのは神奈子だろうから諏訪子によろしくな！

白雲双覇より』

ふ〜ん。何にも言わずに行つちまったのかい。

ほんと雲のようなやつだね〜。」

私にはやつつく口元を押さえ諏訪子を起こすことにした。．．．

諏訪の国編終了！ コラボ！ 知識と結の二柱編スタート

!!

第20話—知識を司る絶対神。

「はあく。もう3日も歩きっぱなしだぞ。どうなってやがる。」

目の前に見えるでかい山は通称『妖怪の山』天狗や鬼といった超強い妖怪が暮らしている。そんな山だ。

「うーん。速度的にはもうとつくについてるはずだ。なのにつかないってことは・・
もしかして！」

俺は『結い』の能力で自分と妖怪の山を物理的に繋ぎ、距離を一気に埋めようとした。
結果は・・・

失敗。

「てことはやっぱりそうか、繋いだはずの距離が埋まらねえってことは、
そもそも距離の概念が働いてねえな！」

そして、そんなことが出来るやつと言えば・・・。

「おい。どうせどつかで見て楽しんでんだろ？ふざけてないで出てこいよ『スキマ妖怪』さんよお〜。」

あえて名前は言わずに忠告する。するとあちらも観念したのかそれとももう飽きたのか・・・。

「はあ〜い。おつしやる通り私が『スキマ妖怪』の八雲紫（やくもゆかり）よ。

あなたが何日でこの距離のあやふやな迷宮から脱するかもうすこし見物していたかったけど。しょうがないわね・・・。」

言ってることを整理するとどうやら今回のアレは紫の『境界を操る程度の能力』で距離の『長い、短い』の境界をあやふやにして楽しんでいたらしい。

「んで？その大妖怪の紫さまがこんなところに何の用ですか？」

薄々感づきながら問う。 まさかな・・・。

「目的はあなたよ。『結神』さま。あなた私の式にならないかしら？」

予想どおり、とんでも無い提案をしてきやがった。

まじか!?!こいつ、いくら大妖怪とはいえ、仮にも神を使役しようだと？

「断る。お前から俺に対して伸びている線には『不安』と『希望』がかんじられる

その2つがあるってことはこれまで何度か裏切り、もしくは拒絶を経験してるな。

仮にも主が、使役する者を信じねえでこつちが信じれるとおもうか？」

ほかに、実力とかいろいろ言いたいことはあつたが、とりあえず神の立場から言わせてもらえばそこだな。

「うっ。わ、わかつたわ。あなたを式にするのはあきらめましょう。

私もまだまだねあなたは私程度には使役出来ない存在だわ。」

すげえな。たった一言、二言会話しただけで力量を思い知るなんて・・・。

さすがは、幻想郷の管理者。妖怪の賢者つてどこか。

「なあ、八雲「紫で良いわ。」ん。じゃあ紫

式は無理だが俺と契約しないか？」

「契約？どうすればいいの？こつちにメリットは？」

俺は契約のメリットと方法を紫に伝えた。

「へえ〜。面白い能力ね。良いわよ？」

ならこつちがお願いした時は出来る限り理想郷づくりに協力してよ？」

俺はわかった。と言って紫と握手した。

もちろん、結びつけるイメージで紫の能力と妖力が流れ込んできた。

「ええ〜と。『スキマを開く程度の能力』か。

ありがとな。それじゃなんかあつたら呼んでくれよ？」

そうして別れようと妖怪の山に歩みを進めた。

ズル
ツツ
ツ

瞬間に何か足元の穴に落ちた。周りを見るとウルト●マンガ●アに出てくるガ●Qみたいな目玉がいくつもしかも全部こっちをにらんでるといふ超キモい場所を落下中だった。

「紫!!てめえいきなりスキマ落とししやがって!!これどこに続いでるんだよぉぉ
」。

「安心なさい。双覇あなただの力なら危険なんてそうは無いから今回はちよつと別世界の神様のところに行つてきてほしいのよ。」

その神様の知識を体感すればもっと強くなれるわよぉぉ。
という紫の声は、とつくに世界の境界を越えた双覇には届いていなかった。

・・・〈少年世界移動中〉・・・ (この言い回しやべえなw)

ん?気がつくと俺は、あたり一面どこを見渡しても真つ赤という趣味の悪い『紅魔館』のような場所。

「ん？いやここ紅魔館か。俺の居た世界にはまだなんもん建ってないはずだからほんとに別世界か。　　なんだ？声が聞こえる。」

・・・〈少年移動中〉・・・

「だ〜か〜ら〜!!俺がお前の子供を守ってやってたんだろぅが!?
なんでおれにキレてんだ!瞬!!」

「うるせえ!!人が寝てんのを良いことに何を人の娘といちやつこうとしてくれやがってんだ!!衛!!!」

ふむ。どうやらこの2人は友達同士で一人はつい最近まで封印され、もう一人はその間、そいつの家族を守っていたらしい。

「話を聞く限りは瞬のほうが悪いな。どこのだれかわかんないが、せつかくの『繋がり』を無理に断つなよ?」

衛。と呼ばれていた男は「そうだろ!？」と振り向き。「誰?」と叫んでいた。
うるさい。

「俺か?俺は白雲双覇というものだ。『結神』という神をやっている。

八雲紫に連れてこられたパラレルワールドの人間だ。・・・

なぜ構えている?」

俺の神名を聞いた瞬間二人が警戒し、構えた。

おおタイミングばっちり仲良いじゃん。

「なにしにきやがった!」

瞬と呼ばれた少年が叫ぶ。

紫に連れてこられたと言ったはずだが・・・

まあ良いか。

「別に敵対する意思は無いぞ？ただ少し退屈だったんだ。だから来た。」

おれは、そう答えた。実際そんなものだ妖怪の山まであのままだと着かなかつただろうしこの際、この世界を楽しむとしよう。

「クツこの暇人め!!」

瞬が言う。

「べつに俺もそこまで暇人じゃないぞ？どこのどんなかは知らないがお前も神なんだろう？」

コツコツと音がして、青いや藍色の髪の毛の男がやってきた。

クールな外見でモテそうさ。(イラッ)それに良く見たら瞳が紅く、牙が生えている。

「ようこそ。紅魔館へ。『結神』白雲双覇。」

さもあたり前のように優雅にお辞儀をしてきた。

とりあえず、お辞儀を下手に返しつつ衛に聞いた。

「俺、あいつに自己紹介なんてしたか？」

すると衛に、

「気にすんな。あいつはそういう能力なんだ。」

と言われた。

「ふ〜ん。じゃあいいか。」

たぶん、相手の何か個人情報を見抜く力だろう。

それよりもあいつもかなりの数の繋がりがりだな。吸血鬼のようだし。

「ん。ところで今は何の騒ぎなんだ？」

見た感じなんかの宴会のようだが。。

「おまえ、知らずに来たのか？今はこの幻想郷で起きた紅霧異変って異変を解決したからその宴会だ。」

なるほど、ここではもう原作の異変がひとつ終了しているらしい。

「まあ。お前も参加するんなら、簡単に自己紹介でもしとくか。
俺は斎藤 衛。こんな成だがおれも一応神をやってる。つってもたまたまだし、信仰もされてないけどな。」

確かに衛からは神力は感じられたが、俺や瞬のとは違う気がする。
繋がりもこの中じゃ一番少ないな。

だが。1つ1つが全員を守り切る決意の表れのように太いな。
苦笑し問いかける。

「衛はどんな神なんだ？」

「おれか。俺は龍神王だ。ある時とつぜん目覚めた神だが一応守りたいものがある。
だから、これも仕方ないんだがな。」

そう言つて腕の包帯を解いていく。最初はけがでもしてるのか。とおもつたが
解いた先には

「これは、鱗。それに爪も人のものじゃないな。」

衛はいっしゅん暗い表情をつくり、すぐにまた。

「ああ。とある奴にもとの腕は焼かれちまってな。んでその後生えてきたのがこの龍神の腕だ。」

相当過酷な運命だったのだろう。今こうして目の前の相手が笑ってるのが不思議だすると瞬がやってきた。

「瞬? どうして」

声をかけようとした瞬間。瞬は衛に飛びかかった。

手には酒。

「衛!! お前も飲めよ!!」

顔は赤く酒気がこもっている。

俺が問うと衛が契約について聞いてきたので、2度目の説明。

「ナンダソノチート？」

片言が妙に面白かった。

「まあ良く言われるよ。衛の能力はなんだ？」

すると衛は衛の能力は『すべてを超える程度の能力』であること。

そして、能力の説明をした。

「お前も十分チートだな。んで瞬の奴は？」

「瞬の能力は『知識を司る程度の能力』全知神と呼ばれるあいつの力は

この世のありとあらゆる知識を使いこなし、相手の知識さえも理解する。」

なるほど。『全知神』の瞬か俺の『結び付き』がどこまで通用するかな・・・

試してみたいが。はつきり言つてこつちの知識も理解されたんじゃ勝てそうにねえな

「よし。んじゃさつそく『契約』頼む。」

契約の仕方は先に教えておいた。

「おう。なら条件は

- 1、しつかり『結神』としての仕事をこなすこと。
 - 2、瞬と全力で戦ってみること。
 - 3、俺達のことを忘れないこと。
- の3つだ。ちゃんと仕事すんだぞ？神様！」

俺は「役割が特に無いような神に説教された・・・。」とデイスりつつ。
衛の手をがっちりつかんだ。

が。

第21話―結びの神VS影を統べる夜の王

「ふあああ。昨日は。確か結局宴会に参加して、夜中は飲み明かしたんだったか……。なんかふかふかすると思ったらここベッドか？ずいぶん久しぶりだな。」

俺は元が妖怪なので酒には強い。お神酒以外は……。お神酒怖い……。まあ、もう神なのだからお神酒で存在が消滅することはないだろうけど。

「双覇様。朝食のご用意が整いましたので、一階にお越しくください。」
俺がふかふかを堪能してたら、音も気配も無く咲夜がやってきた。
正直、心臓に悪い。

「ああ。わかった。」

咲夜は応対を聞くや否やすぐにその場から消えた。

「さすがは『完全で潇洒なメイド』だな。あ。瞬のこと聞いてねえ。

まあいいか。　ん？これは・・

なにになに。

『双覇様にサイズが合う服をご用意いたしましたのでこれにお着替えください。以前着ていらしたものは洗濯していただきますのでご安心を。』」

俺は、ベッドのすぐ横にいつの間にもやら置かれていた、かごからスーツを取り出し、着替える。

「うおっ!!やべえ本当にぴったりだ。つくかこれどう考えてもオーダーメイドだよな。」

「いつの間にもサイズ測ったんだ?」

「完全であるためには謎も必要な要素らしい。俺は戸惑いつつも一階に向かった。」

すでに一階の長テーブルには紅魔館の住人達十瞬が座っていた。

あ。瞬ちゃんと来てたのか・・・。

「あれ？おい瞬。衛はどこに行ったんだ？」

衛がないことに気づき瞬に声をかける。

が。

「ふわあああゝ。ん？双覇か。」

あくびでかき消され、

「いや。質問に答えr」

「おやすみゝゝ。」

二度聞いても答えは返ってこず、逆に瞬はテーブルに突っ伏して眠りに入ってしまった。

「・・・。ねちゃったよ。。。」

「やれやれ、私が起こすとしよう。」

ため息を吐き、現れたのは昨日俺の正体を『見破った』
吸血鬼だった。

「そういえば、聞いてなかった。あなたは？」

「私の名はフェル。フェル スカーレットだ。」

「この紅魔館の元主だが、いまは娘に譲っている。」

スカーレットの名に、娘。ということはこいつレミア達の父親か。
能力は結局なんだ？

フェルは、名乗りを終えて手に妖力を集中させ一本の槍を作った。
紫。いや藍色がかった黒の槍。

「つ!!なんて妖力だよ!」

一瞬、恐怖で硬直した。まさかこんなバケモノがいるなんて。

「これでも、私は妖怪の中ではトップクラスだぞ？

それに・・・。」

バケモノならもつと格が違う奴が居る。

そう言うのとフェルは瞬に向けて槍を思いっきり投擲した。

「おい！あぶなっ！」

「大丈夫だ。良く見ておけ。バケモノのお目覚めだ。」

瞬のほうに行こうとする俺を制し、フェルが告げる。

瞬間。瞬からとんでもない量の神力があふれ出た。

「んな!!なんだこの馬鹿みたいな神力は!?!」

瞬は右手だけを槍に添える。すると添えた先から槍は霧になり

拡散して行く。

「あつぶねえだろ!!フェル!てめえ朝から俺を殺す気かよ!!」

キレて、フェルにかみつく瞬。まあ当たり前だよな……。

「朝食の時間だ。寝るのなら、昼まで待つかそれか死ぬ。」

冷静に対応するフェルにさらにかみつく瞬。

「んだと!!よし。わかった!てめえと俺はすぐにでも決着をつけなきゃいけない
運命らしいな!」

なぜ、そうなる。決着でなんだ。決着で。。

ん?なんかひつく。ひつく。聞こえるな。

あれはレミアアか?

「なあ、瞬。頼むから一回黙ってくれ。」

俺が促すと。

「なに!!双覇も戦るつてののか?」

そうじゃねえよ……。

「もつと周りを良くみろよ。レミリアが泣きそうになってんじやねえか。」

指さす方向には、現紅魔館頭首。『レミリア・スカーレット』が

泣きそうになってた。ちなみに感じる感情は『怒り』と『恐怖』（いや。ちよつともう泣いてるか。）

たぶん、瞬の神力に恐怖し自分が空気になってるからおこつてんだろかなあ。

「私の娘を泣かせた罪は重いぞ？ 覚悟はできているだろうな。」

フエルが憤怒の形相でにらむ。

「はあ!? 俺完全に悪くねえだろ!!」

瞬が叫ぶ。いや、半分（恐怖）はお前の所為だろ。

「お前の所為だよ!! 瞬。むしろ俺がとばっちり受けてんだ!!」

「よくもこの私を無視してくれたわー!!!」

我慢の限界とでも言うように、レミリアが巨大な槍を投げつけてくる。

殺傷だし、『スピア・ザ・グングニル』が可愛く見えるな。

「うお!!マジでやりやがった!逃げるぞ!!双覇!!」
「お。おう!!」

瞬と一緒に全速力でその場を切り抜け飛び去る。

「あれ?瞬のやつどつちに行きやがった?」
「が、すぐにはぐれた。。」
「つ!!!あぶねえ!!!」

油断していた、双覇の真横をおぞましい妖力の槍が通過する。
すこし、頬が切れた。

「ふむ、放つときに妖力を放出しすぎたか？」

フェルが悠然と歩いてくる。いやいやいや・

「どうして、俺なんだよ！瞬の奴がいきなり神力なんて使うから怖がったんだ」

「問答無用だ。」

フェルの体から妖力のほかに魔力が放出され、力がプラスされる。

「ははっ。すげえプレッシャーだな。」

ちよつと冷や汗が出てきちまった。

「とりあえず、貴様を串刺しにして今日のレミリアの馳走（ちそう）にしよう。」

神を喰らうと神格化でもするのか？興味がある。」

なんだこの人!! いや吸血鬼か。超怖えええ。

「それでは行くぞ!! 『Shadow Spear』(影の槍)」

フェルの背後に魔法陣が展開され、黒。いや漆黒の槍が放出される。

「契約解放! 神薙 祥磨!! 『具現』天叢雲剣!」

2本、3本、4本・・・と続けて射出されるそれを切り裂きかき消してゆく。

「ほう。切れ味が良い。おそらく神剣の類か。良い武器だ!」

相変わらず、冷静に威圧的に俺の武器を褒めてくるフェル。

「そりゃ。どうも!!!」

受け答えの間も手は止めない。

射出の止まる一瞬を狙い、接近。剣で突き刺す!!

が、貫いたはずの剣はフェルの体を通過し、前のめりに体制が崩れる。

「なにっ!？」

『Shadow of switch』（嘲笑う幻影）実体と影を切り替える影魔法だ。もちろん私自身の体もな。」

「なんだよそれっ!!」

急いで飛びのき、距離をとる。

下手に、近づいて隙を見せたら影で貫かれるってことか・・・。

「来ないのか？ならばごちらから行くぞ。『shadow spear of mid

night』

(深淵から迫る影槍)

魔法陣が頭上に2つ、フェルの後ろに2つ。

4つに増え、さっきの比じゃない漆黒の槍が俺を襲う。

「さて。問題

この中で本物の槍は何本あるでしょう？」

「影が含まれてるのか！」

正直。全部本物に見える妖力はすべてから漏れ、しつかり術者が力を供給してる

『繋がり』も見える。

(すべてに斬りかかる？駄目だ。隙が大きすぎる。

だからって無視したらやばいし、ああ!!クソっ!こんなことなら『あいつ』

と契約しとくんだった・・・)

「おくい。大丈夫か？双覇。」

願っても無いタイミングで瞬が帰ってきた。

「助かった!! 奴の影魔法を攻略したい。どうすればいい？」

「そんなの簡単だよ。この世から『影』を無くせば良い。」

「ラプラスの悪魔。起動!!」

瞬からさつきよりもとんでもない量の神力が漏れ出し
気を抜いたら気絶しそうになった。

「な。なんだ？　それ……。」

おびえつつ、なんとか声をひねりだす。

「ラプラスの悪魔。超越的存在と呼ばれ、恐れられている
俺の奥の手だ。」

瞬のほうに1本の槍が飛んできた。

「瞬！あの槍は!？」

「大丈夫。斬ってくれ。あれが影である可能性は0だよ。

「この世界にもう『影』は存在していない。」

足元を確認し、確かに自分の影すらも消えていることに気がついた。

一瞬で距離を埋めて斬り裂く。

確かな手ごたえと共に槍は消え去った。

「これがラプラスの悪魔を起動したときの俺の力。

『概念消去』触れたものすべての概念つまり存在を消去する力だよ。」

なるほど、超越的存在。確かにそのとうりだ。

そもそも、存在を許されないとは……。

「それに、フェルのさっきのクイズ。もともと正解は0だしね。」

「どういうことだ？」

不思議に思い尋ねる。

「言ったとうりの意味だよ。俺のラプラスの悪魔は『全知神』としての力の究極系でもある。

あの状態になると見る物全てに『答え』をはじきだせる。

あいてがどう動くか？何をしたら目の前の人はどうなるか？
もちろん相手の言ってることは本当か？とかね。」

「とんでもないな。確かに衛の言うとうりお前の能力に勝てる気はしねえな。」

「まあなw俺自身ひどいチートだと思ってるよ。」

でも、下手に使いすぎると戦闘も楽しくなくなるし、ほかの神にも目をつけられるから結構制限があるんだぜ？」

瞬は俺にそう伝え、フェルのほうに向きなおると

「どうだ？まだやるか？」と聞いていた。

フェルの答えは・・・

「もちろんNOだ。1人の吸血鬼が影を奪われ、神2人相手などさすがに分が悪すぎる。」

まあ、そりやそうだなW お。そうだ！

「なあ。フェルもしよければ俺と契約しないか？」

「契約？ああお前の能力のことか。なら方法も存じて入る。条件は・・・」

1つ、そちらの世界のレミアアとフランをよろしく頼む。

2つ、私の力。しっかり使いこなしてくれ。

3つ、瞬との全力戦闘。がんばれよ？

3つ目は衛との分も合わせて確約ということにしておいてくれ。」

フェルはそう言うと、俺に手を差し伸べてきた。

「ああ。わかった！お前の力喜んで使わせてもらう。こっちの世界のレミリア達のことも任せろ!!」

ま。こっちではまだ生まれてないけどな。(苦笑い)

フェルの手をがっしり握り、得た能力は・・・

「『影を従える程度の能力』か。おそらく、お前本来の能力とは違うだろうが・・・結構強力だな？そんなに信じてくれるのか。会って間もないってのに。」

俺が以外そうに尋ねると、フェルは心底心外そうにため息を吐き・・・

「私の能力は『すべてを見抜く程度の能力』だ。お前は妖怪でもあるが。」

その殺気は本当に敵対した、それも邪悪とみなされるものにはしか向けてないのを知ってる。」

それに……。と続けて。

「私が『見抜いた』かぎり、お前は瞬同様、絶対的力を持つ神でありながら、

私と言う人間の敵を「気に入ったから。」などと契約関係にしてしまうような

超お人よしの神だからな。安心して能力を託せる。」

なんか、こそばゆいがとりあえずこんな数日でも信頼してくれてるのはうれしい限りだ。

「お前ら。何やってんだ。早く帰って飯食おうぜ。」

遠くで瞬の声が聞こえ、俺達はどちらかからとも無く笑い返事を返して、
帰路に着いた。

もちろん。
朝から馬鹿騒ぎしたため俺と瞬の分の朝食はとうに無かった・
・
・。

第22話―VS!! 『繋がり』を尊ぶ結神!!

今朝、朝食を出されなかった俺と双覇（客人に何たる仕打ちかね。。）は山で獣を狩り肉を焼いたりしてなんとか朝食を確保していた。

「んで、双覇。朝食う時、何聞こうとしてたんだ？」

そう言えば、なんか聞かれてたのを思い出したので双覇に聞いてみる。

「ああ。衛のやつ今朝から居なかったけど一体どこにいったんだ？」

ああなるほど。双覇には言っていなかったな。

「あいつなら、外の世界の学校にいつてるんだ。今日は登校日」

双覇はなるほど。と納得して、空を見上げる。

「暇だなく〜。」

2人そろって欠伸をする。

もう完全に無気力症候群にかかってしまっている2人。今は妖怪の山の俺の家に来ていた。久しぶりなので埃がすごい。

「はあく。つかれたー!!異変の準備でただでさえ忙しかったのに・・・」
と、そこに『妖怪の賢者様』こと八雲紫がスキマを開いて現れた。

「どうした?紫。何かあったのか?」

紫はため息を吐き、

「昨日、『博麗大結界』が一部破壊された痕跡があったのよ。

いま、やっと修理し終えて休みに来たってわけ。」

博麗大結界の破壊ってまさか。

「ああ、すいません。それ、たぶん俺ですね。ここに来た時に何かに干渉した感じがし

ましたから。」

隣の双覇が申し訳なさそうに言う。

「だれ？まさか外来人!?こんないそがしいときに!!」

紫は忌々しげに双覇をみる。双覇はたじたじになつてゐるな。

「紫。そいつは別世界から来た、俺と同じような立場の者だ。」

『結神』白雲双覇。

「お前よりは間違いなくつよいぞ?」

双覇はそんな訳無い。と否定している。

神なんだからそこは威張つとけよ……。

「ふ〜ん。それで?その『結神』様がここに結界を破壊してまで何の用?」

双覇はう〜ん。と少し考えてから。

「よし！瞬。俺と戦ってくれないか？」

そう言った。・・・は？

「ちよつとまで。どうしてそうなるんだ？戦う理由は無いし、

第一。俺昨日の酒がまだ残ってて2日酔いなんだけど・・・。」

双覇は酔って無いのか？飲んだ量はあんまり変わって無かったはずなんだけど・・・。

双覇は、俺にフェルと衛との契約の旨を話しそもそもの目的が『全知神』である俺と戦って強くなることだ。と話した。

「しょうがねえな。一回だけだぞ？そんな先輩とか言われちゃうとなあ〜」

→

(ちよろい人w)

「ああ。そんじゃ行こうか。」

俺たちは上空へとどんどん高度を上げていった。

「いつでも良いぞ〜。」

お手並み拝見！さてどんくらいいつよいのかなあ??

「契約解放！神薙祥磨!! 『具現』天叢雲剣!!」

約300メートルくらい離れた位置にいる、双覇が剣を作り出し構える。

まあ、この距離なら何が来ても大概は反応できるでしょ。

「『結い』結神十全知神」

双覇が唱え終わった瞬間。俺と双覇の間の距離は0になり双覇が斬りかかって来ていた。

「な!? 『概念付与—腕—硬質化Level 8』!!」

テンパリつつ、腕を硬質化し振り下ろされた剣を凌ぐ。

ガツギイイイン!!とまるで超高速で金属同士がぶつかったような甲高い音が聞こえ、2人の距離はもういちど離れる。

「き。斬れない!?!どんな腕してんだよ!!」

双覇が叫ぶ。

「こつちこそびつくりしたぜ。まさか距離がいきなり0になるとは。

能力か。やるなあ。」

「ここ最近で久しぶりに意表を突かれた気がするぜ。」

「こうなったら全力でやるぜ!!契約解放!!『斎藤 衛』瞬を乗り越える!!」

くつ!次は衛の能力か…。ならこつちも手加減してらんねえな!

「ラプラスの悪魔起動!!」

あいつの能力は発動した時の状態の力しか乗り越えられない。つまり、ふつうの俺の時じゃもうかなわないけど。

使ってから相手が強くなった場合。強化後の相手は乗り越えられない!!

「いくぜ!! 『概念付与—刀—強化Level110』!!」

俺は刀を抜き強化レベル10を付与した。

最高神クラスの相手に対して付与する力だが。衛の能力を使った双覇はそれくらいやばい!!

「さあ。第2ラウンド開始だ!! 双覇!!」

直後、二人の姿は残像になりちようど離れた距離の中心でぶつかる。

ギイイイインツツツ!! どちらの武器もなぜ壊れないのか?

不思議なほどの轟音をあげてぶつかりあう。

「くそ!! スサノオの力でも断ち斬れ無えってどんな馬鹿みたいな力もってんだよ!!!」

双覇が叫ぶ。スサノオ。双覇の世界のスサノオのミコトがどんな能力でどれだけ強いのかは分からないが少なくとも……

「俺の刀には、今最高神とも打ち合えるくらいの力をのせてるんだよ!!」

お前のその剣のほうが化け物剣なんだ!!!」

(注 どちらもあほみたいな化け物武器です。)

くそ!! 鏢迫り合いじゃらちが明かねえ!!!

「『形状変化!! 槍!!』」

双覇も同じ結論らしく、同時に距離を置いた瞬間!

俺は『形状変化』で刀を槍に変える。

「んなっ!! 槍になった!?!」

双覇が一步下がる。

「今度はこっちの番だ!!!」

槍を構え、垂直に突進！

「契約解放!! 『斎藤 衛 龍神王!!』」

双覇からあふれだす霊力が倍増した。

「衛の『龍神王』の力か!!」

俺は槍の切っ先に霊力を集中させ、速度を上げる。

双覇は、その場で腰を落とし握った拳に『白い炎』を纏わせ構える。

「うおおおお!! 『白井流 覇将突!!』」

霊力は切っ先を輝かせ、槍全体を七色の光で覆う。

「はあああああ!! 『龍神王の拳!!』」

双覇の拳は白い炎をさらに燃えたぎらせ、体全体からオーラが立ち上る。

「いくぞおおおおお!!!」

「来い!!!瞬!!!」

俺と双覇の一撃がぶつかりあう!!!!

つてところで俺は横から飛んできた謎の高速物体に吹っ飛ばされる。

「痛ててて。なんだよ。つて光？」

横から俺を吹っ飛ばしたのは、いま外の世界に居るはずの俺の嫁。光だった。涙をながし、こちらを見つめている。

「よかったああああああ!!!!瞬が帰ってきたああああああ!!!!」
泣きじやくり抱きしめてくる光に戸惑いつつ、俺は
!!!!

「ただいま。光。」

と言葉を出し。

「おかえり!瞬。」

顔を上げた光は満面の笑みを浮かべていた。

．．．．〈双覇サイド〉．．．

「え〜と．．．状況を整理しよう。こんなときこそクールにc o o lに、だ。」

- 1、俺の真下には瞬が落とした槍（刀？）が落ちている。
- 2、その瞬は謎の超高速飛行物体に撃墜（？）されて落ちて行った。
- 3、俺は放置されている。

「．．．．まあとりあえず瞬が飛んでくるのを待つか。」

．．．．〈双覇サイドアウト〉．．．

．．．．〈瞬サイド〉．．．

「そういえば、どうして瞬は目覚めたばかりで戦ってたの？
と言うかあの人はだれ？」

光は小首をかしげて聞いてくる。

「あいつは白雲双覇って言う奴で、暇だったから戦おう！ていきなり言いだされて二日酔いだったけどとりあえずリハビリn・・・」

「つまり、あの腐れ外道は頭が痛くて体調が悪い瞬を無理やり連れ出して戦わせたってことだね？」

光がトチ狂った目でとんでも無え事を言い出した。

「ちよつと待て!!確かに2日酔いで頭が痛かったし、正直気も進まなかったが今はリハビリも兼ねて楽しk」

「わかってるよ。瞬は優しいからあの人の事を庇って上げてるんだよね。」

ちよつと待ってて今『光速』で3枚下ろしにしてくるから。」

ちよっくいい!!!人の話も聞かず瞳に輝きの無い光が猛スピードで双覇のほうに向かって行く。

「やべえ!!このままじゃ俺の嫁に双覇が殺される!!」

俺も後を追いついで上空に上がった。

・・・〈双覇サイド〉・・・

「許さない・・・。」

「ん?瞬か?・・・。」

違った。なんかものすごい殺気に向けてくる『黄色い明るめのスカート』、

『空色のカーディガン』、Tシャツを着た女の子だ。

すごくかわいい。

「あの?あなたh・・・」

「うるさい。言いわけは聞かない。斬り捨てる!!」

ええええええ!!????? 俺この子になんかしたっけ?

転生前のと惣はクラスの女子にいつの間にか嫌われてたりはしたけど

いくらなんでも初対面の女の子にすらいきなり嫌われてるなんて・・・orz

「あ・・・あの？僕は君に対して何かしましたか？ちよつと身に覚えが・・・」

とりあえず交渉を試みる。

「言いわけは聞かないと言った。『光神』参る!!!」

即座に失敗。彼女は刀を抜き放ちものすごい速度で斬りかかってきた。

「くっつ!!!」

天叢雲剣で受け、なんとか持ちこたえる。とそこへ・・・

・・・〈瞬サイド〉・・・

俺が木々を抜けるとすでに光は双覇に斬りかかっていた。

「ちっ!!おそかったか……。おい!!双覇。その子は俺の奥さんだ!!

傷つけやがったら『概念消去』してやる!!」

双覇は「はあ!!?奥さん!?てめえこのリア充が!!死んでしまえ!!!

あと、無理だろ!!強すぎるぞこの人!!」

と喚いていた。

「やかましい!!俺の刀にまだ力が付与されてるからなんとか持ちこたえやがれ!!

あと縁結びの神のくせに嫉妬してんじゃねえ!!!」

あいつは、なんのために『結神』なんて神になったんだよ……。

さて、俺はなんとか光を止める方法を探さないと……。いやー1つ案はあるにはあるが……。

「『斬撃—新月』我が斬撃は見えぬ物を切り開くためにあり!!」

光が技名を詠唱する。まずい!!!

「双覇!!とにかく全速力で飛びまくれ!!見えない斬撃が飛んでくるぞ!!」
とりあえず、忠告はする。

・・・〈双覇サイド〉・・・

「はあ!?!?どんな攻撃だよ!!チクショー!!」

俺は瞬に言われたとおり、とにかく飛びまくる。

近くの木々が薙ぎ倒され、服の腹の部分に斬れ込みが入り超怖い・・・。
あいつは何と結婚したんだよ!?!夫婦そろって化け物じゃねえか!!!

『斬撃―三日月』我が斬撃は悪を斬り裂くためにある。」

また別の詠唱だ。

「気をつけろ!!次は目には見えるが量も速度も段違いの斬撃がとんでくる!!」

ほんとに、馬鹿なんじゃないか? って思うくらいの圧倒的数の光が俺にむかって飛んできた。

基本は新月と変わらずに飛んで避け、無理なときは自分の体に能力を発動させ地形と結び、物理的に人体では不可能な避け方で避ける。

「くそ!!衛の能力で瞬を『越えて』なきや体がぶっ壊れてるぞ!!」

「『斬撃—上弦 我より上は私の絶対的支配下と化す。』

「こんどはなんだ!!!」

「双覇!!光の上半身より上に行くなよ! 『上弦』の力は上半身より上の物体を物理法則を無視して斬れる。衛の能力でも防げねえ!!」

「はあ!?馬鹿か!!んなもんいきなり言われても対応が・・・」

「そ、そうだ!!」

「斬ツツ!!!双覇の体は光の刀に真つ二つに斬られた・・・」

「そ。双覇——!!!」

「かと、思ったか？『Shadow
of Switch—嘲笑う幻影』フェルの能力が
こんな形で役に立つとはなw」

俺は斬られた影を自分の足元に戻し、光さんの前に立った。

「『斬撃—下弦』我より下は私の絶対的支配下となる。」

こんどは下かよ!!!

俺は全速力で飛びあがる。

「双覇!!光とは鬼ごっこ状態には絶対になるな!!」

あいつは『光神』。『光を司る程度の能力』だ!間違ひなく速さじゃ勝てないし妖怪の山に被害が出るぞ!!」

まじかよ。なら!!!

俺は光さんと水平に飛ぶ。

「ナイスだ!!下弦は光の下に全身がなきや駄目なんだ!!」

よし。一応この作戦は成功か。んじゃ次は・・・。

「双覇!! やりたくはないが作戦はできた!!」

お前も見たくないだろうけどとりあえず今からそっちに送る作戦を信じて!!」

そう言うと、瞬は自身の頭に手をかざしこっちにもう片方の手の指先を向けるすこし、経って一瞬で指示が頭の中に回った。

「うわー。確かに見たくないしやるのもごめんだな。でもこれで死なないならしょうがない。」

『結い』全知神+光神!!」

死ぬほど妬ましいがほんとに死ぬよりははるかにましだ・・・。

茫然として、瞬のほうに引つ張られていく『光神』こと光さん。

瞬は光さんの肩を抱き、優しく唇を近付け・・・

まだ良く状況の整理できてない光さんを尻目に

キスをした。。。

第23話―全知神との別れ。双覇帰還!!

現在。俺の目の前で男女（結構なイケメンと絶世の美女）がキスをするという事件が発生した。

「なんか、見せびらかしたみたいないな感じではずいな……。まあなんとか止まったしゆるしてくれよ?」

男―瞬は、隣の美女。光さんだっけ?の頭をなでたり、抱き抱えたりしながらこちらに歩いてきた。

「嫉妬心で人が殺せたなら!!!」

「さつきも言ったが、お前はどんな気持ちで『結神』になったんだよ……。」

瞬が呆れ声で言うてくる。

いや、俺正常だよな?神ではあるけどなりたてだし非モテ男としては腹も立つよね?

俺はどこぞの聖人君主じゃないんだから。
はあく。おれも好きな人と結ばれたい・・・。

「そう言えば。だお前はこれからどうするんだ？」

瞬が妙なことを聞いてきた。

俺としてはさっきの決着をつけたいところなのだが・・・。

「どういう意味だ？」

「お前の世界のことだ。そろそろ元の世界でお前が居る『意味』お前がいるからこそ
回る歯車が動きそうな気がしてな。」

瞬の言葉の意味は良く理解できなかったが、全知を司る神が言うんだ。
そろそろ戻ってやらなきゃいけないことがあるってことだな

「そっか。ならそろそろ戻んなきゃな。」

「戻ることにしたなら急いだほうが良い。神は基本的には一つの世界に一柱だからな
瞬がそう言ってきた。ん・・・」

「それってどういう意味だ？」

「言ったとおりだ。宗教などの文化や国によつてはいろいろあるが。」

もしこの世界にお前と同じく『結び』や『繋がり』を司る『結神』という神が
居るとする。」

俺がうなずくと話しを続けた。

「そうすると、怪談のドツペルゲンガーって知ってるか？」

あれと似たような現象が起こる。何かを司る存在は世界の原則として一柱しか存在
を

認められない。

つまり、一方は排除される。だから急いだほうがいいこれからかも知れないしな。」

ドッペルゲンガーとはもう1人の自分が現れ、そいつに出会うと存在を消されそいつの影にされてしまう。という有名な怪談だ。

恐ろしいのは、ドッペル自体も自分は自分だと思ってるから自分が目の前の自分を影にする（消す）事に抵抗が無いということだ。

「とりあえず。瞬の言いたいことは理解した。

そうだな。なら俺は帰るよ！自分の世界で自分の存在理由を成し遂げるために」

「おう。次にお前と会うときは俺がそっちに行くとするか。

今度は『全知全能の神』になってるかもしれないねえぞ？」

ニヤツと笑い瞬は俺にそう問いかけた。

「ああ。こんど決着をつける時には本当の『結び付き』を教えてやる！

おれもまだ本気じゃないんでね？」

いや、俺一人だったら本気なんてたかが知れてるけどな！」

俺はそれを笑い飛ばし、ニツと笑う。

「そうか、お前とお前の仲間たちの力。次に会った時のために知識の中にしまいこんでおくでしょう。」

「結界を抜ける方法は？」

「紫の能力を使うとするよ。一応『スキマを開く程度の能力』も持つてはいるが。」

「まだ世界を超えるには使いこなせてなくてねw」

俺たちの会話を盗み聞きしていたらしい紫がスキマを開いて割り込んできた。

「ちよっ！私の能力も持つてるの!?!」

「話を聞け……。俺が向こうの紫からもらったのは『スキマを開く程度の能力』、つまり、『境界を操る程度の能力』じゃない。」

あんまり、信用されてないみたいでねw」

そういうこと。と納得した紫は俺の背中に手をかざしなにやら集中していた。話しかけようとしたら「今、あなたの居た世界を探してるんだから黙ってて!!」と怒られた。

「じゃあ、瞬。俺と契約してくれないか?」

ちなみに能力については説明済みだ。

「ああ。ラプラスの悪魔はおそらく渡せないと思うが。

俺の知識!役に立たせてくれ!条件は・・・

1、向こうの世界でも元気でくらししてくれ。

2、俺たちのこと。俺たちと戦って得た知識忘れんじゃねえぞ?

3、自分がしたいこと。それをしっかり持ってやれ。

お前にさつき、結神のくせに嫉妬すんな!とか言ってたけどすまなかつたな。お互い。神の身だが元人間なんだ。

生きてる限りそれこそ、どんな生き物にでも欲はある。だからやりたいことをやりた
いときに我慢するな。そんなつまらない人生はお前にも俺にもふさわしくない。」

要は、お前なら欲に吞まれることなくしたいことをやりとおせるはずだ。

自分の決めた道は迷うなよ？

そう続けて瞬は手を出してきた。

「ああ。楽しみまくってやるよ、転生前じゃ味わえなかった体験だ。

我慢なんかしてたら勿体ねえ!!」

俺は、その手をつかみ能力発動。

瞬の神力と霊力を体に取り込み、能力を得た。

『知識を経験する程度の能力』

要はこれまでの経験を、知識をこれからに経験していく能力だ。

何か特別なことができるわけでもないけど。

まごうことなき『全知神』から授かった能力だ。

「じゃあな。瞬」

瞬はおう！とだけ答え俺は紫が作ったスキマの中に歩いて入っていく……

訳もなく、足元にスキマが開いて人生2度目の『スキマ落とし』を喰らった。
上空から瞬の笑い声が聞こえる。

「野郎。紫の次の行動を読んでわざと教えんかったな．．。」

どこかの山のどこかの川でびっくりするぐらいに可愛く、キレイな少女が
自身の体と・・・。

背中に生えた黒い翼を洗っていた。

コラボ終了!!妖怪の山編開始!!!

第24話―目の前に広がる天国、地獄。

「ひいひい!!ごめんなさい!!わざとじゃないんです!!たまたま落ちた先にあなたが居ただけで!!」

いま。俺白雲双覇は逃げていた。必死に・・・
なにからって？

「待ちなさい!!!いまそこで足を止めればそれをもいで歩けなくなる程度で済みますよ!!!」

瞬達の世界を離れてこっちに戻ってきて最初に出会った妖怪。

俺のもっとも愛する人(妖怪)

鴉天狗 射命丸文 その人からだ。

「それ絶対に無事じゃないでしょ!!!自然治癒じゃくつつけることはできても足は生えてこないのは知ってるでしょ!!!」

いくら半妖の神とはいえ、足もつてかれてすぐに生やすみたいな気持ちの悪い回復力

は持ってない。

「うるさいですね!!! なによりも魅力的な私の裸をがっつり見といて!!!」

『初めて』だったのにー!!! 『初めて』だったのに!!!」

ぎゃあああ!!! その単語を連呼するのはやめろー!!!
確実に誤解を受ける!!! しかも意味合的に全部が全部ウソじやないから
余計にまずい!!!

「チツクシヨーーー!!! どうすりゃいいんだよ!!! ツクヨミのときは雑用でゆるしてもら
えたし、霊夢は金払えば大丈夫そうだけど文に關しての切り札がねえええ!!!」

その間も『初めて』を連呼しながら風の刃を葉団扇から飛ばして襲いかかってくる
文。もういつそ死んでやろうかな・・・。

「名前!? 下の名前で呼ばれるのすら初めてなのに!!!」

初めてお会いしたはずなのにどれだけ私を『辱める』おつもりですか!!!」

ダー——ツツ!!!畜生使つてほしくない表現ばつか連呼してきやがって!!
このままじゃほんとに弁解できなくなるじゃねえか——!!

「だから!!落ち着いて、話を聞いてくれ文!!俺はお前の水浴びを覗きに來たんじゃなくてこの山に入つたらたまたまお前が水浴びしてただけで!!
あ・・。」

まずい。思い出したら鼻血が!!!

「文!?!呼び捨てにまでするなんて!!こんな辱めを受けたのは初めてですよ!!!それに無実を主張しといて結局『興奮』してるじゃないですか!!!」

言ってる本人も恥ずかしそうに、文は顔を赤く染めてうつむきながらも風は俺を狙つて追いかけてくる。

恥ずかしいなら言わないでほしい。でも紅くなってる文は可愛い。
といかないかん!!

「こ、これは!その健全な男子としては仕方のないことだ・・・。」

とにかくわざとじゃないんです!!!

この程度の言いわけが精いっぱい。あとは天に任せてひたすら逃げる!!!

「わかりました……。」

とつじよ、そんなつぶやきが・・

「え!?!」

「勘違いしないでください!!」

許したんじゃないやありません。ただ天魔様にあなたをお連れするように。と『風の噂』で命令が来ただけです!! あなたのやった行為についてはまだ許してません!!」

なるほど。天狗社会は縦社会。「組織に属するということは自分一人の意思では行動できなくなるといふことです。」とは射命丸自身の言葉だ。

「わかったよ。それじゃ天魔様のところまで、案内してくれないか? これでも半妖でね。

空は飛べるよ。」

俺がそう言うと「……こっちはです。」と文が俺の顔を飛んでくれた。

先に俺を飛びあがらせるし、飛んでいるときもスカートを手で押さえるし、すごい警戒されてた。俺のイメージが文の中ではもう最底辺だ……。

泣きたい。ちなみに俺に伸びてる線は『恐怖』と『警戒』と『怒り』。

読みとれる胸の内は「この変態が!! ああ、天魔様に命令されなきゃ今頃バラバラにしたのに!!」って感じか。文の後ろでちょうど良かったから少し泣いた……。

……〈少年少女移動中〉……

ほどなくして、天魔の家（城?）についた俺たちは客間に招かれた。

時代劇とかでよく見る、城主の顔を隠すような仕切りがある部屋だ・

「鴉天狗 射命丸 文（しゃめいまるあや）『風の噂』に応じ、彼の者を連れてまいりました。」

文が、仕切りの奥の影に言う。

『風の噂』ってなんだろう??

「そうか。あなたが先の大戦で諏訪の国を守り抜き、狂神スサノオを退けた。

『結神』白雲双覇どのか。」

目の前の影は俺のことを知っているらしい。俺の質問は後に回すとしてとりあえず。

「スサノオは狂神じゃない。下手な挑発は身を滅ぼすことになるぞ?」

天狗の長よ。」

殺気をまぜ、妖力の3分の1を放つ。

「つ!!!なんですかそのバカげた妖力は!!!」

隣の文が声を荒げる。自分でも気付かないうちにずいぶんな量になってしまったらしい。恐らくフェルとの契約の時か・・・。

俺は妖力をしまい。天魔を見やる。

「失礼した。私がこの山の天狗の長。

『八咫陽葉』（やた ふたば）だ。『風の噂』というのは天狗という種族の特性のようなものでな別に能力ではない。」

ふむ。能力とは違ったらしい。なら文にもできることなのか。

聞けるかわからんが今度聞いてみよう。

「それで、ここにお前を呼んだのはほかでもない。

『射命丸の裸』を見たそうだな・・・?」

「ぶぶおっ!!!」

やめてほしい、能力の練習の所為もあつて想像力がだいぶたくましくなってるんだから。

「そ、それは事実なのですが。俺はなにも覗きに潜入とかそういうわけではなくたまたまで・・・」

許していただけならどんなことでもします!!!
すると、天魔が・・・

「どんなことでも・・・か。良いねえ気に入った!!お前をこの山の住人として認めようじゃないか。今回のことはどうせ、最近この辺に現れた神出鬼没の妖怪の所為だろうしねえ。」

紫の事はばれてた。正しくは向こうの紫の所為だけど黙つとこう・・・。

「ですが!!天魔さま!それでは私の気持ちがあ!!」

文が天魔の判断を待ったした。うう・・・。相変わらず敵意の線ばかりこつちに

向いてる。

「ああ、わかってる。だからこの件はもうそっちの二人の問題だ。そこで、お前たちには今から勝負をしてもらおう。外にでな。」

勝負？種目は何だろう。できれば文を攻撃したくは無いし、かといってそういう種目なら攻撃しないわけには……。

「勝負内容は本来は鴉天狗が将来の伴侶を決める際に用いる、妖怪の山一周だ。2人とも位置につけ。」

積んだ。文相手にどう速度で勝てど？

いや、それより今将来の伴侶で……。

「よーい!!!スタート!!!」

考える間もなく、天魔の合図が響き渡る。

いつの間にか集まっていた天狗のギャラリーは

女性 「キヤアアアア!! 文ちゃんがついに伴侶を決めようとしてるー!!!」
男性 「あの野郎は誰だ!! 俺たちの射命丸を後から横入りしやがって!!!」

もう言いたい放題だ・・・。

「この勝負、妨害なしの速度対決なのが唯一、よかったことだな・・・。

さて、全開で行くとバテるし、まずは半分で・・・。

うお!!!」

もう、すぐそこに文が迫っていた。

「うそだ!!! どんな速度だよ!!!」

しようがなく俺も全速で飛びぬける。

妖怪の山のまわりはそんじよそこらの山と違いバカみたいな広さなのに文は全然ばてない・・・。

「ああ!! もう。潔く私に勝ちを譲りなさい!!」

山の外にほっぽりだしてあなたとの間に生まれた伴侶疑惑を抹消します!!!」

「んな簡単に負けてたまるかよ!!!」

ラストスパート!!!あと10 kmほどで決着!!!

「そんなに、私にいかがわしい命令をしたいのですか!!!」

ルールを盾に最低ですよ!!!」

ぐふっ!!感じてはいたが直接言われるのはなおキツイ!!て、まてよ・・・

「おい!!『命令』とか『ルール』ってどういう意味だ!!」

「この勝負のルールは勝ったほうが負けたほうにどんな命令でもしたがわせられる。

天魔様が『風の噂』で伝令したとうりですよ!!」

聞いてねえよ!!てか天狗以外には聞こえねえんだろ!!『風の噂』!!

どうりで周りの眼が痛いはずだよ!!!

必死になって文に変態的命令を実行させようとしてるやつみてえじゃねえか!!
そりゃひくわ!!!

だが、もうトップスピードの速度はなかなか落ちず。
結局ゴールまで必死状態のまま突っ込んだ。。。。。

「勝者は!!!!
。。。。。

射命丸文!!!」

天魔の宣言とともに天狗全員が悪役を打ち負かしたヒーローに盛り上がった・・・。

第25話―妖怪の山での新たな日常。

「かはっ!!げほっ!!ごほっごほっ。」

速度対決の判定が下った直後、俺は肺に入りすぎた空気を吐き出した。

要はむせた。

射命丸は能力で避けたのか、平然としている。

「それでは！勝者射命丸。ルールにのっとりお前は双覇に何か一つ命令できるわけだが、なにを命じる？」

天魔の厳格な声が響く。

はあく。文に会いにここに来たつてのに、その文に追い出されちや意味ねえよなく。

どうせ命令は山を出ていけ！だろうし、つかレース中に言ってたし・・・。

「はい。天魔様。私鴉天狗 射命丸文は……」

この者、白雲双覇に将来の伴侶とし、ともに歩み今この瞬間から私の家で生活することを命じます。

私の恥をうばったこの者には必ず責任を取らせませす。」

そんな予想だにしないことを言つてのけた。 はあ!?

「ちよつ・ちよつと待て！射命丸!!お前さつきレース中に俺を山から追い出すと命じ
るつて言つてたはずだろ!!どうしてそんな」

すると・・・

「あややや。言わなきやダメですか?・・・『てれ隠し』です!」

俺の顔を見上げる形、つまり上目遣いで言った。

やっべ!!可愛い!!!

じゃなかった・・・。どういうことだ。いまだに文から俺に伸びる線には敵意が強く
こめられてるはずなのに、どうして・・・?

「ほくら!私の家まで飛んで行くんですから早くしてください!旦那様?

『私に追い付けますか？』

旦那様。+偶然にも文に言ってほしかった転生前に聞きまくってた歌の歌詞をささやかれドキツとする。

「とりあえずはついて言ってみるか・・・。」

俺が文について行って飛ぶと周りの鴉天狗（男）の罵声ががんがん俺にとんでくる。
なかには、「射命丸てめえ!!俺のこと好きっていったろ!!」て奴まで・・・。
まさかな。

射命丸の家は木造のログハウスのなかんじの2階建て。

1人にしては、若干でかい気がしなくもないが部屋が余りすぎるってことも無いだろう。

「へへえ。良い家だな風の通りもいいし、空気も良い。

俺もこの辺に家建てるとするか……。」

俺は、もちろん好かれるどころか現在むしろ嫌われてる女の子の家にこっちが一方的に好きという理由で泊るわけにもいかないのです、

とりあえず、木材を集めようと玄関を出ようとしたその時。

「待って!!あなたはここを出ちゃダメなんです。命令なんですよ?」

私と暮らさなきゃ天魔様に言いますよ?」

俺の服の裾をつまみ、文が泣きながら言ってくる。

「悪いけど俺は、好かれてもいない女の子の家に泊まる気にはなれない。」

「あやや何を言ってるんですか？私にはあなたが好きなんですよ。そうじゃなきゃほかに自分の家に止める理由なんて・・・無いですよ。」

顔を赤く染めた文が恥ずかしそうに振り向かせた俺の口に自分の口を寄せてくる。でも・・・

「文。俺はお前が好きだ、今だっけどうにか抑えてるような情けない状態だ・・・」

だったら・・・と言う文。

「でも！それでも。駄目だよこんなに可愛い女の子が自分の身を粗末に扱ったりしちゃ俺はそういうことは本当に好きになってくれたあとじゃないと嫌なんだ。」

泣いて。おびえてる娘に迫られたっけうれしきなんてちっとも無い。

それがどれだけ好きな相手でも。ね」

それから、文は少しずつ話し始めた。

最近、男の鴉天狗がよく家に押しかけ求婚してくること。

断ると悲しそうにするのでせめてものでそのひとの良い所を褒め、好きだと言って断っていること。

「でも、そのせいもあってか。去年の秋くらいから何人かが俺のこと好きって言ったろ！ ってどなつてきて……。」

「それで、護身として俺と結婚することにすればそいつらもひくかもつてか……。」

はい。とうなずく文。

「いや、そりゃ逆だ。火に油で燃え上がつちまうぞ……。」

俺の不安は的中し直後に、玄関の扉が外から斬られ壊された。

天狗A「たのむよ。射命丸。そいつとはわかれて俺と結婚してくれお前のために強くなっただ。」

天狗B「ああ。俺なんか狩りの腕じゃもうここらで勝てるやつはいないぜ？

絶対に貧相な暮らしはさせねえからさ」

天狗C「ああ。おれならお前をもっと美しく、もっと可愛くできるからさあ」

揃いもそろって気持ちの悪い天狗が妖刀を構えて文に近づく、文から伸びてる線は『真つ青』圧倒的な恐怖。

「奇色の悪い御託ならべて、夫（仮）の前で妻を怖がらせてんじゃねえよ!!!」

俺は天狗の1匹に思いつき蹴りを叩き込みそのまま残りの2匹を巻き込んで外に追い出した。

「何をする!!下等な人間風情が!!鴉天狗を足蹴にするなど!」

天狗共はくちぐちに言う。

あゝ。腹立つ

!!!!!!

「てめえら。好きな女に振られたからって陰湿に付きまとってんじゃねえよ!!

おれなんか人生でもう数え切れねえぐらい振られてんだよ!! てめえらみたいなバカな真似はしたことねえけどな。」

俺の言葉にむかついたのか、天狗3匹がまとめて襲いかかってくる。

「貴様に何がわかる!! 射命丸は鴉天狗のなかでも1, 2を争う強さだ! その遺伝子があれば! 優秀な子が生まれ大天狗以上は確実だ!」

あつ? 要は射命丸自体は愛してないが優秀な子に遺伝子を残すために結婚しろとほざいてんのか? そういやさつきもつと美しくとか言つてた勘違い野郎もいたもんな。

「わかった。もう2度と口を開くんじゃねえ。文の可愛さを美しさを気高さを全部、全部遺伝子がどうので片づけるお前らには絶対に渡さねえ。」

文は俺が俺に惚れさせて幸せにする! 少なくともてめえらみたいなバカから守れる

ようにな!!」

叫び。おれは妖力を全開にする。体から黒い体毛が生え、狼の耳、しっぽ、牙を滾らせ殺気を放つ。

「『結び合わせ』鴉天狗十死」

唱え終わった瞬間鴉天狗3匹が全員倒れ、泡を吹いた。

『結び合わせ』は自分の持つイメージを相手に与える。または相手の持つ感情イメージを共有する技。

「その程度ですんでよかったと思え。天魔との立場上殺すことはしない。」

今の場合俺が放った『殺気』を『死』のイメージとして相手の本能に直接結びつけた。つまり唱え終わった瞬間あいっらの体は

尋常じゃない殺気を漂わせた俺に『殺された』というイメージを本能で理解した。今は心臓の鼓動もちゃんとある。

一瞬だけリアルに死を体験させたのだ。

「さて、戻るか射命丸．．あれ？」

しまった。ちよつと本気で放ち過ぎた、文まで気絶してる。（泡は吹いてない！断じてだ！）

「しょうが．．無い．．．よな？」

結局ドギマギしながら、中に射命丸を運び入れ部屋に入るわけにもいかないの
で、リビングに祥磨の能力で、ベッドを召喚。

「おれは．．．。外にでも寝るか．．．、あの天狗3匹を天魔に渡してくる必要もあるし。」

そう思い、俺は射命丸の家をでた。

．．．．〈次の日 射命丸サイド〉．．．．
「ん。んうゝゝ!!」

朝の陽光に照らされ目が覚めた私は、着替えもせず見たことも無いベッドで寝てました。

「あやや？確か昨日は双覇さんがうちにきて、それであの人たちを．．．。
どうしたんでしょう？取材してみないといけませんねえ。」

昨日のことを取材すると心にきめ、たぶん守ってくれたのだからお礼も言わなきゃなと思つて玄関を出ると。

「あややや!?!もう。こんなところで寝たら風邪ひいちゃいますよ。

言つてくれれば空き部屋も少しは・・・。」

「本当に好きなのやつじやないと一緒には住めないの!」そう言った彼は私のことを好きだ。と言つてくれました。

じゃあ私は?

「んうゝ。むにやむにや」

私を守り、そして誠実で几帳面な彼の穏やかな、ちよつとかわいい寝顔に癒され。
胸にぼかぼかする気持ちを見つけた私は・・・

「ありがとうございます。かつこよかったですよ。双覇さん？」

間違いない。全速力で、自分に取材するまでも無く、白雲双覇が『大好き』だ。

第26話―風神少女との日常。

「んーくあゝゝゝ!!! さっむ!!」

俺は、凍えるような冷気に身震いし、目をこすつて起きた。

「そーいや、すつかり失念してた……。今この山つて秋なんだよなあ。」

「そりや寒むいよな……。ん?」

テーブルの上に文のものと思われる書き置き発見。

『双覇さんへ』

あんまり、気持ち良さそうに眠っていたので起こさないで書き置きをすることにしました。

今日ははたての家に行きます。椀も非番で一緒ですから心配しないでください。

それと、女の子だけのおしゃべり会なので絶対にこないでください!!!

p s、帰るのは子の刻になります。』

「子の刻っていうと1時くらいか。ならばこし山の奥で狩りでもしてようかな
昼飯の材料も必要だし。」

みんなもわかってると思うが文に鶏肉は出しちゃいけない。これは世界の心理です。
異論は認めん！

．．．．．〈双覇サイドアウト〉．．．．．

．．．．．〈射命丸サイド〉．．．．．

「というわけなんです、やはりあのとき感じたあの感情は……
あのくそのく。ね!？」

私は家から少し、山を下り私の所より幾分風の通りにくい、
友人『姫海棠 はたて』（ひめかいどうはたて）の家を訪ねていた。

「いやいや……。ねっ!?! つてなによ……」

「ついに、文さんにも恋の季節がやってきたんですね!!!」

「なんで、今ので理解出来んのよツ!!」

はあく。とうなだれるはたて。『文さん』と私を呼んだのは私のいえ、

『鴉天狗』の部下に当たる『白狼天狗』。名前は、

『犬走 椀』（いぬばしりもみじ）まじめで、組織を重んじる天狗社会の申し子
見たいな存在。

「あ、あややややややや!! いやそうではなくて……。あれ? そうなのでしょうか?」

「どつちよ……。そして何を相談しに来たのよ……。」

「そうです! 昨夜私を守ってくれた青年。双覇さんにたいして私が持った。持ってしまつたこの感情の正体を突き止めたかったのでした。」

「ですから、先ほどから言つてるとうりのことが昨夜ありまして、私としてはお礼もまだなのでしたいのですがどうしても彼の前だと、言葉に詰まつてしまつて……。」

「はあく。あんた何年生きてんのよ。初心にもほどがあるわよ!」

「たくつなんでわざわざ休んでる時に惚気なんざ聞かされなきゃならないのよ……。」

「そういう、はたてだつてまだ恋とかお付き合いとかしてないじゃないですか!!」

「人のことよく初心だとか言えますね!! あ。いえ! まだこの感情の正体はつかめてませんが!」

私としたことが・・・。事実をきちんと突き詰めていかないと。私は記者を目指しているのですから

「いやいや。もう答えでたじゃない・・・。

自分で恋心だつて言つたわよ。それじゃもう大丈夫ね。告白でもなんでも勝手にしなさい。

そう思うでしょ？ 椀。」

「そうですね。文さんもはたてさんも、もちろん私もこの山で恋らしい恋をしてる女性天狗はなかなかいませんからね。」

それでも、客観的にそれは恋だと思えますよ？」

ぐぬぬ!! 椀までそう言いますか・・・。ならやっぱりそうなのでしょうか？

しかし相手は天魔さまがおっしゃっていたとうりだと神と言うことになります・・・。

「私でつり合いがとれるのでしょうか・・・。」

ぼそつ。と漏らした不満。それを聞いたはたたと椀が・・・

「なに言ってるのよ・・・？」

あつちはもうあんに告つてるようなものでしょ。それに恋に種族間をもちだすのは野暮よ。」

「そうですよ。文さんの良い所をあの人はまだ会つて間もないですがきつと一杯わかつてるんです。良いですね。私も好きな人と両想いになりたいです・・・。」

「椀?!?あんだ好きな人なんていたの?!?!?」

「はい。ですがその人にはもう好きな人がいるみたいで・・・。」

私の思いは届かないことはわかつてるんです。」

椀が満面の笑顔でしかし悲しそうに笑った。

「そ！そ！ういえば文さん私なにかあつたらすぐに行動できるように昨日文さんの家を

『視て』たんですけど双覇さんのあの姿はなんですか？

真っ黒い体毛の『狼天狗』みたいでしたか・・・」

椀の能力は『千里先を見通す程度の能力』つまり千里眼だ。

それとあの時の双覇さんに関しては・・・

「私にもわからない。たぶん半妖だと言ってたから妖怪のほうの力だと思う。」

「そうですか・・・。なら私が名前を付けます。」

私が白狼天狗ですから黒い双覇さんは『黒狼天狗』がいいんじゃないですか？」

私は、椀が着けてくれた名前を双覇に教えてあげることにしてはたての家を出た。

うつそうとした木々が生え、薄暗い。

「あやや？もう日の位置が子の刻まで上がっちゃってるじゃないですか・・・。

いそがないと！」

すると『キャアアアア!!!』

「なんですか!?!急がないといけないんですがねっ!!」

森の奥から女の子の悲鳴が聞こえその方向に飛び立つ!!

「ば・・・化け物。た、助けて・・・!」

見ると、私に似た女の子が大きなクマの妖怪に襲われていました。

もうすこし!!!

「届くっ!!!かはっ!?!」

ズザアツツ!!!突如横から妖力弾が飛んできて吹き飛ばされる私。

「おお!!当たった。こいつは・・・鴉天狗の女か!!ちょうど良いお前ら天狗には
いらいらしてたんだ。さっさとあきらめてこの山を渡せば良いのによく!!」

私を吹き飛ばしたのは3人の鬼でした。

正直、私が本気で戦えば勝てなくはない。でも今は優先事項がちがう!!

「す。すいませんですが、私たちももう住処がありませんので・・・

かはっ
!!!!?」

下手に出ようとしたところで思いっきりお腹を殴られ、私の意識は途切れた。

・・・
〈射命丸サイドアウト〉・・・

・・・
〈双覇サイド〉・・・

「キヤアアアアア!!!」

「なんだっ!?!」

女の子の悲鳴が聞こえた。しかもなぜかここに居るはずのない聞いたことがある女の子の声。

「まさか、でもいそがねえと!!!!」

確か前にイザナギが俺たちとは違う方法で、こっちに来たやつがいると言っていた。まさか、それが『あいつ』か!?

「ためしてみるか…。頼むもう少し頑張つてくれよ。
『結い』結神+夜神さつき!!」

おれはここに居るわけがない名前を……

居てほしくない名前を叫ぶ。

「そ
・
・
・
双覇
・
・
・
・
。」

そこには恐怖に顔をひきつらせた・・・

幼馴染 夜神さつきが居た・・・

第27話—鴉と幼馴染。波乱の幕開け?

「……さ。さつき……なのか?」

目の前の人物がここにいるわけがない。ここで、この世界で俺と話してるわけがない。俺の頭はもう目に見えて、存在してるはずのさつきをなんとか否定しようとした。
が

「そ……うは……。双覇!!!!うわくん!!良かったやっぱり生きてた!!」

俺の一握りの期待を無視し、自分の存在をアピールするように涙をながさつき。そっか。ほんとにこっちにきちやったのか……。

「ごめんな。さつき心配させちまって、昔から責任感が強い奴だったもんな。さて、んじゃこいつを仕留めて……っ!!」

泣くさつきをなんとか慰め、クマに向きなおる。今日はクマ鍋かなくなんて考えてる

「ギャアアアウウウウウウ!!!」

瞬間、クマは吹き飛ばされていた。飛びながら肉塊になって。

「うるせえんだよ……。ちよつと黙つてろ畜生が……」

とにかく、急がなければ!!! さつきを訓練してる時間も無い。
なら、

「さつき、今からお前を能力で送る……。あれ？」

気絶しちまつてる……。さつき放出した神力にあてられたか？
とりあえず、能力で送つてと……

「もうちよつと。持ちこたえてくれよ!!! 『結い』射命丸文＋結神」

俺と射命丸の間の距離を遮断し、一気に詰める。

そこには・・・

「ヒヤッハツハツ!! さっさと天狗共がでてけば、こんな見せしめもいらねえんだけどなあ!!」

3匹の鬼がもうすでにポロポロの文をさらに殴りつけてるところだった・・・
見せしめ。だと？

その『好奇』と『爽快』のみでの行動が戦略的なみせしめだと!?

「おい。お前ら・・・。いいかげんにしろよ。」

こいつら・・・。自分が今生きていられる理由も理解してないくせに。

鬼A 「あつ!?! なんだなんだお仲間か? これだから群れることしかできない貧弱な天狗つてのは・・・。何が天狗の縦社会だ妖怪はもともと誰に支配されるでもなく、自由に好き勝手やるもんだ。」

群れることしかできねえ。だと……

ダメだ。もう限界だこいつら自分と相手の力量を測りきれてないのか……。

「そうか。なら俺も好き勝手やることにしよう……。

ただし、妖怪としてじゃない。射命丸文に惚れた一人の男として彼女を傷つけた奴をゆるさねえ!!!」

霊力解放!!!

したと同時に襲いかかってきたので鬼の首を手刀で叩き折る。

「グギャッ!!!」

奇妙な声をあげて1人は死んだ。

「てめえらもやるか？言つとくが次からはこいつが生易しいくらいにぼこぼこにしてやる。」

鬼どもはさつききの強気はどこへやら。真つ青になり首を横に振る。

「なら、お前らの長にその『生ゴミ』持ってって伝えろ。」

お前の仲間を殺つたのは、天狗の仲間じゃない『結神』という強い神だったとな。」「もし、文がやったことにしたり、天狗の里に鬼が攻めてきたりしたら全員搔つ捌くから、俺をあんまり怒らせんなよ?」

俺の伝言を聞いて鬼は山の奥のほうへ仲間の亡骸をもつて逃げて行つた。

「・・・はさん?・・・うはさん?」

ツ!!!この声は!

「文!!よかつた。本当によかつた・・・」

俺は文の傷に触れないようにそつと抱きしめた

「あやや!どうしたんですか・・・。双霸さん。えつとあの鬼達殺してませんよね?」

天狗の里によけいな被害を出すわけにはいきませんから・・・」

やっぱり、そうか。自分と相手の力量を測れねえような小物だったが一応は鬼。

倒せる相手でありながら、自分が攻撃したら山での立場がもつと下になるからな・

「いや、殺した。だが、俺は天狗の里の者じゃない。天魔が滞在を許しただけのただの半人半妖だ。それよりも……」

文が次に何か言う前に俺は行動に出た。

グシャツ!!!左の腕が飛び鮮血が吹き出す。

「ごめんな?怖い思いさせて、痛かったよな。こんなもんじゃ足りないかもしれないけどこれからは、お前が誰かに居てほしい時泣いてしまいそうな時に必ず……
そば……に……いるから……」

どさつ!そこで、俺の意識は闇に吞まれた。

……〈双覇サイドアウト〉……

．．．．〈射命丸サイド〉．．．．

「(カアア／＼／＼) あややや！顔を暑くしてる場合じゃありませんでした！」

とにかくいまは、双覇さんを治療しないと。

「双覇さんの妖力を見た限り、妖怪としての再生能力はだいぶ高そうですからね．．．
とりあえずは菌が入らないようにして、止血あとは腕をつけるようにしておけば．．
よし。とりあえず再生は始まりましたね。あとは私の家に運んで休ませないと。」

私は双覇さんの体をなんとか抱え、自分の家に飛んだ。

はずなのですが．．．．

「あややや？家の前にだれか倒れてますね？見覚えがありませんが．．．．．
双覇さんの関係の方でしょうか？」

だとしたら．．．。どういいうご関係でしょう。

もしや、恋仲とか……。いえ、しかし昨日恋仲の女性はいないと言っていました。」「ふう。いずれにせよお二人が目覚めるまではここにかくまうしかなさそうですね。全く、『人間禁制の山』だと言うのにこう何度も不思議な力で侵入されたんじや、權もやってられませんよね……。」「

ため息をつき、それぞれ布団に運んだ私はふと気付いた。

「あ。双覇さんは貧血で倒れたんですから、血を補給しないと……。」「

でも、うちは医者だったりしないので、当然急に血といわれても。。。

「ん？あれは……。」「

天狗の乙女には必ず配られる書で、伴侶とより強く結ばれるための『契約』の仕方が書かれている書物。

「でも、いまはこんなもの……。契約？たしか、双覇さんの能力も……」

試してみる価値はあるかも知れない……。
書物によれば、契約の媒体に必要なのは……。妻となるものの血。

「血。ですか……。ん!!ぐっ!!! (ぶしゅっ!)」

わたしは、指先に風の刃を作り腕を斬り。

「んっんっんう」

それを口に含んで彼のもとへ．．．．．

今、思えばあれはあの書物を言いわけにして本能がしたかっただけなのかも知れませ
ん。

あの、玄関に倒れていた子と双覇になにか深い関係があるんじゃないかと不安になったから
無意識のうちに『繋がり』を求めたのかも．．．

ちゅっ。

「んうっんっんちゅっ。．．．」

初めてのキスは血の味がした．．．。

第28話―最速天狗と恋の障害!!!

「ん？（？）は……」

目が覚めると切り離れたはずの左腕がすっかりくつつき、なぜか口の中も血の匂いで一杯になっていた。

「あ。やっと目覚めましたか……。ここは私の家ですよ。

それよりもあの玄関にいた女性は誰なんです？」

えくと……

ありのまま今起こったことを話すぜ……。

昨日までとんでも無く嫌われてたはずの俺がいま文に、さつきのことと嫉妬のように怒られてる……。

惚れ薬だとかおれの妄想の夢だとかそんなチャチなもんじや断じてねえ……！
もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

「あの〜。文さん？さつきとはただの幼馴染であつて別に何の関係も・・・。

というか僕がさつきや文さんみたいな可愛い女の子たちにモテる訳が無いじゃないですか・・・」

「本当ですか？恋仲になつてる女性はいないのですか？」

文さんがまるで本気で嫉妬してるように問い詰めてくる・・・。

「え・・・ええ。僕にそんなお相手は居ませんよ・・・

僕とそんな関係になつてもクラスの笑い物にされるだけですから・・・」

言つてるこつちが情けなくなつてくる・・・

「そう・・・ですか・・・。」

文はしばらく考えたあと。

なぜか、手の平に息を吐きはじめこちらのほうに・・・

「双霸さん口の中血だらけですよ？拭かないと気持ち悪いですよね．．？」

「うん。確かに気持ち悪いんだけど．．．。文さん？大丈夫？顔が紅いよ．．．？」

心配になつてなんとか頭を動かし、額を文の額にぶつける。

「あややく。大丈夫ですよ．．．。熱なんてありません。ですからこれが．．
正常な、冷静な私の判断です。」

文はそのまま俺にもういつほ近づき、首に手を回す

え？

ちようど身長差で、胸に向こうの．．．ぶばっ!!!

「ちよつちよつとまつてよ。文!!!やっぱりどこかおかしいんじや．．．」

必死に説明を求めてもクールダウンを要求しても．．．。

文つと呼び捨てにしてしまったのが悪かったのか．．．。むしろどんどん紅くなつて
眼が興奮してつてる．．．

「はあ．．大丈夫ですよ？双覇。はあ．．接吻なんて親しい家族なら当たり前の事なのですから．．．」

接吻で．．．ぶぼあ!!!

まずい、また血が足らなく．．．

「あややく？その血は私だから出してきてくれるんですか？うれしいですが．．．
また戻さないと貧血になりますね．．．（ペろっ）」

「ツ．．．．．!!!!!!!!!」

やばい。文が俺の鼻血を．．．てかどうしてこんなことに．．

「さあ、もう一回飲んでください双覇。私もてつだいますから．．．」

もう、文の顔がすぐそこに!!!唇が触れ．．．

「なにやってんの？双覇。」

ることは無く。さつきが起きてきて文は瞬々と家事に戻った。

「えっ!? あ。そのいや。あははは．．．」

さつきはキョトンとしたまま残った．．．

俺だつて、わかんないんだよ

!!!!!!!

「と、とりあえず家主の射命丸文さんって人（？）が向こうで掃除してるから

挨拶してきなよ．．．」

さつきはなんでそこにクエスチョンが着くのよ? と言って文のもとに向かって行つた

「はあく。さつきが寝ぼけまなこで助かったら、ばれてたらどうなったことか．．」

．．．．．
〈射命丸サイド〉
．．．

「ふむ。作戦自体はもう完璧だったと思うのですが……。」

私は、廊下や各部屋を掃除しながら何がいけなかったのか反省点を考えていました。

「なぜ。双覇さんはあの状況になっても自分からはなににもしてこないのでしょうか。確かはたてから聞いた話ではもう少しだったと思うのですが……。」

「なにが、もう少しだったんですか？」

ツ!!?? 私が振り向くとそこにはさつきと呼ばれた例の私に似た幼馴染が立っていた。

「あややや? どうしたんですか? さつきさん。私何か口にだしていましたか?」

「ええ。まあひとつ言っておきます……。」

「双覇を攻略して夫にするのは私なので文さんはあきらめてくださいいね?」

いやに挑発的な笑みを浮かべるさつきさん。

「残念ながら、私はもう双覇さんから告白もされてしまいましたからねえ。
あとは攻めて攻めて、攻めまくります！」

「でも、いざ双覇を前にすると恥ずかしくて何もできなくなる・・・？」

「ぐぬっ!!! 確かにそういう時期もありましたがもう『好き』とわかりふつきれた
私にはそんなこと!!!」

必死の反論には相手も共感したらしく。どちらともなく笑いあった・・・。
夜神 さつきさん・・・負けませんよ
!!!!!!

．．．．〈双覇サイド〉．．．．

「うーん。結局自分の血の処理は自分でになっちゃったな．．．

文は一体何がしたかったんだろ??能力つかえば．．．．」

いや、だめだめだめ!!!文を自分自身の力で惚れさせる！て決めたんだから能力を使うのは自信の無い証拠!!

「いや、実際自信ないんだけどさ．．．．」

だって相手は超美少女だよ!?あの射命丸文だよ!?甘甘、ヤンデレ、ツンデレ、天然、なんでもござれの完璧美少女だよ!?

「この戦力差で自信を持つほうがどうかしてるよ．．．． あっ（ふらっ）」

貧血でおぼつかなかった足元が完全に崩れ、倒れこみそうになる．．．

「大丈夫ですか？ 双覇さん？（にこっ）」

「う．．．うん。」

その笑顔が反則なんだよー！！と叫びたかったがなんとか耐えた。

「あやや。血が固まってしまってますね．．．洗濯ならこっちですよ」

ぐいっ！とひっぱり俺の体に密着してくる文。さつき胸にあった感触がこんどは左腕にふにふに当たっていた．．．。

「これは．．．。まずい（／／／／）」

赤面がものすごい。そりや仕方ない。男ならみんな誰でもこうなるはずです。アブノーマル以外は．．．

「(ジャブジャブ!!) ふいふ。やっと解放されたら。いや別に嫌じゃなかったけど
むしろ超うれしかったけど俺の理性が持たないよ・・・」

外の洗濯所に連れてこられてすぐに文は帰って行った。

帰り際に「なぜ襲ってこないのですか?」と言っていた気がするが好きでも無い男
に襲われるのを望む訳は無いので聞き間違いだらう・・・

「やつほく。双覇!」

あれ? さつきが歩いてきた。たしか家の掃除をするって言ってたはずなんだけど…

「さつき。お前たしか中の掃除すんじや無かったか?」

すると、はにかんで

「うん。でも双覇とはなしたくなっちゃってさ!」

「そっか、俺もちよつと話したかったことはあるんだけどな…」

お前をこつちに呼んだのは誰だ?」

そして、俺たちは能力の話や種族の話、俺はこつちに来てからのさつきは向こうの世界の話。そんな話で盛り上がって、洗濯を進めた。

この時に聞いたが、さつきも能力は二つあり、近々見せてくれるそうだ。
さつきのことだから学習する程度の能力とかかな・・・。

余談ではあるが、家の中から文がものすごい剣幕でにらんできてるんだが・・・。
さつきは微妙に勝ち誇ってるし・・・。

俺の知らないところでこいつら何やってんだ・・・？

第29話—VS!!八咫 陽葉!!!

「いいか? さつき。能力をつかうにはまず、自分の能力を把握する必要がある。

まずは瞑想で心を落ち着かせて能力と対話するんだ。」

この山に来て、もうはや2年ほどが過ぎた。

え? 展開がはやい? こまけえこたあいいんだよ!!!

そんなこんなで、あいかわらず天狗と鬼は硬直状態が続き、さつきもある程度こちらの世界に慣れてきたので能力を教えようって魂胆だ。

「はあく。正直能力を使わずにこの2年ここで過ごせたさつきに俺が教えられることはもうないと思うんだけど……。」

さつきは自分の能力もわからないまま俺や文、権の動きや戦いかたを見て戦闘や狩りでの動きかたをマスターした。

まあさすがに靈力や妖力の使い方はすこし困ってたけど……

「わっ!?!頭に変な文字が・・・」

どうやら能力を理解したらしい。

「なんて書いてある?」

「えくと『観察する程度の能力』と『分析する程度の能力』って書いてある。」

ふむ、学習する程度の能力ではなかったか。。。でもこの能力ってたぶんどっちも・・・

「さつき、ちよつと俺を『良く見てろ』。真剣に俺以外が見えなくなるくらいに。

・・・・・・・・・・・・・・・・ふっ!!!
!!!」

俺の言葉に了承したさつきはすぐさまじつと俺を見つめる。ありや確かに俺以外みてねえや・・・wでも、そのほうがたぶんなれるのは早いだろ。

おれはさつきの眼の色が黒から青に変わった瞬間にフルスピードで殴りかかる。

ふつうの奴なら目の前の奴が急接近してきたら、それも他のものが見えなくなるくらい集中して見ていたものが迫ってきたらまちがいに反応できない。

でも、さつきは違う。

「つ!!ん!はあ!!!!!
!!!」

文のフルスピードとほぼ同じくらいの速度で接近した俺の拳をあわてるそぶりも一切無く、さつきは冷静に除けすれ違いざまに俺の腹に蹴りを叩き込んだ。

「ぐつがががつ!! (ずざあああああああ)」

蹴られた衝撃でトップスピードのまま、森に突っ込み木を何本か薙ぎ倒して止まった

「大丈夫つ!!?双覇。」

「ああ。それよりもそれがお前の能力だ、自分の視界に写るものを尋常じゃない精度

で観察する、たぶん視野を広げちまうとそのぶん観察対象が定まらずまばらになるんだらうけど……。そこは鍛えればなんとかなるよ。

分析のほうもわかつたら？」

蹴られた直後、さつきの眼には『×』みたいな形のマークがあった。たぶん分析の力をつかうとああなるんだらう。

「うん。よけるときはただ遅くスローモーションのように見えたからたぶん『観察』

でも、反撃の時に、数式が浮かんできたの。

どれくらいのを力を入れて反撃するのが最適か。今回の場合は相手に怪我をさせない条件付きで。たぶんその数式が『分析』の力。」

「そうか。んじゃ後はひたすらその反復練習だな、がんばれよ？」

俺は、さつきとの特訓に一区切りつけさつきと家に帰ることにした。

ああもちろん文の家ではないぞ？あのと自分で自分の家を作ったんだ。

「つっても隣に作ったからあんまり変わんねえか……」

あれ? そういえば文の奴。今日は襲ってこなかったな?」

そう、さつきと文が会ってからというものでか文が頻繁にべたべたしてくるようになった。いやなわけじゃない。嫌なわけじゃないが……

「何カ月か前には風呂に突っ込んできそうだったしな……」

なんか、もう我慢できません!! 即効で決めて私の大勝利です! とかって声とともに突入してきて、一瞬で赤面(///)してぶっ倒れたんだっただか?

「たくっ! 赤面したかったのはこっちだったの……。結局のぼせた文を風呂場から出して介抱する羽目になったし……」

ぼっ!!! (///) 思い出して顔が一気に熱をもつ。駄目だ。もうよそう。

てなわけで、なぜか男の俺が美少女達の誘惑合戦から逃げるといふ結果に……

普通、男はこういう時はあえてそのままにして楽しむんだらうけど俺の場合はもう

理性てきな意味で耐えられそうにない……。転生前に読んでたラブコメの主人公を「こいつ、なんでここまでフラグ建つてて行動に移さねえんだよ〜」とか思ってた頃の俺を殴り飛ばしたい。あの人たちの心境つてきつと今の俺なんだろうなあ。でも最終的に決めて告白できるあの人たちはすごいなあ。

「はあ。会ったことも無い二次元の産物に関心してもしようがないか……。

それにしても文たちはどうして俺の前で恥ずかしげも無くあんな行動がとれるんだろう？確かに理性をフル稼働してガードしてるけど俺も男なんだよ。」

本当にあの二人は俺が男つて理解してんのかなあ。男とすら見られてなかったら悲しいなあ……。!!!!!!!

ビュオツツツツツ

ん？とんでもない突風が吹いて、山頂に飛ばされる俺の体。

「うわあああああああああああああああああああああ

!!!!!!

とつさのことで、自分を地面と『結びつける』時間も無く風に煽られとんでいき、山頂に『天魔の屋敷』に着いた。

「いつててて!!こっは・・・」

「私の屋敷だ。久しぶりだな双覇どの。」

意気揚々と歩いてきたのは、天魔 八咫陽葉。

彼女はこの妖怪の山の天狗を治める長で天狗のなかで最強の力をもつ。

たしか、鬼子母神が治める鬼達に対しての抑止力も兼ね備えているはずだ。

山の支配状況は若干劣勢であり、鬼子母神には劣るものその辺の鬼じやまず勝てない。

「どの。はつけなくていいって言いましたよ? 天魔様。」

あなたは天狗の長なのでからあまり私を丁重にあつかわないほうがよろしいかと」

俺は周りに天狗はいないとわかってはいたが一応注意を促す。

「ならば、お前も私のことは名前がいい。」

それと昨夜鬼子母神から書状が届いた。この硬直状態に決着を着けるつもりらしい」

「そうか。なら陽葉お前鬼子母神とも仲良かったろ？たしかに天狗の支配地域を広げるのもお前の目標だろうけど・・・。お前はそれでいいのか？」

おれはつい、聞いてしまった。彼女の覚悟も知らずに、

「っ!!私はーもとより天狗の皆の長だ。ゆえにいつかは鬼子母神に打ち勝ち、

山を天狗の完全支配下に置かなければならないんだ。」

そう言い放った天魔は涙を流していた。

「・・・わかった。ならその勝負俺が行ってくる。」

鬼子母神との協定を結んでくる。それも俺の役割だ。」

あきらめて、戦おうとおもったその時、

「頭に乗るな。小僧!!!」

恐ろしい量の妖力を放ち、天魔が激怒する。

「私では勝てぬとでも言いたいのか？貴様なら勝てるという気か？

ならかかってこい!!全力で相手してやる!!!」

天魔はただならぬ殺気とともに能力を発動したらしい、天魔の両の掌に風の渦が舞う

『螺旋を操る程度の能力』

それが、天狗最強と謳われる天魔の能力実際に体験するのはこれが初めてだ。

「ただ、渦巻きを飛ばしてくるんじゃ文と変わんねえよな。天魔たる所以見せてもらおうぜ!!!」

俺は腰に付けた鞘から愛刀を引き抜き、中段に相手を睨むように構える。

この刀は、『氷柱』の依り処として『草薙の剣』をもとに作った刀だ。

諏訪を出る直前に、タケミカツチに頼んで置いた。

銘は『電桜―狼牙』（ひようおうろうが）種類は妖刀。青白く美しい刀身と漆の黒に桜の花弁が描かれた鞘の刀だ。

それと腰にはもう一本刀がある、こっちは霊刀。

銘は『結月―龍爪』（ゆいげつりゆうそう）鞘には同じく漆の黒が使用されているが模様は無く。

刀身にも持ち手の近くに三日月の文様があるだけ。どう考えても電桜のほうが名刀に

見えるが俺は結月のほうが好きだ。

なんの繋がりも無い自分だけを見つめられるようで。

「いくぞっ!!!」

天魔が叫ぶ、

「おうっ!」

俺が応え、一気に肉薄……

しようとしたところで、俺は見えない壁にはじかれその場に倒れ込んだ．．．。

第30話―鴉舞う山、鬼笑う山

『螺旋』―通常それは竜巻やホラ貝などの巻貝のように中心となる細い小さな渦から

上昇、もしくは下降することによりその方向にどんどん大きくかつどんどん規模を大きくする。

そのことから、実際はただのぐるぐるに見え、繰り返しの構造でありながら同じ場所を通らない螺旋は

芸術や概念の観点においては『歴史』や『生命』といった『無限の広がり（上昇）』を意味する。

「『螺旋を操る』つてのは・・・つまりはそういう概念的な象徴も操作対象になるわけだ!!!
ぐっ！」

結論から言うと、俺は攻めあぐねていた。

最初に俺が吹っ飛ばされた原因は攻撃方法だ。あのとき俺は刀の突きを喰らわせようとしていた。

「物が進むとき、そのものにかかる推進力は風をうけることで本来の速度を維持し続けることができず止まる。」

そして、それを避けるために最も効率的なのが回転を加えることだ。

回転による直進の推進力を利用して突きを入れようとしたところで能力が使われた。

俺が作り出した螺旋に対し逆方向の螺旋をたたきつけられた。

俺がはじかれたのは異なる力同士がぶつかり消えずに余った衝撃が爆発したからだ。

「どくすつかなく。下手に攻撃を加えようとするとさつきみたいにはじかれて隙が

できちまうし……」

天魔ほどの大妖怪ならその隙の間に俺を5回は殺せるだろなく。

わりと本気でやられそうだから怖い……

「来ないならば……こちらからいくぞ!!!」

天魔がとんでもない速度で近づき、乱打してくる。

ただし、拳で。じゃない拳はまっすぐ防御をたたき壊すようにしか打たれてない。

「ぐっ!!!あがつ!おまえ、自分の拳の『衝撃』に螺旋を加えたな・・・。」

「そのとうり!だが解明しただけでは私は止められないぞ!!!」

つまり、あいつはまっすぐに拳をうってるのにその衝撃を拡散させているのだ、

ちようど竜巻の地面に接してるわずかな面が『拳』、上空に上がるにつれ広がっていく渦が『衝撃』ってな感じで・・・

「だあああああああ!!!畜生!!『結び』拳+衝撃波。

契約解放!斎藤衛。」

おれは龍の鱗で手を完全ガードし天魔が拡散させた衝撃すべてを殴って消し飛ばした
 た

結んだとうりに動くだけだから、反射速度はとんでもないことになってる。

「んっ!!いまのにも対応できるとは……。しかもその腕、お前自身の妖怪の力では無いな……」

おおく。気づかれたか……

「ああ。こいつは俺の親友から契約によつて与えてもらつてる力だ。

俺の妖力も纏わせただが……。やっぱ気付かれるか。」

「当然だな……。さて、そろそろ鬼どもものもとに行かねばならん、決めさせてもらうと!!!!」

妖力を腕に集中させ、なおも能力を行使して乱打を繰り返す。だが天魔はだんだんと距離をとり打撃を弾幕に変える。

「はあく。しょうがない。気はすすまないが天魔わるい。この戦いは能力でさつさと終わらせてもらう。」

俺は能力を結びでは無く絶つほうに使う。

「『落ち着いてください天魔様あなたが敵対してるのは私じゃありません』」

仮に名付けるとするならば 『絶対中立―ヘイト・キャンセラー』 ってところかな？

「ん。ああすまんちよつと頭に血が上ってしまったようだな。能力まで使ってしまうなんて・・・」

今回、俺は天魔から俺に伸びる軽く見られたことによる『怒り』そこから派生する『敵対心』をかき消した。

いや、縁結びの神は何かと何かを結びつける神で関係を断ち切る力はじつは無いんだけどw

「だから、殺意のレベルまでいった場合はもうどうしようもない。」

「お前を殺す!!」 って言われてるのに「まあまあ〜。」と中立に立とうとしてる

奴は頭がおかしいからなw

「ん？私がお前に殺意など抱くわけがないだろう？」

「そうですよね。 はは．．。 ははは．．。」

残念ながら、初めて会った時も殺意を向けてたことは知ってる。

まあ、いきなり自分の領地に不届き者が現れたらそりやく怒るよな．．．。

??? 「なんだい。もう喧嘩はおしまいかい？つまらないねえ。まだ一升飲んでないんだから戦いなよ。」

天魔と和解した直後、寒気がするほどの妖力を浴びた。瞬間的な爆発力ならフェルの妖力と同等レベル。

「ツ・・!!もうなんとなくわかってるが一応聞いておく。お前はだれだ？」

「んあ？あたしかい？あたしの名は焰（ほむら）。鬼子母神の焰だよ。」

よろしくな？ 結神。」

なるほど。こちらのごことは良く理解してるらしい。

でもまあひとつ聞いとかなきゃな・・・

「そうか、んじゃ焰・・・」おっいきなり呼び捨てとはキーンつとくるねえ。

「なんだい？」んなこたあどうでもいい。」

台詞に割りこまれたから一度続けるのをやめ、妖力を徐々に解放し殺気を放つて言う

「てめえ。文に手を出しやがったあの鬼をどうした？協定上慈悲で2人はあんたのもとに返したはずだが・・・」

「・・・。答えなかったらどう受け取るんだい？」

「この場でお前を殺す。適当なことぬかしたりお前の判断が間違つてると判断した時も殺す。」

自分でもそうとうキレてるのがわかる、怒りを全部殺気にしてはなつたら鬼子母神も若干震えてる。まあたぶん武者ぶるいだけ・・・

「そうかい、そうかい。あたしとしてはあえてここで適当にごまかして殺す気で来てもらつてもいいんだが、鬼の流儀は嘘をつかない事だね。

あいつらなら報告を聞いてすぐに殺したよ。

あたしはあのと時すでに天魔に書状を送つててね、

決戦はまだ先で指示も出してないのにあいつらは不意打ちみたいな姑息な真似をしたんだ殺したさ鬼の名誉のために。」

鬼のトップが嘘吐いて油断させるなんてことはしないだろうが一応確認をとるか。

「ほんとか？伊吹 萃香。鬼子母神を信用しないわけじゃないが一応は敵だ、鬼二人が殺したと証言して生きてたら鬼の名折れだからな責任を負わせるには十分だ。」

すると、鬼子母神の周囲にだんだんと霧があつまりそれが人。いや鬼の形になつて実体をもつ。

「ありやりや、私が一番ばれないのに自信があつたのに……。こりや勇儀をわらえない

なあ。質問の答えははい。だ焰様はたしかに全員の前であの鬼2人を殺したよ」

彼女が、鬼子母神直下の鬼の四天王が一人。

『伊吹 萃香』（いぶきすいか）だ。能力は『密と疎を操る程度の能力』

簡単に言うくと密度を操り自分を含めたすべての物質を薄めて拡散させたり、萃めて（あつめて）巨大にしたりできる。

「そうか。ならいいやどうせ鬼子母神とはすぐに戦うことになるんだろうし、

それとお前が来て正解だったな萃香。勇儀はお前よりも幾分好戦的だと聞いている。

来てたら話し合いどころじゃねえもんなw」

ちがいないっwと萃香、鬼子母神も笑い、すこしして真剣な顔になって。

「それじゃ、『結神』どの。あたしはあんたのことが気に入った。すぐにでも勝負したいところなんだけど。この山の所有権を賭けるんだそんなすぐにやってもつまらないし・・・3日後。3日後にこの屋敷の奥の鬼の闘技場にきな。

どうせなら殴り合いだ。武器の使用は不可。それ以外なら何をしてもいいよ？

鬼の弱点なんてそんなもん無いと思うけどね」

威圧たつぷりに、焰が笑う。

「上等だ。その『傲慢』こそがお前の弱点だと思い知らせてやるよ。」

俺が言った瞬間、鬼子母神は大きく笑い萃香とともに帰って行った。

「さて、3日後か……。鬼子母神が俺の予想どうりの戦闘スタイルならアレがきくだろうから一応つくっておこうか……。できればほんとに殴りあいでも勝ちたいんだけどね……。」

ため息を吐き、天魔と別れを告げて俺は自分の家に戻って行った。

第31話―激闘へのカウントダウン。決戦は3日後!

「え〜と、アレの材料はこの茸とあの木のツタと・・・」

俺は天魔と別れてすぐに、森の奥のほうに帰り道からそれで、とある『薬』の材料を探していた。

「転生前の二次動画で見た程度のにわか知識だけ・・・。もし鬼子母神が勇儀達と同様に、戦闘中にあの行動を取るとすれば・・・。」

そんな感じで、山を駆け採集しまくって元の家路に戻って歩く。

「う〜ん。材料は集まったけどやっぱそう都合よく群生はしてなかったなあ。」

なんか視線も感じたし・・・、鬼になんか細工の準備してるのばれちまったかなあ。」

文の家と、その隣に建てた俺の家は風通しの良い山頂付近に建てられているため、寄り道（先ほどの採集）をしなければ10分程度歩くだけだ。

「文とさつきになんて言おう…。いや文には天魔のほうから伝令としてなんか行くか？
じゃあ俺はさつきか…。ん？」

中から、なんか聞こえる。俺の家じゃなく文の家の前だから家主の射命丸文と居候の夜神さつきの2人分の声ならまだ良いだろう。

でも……………

1 「あややや!!どうしましょう…。もう1時間も戻ってきてませんよ…。

天魔様のところに行ってるのなら往復20分ですし、双覇の実力なら指令がでてそんな難しくは無いはずなのに……………」

2 「あれれ？そんなに心配しちやって…。双覇のことを信じてないの？
彼氏のことを信じて待つのが彼女の務めなのよ？……………」

でも本場に万が一にかあつたら……………双覇……………!!! (泣)

3 「ハアゝ落ち着きなさい。あなたたちが心配する気持ちもわかるけど双覇さん？
は天魔様にも負けない強さなんでしょう？もし仮にその人が何者かに実力で負けたなら私たちじゃ束でかかっても勝てないわよ。」

4 「そうですね。大丈夫です千里眼で天魔様のほうに飛ばされるのだけは目撃してましたから少なくとも他の女の子の処には行ってませんよ・・・。」

3 「あれ?なんであんたが双覇さんの女性事情を心配してんのよ?」

4 「そ。それは・・・。。かなわぬ恋とはわかってはいますがそれでも気持ちは伝えなければいけませんよね・・・。」

最後は何人か居るうちの同一人物の声つぽかったけど、にしたって4人・・・。
おかしい、ここは二人暮らしのはず・・・

4 「わ。私は・・・私も!!文さんやきつきさん同様双覇さんが(二元)人の家で何やつてくれとんじやー!!!」 大好きなんです!!! え? (へ?)」

明らかに家の中の住人が多いことが分かってからのおれの行動は早かった。

祥磨の能力ですぐに合鍵を作った・・・はいいけど鍵かかって無かったのでそのまま突入!!

でも、そこに居たのは・・・

「え?あの・・・その・・・権?」

「(カアツ／＼／＼) えつとその．．．ごめんなさい!!失礼しました!!!」

嵐のように去って行った文の部下、白狼天狗の犬走椀。

「うっわあ．．．。なんてタイミングで入ってくるんですか結神さま．．。」

真剣と書いてマジと読むほどの勢いで引いたのは姫海棠 はたて(ひめかいどうはたて) 文と同じく鴉天狗で、命令の無い限りはあまり外に出てるのを見たことがない。

「．．．．．。そんなこと言われても．．．。あと俺のことは結神じゃなくて双覇って呼んでくれ。そのほうが楽だ．．。」

「ふくん。文達の言ってた『双覇さん』って結神さまのことだったんですか。」

知らなかったのかよ!!? って感じだが、はたてとは文との勝負の時にちよつと挨拶してもらった程度だったりする．．。

「ああ．．．。ところで．．．どうして文とさつきまで顔真つ赤にして飛びだしていったん

だ？」

告白を聞かれてしまった椀はともかく、なんでさつきと文まで・・・

いや、告白されたなんて信じられないけど・・・。

「たぶん、どつから聞かれたか気にしてんでしょうね・・・。(十恋敵が思わぬところから増えたり・・・)」

そんな気にする事なのだろうか・・・いや、女の子だけだと思ってるなんか男には言えないことを話題にしてたかもしれないし・・・、とりあえず謝ってこないと!!

「どつからって言っても、聞いちゃまずそうだったのは最後の告白ぐらいで・・・
／／／／と・とにかく!! 2人を探してくる!!」

はたてにそう伝え、すぐに家を飛び出す。

「えーと、2人の居そうな場所は・・・」

まずい……。勢いは良かったけど良く考えたら二人の居場所なんてわかんないじゃん……。

「双覇さん!!!」

「ん……。椀っ!?!」

先ほど俺に告白し、飛び出していた白狼天狗犬走椀がそこにいた。

「えっと……。その……。先ほどの返事とかはしなくて良いですよ?」

どうせ、実らない恋だとはわかってましたし。私の気持ちをつたえておきたかっただけですから。」

「そ……。そうか。そうだ!!椀。お前の能力貸してもらおうぜ!!!」

俺は椀の手をぎゅゅと握り能力発動。

「よし!契約解放!犬走椀『千里眼』!!」

そして、『千里先を見通す程度の能力』で文とさつきを発見。

「ありがとなっ！ 椀。じゃあ俺やんなきやいけないことがあるから!!!」

なんか放心状態の椀を置いて飛び立つ。

その後無事に文とさつきにも事情を説明して事なきを得た。

「ふう。んじゃあとは3日後に向けて家で調合しなきゃな．．．」

．．．．〈双覇サイドアウト〉．．．

．．．．〈樵サイド〉．．．

「．．．．はっ!!!」

しまった。うっかりぼーっとしてました．．．。

双霸さんの手．．．。あつたかくてしっかりしてて、大きくて／／／
「つと私も哨戒の任務にもどりますか．．．。」

(にやつ)「私はその辺の犬とは違うんですよ? 双霸さん．．．。」

笑みをこらえることもせず、哨戒の任務に飛び去った。

．．．．〈樵サイドアウト〉．．．

第32話—山の行方は!? 鬼子母神VS結びの神。

「さうて。一体どれくらいの高さだろうねえ母様と喧嘩しようってやつは……

鬼の四天王が1人。『力』の星熊 勇儀（ほしぐまゆうぎ）!!いくよ!!!」

……えくと。どうしてこうなったんだっけ??

確か、俺は鬼子母神の言ってた闘技場に行くために天魔の屋敷からずっと歩いてて

「考え事をしてるなんて四天王もなめられたもんだねえ!!!」

いつのまにやら接近していた、勇儀が思いつきり拳を振りぬく。

「ん? そんなんじゃ当たんねえぞっ!」

後ろに下がって躲し、事の顛末を思い出す。

きっかけの一言は．．．．．

「ん？あんたが母様の喧嘩相手かい？なんだいだいぶひよろっちいねえ．．．。
おい！お前らこいつの力が見たい。」

「なっ!!この早きにもついてこれんのかい・・・。なら一気に決める!!!」
 勇儀が距離を取る。能力は解除したので引つ張られはしない。

「いくよっ!!わたしの本気!!!『四天王奥義』三步必殺!!!」

自身の最高火力の技を放つ気らしい、腰を落としてその場で正拳突きを構えをとる。

そして・・・

「1で『崩す』!!!」

1歩踏み込み、周りに地響きが轟く。

「2で『打つ』!!!!!!」

2歩目。足二匹のバランスを崩した俺の腹に、勇儀の腕が思いつきりめり込む。

「3で『必殺』!!!」

拳の先から妖力を流し込み相手の内部に衝撃とダメージを与え、確実に殺す。
 爆音とともに土煙があがり、勇儀からは俺が俺からは勇儀が視界から消える・・・。

「やっぱり、これを喰らったら耐えられない・・・か。」

その程度で母様に挑もうってのは無理があるよ?まあもう死体だ。忠告も意味ない

か
」

「だれが死体だって？よく見てからかっこつけたほうが身の為だぜ？勇儀。
手短かに忠告し、距離を結んで一気に肉薄。」

「なにつ!?いつのまに．．．」

とん。勇儀の腹部に軽く触れ唱える。

『結い』勇儀＋衝撃!!!」

唱えた直後、俺の体を逆回転する容量でいままでの衝突で発生したすべての衝撃を掌から送り込む。

「んぐっ?!? ああああああああああ!!!!!!」

さすがの勇儀といえどもこれには耐えきれず! しばらく呻きその場で気絶した。

「よし!!んじや鬼子母神とこに行くか! あそうだ。おい萃香? 勇儀の奴に安静にしてろって言つといてくれ。」

なんか気配がしたので、とりあえず問いかけてみたら案の定「はくい。．．．たくつなんで気配を薄めてるのに気付かれるんだらう．．．」

て答えが返ってきた。まあ俺がそういうのを一番感じ取りやすい神だからとしか言

いようが・・・。

「とにかく。急がないと鬼子母神の奴がキレたらまずいしな・・・!!!」

ダツシユで闘技場に向かう。正直、生きるか死ぬかの戦いなんて本気でやりたくないし、逃げれるなら逃げたいけど文の・・・天狗のためだ。

「逃げるわけにはいかないし・・・。負けるわけにもいかない!!!。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おっ！キタか!!待ちくたびれたぞ双覇。」

闘技場に着いた時鬼子母神。焰はすでに酒盛りをしていた。

「来たか!じゃねえよ。。。これから大事な闘いだつてのに。。。ぶれないなあ
鬼つて奴は。。。」

「ぶつあははははは!!そりやそうさ。鬼が自分より強いかもしれん相手と戦うつてのに
酒を飲まずに待つなんて無理があるよ。」

頬をかすかに朱に染めて焔が豪語する。

「つたく!!それが原因で負けても文句言うなよな!!!」

一気に距離を結び、殴りかかる。

ちなみに、刀はここに来る途中に居た四天王。茨木童子に回収された。

「鬼はそんな情けない真似はしないよつつつ!!!」

焔の右拳が俺の左の拳にぶつかる。

霊力半分でフルコーティングしてるんださっきの勇儀の一撃も耐えきれたんだし、
そう簡単には……………

めきっ!!!ごぎやぼぎやぐちやつ!

接触した直後とんでもない音が響いた。

俺の左腕から・・・

「ぐっ!!あああああああああああああああ

!!!!!!

」

痛いっ!!! 痛い痛い痛い痛い痛い
!!!!!!!!!!

「おっと・・・やりすぎちまったかねえ？」

よっ!!!」

どごーん!!!!!!

焰は悶絶する俺の頬に平手打ちをかまして、吹き飛ばした。

「まあ、この程度で死んでるとは思えないからねえ一応宣言しておこう。

私の能力は『種族を育み、祖となる程度の能力』私は家族の力をすべて使えるんだ。」

「俺と似たような能力だな・・・いや鬼からしか借りられない分あつちのほうは少し強力かもな・・・。」

てことはあの馬鹿力は勇儀の能力の元祖ってことか、萃香や茨木童子。

他の四天王や鬼の能力も使われるんだからちよつときついな・・・。」

＋して今俺は負傷中だ・・・

左腕なしでどうやって立ち向かうか……。

「ん？ そうだ。契約解放!!! 『伊邪那岐命』」

つい最近まですっかり忘れてたがあいつの能力『支配を司る程度の能力』をおれは持ってるんだった。

「ま、他人に悪意をもって直接使うのは禁止されてるけどな。

『神域』イザナギ式多重結界。」

イザナギ式とは言ったが俺は術式をすっかり見たわけではないので、ただの摸倣ではあるが。

「そこかつ!!!
ん!?!」

俺の居場所を嗅ぎつけた焰が結界に立ち入り飛びのく、

「良い判断だ。この結界内は俺の領域。この10枚の結界の中でお前クラスの大妖怪で

も7枚ほど内側に入れば完全に支配できる。」

「確かに勢い余って飛びだし過ぎたねえ。ちよつと体がしびれちゃったよ……。

でもこの程度なら大したこたあないね!!!」

にやつと笑い焰の体が霧と化す。

「ぐっ!!!萃香の能力か!!!」

萃香の能力を使われるのはマズイ……。微細なものをまとめて支配できるほどこの能力を使いこなせてないし……。

「喰らうが良い!!『霧符』虚無の乱打!!!」

こちらに迫る霧が拳に変わり、またすぐ霧散する。

うがああああああああああああああ!!という雄たけびとともに迫る乱打。

「くそっ!!契約解除。 &解放!! フェル・スカーレット!十八咫陽葉!!!」

このままじゃ負ける。一か八かアレを試してみるか……。

『チャクラ』の代わりに魔力と霊力を混同させて・・・
影魔法。『DoppelMandoppelman』（影分身の術）

某忍者マンガの主人公よろしく。両手の中指と人差し指を重ねて十字を作り、
分身を呼び出す。

双覇1「ふう。まだ一人呼ぶので一杯一杯だな・・・」

双覇2「そうだな。これからはできるだけ魔力の練習もして、もっと数呼べるように
しとかなないと・・・戦闘ではあまり使えねえな。」

「まあ・・・でもとりあえず、今は一気に決めるか!!!」

分身に指示を出し、右手に霊力と妖力を集中させて陽葉の螺旋の力で乱回転を生み出
した青白い球体を作り出す。

「おおっ!!!そつちも大技で決めにくるかのおお!!!
なら、こちらは一気に決めるとしよう
!!!!!!!」

焰は瓢箪の酒を一気に飲みほし、顔をほのかに朱に染め（若干最初より赤くなってる）腰を落とし、息を整え正拳突き of 構えを取る。

ま・ま・ま・ま
ずい
!!!!

「即効で決める!!! うおおおお!! 『乱符』螺旋丸!!!!」

「焰流『元祖三步必殺』!!!」

1で崩し、

2で打ち

3で必殺

鬼子母神が踏み込みで、勇儀よりも規模のでかい地震を引き起こす。
うわあ。周りがぼやけてるってことは若干空間ごと崩れてんじやん・・・・。

「ぐはあつつつ!!!!」

焰の三步必殺! 腹に喰らい、派手に吐血する。何も入ってない胃がそのまま吐きでそ

うな勢いだ。

「かはっ!!(っ)ほっ!!」

視界が定まらない……。目の前にいる焔に反撃する力も、残ってない……。くそ……。螺旋丸が消える……。

「双覇!!!!!!
!!立ってください!!!」

ん?あの声は・・・文・・・?

「双覇!双覇~~~~!!お・・・お願い・・・!!立ってくださいよ・・・
勝たなくても良いですから・・・お願いですから・・・生きてください・・・。」

文・・・泣いてる??

「かあく。なんだい!!消化不良だねえ。もう死んだか?いや、まだ霊力も残ってる
し・・・殺しとくか?

いや、むしろあの鴉天狗の娘を殺すか?」

文を・・・殺す・・・?

「はあはあ・・・がはっ!!ごほっ!!てめえ!!!ぶっ殺してやる!!
妖力解放!!!」

黒き体毛と、尻尾、狼の耳。

そして・・・牙。

「(ぞくつつ)なんだい・・・。ほだやれそうじゃないかい。

さあきな!!!

ぐはあっ
!!!!!!」

身体能力の超強化により、一瞬で移動。

『乱符』螺旋丸!!!!!!」

「まだやれんだろ!?酒もそろそろ瓢箪一つ分もう一回できただろうし、
来いよ。」

螺旋丸で吹き飛ばし、鬼子母神を睨みつぶす。

「私をここまで追い詰めるとはねえ．．．!!」。

いいじゃないか!!! 楽しくなってきたよ!!!」

鬼子母神は瓢箪の酒を一息で煽り、妖刀を思いつきり放出する。

周りで観戦してる、白狼天狗、鴉天狗、鬼の一部がつぎつぎと失神し倒れる。

文もがくがくふるえながら耐えている。

(文どころか．．．大天狗も油断したら倒れそうな勢いなのに、椀やはたても見ていてくれるなんて．．．。)

「楽しんでる暇なんてねえよ．．．。一気に終わらせてやる!!!!!!」

『Doppelmanns Infinite』(多重影分身の術)

妖怪状態の時のほうが、魔力が扱いやすいなあ．．．。

「おお!! もっと増えたねえ．．．面白い術じゃないか!!!」

一気に蹴散らしてやるよ。」

焔が拳を振るう。当たった分身はもちろん半径10m圏内に居た10数人の分身も

一気に消える。

「しょうがない……。これを使いたくはなかったけど……」

ふっ!!」

分身に混ざって、近づき鬼子母神に作ってきた薬を近付ける。

「甘い!!!」

拳が当たり、吐血する……。肋骨が折れたような音が響き渡る。文の叫び声がこっちに聞こえてくる。

「甘いのはお前だぜ? 焰。」

肋骨をたたき折られ、もうしやべることすらできないはずの俺がにと笑い、影の中に沈んでいく。

「やあ。俺特性の薬はどんなもんだい? 鬼子母神。」

沈んだ影から俺がもう一回表れ、質問する。目の前には背後の分身に薬を嗅がされる焰の姿。

「ふんっ! 痺れ薬かなにか知らないが薬程度で、鬼の祖である私が……んっ!?!」

焰がふらつき、その場に倒れ伏す。

「これで最後だ。『嵐符』超大玉螺旋丸
!!!!!!」

俺の最後の技をなす術なく受け、鬼子母神はそのまま気絶した。

そして、俺の腕は限界を迎えたらしく右腕も吹き飛んだ。

「う……………」

俺の意識はそこで暗転した。文が駆け寄ってくる声が聞こえる…………。

よかつ…………た…………

その時はそうでも無くても、傷口を見ちやつた時とか他人の場合でも大怪我を見たときってその部分が一気に痛くなるよね？

俺は今まさに、そんな感じだ。

「まあ、傷つてもんが根本から消滅してるのが救いかなあ……。」

これで、腕がもげてて断面が見えるみたいのだったらグロすぎて吐きそうだし、痛覚は麻痺してるから痛くないはずなのに痛みで脳が強制終了してたな。

「いやあ今回は、私が調子に乗りすぎたねえ……。すまん」

申し訳なさそうにつぶやく鬼子母神。はあくたくつ！

「今回のことはお前も俺も合意のうえで、どっちかが死ぬかも知れない状況で行った決闘だ、お前は悪くない。」

今回のこれは俺がまだ弱い所為だ。」

「そう言ってもらえると気が楽になるねえ。」

おっと、そろそろ勇儀と萃香の奴が酒をもつてくるから一回つけときな。」

焰のことばとほぼ同時に、鬼2匹が入ってくる。

「母様く、酒持ってきましたよ。とおお!!目が覚めたんだな双覇!!
いやく『2年ぶり!!!』」

ものすごい笑顔で、とんでもないことしやべりやがった。

．．．．．2年ぶり確かにそう言った。

「え？2年．．．。2年って言ったの??」

腕が吹っ飛んで気絶したんだ、そりゃ即効で意識が回復してるわけではないと思っただ
ど．．．。

「ああ。あんたが気絶したあの戦いからもう2年経ってるよ。

「ここは鬼の里だから天狗の奴らはまだあんたが目覚めたことを知らないだろうけど」

「そっか．．．んっ!!!ぐぐぐぐつがああああああ!!!」

俺は、悲鳴をあげながらも立ち上がろうとする。
右半身は、傷口がすこし開いたのか激痛が走る。軸にしている左腕もボロボロの骨で
体重を支えようとして、筋肉が悲鳴を上げる。

「ちよつ!!ちよつとちよつと何やってんのさ!!」

萃香が必死に俺を押しえつける。

「離せつ!!!ぐつ!!!早くつ・・・早く文の所に行きたいんだ!!!」

あいつは・・・泣いてた!!もう泣かせないって決めたのに泣かせてしまった!!
だから・・・だから早く行って謝んなきゃ!!!」

なおも抵抗する俺を勇儀と萃香が押しえつけ、

「馬鹿が!!そんなことをしてあの鴉天狗の娘がどう思う!!」

よけいに自分を責めるだけだ。今のあるたにできることは体を安静にして傷を治す

ことだ!!」

焰が怒鳴った直後部屋の扉が開いて、男が入ってきた。

見覚えのある、『オレンジがかかった茶髪』、『黄色と緑のパーカー』、『茶色いスニーカー』
を履いた、

彼・・

神薙祥磨と再開を果たした。

「よっ。双覇久しぶり。と、俺に何か言うことは?？」

何億年ぶりに会う、祥磨は月に住んでいたからだろう。
顔も性格も何もかも、わかれたころと変わっていなかった……。

「……久しぶり。ってレベルじゃない年月が過ぎているんだが……。

まあとりあえず……。会って早々爽やかな笑顔で俺に刃を向けるな……。」

祥磨はどっから持ってきたのか……（いや、月の防衛軍のだから。）

見た覚えがあるもん。）刀を俺に向け、爽やかな笑顔で立っている。

「いやぁ……どうしてお前がここに残るって決めてるのに俺を月に行かせたのかも

腹立つし、そのせいでツクヨミがべつたりしてきて大変だったし、お前が抜けた所為で俺が軍の隊長やらされたし、

「……総合してむかついたから斬る。」

「いやあく。ツクヨミとのラブラブ空間を邪魔しちゃ悪いし、あそくだ依姫達は元気だったk……」

しゅごんつ!!!祥磨がダーツの容量で投げた刀が壁に突き刺さる。

ツーと頬に血が一滴流れる。

「冗談は嫌いだぜ?」

いやいやいや。どうしちゃったんだこいつ?

一緒に居た時はまだこういうボケも流してたはずなのに……

「まあ、文句とお前をボコるのは後回しだ。

お前のその怪我についての経緯は見てたからわかってる。」

さも当然のように言う、クソ野郎。

「お前、「見てた。」じゃねえよ!! 助けろよ!!!」

「いいから、説明を良く聞いとけとりあえずこの・・・」

「永琳の薬を飲め。」

いきなり、飛んでも無く恐ろしい発言をしやがったあああああああ
!!!!!!!

「はあっ??!永琳の薬って……いや、たしかに腕生やすなんてキシヨい真似
!!八意印の薬じゃないと不可能だろうけど……」

永琳の薬……効能こそ信用してるが、試薬品を飲まされたときは爆発したこともあつ
たし……

「わっはっは。いいからのめー!」

「んぐっ!!!!(ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ)」

ぎやあああああああああああ
!!!!!!何してくれてんだ。この友人は

「げほっ(ぎ)ほっ! てめえ!!いきなり危険物を飲ませんじゃねえよ!!!
!!!目の前でへらへらしてる親友に、正義の右ストレートを!!!」

「……ん？右ストレート？」

自分の右半身には、先ほどまで完全に消滅してたはずの右腕が確かに存在していた。

「のわあ!!!永琳すげえな……」

やっぱ、ただのマッドサイエンティストではなかったらしい。。

ありがとう。永琳。

「へえ。成功か……爆発も、面白い副作用も無いとはな……」
（ちっ!）」

「てめえ……。今舌うちしやがったなこの野郎……」

まあ、こいつのことは今はどうでもいい。

とりあえず、文に会いに行かなきゃ
!!!!!!

「あつ！てめえ!!待ちやがれ双覇!!治ったんならこれまでの不満をぶち込ませろ!!!」

飛び立つ俺に、拳を構え襲いかかってくる祥磨。

だが、残念。お前との決着はまた今度だ!!!

「おい。鬼子母神、勇儀、萃香、ほかの鬼たち!!」

そこにいる俺の親友。神薙祥磨は俺に負けず劣らず強いぞ!!!誰か、殴り合いの相手を
してやったらどうだ〜!!!」

俺の言葉に即座に反応したらしい、鬼どもは瞬時に祥磨に殴りかかっていた。

さて!これで一安心!!

「あ、双覇てめえまちやがれ!!!」

なんか、誰かの声が聞こえたけど、恐らく空耳だろう。

「おい。文〜。」

しばらく飛び続け、妖怪の山山頂付近『文の家』
うっわ・となりの俺の家、埃がすげえな・・・

「えっ・・・この・・・声・・。」

文が周りを見渡してる・・。

「嘘……でも、あのとき……私が……私の所為で……
双覇!!居るんですか!?!双覇!!」

まさか、ここまで心配してくれてるとはなあ……
ちよつと待たせすぎちやつたな……

「文。ずっと心配かけててごめんな?俺は大丈夫だからそんなに自分を責めないでくれ。」

俺が、再度声をかけると文は勢いよくこちらに振り向き、

「つつつ!!!!!!
!!!!!!双覇~~~~~!!!!!!」

思いつきり抱きついてきた。!!!!!!

「ごめんなさい~~~~、ごめんなさい~~~~、ごめん~~~~、ごめんなさい~~~~。
いつも私の所為で怪我を負わせてしまつて~~~~ごめん。ごめんなさい~~~~。」

文は……泣いていた……。

泣かせたくないから元気な姿で来たのに……結局責任を感じさせてしまった……

「文。俺の腕なら、もう治ってるだろ？気にしなくて良いんだぞ？」

あの勝負は、俺が自分の意思で挑んだ結果なんだから……」

それでも、文は泣きじやくっている。

「私が……。私がよけいなことをした所為で……双霸さん。死ぬところだったんです

よ……。それに腕だつて……。私が居た所為で……。大事な物を奪つてばつかで……

取り返しのつかないことにいつかなりそうで怖くて!!」

文は今にも、壊れてしまいそうなその細い体軀をゆすりなおも泣く……。

「……文。ちよつと顔あげて？」

これをしちゃうとほんとに嫌われそうだけど……。まあ文が泣きやんでくれさえすれば俺は軽蔑されようと、怒られようどどうでもいいや。

「ひぐつぐすつなんですか？

ん!？」

文が顔を上げた。その瞬間!!

「んっちゅっんん・・・」

すすり泣く文の唇に、自分の唇を重ねた。

「んんん!!!んんんんちゅっんっ」

文が、引き離そうとしてくる。・・・

だが、断る!!!

「んっふう……んあっんちゅっん……」

そして、しばらく（文の顔に流れた涙が乾くまで）キスをし続け……

「ぶあつ……ごめんな？文。俺もお前の大切な物奪っちゃまった……」

俺程度の腕とお前のキスじゃ釣り合わないかもしれないけど……

これで勘弁してくれ？」

「……！！（／／／／／）は……ひやいつ！！！！

失礼します!!!」

しばらくぼけーつとしてた文はいきなり覚醒すると。

俺を殴るでも蹴るでも八つ裂きにするでも罵るでもなく、ただ空に飛び立っていった。

「……向かった先は、はたてか権かどっちかの家だな。」

なら、とりあえずは心配いらなにか……
天魔のところに行つて来なきやな……。

「文にも伝えておいたほうがよかつたけど……。まあ『別れ』がづらくなるもんな……」

俺は、文を追わず天魔の屋敷に向かつた。

第34話—山登つ浮雲、都に赴く。

「ふむ．．．なるほどな．．．」

「それで？この山を出ることに関してはこちらから文句を言ったりはもちろんしないが」

「行くあてはあるのか？それに椀や文のことを置いていくのか？」

「屋敷についた俺は、天魔と謁見し怪我が治ったこととこれから、友人といっしょに京の都に行くことを告げた。」

「いえ、天魔様には最低限の礼儀としてお伝えただけで文やほかの天狗には伝えずに今夜旅立つつもりです。」

「そうか．．．私としては口出しはせぬが．．．それでは文のメンタルケアが大変そうだな．．．」

そういつて苦笑する八咫に、ただただすいませんと答えるしかなかった。

「それじゃ、俺は一回家に帰って旅仕度を整えてきます。」

「わかった。それと旅立つのは明日の早朝にしておけ、お前が目覚めたら天狗の者共を集めて宴会を開く予定だったのだ。」

「今晚は大宴会だ。」

「わかりました……。それじゃ行ってきます。天魔様」

うむ。と手を振る天魔様に手を振り返し、飛び立った。

さて、まだ文は帰ってきてないみたいだし……。いそいで仕度を整えるか!!

「あれ？俺って文と契約したっけ……。なんで文の位置が明確にわかるんだろう。」

契約はした覚えなし……。能力も文に対しては使用しないようにしてるし……。俺の霊力、妖力感知能力があがったのかな？

「まあ、いいや。とりあえず文が戻ってくる前に掃除と準備を進めとかないと。」

「あれ？双覇。なんの準備してんの？」

(びくつつつつつ
!!!!!!)

「あ．．．ああさつきか．．．この世界に来て改めて思ったんだけどさあ．．．

お前って．．．」

近付き、そつと顔を近付けさつきを見つめる。

(／／／／) ふえ!?! な．．．なに?．．．」

さつきの顔が一気に赤くなっていた。

風邪でもひいてんのか?こいつ．．．。

「いや、ほんと文にそっくりだよな。まさかもう帰ってきたのかとおもつてへぶつ!!!」

言った瞬間さつきのグーパーンが飛んできた。

たぶん、俺の思考も『分析』積みだつたんだろう。よけたらその方向にまっすぐ振りきつた……

「痛ったたたたたた……げほっげほっ!!埃がすげえな……」
あれ?さつき?」

目が見えるようになったころにはもうその場にさつきの姿はなかった。

なんか、ぼそつと「射命丸さんばかり……」って聞こえた気がするけど……

「まあ……さつきは俺の事世話のかかる弟か、迷惑をかけてくるクラスメイト位にしか思っていないだろうし……」

そういえば、さつきには幼馴染だからってだいぶ甘えちゃってたなあ……」

・ ・ ・ 若干反省しつつ、部屋の掃除と荷造りを再開。
終わったころにはさつきにぶたれたこともすっかり忘れていた。

・
・
・
・
少年移動中
・
・
・
・

「ほら〜!!!! どんどんじゃんじゃん飲みなさいよ。はたて〜」

「……………どうしてこうなった？」

今、俺は表向き『妖怪の山奪還祝いの宴』、裏向きは『俺のお別れ会』ということで天狗の集会場にも使われる広場に居る。

「楽しい宴会のはずが……………どうして、文は陽気に飲みまくって椀はやけ酒してるんだ……………」

あわれ、そこらかしこに転がる泥酔した天狗、天狗、天狗……………
なんと、たまに鬼の姿も見える。

「……………酔って倒れる鬼なんて、珍しいもん見れたなあ……………」

「はっはっはっ！ 情けないねえ……………鬼なら天狗の娘に負けるんじゃないよ!!」

いや、焰さん・・そりや無理がある。今日の文はどういうわけか・・飲酒に対してのタガが完全に外れてるもん・・・

「文。ほんとあれから何があつたんだ・・・」

家の掃除を終えてから、ほどなくして文が帰ってきていきなり

「末永くよろしくお願いします」と言われた時はびつくりしたが、今はもつとだ。

「あつはつは。あんたには心あたりがねえのかい？ならあたしにもわからねえ・・

だが、あんだだけ楽しそうに酒飲んでんだ。悪いことじゃねえだろ？

ほれ、あんたも飲みな!!!」

愉快に笑い焰が俺の盃に酒を注ぐ、ちなみに俺の盃は『星熊盃』で『伊吹瓢』ももらった。

なんで、鬼の宝なんて持つてるかって？星熊盃は焰との対戦前に勇儀との勝負に勝つたからくれた（別に賭けたわけじゃないんだが・・・）

伊吹瓢はついさつき、萃香との酒飲み比べで勝利してもらった。

戦うなんて面倒だしな・・

「にしても・・・俺がここまで酒に強いとは・・・」

外の世界では当たり前だが未成年で飲んでなかったからわからなかったが・・・俺はだいたい酒好きの妖怪らしい、鬼にも勝てるとはな・・・

「ああ~~~~!!!!双覇~~~~。一緒にろみまひようよ~~~~。」

やべ。文にばれた・・・たぶん最後のほうは一緒に飲みましようと言ったのだろう・・・呂律が回らないほど飲むなって・・・

「いや・・・俺はこつちで焔と・・・いねえ!?!?!」

あの野郎!!（正確には野郎じゃない。）鬼のトップのくせに文から逃げやがったなあつ!!向こうで天魔と飲んでやがる!!!

「むう~~~~私という者がありませんが他の女性と飲まないでください!!!」

あつつつれ~~~~。おかしいぞ・・・嫌われてると思ったのになぜか・・・文さん嫉妬状態・・・

「落ち着け文!!俺、お前に対してあんだけひどいことしたよな?なんで嫌ってないんだよ!!!」

「あややや!!そうでしたね〜。初めての接吻でしたのにそれはそれは情熱的でしたよ〜。暖かくて、つい蕩けてしまいました・・(〓〓〓〓)」

「なんで、顔を赤らめてんだよ!!いきなりキスされたんだぞ!!!怒れよ!!!
あと祥磨!!さつきから囁かしたてるか殺気を放つかどつちかにしろ!!!」

「双覇〜・・・もう一回しましょうよ〜。」

「さて、やめろ来るな・・・来ないで・・・」

「ん・・・しよつ・・・」

「やめろ・・膝に乗るな・・こつちも理性が壊れる・・・」

「あややく。そうはく顔真つ赤にして可愛いですね〜．．．
目、開けてくださいよ〜」

耐える．．耐えるんだ．．．ここで欲に吞まれて行動したら．．．
もうここにもどれなくなる．．．

「んもうっ．．しようがないですね〜．．．んっ！んちゅっんう．．
文．．．唇柔らかい．．．もう駄目だこりや．．．

「んっ!!!んちゅんぱっ．．んっ」

もう、脳が理性的に働かない．．．文のキスに従い．．

もつと深くしていく．．

「ぶあっ．．やつと乗り気になってくれましたね．．．」

とんつと、たったそれだけの衝撃で妖艶に微笑む文に押し倒される．

もう．．．どうでもいいや．．．

「あやつ!!!」

俺が考えるのをやめた瞬間、俺の上にあつた重量感が消えた・・・
とりあえず、まだ重い目を開けようとしてつつその辺をしつちやかめつつちやか触りまく

る・

「んっ!!んくう・・・そこ・・・つかんじゃ・・・」

なんか、妙に艶っぽい聞き覚えのある声がして目がやつと開く・

「えくと・・・なんだろうこの真っ白い尻尾・・・」

すぐく気持ち良い。高級シルクよりももつと良い手触りだ・・・

ずつと触ってたい・・・

「いやいや、論点がずれた・・・えくとこの白い毛並みは・・・」

ん?白い・・・?」

思い出した。文の部下であり、俺の友達であり、俺のことを好きだとしても文を応援すると言っていた白狼天狗の女の子を・・・

「うっわあ!!!も・・・権????」

!!!!

「んっ!くっ!んうん。あ、はい。おはようございます。双覇さん・・・

もつと尻尾強く握ってもらって良いですか？」

言われて気づく、自分は今その見事な白銀の尻尾を握りしめていた．．．．．
そして、それを強く握ると上に乗ってる椀が気持ちよさそうに鳴く．．．．．

「うわあ!!!楽しんでる場合じゃなかった!!!ごめん!!!」

我に返つてぱつと尻尾を離す。数億歳ではあるが、これでも精神面とかいろんな部分
はまだせいぜい高校生のまま．．危ない．．あのままじゃいろんな意味で危なかった

「くうん．．離さなくてもよかったのに．．まあ良いです．．．．」

なぜか椀は残念そうに、鳴くとそのまま極自然な動作で顔を近づけ．．

「んちゅつんうん．．．．．」

デープなキスをしだした．．．

その後も、夜明けまで宴会は続き祥磨が襲ってきたりしたが酔ってたので……
焔の時には使った薬・効能は酔いの促進。

で、べろべろにして自爆させた。寝言で「ツクヨミ……これ以上紫の物体は食べたくない」と言っていて大昔に見た八意印の惚れ薬を思い出した……
さすがに不憫に思ったので、起きたら何回か素直に殴られよう……

……「それじゃ、今まで長いこと世話になったな。陽葉。」
次の日、俺は祥磨と一緒に都へ行くため、陽葉と焔、勇儀、萃香、茨木童子に見送られていた。

「ああ、またいつでも帰ってこい。山はお前たちを歓迎する。」

さつきは、ここに残らせてもうすこし鍛えてもらうことにした。

焰や他の鬼達（茨木童子以外）にはまた喧嘩しようと言われたので丁重にお断りした。特に焰とまたやったら今度こそ腕から全身まで消滅しそうで怖い。

「それじゃあな。俺ら二人ともマイペースな浮雲だ。また風にながされてここに来た時はよろしく頼む。」

俺と祥磨は、山に背を向け都・・・今はたぶん平安京かな？

に向けて歩き出した。背後の天魔が妖怪らしい悪だくみの笑みを浮かべるともしらずに・・・

番外話—妖怪の山登場キャラ能力について!

まずは一人目。

俺の嫁!!射命丸文についてです。

〈射命丸 文〉しゃめいまるあや・・・種族 鴉天狗（からすてんぐ）

二つ名 伝統の幻想ブン屋。

能力・・・風を操る程度の能力

規模（そよ風から竜巻まで幅広く）は問わず、どんな風でも巻き起こせる。

また、飛行する際は追い風を起こしたり高速飛行で起きる風の摩擦を逃がすことで他の誰にも追い付けない速度で飛べる。（『風神少女』とも呼ばれている。）

どんどん行きます二人目!

〈犬走 椋〉いぬばしりもみじ・・・種族 白狼天狗（はくろうてんぐ）

・一般的にイメージする天狗と違い、羽は無く純白の体毛で覆われた狼の姿をしている。（鴉天狗は羽があるが、鼻は長くない。鼻が長いのは『鼻高天狗』である。）

二つ名 下っ端哨戒天狗（下っ端とはいえ、かなりの実力者だが・・・）

能力・・・千里先まで見通す程度の能力。

いわゆる、『千里眼』を持つ能力である。

「千里」とは。昔の距離の数え方で現在に換算すると1里が約4 km。

つまり、千里とは4000 kmである。

続いて3人目!!

へ姫海棠 はたてへひめかいどうはたて・・・種族 鴉天狗

二つ名 今どきの念写記者

能力・・・念写する程度の能力

『念写』とは心の中で念じた風景や、物体、人を遠く離れた場所から撮影することである。

彼女は『花果子念報』という新聞を発行しており、(ちなみに射命丸文も文々。新聞

『ぶんぶんまるしんぶん』という新聞を発行しているが、现阶段の時間軸では二人はまだ記者ではない。)

同じく、新聞記者の射命丸文を酷く敵視しているが射命丸の発行する文々。新聞はとにかく得ダネを速く、面白く届けるため若干の脚色(アレンジ?)をしており、

花果子念報は能力の関係上、すでに出回っている記事をパクxてげぶんげぶん参考にして発行しているため、どちらも読者はまちまちである。

どんだん行くぜ!! 4人目。

〈星熊 勇儀〉ほしぐまゆうぎ・・・種族 鬼

二つ名 語られる怪力乱神

能力・・・怪力乱神を持つ程度の能力

この能力で、どんなことができるかは神奈子同様詳しくは描かれていないが

同じく鬼の四天王である伊吹萃香いわく「妖術は私のほうが上だけど力比べだとあつちのほうが上かな」とのことから、

単に、とてつもない怪力を得る能力かも知れない。

まだまだ!! 5人目!!

〈茨木 童子 (茨木華扇)〉いばらきどうじ・いばらきかせん・・・種族 鬼・仙人

二つ名 片腕有角の仙人

能力・・・???

原作キャラとしての名前は茨木華扇。(通称茨華仙 いばらかせん)

公式として、茨木童子という鬼が茨木華扇であるという発表はないが『片腕有角』という二つ名は片腕はその昔源頼光が酒吞童子征伐の際、名刀髭切(ひげきり)

で腕を切り落とした鬼が茨木童子であることからまた、有角は鬼としての証ではないかと言われている。

はい。どんどん!! 6人目! オリキャラいくよ!!

へ八咫 陽葉〉やたふたば・・・種族 天魔

二つ名 無限の神風・山の主

能力・・・螺旋を操る程度の能力

妖怪の山の山頂に屋敷を構える天狗の長。

本来、自我が強くて傲慢であるはずの妖怪の一種である天狗が乱れる事の無い縦社会を築けているのも一重に彼女のカリスマと高い実力のなせる技。

ちなみに、天狗の階級は天魔↓大天狗↓鴉天狗↓鼻高天狗↓白狼天狗↓山伏天狗の順に下がっていく。鼻高は主に事務仕事、山伏は印刷などをしているらしい

双「といっても、俺が会った時代にはまだブン屋も始まって無かったし鼻高や山伏も業務は白狼と同じく侵入者排除だろうけどなw」

うおっ! 居たの?

双「まあな。とりあえず天魔の説明にもどるぜ」

おっと・・・能力は螺旋を操る程度の能力で、螺旋つてのは螺旋階段とかの渦状の設計

の事なんだけど・・

双「ここで言う螺旋とは竜巻などの物理的な螺旋ももちろん意味するが概念的な捉え方『歴史』、『生命』なんかを意味する『無限の広がり』の象徴』とも捉えることにする。」

そう、八咫の場合は手のひらに竜巻を出現させて能力を発動。

自分の攻撃はドリルのように防御を貫通するように打てるけど、相手の攻撃は広げることですぐに消えたりさせたりできる。

双「俺が一回説明したけど、物が前に進むときつてのは推進力がかかっているから素早く進めるんだ。あいつはその時にかかる気流の流れも螺旋としてとらえ操れるから、

最高の防御だな。」

そんじゃ。次最後7人目!!

〈姫神 焔〉ひめかみほむら・・・種族 鬼子母神（鬼の祖であり、神の一種）

二つ名 剛腕の姫君、怪物を治める怪物

能力・・種族を育み、祖となる程度の能力

双「一番強かったし、マジで死ぬかと思っただけ。」

まあ、ほぼ右半身吹っ飛んでたからな。

ちなみに能力の概要は、作中で話したとうり『鬼』という種族をこの世に生み出し、

そのすべての鬼達の能力を使える。

双「一撃目で俺の左腕を粉々に粉砕したのも、あいつの元々のスペック＋勇儀の能力の超パワー。結界内に霧状で侵入してきたのは萃香の能力だな。」

そのとうり！と、それじゃあそろそろ、この番外話を終わらせるよ。

妖怪の山編終了!!幻想入りまで猛スピード!!絶世の美女編。

第35話—到着!平安の都。

「なあ、双覇。都とやらにはまだつかねえのか?もう3日ぐらいずっと歩きっぱだぞ・」

「んな事ばやいてねえでさつさと歩け!誰に見られるかわからねえから飛ぶのは無理なんだから・」

俺らは、つい最近。勝手に居住区にしていた妖怪の山を出て都と呼ばれる町に旅の進路を向けることにした。

「さいしょこそ・・・人通りも無かったからスキマ能力つかって瞬間移動繰り返してたら急に人が現れるんだもん・・・」

妖怪と勘違い（5、6割方妖怪だが・・・）されたら、都に入れなくなるかも知れない・・・それだけは避けたい。

「はああ〜・・・もう山菜だけで何日も歩くのはいやじゃ〜!!!」

祥磨が喚く・・・るせえ・・・

「でも実際・・・確かに何日も山菜だと飽きるよなあ・・・こりや今日あたり何か野兎でも捕まえて喰うか・・・」

こう言う発言が頻繁になってきたあたり、もう相当に俺は妖怪になってるんだろう。外の世界にいたころは野兎見つけたら、和んだ後に保護して愛護団体に送ってたもん

??? 「双覇さ〜ん!!! 酷いですよ何も言わずに出発するなんて〜!!!」

突如背後から聞きなれた、否。聞き慣れ過ぎた最愛の妖怪の声が聞こえた。

天魔に釘を刺して俺たちがどこにいるかわからないはずの彼女。

おかしい・・・沈静のイメージを結びつけたはずなのに、むしろヒートアップしてる
・・・もうわけがわからなかったが、とりあえず

「目の前でこう何度も好きな女の子を泣かせる羽目になるなんてな・・・」

「ごめんな？文。俺だつて・・・ほんとはずつとそばに居たいんだよ・・・一目見たときから好きで好きでしようがないんだ・・・」

でも、ここから先。俺はお前を守るためにももつと力をつけなくちゃいけない。
女を守りたいってのは男の思いでもあるんだ。」

胸中を隠さず語り、文の背に手を回す。

「『風結』安堵の息吹」

風神少女と呼ばれる文にはやはり、風で対話するのが一番だ。

この能力。『ありとあらゆる風を生み出す程度の能力』と言うらしいんだけど・・・
文との契約の能力っぽい感じはするけど、全く別物の能力な気もする・・・

「あややく。双覇く……」

「おつとつと……極度の緊張が切れて安心したのかな?」

「ごめん祥磨。いったん妖怪の山の文の家に戻ってくるよ。」

眠ってしまった。文を抱え、スキマを開く。もちろん周囲に能力で人が居ないことを確認済みだ。

「おう。どうせならそのまま2時間くらい戻らず、大人の階段登っても気にしねえぞその分たっぷり休める。」

「馬鹿かつ!?寝込みを襲うなんてんな屑な真似誰がするか!!」

と言うか、俺が能力で周囲に人が居ないことを確認したにも関わらずこいつは待つてくれるつもりらしい……良い奴を友達に持ったもんだ。

スキマに入る瞬間、祥磨から「たぶん、文はそれを望んでる」と言われ、文が寝言で「双覇……大好き……」とか言ってくるのでさっさと移動した。

「はあはあ……どうして、スキマを使つての全く労力のいらぬはずの移動でこんなに疲れてんだ……」

おなじみの祥磨の能力でベッドを喚びだし、そつと寝かせる。

寝顔が可愛くてつい、額に軽くキスをしてしまったが、なんとか起こさずに済んだ。

「ふう〜。んじゃ帰るか……」

スキマの中に体を入れる、完全に消える直前

「どうして……襲つてこないのでしょうか？」という、聞きたくない・聞こえるはずの無い一言を顔面蒼白で聞く羽目になった。

……少年スキマ移動中……

「おつす。2時間くらいなら待つてやるつつつたのに、なんだ。もう帰つてきやがっ

たのか??んで、どこまでヤツタんだ?」

姿を見せるなり、いきなり下品な事を聞いてきやがった幼馴染を全力で殴り飛ばし
また歩いて前に進む。

「ふう。とりあえず、今晚歩きとおせば着くんじやないかな・・・」

「おおくやつとか・・・んじや今日はもう、休もうお休みー・・・」

さつさとベッドを出現させて、寝ようとすする祥磨をベッドから突き落として起こし

二人で瞑想。1、2時間程度仮眠をとつて

もう、月が静かに照らしてくるあたりに起床そして都に向け猛ダツシユ。

.....

「着いたあ—————!!!」

夜明けとともに、都の門の真ん前で叫ぶ俺ら二人、道行く人が全員じろじろ見てきて正直はずかつたけど、その時はただ喜び合った。

都の中と言うのはほんとににぎやかで、道行く人々も活気にあふれ魚屋、八百屋の豪快な声、牛車が闊歩する音全部が外の世界じゃ聞けないし、見れない物だった。

「いいやつほ—————!!!本物だ!!本物の平安京にこれたんだあ—————!!!」
歴史好きの俺としては嫌が応にもテンションが上がる。

・・・その後好奇の目線で見られる俺を、祥磨が気絶させさつさと泊る宿を決めそこに押し込んだことは言うまでも無い。

・・・少年サイドアウト

・・・妖怪の山サイド・・・

「あややく。今回も失敗ですかあやく」

『俺だつてずっと一緒に居たいんだよ・・・。一目見たときから好きで好きでしょうがないんだ・・・』

『お前を守るために、力をつけなくちゃならない・・・』

「(カアア／／／) あややくや!参りましたね。あそこまで求められているとは・・・でも・・・私だつて。それなりに強いんですよ?双覇さん・・・」

もう、そこには居ない最愛の人の名を呼ぶ。

けれど、言葉は虚空に消える。

とさつ。不意にそんな音がした。

「あや？何か机に置いてましたかねえ．．．」

山の哨戒部隊の配備図は、もう天魔様に届けたはずですし双覇さん宛ての恋文は結局自分の心の内にとどめて、今度あつたら告白することにしましたし．．．

「あややつ!?これは．．．」

そこには、『文花帖』（ぶんかちょう）と書かれたメモ帳と手紙が一通。

『文へ。』

俺。双覇ですあなたを置いて山を出ていく事を許してください。

俺もできることならあなたと離れたくはないし、山のみんなも大好きですが．．

俺は神を名乗るにはまだ、この国。この世界の事を知らな過ぎる。だから山を出ていろんなところをいろんな人を見えます。

ただ、これだけは覚えていてほしい。文、俺はあなたが大好きです。愛しています。だからこそ、笑っていてください。あなたの笑顔が俺を強くしてくれるから、

あなたが自由にこの空を駆けて居るから、おれも安心できるからいつか風向きがそちらに向いたなら『幻想』の空でまた会いましょう。

白雲双覇より。』

手紙にはそう綴られており、今すぐにもまた行って告白の答えを返したい気分でしたが……

「あややく……この感動で濡れてしまった顔ではまた心配されてしまいますね……」
だから、もうすこしこの空を飛んでのんきな『浮雲』さんを待つことにした。

この手紙に書かれてる『幻想の空』がどこかは全くわからないがそれでも、必ず会える気がしたから、

「射命丸さくろん。山菜取ってきましたよ〜」

「文様〜?」

あややく! そうですね今日はさつきさんと権とはたての四人でお鍋するんですけど!!!
とりあえず、手紙と文花帳を!!!

「あれ? 文さん、お鍋まだ準備できてないんですか? ていうか、室内が荒れてるよう
な……」

「(くんくん) 文様から、双覇さんの匂いがする理由を教えてください!!!」

「はあ!?!なんですか!それ? 私にも詳しく!!!」

「あやややく。とりあえず、逃げましょう!!!」

妖怪の山には、今日も元気な鴉の声が響き渡った。

第36話—月夜に照らされし、絶世の美女。

「おつちやくん。そのアジ貰つてくわ。あ、おばちゃん、そのタケノコくれ。」

数週間が経ち、都での生活にそこそこ慣れてきたころ俺はもうすっかり八百屋や魚屋肉屋の常連になっていた。

「えくと．．あとは、ん？おつ今日も発行されたんだな。」

空から降つてきたのは、文々。新聞（ぶんぶんまるしんぶん）と言う新聞だ。

この時代に、新聞があつたのか？とか、紙はどうした？とか印刷技術は？とか、いろいろ、おかしな点はあるかも知れないがここは東方の世界。

「まあ、外の世界の歴史の流れなんてあつて無いようなもんだな．．．

それよりも、祥磨の奴はちゃんと情報収集してんのかな？」

あれはたしか。俺らがここに住み始めてちょうど一週間つて時だ．．．

「はあゝい。お元気かしら結神？ゆかりんよ。」

祥磨と、ババ抜き（トランプ創造）をしてたら、いきなり目の前にBBAおつと・
紫が現れて、空気が凍りついた。

「．．．．．お、おう。元気それで何よりだ．．．。今日は何の用なんだ？ゆ・
ゆかりん？」

困惑する俺。とりあえず、「しよ、祥磨と言います．．．よろしくお願いします．．
と自己紹介する祥磨。

「久しぶりに会うからちよつとハメ外してみただけなのに．．．」
ううとすすり泣くBBAいや、紫。

「えっと、祥磨くんね？私は八雲紫。人間と妖怪、神霊や妖精、霊とかそれらが共存でき
る世界を作ろうと考えている者よ。」

それと、今日来た理由はねえ『絶世の美女』って知ってる？」

絶世の美女って・・・俺や祥磨からしたらこの世界に居る女性は全員そうだ。とも言うるんだけど・・・この時代にその話ってことは・・・

「ええ。噂程度に。ですが、なよ竹のかぐや姫の事ですよね？」

そう。なよ竹のかぐや姫。外の世界で日本最古の物語だと言われている『かぐや姫』のモデルとなった人だ。

「ええ、そのとうりよ。でも、どうやらそのお姫様人ならざる魅力に満ち求婚者が後を絶たないらしいの。」

一度会ってみたらどうかしら？暇そうだし・・・」

うぐつ。たしかにすることなくてトランプやってたけど・・・

「はあ・・・わかったよババxげふんげふんゆかりん。んじや、今日から二人して情報収集

だな・・・。」

紫はなんか文句言いたげだったが、取り会えずスキマの中に消えていった。

まあ、ババアってつい外の世界のノリで言っちゃうけど紫がババアなら俺や祥磨はもう仙人だよなww

それに、外の世界のおばさん達よりははるかに若いし、可愛いしな。

「よし、んじや今日は俺が情報収集するか。」

そんなこんなで、情報を集めて一週間ようやく魚屋のおっちゃんや八百屋のおばちゃんからどこの屋敷に居るとかを教えてもらったんだ。

「おっい。双覇やつぱおっちゃん達の情報はガセじゃねえみたいだぞ？」
そんなことを考えてたら向こうから、祥磨が走ってきた。

「そっか。んじや今日はもう宿で休んで明日俺が求婚者に混ざって会いに行くてくるよ。」

とりあえず、方針は決まった。

なら今は休んで、万全な態勢を整えるべきだ。

「ふわあくあ。了解した。んじゃさつきと帰るか今日の飯は？」

「てめえも自炊できるんだから、自分で作れつつの……」

今日は筑前煮とアジの開きだな。」

メニユーを聞いて小躍りする馬鹿はほつといてさつきと宿に帰ろう。

……〈少年移動中〉……

「えくと・煮物の黄金バランスは酒おさじ3、しょうゆおさじ3、水200ml……
おっと良い感じに七輪が熱せられてんな・アジの腹を開いて内臓を取って……塩ふつ
て焼いてつと」

くつくつ。という鍋の音じゅーぱちぱちという七輪の音。

焼けた魚と、だしの浸み出た煮物の匂い……

「ああゝゝ腹減ったーはよ持つてこい双覇ゝ。」

「るせえ!!こつちも腹減つてんだよ。つゝか、二等分できる作業をわざわざ一人で受け持つてんだから黙つてろ!」

そつから、10分程度で完成。

二人して、ご飯を食べ夜になり就寝・・・・・・・・・・

・・・・・・・・〈次の日〉・・・・・・・・

「ふああゝ。さて、かぐや姫に会いに行くか!」

馬鹿(祥磨)はまだ寝てるからほつとくか・・・・・・・・

・・・・・・・・〈少年移動中〉・・・・・・・・

「さゝて、屋敷の位置はわかつてつからあとはゆつくり歩いていくか。」

??? 「おい。そこの者どこの家のものだ？もしやかぐや姫に求婚するつもりか？」

なんか、後ろから小太りのおっさんに話しかけられた。

お付きの人が一杯居るからおそらく貴族の人かな???

「ああ、これは失礼しました。私は白雲双覇と言う旅の者です。かぐや姫さまのお噂を聞きそれほどこまで美しいのなら一目見たいと思っただけのこと。

求婚の意思はありません。」

「そうか、私は藤原不比等（ふじわらのふひと）と言う。このたびはかぐや姫に求婚に行くのだが・・・お主に求婚の意思が無いのなら私の共として連れて行ってやるぞ？」

俺を、利用する気マンマンの笑みで訪ねてくる不比等。

しかし・・・まあ断る理由も無いな。

「願っても無いことにごさいます。ぜひともよろしくお願いいたします。」

そう言つて、上機嫌の不比等とともに牛車に乗つて移動。

ほどなくして、宿とは比べ物にならないデカさの屋敷につき、門番の案内で中へ

仕切りで遮られた、部屋に4人の男たちが座つており仕切りの奥からも気配がする。

おそらくかぐや姫か・

「全員そろいましたね．．．おや？おひとり多いですね．．．

あなたは？」

かぐや姫（？）に名を聞かれ、隠すことも無いので

「私は白雲双覇という者です。かぐや姫様のお噂を聞き絶世の美女と評されるそのお姿をぜひに拝見したくきました。

求婚の意思はございませんので、ご安心を．．．」

俺の名を聞いた瞬間、かぐや姫が若干息をのんだような気配がした。

「そ．．．そうですか、それではあなたにも他の求婚者同様私を拝見する権利を得るための試練を出させてもらいますが．．．よろしいですか？」

「ええ。かまいませんよ．．．私にできることであれば必ず成し遂げて御覧に入れます。複数でもかまいません。」

言いきり、周囲からの視線が険しくなる。

まあそりやそうか・・・

「ごほんっ！それでは。石作皇子様には『仏の御石の鉢』を、

車持皇子（藤原不比等）様には『蓬萊の球の枝』を、右大臣阿倍御主人には『火鼠の皮衣』を、大納言大伴御行様には『竜の首の珠』を、

中納言石上麻呂様には『燕の生んだ子安貝』をそれぞれ持ってきてください。

本物をもつてきていただいた人の妻となりましょう。」

ほえ。有名なかぐや姫の五つの難題だく・・・

超感動ものだけど、とりあえずいまは自分がどんな難題を出されるか。。。。

「そして・・・白雲双霸様とは私もしっかりお会いして話がしたいです。

そのために・・・この都より南東に見たことも無い可憐な花があると聞きます。

その花は日に首を向けるといいうめずらしい、特徴があるそうなのですが・・・私はそれが一目見たいのです。」

淡々と恐ろしいことを言ってくるかぐや姫・・・

俺は肩を落とし、とぼとぼと宿に戻って行った。

第37話―難題攻略！姫に向日葵を献上せよ！！

「ふう〜。ただいま〜。」

かぐや姫との一件もとりあえず、終わり自宅（宿）に戻る。

もうすっかり日が高く上がっておりさすがに起きているであろう同居人に声を掛ける

「おう。どうだった？（むしやむしや）」

家に着くと、昨晚塩焼きにしたアジが今度は炒飯になっていた。

炒飯ってたしか。祥磨の好物だったか・・・こいつの家に遊びに行った時冷凍庫には必ず山ほど冷凍炒飯が置いてある。

こいつも一人暮らしで、別段自炊できないわけじゃないんだけど・・・

あと、俺みたいに家族に捨てられたんじゃないやなくこいつの場合は自発的にだそうだ。

理解に苦しむ。。。

「どうだったって・・・質問しながらもしやもしやすんな。とりあえず会えたは会えたけど顔は見れなかったし、太陽の畑から向日葵持ってこいって言われたよ。」

「そか。てことは風見幽香に喧嘩売ることになるなww」

笑うところじゃねえよ・・・はったおすぞ。。。

「まあ、それはそうとかぐや姫の事なんだが間違いなく『蓬莱山 輝夜』（ほうらいさんかぐや）だな。」

まあ、そりゃあそうだな。蓬莱山輝夜は月でありとあらゆる変化を拒絶する所謂不老不死を得る『蓬莱の薬』を飲んだことで罪人とされ地球に流された月の住人だ。

東方のかぐや姫つつつたら輝夜しか居ない。

「だろうな。てか、そんなに死ぬ思いしてまで輝夜の顔見たくないんだが。。。。。

むしろ、文だったらやる気でるんだが・・・」

ほんとあんだだけかつこつけといてなんだが・・・文に会いたい。

「おまえ・・・どんだけ射命丸のこと好きなんだよ・・・つくか、さつさとこの新聞の束

をどうにかしろ、初発行から落ちてくるたびに拾ってきやがって
他の家では焼き芋や暖をとるのに大活躍だつてよ。」

「てめえ。勝手に燃やしたりしたらめてめえでたき火すんぞ・・・」

俺は文々。新聞を購読するつもりでいるんだから文句言うな!!

まあ、確かにそろそろまとめないとスペース取っちゃうけど・・・

「だれも、燃やすとは言つてねえよ・・・」

それよりも、幽香はどう対処するつもりだ？恐らく、向日葵を抜きに行こうと行かない
かろうと襲つてくると思うが。」

そう。そんで抜きに行つたら凶暴度が倍になる。

いや、最初からカンストしてるようなもんだけどね・・・

「ああ・・・でも、まあどうにかするさ。」

それより、俺も食わせろそのアジ炒飯
!!!!!!

「そんな適当に決めちゃっていいの? その風見幽香っていう妖怪。」

「私や宵闇の妖怪クラスの大妖怪なのでしょう?」

「突然目の前に、目玉だらけの空間。つまりはスキマが開き今朝も見たババ×げふんつが現れた。」

「おつす。ゆかりん、宵闇の大妖怪?」

「宵闇の妖怪というと『ルーミア』か・・・いや大妖怪つてことはEXのほうが・・・」

「ええ、闇を使役する妖怪でその妖怪の領域に入った人間は逃げ道もわからずただゆっくりとそいつに喰われてしまうそうよ。」

「なるほど・・・やっぱりルーミアだ。」

「へえ。そんな奴がいるんだな・・・んで? 今日は何の用だ?」

「あら? やっぱりわかっちゃった?」

「にやりと胡散くさい笑みを浮かべ訪ねてくる紫。」

「まあ、ゆかりんが何の用も無いのにここに姿を見せるはず無いし・・・。」

「それもそうね。要件を言うわ、向こうの世界、人と妖怪が共存する新しい世界を」

作るために力を貸してくれそうな妖怪や人間の実力者をさがしておいてほしいのよ。実力のある妖怪は私の式になるってことも提案しておいてね？」

正直めんどいし、拒否したいがまあ一応

「了解だ。どちらにも目星は付いてる。」

力を貸す妖怪は鬼や、天狗を当たってみるか・・・

最悪、結界を張る力だけならおれと祥磨でもなんとかなるはずだし。

それに八雲紫の式なんて、あいつしか思い浮かばないしな・・・

「たすかるわ！それじゃ、私のほうでもその世界に行ってくれそうな妖怪や人間に声を掛けておくわ。あなたたちは天狗と鬼と、私の式。それと強い霊力をもつ子を探しておいて。」

そう言つて紫はさつさとスキマに消えていった。

「んじゃそういうわけだ。たのんだぞ？祥磨。」

「はあ!?!なんで俺が!!!」

怒鳴る祥磨にアイアンクロー。

「俺が死闘をしてんのに、お前がさぼるのはゆるさん」

しばらく、やってたら「はい．．。」と言って降参した。

．．．．〈少年就寝中〉．．．．

「んんうゝ．．．．よし!!」

昨日はずっと都をぶらついたり、宴会したりで結局すぐ夜になった。
起床してすぐぬ頬に張り手をかまし、脳を活性化させる。

「祥磨は．．．．もういねえな。あいつもこういうときは早起きなんだな．．．．
ん? 『今日はスキマ使ってイギリスのほうに行くてる。吸血鬼とか西洋の妖怪いる
かな? 魔理沙の先祖にあえりやいいな!!』 ってあいつ思いきったことするなあ。」

思いついたら即行動! といった感じの親友に呆れつつ刀を二本腰に差し、南東。
太陽の畑にむかう。

「うしっ! ここが太陽の畑か．．．たしかにこりや絶景だな．．．」

目の前には一面の花。花。花。

特に俺の背丈をゆうに超える、大量の向日葵．．．

「この、花畑を管理してる風見幽香もそうとう苦労してんだろなあ．．．

管理が行き届いてるよ．．．」

「あら? うれしいこと行ってくれるじゃない。でも花が好きだから苦労ではないわよ?」

「そっか．．．．．」

!!!!?????

突然。ほんとうにいままでなぜ気付かなかったのか不思議なほどの殺気が真隣りから

発せられていた。

「あらあら。そんなに飛びのく事は無いでしょう? もっとお話ししましょう、

あなたは私の可愛い花たちを褒めてくれた。お客として歓迎するわよ？」
殺気なんて微塵も発して無いような柔らかい微笑みを見せながらもずつと動けないほどのプレッシャーを放つ幽香。

「少しでも気を抜いたら、首を搔つ切りそんな殺気を放つといて客はねえだろ・・・
それに、俺はかぐや姫に届けるためにこの向日葵を一本貫いに来たんだ。

それとあなたに勝ったっていう証拠も持って行かなくちやいけん　　っ!!!」
俺の発言を遮るように、幽香がつつこんで殴りかかってくる。

なんとか、腕をクロスさせ受け止めるがミシツという音がして吹っ飛ばされる。

「おいおい・・・鬼子母神の時も思ったがその細い腕のどこにそんな力があるんだよ・・・」
靈力に余裕をもつてコーティングしてなかったらまた折れてたじゃねえか・・・

「あら？本気で殴ったはずなのだけども・・・」

よく見たら、妖力、それに神力もあるのね・・・100年ほど前に新しい神が誕生した
と聞いたけどそれがあなたかしら。」

振りきった拳を、構えなおし問いかける幽香。

その顔には、狂気染みた笑みがしかも純粹に殺しあいを『楽しんで』やがる．．．
「ああ、俺で間違い無えと思うぜ？」

半人半妖の現人神なんておもしろ種族俺くらいなもんだ．．．よつつつ!!」

『絶対中立—ヘイト・キャンセラー』も試してはみたが、案の定こいつとの戦闘は避けられないイベントらしい．．．

なら、今度はこつちから!!!

「おらあつ!!! 喰らいやがれ!!!」

女性を相手するなら、顔と髪は狙わないのが紳士だが。

んなこと言ってたらこつちが殺される。迷わず顔面に拳を叩き込む!!!!

「ぐっ!!!!!!」

幽香は、地面に叩き付けられるようにしてふつとんだがさすがの戦闘センスだ。

とつぎに顔をガードして肘で受けてた。

「なら．．．『妖刀』電桜狼牙!!!」

銘を叫び右の腰に差した刀を引き抜く。

相も変わらず美しい青白い刀身だったが、じよじよに変化。

青白い刀身を侵食するように、黒と赤が混ざったような色に染まる。

そして俺自身の体も耳が頭から生え、牙を剥き黒色の尾が生える。。。

「へえ〜。それが妖怪に変化した状態ってこと？」

見た感じは狼天狗のようだけど黒い体毛は見たこと無いわね・・・」

一旦言葉を区切り、

「おもしろくなってきたじゃない!!!」

また、にやつと笑って肉薄して乱打してくる。

紫のものとも違う純粋な恐怖を与える笑みに冷や汗をかくも思考を止めず、右から上からくる拳をいなす。

「ほらほら。いなしてばかりじゃ勝てないわよ!!!」

拳の嵐が勢いを増す。

「うっ! くっ! はあ!」
「いまだっ!!」

受け流し、ちよつと反撃を繰り返す。

イライラした幽香がより一層拳を高く掲げる! その瞬間をまっつた!!!!

『神域』白雲式多重結界!!!」

真横に振りきられた拳を! かがんで避け、地面に手をつく

ついた手のひらから青白い結界が現れ俺を中心に10枚展開される。

「んなっ!! なに．．．．．これ．．．．．動けない。。。。」

そして、不用心に飛び込んできた幽香は8枚目のところで空中静止していた。

この結界は侵入してきたものを支配し無抵抗にさせる力をもつ。

効果は身を持って体験済みだ。それとイザナギの場合はただ無抵抗にするだけだったが俺は結界に込める力の種類で効果を分けてる。

「たとえば、今張ってる結界の効果は敵の動きを封じその力をじよじよに奪う。

『白雲式多重結界・狼』つてとこかな?」

神力で作った場合は、妖怪に対してのみ有効になり相手の抵抗を完全に断ち斬る。

つまりは相手（妖怪に限る）は結界内で自分の妖力を生成したり危害を加えたりすることができない。

霊力の場合、結界内を現実から隔離して修業場や相手と自分を送って仲間の戦いによけいな邪魔が入らないようにできる。

「それと、それぞれの結界内では俺が仲間とみなした奴はそれぞれに対応した力を補給できる。もちろんおれもな？」

風見幽香の妖力量はすさまじく、まだぜんぜん残っていた。

「でも、そんなに長居する気も無いから終わらせるぜ。

『結 覇天撃』!!!」

狼牙をしまい、能力で接近幽香に思いつきりボディブローをかました。

『昇○拳』みたいな感じな？

「ぐはっ!!!」

結界を突き破り、そのまま上昇そろそろおちてくるかなあゝ

と思ったその時、空の一部分。ちょうど幽香を打ち上げたあたりのところが虹色に輝

き、

「これを耐えてみなさい!!!! 『マスタースパーク』!!!!」
「やべっ。あいつの切り札。完全に忘れてた……!!!!」

油断して結界を解き、茫然と真上を見上げる俺に、極太の虹色の閃光が降り注いだ。

第38話―祥磨のイギリス放浪記①

「ほええ。石畳の街中に石造りの家。食べ物も果物や香草があつてやつぱりイギリスは日本と違うなあ・・・」

それに、周りを歩く人の身につけているものも所謂紳士服というやつだ。革製の靴なんて日本には確実に無い。

「さうして、双覇に黙つてスキマ移動はとりあえず成功だな。

いきなり、路地にでて建物に頭打ったけど・・・」

まあそのおかげで、人に見られずここに来れたわけだから良しとしよう。

「とりあえずは、この国特有の妖怪吸血鬼とか魔法使いにもできることなら会いたいなあ・・・」

特に、魔法使い。

レミリアやフランドールの親に興味が無いと言えばウソだがそれよりも魔理沙の先祖に興味がある。

「そのためにも、まずは情報収集だなっ!!」

俺は意気込んでメインストリートと思われる町を歩く。

途中途中にある、香草を売ってる店や日本じゃ売って無いような肉や魚、果物などを購入しつつおっちゃん達に尋ねる。

「おっその、ハープほしいな。」

そのワイン貰うわ。なあおっちゃん、ここらへんで吸血鬼や魔法使いの噂ってなんか聞かないか？」

祥磨の能力は知っている人物物体を存在してるしていかないにかかわらずに、

呼び出せるので八雲紫を召喚し、ここまで移動。さらに言語の境界を弄り普通に日本語をしゃべる感覚でどんな言語でも話せるし、相手の返事も自動翻訳で聞ける。

「あいよっ！お客さん、あんたどっから来たんだい？この辺って言ったたら、

魔女狩りも盛んだし吸血鬼なんて言ったら。今まで幾度となく強力なヴァンパイアハンターを蹴散らしてきた『スカーレット王家』が目の前にあるじゃないか・

おかげでおちおち、安心して夜寝られないんだよ・・・」

店主の言葉どおり、町の奥のほうにうつすらと城のようなものが見えている。
ところどころ紅くて、だいぶ遠いのに目立ってた。

「ああ．．あれか。まんま紅魔館じゃねえか．．．

てことは今はレミリアとフランドールの親が城主つてことかな．．「きゃあああああ
あ!!」ん?」

ハーブやら、肉やら魚やら、果物やらを購入して件の城とやらを

眺めてみると結構近くのほうから女の子の叫び声が聞こえてきた。

見ると、金髪、魔女っ子帽子、箒、魔女っ子ローブというどつからどうみても魔女と
主張しているような女の子が数人の男に追いかけていた。

「おいおい、ありやあウソだろ．．．魔理沙か!!!」

俺は考えるより先に体を動かし、男共の前に出て

通さないと言っても言いたげに道をふさいだ。

兵A「おいつ!!なにをする。お前が庇っているその女は魔女なのだぞ!!!
現に、この10年その女は老いる事が無かった。」

なんと、この兵隊の言うことが本当なら俺が庇ってる女の子は実は立派な女性ということらしい。せいぜい魔理沙よりちよつと上くらいの年齢だと思っただが・

「そうか、魔法を研究することが駄目なのか・

10年古い無かった程度で化け物扱いしてんじやねえぞ?

俺なんか、もう何億年生きてんのに外見が全然かわってねえんだからな!!」

そうやって、能力発動。

片手直剣、エリユシデータ。俺が生前良く見ていたソード・アート・オンラインというラノベ、アニメの主人公が振るう魔剣だ。

「んなつ!!何も無い所から剣を・・・」

こいつも魔法使いか、化け物の類だ!!人と思わず殺せ!!!」

恐らく、リーダーと思われるさつきから会話してるおっさんが指示を出す。

指示に従い、槍を構え襲ってくる。

「邪魔だ。．．．．．ふっ!!!」

全員の槍を上にはじき、後頭部にエリユシデータの腹を当てて気絶させる。

「ひっ．．．化け物め!!!」

リーダーの男は完全にビビって襲ってきたがもはや、そんな状態でまともに剣を振るえるはずも無く、一瞬で地に伏した。

「ふう。さて。君の．．いや、たしか外見年齢＋10だよな．．ならあなたの

お名前は？それとお怪我は？

ああ申し遅れました。私は神薙祥磨と言います。」

なるべく丁寧な、危害を加えるつもりもないのでエリユシデータは消して

問いかける。

「あ。あのっ!!」

「はい?」

女の子が妙にきらきらした目でこちらを見る。

「わ、私・・Drizzle（ドリズル）と言います。」

魔法を研究するのが好きで、魔女と呼ばれる存在です。」

ふむ、Drizzle（ドリズル）。『霧雨』か・・・

「あ、あなたの魔法は今まで見たことも無いものでした!!

わたし、魔女のくせに魔法を使うのが苦手で空も飛べなくて・・・

あなたが私を鍛えてくださりませんか？」

なんと、魔理沙の先祖（おそらく。）は魔力で空が飛べないダメな娘だった!!!!

いやいや、んなこと考えてる場合じゃねえや・・

「おいおい・・ちよつと待ってくれドリズル。俺は確かに魔法使いと呼ばれる者が使う魔力を使って戦ったりもするが、今のは魔法じゃない俺の能力だ。」

「の、能力。ですか？」

あれ、反応薄いな・・まさか、

「もしかして、能力について良く知らない？」

「はい。。吸血鬼達や周りの魔女には能力持ちもいるのでまったく知らないわけではな
いんですけど、自分の能力がわからなくて・・・」

そっか・・・んじゃ、とりあえず・・・

「よっと・・・」

「きゃっ！ちよっちよっと!!なにするんですか~~~~!! (カア／／／／)」
なにつて・・・

読者諸君勘違いすんなよ？飛べないらしいから今ドリズルを抱えてるだけだぞ？

しかも、女性特有の部分が背中に当たるのを避けるため両手で抱きかかえるように。
あれ？どつかでみたような体制だな・・・まあいいや

「あんまり、しゃべっていると舌噛むぞ〜〜」

「ひゃうっ!!!」

ゆっくり上昇して、一気に飛ぶ!!

とりあえず行くところは無いからどっかに廃墟があればそこを使おうかなあゝ・

「あつははは!!もつと加速すんぞ~~~~~。」

「もうちよつとゆっくりにしてください~~~~~!!!!」

こうして、俺と謎の魔女っ娘ドリズルのイギリスでの生活が始まった。

第39話―六つの難題結果発表!!!

「くっそ!!! うかつだった・・・あいつの切り札を忘れてた・・・」

虹色の閃光はもう回避不能な場所まで迫ってる。

どうする? 受けきるか?・・・俺が吹っ飛ぶ危険性があるな。

「一か八か試してみるか・・・『靈刀結月龍爪』」

まあ、剣道ましてや剣術なんてやったことないから我流だけどな・・・
結月の三日月文様が輝く。

「『神斬』神を断ち切る龍の爪!!!」

まだ、駄目か!!!

「なら、これでどうだ!!! 妖力解放。『刃符』黒狼の辻!!!」

最初に青白い龍の爪を模したドでかい斬撃を放つ。

それでも止まらないので雹桜も抜き、さらに黒い斬撃を三連続で放つ。

虹色の閃光が爆発を起こし、俺の斬撃がさらに登っていく。

「なっ?!きやあああああああああ!!!」

絶叫とともに落下する幽香。

まあ、上昇風を生み出してゆっくり落下させるんだけどな・

「さうと、ちよつと油断して危なかったけどこれで俺の勝ちだな。

向日葵悪いけど一本だけくれ。それと、その日傘もう使えねえだろ??」

あくまで、冷静に自分が勝者だとアピールする。

「ふっ。ほんとイラつかせてくれる神様ね……」

まあいいわ、私じゃ勝てないことはわかったからこれじゃいじめられないもの・
向日葵一本くらいならあげるからちよつと私の家で待ってて。

あと傘も必要なのよね? はい(スツ) もう使えないもの……」

はあくよかった……正直、戦うよりそのあと連戦を要求されるほうがきつかった。

「ああそういうことなら・・・でもいいのか？今回俺が勝ったのはまぐれかもよ。」
戦いたくはないけど、煽ってみる。

「まぐれなわけではないじゃない・・・」

さっきの戦い。こつちが全力だったのに、あなた手加減してたでしょ。

最初から、あの距離無視の移動を使ったら楽に勝てたはずだし、

最後のマスタースパークも避けられたはず。もつと言えば、マスタースパークを私に返すこともできたんじゃない？

なんにせよ、わざわざ受ける必要も無いのに受け切って勝利したのだからほんとイライラするけど私じゃ勝てないわよ。」

意外に冷静に分析してたらしい、まあ確かに最後のマスタースパークは受ける必要は皆無だったんだけど・・・

「いや、ちゃんと全力だったよ。マスタースパークを受けたのはあのままだと

下の花達も吹っ飛びそうな勢いだったからさ。。。。それに、

お前思いつきり殺すつもりで打ってきたから返したら大怪我すると思つてな。」

まあ本気で行かないと殺されそうだったしな。

何個か制限されて闘いづらかったのはほんとだけど、実際手加減なんて真似はしてないからな……

「んじゃ、俺はちよつと都のほうでぶらぶらしてるわ。

どれくらいで終わりそうだ？」

スキマに傘をしまいつつ問いかける。

「そうね……夕方には終わるわ。そのあたりにもう一度来てくれるかしら？」

「わかった。そんじゃ……」

おおい。氷柱出てきてもいいぞ……」

電桜狼牙が光り輝き、徐々に女の子の姿に変わっていく。

俺の中に居た妖力が妖怪化した姿白狐の氷柱だ。

「ふわあああああ。なんじゃだいたいぶ久しぶりに目覚めたのおく……」

ご主人様。あんまり私を封じるんじゃないぞ？

して、今日は何ようじゃ？」

はあ……いきなり大あくび欠かないでほしい。

こつちだつて結構つかれたのだから……

「やあ、おはよう氷柱。

都のほうに行くから、文たちのところに紙とこのお金で食べ物を買って届けてきてほしいんだ。」

新聞用の紙と、お金を創造して手渡す。

「わかりました!!それd「あつ!ちよつと待つて!」?」

早々に飛び去ろうとする氷柱を呼びとめ続ける。

「向こうでまださつきが、特訓してるはずだから俺が向こうに迎えに行くまでさつきの先生をやっててよ。」

わかりました!と二度目の大きな返事をして

こんどこそ、氷柱は飛び立った。

「ふうく・・・じゃ、俺も楽しむか・・・」

・・・少年時間つぶし中・・・

「さて、そろそろ向日葵貫いに行くか。。。」

俺が再び、太陽の畑に向かうと涙を流してる（ように見える幽香）と、綺麗に整えられた向日葵が向かいあつてる場面だった。

「あら。時間びったり・・もうそんな時間だったのね・・。」

「おう。もうちよつとぶらついてようか？」

「いえ、時間を指定したのはこちらだもの・・

さあ持つて行って。」

向日葵を差し出してくる、幽香の手は震えていた。

幽香にとっては家族を渡すようなもんだしな・・・・・

「さんきゅ。それとほい。」

「へっ?これって……」

ん?俺が渡したもの?『向日葵の種』だけ?

もちろん、たまたま花屋で見えて記憶してたのを創造しただけだからちゃんと向日葵が
だせるか不安だったけどな……

「ああ。それでもつとごころを華やかにしてくれ。」

約束は出来ないが此処になら俺もちよくちよく遊びに来るよ。

あ、戦闘はなしな?」

「くすつ ええわかったわ。これからもよろしくね双覇?」

幽香が右手を差し出してくる。

俺はそれを左手でつかみ能力も使う。

「ありがとな。そんじゃ!」

幽香と別れて、宿に帰ってみるとなぜか、「お腹空いたーっ」と喚くゆかりんが、まあ彼女なりに気をつかつての行動だろうし今回は勘弁しとくか・・・

その日は、ゆかりんとすこし遅くまでミニ宴会をして眠った。

(ゆかりんは途中で帰った。盃のかたづけ面倒だった。)

・・・〈少年就寝中〉・・・

次の日、日が昇るとともに起床。

一気に脳を覚醒させ、現在かぐや姫のもとに移動中。

「さくで、他の奴らはどうなつてつかなあゝ・・・」

史実つてか物語のなかだと、五人の貴族たちが全員にせ物をもつてきて長つたらしい講釈垂れたあと、にせ物と看破され酷い目にあうんだが。。。

「おつともうついてた・・・えくと。門番さん。

俺・・・私もかぐや姫様より難題を仰せつかったものなのですが・・・」

どうやら、ほかの貴族に出遅れたらしく長つたらしい講釈は聞かされずに済んだ。

ついでに言えば藤原不比等さん以外全員返されてた。

ああ。たしか不比等のは代金請求にきたおっちゃんたちが現れるまでにせ物つて証明できなかったんだっけ？話しほんとは行ったような武勇伝だったはずだし・・・

「あ・・・おそいですよ？双覇様。

というわけで不比等さま、彼の持つてきたものも本物の場合あなたと彼で二人になつてしまいますのでもう少しお待ちを・・・」

しぶしぶといった様子で不比等が下がる。おっさんのしぶる様子つてひどく気持ち悪いな・・・

「それでは、かぐや姫さま。これが私に仰せつかった大妖怪の日傘と、日に向かう葵（はな）でございます。」

持つてこれないとタカをくくつていた不比等が、目を丸くして驚愕の表情をする。

どうにも、にせ物と言いたいのが本物を見たことも無いので押し黙ってるようだ。

まあ、俺も金や銀や宝石でできた木の枝なんて見たことも無いからにせ物とわかつてるけど何も言わないが・・

「ふむ・・・はい、どちらも本物ですね・・」不平等様くくく。代金を払ってください
くくく!!!「ん？」

おっと、どうやら不平等の青ざめタイムが始まるようだ。

この場面を見ただけでもかなり貴重だな。

「ふうく・・・不平等さま。こちらの方々に『蓬莱の球の枝』の贋作の代金を
払ってお帰りください。」

不平等は酷く怒ったような顔で職人たちに金をばらまき立ち去って行った。
つまりは、今回の無理難題。俺の一人勝ちだ。

・・・その夜

かぐや姫から面会は夜にと言われたため、夜にまた屋敷を訪れた俺はいつもの仕切りのある部屋ではなく縁側に通された。

「お初にお目にかかります。私は蓬萊山輝夜と申します。

あなたが都市を出て、月に人々が移住した後に生まれたものであなたは私を知らないと思います。私が私はあなたを知っています、『月の英雄』白雲双覇様。」

.....

一言でいえば、『美女』。

たしかに絶世の美女としか言えようのない女の子が縁側で正座していた。

ただ、まあなんかわからないけど俺は好きにはなれそうにない。

ただ綺麗ってだけの女の子だったからかな？

「ああ。はじめまして。だな、俺の名は白雲双覇いまは『結神』という神をやってるお前のことはよく知ってるよ。そっちからお前より早くこっちに降りてきた友達がとんでもねえおてんば娘だとき、それと敬語はなしで良い。」

その日、俺は綺麗な女の子と蓬萊山輝夜と

月に関しての話をいろいろした。夜が更けるまで・・・

第40話―祥磨のイギリス放浪記②

「ふう〜。このあたりでいっか〜。」

俺はドリズルを抱き上げ、なんとか魔女狩りを撒いて飛び去り現在は

メインストリートからはだいたい離れた森の中にある建物を隠れ家にさせてもらおうことにした。

「ここなら、だれも住んでなさそうだしなあ〜。」

ふと、腕の中の少女が途中から悲鳴もあげていないのを思い出し確認。

・・・

「やべ・・・調子に乗りすぎちまったな。。。。」

二本の腕で胸の前に抱えた少女。『ドリズル』は完全に完璧に気絶していた。

美少女ということもあり世界が手を回したのか幸いにも泡を吹いたりなどの症状は無いが。

「とりあえず・・・この拠点の中で寝かせとくか。」

うおつつつ!!! 埃がすげえ!!!!!!
どうやら介抱!より先に、掃除を行う必要があるらしい。
!!掃除を

．．．．少年掃除&介抱中．．．

「ん．．んうここは？」

「おっと、やっと起きたか．．。」

家じゆうぴつかぴかにする勢いで、掃除を終わらせとりあえずドリズルを
召喚したベッドに寝かせといて約1時間。
ベッドから例の少女が起き上がった。

「もう、すっかり月も高く上がっちゃまってるぞ？」

体の調子．．．．は．．．大丈夫か？目が紅いぞ．．．」

「へっ?・・・ツツツ!」

俺が指摘すると、ドリズルはすぐに顔をそむけた。

再び顔を上げた時彼女の瞳はすでに美しい青になっており、特に変な感じはしなかった。

「充血か? 気をつけろよ?」

「え。ええわかってますよお師匠様! 体調は問題ありません!!」

元気な笑顔で答えるその姿はどう考えても大人の女性ひいては俺より

下の年齢なのではないか? と思ってしまうほどだ。

「お、お師匠様って・・・別に普通でいいよ、楽な口調で話してくれ。

俺もできる限り教えられることは教えるけど全部が全部魔法のことを理解してるわけじゃない。」

あと、お師匠様と言われると月で永琳を慕って助手に立候補なんて馬鹿な真似してたあのウサギを思い出す。それにしてもあいつはなんで高校のブレザーみたいな格好

だったんだろう……

「わかったよ!!これからよろしくね!

改めて。ボクの名前は Drizzle だよ!!魔法を研究するのが大好きなんだ!

ボク……ボクつつつ!?こいつ、ボクっ娘だったのか……

俺ってボクっ娘に縁があるんだなあ……俺的には普通の口調でいいし、

ボクっ娘好きはむしろ双覇のやつなんだが……

たしか、文には合わないから文に会えるならこの好みは捨てるのか言ってたけど……

「あ……ああ。ところでドリズル。

お前が现阶段で使える魔法は何かあるのか?」

まずは、魔力がどれくらいあって魔力コントロールがどの程度できるのかを
知つとかねえと仮授業も出来やしない。

「え〜と。ある分にはあるけど暴発したら危ないし、まずは能力の練習とかを
やらせてもらえないかな?いつか、見せるよ。」

今見せてもらったほうが楽ではあるが……
とりあえずとにかく今は能力か、それも一理ある。

「んじゃ、そつからだな。」

……〈少年教育中〉……

ドリズルの能力は、『魔法を開発する程度の能力』
というらしい、彼女が思い描いた魔法は本に書き記すことで『魔導書』グリモワール
という形で作り出せる。

「よし、んじゃなんでも良いから作ってみるか。」

俺は一冊の本を作り出し手渡す。

実際はこの家には山ほど本があるのだが、そのすべてがよくわからない文字で埋め尽
くされていた。

「はい!! (スウウ)」

元気な返事をして、彼女は本に魔法を記していく。

なぜかこの作業をするたびに目が紅くなってる……

「……………」

つい、気になった俺は彼女には向けなくなった選別の目を向ける。(要は靈力を察知しているのだが……)

「これは……………!! (ぼそっ)」

「(びくっ!!) ど、どうしました?」

「い…………いやなんでもない、もうだいぶ月の位置も高い。

今日はそろそろ終わりにして眠ろう。」

ドリズルも同意し、就寝する。

もちろん吸血鬼が来ても撃退できるように俺は外で寝るが。

後で聞いた話だが、どうやらこの家はドリズルの家らしい。

正しくは「え!!?」うちが奇麗になってる!!!!本も整理されてるし・・・

薬草とかもちゃんと小分けされてる!!なんで!?

と喜ぶドリズルを目撃したのだが・・・

・・・〈少年特訓中〉・・・

そんなわけで、それからドリズルの特訓を続けた。

おれもドリズルの書いた本を読ませてもらって収穫もあったから苦では無かったが。

「ねえ祥磨?」

「ん。どした?まだ修業開始までは時間あるだろ。」

「がんばりやなのはいいことだが、たまには休みを覚えなさいといざつて時に力を出せないぞ・・・」

とつぜん、ドリズルに声をかけられてうっかり保護者のような事を言ってしまった。
外観こそ、俺が父親っぽいけどな・・・

「ボクの魔法見たいって言ってたじゃない。

最近は何磨のおかげで魔力も安定してきたし、見せてあげるよ。」

「まじかつ!!」

長らく待っていたこともあり、テンション高めでドリズルの後を追って外に出る。

彼女は頭上にその細い腕を掲げて宣言する。

「光の聖霊よ、虹の輝きと太陽の灼熱を従え我にすべてを照らす輝きを!!!」

ドリズルの手の平の少し上の部分に大きめの魔法陣が展開される。

その手のひらには確かに魔力が虹色の粒子となって集まり、解き放たれる。

「『マスタースパーク』!!!!」

虹色の粒子は巨大な「筋の光」となってしまうが、

少女の顔も俺の顔も世界すべてを照らすかのような輝きとともに徐々に消失して

いった。

「ふう〜。つつかれたよ〜。祥磨、何か甘いものつくってよ〜。」

光がやんだ後、目の前にはいつも見ているごく普通の
ドリズルがいた。

「ああ。それと、あんだけの大魔法が打てるなら今日の訓練は無くていい。
今日は好きに過ごせ。．．．それとひとつ。」

わ〜い!!と無邪気に喜ぶ少女に真剣さが伝わるように言う。

「明日は、俺も自分の仕事をする必要がある。」

あの町の前にある『吸血鬼の王の城』に行ってくる。ついて来たかったら来い。」

ドリズルは若干表情を曇らせ、「うん。」と頷いて家を出て行った。

さて、明日はちゃんと役目を果たさなくちゃな。吸血鬼の王．．．。

「どんだけ、強いのか戦うのが楽しみだ。

もちろん、戦わなくて良いならそれに越したことはないが・・・」
なにせよ明日で決まる。

俺は一人、魔力と霊力を高めながら明日への思いを募らせていた。

第4 1 話—かぐや姫と月よりの使者。

「なるほど．．．それで俺が月で英雄なんて呼ばれてんだな．．．」

最初の夜。もちろん俺が難題突破して輝夜との初顔合わせした夜のことだが。

そのときは結局輝夜の爺さんが輝夜を呼んでお開きになったんで結局あんま聞けなかったんだよ．．．．

「ええ、地上から私たちが逃げる際たった一人で千や万の妖怪の大群の進行を

とめた大英雄つてね。あの後永琳やツクヨミ様がどうにか生きていてほしいって月ではあなたを神とした宗教がねざしてるわよ?」

なん．．．．．だと．．．．．

どうりで、神格化した後すぐに神力がわき出るわけだ．．．

あのときは対して深くかんがえてなかったけど。

「そか．．．．あいつらそんなに心配してくれてたのか．．．」

祥磨・・はもうこっちに来てるし

永琳やツクヨミ、依姫に豊姫・・大和のやつはちゃんと能力の練習やってんのかな？
優華はちゃんと元気にやってんのかな？

「あら？そんな顔するのね。神様が一部の者だけ心配しちやっついていいの？」

輝夜はとんでもなく意地の悪い笑顔でこちらをみてる。

「神といつても、俺は元人間で半人半妖。」

現在は現人神の神なんだ。多少は自分勝手な風にもなるさ・・・

ああ、あいつらにまた会いたいな・・・」

依姫や豊姫、第10分隊のみんなとは結局話す間も無く別れちまったし・・

「ああ。それならすぐにまた会えるわよ。」

依姫は確かいまや月の防衛軍総隊長だからわからないけど・・

他の鳴神大和、偵曇優華、八意永琳。

この3人とは確実にまた会えるわ。3人は精鋭だから私の回収に来るはずよ。」

「はいっ!??!マジかよ・・んで、回収って？」

まあ、転生前の知識でわかってるけどな。

「私は月で禁忌と呼ばれている『蓬莱の薬』という薬を飲んだのよ。

体にすべての変化を寄せ付けないという体質をつける薬。」

輝夜の話しを聞いてると、それを飲めば月から地球に流されることは知っていたらしい。でも、

月にはなんにも面白いことがなくて退屈でこつちに来るために飲んだんだとか

「へえ〜。んで回収って?」

「結局、向こうは私の能力を必要と判断し次の満月の夜に迎えが来るのよ。

でも私はこつちに残っていたいの!!!

そのためにも永琳も協力してくれることになってるんだけど、それでもあの月の精鋭二人が相手じゃ危ういのよ・・・」

「そか、・・・・・・・・・・ておい!!

次の満月つてもう明日じゃねえかよ
!!!!!!

そうだ、ちょうど前の満月から明日で1カ月が経つんだった．．．
てことは、明日永琳や大和、優華と会えるってことか
!!!!!!

「そうよ。時間が無いの．．．」

だからお願い。月の英雄の力が借りられればきつとうまくいく!!!

報酬は私の能力を挙げる!!!」

輝夜の能力は『永遠と須臾を操る程度の能力』

簡単にいえば、須臾（しゅゆ）とは一瞬という意味で永遠はそのままの意味。

一瞬の出来事を永遠のものとしたり、長い時の中でゆっくり変化するはずの物事を

一瞬で引き起こせる。

「そこまで、言われちゃあな．．．．了解。俺は何をすれば良い???」

「そうね、私たちの隠れられる場所を見つけてほしいのと永琳を助けて精鋭の足どめをお願いしたいわ．．．．」

最終的には一人で相手することになってしまいうし、かつての部下となると闘いにくいかしら?」

輝夜が心配、もしくは同情するような表情で見てる。

「もちろん、大丈夫だ。あいつらとのバトル？」

むしろ楽しみだぜ、依姫の元であいつらがどんだけ強くなったのかがな!!」
たぶん、今の俺は満面の笑みのだろう。

目の前の輝夜が軽く引いてる、まあ気にしないけどな！

「そ、そう・・・とりあえず、今日はもう話し相手になつてくれなくていいわよ。
明日にそなえてゆっくり休んで。」

輝夜はゆっくり立ち上がると奥の部屋に消えていった。

「りょーかい。さて、んじゃもう寝たいけどとりあえず近くに竹林が無いか
確認するか。」

隠れ家に関しては、『迷いの竹林』意外考えてないので
最初からその辺の森は除外してある。

「お。あの辺はちようど良いくらいの大きさの竹林だな・・・。」

しばらく飛んで、良さげな竹林発見。中心より少し奥深くあたりには少し大き目の家を建てれそうなくらいの空き地もある。

「よし。んじゃ、この辺にスキマを開けるように一回降りるか・・・」

ひゅおくとゆつくり降下する。

着地と同時に足が地に沈む・・・あれ？

「のわあああああ!!!」

完全に油断してだために思いつき腰を打ちつける。

??? 「うささささささつ!!引つ掛かったねえ。。。」

落とし穴の上のほうからうさ耳をつけたロrげふんげふん。

妖怪兔。『因幡 てゐ』（いなばてい）が顔をのぞかせていた。

「おいおい・・・笑ってんじゃねえよ。なんだってこんなところに落とし穴作ってんだうさ

ぎ・・・」

「おいおい、あたしやただのうさぎじゃないよ。私の名は因幡てゐさ。兄さんは？」

落とし穴から飛んで脱出する俺に関してはなにもつつこまずてゐるが聞いてくる。

「俺は白雲双覇。結神という神だ。それと半人半妖でもある。」

俺の答えに対して、てゐは「なんだい。半人とは言え半妖の神かい・・・なら幸運はいらないね」とつぶやいた。

「俺も一応人間だ。お前の足元に大量に生えてる四つ葉のクローバーの恩恵が受けれるなら受けたいところだが・・・」

どうせ、さっきの落下で傷一つ無いくらいの幸運をくれるんだろ？」

「うささささつつ!!確かにそのとうりだよ。あたしはこの辺に落とし穴を掘って人々の驚く姿をおもしろがってんのさ。」

全く悪びれもせず、てゐは豪快に小さな体で笑っていた。

「はあ・・・まあてゐがさつそく出てきてくれたのなら話は早い・・・

この竹林に明日から何人か人を寄こす予定なんだ。たのむここの土地を貸してくれ」

てゐは何度か拒否を繰り返し、実力で俺をおいだそうとしてきたが・・・

ここに来るやつがものすごい頭の良い奴でお前にもお前の仲間にもきつとたくさん
の

知識を与えてくれるというメリットを出したら許してくれた。

この兎、絶対得た知識でいたずらの種類増やす気だ・・・

「まあ、とりあえずありがとう。その人にはこつちから話をつけとくから・・・

それじゃあなっ!!」

てゐに別れを告げ、上昇を続け都の居住区である宿の付近まで移動。

「ただいまーつと・・・あいつまた例の『お友達』のところに行つてんのか・・・」

そう、スキマババ×げふん。こと、ゆかりんは最近、人間の友達を得た。

と言っていたのだ。

「まあ、その友達が誰かとも知ってたんだけどな．．．」

まあ、せつかく友達に会ってるんだから水差すのは悪いな．．．

そう思い、さっさとスキマから残りの食材を取りだし、晩飯を作る。

「ただいまっ——！！！！」

上機嫌のゆかりんが、見計らったかのように完成と同時にスキマを開いて入ってきてちよつとイラつとしつつ2膳目を用意する。

そして、ゆかりんをさっさとスキマに追いやり眠りについた。

．．．．．〈少年就寝中〉．．．．．

そして次の日の夜．．．．．

え？展開が早い??文句は駄作s y (メタ発言バリア!!!)

えくと、朝も昼も対して何も無かつただけだ。

朝っぱらからゆかりんがなぜかスキマから落ちて俺にボディプレスをかけてくる
言う奇跡的な寝像を披露してくれたくらいだ。

まあいろんな部位が柔らかくて怪我にはならんかったが．．．．．(／／／／)
ちゃんとお仕置きはしたけどな。

「んで、昼も食材を買い溜めたくらいだ。」

「あなた．．．なにかの病気持つてるの？一人でブツブツ誰に話してんのよ．．．」

俺の後ろで輝夜がうんざりしてる。どうやら全部声に出していたらしい．．

俺のほうもゆかりんの事変って言えないのかも．．

「持ってねえよ．．．ん。もっと緊張感をもてよ。お出でなすつたみたいだぜ。」

緊張感奪ったのはだれよ。というぼやきが聞こえてきたがまあ無視だな。

とりあえず。フード付きパーカーを召喚し（ついでにマスク）を装着。どっからどう見ても現代の変質者だがまあ気にしない。

「双覇の能力つていつ見ても、酷く万能よね……」

ため息交じりの姫様……おいおい、その分強い戦力なんだから喜べよ……

「んぐっ!!!????」

思考の途中にいきなり吹っ飛ばされた。

相手は……

『電符』ヘイル・バズーカ……。さあたたみかけますよ!!!!

『大和』!!!

ヘイル・バズーカ……まさか!!!!??

てか、いま大和つて……

「行くぜ!!!お姫様は返してもらおう。配役は、俺が姫を救い出す勇者。お前はせいぜいゴブリンつてどこか!!!」

聞きなれた、暑苦しい叫び声。

直後、腹にあり得ねえ衝撃が加わり吹っ飛ばされる。思いつきり突っ込んだせいで輝夜の屋敷が一部破損した・・・
ごめんなさい・・・。

「さて！名乗り遅れたな。俺は月の防衛軍第10分隊副隊長『鳴神 大和』だ!!」
見なれた、熱血オレンジ髪が叫び。

「同じく。月の防衛軍第10分隊参謀『禎曇 優華』です。」
こちらも見なれた、黒髪ロングの女性だ。

優華は両手の銃から今度は雷撃を迸らせ、大和は拳を作りなおす。

「俺たちあ? 月の最強夫婦がお前を殲滅してやるぜ!!!」

なっ!?!?!? あ。あの大和が殲滅なんて難しい言葉を!?

.. .. !!じゃなくて最強夫婦!?

耳を澄ますと優華が「もうっ!! 恥ずかしいから誰かれかまわず言わないで!!」と怒ってる。その左の薬指には銀に輝く指輪・・・

「そっか・・・結婚したんだ・・・」

俺が・・・遅れた・・・???

あの大和にすら出し抜かれた
??????

相も変わらず、追撃の手を止め「いいじゃん。俺はみんなに可愛い奥さんを知ってほしいんだ」だの。「もうっ!! (〓〓〓〓)」だの。

新婚っくか付き合いたてのカップルみたいなのやりとりをしてるふたり。

ふうくくく・・・こっちに来てからは初めて言うかもな・・・

「(ぶちっ) リア充め!!! 爆発しやがれええええええええ!!!」

なんか、聞こえちゃいけない感じの音が脳から聞こえて、俺は部下の幸せを祝福することをせず、非モテらしく撲滅運動を実行することにした。

第42話―祥磨のイギリス放浪記③

「さて!!今日も元気に吸血鬼退治にいつてみよー!!!」

ドリズルの生マスタースパークを目前にした次の日、

俺はそのドリズルと一緒に最初に会った城下町に来ていた。

「今日もって祥磨・・・ボクはそう頻繁にヴァンパイアハンティングをした覚えは無いんだけど・・・??」

俺がテンション高めに言った言葉に冷静に突っ込んでくるのは

イギリスに来て、知り合った魔女。ドリズル。

「まあまあ。それより・・・大丈夫か?」

城からは距離を置いておるとはいえ、もうかなり濃い妖気が

漏れてきている。ドリズルが耐えられるか心配だったが・・・

「うん。大丈夫だよ・・・」

目の前の魔女は、肩を抱き震えながらもこちらに笑顔を浮かべてくる。

本来はサファイアのような青い瞳は紅く染まり、体から魔力を感じる・・・

「……そつか。辛くなったら言えよ?」

その時は、それしか言えなかった。

ただなるべく笑顔でドリズルを安心させられるように・

「うん。……」

ドリズルを抱え、山の上にある真つ赤な目の悪くなりそうな屋敷に向かう。

……〈少年少女移動中〉……

「たのも。この屋敷の城主、スカーレットとかいう吸血鬼はどこに居る。」

扉をあける。誰も居ない……

「あれ?! だから城主を出せて……待たされんの嫌いなんだよ……

んぐっ!!?」

背後で扉が閉まる音。

そして背中に強い衝撃……

少女の悲痛な叫びがこだまする。

「はあはあ．．．んぐっ!!!がはっ!!!」

泣き叫び、拒絶しながら。体に刻まれた本能を怖がるように．．

??? 「ほう．．今日は男、か．．私としては美女の血が飲みたい気分なのだが．．

まあ良い。そいつの血はきさまにやろう。『飲め』ドリズル・スカーレット」

背後に現れた謎の男。後ろを向く力は無いが声が低いので恐らく男だろう．．

「へ．．．嘘．．．嫌だ．．．やめて!!!やめてやめてやめて．．．」

嫌だ。殺したくない．．．」

言葉の拒絶もむなしく、ドリズルはこちらに進んでくる。

どんどん歩みを進める．．．

「かはっ!!ぜえぜえ．．．」

「もうやめて．．．止まってよ．．．嫌だ．．．血なんて飲みたいくない．．．

なんで．．．なんでかかって動くの．．．やめて!!やめてやめて!!!」

俺の前に膝を着く、口を開き首筋に運ぶ．．．

そして、歯を振り下ろ「どしゅっ!!!」え……………
 「ド…………リズル…………?」

目の前には、青い目をした女の子間違いなく『人間』の……
 『魔女』でも『吸血鬼』でもなく人間の…………ただの女の子…………

それが、自分の心臓に十字の刃を突き立て倒れていた。

「はっ…………はっ…………あはは、やっと…………止まってくれた…………ごめんね祥磨???
 ボク…………魔女になれなかったんだ…………吸血鬼と…………契約…………して…………」

「もういい。もういいからしゃべるな…………頼む…………もう…………良いから…………」

少女はゆっくりと瞳を閉じ、笑った。

俺はずっと泣き続けている…………

「ボク…………ね…………楽しかったんだ…………化け物だから…………人と会わないようにしてた…………
 なのに祥磨は…………ボクを…………助けて…………だから…………君なら信じれるから…………君
 の前でなら…………ボクは普通の女の子で…………普通に人として恋することができたから…………」

もう…………やめてくれ…………別れの言葉なんて嫌だ…………

まだ、俺はお前と修業していたいんだ…………

「もういい……。もう無理なんかしくない……。」

町に住めばいいじゃないか……。ドリズルは化け物なんかじゃない……。たとえ、誰も信じなくても……。ドリズル自身が信じなくても……。俺はわかってる。ドリズルはただの可愛い『人間の女の子』なんだ……。」

「ありがとう……。しよう……。ま……。ボク……。も……。祥磨が大好きだったよ……。」
ドリズルは、少しだけ顔をもち上げ……。俺に……。柔らかなキスをした。

「……。……。……。……。……。召喚十六夜 咲夜。」

少女を召喚したベッドに寝かせ、咲夜に頼んで少女の時を止める。

少女は笑っていた。最期まで、俺が好きそうな笑顔で居てくれた……。
??? 「ふむ……。やはり魔女にすらなれぬような人間では失敗だったか……。」。
次はもつと優秀な人形を作らねば……。ぐつつつ?!!?!?!?」

「ぎげんな……。てめえ、人を何だとおもってやがる……。てめえの所為で

未来を奪われた人間は何人居る……。」

気がつけば、魔力と霊力を進らせ後ろで観賞していた男性吸血鬼を殴り飛ばしていた「ふむ。まずてめえなどではなく『ベル・スカーレット』と言う。」

そして、質問の答えだが・・忘れてしまった。あんな貧弱な種族殺した数を覚える気にもなれん。」

ぶちっ!!!!

このクソが!!!!!!

「そうか・・・なら、もう良い・・・・・てめえは殺す。」

エリユシ・データ、ダーク・リパルサー。」

召喚したのは、二本の剣。

ソード・アート・オンラインの主人公が振るう2本の剣。

「申し遅れたな。俺は神薙祥磨・・・・」

『万物を呼び出す程度の能力』を持つ、いままでで最強のヴァンパイアハンターだ。

はあ!!!
!!!」

相手の反応も待たず、一気に接近して斬りかかる。

ベルの体は真つ二つになり死んだ・・・・・

「ほう。それは楽しみだ・・・」

私はベル・スカーレット。『干渉する程度の能力』を持っている。

さて、お前は何度私を殺せる？」

死体が蝙蝠になり、また復活する。

ま、どうでもいいもういちど接近縦に搔つ捌く。

復活。

瞬殺。

復活。

瞬殺。

復活。

瞬殺。

「なるほどな……。お前の能力の弱点見つけた……」

「ほう。私の能力に弱点だと？」

「一体なんだ??これまでのハンターは銀も十字架もにんくも木の杭も使ったがすべてを生きて殺したぞ?」

「なるほどな……でも、あいつの能力が誰にでも発揮できるなら……」

「わくったわくった。御託はいい……ならご自慢の能力で俺の思考に干渉して殺したり、すりやいいじゃねえか……なぜしない？」

問いかけた瞬間にまた斬り殺す。

「せつかくの楽しい勝負だ、楽しみたいのだよ。長くなつ!!!」

復活して、いままでの仕返しとばかりに攻撃してくるベル。

流れる乱打をすべて剣で受け流す。

「ああそうかい!!!なら、何度でも殺してやる!!!!!!」

『召喚』ガキの喜ぶ痛みの無い世界」

唱えた瞬間、屋敷の景色……いや、世界の景色が変わる。

俺の呼びだした世界へと……

「なにっ?!?!なんだここは……」

それに!?!この数字は……99?　ぐあああああ!!!!!!」

困惑するベルに躊躇なく、斬りかかる。

99、98、97、96、95、94、93、92、91、90、

「いま、10回殺した。ここではお前がお前に対して行った『不死』の干渉も関係ない。」

そう。ここはゲーム。それも『スーオーマオー』とかでおなじみの蘇生回数が決めら

うるせえ……自分も死と向き合えばちよつとは反省するかと思えば……
しやあねえ……

「(どしゅつ)なあこれでわかったか？再生しないだろ??」

左腕を切り落とし、再生しないことを確かめさせる。

「なっ……なぜだ……この私が……王である私が———!!!」

「やかましい。(びゅんっ!!!)」

さすがに呆れて、首に添えられていた剣を振るう。

邪悪で傲慢な吸血鬼の王を99回殺してゲームクリア……

「世界は、元の形に戻る。」

元の真つ赤な屋敷の内部に戻る。

目の前には、99回も殺され精神的にも完全に死んだベル。

後ろには未だ止まった時の中で生きるドリズル。

「その身は朽ちてもその愛は朽ちず、その鼓動は止まってもその思いは止まらず。」

呪文を唱えると、ドリズルの遺体は暖かな光を放ち空に浮かぶ。

そして徐々に体内から妖気が取り出され……消え去る。

「じゃあな。ドリズル……」

俺が発動したのは、念のために作った魔法だ……

ドリズルが……

効果は……転生。

自分が死んでしまった時に俺が唱えることで発動する。記憶と一部を除いた魔法を

消去しいつか……未来でまた会う・

たぶん、ドリズルは俺のために作ってくれたんだと思う……

「ふむ。どんな魔法だ？私の分身を99度も殺すとは……」

突如聞こえた声に振り向く……

まだ再起不能になってるベルとそっくりな……けれど妖力が段違いに多いベルが居

た……

第43話―双雲、紅き王と月の精鋭。

．．．．〈祥磨サイド〉．．．．

「ふむ．．．私の分身を99度も殺すとは．．．どんな魔法だ？」

突如として目の前に現れた2体目のベル．．．

いや、最初に心からボロボロにしたベルはすでにベルではなく大した妖力を持つてない吸血鬼の姿をしていた。

「．．．．．妖力が段違いだな．．．お前（が）ベル・スカーレットか？」

はつきり言つて．．．こいつが本物だ。間違いない。

こいつの妖力はさつき惨殺した奴の数10倍はある．．．

俺が本気になつても勝てるかわかんねえや．．

「まあ、そのとうりだ。私がベル・スカーレット。

先ほどお前に殺されたのは影武者と言つたところ．．．いや、正確には奴も私だが．．能力で思考、細胞、能力に干渉し、完璧に私を造つたのだが．．．」

「なるほどなあ．．．全てに干渉できると言うことは自分のクローンすらも作れるのか

「……てか、『干渉する程度の能力』すらもその吸血鬼の能力だったらどうしようかと……」

「てことは、能力の発現条件も同じはず……」

「十分に気をつけて……っつっつ!!?!」

「ぐあああああ!!!がつはっ!!」

「馬鹿な!!警戒は解いて無かった……」

「近付かれたら気づけたはずなのに……早すぎる……」

「ふう……私の能力の弱点を見つけたと言うから驚いたが……まさか本当に気付かれていたとは……まあいい『跪け』」

「ぐっ!!」

「畜生!!ベルの言葉に応じ、膝を折る俺の体……」

「やはり、この光景のほうが落ち着くな。さて要件を『言え』」

「ここより、東の国。日本という場所で八雲紫という妖怪が人間と妖怪が共存できる

そんな理想郷をつくろうとしてる。俺はその手伝いだ。」

まあ思考に干渉して、嘘を言わせないようにされたところで

嘘つくような内容でも無いし。さて、相手さんの反応は……

「ふむ。。それで？その理想郷作りお前はどうか考えてるんだ？」

この問いに関してには能力で勝手に体が動くことも無かった……

つまり、従わせられる命令は簡潔じゃなきゃ無理なのか？まあいいか

「もちろん。んなのはただの夢物語。」

いったいいくつになつてほざいてやがるつて感じた。

人は妖怪を恐れ、妖怪は人を喰らい、神はその人の願いを聞き、信仰を得るため英雄たちにその力の一部を貸す。これは人間と妖怪、神を結びつける絶対のルールだ。

人間と妖怪は相反する存在、共存なんて生半可なやつには叶えられっこ無えし、笑われて終わりだ。」

「……くくくく。てつきりお前もその紫という妖怪同様、できると根拠の無い

事を言つて協力を仰ぐ愚か者かと思えば……では、我々吸血鬼に実現なんてできな

いだらう空想の理想郷のために、領地を捨て協力しろと？」

紅い瞳は一層強く輝き鋭い目つきでにらんでくる。

わきあがる殺気を隠そうともせず。

「ああ。ぜひ頼むたしかに、誰に聞いたところで夢物語、儂い幻想、実現不可能、
だろうが・・・その八雲紫なら必ずやってのける。規格外の強さを持つ神も居るしな
それに、・・・

お前も感じてるとは思うがこの世界の人間たちがお前らを恐れなくなったとしたら
?

もし、妖怪の存在がその世界と同じように幻想になってしまったら・・・
もう妖怪は、夢の中の理想郷に逃げるしか無いんじゃないかねえか？」

やがて、俺の言葉にベルが訝しげな顔で考え込む。・・・
しばらくして俺の体の拘束が解け、立ちあがれるようになった。

「ふっ。私の前で偽りを口にせず、怯えもしなかったのはお前が初めてだ。
わかった。その新しい世界の創造・・・我ら吸血鬼も協力しよう!!!」

「……あら？貴方そちらの方は人間？生きて館の中に入れた人間なんて数100年ぶりね。」

これまた唐突に屋敷の奥から、若々しいが大人の魅力という言葉にふさわしい女性が現れた。うくん、確かに妖力は感じるし吸血鬼ではあるんだろうけど……

「これは失礼しました、俺は神羅祥磨。魔力は使えますが確かに人間です。能力は『万物を呼び出す程度の能力』です。」

「うふふ。私は『イヴ・スカーレット』そちらに居るベルの妻で『不吉を視る程度の能力』をもっています。」

女性……イヴはやはりベルの妻らしい……

不吉を視る……か。

「おいイヴ。できて大丈夫なのか？あまり無理をするなよ？」

ベルの問いに「ええ……」とイヴさんは短く答えた。

まさか……

「イヴさんは体が悪いんですか？」

「ええ。実は今、身ごもってしまして．．．それに私は元人間なんですよ。

そう．．．あの夜。この人に牙を突き立てられるまでは．．．．．」

結局その後、なぜか俺はベルとイヴの馴れ初めをずー．．．．．つと聞かされ続け、この屋敷で執事をする羽目になった。

はあ．．．．．双覇のやつ．．．元気にやってかな？

．．．．．〈祥磨サイドアウト〉．．．．．

．．．．．〈双覇サイド〉．．．．．

「爆死しやがれ!!このリア充がああああああああああああ!!!」

叫び結月龍爪を引き抜く、そして突きの体勢で

突っ込む!!!

「なっつつつ!!あつぶね!!!」

もう人目を気にせずキスしちまうんじゃないかねえか? つてぐらい二人だけの特甘空間に

居た大和が、寸前で迫りくる刃に気付き飛びのいて躲す……ちつつ!!

「まだ、倒すべき標的が居るつてのにこれ見よがしにいちやくくんじゃねえよ!!!

モテない俺への当てつけか!!この野郎!!!」

そうだよ!どうせ俺は好きな相手に手紙だけおいてさっさと消えちまうようなチキン

だよ!!この野郎がアアアアアアああああああ
!!!!!!!

「なんだあ嫉妬か?勇者のお姫様救出物語なんだから、無理して邪魔しちやだめだぜゴブリン!!!」

勇者（w）大和が斬りかかってくる。龍爪の刃で受け流し後方に目をやる。

優華がすでに準備していたのか叫ぶ。

「大和!攻撃いきます!!!『雷弓』グリントオブ・ビー!!!!!!」

先ほどまでの銃は消え去り、両手に美しい弓を構えた優華が雷を伴う矢を飛ばしてく

る。大和の猛攻はそのタイミングで一旦やみ、その隙を埋めるように今度は矢が視界いっぱい……

「サンキュっ優華!!んじや、こっちもかっこ悪いところはみせらんないな!!!」

大和の声にびくんっ!と反応し顔を真っ赤にする優華……

なんだ?今時の女性つてのはああいうストレートな感じが好きなのか???

転生前は全くモテず、リアルをあきらめ二次元に1チャンかけて密かに恋愛ゲーをやったりしてた俺じゃ駄目だったのか……

「はっ!てことは……もしかして文も……俺のこと実は嫌いだったんじや……
文花帳も迷惑だったんじや……」

「戦闘中に考え事していると取り返しのつかないことになるぜっつ!!!」

「あ。やべ……」
ずしやああああ!!!

一瞬対応の遅れた俺に大和が刃を振り下ろす。

当然、胸から腹にかけてでっかい切り傷ができて俺の開き完成!!!

「うそ……でしょ……そう……は……双覇あああああああ!!!」

絶世の美女。蓬莱山輝夜も叫ばずには居られないらしい……まあそりやあそうだけど……

．．．．．「はい何でしょう？」

地に倒れた死体は黒く染まり沈む。

黒き影は本来の色を取り戻し、世界という舞台上に上がる。

「契約解放。『フェル・スカーレット』」

影魔法『Shadow Of Switch』—嘲笑う幻影
残念ながら幻影だ。」

大和の顔が驚愕に染まる。

まあそりやあ死体がまた立ってしゃべりだしたらビビる・

「う……そ……そ……?」

優華が声を漏らす……あれ? そう言えば口元と頭の風通しが良くなったような・

まさか……

「そ……そう……双覇……隊長??」

大和が決定的な言葉を口にする……ミスった……

マスクとフードがとれたのか……

「え……えーと。もしかしなくても俺……ばれてる?」

つぶやいた瞬間、二人とも一気に駆け寄って抱きついてくる。

「し……しよう……師匠……!!! やっぱり生きていてくれたんですね

ッ師匠!!!」

「双霸さん!!!双霸さん!!!良かった!!生きていてくれた……」
「そうはさくくくん!!!」

二人とも涙を滝のように流して抱きついてくる。

大和は鼻水のオプシヨン付き……まあなんだ……とりあえず!!

「俺はもうお前らの隊長でも師匠でもねえよ!!そして、まだ戦闘中ってことを

忘れんなよ???

べちよべちよの服をどうするかは後で考えよう……。

妖力解放!!!

「つつつつ!!!」

二人は即座に離れ、体勢を整える。

うし、ちゃんと依姫に教育されてんな……

「師匠がその気なら、こつちも本気で行くぜ!!!」
「あつまって大和。いったん作戦を!!!」
ぐ
ふっ!!!

「契約解放『斎藤衛』大和を超える。はあ…熱くなると暴走するの変わってねえな…
奥さんの忠告はちゃんと聞くもんだぞ?」

たしかに、配役どりに自分の世界に相手をつれこめる大和の能力は強い。

でも、その世界で自分を最強に設定してる大和を超えちまえば関係ない…。

「あ…もしかして。私終わっちゃってます?」

冷や汗だらだらで俺を見つめる優華。

はい!!終わってます…

!!!!!!

「そんじゃ、覚悟はできてんな参謀。…ていつ!!」

恐怖して俺が接近するのを見る優華…

おいおい、いくらなんでも女子にそこまで酷いことしねえって顔のすぐ前に行き…

デコピンをする。

「いたっ!!」

ちよつと強かったかな??うずくまったらあ…

「て…あれ?お前らだけか?」

たしか、軍を率いて輝夜を回収しにくるって…

んぐっ!!!

「双覇くく!!!あなた、やっぱり生きてたのね!!!あの時はたいてごめんなさいくくく!!!」

「お……おう永琳久しぶり……ほかの軍の奴らはお前がやったのか???

あ……と……窒息する!!!」

涙を流した永琳に抱きつかれる俺……

当然密着する形になり、呼吸器が全てふさがれる……てまずい!!死ぬ死ぬ死ぬ

—————!!!

「ふはあつつ!!はあはあ……とりあえず、俺の信仰を集めてくれたんだって?

サンキューな。それと、腕を治す薬も助かった。」

その後……大和と優華は依姫に俺が生きていたことを報告そしてツクヨミに計画の失敗を告げるために大量の昏倒した兵士を連れ、月に帰って行った。

「んじゃ、隠れる場所はもう見つけてあるからいくぞ。」

スキマを開き、二人を連れて中に入る。

抜けた先には当然広大な竹林。

「うさ?そいつらが、あたしたちに智恵を授けてくれる人間?」

「ああ、そうだぞてゐ。 んじゃ後は……『結び合わせ』竹林＋迷い」

遊戯に良く使う迷路を呼び出し、迷路の迷いの概念を竹林に結びつける。

これで迷いの竹林完了！

「んじゃ、俺はこれからまだやることがあるから一旦都に帰るわ。 じゃあな!!」

迷いの概念を付与したことを伝え、スキマに入る。

さてさて輝夜姫さまから蓬萊の薬2本と帝への手紙も受け取ったし……

さつさと届けて終わりかな……

俺はすっかり忘れていた……

この数日後、俺が届けた薬が原因で一人の少女が孤独になるということを……

番外話―絶世の美女編登場キャラ能力まとめ!!

まず一人目!!神薙祥磨いつてみよ!!

祥「おれか・・・」

〈神薙 祥磨〉かななぎしようま・・・種族 人間（魔法使い）

二つ名 ????

祥「ありや?まだ無いんだな・・・」

幻想郷縁起なんかも無いしね。それじゃ続き

能力・・・万物を呼び出す程度の能力、想像する程度の能力

万物を呼び出せる。つまり概念的なものや人物、外の世界の技術、現実には無いもの

全て呼べるってことだな・・・

祥「うん。王道チートだよな・・・時系列を無視して咲夜呼んだりしたし・・・」

ただし、呼び出すためには対象を完璧に想像する必要がある。

そのための能力だけど・・・それでも想像には限界があるからな未知のものを創造しようとする、想像したスペックで現界する。

祥「つまり、某英雄召喚小説の英雄特有の武器を召喚しようとした場合その武器の

形を細部まで想像し、さらに逸話などの観点から付与したい能力まで完璧に想像しないこと、ただの武器になるってことか・・・」

そゆこと、あと脳の限界を超えて想像することでちよつとした予知見たいなことをするのが『想像する程度の能力』だよ。

んじゃ二人目

〈蓬莱山 輝夜〉ほうらいさんかぐや・・・種族 不老不死（蓬莱人）

蓬莱の薬というありとあらゆる変化を拒絶する薬を飲み、不老不死となった少女。

日本最古の物語かぐや姫の主人公。

二つ名 永遠と須臾の罪人

能力・・・永遠と須臾を操る程度の能力

永遠とは不変の力。

輝夜は自身も不変の身であり、死ぬことも老いることも、病になることも、成長することも無い。また、この能力は自分以外にも適用される。

原作では永遠亭（竹林に建てた隠れ家）に使用することで、幻想入りしてからゆうに

1000年は経過している永遠亭はどこも老朽化していない。

須臾とは認識できないほどの一瞬を意味し、言葉としては1000兆分の1を意味す

る単位。この場合は認識不能の数の最小単位。

この力は原作でもあまり使われた描写がないが、輝夜は一瞬（須臾）を必要なだけ集めることでほかのだれにも認識できない時の中に存在することができる。

一瞬の集合体の中で行動することで瞬間移動や、「他人と同じ時間」と「他人と違う時間」を同時に過ごすことができる。

祥「長くなつたが要は『永遠Ⅱ変化の拒絶』、『須臾Ⅱ極限の加速』を操れる能力だよっしや！3人目!!!

へ八意 永琳〈やごころえいりん〉．．．種族 人間（月人）

二つ名 月の頭脳

能力．．．ありとあらゆる薬をつくる程度の能力

月の頭脳と呼ばれ、月の都市開発や兵器開発の第一人者。

能力によって大抵の病や怪我には特效薬が作れる。

どんだんいくぜ!! 4人目!!!

へ八雲 紫〈やくもゆかり〉．．．種族 スキマ妖怪

二つ名 神隠しの主犯

能力．．．境界を操る程度の能力

境界。とはこの世の物質全てに存在する隔たりを意味する。

水平線などがその例で、境界が存在しなくなるとこの世のすべての事象は一つの大きな塊になりそれぞれが意味を持たずに崩壊する。

スキマと呼ばれる空間の裂け目を開くことで空間の境界を操り、離れたものを点でつないで移動したり物語や夢、絵の中にすら入れる。

その力は神にも匹敵するとされ、実と虚の境界を操り湖の中の虚(嘘)の月を本物(実)の月に繋げて月に攻め入ったこともある。

さあ次5人目!!!

〈禎曇 優華〉ていうんゆうか・・・種族 人間(月人)

二つ名 月の最強夫婦(大和も一緒の場合)、月軍の美しき剣

能力・・・霊力を変換する程度の能力

霊力の性質変換たとえば、霊力を炎にしたり雷にしたりが瞬時に行える。

さらに霊力で形作ったものを少しの間具現できる。

(剣、刀、弓、銃)

祥「でも、作るものの大きさによって作成時間が増えるし霊力の供給を止めると消えるんだったな。」

ああ。んじゃ次6人目!!!

〈鳴神 大和〉なるかみやまと・・・種族 人間(月人)

二つ名 月の最強夫婦（優華が一緒の場合）、英雄となりし吟遊詩人
能力・・・物語を刻む程度の能力

自分が作者となり、配役をきめることでその人物をその配役どうりにパワーバランスをひっくり返せる。圧倒的力を持つチート級のキャラも彼にかかればスライムと化す

まあ、未だ妻であり参謀である優華からの指導は絶えないそうだが・・・

配役にそつて世界観にあつた武器を持つことで、英雄が持つ武器のような能力を付与することもできる。

ラストスパート!!!7人目!!!!!!

へベル・スカーレット)・・・!!種族 吸血鬼

二つ名 吸血鬼の王、赤より紅き闇の王

能力・・・干涉する程度の能力

干涉。つまり物理的に触れられないはずのものに触れて改竄できる能力。

そして発動条件は・・・

祥「物理的に触れること・・・だ！」

そのとうり、自分に対する干涉は自由にできるけど誰かにも影響を及ぼす干涉は必ずその者に触れなければならない。そして、干涉する際の命令は簡潔で無くてはならな

い。本音を言わせる時||言え、降伏させる時||跪け等だな。

ただし、命令を実行するだけの人形を作るときは相手の体に触れ続けなければならぬ。
い。

祥「要はネクロロマンスか・・・」

そんなかんじだね・・・まあ命令を聞かせてる間触れ続ければ良いだけで殺す必要はないけど・・・。

んじゃ次8人目!!

〈イヴ・スカーレット〉・・・種族 吸血鬼(元人間)

二つ名 夜より暗き夜の女王、不吉を見ゆる魔眼の姫

能力・・・不吉を視る程度の能力

これはまあ・・・不吉。要は悪い予感がするって感じのが目に見える能力だな。

まだ幼いイヴはこの能力で不吉なほうに行こうとする友達を遠ざけ自分が代わりにその分を受けるといふ風に過ごしたんだ。

祥「その結果病気になったってことか・・・」

うん。吸血鬼になった事でその病も侵攻が遅れてるけどね・・・

ラスト!!!9人目!!!

〈ドリズル〉・・・種族 人間

二つ名 魔法を愛した普通の人間。

能力 魔法を開発する程度の能力

祥 「ドリズル……か……魔法を開発する程度の能力も実際はもってなかったんだよ……」

うん。ベルによって作られた魔力であり、作られた能力でありもとは普通の魔法が好きなだけの人間だよ。

祥 「能力の説明としては、能力を発動し魔力を込めながら記した魔法は魔力を込め詠唱することで適正のあるものに見える魔法となる。」

本に記せば、その本は魔導書―グリモワールとなるってことだね。

そして彼女が記し続けた魔法の内、マスタースパーク等一部の光、熱魔法意外の一切の魔法は転生の蘇生魔法を使った対価として今は本ごときえさったよ。

祥 「未来でまた会えるかな……」
会えるとおもうよ（黒笑み）

絶世の美女編終了。亡霊の舞う死の桜&コラボ編!! 第44話—八雲の友人!?悲劇の少女。

「どうも。いつもニコニコあなたの隣に飛び出すスキマゆかりんよ。」

「……………えっと、突っ込みどころはたくさんある……」

「なぜいきなり、目の前に現れたのかとか……この時代に存在なんてしてはるはずもない
ラノベの台詞をなぜ引用できるのか。とか……」

「まあ……とりあえず……なんのようだ?ゆかりん。」

「あらら……普通の反応ね。あなたの夢の中に入って持ってきたのだけど私が使うと駄目
なのかしら……まあいいわそれより……」

「なるほど、夢の中で外の世界のことを思い出してたのかな??」

「ん?なんかゆかりん怒ってる?」

「いつになったら、私の式と協力してくれる妖怪探しを始めるのよ……!!!」

「いくら術式が完成してもこれじゃ結界で隔離できないじゃない!!!」

ああ〜・・・なるほど・・・

俺が輝夜の逃亡を手助けしてから、もうずいぶんたつ・・・300年くらいは立つのかな？

ちなみに、俺はず〜つと生きてるわけだがばれると面倒なのでひいひいひいひいひい孫位の認識だ。え？どういふことか？要は自分を一回妖怪に殺されたことにして息子だ孫だつて言つて一人転生ごっこしてる。

「まあ。それも面倒になったから、今は仙人なんぞやつてる身だが・・・

それより・・・式の事だつたら祥磨に一任しなかつたか？俺はだるいしもう百年眠つてたい・・・」

「だぁー！！！！た〜つ！！わかつたわ。とりあえず式の件は最悪私が自分

でなんとかするから、あんたは境界を創るための力を貸しなさい。」

なんか、もう大妖怪の威言も何も無くなつたな・・・

「わあ〜つたわあ〜つた。どうにかするよ、んで？今日は例の『お友達』のところに行か

なくて良いのか?」

そう、なにかうれしいのかここ最近このスキマは毎日のように友達に会いに言つては飯のタイミングで帰ってくるという行為に及んでいる……

「あつ!!忘れてた……それじゃ、頼んだわよ。」

そして今日もいつもと同じようにスキマを開いて友人のもとに消えていく……突然、俺の座つていたはずの場所に奇妙な浮遊感が生まれ……まつさかさまに落ちた。

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!!!!!」

周りを見渡すとやはりいつもどりの、目がたくさんの空間。

しばらくして、出口から光が差し込む……

ガンつっ!!「痛つて!!!うおい!!紫!!!」

目の前に広がるのは……馬鹿みたいに長い階段。

そして……はるか上空から舞い散る桜……

「紫……あんにやろう~~~~~!!!!!!」

どどど．．．!!!と石畳の階段を駆け上がる。

紫は恐らくはるか頭上にかすかに見える屋敷でその友達と会っているのだろう。なら、そこまで行かなければ．．．誰が見てるかわからないから飛びはしない。

「うおおおおおおお!!!」

!!!

なおも雄たけびを上げながら駆け上がることに、体感時間で1時間以上。

ようやく、階段の終着点につき、勢いよくジャンプ!!

着地しようとしたところで．．．

「幽々子さまの大切なお客様が来ていらつしやるのにうるさいわああああ!!!現世斬

!!!」

いきなり、ずいぶんと厳格そうな顔つきのじいさん。。

いや、髪や髭が真っ白だからそう見えるだけかもしれないが．．．
が日本刀で足を落として．．．て!!!?!

「のわあ!!!『結い』足+空気!!!」

能力つかって空気の上に立つ。あつぶねええええええええ

!!!!!!!

「なぬっ!! 一体どんな能力だ……」

「あんたこそ一体どんなクレイジーじいさんだ!! いきなり斬りかかるとか

正気か!!」

たくっ!! まじで、どんなじいだよ!!

華麗とすら言える流麗な動き……剣を振るう動きは達人の域だな……

「だが、まだだ!! 未来永劫斬!!」

さっきの非じゃない速度の剣技がせまってくる。

ちっ!!! しょうがない!!! 結月を引き抜き速度をじいさんに合わせて……

「おらあつつつ!!! もう容赦しねえぞ爺さん!!!」

俺もその主人の友人の連れだつつんだよ!!!」

たくっ!! とりあえず排除しようとするとか!!!

少しは話し聞けつつんだよ……

「んっ!! ぐ!! ぐぬっ!!! まだまだ行きますぞ!!!」

「ちいつ!!まだスピード上げてくんの!かよ!!!

ああ・・・もう!!!めんどくせえ!!!」

がぎんつ!!!思いつきはじき返し!!

じじいの体勢を崩す・・・

「なんのつ!!!これで終わりですぞ!!!!」

まあ、その程度で崩しきれるとは思って無かったけど・・・

とりあえず・・・

「俺の勝ちだぜ。じいさん『神域』白雲式多重結界・天!!!」

「ぬっ!!体が・・・動かない・・・」

相手の種族は半人半霊。

区分的には霊力が強めつてだけで半人半妖と変わりはあるがあまりない。

「つまり!!あんたの体は俺に対し、抵抗をやめ支配される!!」

おわりだ!!!『結刃』結界爆散陣!!!」

結界に閉じ込めた相手を使わなかった結界を破裂させ鋭いガラス片のようにし、

相手＋結界片（ガラス片）で結び襲いかからせる。

「ぐああああああ!!!」

うしっ!じいさんを気絶させるぐらいの威力はあったってことだな。

名前聞いてなかったけど・・・この感じ。たぶん妖夢のじいちゃんだな・・・
とにもかくにも・・・とりあえず!!!

俺の勝ちだ!!

「お〜い紫〜。スキマで放り出した揚句放置するたあい度胸じゃねえか・・・

二度とスキマが開けなくなるくらいにぼこぼこにしてやろうか?」

結局。じいさんを背負って屋敷まで歩くことになった俺・・・

戦って勝とうが、こうなるんじゃ意味ねえよなあ・・・

「あらら・・・妖忌。負けちゃったの?」

貴方紫のお友達って聞いてるけど強いよねえ・・・私は西行寺 幽々子。

おなじく紫の友達よ!!」

えらくニコニコして、顔は美しいってイメージなのに元気いっぱい

可愛いってかんじのイメージを振りまく黒髪の女性へえ〜幽々子か〜・・・

あのバキュームのくく．．．つて

「幽々子さん!？」

「ええそうよ?」と答える女性。やべえピンク髪の原作のイメージしかなかったから全然気づかんかった．．．

「ああ!!えくと．．．俺は白雲 双覇と言います。

種族は半人半妖の現人神で『結神』という神をやってます!!」

とりあえず、部外者であることに変わりはないので、名乗っておく。

なんか、幽々子が私よりも若く見えるのに神様なのね〜とか言ってる．．．
いやいや．．．まず神に驚こうぜ．．．

「ん．．．ゆ〜か〜り〜ん〜???」

できうるかぎり、安心させられるように超笑顔で話し掛ける。

なのに、あのスキマ妖怪はさらに幽々子の影に隠れてビクビクしてる．．．

「お〜い．．．話しかけられてんのに人の影に隠れてんのは失礼じゃない???」

(ニコニコ)」

靈力を足を溜めて爆発させることで、超加速。

幽々子の、もつと言えば幽々子の背後の紫の背後に移動。肩に手を置き振り向かせる

(びくっ!!!) 「え。えくとね?これには深いわけが・・・」

へえ。人をいきなりスキマ落としてさらについたらついでその場に放置する。
という行為を正当化できる理由か。どんなだろ。どんなだろ。

繰り返して言うけど、今の俺はすつごく良い笑顔だよ?泣いてる子を笑顔にできるつてくらしいの笑顔だよ?

でも・・・おつかしいね!!目の前のゆかりんはむしろこれから泣きそうな顔してるよ???
ふっしぎっしぎっし!!!

「えくと・・・つい、出来心でやっちゃったっつ? (テヘペロ!)」

.....

ん?この後?もちろん即座にスキマ落としたよ???

言い分が許せないのもそうだけどゆかりんのテヘペロが見てらんなかった・・・

あ。そうそうあとで聞いたけど本当の理由はゆかりんが自分の式を差し置いてでも解決してほしい災厄が近々起こる気がするかららしい・・・

用は、虫の知らせ的なやつだけどゆかりんでも手に負えなさそうな災厄に心当たりは一応あったので・・・今日からこっちの屋敷に住むことになった。

「西行妖か・・・」

ひとときわでかい桜を見上げ、悪寒が走った・・・

第45話—黒衣の神、舞い降りし死影。

俺が、この屋敷。

『白玉楼』に住みだしてからというものの、ゆかりんの奴は来る頻度を落としていた。

どうも、紫の奴が迷惑かけてないか聞いてみたもののあいつの押しかけは実は幽々子がさびしがってるのを見越してのことだったらしい……

「あいつも、あいつなりに気遣いなんてのができる奴だったんだなあ……」

子の成長を喜ぶ父の面持ちで歲的にはじいちゃんや孫くらいかそれ以上の歳の差だが

……

「双覇どの。そろそろ朝餉の仕度は整いましたかな？」

「おう。そろそろ全部作り終えるから幽々子様のところを持って行ってくれ。」

俺に話し掛けてきたのは、魂魄妖忌。

「……」。白玉楼の庭師にして、魂魄流という剣術をつかう半人半妖の剣士でもある。

「ふうく……。西行寺幽々子といったら、向こうじゃバキュームで有名だったしなく

足りなくなったらどうしようかと・・・」

ここで、暮らし初めてから10年近く経ちそこまで大喰らいじゃない幽々子を見れて新鮮だった・・・

「幽々子様おまたせしました。朝ごはんができませんでしたよ〜。・・・げっ!!」

幽々子の隣では「げっ!!」てなによ・・・と不満げに我が家でも良く飯をたかっていたグータラ大妖怪が居た。

・・・〈少年少女食事中〉・・・

文句ばかり言ってもしょうがないので、紫の分も作り食事を取る。

・・・しばらくして食べ終わり、台所でじゃぶじゃぶと洗い・・・
「はあ・・・なんか諏訪を思い出す生活だなあ・・・」

あの時も今とほとんど、変わらない日々だった。

変わってることと言えば・・・

「んじゃ!!!今日もよろしくお願ひします!!!」

俺は、10年まえにここにきてからずっと妖忌に魂魄流を教わっていた。

まあ、実際は基本的な剣術の動きと最初に戦った時の我流で良い動きだった部分を妖忌に組み合わせてもらって俺独自の魂魄流をつくってるのだが……

「その……双覇どの。もう私が教えられる技は教えきりましたし、十分戦闘においても剣術においてもあなたは私より強いじゃないですか……」

そう、つい先日もう教えてもらえそうな剣技をおしえきってもらい残りは将来の魂魄流の継承者。自分の孫子に教える一子相伝のものだけになってしまったらしい。

「いやいや、能力を使つての戦闘はそうかもしれないませんが普通に剣を使つての試合ならばまだまだなので、学ぶべきはたくさんありますよ……」

「そう……ですか……ならば！期待に応じる練習ができるようにこちらもがんばりましょう。これを!!」

手渡された、一本の鉢巻き。

今日の修業は能力禁止の試合形式、相手の額に結んである鉢巻きを斬ったほうの勝ち

危険この上ない修業だ・・・

「うしっ!!!それじゃあ行きますよっつ!!!」

幽々子さまが審判になり、修業開始!!!

すかさず、磨り足で地を踏みしめ接近して斬りかかる、予想済みの妖忌は避けて

カウンター!!

「あぶねっ!!!」

そうして、1時間ほど経過し・・・

「これで終わりだっ!!!白雲流 常世の五月雨!!!」

『常世の五月雨』は『人符』現世斬の我流である。

本来の突進↓斬撃を、突進の速度を上げて突進↓十字斬り↓連続突きの連続技にした

もの。今回は突きまで派生させなかったのだから現世斬だが・・・

「勝者。白雲双覇くんく。妖忌惜しかったわねえ。」

でも、まあほんとに良く成長してくれたわ双覇君も、これなら私の能力にも対抗でき

そうね。」

酷く朗らかに、幽々子さまが近づいてくる。

たしか、幽々子の能力って・・・『死を操る程度の能力』だっけ？

「いやゝ。買いかぶりですよ．．．今勝てたのも運ですし．．．幽々子様には

勝てま『ぎしゆっ!!!』せんよ．．．え？ がふっ!!!」

腹からなつた不思議な音に気付き目をやると、『俺の手』が握り締めた結月で『俺の腹』を深々と刺していた．．．

「がふっ!!!ごほっ!!!」

しまった．．．幽々子の能力って．．．

生前は『死に誘う程度の能力』か．．．．．俺の意識はそこで途絶えた。

「ん?ここは」

 体感では気絶していたため、どのくらい経ったのか良く分からない俺が気がついたのは見知らぬ屋根の家の寝床らしかった

「えっとここはうおわつつつ!!!」

状況を把握しようと、体を起こし周りを見渡す。

木造の壁を見まわしていくと不意に、目の前に骸骨を被った奴が写った

(なにつ!?ここいつは人間? いや、もしくは俺はあのまま死んで?ここいつがあこの世の

お迎え?でも死神ってこんなテンプレな死神なの?小町は?)

予測できない事態に陥って混乱する俺。すると

『起きたなら、とりあえず落ちて着け確かに俺は死神だがお前は死んでない。』

俺の名は『雲母 策士丸』丸。とでも呼んでくれ。今わけありで声が出せなくてな』

目の前の骸骨男が丁寧な名乗ってきた。……

本物だと本気で思いこんでた骸骨のお面を取って……

「いや、とるんかい!!! いつつ……」

つつこみを入れると、腹部に痛み。

『つつこみ熱心は良いが、あんまり腹に力を入れると縫い目がとれて本気で死ぬぞ?』

俺はできる限り、自分以外の人間の魂を刈りたくはない……

そういえば、お前の名は?』

丸の速筆に感心しつつ、助けてもらったのに名乗って無いのに気付き急いで名乗る。

(ただし、腹には無理させないように……)

「俺の名は、白雲双覇だ。半人半妖の現人神で『結神』という神をやってる。

なあ、ここはどこで俺はどうなってたんだ?」

『ここは、『幻想郷』という場所の博麗神社という神社だ。金を持ってればお賽銭頼む。

じやなきや霊夢がキれる……お前がどうなってたかだが……はつきり言つて

わからん。神社の前で腹に刀を刺したお前が倒れてた。ところで『結神』とは?』

は……博麗神社?! 前にも瞬達の居る幻想郷に行ったことはあったけど、まさか

また原作の世界にこられるなんて!! て、この状況……

「ああ・・・結神つてのは要は縁結びの神だ。能力の『結を司る程度の能力』で人の自分に対する好感度や、人がほかの人に対する相性や好意の線が見れたり・・・それに干渉したりするのが神としての仕事。んで、戦闘ではいろんなものを結べる。友好関係を結んだ者の能力をつかつたりもまあできる。」

『縁結びの神・・・だと!!!この野郎!!!要はただのモテモテ能力じゃねえか

!!!なんだっ?ハーレムでも作る気なのか??ああん??

俺なんて、『コンテニューしなればならない程度の能力』つまり死ぬことを強いられるんだぞ!!!どうなつてんだ!!理不尽じゃねえかくくく!!!』

おおつ・・・初めて会つたばっかりで未だに速筆になれないけどすんごい荒ぶつてるのは理解できるそして、どうやら丸も非モテ組らしい・・・

てか、能力で命令文つてはじめて聞いた・・・

「おいおい・・・荒ぶりすぎだろ・・・なんだ?丸はだれか好きになつてほしい奴がいるのか?助けてくれたお礼に急接近は無理でもきつかけ作り程度になら相性を強めてやつてm「なんですつて??丸が誰か好きになつてほしい人がいるつて言ったの?」へっ?」

なんか・・・妙に威圧感のある声が・・・

ゆつくりした動作で振りかえると巫女服を着た鬼が……いや、鬼のオーラを着た腋出し巫女服の紅白……つまり博麗神社家主、現博麗の巫女。

博麗 霊夢がそこに居た。

「私がようやく、どこのだれかもわからない外来人の血を掃除し終えたと思つたら

まさかその外来人が縁結びの神で丸がその力を利用してとはね……」

霊夢が怒気を隠そうともせず、丸に近寄る……

丸が焦つて何かを書いているが早く書こうとしすぎて字がぶれまくつてる……

(え〜と……見える線は……霊夢が『怒り』と『焦り』。丸が『困惑』と

『照れ』?つまりは……)

霊夢の感情は、言葉にすると『嫉妬』や『(おもに恋愛に対する)焦り』、丸のほうは

『伝えたいことをうまく伝えられない感じ』か……

つまり、こいつら……リア充か。なつるほど……

となると、霊夢はツンデ霊夢状態……丸は誤解を解きたいと……

「でもまあ……おもしろいからいつか!!」

そう結論付けてそのまま二度寝に入る俺。

霊夢と丸が一時退室し、俺の耳元に心地よいリア充の悲鳴が聞こえ、

ピチュ音も聞こえた気がした。

（なんで、こっちの世界に送られたのかは分からない。でも、送った犯人は間違いなく紫だ。たぶん今の俺じや幽々子の能力にあらがえない俺じや、西行妖は危険と判断したのかな・・・）

なら、この世界でもつと強くならなきゃいけない。

強くなるための鍵がきつとあるはず、紫が送った世界なんだから・・・

「そのためにも、今は体を休めて傷を治そう・・・」

新たな出会いとさらなるレベルアップに心躍らせ、俺は新たな世界で一人
寝息を立てはじめた。

第46話—死神と結神。①

「ふうん。んじゃああんたは別の世界から来たってこと？」

「ああ、向こうの世界の紫に落とされたらしい・・・」

あのあと、二度寝からさめた俺の腹の傷は良い感じに回復していた。

俺自身が半妖なのも関係あるだろうけど八意印の傷薬のおかげらしい・・・

(八意先生マジばねえ・・・)

『あのグータラババア・・・世界が変わってもやることなすこといっしょだな。』

結局、酷い折檻は喰らって傷だらけ&何回か死んだらしく霊力の上昇が見れた。

(しっかし、それでも一切愛情線がぶれてないあたりバカカップルだな・・・)

「にしても・・・この焼き魚も味噌汁もうめえ!!!

霊夢~~~~作り方教えてくれ~~~~
!!!

塩加減とか案外難しいんだよな・・・

こんなうまい飯を毎日食える丸がうらやましい……

『すまないが、霊夢の料理の味付けはほぼ天武の才の直感だからな……
教えられないと思うぞ???』

まじかよ……

もう、能力でよくないか……直感。

「そっか、そいつは残念だな。」

さて、んじゃあどうすつかなくらくらく……。」

ここに落とされた理由が俺自身のレベルアップのためと言うのはわかる。

だが、だれとどう戦えと言うのか……まあ相手はわかりきってるか……

「なあ。丸……俺と勝負してくれないか?？」

『んっ?どうしてだよ……。お前が何か罪を犯したとか、異変を起こすってんなら
本気で殺しかかるけど。。。』

ああ・・なるほど、戦闘好きタイプじゃなく理由がないと戦闘できない感じか・・

なら

ふっ

!!!!!!

『なっ?!?神社が!!!』

「なら、起こそう。その異変ってやつを!!!」

『神影異変』ってとこかな?」

まあ実際やったのは、神社を影に鎮めただけなんだけどな。

フェルの能力はほんと便利。

『そこまでして、俺と戦いたいなら相手になるぜ!!!』

鎌を手に持ち、例の骸骨（お面）をつける丸。

なんか後ろで霊夢が「ちよつと!丸!!」って言うてるし自分は参戦してこないから俺が神社を隠しただけだったのは霊夢にはばれてんな・・

「うしっ!!ああそうだ、弾幕ごっこで決着つけるんだよな・・

んじゃ『具現』スペルカード」

スペカ×5枚召喚。

そして、即座に思いついた弾幕をスペカに込める。

「あれ、そういえば俺の刀が……」

あつ霊夢。ありがと~~~~~~~~」

異変を起こす（起こしたw）首謀者のくせに博麗の巫女から気さくに武器を受け取る俺。

「よしっ!!準備オーケーだ。

スペルカードは5枚ずつ!!被弾数は6!!お互いの本気でいこうぜ!!」

実際、スペル5被弾6での弾幕ごっこは使用できるスペルの数も被弾していい数も普通のと比べて多い。多すぎると言っても良い。

『人様の住むところ消し飛ばして異変を起こすとか言つといて、何をスポーツマン

シッブ見たいなこと言つてやがる。あの、神社を消したらどうなるか位、お前にもわかってんだろ!!!』

確かに、丸の言うとおり（言つてはいないが……）博麗神社は、この幻想郷と外の

世界を隔離している幻と実体の結界。『博麗大結界』その結界を管理するのが『博麗の巫女』でありソレを保つのに重要な場所が幻想郷のほぼ真ん中に位置する『博麗神社』だ。

「まあなく。さて、首謀者きどりも飽きたしネタばらしをすると・・・
確かに、博麗神社は消失させたがそれはあくまで影の中に隠しただけだ。無くなったわけじゃないし、結界のほうは俺の能力で崩壊することは無い。」

影に神社を沈ませた瞬間、ちよつとだけひずみがあつた気がするけど紫も気づかないくらいなのかなものだし今は俺がこの地と結びつけてるから俺の霊力で保ってられる。

『つまり、お前にはこの幻想郷をどうこうする気はないと?』

「当たり前だろ?現にスキマ妖怪も霊夢も特に俺に攻撃してこないだろ。」

まあでも、せつかくやる気になってるんだからそのまま戦ってくれよ。。。」

特に霊夢なんか、もう結界の管理の仕事から一旦解放されてるから縁側ですんげえのびのびしてる・・・

『ああ。せつかくだし乗せられてやるよ・・・』

霊夢の仕事が一時的にはいえ減ってすんげえ可愛い表情してるしなっ!!』

「うおっつっつ!!!!!!」

両手に持つ鎌を振るい、修羅のごとく襲いかかってくる丸。

骸骨から怪しげな光が放たれ(てるように見える)超怖ええええええええ!!!!!!

「ぐっ!!がっ!!!」

しゃべることもできないし、無言で鎌を振るう骸骨仮面男。

斬り裂かれる直前に結月を引き抜き受け受けるが相手の鎌のほうがリーチもあるしその分

振り下ろされる力が強い。必然、こつちが劣勢となる

『んじゃあ、殴りあつても弾幕ごっこも言いにくいしそろそろスペル宣言するか

!!!『死符』死神舞踏!!!』

突如として振るう鎌を一瞬止め、また振るいだす。

だがすぐに再開、それまでの狂気染みたものではなく舞うように至極冷静に俺の動きを封じるように振るう・・・

「だああああ!!!畜生!!よっ!ふっ!、んなっ!?弾幕も出んのかよっ!」

鎌を避けると避けたはずの軌跡から弾幕が大量に放出される。

このままじゃ、埒が明かねえ俺も一発目やるか!!!!!!!

「俺も一枚目!!!スペル宣言

『神斬』神を断ち切る龍の爪!!!!!!」

結月龍爪に靈力を込め、刀身が青白い光で満ちる。

そして上段に構え振り下ろすと同時に溜めた力を斬撃に変え放つ。

青白く巨大な龍の爪は3本の爪痕を残し、

丸の放つ弾幕の全てを飲み込んで消し飛ばした。

『んなっ!!まじかあの量の弾幕を消し飛ばすなんて・・・

残り被弾数・・・5

残りスペルカード・・・4

俺と死神の俺にとっては初めての弾幕ごっこが幕を上げた。

・・・

・・・

第47話―死神と結神 ②

「くっ!!はああああああ!!!」

鎌を振るい、強襲してくる丸壺

ひたすら結月でいなす。ちっ

!!!!!!!

「俺と文の速度についてこれるか!?!契約解放。射命丸 文!!!」

ん。なんだ?左手が熱い???

「つとそんなこと考えてる場合じゃないな・・・ふっ!!!」

『!?!消えた・・・いや、超高速で飛びまわってるってどこか・・・』

ちっ!!もうちよい、消えたことに困惑しててほしかつたが・・・

まあ最初から速度とかよけいなヒント与えちまったしな・・・

『ふくん・・・たしかに、相手の姿が視認できないほどに早いんじゃ下手に斬りつけら

んないし、スペルも使えないな……」

丸はそう言つて、その場に静止して鎌を肩に担ぐ。

おいおい、いいのか。んなことしたら狙い放題だぜ！！！！

「喰らえ!!! 『嵐符』超大玉螺旋丸!!!」

分身使わずに作ったから威力は落ちるけど、それでも鬼子母神も一撃で鎮めた威力。

これで、俺の『勝ち』だ!!!

『死符』断罪の鎌。おいおい、まだ戦闘中なんだからこれで勝てる!

なんて考えずに最後まで知力を振り絞つて戦わないと駄目だぜ? その『傲慢』はいつか、お前の大切なものを自分から手放す要因になる。』

丸の持つ鎌から、殺気が……

丸が殺気を鎌に付与してるんじゃないから『鎌自体』から殺気を感じる。あふれ出してる力は霊力とも妖力とも違う『ナニか』……

「んなつ!! 螺旋丸が消滅した……ぐあああああああ!!!」

丸の振るう鎌の先端が触れた瞬間、まるでその場には最初から何もなかったかのように

に螺旋丸は虚無に帰り、丸の放つ霊力弾に被弾する・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
俺の分身が。

「本命はこつちだぜ!!! 『白雲流』疾風狂乱の日照雨（ひでりあめ）」

まあ、『人鬼』未来永劫斬を白雲流に改造した剣技でスペルにはまだしてないんだよなあだけど……

この技は……

!!!!!!!!!!!!!!

『ふう〜。そうやって肝心な時に人の能力にたよる『怠惰』……

その考え方……判断はたしかに合理的で敵を『倒す』時には確実な方法だ……だが、何かを守りたいと思った時。お前の身、お前の愛する者（物）、大切な想い。

それらを守りたいと思った時もお前は他人の力に頼るのか???

その不完全で歪な力に頼るのか???

鎌を真下に振るい、俺の刀から繰り出される技を消滅させる。

そして一拍置いて、続けた……

『今のお前じゃ、何も守れない。お前の愛する人も物も想いも……

確かにお前の言うとおり、誰かを想い。誰かに想われる力『繋がり』の力はどんなに無力な人間でも奮い立たせてくれる。なんの力も持たない自分に力を与えてくれる。

言い方によつてはたしかに最強の力だ。想いに勝てる強さは無い。そして、想いに劣る力も無い。』

気がつけば、弾幕ごつこの最中というのも忘れ丸の話しに耳を貸す。

『誰かに想われるためにはそれ以上に自分はだれかを想わなければならぬ。』

誰かを想うためにはそれ以上に自分はだれかに想われなければならぬ。．．．．．
想いの力はその矛盾の連鎖だ。そして、その連鎖の中には．．．自分の利益を持ちこんではならない。最初にお前の能力を聞いて荒ぶつちまつたけど．．．

生きている間、神になりほぼ無限の時を生きるお前はその無限の時間の中に自分の利益をもちこめない。ただの一時も自分を想ってくれたものに疑惑を抱いてはいけない
疑惑を抱いた瞬間、全ての繋がりの連鎖は壊れる。』

そう言った丸はある意味死ぬことを強いられる俺よりもキツイ能力だ。

と言い、再度問う。

『結神、白雲双覇．．．お前は俺に立ち向かえるか？』

その不完全な力で、最強で最弱な力で罪．．．欲を斬り裂く俺に立ち向かつてこれるか

???

お前は、死ぬことを恐れないで刃の欠けた刀を振るえるか？』

その問いに対する答えはもう決まってる。

「ああ。たとえ、繋がりが最弱の力だろうと俺はその両刃を握りしめてでもお前や目の前の障壁にぶつかっていくさ。

俺は一人じゃ何もできない墮落した『怠惰』な生き物だ……でも俺は文に出会った。文のためなら必敗の戦だろうと喜んで赴くさ。」

俺の弾幕は全部無効化されるのかも知れない。

けど、俺は戦わなくちゃならない……幽々子に訪れる災厄を退けるために。文との約束を守るために。

『そうか、ならもう何も言わない。弾幕ごっこ再開だぜ!!!』

今の状況は、丸 残り被弾数 5 残りスペルカード 2

スペル 『断罪の鎌』であいつの鎌に俺の弾幕が触れると消し飛ばされる。いや、『傲慢』、『怠惰』って言ってたから恐らく斬れるのは『七つの大罪』……

『憤怒』、『嫉妬』、『強欲』、『怠惰』、『邪淫』、『暴食』、『傲慢』

の七つで構成された人が墮落し、罪を犯す7つの要因のことお前の鎌はその7大罪を

断罪できるってことかよ!!!」

それに対し、俺 残り被弾数 5 残りスペルカード 2

文との契約解放は解除してないから、超速飛行は可能だけどそれだけじゃ無理だ。

『そつちから来ないなら俺からだ!!!』

『死符』風前の灯火。』

思案してらうちに丸が人魂型の弾幕を作り出す。

動きはゆっくり目だが、何分数が多い・・・しかも、一個ずつ追跡してくる。

「くっ!!はあっ!!!ぐっ!!くそあっ!!!」

刀で薙いだり、霊力弾で相殺したりするが一向に数が減らないむしろ増えてる。

くっそ!!だんだん、イライラしてきた・・・

「があああああああああああああ!!!!!
!!!罫が明かねえ!!!」

『神域』白雲式多重結界・狼!!」

妖力を解放する。体中に黒い体毛が生え、ふさふさな尻尾、頭のとっぺんには獣の耳

爪も伸び犬歯が発達する。

『つつ!!こいつは驚いた。それがお前の妖怪の部分・・・変化した状態か。

まさか紫以上の妖力を持つ化け物に会えるとは思わなかった・・・でもだめだぜ??
もうちよい冷静に戦況を見据えなきや・・・イライラして周りが見えなくなる・・・

それはもう立派な大罪『憤怒』だ!!』

鎌が結界に触れ一気に割れる。

マズイ!!しつかり維持しねえと
!!!!!!

「がはっはあはあ・・・なんとか・・・5枚は残ったな・・・」

完全停止が間に合わず、2、3発被弾してしまったが

なんとかそのほかの弾幕は結界に閉じ込めたついでに丸もな・・・

「んじゃ、丸から奪った霊力も俺の霊力弾!!として展開して・・・

一気に解放する!!『結刃』結界爆散陣!!!」

結界5枚をたたき割り、出来た破片+丸自身を作った分と俺が上乘せした分の圧倒的
量の霊力弾。回避できるすき間は皆無と!言ってもいい。

よ様な……お〜い丸〜……ぐふう
!!??」

『ハア……ハア……戦闘中に相手の心配をしてる場合か??』

心配しなくても生きてるし反則負けなんて形じゃ終わらせねえよ……

『冥符』死葬ノ俱利伽羅・序』

完全に油断していた俺は、どうやら丸が放った炎に被弾したらしい……

そして、最後のスペル宣言これで倒しきれなければ俺の勝ち。

「は……はは。なんだよその剣は。」

いや、実際に知らないわけじゃない丸の鎌が剣に変化して驚いたは驚いたが……

どこまでも鋭くとがり切っ先に向かうにつれて細くなりまるで大蛇か竜のように大剣全体にからみついてる爆炎……

『俺のラストスペル。不動明王の持つ罪を焼き浄化する俱利伽羅剣だ。』

ちなみに、さっきので俺も被弾数4発だ。つまり、もうこいつでこの勝負はおしま

だ!!!』

片手では確実に無理、両手でも持て余すんじゃないかと思われる俱利伽羅を居合のように構え、とんでもない速度で振りぬく丸。

「つつつつつつつつつつ!!! たしかにすげえな……」

ならこつちもラストスperl。宣言するぜ!!!

『神技』人妖一対の理。」

宣言すると、俺の体毛はひっこむただし尻尾と耳は生えたままだし黒く染まった髪の色も一部が白髪に戻る。

『なんだ、その中途半端な変化は……』

「なんてことはねえよ、半分妖怪を残したまま人間の部分も表に持ってきただけださて! じゃあ本気で斬るぜ!!! はああ!!!」

結月に青白い輝きが灯り、刀身に満ちていく。

大上段に構えたソレを思いつき振りぬく!!!!

俺の霊力をしこたま込めて放ったその爪は爪痕を4つに増やし、

能力も少し込めてあるからある程度相手を追跡する………

『うおお!! さつきよりやべえ．．．だが!! はあああああああ!!!』

俱利伽羅から発せられる炎は一層激しい火柱を上げ、龍を飲み込み!

焼き払うだんだんと俺のはなった斬撃はまとめて焼かれ、消えた．．．

「だが、まだまだ!! はあつつつ!!」

大剣を振るい、丸の視界がつぶれた瞬間に

さらに結月を腰に構え、横払い、縦払い、袈裟斬り．．．数10の斬撃を振るい飛ばす。

『!?!? つつモードチェンジ!!! 『冥符』 死葬ノ俱利伽羅・破』

すると、両手でも振りまわすのは困難そうだった俱利伽羅は二つに分かれ

丸の両手に収まり片手で扱いやすい双剣になった、大剣時の緋色の爆炎とは違いこちらは目も覚める蒼の焰が煌々と燃え滾っていた。

「はあ?!? 武器の形態変化とかか!!!．．．ちっ!!!」

うおおおおおおお!!!」

さらに結月を振る速度を上げる、もう音速はとつくに超えて光速に近くなつてると
思うが文の能力で周囲への被害は抑えてるし俺の体もこの程度じゃ壊れない。

『これで!!!おわりだああああああ!!!』

策士丸がこちらの放った数千の斬撃!全てをはじき、
倶利伽羅を大剣に戻し襲ってくる。

ガキイイイインツツツツツツ
!!!!!!!

『ちっ!!防がれたか・・・なら・・・!?動かない!!!??』

「ああ、たつたいま能力で俺とお前の体を結んだ。

俺が動かない限りお前も動けないし、武器同士も結んだから攻撃もできない。
そして・・・上を良く見てみるよ!!」

『上??・・・なにつ
!!!!????』

俺と丸の上空には丸がはじいた斬撃が、一か所に集まり、黒と白の混ざりあった球体。そして、爆発し無数の弾幕になって降り注ぐ。

「勝負は最後まで焦るべきじゃないぜ死神!!あの攻撃を防ぎきつたんだから勝ちだなんて、それこそ『傲慢』ってやつだ最後はアレをくらってどつちが起き上がれるかにしようぜ……」

『ふっ……まさか最後に自分が教えたことで逆転されるなんてな……
いいぜ!受けて立つ!!!』

そして、その黒と白の流星群は俺達の立つ地上に降り注ぎ。

同時に被弾数、残りスペルカード0をカウントした。俺と策士丸は同時にぶっ倒れた
・
・
・

第48話―死影と共に狂イ咲ケ、墨染の桜

．．．俺と策士丸の弾幕ごっこから3日。

あの勝負は、霊夢のジャツジの上引き分けと言うことになった．．．は良いが、痛つつつつ．．．弾幕は非殺傷だけど途中から剣撃は思いつきりやつてたなくところどころ斬り傷入ってるし、あと何といっても筋肉痛が酷い．．．」

『どんまい。としか、良いようが無いな．．．』

それと、もう3日も経っているがお前の世界は大丈夫なのか?』

そう。問題はそこだ．．

俺が傷と疲労を回復している3日間で向こうに何かなければ良いのだが．．

「そうだな．．あんまり、ここに長居するわけにもいかないし」

向こうに残してきた人たちのこともなんか嫌な予感がするしな．．．」

『そうか、んじゃあのグータラババアを呼んで．．「その必要はない。」

え?』

「俺も紫の能力もってるからな。」

ただし、『スキマを開く程度の能力』で、隔たりを無視して移動することしかできないけどな。」

『つまり、理屈を無視して『ある』ってわかっているとところに行く能力か・???』

「正解。夢の中や絵の中、別の世界。境界を張れる訳じゃないから結界とか世界の隔離はできないけどスキマで移動できる場所には移動できる。」

まあ、八雲紫にはできるってだけで俺にはこういう時に自分の世界への帰り道を

開くので精いっぱいなのだがスキマの力は並大抵の奴じゃ扱えないだから帰り道開けるようになっただけでも良しとしよう。

『なるほどな・・・んじゃ、あいつは呼ばなくてもいいか・・・』

それより嫌な予感・・・か、よしなら俺も着いていくとするか!!』

話しを聞いて、突然策士丸がそんなことを言い出した。

「は？ いやいやいや、お前はここでやることあんだろうが。」

向こうのことは俺がどうにかするから、お前はここで霊夢のことをまもってなきや」

『心配すんなって、霊夢の奴には手紙置いていくしあいつは俺に守られるほど弱く

無いよ。それに嫌な予感なら俺もするんだ。』

神二人が嫌な予感を感じてるか・・・

たしかに、なんかとんでもないことが起こってるのかも知れない・・・

「わかった。んじやあ着いて来てくれ。」

『おう。んじや、行つてくる霊夢。』

いつみても惚れればれる速筆で、手紙を書き終え机に置き俺の作ったスキマに入る。

・・・〈少年世界移動中〉・・・

「嘘……だろ……??？」

『悪い予感が大当たりだったな……まさか、ここまで歴史がねじ曲がるとは

……とにかくどうにかするか!!』

スキマから飛び出した先には……

首から血を大量に流し、桜の前の地に倒れ伏している幽々子……

そこは良いんだ……原作でもそのとうりのストーリーだ。

本来なら死ぬってわかってるなら助けるべきだけど歴史は変えてはならない……

『ああ、原作どうり進むには幽々子を見捨てるしかない。

問題は、どうして幽々子だけじゃなく紫や妖忌まで倒れてるかってことだ。』

本来ならおかしいことだ。

あの、妖忌と紫が倒されるなんて……

「つつつ?!?!なんだ、この妖力……まさか、西行妖なのか?!?!」

嘘だろ……俺の妖力と霊力足しても勝てるかわかんねえぞ!!!」

言うまでも無く、これまでに契約を重ねてきた分も含めてだ!!!」

こんな化け物どうやって相手しろって言うんだ………

『おい。双覇……』

あいつの相手は俺がする。お前は急いで紫にならって術式を組め。』

「はあっ!?お前……あの化け物の妖力わかって無いわけじゃないだろ!!!
俺が全力出してもたぶん無理だ……それをお前が『だからっ!!』っ!!」

『だから俺が行くんだよ。お前なら紫と同等かそれ以上の封印術式が作れるはずだ
俺には封印や結界の心得は無い……だから時間を稼ぐ。』

お前の術式が完成するまでの時間をつ!!』

策士丸は骸骨の面をかぶり、右手に大鎌を創り駆け出す。

西行妖も接近してくる謎の存在に向かってツタを振るう……

『がああああ!!…んだよ……このツタ……まじで樹木のツタか!?

鉄以上の強度はあるだろっ!』

ガギイイイイイイ!!!
ギヤリリリリリッ!!!

「おいおい……どう考えても木と刃物のぶつかり合う音じゃねえぞ……
あの桜マジでただの樹木かよ???”

なんにせよ、あんな化け物との相手なんてそう長く持つはずがない……

「おい!!しつかりしろ紫!!」

あいつを封印するにはどんな術式を使えばいい!!!早く教えてくれ!!!

俺が体を助け起こし、肩を揺さぶるとしばらくして紫は目を覚まし……

「ん……双覇??やつと戻ってきたのね。

それより、今封印って言ったの?無理よ……あんな化け物を封印するなら強力な
依り代が必要だわ……」

紫は悲しげにうつむく……!

まさか、幽々子を依り代にしなかったのか……いや、紫にとつては親友だし妖忌
にとつては主人だ。この場に二人しかない状態だったのだからそんな判断できるわ

けないか・・・

「ふう・・・良く聞いてくれ紫。

俺はこれからお前に習う術式で幽々子の遺体を依り代にあの桜を封印すr!？」

少女にとって一番聞きたくない、一番下したくない判断を彼女が恐らく一番頼りにしていた者の口から出そうになり少女はその少年の首に手を添える。

ただの手ではない。その気になれば念じるだけでその首を体から切り離せる殺意のこもった手だ。

「ふざけないでっ!!それじゃ、あの子は・・・幽々子は報われないし楽になれないじゃないやない・・・」

紫の言うように、人の遺体を利用するなんてクズのやる行為だ・・・

良識を持った人間がやることではないかもしれない・・・けど!!!
「でも!!やるしかないんだ!!!それしかももうあいつを止める方法は無い!!!」

あいつは俺以上の化け物なんだ!!!ここに居る全員でかかってでも消滅はさせられない・・・」

頼む!!紫ならとつくに理解してるはずだ。

この絶望的状况じゃそれしかないって
!!!!!!

「くっ!!!……わかったわ。術式は私が作る。

双覇は封印を完成させる仕上げの妖力を注いで!!!!!!」

唇を噛み、手を爪が食い込み血が流れるまで握りしめた紫が結論を出した。

よしっ!!!

「ああ。わかった……『神域』白雲式多重結界・友狼」

地面に手をつき、俺と紫がおさまる程度の小さな結界を3重に張る。

友狼は結界内の俺の仲間、友達と俺自身の妖力を回復させる結界……

『くっそっ!!!強つ……過ぎる!!!』

ふと、あの化け物のほうを見るとすでに鎌は倶利伽羅になっており

その大剣で迫りくるツタを一切合財薙ぎ倒してはいるが、押されている……

「このままじゃ、術式完成までぜんぜん時間稼げないな．．．ふっ!!!」

紫に今囲つてる結界がどういものか教えてとにかく術式作りを
最優先させて俺も西行妖に突っ込む。

『ぐっ!!!はあああああ!!!』

ちっ!!数が多すぎる!!!．．．やべっ!!』

ほんの一瞬、見過ごしたツタがものすごい勢いで策士丸に迫る。

(アレを喰らったら、絶対粉々どころじゃねえな．．．間に会え!!!)

『結い』 結神+策士丸!!)

ギイイイインツツツ!!!

「ぐおっ!!!なんだこの威力．．．

こんなもん受けてたのか、すげえな丸．．．。」

『は!?なんでこっちに来てんだよ。』

お前は封印の・・・ああ、紫がやってんのかみるみる内に妖力も回復してように見えるけどありやお前の結界か・・・』

俺がこつちに手を貸してるのをみて、驚愕する策士丸。

よくみたら、薙ぎ倒してるように見えたのは全て最小限の力でいなししていたらしい・・・となるとソレを日本刀で受け止められる俺って一体・・・(orz)

「と・・・とにかくっ!!時間稼ぐぞ!!」

最低でもあと10分は稼がないと紫の術式は完成しない!!!」

実際は術式の進行速度のことは見たこともないものだったから良く分からない。

俺が言ったのは俺の結界の中で紫の妖力が完全回復するまでの時間だ・・・

『おうっ!!!!はあああああああ!!!!』

策士丸がありつたけの霊力を注ぎ込み、俱利伽羅から爆炎の渦が天高く

昇る。うしっ!!俺もがんばるかっ!!!!

．．．．少年戦闘中．．．．

「がっ???!の野郎!!!はああああ!うらあ!!!H!!
『まだまだっ!!んぐっ!!おらああああ』
!!!!!!』

ただ目の前のツタのみに意識を集中させ、策士丸と背中合わせで戦闘すること
しばらく．．．．

「ふう．．．これぐらい回復すれば!!!

双覇!!!あと、そのあなたも術式と封印の準備は出来たわ．．．戻ってきて!」

ようやくかよ!!!

俺と策士丸が同時にそう思い西行妖から離れようとした瞬間．．．

「双覇~~~~!!!無事ですか?!?!???
!!!!!!」

「ご主人さま~~~~!!!ご無事ですか~~~~!!!」

聞こえてほしく無い声が鼓膜に振るえる・・・

そして、声のしたほうに一直線に伸びるツタ・・・

(嘘だろ・・・くそつ!!!)

全速力でツタを追い・・・

「双覇!!!良かつた無事だったんです・・・ね?」

ズドツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ

「がふっ!はあ・・・はあ・・・ごほっげほっ!!!」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ギリギリ、射命丸に当たる寸前・・・

ツタは『俺の腹を深々と射抜き』停止した・・・。

『双覇————ツツ!!!』

「う・・・そ・・・奴覇!!!うそでしょ・・・また、私が来たから???」

文が肩を震わせてる・・・泣いてる・・・のか?

畜生!!!何をしてんだ俺はっつ!!

文を笑顔にしたいから．．．文を泣かせたくないから強くなるうとしたのに．．．
結局かよ!!!

．．．「はは．．．駄目な奴だな俺は、能力に頼って周りに頼って．．．こんな怠惰な馬鹿ヤロウじや何かを守るなんてできるわけねえか、がふっ！」

結局俺は、何も変わって無かつたんだな．．．こつちに来る前の何も力を持ってない怠惰で人に頼ることしかできない自分と．．．

「もういいから、起き上がらないで．．．無理をしたら本当に死んじゃう．．．ひぐつぐすっ！」

ほら、また文を泣かせてしまった．．．

泣かせないと誓ったのに、また嘘を着いてしまった．．．

「なんて、欲にまみれた汚いやつなんだ．．．こんな俺を君を守ると誓ったのに泣かせてしまった俺を許してくれるかい？文。」

そう言った俺の体にもう穴どころか傷一つ着いてなかった．．．

第49話―死別、亡霊少女の微笑み。

．．．．．〈射命丸サイド〉．．．．．

「．．．．．こんな俺を、君を守ると誓ったのに泣かせてしまった俺を。

許してくれるかい？文。」

「そう．．．．．は．．．．．？なんで、どうして???

私は目の前の光景が良く理解出来ずに居た。

だれだってそうだろう。

たったいま、目の前で大樹の枝に腹を貫かれていたはずの男が傷一つ無く笑って立っているのだから．．．

「そう．．．．．は．．．．．双覇っ!!双覇くくくく!!!」

ただ、原因とかはどうでもよかった。

双覇の傷が無い・・・双覇が生きている・・・それだけで良い。

・・・〈射命丸サイドアウト〉・・・

・・・〈双覇サイド〉・・・

あつぶなかつたあああああああ!!!

かつこつけて登場はしたけど、やったことは単純で策士丸と契約したときに得た能力『罪を認め、贖罪する程度の能力』で復活した。

「ほんとは、影魔法でかつこよくよけたかったけどそれじゃ攻撃が文の

ほうまで流れていっちまうかもしれないなかつたし、何より回避するタイミングが無かつたからな・・・」

『罪を認め、贖罪する程度の能力』は自分が死んだときに死んだ原因を

理解し懺悔することで発動する。(ただし7つの大罪を用いなければならない)

「さて、後は任せませ紫!!」

文を抱きかかえ、大きく跳躍し西行妖から一気に距離をとる。

腕の中で顔一面を真っ赤にして、必死に俺の首にしがみついてくる・・・

「つか・・・文さん??そんなにしつかりしがみ付く必要はないんじゃないか・・・

ないんじゃないか・・・」

俺は文を落としたら自害する覚悟で抱えてるし、万が一にも文が落ちたとしても飛べるんだから死ぬことは無いはずなのだが。

「うくん。(すりすり)嫌です!!いままで散々待たされたんですから

これからはもう待ちません!!絶対・・・あなたを離しません・・・もし私に涙を流してほしくないと言うなら、もう二度と私から離れていかないでください!

（／／／）

俺の胸のあたりに頬ずりしながら、顔を赤らめて上目遣い・・・

うっわっなんだこの生き物・・・かわいすぎる!!!

「わ・・・わわわわかつたよ・・・。文が良いって言うんなら、俺は文が好きだ。

あの八雲紫という大妖怪が作った世界に山のみんなと行くことに成功したら・・・

一緒に暮らそう?」

なんとか、それだけ。精一杯の勇気を振り絞って熱くなる顔を必死に抑え

(まあたぶん、とづくに手遅れなくらいに顔は赤く熱くなってるんだろう・・・)

「はいつ!!!私も・・・私も双覇のことが・・・大好きです!!!」

(ちゅっ)

一滴もお酒を飲んでいない、気が狂ってるわけでもない。

普通に、可愛く顔を赤くさせた文からのキスは今までの何よりもうれしいものだった。

「(イラッ)お二人さん?いちやつくなら見えないところでやつてもらえる???

さっさと移動しないと封印に巻き込まむわよ?」

紫が、露骨に青筋浮かべて殺気を向けてくる・・・

つつかあいつ巻き込まれるじゃなくて『巻き込む』つつつたぞ・・・

「わあくったよ!!!んじや速度上げるぞ文?」

腕の中でこくりとうなずく文。もういつそ死んでも後悔はない!!!

いやいや死んだら文を泣かせてしまうから二度と考えないようにしないと・・・

「はあ・・・まさかあの天狗がね」

私が声をかけた時なんか躊躇なく殺されそうになったのに・・・まあいいわ。」

なにやら、ぼやきながら紫が手をかざすと地面に描かれた術式から光があふれだし

あたり一面を包みこむ・・・

「のわああああ!!!マジで巻き込まれる
封印の範囲を侮つていた・・・
!!!!!!!」

もつと速度上げなきや
!!!!!!!

「あややく。なにやってんですか・・・私の能力を使えば加速可能でしょ?」

相変わらず腕の中に居てニッコニコしている文。

まあそのとうりだが・・・

「契約解放。射命丸文！」

射命丸との契約を使い一気に加速・

「ん・・・ああああ!!!」

しようとしたら、なんか文がすごく耳を防ぎたくなるような理性に訴えかける声（暗喩）を出した。なんとか、耐えて一気にその場を飛びぬける・

・・・〈少年少女高速飛行中〉・・・

「うう~~~~・・・あやややさすがの私も自分＋双覇のフルスピードは酔っちゃいますね・・・」

なんとか封印の効果範囲から抜け出して、屋敷の門の付近に移動し文を下す。

下ろしたとき妙に不服そうな顔してて超可愛かった・・・じゃなくて!!

「いやいやいや、そんなことよりどうなってるんだよ俺のこの姿!!」

しかもなんであのタイミングで・・・その・・・あの・・・変な声出してんだよ!!」

今の俺の姿は、『白い鴉の翼』『真つ黒の髪』『人間の体』『発達した犬歯』『黒と白の混ざり毛の尻尾』。

ちようど、半人半妖モードの時のような中途半端な変化に近いが今回は妖怪変化は紫の周りに結界を張ったあの時だけだしそもそも俺が妖怪になったときに変化するのは『黒い狼天狗』であつて『白い鴉の翼』なんてものは生えてない……

「ええ~~~~と~~~~その……その……」

つまるところ、この超絶目が泳いでる俺の大好きな天狗を問いただす必要がある。

「ん？心当たりがやつぱりあるのか……」

何をしたんだ。どう考えても普通に契約したわけじゃないだろ」

んで、いま気付いたけどなんだこの左手の甲の紋章みたいなの……

真上に向けられた羽ばたく直前のような翼に葉団扇が『×』の形で描かれてる。

あとは、中央の上のほうにカメラかな……？

「あややや……それは、その鴉天狗に伝わる伴侶との結びの儀式でして……

双覇の左手に浮かんでるマークは私です。」

「……………は？」

何のことやら良くわからなかった。『儀式』？

そんなものやった覚えがない・・・そもそも山に居たころは俺は射命丸に嫌われてたはずなのだからそんな儀式行えるわけがない。

「あややつ！それはその~~~~~・・・」

まさか本当に効果あるって知らなくて家にあつた文献を見よう見まねで実践してみたんですが・・・」

そこで言葉を区切りあたりに沈黙が流れる・・・
なんだろう。この重苦しい空気。

「いつやあー！！！！まさか、あんなもんに本当にそんな術式が書いてあつたとは思いませんでしたよ。天魔さまから言われてビビりました。」

ちよつと腹が立つて、デコピンしたがまあ文句もなかったし大丈夫だろう。

話を聞いた限りではその書物は女性天狗に支給されるたぐいのもので文も新人のころに一応読んではいたけど、使つたのは今回が初めてだそうだ。

「……………そのころからもう、嫌われてなかつたんだな。」

俺が超慎重に接したのは何だったのか……………」

「いやいや、そのころってもう結構積極的だったと思いますけど……」

「気づいてなかったんですか？ 鈍感とか今時はやりませんよ?！」

「今って俺の転生する前よりだいぶ昔何だが、なんで文が外の世界のやつら

みたいなこと言ってるんだらう……」

「俺も、そんなに鈍感だなんて思っては無かったんだけどな……」

「まあとりあえずごめんな文?！」

その後笑顔で許してくれた文を連れ策士丸の居るほうに向かう。

その間文はずくつと俺の左腕にしがみついて来ていた。

「よう。策士丸なんかなくなったな。」

『なんとかなったじゃねえよたくつあのタイミングで文が突っ込んできたのも予想外だ
がお前が底に行つたのはもつと予想外だ。……で、俺の耳と目が確かなら』

おまえが、文の能力で加速した時お前の姿がお前の意思と関係なく変化し、文が

喘ぎg「すとりーっつぷ!!!」

この野郎……こつちが精いっぱい逃避してみないようにしてた事実をさらつと言
いやがって……。(注 言ってません)

『?何を恥ずかしがってんだよ。あんなだけはつきり叫ばれたらみんな聞こえてるだろ。現に紫が青筋浮かべてるし、ん?恥ずかしがる……』

「と、とにかくなんか誤解してる気がするからちゃんと言うぞ?」

あれは文が俺が寝てるときに勝手にやった天狗特有の契約の所為で……
お前が考えてるような行為はなにも……」

『なあ文。お前達どこまでヤツタんだ?』

ておい!!!人の恋人になんつうことを聞いてやがる!!

しかも紙に書いてるから言葉じゃわかりにくい質問の意図がダイレクトに届くじゃねえかつ!!!

「あやや!!!それはもう。。。〃〃〃」

「その反応はアウトだああああああああああああああああああ!!!」

あの時は無我夢中で封印の範囲から逃げてたから!!大体、んなアクロバティックにいちやつけるかああああああ!!!」

あの……その……大人の階段を上る行為(暗喩)なんかもつてのほかだ!!
大体俺と文の間でやったことなんてキス位なもので。。。健全……だよな?

『双覇。お前らつてもう結婚とかしてんのか？』

見た感じお前つて俺と変わらないか下手したらタメだろ……ちゃんとゴム「アウ
トだっ!!!馬鹿ヤロウ!!!」

どうして、この天狗とこの死神は俺にツッコミさせたがるんだよ!!!

だからその……そういう行為はまだ早いだろうが!!

「はあ……何バカやってんのよ……。こっちは終わったわ。」

幽々子のことは悲しいけど見た感じそちらの方死神よね？」

と。俺が暴走するバカ（丸）とカラスにほぼ呆れる感じで困っていると

封印を終了させた紫が合流した。奥をみると先ほどまでの見事な満開の桜の面影は
無くただ一本の黒い桜の大樹が堂々と立っていた花卉は一輪たりとも開いておらず消
滅していた。

『ん？おれか、俺は雲母 策士丸。』

確かに死神正確には見習いだがをやっているが……なんか協力したほうがいいの
か？』

策士丸が俺たちから紫に目をやる。

「ええ。私はこれから閻魔に会いに行くのだけれど、あなたにも着いて来てもらつて

よろしいかしら？そのほうが交渉をしやすそうだし。それに、私の能力がないと帰れ

ないのでしよう?」

瞳を妖しく輝かして、「まあ一応拒否権はあるわよ。」とか、絶対に一応言ってみただけだろう白々しい言葉を着け足した。

『はあくあく。わかつたよ、このままじゃこつちの世界に取り残されるんだろ?』

さつさと霊夢の処に帰りたいし、おまえの手伝い今回ばかりはやってやるよ。』
「あら〜。『自主的』な協力感謝しますわ!」

良い笑顔、見た人の気分を良くしてくれるような美しい良い笑顔のはずなのに
その顔の裏を知ってる俺らからしたら全員一致でシバいたろうか?

って思う笑顔で紫がスキマを開く。

「おっと、策士丸。じゃあまたな?」

縁があつたらまた会おう。あとちよつと手を貸してくれ。」

『なんだ?何をしたんだ??』

「お前に言つてただろう?俺は縁結びの神としての力で人の繋がりの後押しができるつて、だから今お礼の分を使つたんだよ。お前と霊夢ならきつと想い想われる良い関係が築ける。だからほんと微妙たるものだけど後押しした。それじゃあな死神?」

マジで、嫉妬したくなるレベルでラブラブだったから後押しなんてあつて無いような

もんだけど……これからしばらくはその愛は続くはずだぜ？

『そっか……ありがとなっ！』

そしてこつちこそお前にあえてよかった。また会おうぜ結神？』

それだけ告げて紫とともにスキマに入って行った策士丸。

こうして、西行妖封印と死神との遭遇という濃いイベント盛りだくさんの一日が過ぎ
て行った……

……〈双覇サイドアウト〉……

……〈策士丸サイド〉……

結神、白雲 双覇かあ〜〜。

面白い奴つてのはまだまだだいるんだなあ。

『いつか、また会えると良いけど……』

あつ……そう言えば伝え忘れてた……』

あいつ、双覇かもしくは……

双覇に近しい人物が………死ぬ。

『と言っても時期まではわからないし、勘違いかもしれないけどつ！

大体、今回の原因じゃないなら神である双覇が死ぬわけないか。』

大丈夫………だよな？

番外話―亡霊の舞う死の桜&コラボ編。登場キャラまとめ

まず一人目は魂魄妖忌。

〈魂魄 妖忌〉こんぱくようき・・・種族 半人半霊

二つ名 冥界を守護する老剣各

能力・・・剣術を極める程度の能力

魂魄妖夢のおじいちゃんにして魂魄流の剣術の師匠。

剣術の腕は純粋に剣のみの戦いでは双覇を凌駕するほど・・・

また、半分は人だが半霊でもあるため区分的には妖怪に属される。

そのため、双覇の結界術で捕えられる。

次は白玉楼の主幽々子さん。

〈西行寺 幽々子〉さいぎようじゆゆこ・・・種族 人間（登場時）亡霊（原作）

二つ名 幽冥楼閣の亡霊少女

能力・・・死に誘う程度の能力（生前）、死霊を操る程度の能力（生前く死後）、

死を操る程度の能力（死後）

白玉楼という屋敷のお嬢様で、死んだ者の魂を視認して操る能力を持っていたが、『西行妖』という一際大きく美しい桜の下で有名な歌人であった父が死に、そのファンであるもの達も一同に桜の下で自害。

幼いころに人の死に多く触れ、また『西行妖』が人の生気を吸い妖怪化してしまった影響で妖気に触れ能力が『死霊を操る程度の能力』↓『死に誘う程度の能力』へと変化した。

また、西行妖同様人を『死』に導くだけになってしまった自分に絶望し間もなく若くして自害。以後は能力の重要さを顧慮され地獄にも天国にも送られず亡霊として体を残したまま、冥界の管理をまかせられる。

文「あややや・・・生きてる限りどんなことが起こるか本当に予測できませんねえ」
双「ああ、西行寺幽々子は本当にすごい人生を生きちゃだよ・・・。」

よし次！三人目

〈雲母 策士丸〉きららさくしまる・・・種族 死神、人間

二つ名 博麗の巫女の依り処、魂を浄化せし輪廻転生

能力・・・コンテニューしなければならぬ程度の能力

双覇とは違う世界の転生者。

能力に虐げられてるかわいそうな人物・・・。

現在はスペルカードルールの普及で本当に死ぬことは少なくなっただが、

それでも体は普通の人間なので足を滑らせたり等の事故で死亡することがよくある。

文「あああああ!!! 失敗したあああああああ。」

あの人今まで見たこと無い人でした。ちゃんと取材しておくでしたっ!!」

あら・・・え」と説明を続けると彼のスペルカードは死神らしく『死符』と着くものが多く、スペルの内容も死に関連したものがおおい。

双「んで、向こうの世界の霊夢と恋人関係にあるんだよな・・・。」

それに今回双覇が能力つかったから結婚待ったなしかもね。

双「そうだな。でも今回で俺もリア充になったし後悔はしない!!」

見捨てられてたら死んでたかも知れねえしな。」

んじゃ次、四人目!!

双「いやいや作者。もう新キャラいねえからな?」

ん。そうだね、霊夢は原作入りしてからでいいか・・・。

となるとだいぶ早く終わっちゃったよ・・・。

文「まあ今回はオリキャラも全然だしてませんしね〜。」

ところで次回からの舞台はもう幻想郷なのですか?」

そうだねくくく・・・

前半ちよこつとだけ今回書ききれなかったところを書いて後はもう幻想入りだね！

双「なにはともあれ、U A 6 0 0 0 突破記念のコラボ募集に参加者が来てくれないと始まらないな。」

うん。いつもいつも g e n k o さんにばかりお世話になっちゃってね・・・

それはそうとU A ってるなんのことなんだろう？

Q & A みてもわかんなくて勝手に閲覧数と解釈してるけど・・・

亡靈の舞う死の桜編終了。知識と鎖の幻想郷編開始!! 第50話—紅魔に來客。創造と鎖

「つつかれたあああああああ!!!」

紅魔館の執事となつて、約10,000年。

おれは未だに仕事になれずにいた……

「おつかれさまっ！お兄様。」

「うおっ！これはこれは……」

おはようございます。レミリアお嬢様。」

今、目の前にあらわれた少女の名は『レミリア・スカーレット』

紅魔館の主ベル・スカーレットとその妻イヴ・スカーレットとの間に生まれた長女。

「うんっ！お兄様。お父様が呼んでいらしたわよ？」

それと、適度に休憩しないと倒れちゃうよ。」

このように、よく周りのことを見て気配りのできる良い子なのだ。

まだちようど5歳くらいなのにすでに俺よりしっかりしてるかもしれない……

「わかりました。それでは俺はベル様のところについてきますので何かご用がございましたらおよびください。」

……〈少年移動中〉……

「お呼びでしょうかベル様……」

扉の奥ではベルがイヴの手を握り、

こちらを向いていた。

「うむ。よく聞いてくれ、私とイヴは近々死ぬことになるらしい……」

「えっ……それはどういう意味でしょうか？」

ベルの話を聞くと、イヴの能力でわかったことらしい……
次に生まれる子が自分たちに死をもたらす……と。

「だが、この子を産むことにきめたのだ。」

思えばレミリアの時もイヴの体では命がけだったのだ。。。。ならば、今度のレミリアの願いは私たち夫婦の命を賭してでも叶える必要がある。」

イヴの能力は『不吉を視る程度の能力』

元々能力を持っただけのただの人間だったが、能力で周りの友や家族大切な人たちにふりかかるはずの不吉を全て肩代わりした結果。病弱になった。

そこを、ベルに噛まれ血を吸われることで吸血鬼の肉体となり人間だったころなら即死だったレベルの病気も侵攻が遅れていた。ただし完治していたわけでもなくレミア出産の際もかなり危ない橋だったらしい・・・

「お嬢様の願いというと・・・」

最近うれしそうに語ってくださる『お姉ちゃんになる』というものでしょうか？」

「ああ。。。 私たちは『幻想郷』という場所に行くつもりは無い。

生まれ育ったこの地にとどまる。つまりレミアが幻想郷に行く判断しても

行かないと判断してもいずれば一人にしてしまう・・・だから、孤独にならないようにしたいのだ。」

ベルの顔からは、吸血鬼の王としての風格が消え去り

一人の父親としての娘への愛があふれかえっていた・・・

「ふふ・・・お嬢様は幸せですね・・・」

それで私は何をしたらよろしいでしょうか？」

「別段、何もしくなくていい．．．」

それと。なあ祥磨お前もしかして（こんこん）むっ．．．」

ベル様が何事か、伝えようとした矢先

玄関からノック音が聞こえてきた．．．

「すみません、見てきます。」

ベル様に許可をいただき部屋を出て、玄関に向かう．．．

今日は来客の予定はなかったはずなのだが誰だろう

?????

．．．．〈祥磨サイドアウト〉．．．．

．．．．〈???サイド〉．．．．

「あれ?ここは一体．．．．．」

俺はたしか．．．．．

宴会の最中だったような．．．．

「うん。記憶に間違いはないはず、確かに俺は博麗神社でみんなと宴会をしていたはず。．．．なのはどうして気が付いたら目の前の景色が一変してゐるんだろう?」

とりあえず、自分の身成りを確認する。

ちやんと白牙と黒爪は持つてるしどこか怪我してるわけでもない。．．。

「ん?あれつて紅魔館だよね。．．。」

ならもしかしたらレミリアが居るかも、途中でチルノちゃんや翡翠にも会えるかもしれないしとりあえずあそこを目指そう!!!」

だけどこの時の俺は気付いていなかった。周りを良く見れば気付けたはずなのに。．．．ここが俺の居た時代じゃないって。

．．．．
 <???サイドアウト>．．．

．．．．
 <祥磨サイド>．．．

「あの．．．俺、『銀野 優』というものなんですけど。．．．

この屋敷の主『レミリア・スカーレット』はいますか?」

扉を開けようとしたレミアお嬢様にお部屋に戻っていただいてから改めて開けると銀色の髪で身長が俺と頭一つ違うので大体160くらいだろうか、そして柔らかな微笑みを浮かべた青年が立っていた。

一瞬、双覇がこちらにまで来たのかと思ったがあいつの髪は銀じゃなく白だ。

それに確かに中性的な顔立ちではあるがこいつほどではなかった・・・はずだ。

「お嬢様にどのようなご用でしょうか？俺はこの紅魔館の執事をしている

神薙祥磨と言います。それとこの屋敷の主は現在ベル・スカーレット様でございますが？」

とりあえず、これまでの来客者にもやったように出来るだけ刺激しないように笑顔で受け答える。

「えっ!?ベル・スカーレットですか??」

すると、その場で顔を下げ少し考え始める優。

って・・・優?しかも日本人みたいな名前ってことは・・・まさか、

「もしかしてお前(あなた)も俺と同じ転生者(外来人)なのか(なんですか)!!」

俺と優が同時に同じ結論にたどりつき、同時に言葉を出す。

外来人ってことはこいつは原作の世界からきたってことか・・・

「えっ転生者ってどういうことですか？」

困惑している優にとりあえず、通じるかわからないが説明を試みる。

「ああ……えっと。。。俺は元々お前と同じように能力なんてものが存在しない

世界の住人だったんだ、でもただ迷い込んだお前と違って俺はその世界で一度事故で死んだんだよ。」

そして、その事故が本来なら絶対に起こらないはずの事故で神によみがえらせてもらったことを説明した。

「へえ……そんなこともあるんですね……。ところでここはどこなんでしょうか？俺、博麗神社で宴会してて気付いたら居たって状況でとりあえず見覚えのあった紅魔館に來たんですが……」

どうやら、優はこっちの世界に紛れこんじまつたらしい……

まあ世界を切り替えられる化け物なんてたかが知れてるが。

「ええと……先に言っておくとここは恐らくお前の居た世界とはだいぶ時間軸が

ずれてる世界だ。確かにレミリアお嬢様は居るには居るがここでは500歳の吸血鬼じゃなく5歳になったばかりでまだ能力も練習してる最中だ。」

優の理解がおいつくまで少し待って言葉を続ける。

「それで今回のことは原因に心当たりがある。この世界には八雲紫のほかにも

異なる世界の人間を呼べる奴が俺の友達に居るんだ……。」「
できれば、気のせいであってほしいが

優のほうに心あたりがないならこっちの世界に呼んだ本人が居るはずそして俺の知る限りなことできるのは二人だけ……

「わ、わかりました。じゃあ俺が元の世界に帰るにはそのお友達に会う必要が

あるんですね。改めて、俺の名前は『銀野 優』。能力は『鎖を操る程度の能力』
でこの二本の刀は黒いほうが『黒爪』、白いほうが『白牙』でそれぞれ『全てを斬る程
度の能力』と『全てを断つ程度の能力』を持ってます。」

鎖を操る程度の能力……か……。

武器がそれぞれ能力を持つてるってのもすごいな……。

「俺は、神薙 祥磨。」

能力は『万物を呼び出す程度の能力』と『想像する程度の能力』だ。

想像する程度の能力は呼びだす前の準備をサポートしてくれるのと、ちよつとした予
知ができる。」

一旦 優に待ってもらいベル様のもとに駆ける。

「ベル様。少々よろしいでしょうか……。」

俺は、先ほどまでの出来事をベル様に伝える。

すると……

「そうか!! なら行つてきていいぞ。

ちようど、おまえにはそろそろ休暇を与えようとおもつたところだな。

先ほどはそれを伝えようと思つたんだ。」

まじか……

いままで、さんざつぱら我慢してたけどやつぱりあいつのどこにもどりたかつたんだよなあ……だつて絶対そつちの方が楽しい!!

「わかりました。それでは行つてまいります。」

休暇というのはどれほどでしょうか?」

つい、浮かれ声で聞いてしまう。

「ふっ……そうだな、友と久しぶりに会うのだゆつくりしてくるといい。

こちらは私だけでも十分守れる。」

「わかりました、それでは失礼いたします。」

……少年移動中……

「よし!! 俺の主人から許しも、もらったしさつきといくぞ優!!!」

『具現』神隠しのスキマ」

「ええっ?!?!ちよっ!!待って!!!」

おれは、不思議な来訪者『銀野 優』と共に呼び出したスキマをくぐる。

(双覇のやつ、どうしてるかな)。いい加減射命丸と良い感じになってるかな。

あ、でも想像したら腹がたってきたな・・・ついたらとりあえず殴ろう!!)

・・・〈祥磨サイドアウト〉・・・

・・・

．．．．．
 〈??サイド〉．．．．．

「いつていつていつて．．．．．ここは???

どこだ？」

確か、俺は姉ちゃんを探しに過去に戻って幻想郷にかえつてきて．．．

それから．．．???

「よく覚えてねえや．．．ここに來ちまった影響つてやつかな？」

全知を司る俺が覚えてないなんてな．．．ラプラスの悪魔なら．．．

やめよう、こんなのに使うなんて馬鹿げてる。」

ここに俺と同クラスか、俺より強い神が居たりしたら一発でばれちまうしな．．．

俺はまだ解決しなきゃいけないことが山ほどあるんだこんなところでハマしてたまる

か

「しっかし、ここつてどう見ても．．．『妖怪の山』だよな．．．

はあ．．．しかも妙に強い妖力と神力を感じるし、こりやラプラス使わなくて正解だったな。めんどいけど、この神力の場所にいつてみるか．．．」

少なくとも、諏訪子や神奈子よりはだいぶ強いし俺がここに來たことも気づかれてる

可能性すらある。つまり、俺がここに居る事情をなんらか知ってる可能性が高い。

・
・
・
・

赤茶色の髪をした青年は神力の発信源めざして歩みを進めた・・・

第51話—再開とはじめまして。全知と鎖と結神

「えへへ〜．．．双覇〜♪」

ここは、幻想郷．．．

幻と実体の大結界．．．博麗大結界を八雲紫ほか数々の大妖怪や神が協力（俺も）して築き、日本の一部を隔離して作られたこの世界は外の世界。俺たちが元々居た世界で幻想となり忘れさられた妖怪や神等の者たちが集まる理想郷だ。

「どうしたんだ〜？文。もう秋とは言ってもまだまだ残暑があるんだから取材に行つて来て涼んできたらどうだ?！」

この土地ができるまでには、また出来てからも本当にいろんなことが会った。

まずは幽々子が亡霊となって白玉楼の土地に戻ってきた。どうやら『死霊を操る程度の能力』が重要視されて死んだ魂の管理を任せる代わりに亡霊として蘇ったようだ。

後は、結界を築くにあたり祥磨の紹介でレミリアの父ちゃんが来た時はビビった、

フェルと同等くらいに妖力だったからな。妖忌の奴は主人を今度こそ守りぬけるようにもっと修業を積んでいるらしい、なんでも近々孫娘が生まれるのでその子に魂魄流を託して隠居するのが夢らしい。

それから、龍神つて奴にも初めて会ったな。

よく水墨画とかで描かれる蛇のような胴体に馬鹿でかい顎。腕が二本生えてるよう
な

タイプの奴だった。最近妖怪とかの化け物は全部人間の姿で会ってたから化け物の姿をした化け物はちよつと怖かった。

「だつて・・・やつと休みの許しをいただけでせつかく家で二人なんですよう？」

こつやつて今まで会えなかつた分くつついてないときみしいじやないですか・・・

そ・れ・に・い・い・ち・よ・つと目を離すとすぐにさつきさんや椀にさらわれてるんですから肌身離さず監視しないと!!」

そう、白玉楼での一件のあと山に戻り俺と文で陽葉に掛け合つてみたところ

「おもしろそうだなつ! いいよ!!」とあつさり許可が貰えたので妖怪の山の全天狗に風の噂をかけてもらい、妖怪の山勢は山ごとこちらに移動した。

(もしかしたら、河童には伝わってなかつたかもしれないが)

「はああ・・・俺が離れる時はさつきや天魔様に仕事を頼まれた時か椀達白狼天狗の訓練のためであつて、さらわれてるわけじやないつて言つてるだろ？」

それに・・・その・・・この状態だとほんとに、マジでいろいろとまずいのだが。」

え? どういう状況かよく説明しろって?

朝起きる↓目の前一杯に俺の嫁(文)↓びっくりして跳ね起き・ようとして体が動かない。↓よく見たら首に腕が!!?? (いまここ)

この状況下・・・男子諸君ならわかってくれるだろう。

相手のいろんなところ(暗喩)がこちらのいろんなところにあたってくるのだ。

まず、間違いなく世のほとんどの男子はある部分が反応しそうになるだろう・・・

「あやややあゝ? いろいろってなんのことですかあいろいろって??」

「うぐつ・・・えくと、その・・・」

あつ!!! 今日ちょっと椋に哨戒天狗の訓練のことで打ち合わせがあるんだったなあ
くゝいそいで、行かないとっ!!!

一瞬、文がこちらに近づこうとして首の刃が弱まった隙に脱出!!!

よしっこれで理性崩壊は免れ・・・たっ

「ぐふっ!!!」

!!!!!!??

ダツシユで窓に向かうも、風に足を取られてすつ転ぶ。

俺の部屋は若干窓側にベッドがあるので扉に突っ込むよりは窓のほうが近い・・・

んだけど、うちの家主の前じゃ距離が近かろうが、遠かろうが関係なかったらしい。

「あややや？逃がしませんよっ!!」

しようこりも無くまたあの狼のところにいこうとしないでくださいよ。貴方は今日から私と二人っきりの時間を過ごすんですから。」

ちつくしよう!!たしかに、一緒にすごせてうれいけどまさかここまで一気に文の不満が爆発するとは!!陽葉に直談判して得た有休だつて言つてたし陽葉や椈、はたてが助けに来ることはない。。。

「くそっここまでか、俺は普通に甘つたるい生活がしたかっただけなのに・・・」

「あやややく。こんなに貴方が欲しくなるまで放置していた双覇が悪いんですよ。

私の愛をいい加減に受け取っていただきませよ。(ぱさっ)

うつぶせに倒れていた、俺の体が文の手によつて仰向けにされた。

ん?ぱさっ。てそれと衣擦れの音つて・・・ぼっ!!! (〓〓〓)

「ちよっ!!ちよちよちよちよ・・・ちよつと待て文!!」

なんで脱いでんだ!!!まだ昼間っ!昼間だからっ!!」

いや、日が暮れば良いってわけでもないけどっ!!

て、そう言ってる間にもあああああああ文の胸・・・胸がつ!!!
 「そんなに、赤くならないでくださいよ・・・」

初心な子供じゃないんですから、半裸程度で赤くなられると・・・こっちも
 恥ずかしくなります。」

言葉どうり顔を赤くしながらなおも脱ごうとする文。そして俺の服にも手をかけ・

やめてええええええええええ!!!

??? 「えくと・・・おまえら!!」。周りの確認と時間帯を考えてそういう事は
 しような?」

「へ?」

お腹のあたりの服がめくられて、涼しくなってるなか

謎の声のしたほうに首を向ける。

「よっ双覇! ひさしぶりに来てみたらなんだこの状況。

お前と文つてもうそういうことする関係だったっけ???

ええくと・・・執事服?を着た。

俺のよく知る顔の男。

「お前・・・・・・・・・・・・・・・・祥磨かつ!?

久しぶりって今までどこで何してたんだよ。紫の奴があいつの式探してやらねえか

ら

キレてたぞ・・・」

たはは。と笑いながら頬をポリポリかいている祥磨・・・と

後ろで赤面しつつ・・・ちらちらこちらを見ている銀髪の男・・・!?

「え・ええと、後ろの君はえつと・・・だれ?」

周りの様子に気づいて赤面しながら、走り去っていった文の様子をちらつと確認しながら祥磨の後ろの少年。青年?に声をかける。

「あ。ええくと俺は銀野 優と言います。

『鎖を操る程度の能力』を持っていてこの二本の刀。『白牙』と『黒爪』にも

それぞれ『全てを断つ程度の能力』と『全てを斬る程度の能力』が付いています。」

銀野優か、原作キャラじゃないはずだし俺らと同じような転生者かな?

それに能力を合計3つか・・・

「優は転生者じゃなくて、幻想郷に迷い込んだ外来人らしい。それと

お前ならもう気付いてると思うが3つの能力は同時に使えはしないんだとさ。」

なんか呪い? いや、封印かな。

能力が同時に使用できないようになってる。たぶん、向こうの紫あたりがやったんだ

ろうが・・・

「ああわかってる。なんかの封印だろでも能力が封印されてんのはまあ強力すぎるからわかるにしてもどうしてお前から・・・霊力を感じ無いんだ？」

そう・・・普通能力なんてものを持つてる奴は大概霊力が人並み以上にあつたり、少ないなりに扱いがうまくつたりするもんだが優からは感じ無い・・・
そう、まったく。

「えっと・・・それが、良く分からなくて。

自分なりに周りの人にコツを聞いたりして霊力を放出する修業をしてるんですが・・・
どうやら俺には霊力とかを使う才能が無いらしくて・・・」

そう言つて悲しそうな顔をした優に再度、声をかける。

「そっか・・・なら、霊力が使えない分、

自分自身を鍛えれば良いんだよ。その刀と自分の能力に呑まれないくらいに自分を鍛えればそれでいいんだ・・・俺や祥磨で良ければ訓練相手になるよ。

幸いここは、まだスベルカードールが生み出されてない頃の幻想郷でさ俺も祥磨もどつちかつて言うのと弾幕より近接のほうが得意だし。」

べつに弾幕が苦手ってことでも無いけど、やっぱり殴ったり斬ったりのほうが得意だしな・・・

「ちよつと待ってくれ双覇、優はどうやらこつちの世界に紛れ込んだようだけどお前は原因わかんないのか？」

「たしかに俺はスキマ使えるし、最近は退屈してたけどそれでも楯んこの

白狼天狗の特訓だったり陽葉とさつきから頼まれたお使いだったりで大変だったんだ

それに、俺はゆかりんにスキマ落としされた時にこつちに戻るためのスキマは開けてもこつちからどこかの世界に行くスキマは作れねえんだよ。」

なんか、俺が疑われてる気がしたから一応濡れ衣つてことを

釘差しておく。

???「そつか。お前なら世界と世界を『結んで』俺やそつちの優?をこつちの世界に連れてこれると思つたんだがな・・・」

ん?誰か増えたか??

「うおつ!?瞬じゃねえか!!!

一体いつからそこに・・・いや、そもそもどうしてこんなところに?」

「よつ双覇。急に周りの風景が変わつてとりあえず、強い神力をたどつたら前に会った時よりさらに桁違いの神力になったお前だったとはな……。いよいよ俺でも勝てるか怪しいなッ！」

ニカツ！と笑つて俺の背後を取っていた神。

ほんとにだいぶ昔に会つて以来あつていかなかった白井瞬はこちらに声をかけてきた。

「……えと、双覇（さん）？そいつ（その人）一体誰で
どういう関係だ（でしょうか）？」

二人が妙に息のあつた重ね声で訪ねてくる。

そーいや、祥磨にも話してなかつたな……

「ん？俺の名前は白井瞬だ。双覇とは違う世界で博麗神社の神をやつてる種族は

『全知神』つていつてこの世の全ての知識をもつてる能力は

『知識を司る程度の能力』で知識を授けたり情報や能力の付与。つまりエンチャントができる……たとえば、

そういうと、一度外に出た瞬は手のひらくらいの大きさの石と木の棒を
持つてくる。

「えと、じゃあやるぞ？『概念付与』へ（エンチャント）粉砕（クラッシュ）」

そう呟き、瞬が木の棒で手の中の石にちよんつと触れる。

バコツツ!!そんな感じの音をたてて石は粉々になった……

「まあ、こんな感じだ……」

双覇とは前にも一回こっちの紫のいたずらで会ったことがあってそこで知り合った。お前は?」

……少年達説明中……

「ふうん。一人は俺と同じ被害者もう一人は双覇の友達か。」

これからよろしくなっ!……それと、今回のこと双覇はなんか知ってるのか?」

俺は首を振って否定し、祥磨と優にしたのと同じ説明をする。

「ふうん……てこたあほかにこんな真似ができるやつと言えは……」

「はーい!!!困惑しているみんなのためにでてきたわよ。」やっぱてめえか紫!!!」

とつぜん、目の前に例の目玉だらけの空間『スキマ』が現れ中からゆかりんが現れた……

「きゃあ!!痛い痛い・・・ごめんなさい!!勝手に連れてきたのは謝るわよでも、

今は本当に一刻を争う事態なのよ・・・実は・・・」

真剣な顔になったゆかりん、祥磨が来たのは予想外としてもその一大事とやらは俺、瞬、優の3人を招集しないとどうにもならないってことだ・・・

「今代の博麗の巫女。といえば、双覇にはわかるわね・・・」
彼女が今異変を起こしているのよ・・・。

全知神、銀色の髪 of 剣士、結神、想像と創造の人間。

4人の力を合わせて解決すべき、幻想郷最大の事件がいま・・・

幕を開けるっっ!!!

第52話―陰陽異変。先代博麗の巫女

「えっ………靈夢さんが?……」

今代（こんだい）の博麗の巫女。歴代最強と謳われる体術と博麗の秘術を扱う人間の切り札とも呼ばれ英雄視されている人物。

「は? 靈夢って今の時代には居ないんじゃないや……」

瞬が、いらんことを言い出しそうになったのでゆかりんに転生のことが気づかれないうちに話題を戻す。

「いや、靈夢じゃなくて靈夢。現博麗神社の家主博麗の巫女にして

人間の切り札。そのこぶしに臆した妖怪はあとを絶たずまた天性の才能だった博麗の秘術を努力することでさらに使いこなしていったんだ……でも、

きちんと紙に書いて名前の違いを明確にして、
そこで言葉を濁す。

「「「むっ。」」」

俺以外の全員が俺に続きを促してくる。

「彼女はその最強の力を等しく人間にもふるった。」

「なっ!? どういうことだ?」

祥磨が驚いて、すぐに質問してくる。

「彼女・・博麗靈夢は人間と同様に妖怪も好きだった。

この地、幻想郷で生まれたからこそ彼女は妖怪と人間はいがみ合うべき存在じゃなく互いに協力して、助け合うべき生き物だと結論づけた・・その志しは紫以上に強い・・・」

「だから、人間の切り札として多くの命を救ってるのに彼女は感謝されない。

それどころか彼女を恨んでる人すら存在する。」

やがて、俺の話しを聞いて博麗靈夢がどういう人物か全員が大方理解したところでゆかりんが今回の異変について説明する。

「それで、今回の異変なのだけれど彼女が境界自体に能力を流してるようなのよ・・

その影響で幻想郷のあちこちで暴動が起こっているわ。」

靈夢さんの能力だと・・・

それは、まずすぎるだろ一帯どんな影響がでるか・・

「双覇さん。靈夢さんの能力って一体……」

はあ……聞いたらやる気無くすんじゃないや……まあでも

俺一人が相手の能力知ってたって意味ないか……

「靈夢さんの能力は……」

『陰と陽を操る程度の能力』だ。」

そう呟いた瞬間、その場の俺と紫はやっば伝えないほう良かったか……
って感じの後悔。他3人は全員そろって絶句。

「おっと……なあ双覇。その能力は一体どういうことが出来るんだ？」

そいつと戦って勝たないとこの世界の幻想郷が危ないんだろ……ならどんなやつだろうとなんとか弱点を見つけないと……」

一番早く思考停止から復帰したのは瞬だ。さすがにあの化け物集団に囲まれてるだけはある……もうどう攻略するかの話に思考が移っている。

「ああ……でも、あの人に弱点らしい弱点なんて……」

陰と陽を操る程度の能力はその名のとうり物事の陰と陽。光と闇つまり正反対の事象

を引き起こしたり、何かの道理を反対にできる。」

「はあっ!?なんだそりゃ……」

博麗の巫女は化け物だつて噂は聞いてたけどなんでそこまで……」

祥磨が声を荒げて、驚く。

優や瞬も驚いてるのが伝わってくる……

「あの人に能力を使わせるのは本当に嫌だったんだが……
すでに結界に能力が使われてるならもうあきらめるしかないな。とりあえず、
みんなこの異変では自分の能力はあてにすんなよ？」

「……どういふことですか？」

優が聞いてくる。

「とりあえず、今の状況を整理しないといけないからそこらへんの話は後にしようぜ……
なあ紫。今回の異変の内容は？」

瞬が割って入り、空気になつていた紫に声をかける。

おお……紫のやつすんげえうれしそうだな……

「ええ……それがね、今人里の人間たちが妖怪になつたり

妖怪たちが人間になつたりって言う収集のつけられない状況で……」

一体どんな恐ろしい異変を起こしたかと思えば……

ほんとにとんでもない異変起こしやがって……

「どういふことだ？」「つまり、陰……妖力を……陽……靈力に変換してるんだ能力で……
動機は分かんないけどな……」まじかつてそれさつき飛び出していった文もまずいん
じゃ……」

っ!?しまった!!!

確かにそのとうりだ……

「文あああああああああつっつ」

……〈双覇サイドアウト〉……
!!!!!!!

……〈瞬サイド〉……

……俺が文のことを話した瞬間、双覇の奴がとんでもない勢いで

窓をぶち破って飛び出していった……

「おいおい……あいつどんだけ文命なんだよ。」

まああいつなら俺が心配することでもないか……なあ紫?いまその暴動とやらが一番酷いのはどこなんだ?」

とりあえずは情報収集だ……

俺のほかにも優と祥磨があたまを切り替えて紫に視線をむける。

「そ……そうね。最終目的が博麗神社なのは当然として今のところ

一番大変なところはやっぱり人里ね．．．住人たちがいきなり自分の姿が妖怪になつたりで困惑しているのよ。」

なるほどな．．．．

そりやそうだな、いきなり自分が自分の恐怖していた存在に変化したんだから．．．
「．．．ちよつとまで！上白沢慧音（かみしらさわ けいね）はどうしたんだよ？

あいつは人里の守護者だろ。異変を直接解決はできなくても人里の

困惑を和らげることはできるだろ？」

紫の言葉に対して祥磨が反応する。

「それがね．．．たしかに慧音の力とリーダーシップならその程度の困惑なら

なんとかなるだろうけど．．．今は靈夢の能力の影響で暴走はせずとも人間と妖怪の同調の所為でうまく動けないのよ。」

なるほどな．．．

半人半妖ではあるもののあいつは後天的な妖怪だから完全に妖怪の時と

人間の時が分けられてるからな．．．同時にあらわれるとどうしていいのかわかんないんだな。

「それに．．．」と紫が申し訳なさそうに言葉を続ける。

まさか．．．．な．．．．

「おい……まさかなんかまだ、言つて無い情報あるとか言わない……よな？」

もう、双覇のやつが飛び出していったんだぜ？まさか新情報とかいわないよな???

（黒笑い）

俺が少しばかりの殺気を込めて紫に爽やかな笑み（確信）

を向けると、紫は額からわかりやすく冷や汗をたらだら流して……て大丈夫か？

脱水症状つて妖怪でもなるんだろうか……

「え……ええと、その……実は今回の異変は結界内で私とあなたたちそして双覇

と……いま居た射命丸文以外の全員が精神状態が反転。

つまり、『愛しさ』が『憎しみ』になったりしてるのよ……」

「はっ？それってどういうこと（でしようか）だ？」

優と祥磨が同時に紫を問い詰める。

「……！紫!!お前……なんてことを出し惜しみにしてくれてんだよっ!!!!

おい優、祥磨！お前らは紫と一緒に人里を目指せ。俺は双覇を追つてから直で博麗神

社にむかうっ!!!」

伝えるべきことを短くつたえて、俺も無残に割れた窓（だったもの）をくぐつて

飛び去る……

「やっべえええええ!!愛情と憎しみが反転つてことは……」

真っ昼間からあんなことしようとするくらいのはた惚れっぷりだぞ、それが憎しみに変わりでもしたら!!!」

とにかく速度を上げて、双覇の飛び去った方向に進む。

．．．．少年移動中．．．．

「え〜と．．．この辺から双覇の霊力をかんじるんだけどなあ〜」がっ!!

「ごはっ!!!」っっ!!?あの声は．．．まさかっっ!!!」

嫌な予感が．．．

急げっ!!!もっとはやくっっっ!

「う．．．そ．．．だろ?」

ようやく、双覇の姿を確認．．．

そして文も一緒に居た．．．居てしまった。

「双覇!!双覇。双覇。双覇。．．．!!!」

双覇双覇双覇双覇双覇双覇双覇双覇双覇双覇

そこで目にしたのは．．．

!!!!!!!」

．．．．．俺と同格程度の神のはずなのにその少女にボコボコにされている親友。
『結神』の姿だった．．．．

第53話—風神少女の想い。

．．．．〈双覇サイド〉．．．．

「文あああああああああああああああああ!!!」

くそっ！なにをのんきに作戦立ててたんだったっ！

文の妖力が霊力になっちまった状態でほかの妖怪に会ったりしたら．．．

「文あああ!!大丈夫か〜〜!!返事をしてくれっ!」

くそっ!!どこだっどこだっどこだっどこだっ!!!

文．．．文っ文っ文っ!!!もうあの時の気分はたくさんだ．．．

「また、あの時の天狗に襲われてたりしないだろうな．．．」

口に出すと、一層恐怖で顔が青ざめて

背筋が冷える．．．体温がぐんぐん冷えるのを感じる．．．

もし、文がまた一人で泣いていたら．．．

「くっそおおおおお!!!」

どうして!どうして肝心な時に使えないんだ能力さえつかえれば．．．」

靈夢さんの能力が結界で幻想郷中に及んでいる以上能力は使えない．．．。

能力の『有』『無』を反転されるからだ・

「!!あれは・・・文つつつ!!」

下方の森の中に文を視認し急加速からの急降下。

顔を強く打ったが、んなもん気にしてらん無い!!!

「文っ！大丈夫か？」

体に異常は無いか???怪我は?・・・ごめんな。いつも肝心な時にそばに居なくて」

そうだ・・・本当に文を愛しているなら・・・

ずつと一緒に居たいと思ったのなら。真っ先に探さなきゃいけないはずじゃないかなんで、こんなに遅くなっちゃったんだ。

「今回も、真っ先に追いかけてきやいけないはずだったのに本当にごm「双覇。」

文、どうした？」

言葉を途中で遮り、文が振り向く・・・

けど。なんか変な感じがする・・・

「双覇は・・・私のことが好きですか？」

なんか雰囲気を変な気がする。。。

「なんでいきなりそんなこと聞くんだよ．．．？」

好きだよ。」

なんだろう．．．俺の知ってる文はそんなことをいちいち聞いてきたらどうか？

いつもなら俺が好きって言うだけで幸せそうな顔して真っ赤になるくらいなのに．．

「なら．．．大好きですか？愛していますか？？」

今まで私に言ってくれたことに嘘はありませんか??？」

目が心なしに暗い気がする．．．

「ああ。俺は、文のことが大好きだし愛している。

これまで言ってきたことも全て守ろうとした「嘘ですっ!!!」がっつっ!!!

!？」

俺がそう言いかけたところで文の姿がぶれ、次の瞬間には目の前に

思いつきり腹を殴られて吹っ飛ばされる。

「がはっごほっ!!!う．．．嘘って．．．」

視認出来るわけも無くふつとばされた俺は肺に空気を取り込むため

荒い呼吸をしつつ尋ねる。

「あなたが、私を大切に想ってなんていないって言ってるんです．．よっ!!!」

また、急加速。

気付いた時には体は宙を舞い酷い吐き気に襲われる・

「そ．．．んな．．．こと．．．nがつ!？」

反論することも許されず背骨に嫌な音が鳴り今度はたたき落とされる。

くそ．．．落ち着いて話を聞いてもらわないと．．．

「．．．つつ?!駄目だ．．．なんでこんな考えを起こすんだよつ!!」

無意識のうちに握りしめていた右手を解き、自分で折る。

好きな相手を止めるのに暴力を使うとするなんて．．．最低だ．．．。

その後もとめどなく続く大好きな鴉天狗からの無慈悲な拳の嵐。

俺はそのうちに抵抗も説得も諦めた殴られ続けた。

(どんな形であれ文を傷つけたのは、文にさみしい想いをさせたのは俺だ。なら、その怒りは受け止める必要がある。)

「・・・正直、このまま霊力と妖力のコーティング無しで受け続けたら死ぬと
思うけど・・・まあ文なら殺されてもいいや。」

・・・
〈双覇サイドアウト〉・・・

．．．．．〈射命丸サイド〉．．．．．

「双覇が悪いんですよっ!!私がどんなに恋焦がれても．．．

いつも一人でふらふらと。結局枕にもきつきさんにも会いにいくし．．．．．」

やっと私を選んでくれたと思っただのに．．．

やっと私と一緒に居てくれるって言ってくれたのに!!!

「私を選んでくれたのなら!!!私だけを見てくださいよっ!!

私の想いに応えてくださいよっ!」

どうしてかは自分にもわからない．．．

こんなに双覇が好きはずなのに。今は憎くてたまらない．

どんなに頑張っても私のもとから離れてく．．

「私はこんなに憎^{好き}いのに!!!

どうしてなんですかつ!!!山から出て行った時も!!私、ひよっこり

戻ってくるんじゃないかって．．．ずっと待ってたんですよ!!!」

なにも応えてくれない双覇に拳を振るう。

返り血がべつとりとくつつく．．．ほのかに暖かい．．

「私はこんなに愛しているんですよ!! もっと!! もっと双覇も

私を愛してくださいよ!!! 私の憎しみを^愛受け取ってください!!!!
愛しているはずなのに。憎い・・・

最愛の人なのに、最憎の人にみえる・・・

ほんとはどこにも行かないように抱きしめて、家に帰りたいのに振り下ろす拳が
とまらない・・・

「もっと私を愛してください!!!」

もっと私に貴方を憎^愛ませてください!!!!

もう、思考もおかしくなってきたしまった・・・

愛しい人があの時の男の鴉天狗達に見えてきてしまう・・・

「がはあつつつ!!! げっふおつつ!!! ほっ!!!」

私の拳が適度に固さのある双覇のお腹にめりこみ

双覇が今日何十回目かの吐血を吐きだす。

「・・・こうなったら、私と一緒に死んでください。

それで、ようやく・・・二人つきりに・・・なれますつつつ
!!!!!!!」

服を赤く染めて、もう立てなくなっている双覇にすこし距離を取ったところから

風の勢いのままフルスピードで拳を振るう………
ガシイつつつつ!?

「おいおい……そのへんにしとけよ。」

本当に双覇死にまうぞ?てか殺しにいくとかまじかよ……」

目の前に現れた青年は「靈夢って巫女の能力はどんだけ強力なんだ?」

とか、ぼそぼそ言ってる。

「ちよつとあなたっ!!これは私たちの問題なので邪魔しないでください!!!

というか、誰なんですかあなたはっ!」

「ん。まあ正気の状態の痴話喧嘩だってんなら別に首はつつこまないけどな

今のお前は異変の影響で正気の判断ができずにいる。だからそこに転がってる結神の友達?の俺白井 瞬がお前の相手になるぜ?」

……〈射命丸サイドアウト〉……

……〈瞬サイド〉……

「……双覇の友達？の俺白井 瞬がお前の相手になるぜ？」

さて、なんとかとどめの一撃は防げたけど……

速つええええええええ!!!さすがは妖怪最速の種族だな。

「さあ、どつからでもかかってこい y!?!」

目の前の文の姿がぶれ、気付いたら目の前に現れる。

一瞬反応が遅れて吹っ飛ばされるそこから背中に回り込み上に飛ばされ、最後に叩きつけられる。

「あやや?どうしました。かっこいいこと言ってもこの程度ですか!!」

なんとか、受け身して起き上がった俺に

射命丸が速度を落とさず。むしろあげて突っ込んでくる。

「へえ、能力がうまく使えねえ状態だったのにまだ速度上げられるとはな……

でもその程度の速度で俺に拳が当たるとおもったか？」

その拳を俺は良く見て、痛くないようにそつと

添えるようにして手のひらに包み込み威力を殺す。

「なっ!!ウソでしょ……この速度が追えるわけがないのに……」

驚愕している射命丸。はあ……

「確かにお前の速度は右にでる者はいないくらいの速度だろうな。

だが、生憎俺の嫁は『光神』光を司る神様なんだ、どんだけ早くても精々音速以上光速未満だろ?なら俺には通じない。一回その速度を見ればばつちり視認できる。」

さて、双覇のやつは……

ありやりや……出血多量で気絶中か。

「しょうがねえ。正気に戻すためだ残るような傷は付けないから

最悪の場合、2，3発殴るのは許可しろよ双覇?」

「なにを、のんきに目を離してんですか!!!」

私の本気の速度についてこれる人なんていないですよ!!大体……貴方に追い付いて

貰っても……」

まだまだ諦めずに拳を振るってくる天狗。

「だから……無駄だったの。」

それに俺以外にもお前の速度についてこれる奴はいるぞ？

ついさっきお前自身がぼこぼこにしたけどな。お前はちゃんと一番見てほしい奴に見てもらえてるんだぞ？」

右から左から。上から下から。

どんどん迫ってくる拳、まあもうこの速度にはなれたけどな。かわしつつか声をかける。

「っ！嘘ばかり言わないでください!!

私は双覇の一番にはなれなかつたんです!!!それに私のことがちゃんと見えていたならどうしてあそこまでぼろぼろになってるんですかっつ!!」

射命丸が涙をこぼして、攻撃を繰り返して来る。

「はあ……いい加減に話を聞けっ!!!」

バシイっ!!!!

拳を受けたところから突風が吹き荒れる。

「まず。双覇は俺と同格……いや、下手をすれば俺以上に強い神だ

だから俺に出来ることならあいつにもできる。それにあいつが本気で好きなのは・あいつが本気で愛しているのはお前だ。」

「つ!!なら、なんで私を突き放すんですかっ?!

私は守られるほど弱くはないですっ!!双覇のそばに居たいっ!!!

双覇の隣からはなれたくないのにつ!!!」

ああ・・・大体事情は把握した。

これは・・・双覇のやつ、俺と同じ間違いをしちまったな・・・。

「なるほどな。射命丸、双覇の奴はお前を妖怪の山に放置したのか?」

なら、それは許してやってくれないか?俺も一回同じような失敗をしたことがある

あいつもその失敗に気付いたから一緒に住むことにしたんだろう?・・・

それに、男がそういうことしちまう理由は決まってるんだ。」

「一体何だつて言うんですか!!私なんか隣に居ても迷惑だからでしょうっ!?!」

激昂する射命丸。違う、そうじゃない

「違うな。男が好きなたを自分の隣に置きたくないのは『惚れなおさせたいから』だ
それと、俺や双覇みたいにこれから自分が危険な目に会うってわかっているやつはソレ
から遠ざけたいからだ。つまり、誰よりも大事だからこそ自分がそばに居ること
危険な目に会うのが怖いんだ。」

俺の言葉に対し、なおも納得のいっていない射命丸にさらに続ける。

「なら、双覇が起きたらもう一回ちゃんと聞いてみるよ。」

いまぼろぼろなのだってきつとお前を傷つけた、寂しい想いをさせたってわかっているからあえてぼこぼこにされたんだとおもうぜ?」

「それでも納得できないなら……んじやお前の能力は何だよ?」

問いかける。少しきよんととして射命丸が答えてくる。

『風を操る程度の能力』……それがどうs「だったらっ!?!」

射命丸の台詞に割り込む。

「だったら、双覇がお前のもとを離れそうな時には風で自分のもとに手練り寄せろ。」

お前が離れそうになったら確実に双覇の奴が結んで繋ぎとめてくれる。だから、

あいつが無茶しないようにずっと隣りに居てやれ。」

射命丸の瞳からだんだんと妙な気配・・・暗み？

が消え去っていく。

「そ・・・うは・・・双覇つ!!!わ・・・たし。。。なんてことを・・・

ごめんなさい・・・ごめ・・・んな・・・さいっつ!!!」

ひぐつぐすつ・・・と涙をぼろぼろとこぼして崩れおちる射命丸。

まあ・・・一件落着。かな？結局攻撃してないし双覇にどやされずに済む。。。。

「さくるとっ！俺はこれから、優と祥磨を追いかけて里の沈静化と

異変解決に急いで神社に行く必要があるんだけど・・・困ったなあ・・・双覇を

看病してくれる人がいないぞくくく？」

思いつきり棒読みでしゃべり、周りを見渡す。

「あれれ？あんなところにこんな大異変が起きてるのに報道の仕事さぼってる

鴉天狗がいるぞく？本当なら天魔に報告したいんだけどくく・・・」

さらに続けて、最後に思いつきり良い笑顔で、

「なあ、その鴉天狗？いまちよつとこいつの看病する人さがしててさ・・・

こいつの看病引き受けてくれるなら報告はしないけど??」

そう言った。

「あやややつ！（ぐすつ）喜ん．．．で．．．！受けさせてもらいますっ!!」
射命丸は涙をぬぐって笑顔でそう答えた。

「そっか。良かった〜!!ならもう一つ。

プレゼントをやるよ。『情報付与』—へインプット<」

神経を集中させてなんとかできたたった一回の情報付与。

「あややややつ!?!これは．．．（／／／／／）」

「顔真っ赤だぞ? 本当に物理法則無視して砂糖吐きたくなるくらい

あつま〜いカップルだな。それじゃ俺は行くから双覇が起きたら無理させるなよ?
じゃあなっ!!」

それだけ伝えて、まだ顔が真っ赤な天狗と

その天狗の膝の上で血まみれではあるものの心地よさそうな幸せそうな神を
その場に残して俺は飛び去った。

・・・〈少年移動中〉・・・

ん？射命丸に付与した情報??

決まってるだろ？『双覇』から『文』に対する『愛』だ。

第54話—Qここは人間の里ですか？Aいいえ、ここは妖怪の里です。

．．．．〈優サイド〉．．．．

「え〜と．．．俺らはどうしましょう？」

まだ忘れられてないと思うけど一応。

俺の名前は銀野 優。博麗神社で宴会その最中に剣の稽古をしていたら

こっちの世界に飛ばされた。今は『陰陽異変』という博麗の巫女の起こした異変の

真つ最中で

「う〜ん、そうだなあ．．．

とりあえずゆかりんの言う人里の状況がどんなものか確認しようぜ。」

その異変を解決するためにこっちの世界の紫。

それと、双霸さんの友人だという祥磨さんと一緒に人里に向かうことになった。

．．．．〈少年移動中〉．．．．

「くあああ〜。紫の奴位置だけ適当に教えてスキマに入り込みやがって．．

ここまで長い道のりなんて聞いてねえぞ。力も使いにくいから飛べねえし。祥磨さんが隣りでばやきながら歩く。

俺はもともとどういうわけか、霊力が無いからそんなに変な感じはしないけどやっぱりわかる人にはわかるのかな。・・・？

「祥磨さん。俺らが居たところって妖怪の山ですよね？」

元の世界ではあんまり行ったこと無いですけどどこから人里つてたしか

とんでもない距離あったとおもうんですけどd えっ!？」

俺の話聞いた瞬間祥磨さんの速度が上がった。

「なら、なおさら急がなきゃいけないじゃねえかああああ!!!」

速く走るぞ!!それと俺と双覇の事はさん付けしなくて良い。どうせ同い歳か俺らのほうが年下だっ!」

叫びつつさらに速度を上げる祥磨さん。

さつき能力は使えないってわかったし俺は霊力での身体強化もできないし。・・・俺って、行つたところでどんなことができるんだろう。・・・」

まあとりあえずは、速く人里に

落ち着きを取り戻させないと。・・・

「・・・祥磨~~~~!!待って~~~~!!!!!!
なんであの人あんなに速いんだよ人間技じゃないっ
その前に俺は突き離されずに
人里につけるんだらうか?若干不安になってきた・・・

・・・少年全力ダツシユ中・・・

「ぐるるらああああ!!!」 「ぎやおおおおお!!!」
「きゆるるるるるっ!!!」 「ヴあああああああ!!!」

猿、狼、熊、果てはカマキリみたいなから

なんかの鳥まで、本来ならば食堂のおばさんや鍛冶屋のおやつさん
肉、魚、八百屋のおばさんおじさんの声で賑やかなはずの人里が・・・

「これは・・・祥磨さん。

ここって人里で間違いないですよね?」

あまりに衝撃的な光景に一瞬何が何だかわからなくなり、尋ねる。

だってそりゃそうだろう・・・

「いいえ、ここは妖怪の里です。」

祥磨さんもテンぱってネタ発言してしまっている。
無理も無い人間の里は・・・

さまざまな妖怪たちがはびこる魑魅魍魎の里になってしまっているのだから……

「あら……意外と速かったわね……

能力が使えないあなたたちなら早くても今日一日はつかないと思って寝ようと思っていたのに……」

虚空が割れて薄気味の悪い眼球がいくつもこちらを見てくる空間『スキマ』がひらかれ、中から紫さんが現れた。

「紫てめえええええ!!!

なに一人で先に行ってくれとんじやしかも片道どれくらい言わねえからこんな時間かかっちゃまったじやねえかつ!」

祥磨さんがキレるそうそう!……

そうじやねええええ!!!

「いやいや、そうじゃないでしょう祥磨!!」

だいたい紫さん普通あの距離って一晩かけても無理ですって!!!」

ほんとにどうして、あの距離を3時間で走り抜けられたのか・・・

足がとんでもなく痛いけど普通あの距離は頑張つて走つたところで3時間は無理だと思っただけ・・・俺の体つてやっぱり化け物なのかな・・・

「あら、あなたたちは出来たじゃない。

それと人里の様子はもう確認したわね???ご覧のとおり

の始末で大変なのよ。」

紫さんが視線で人里を指し言う。

「確かにありゃきつそうだな。

んで?俺らはどうすりゃいいんだ??」

「そうですね。紫さんの能力でも無理なら

俺たちに出来ることなんて皆無に等しいんじゃない?」

「祥磨さんが今度は至極まともなことを言ってきたので

しつかりと同意する。」

「貴方達にはあの元人間の妖怪達を気絶させてきてほしいのよ。」

とりあえず、それで落ち着くと思うから・・・もうここまで精神が乱れてると能力が使えない私は手荒な真似しかできないわ。」

「そか・・・おつそろしく」

単純明快な暴力行為だけど・・・わかりやすくていいなっ!!」

祥磨さんがほんとに物騒なことを叫んで駆け出してゆく祥磨。

そして、内一体の妖怪・・・熊っほいのに狙いを定め腕を振りかぶり・・・・・・・・

殴り飛ばした・・・。

「狙いは頭部……狙いは頭部……相手は今妖怪……首を狙えば折らずに
気絶させられる……」(ぶつぶつ)

頭で思い浮かべ、感情を殺す。

そして口にも出して軌道をイメージする……

「狙いは頭部……狙いは頭部つ!!!」

ジャンプして、空中に躍り出て

二本の刀を振るう。首にくらった妖怪たちは各々の悲鳴を上げ気絶していく。

「よしっ！俺でも戦えるっ!!!」

はあああああああああああああ

その後も順調に数を減らす。

時たまに奥の方向からも、妖怪のうめき声と祥磨の声が聞こえてくる……

どんだけ、喜んでるんだろう……

!!!!!!!

・・・・・・・・少年蹂躪中・・・・・・・・

「はあ・・・はあ・・・さすがに数が多いぞ。

優、ゆかりんはどうした？」

さすがに、荒い呼吸を漏らしながら俺と合流した祥磨・・・

紫さんですか。。。

「それなら、さつき「冬眠に入らなきやいけないから後よろしくね」

と言つてスキマの中に消えて行きましたが。。。。」

祥磨が、「くっそがああああああああああ!!!」こんな時に冬眠とか

なに考えてるんだよおおおおお!!!」と絶叫しているがまあ俺も聞いた時

耳を疑ったからな……

「文句言つてもしょうがねえな……。とりあえず、瞬と双覇が

合流するまでは俺達でどうにかするしかねえ。はあつつ!!!」

祥磨がもう一度、拳を握りしめて妖怪の束に飛び込んでいく。

ふう……。狙うは頭部、狙うは頭部、狙うは頭部。

集中してもう一回、軌道をイメージ一気に跳ぶ。

「だああああああ!!!」

妖怪の前に躍りでて二爪を振るう。

祥磨と反対のほうに駆け抜ける（もちろん気絶させつつ……）

「まだまだっ!!!」

倒さなきゃっ「きや……。きやああああああ!!!」えっ!?!」

なんだろう今の悲鳴。

祥磨じゃもちろんないし紫さんが戻ってきたわけでも……。あれはっ!?

「嘘っ!なんであの女のひともう気絶から覚めて……。……」

クソっ!!峰の入り甘かったか!!!」

自分の攻撃の深さが足りなかったことに気付き急いで接近する。

女の人の近くに居た獣人型の妖怪が女の人を引き裂こうとその人一人を軽く飲み込む

豪爪を振り下ろす。

「まにあえっ!!!」
 (どんっ!!!)」

間一髪、女の人が斬り裂かれる直前に体当たりで除けさせる。

よしっ！これであの人をなんとか助けられた・・・後は『鎖』でこいつを縛って拘束すれば・・・

「あ・・・今は能力が使えないんだっただ・・・

どうしよう。祥磨さん・・・あつ気付いてはもらえてるけどこつちには来れそうに無いか・・・」

俺は理解した。『ここで死ぬ』んだと

普通に考えればこいつら相手にただの人間になった俺が勝てるわけなかったんだ。いつのまに能力にすがっていったんだろう・・・こんな最後も悪くは無いか。

「ぐぎやああああああああああおおおおおおおおおおお!!!」

激昂した目の前の獣人の爪が迫ってくる。

抵抗すらできないことを悟った俺は全てを諦め目を閉じる。
せめて、痛くなく死にたいな・・・

『白雲流』常世の五月雨!!!
!!!!』

そう覚悟した俺のところにはいつまで経っても来るべき痛みが来ず。。。

目を開くとそこには気絶し倒れている人間の姿に戻った妖怪と。

「よお。だから能力にたよんなって言ったろ？」

優。しかしここに来てないってことはマジでもう神社に向かったのか瞬のやつ。」

優しい笑顔でこちらを見ている双覇さんだった。

「あ……ありがとうございます。それと今の劍技は？」

文さんはどうしたんですか？」

自分が死ななかつたことに歓喜する間も無く理解の行かないことへの説明を
求める。

「とりあえず落ち着け。文ならちゃんと一緒に飛んできたし今は祥磨のほうの
援護に向かつてる、劍技は妖忌に習った魂魄流に俺の我流を混ぜたもので『白雲流』
だ異変解決後にもおしえてやるよ。まずはこいつらだ!!!」

二本の刀を構えなおし、妖怪の群れに突っ込む双覇

俺も今度こそへまはしねえっ!!!

「残念だが、君らの存在はこの人里を脅かすことになる。
だからこの人里の『歴史』から消えてもらおうっつっ
!!!!!!」

次の瞬間には、双覇の体は吹っ飛ばされていた。

『二本の立派な角』、『目も覚める青の服装』、『白に少し青みがかった色の髪』

『紅い色をした瞳』。

この人里に居て当然の人物がこの人里に合わない装いで
双覇に必殺の頭突きを喰らわせていた。

第55話―知識と歴史の半獣。 緑光纏いし白き野獣。

．．．．〈双覇サイド〉．．．．
．．．．なんだろう。

頭がすごく柔らかいものに包まれてる気がする。

それに．．．．なんか良い匂いもする。

あれ、文の顔が見える．．．．そ。そうかつ

!!!!!!

「天国はここにあつた．．．．」

ありがとう神様。最期に文を見せてくれて．．．これで心残りはない。」

強いて言うなら有名な閻魔（映姫）の裁判を受けて無いから

どっちに区分されるかわかんないってことだなまあぶん『黒』で地獄行き何だろう
けどな．．．

「あややや！ 将来の旦那様に膝の上で死なれてしまうと困るんですけどねえ．．．

双覇、痛いところどこですか？ まだ無理しちゃだめですよ。」

・ ・ ・ あれおかしいぞ、どうして文の声がするんだろう。

「ええと．．．あはは幻聴まで聞こえてきやが「これでも幻に思えますか? (ちゅっ) んん!?!」

あれ、文の顔が目の前一杯に．．．えっキス!?!えっその．．．
えくと．．．

なんだか、よけいに混乱してしまっただけ．．．
柔らかくて暖かくて．．．問答無用で安心する俺の大好きな人(妖怪)

「ええと．．．生きてるってことで良いんだよな。
ただいま。文!」

とりあえず、口を解放してもらい文に声をかける

「はい。お帰りなさい双覇．．．

すぐにでもみなさんを追いかけたいんですけど……
 すいません、まだ内臓や骨の回復が済んでいないので無理に動くとは破裂する可能性が
 ……うつ…ぐすつ！」

どうやら最初に感じた柔らかさは文の膝と太ももだったらしい、

『膝枕』と言う奴か……. いろいろいいよっしやああああああああ!!!

まさか、転生前はちよつとしたオタクキャラで非リア充だった俺が伝説の『膝枕』を
 やってもらえるとは……. しかもあの妄想の中にしか存在しないはずの

『射命丸 文』に? うっひよおおおおおおお!!!

「はっ正気を失ってた……. こっちではなるべくオタクキャラにはならないようにして
 たのに……. って文?なんで、泣いてるんだ??」

「だっ……. でっ!!ひぐっ!!!

わだ……. ひ……. のせいっうくっ!で……. こんなにぼろひつく!!

ボロボロに…….」

俺の顔に振ってくる涙の雨…….

そっか・・・俺がボロボロになつてるのを自分の所為だと思つてるのか・・・

「はあ・・・なあ、文。俺が気絶した後に来たのつて瞬か？」

泣きながら首肯する文。

「そっか、なら俺が文の攻撃を避けようと思えば避けれたつてわかつてるだろ？」

なら今回のこの怪我は俺が勝手に・・・「違いますっ!!!私のせいです!」

うゝん・・・ならさ・・・」

文の顔を手で撫でて、落ち着かせて言う。

「もうちよつとの間、このまんまで居てもらつていいか？」

もう少し休めば治るだろうしこのままだとなんか回復早そうだしさ? (にこっ)」

半人半妖という種族のおかげか、

今の俺は妖怪の治癒力も少し落ちた程度で残つてる。

「は・・・はい。それじゃゆっくり休んでくださいね双覇？」

お休みなさい。」

文の優しい声を子守唄がわりに瞳を閉じて、やがて心地よいぬくもりに意識を手放した。

．．．．．〈結神就寝中〉．．．．．

「．．．ん。んうくくつああああああああく！」

やつべえすんごい気持ちよく眠れた．．．。

これは．．．うれしすぎる。

「しかも、起きたら目の前に好きな人がいるんだから目覚めも良いしな。

これでどうやったら悪夢が見れるんだろう．．．ん？」

あれ？これ顔の位置近すぎねえ??

しかも、なんか目つむつてるような・・・ああ文も寝てるのか。

「て、これじゃ寝るにしては体勢がきついじゃねえか・・・」

くつそ能力使えないからいつもどうり祥磨の能力でベッド呼んだりできないし・・・
しやくない・・・」

やるの、恥ずかしすぎるしあまり筋肉質では無いとは言えあまり寝心地良くは無いと思うんだけど・・・

「ええと・・・これで、いいのかな？（すっ）」

文の体を起こさないようにゆっくり慎重に横たわせて、その頭の下に腕を入れ込む
まあ所謂『腕枕』というやつだ。

「俺の腕つてどちらかと言えば柔らかいほうだと思うし。。。。」

寝苦しくなければいいけど・・・」

なにせよ、文が起きるまではこのままだな。

俺はどうして怪我人なのに道端で腕枕なんてしてるんだろう．．．まあ寝顔のおかげですごい眼福だけど．．

「あれ？また．．．ふわあ眠くなってきたな．．．」

駄目だ．．．すうすう」

．．．．．〈双覇サイドアウト〉．．．．

．．．．．〈射命丸サイド〉．．．．．

（皆さま、清く正しい射命丸ですっ！）

（あややく、双覇の寝顔が可愛くてついつい見入ってしまった．．．）

そこまでは良かったんですが．．．）

つい、恥ずかしくて寝てるフリをしてしまいました．．．

て、腕枕っ!?

（こ．．．これは、はずかしい．．．／／／

先ほどまでの私の体勢も恥ずかしいだろうというツツコミはスルーしますが．．．）

「すうすう．．．zzzz」

(・・あれ？双覇また寝ちやつたんでしょうか・・)

ちよつとだけなら・・ばれないよね？(ぱちつ)

「すうすう・・」

(すうすうつて・・可愛い!!!!)

ああ・・でもこのままだと双覇の首が疲れそうですね・・)

双覇の浮いている首をばれないようにさらに少し上げさせて、腕を差し入れる。
なんか・・抱き合ってる感じになっちゃいましたけど、

(今は秋の屋外ですからね、多少密着してないと寒いですから・・)

だから双覇に抱きついてるのも、『当ててる』とかというわけではなく純粋に防寒で
・・あれ、私も眠くなってきましたね・・)

「ふわあ・・すうすうすう・・zzzz」

……少年少女安眠中……

……〈双覇サイド〉……

「あああゝんうゝゝ!!ごめんな文また寝ちまった良く眠れた……か……
……? ? ? ? ? どういう状況だ?」

確かに腕枕はしていた……

寝返りをうったと言うなら、こんなに文が近くて顔が近くにあるのも。。。

まあ、なんとなく理解はできる。

でも……

「少なくとも、文のほうから腕をこっちの首に絡ませては無かったような?

どうりで柔らかくて良い匂いで寝やすいはずだけどこれじゃ文の腕がっらいだろう

に

．．．．

かといつて、このままだと首を浮かしたり体を起こしたりできないし．．．
それに顔の位置もかなりきわどいし．．．

「ええ〜と．．．結構寝ちまつたみたいだしかわいそうだけど起こして

先に行った奴らを追いかけないとな．．．」

特に瞬の奴は、能力が使えない状態だつてのに一人で神社を．．．

靈夢さんのところを目指してゐる可能性が高い。

「お〜い．．．文〜〜」

そろそろ起きろ。先に行った奴らを追いかけないと、間に合わなくなる」

俺の声に反応するかのように、文が軽く身震いして「んう〜」って声を漏らす。

可愛い．．．身震いが止まって呼吸が落ち着く．．．

「文〜〜」

もう一度声をかけて、今度は軽く体をゆすつてみる。。。

「んうう〜〜！」なんか、犬のぐるぐるって感じに唸られた……

可愛い……身震いが止まった呼吸が落ち着く……

「だから文〜〜〜。」

さらに声をかけて、体をゆすりつつ軽く頬を引つ張つてみる……

「んにゃっ！ほうは〜〜ひやめてっいひやいっ!!!」さすがにもう、寝たフリを続ける気はしないらしく……なんか可愛い怒り方で怒られた。

「ほら、急がないと先に行つたやつらに追いつけねえだろ？」

今は俺の『結び』も使えないから文の力が必要なんだからさ……」

手を差し出して、文の手を握る。

真つ赤になってはいたもののか加速してくれた……

「うおっ!!!速えええええ!!!」

すぐに付くだろうけど、これじゃどつかにぶつかっただらびちゆるぞん?あそこにいるのって・・・

「文。俺がタイミングを指示するからそのタイミングで手を放してくれ、
霊力と妖力で身体強化はしてるから大丈夫・・・いくぞ?」 3

文にも一応見えたらしく、素直にうなずいてきたのでカウントを始める。

「2・・・」

ごううっつ!!!

という風切り音のせいで俺の方が手を放すのを躊躇してしまいそうになる・・・
けど、大丈夫。焔のこぶしに比べたらたいした衝撃じゃない!!!

「1(ぽ)!!!」

瞬時に手を放す。

俺の体は推進力を失い一瞬、後ろにさがり……

「文の通った後から吹いてくる突風の影響で一気に加速されるっつ!!」

予想どうりのタイミングで風が吹き荒れ、

俺の体は吹っ飛んでいく。なんか、でかい獣人に襲われてる銀髪の剣士に向かって

・
・
・

「……だっ!」

『白雲流』常世の五月雨!!!」

某巨人駆逐漫画よろしく、

腰に差した妖刀、霊刀を引き抜き空中でむりやり体を捻って獣人の

首筋に加減した『白雲流』を打ち込む。

「よお。だから能力にたよんって言ったろ？」

優。しかし、ここにきてないってことはやっぱり直で神社に向かったのか瞬のやつ

・・・」

予想はしていたが・・・

足並み合わせろよ全知神・・・。

「あ・・・。「ん？」ありがとうございますっ!!!

それと。今の剣技は!?文さんはどうなったんですか????」

のわっ・・・

いきなり元気になった優の質問攻めにちよつと物怖じしつつ返答する。

「とりあえず落ち着け、文ならちゃんと一緒に飛んできたよ。

今は必要なさそうだけど祥磨の援護に回ってもらってる・・・

さっきの剣術は昔『魂魄 妖忌』に教わった『魂魄流』の剣技に俺の我流を組み合わ

せた『白雲流』だ。」

この異変が終わったら、優にも教えることを約束し妖怪軍団に

向き直る。

「まずはこいつらをどうにかするぞっ!!「残念ながら、それは無理な相談だな。」

なにつ!?ぐっ!!!」

突然、目の前に突き出された頭突きにとっさに刀を鞘にしまい腕を

顔と胸の前でクロスさせ防ぐ・・・吹っ飛ばされてどっかの民家に突っ込んだ。
どごおっ!!という轟音と共に倒壊した・・・

「君たちの存在はこの人里を脅かすことになる

だから、ここで人里の『歴史』から消えてもらおうっ!!!」

現れた女性は今度はその細い腕を真横に打ちはらい、

優に攻撃を加える・・・

「アブなッ!!! (ぎいんっ!!!)」

優はとっさの判断で、黒と白の刀をクロスさせてその腹で

受け止めたけどさすがに威力を殺しきれなかったらしく俺同様吹っ飛ばされた・・・

「いっつつつ・・・たしか、上白沢 慧音は俺と同じ種族半人半妖じゃ・・・

ああ。そういえばゆかりんが妖怪の部分と人間の同居をしたことがなかったから

今の異変で苦しんでるって言ってたっけ・・・」

なら、慧音も気絶させる対象ってことか・・・

正直原作キャラ、しかも暴走状態との戦闘はやりにくいんだけど・・・

「まあ、あんまり時間かけると文にも心配掛けちゃうし……

一気に終わらせるか!!!新技でっ!」

伊吹瓢から酒を飲み、一応内臓やらに痛み止めを施して、

声を掛ける

「さうて、おまえはどこまでこの技を引き出してくれるかな?

八門遁甲!!!第一『開門』開(かい)!!」

白玉楼で文と再会する前の旅の道中や、この世界に来てから

椈のところについてくる。とか天魔のところに行っていく。とか行ってこっそり

練習していた技『八門遁甲』。NARUTO—ナルトという

転生前に良く読んでた忍者漫画の中に登場する禁術のひとつ……

忍者漫画から抜粋して習得した技だというのにこの技火遁、水遁に代表される

『忍術』とは違う。自らの体の中に八つあるリミッターを外すことで超加速などを

可能に出来るという『体術』の技だ……

「忍術は俺の剣技と組み合わせるのにはキツイかなと思つた結果先にこつちを習得したのはいいけどそれで、文を不安にさせちゃだめだよなあ・・・」

「なにをぶつぶつとつ!!!!さっさと消えろつ!!!!」
激昂して襲いかかつてくる慧音・・・

「まあまあ・・・少しは落ち着けて

コレまだ第一門なんだからさあもう少し楽しませろよつ!!!!」
相手のこぶしを反復横跳びの要領でよける。

「さて、急がないといけねえからさっさと終わらせるぞ？」

死にたくなかつたら死ぬ気で防御しろよ八門遁甲!!!第五『杜門』 開!!!」

俺はさっさと杜門までを開くことにした・・・

今の慧音にはこれくらい力じゃないとたぶん通じない。。。

「痛つてえ・・・5でコレかよ・・・」

よくこつから上をさらに開こうと思うな・・・」

正直、実際は痛みはそこまでではない

さつき飲んだ酒は薬膳酒になっており、中身は痛み止めだ・・・

それにアルコールの影響で痛覚も軽くマヒしてるしな・

「逆にいえば、ここまでやつといてもなお痛いんだから

薬の効能が切れた後が怖い・・・」

まあ慧音相手にビビってたらこの後がやばいけどな・

ちなみに杜門の開放の影響で俺の体には緑色のオーラの的なものが出ている。

「ふんっ!!!オーラが出たくらい何だというんだ!!!

これで・・・終わりだっ!」

腰を落とし、臨戦態勢に入った

慧音が雄たけびを上げ突っ込んでくる・・・

「ぐふっ?!?!」

その角が俺の腹に突き刺さる。

「ははっ・・・あははは!!」

やつぱりコケおどしでは・・・ない・・・か?」

腹から慧音をはやしてるような絵面になってる俺の身体がぶれて、

やがて完全に消え去った・・・

「その体勢だと、首筋が無防備になるんだから気をつけるよ？」

ちなみにおまえが頭突いたのは高速移動による残像だぜ!!!」

俺の言葉を聞いてか、聞かずか慧音の姿が徐々に

人間オНРリーの状態に戻っていきながら前に倒れていった・・・

第56話―博麗靈夢とは？結神と紫髪の少女・・・

・・・〈優サイド〉・・・

「痛つつつ。慧音さんの拳・・・」

ちよつとなめてたかな、人間の姿をしてるからあの細い腕の中に潜むパワーを・・・」

自分自身は、そんなつもりはなかったけど

やっぱり油断してたのかな。

「まさか、ここまでのものとはなあ・・・」

両手がしびれすぎて『白牙』と『黒爪』を持つので精一杯だな。」

実際少しでも、気を抜いたら落としてしまいそうだ・・・

「それにしても、双覇は一体どこを目指してるんだろう・・・

あの状態の慧音さんを一撃で鎮めるなんて・・・」

どう考えても、背負いすぎてる文さんを守るためと口では言ってるけど、あれじゃまるで……

「この幻想郷全部を背負って戦ってるような……」

さっきの『八門遁甲』の杜門解放の時もわずかに、顔を歪めていたし……」

あれって痛みでつてことだよな……

「そんな痛みを抱えてもなお守りたいなんて、

俺も恋をすれば……強くなる理由を持たばあそこまでの化け物になることができるのだろうか……」

まあ何にせよ、早くこの異変を解決させて

元の世界に戻らないとツ!!

……〈優サイドアウト〉……

．．．．．〈双覇サイド〉．．．．．

「ふうふうふうふう!!!

やっぱ、いきなりの杜門解放はきつちいなあああああ!」

修業中は精々、第三『生門』くらいまでしか開いてなかったし

陽葉との実戦でも本気では動いてなかったしな．．．．．

「でもまあ、このままでまずは『杜門』の痛みに慣れないとな．．．

いちいち痛みでひるんでちや隙になるしな．．．」

今回習得した二次元体術『八門遁甲』は、

第一開門く第八死門までの体内のチャクラ回路．．．俺の場合は霊力回路のリミッターを無理やり外すことで身体強化による高速移動や、体内の霊力循環速度を格段に速くさせるものだ．．．

「それだけなら、すげえ便利だけどやっぱメリットにはデメリットが付き物で．．

薬膳酒とアルコールによる痛覚マヒがあつてなおこの痛みだ・・・」

しかも、この技の本領発揮はむしろここからだ・・・

この第五杜門はある種のターニングポイントでこつから上の門を解放すると専用の体術を使うことができるようになる。

「たぶん、靈夢さんあいてには一氣に六門・・・いや七門くらいまでの

解放が必要のはず・・・八門は・・・さすがに解放したくないな。。。」

八門遁甲の最後、八門は通称第八『死門』。

解放時を、死門八門遁甲の陣といつて・・・それを使ったら最期。使用者は必ず死ぬという最強の両刃の剣だ。

「さすがに、今のこの充実した世界を捨てて死にたくはない・・・

それにもう文の涙は見たくない・・・!」

「なくに、キザったいこと呟いてんだよっ♪

似合わねえぞ転生前みてえに、ゲームやらアニメやらの話しようぜ。」

こつちが、珍しくシリアスに思考を張り巡らしてるとのに

さつきまで文と一緒に、妖怪達を殴り飛ばしていた悪友祥磨がふざけてるような口調で俺に話しかけてきた。

「おつす祥磨。こつちがせつかく珍しくシリアスになろうとしてんのに

いきなり転生のことをぶち込んで壊してくんじゃねえよ……」

それに、アニメやゲームって言っても幻想郷にんなもんねえんだから

ゲームは俺か祥磨がもう知ってるのを呼び出すしかねえしアニメはそもそもテレビも

電気もねえじゃねえかよ……

「あはは。大丈夫だよ今更そんなこと心配しても

ゆかりんにはとつくにばれてるだろうし、文にはバレたところでお前らの関係は崩れねえし崩す気も無いだろ？それより……」

俺はともかく文のほうは、わからないだろうが・・・

ん?それより・・・よ?

「お前からより先に、俺たちの上空をすごい速度で

だれかが通っていったんだがあつちはたしか神社じやないのか大丈夫なのか?」

あつそうだそのために、わざわざ急いで飛んできたんだつた・・・
たしか瞬の奴がすでに神社に向かつてるはず・・・。

「そうだった・・・」

残りを急いで片づけるぞ祥磨。その通って行つた奴つてのは瞬だ
すでに神社に向かつてる。」

たぶん、瞬の速度なら本調子じゃなくてももう着いてるな・・・

あいつのことだから靈夢さんの実力を測るとかそんな考え何だろうけど、
そんな軽い考えじゃだめだつ!!

「ん?たしかに足並み揃えないのはほめられたことじゃねえけど」

あいつは超強い神様なんだろう？なら俺らはここでゆっくり待ってれば勝手に解決してくれるんじゃない？」

祥磨が良い笑顔で話してくる。

そんな樂觀的なこと靈夢さんの本気を知らないから言えるんだっ!!

「そうじゃねえよっ！確かに普通の能力の使えるフィールドなら

瞬のほうが強いかもしれないけど……ここじゃ能力が使えないここは靈夢さんの支配する世界なんだよっ！それに………」

みんなを不安にさせる可能性があるからこの情報は言いたく無かったけど……
言わねえと祥磨の奴が余優の表情のままだしな。

「あの人には、俺も負けただよ!!

もう10年くらい前の頃の話で当時は靈夢さんがまだ、10代だったのに俺は完封負けしたんだ。」

あれは・・・

たしか、俺が陽葉に幻想郷に移住するよう説得してこつちに山ごとみんな来てからしばらく経ってだいぶこの土地に慣れてきたころのことだ・ ・ ・

・・・少年回想中（10数年ほど前）・・・

「はあ!?新しい博麗の巫女の腕試しだと?」

ふざけるなよゆかりん。俺は今まで文に会って無かった分文のそばでずつと過ごすって決めたんだよ」

あの日は、文との朝食を終えて庭で

電桜狼牙と結月龍爪を振るって白雲流の型の練習をしてたら突然目の前の空間が割れてゆかりんが現れたんだ。

「そんなことは聞き飽きてるぐらい聞いたわよ。」

そして、ふざけてもいないわ今代の博麗の巫女『博麗 靈夢』というのだけどね？
あの娘は天才なのよ……」

そして、遠くを見ながらゆかりんは語り始めた……

その靈夢という巫女は10にも満たないうちにそれまでの博麗の巫女が死の直前に習得したという博麗の秘術の奥義を習得したらしい……。

「大体話はわかったけど……」

そもそもあの神社が祀ってる神って俺のことだろ？そこの巫女と俺が戦うなんて
笑い話だぞ……」

幻想郷創世、そして『博麗神社』建設それに当たり

博麗神社が祀る神としてこの妖怪は俺を頼ってきた……

俺以外に神がいなかったのだから俺しか適役が居なかったのはわかる、

まあ面白そうだから受けたけど

そっち（博麗の神）としての業務は週1くらいだ常駐してたら、文との時間が

とれないからな……

「別に変な話じゃないわよ、私じゃもう修業相手になれないから

貴方に自分のご神体を守ってる巫女さんの力を見てもらおうと思ってるね。」

おいおい……

紫でも修業相手にならねえのかよ、相当強いってことか。

それに……博麗の秘術の奥義か。

「……しゃあ無いな。」

その話乗ったよ、そうときまればまずは文の許可取ってくるよ」

博麗の秘術。。。

歴代の博麗の巫女もみんな習得してきたものだ、大部分は俺がメンドがつて紫に作ってもらったけど奥義級は別だ。

「本来博麗の秘術は、『陰陽玉』を主軸とした
技群のことだけど奥義は俺自身が作ったふつうの技よりも上級の技……」

問題はどこまで、習得できたのか……

さすがに『夢想天生』はまだ。だよな？

「さて！準備完了。」

それじゃ行くか、『結い』博麗神社＋結神!!」

……〈少年移動中〉……

「よっし、着いたぞゆかりん。」

さて今代の博麗の巫女つてのはどこに居るんだ?」

神社の境内を見まわしながら、ゆかりん

もしくはその『靈夢』という巫女さんを探す……

??? 「私よ。それで?あなたが紫の言っていた私に修業をつけてくれる人?」

「ん?誰だ……どうした嬢ちゃん

こんなところで迷子かだったら今の巫女さんのところまでついて来てもらえないか?

そしたらきつとお母さんのところに帰れ……る　ぐがっ!」

極めて穏やかに、警戒させないように

声をかけたら思いっきり蹴りあげが入った……

「くっ！（ずぎああああ!!）このパワー・・・まさかっ!?」

「そのまさか・・・よ。」

見た目、10歳前後・・・まあニアピンくらいには

当たってる予測のはずだがそのくらいの年齢の少女が歴代最強と呼ばれる・

現博麗の巫女？

「ありえねえ・・・て言いたいところだけど

この速度と拳の力は認めるしかねえな・・・ぐっ!!!」

結局二発目の速度にも、反応できず

クロスさせた腕で受けるミシツという音とともに吹き飛びそうになる。

足から地面に衝撃を流すが・・・

「なら、手加減する必要はないなッ!!妖力解放!

『結い』博麗靈夢＋結神!!!」

能力で接近!!!……あれ?

「な!?能力が使えない?!

は!があっ!!」

一瞬、気を抜いたらすぐそばに来ていた靈夢の拳が

鳩尾にめり込んで吹き飛ばされそうになる……

「衝撃を体から逃がすことはできな。。。

てことは、能力全部が駄目なわけじゃないのか??

試してみようか……『絶対中立—ヘイト・キャンセラー』」

能力で、靈夢の俺に対する敵対値（ヘイト）に干渉しようとする……

「?何をしようとしてるのかわからないけど、私には無駄よつ!!

それにもう私の攻撃を耐えるのも無理かもね?」

再三、靈夢の拳が迫る。

ん?なんだろう……今までとなんか違う!

「これは・・・受けちゃまずい!!!」

急いで能力で、戦線を離脱して避ける
拳が空を切り文ほどじやないが旋風が吹き荒れる。

「ふう・・・あぶねえな。

さて！そろそろお互いの能力をしゃべらないか？それとルールも決めよう。」

俺の提案を飲み、霊夢は自分の能力が

『陰と陽を操る程度の能力』であり俺が能力で接近しようとした際には、
能力で無効化していたらしい。

「なるほど。。。10代のうちにそんなだけ能力を使いこなせるってことは

相当強いな嬢ちゃん・・・博麗の巫女が人間の切り札と呼ばれるわけだ。」・・・

……〈回想終了〉……

「んで、結局能力の使用は自由の3本先取の

体術勝負で俺は腹と頭に2発拳を受けて、気絶……」

目が覚めたらすでに、文の家で眠っていた。

文に聞いた話では紫がスキマで運んでくれたらしい……

「そか、んじゃ決着つけなきゃな?」

俺の話を隣りで聞いていた祥磨が言う。

「はあ?」

何のことかわからず聞き返す俺……

「だから、その三本先取だよ。」

もう二本とられてるかも知んねえけどまだ三本目やって無いんだろ?

なら、今回でとつちまえば良いんだよつ!!」

ニコっ！と良い笑顔で祥磨がサムズアップする。
ふっ本当に、良い笑顔だな・・・・・・・・・・・・・・・・

「ああそうだな・・・・・・・・」

それじゃさっさと片付けて瞬の奴を追いかけるぞっ!!!」

おうっ！と祥磨が首肯し、

すでに文と優が戻っている戦場に二人で突撃した。

（待ってろよっ！霊夢さん!!

必ずあの日取れなかった一本とってやらあ！そしてこの異変を終わらせる!!!）

第57話—陰陽平等の拳!人妖を愛した人間。

．．．．〈瞬サイド〉．．．．

「んゝ．．．無理に能力つかったからかな?」

双覇と文のところに助太刀してから、妙に調子が悪い．．．

なんだろう?

「それに、なんか重要なことを忘れてるような．．．

何だったけなあく。時間．．．なんかの時間制限だったはず何だけど。」

ほんとに何だったろう忘れていいようなもんだったかのほうが重要だけど．．

これもこつちに迷いこんじまった影響なのか、それともこの結界の影響なのか．．

「まあいいや、今は先を急がねえと．．．」

・・・・・・・・少年移動中・・・・・・・・

「さうて、たしかこの辺が人里のはず・・・・・・・・
うわくお。」

恐らく人里周辺に来ておたところ・・・
ドゴオオオオオオオン!!!!!!
!!!!!!という轟音が響いたのは、下方を確認。

とんでもない量の妖怪がうごめいていた。

それで、その妖怪共を優と祥磨が手分けして一方はステゴロもう一方は刀の峰で片っ端から気絶させていた・・・

「さすがに、あの惨状に飛び込みたくはねえな・・・」

しかも祥磨がやたらテンション高くぶっ飛ばしてるし・・・」

あいつらつて本質は(里の)人間だよな?

どうしてあんな容赦なく殴れるのだろう。しかも、やたら目がキラキラしてるし・・・

「ぶつうは、優みたいに躊躇するのが正しいんじゃないよ・・・」

実際のところは、優も躊躇してないように見える。

口がわずかに動いて見えるからたぶん自分に洗脳とも呼べる位に言い聞かせてるの
だろう・・・

「うくん・・・手を出すべきかな?」

たしかに洗脳は一応成功してるしほぼ全部一撃で沈めてるけど・・・」

いくらなんでも、気絶させるといふ作業に集中しすぎだな

まるで振りかえないし剣筋もぶれてきてる・・・。

「当てる範囲が広いと、良くあんな感じに大雑把になるんだよなあ・・・。

俺もちっちゃいころは良く言われたっけ・・・。」

でもまあ、見た感じそんなに離れ過ぎても無いし。

何かあつても優なら対応できるかな？

「うしっ！じゃあ俺は先に行くとするか・・・。

少しでも消耗させといて双覇がかつこよく異変解決するための足掛かりになるとし

ますか！いやあ縁結びの神の縁をさらに結ぶのは一苦労だなっ！」

にやっとなみを浮かべて、力を振り絞りほんの少し

速度を上げて神社に急ぐ。

・・・・・・・〈少年移動中〉・・・・・・・

「ん〜〜!!ここが、双覇んとこの世界の博麗神社か？」

なんか異変の首謀者の本陣だつてのに静かだなあ〜〜〜。」

嵐の前の静けさという奴だろうか？

少なくとも目に見える範囲には、巫女らしき影は見えない。「夢想天生・衝打。」
!?!?

「がはっ!!!!!!
(ずぎあああああああああ!!!!!!)

なんぞ!?何が起こったんだ!?

一撃もろに喰らうなんて、いつ振りだろうか……
いや!今はそれよりも速く敵の位置の特定を……

「何がおこった……ですか。

別になにも不思議なこととはしてませんよ?普通に歩いて客人に近付いたのですから『夢想天生』という技術は使つてはいますけれど……」

ビクツ!?……なんだ?

どこから見てる?いや、それよりも……

「おい!なんで、なにも無い所から声がするんだよつ!!!」

夢想天生? 万物から浮いてるから見えないのか?

いや違う……!

「なにもない? クスっ面白いことをおっしやる客人だこと……」

これは、私の自負ですが……およそこの世界に……

私より存在感が強い生き物は居ないと思いますよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

一瞬、ほんの一瞬だけ俺の観ていた部分から

ザッ！と飛びあがったような音が鳴る。

「くそーどこだよっ！！！！」

がはっ！！（ドゴオオ！！バキッ！！メギキキキイイイ！！！！）

またも、とらえきれず音を頼りに上前方に『夜裂』を振るう。

案の定。。フェイントであり真横からの衝撃にあらがえずに吹き飛び進行方向の森に突っ込み木を背中で何本もへし折る・・・

「どとういとうとだ・・・・・・・・」

存在感・・・と言うかなんだろうここに居るって言うのをすごく感じるんだけど・・・

なぜかそれが消える？」

なんかとんでもない闘気を放ってる奴がいるのは、冷や汗をかきほど鮮明にわかる

でもその闘気がなぜか消える・・・これがあの巫女のいう『夢想天生』か?
思考をなんとか張り巡らせるが、どうやら吹っ飛ばされた時に頭にも木が当たって
いたらしい。だんだん視界が揺れてきた・・・

「ははは・・・一人で意気込んで突撃かけた結果がこれか・・・。

すまん双覇、俺はリタイアだ。後は頼んだ」

誰に届くわけでもない俺の眩きは虚空に吞まれ・・・
そのまま俺は意識を手放した。

・・・〈瞬サイドアウト〉・・・

．．．．〈双覇サイド〉．．．

「はああ!!!」

これで．．．．ラスト！（ドゴオっ!!）」

祥磨と同時に駆け出してから、

さらに、1時間ほどかかりようやく里の妖怪たちを殲滅し終わることが出来た．．．

「あああ!! やつと終わったああ~~~~~!!!!」

これで瞬のやつを追えるぜ．．．おっと．．．」

「どうやら、無理に捻ったのとこれまでの連戦で疲労していたらしい．．．（ぼふっ!）ん？」

「大丈夫ですか？双覇。」

しつかりして下さいよ?これからが本番何ですから……」

開けた視界には、いったいに文が映っていた。

というかなんかもう柔らかい感触がやばいんだけど……

「あ……ああ!ありがとう文!!」

そうだなっ!急がねえとつつつつ!!! (ばつつ!)」

頭とか、鼻とかに血が上らないように。

急いで飛びのいて距離を置く……

「ちよっ!なんで距離置くんですか!!」

良いじゃないですかもうお互い好き合ってるのはわかったんですから!」

飛びのいた俺に文が叫ぶ……

いやいや、俺も別にくつつくのは嫌じゃねえけど……

「まってまって、くつつきすぎるなってっ!!!」

「えっ……（うるうる）」

俺の発言に反応し、なぜか瞳を潤ませる文……

ちよいちよいちよいつつ!!

「うおいつ!! までまで!!」

俺は本気で文のことが好きだつ。今ここで抱き締めろというならそうする。

キ……キスしろというならそうする……」

やばい……勢いでしゃべってたけど。

とんでもないこと口走ってるな俺。もう顔の熱が酷い……

「あややや! 双覇…… // // //」

文も顔を赤く染めて、近づいてくる……

いや……だからっ!!

「ちよつと待ってっ!! 周りを良く見ろ!!!」

人前も人前ここは一応人里のド真ん中だし、このままキスしたら祥磨が暴走するって
!!!!」

人里の人たちは、まだ気絶してるけど

優と祥磨は当然この状況を見ているってわけで・・・

「え・・・ええと。

俺は見てません・・・見てませんし音も聞きませんからその・・・あの。

お二人の愛を確かめてみても良いと思いますよ!!」

なぜか、サムズアップした後・・・

本当に回れ右して耳に手のひらを押し当ててなんか、ブツブツ言ってる。

「いやいやいや。まてまて!!」

優!おまえ何を想像してやがるっ!!!」

俺と文の関係性では、まだ速いつての!!!

ええくと・・・祥磨のほうは・・・

「ん？ああ〜．．．」

別に良いんじゃないか？お前らもう恋人同士なんだろ？

なら俺は別に嫉妬したりしねえよ．．．ただ、さすがにこんなところで最後まですんなよ？」

以外にも冷静。。。じゃ．．．ねえな。

「誰が、んなことするかっ!!!」

こんなところでくだらないこと言っていないでさっさと神社に向かうぞっ!!!!」

まったく、バカなことで騒いでる時間はないってのに．．．

．．．でも、まあ．．．

「文．．．（ぐいつ）」

「へ？きやつ！（ぽふっ）」

少しだけ力を入れて、文の腕を引っ張り文の耳元のほうに

口を寄せる・・・

「これからも、よろしくな。

俺はお前以外を愛する気はないから安心してくれ?・・・それと、

「イチャつくのは異変終わらせて家に帰ってからな？」

イタズラっ子のような笑顔で、それだけ告げて手は握ったまま宙に浮く。

余談だが祥磨や優にばれないように文を抱き寄せたのに文が赤面したせいでなんか悟られたらしく……

「双覇く……がんばれよ……。。。(ニヤニヤ)」

「双覇！がんばってくださいねっ！（キラキラ）」

博麗神社までの道中、一人は徹底的に弄り続け

もう一人にはなぜか妙にキラキラした視線を向けられ続けた……

「一体さっきの分岐点の選択肢は……」

「何が正解だったんだ……」

……〈少年少女移動中〉……

「よしっ!!!着い………た……!?!」

靈夢さんに負けて以来、足を運ぶ回数がだいぶ減ってたからな……

どうなってるんだろう?

そんな軽い調子で、神社に降りた俺は目を疑った……

「あら、また物騒な客人かと思っただのですが

私どもの主『結神』様でしたか、今日は神としての仕事があるとは聞いておりませんが……それとも、神社の安全の抜き打ちチェックでしょうか?」

そこに立っていたのは、この博麗神社の住人博麗の巫女。

今回の異変の首謀者『博麗 靈夢』……ここまでは予想どうりだ……

たしかに、いくら瞬でも勝てないって予想はしてたでも。

「なあ靈夢さん、そのの神様どうして意識を保ってないんだ?」

先に来てた瞬はもう、気絶させられていた．．．
しかも相手をしていたはずの靈夢さんは無傷．．．．．まさかつ！

「靈夢さん．．．．．」

もしかして．．．．．」

本調子じゃないとはいえ、あの瞬が一方的にやられるとしたら
靈夢さんがアレを習得したってことか．．

「ええ．．．主から伝えられた奥義．．．．」

最後の一つ。『夢想天生』時間はかかりましたが最近ようやく形になってきました
．．．．．」

形になつてきた．．．．か

瞬を圧倒できるつてことはもはや極めたようなもんかな．．

「そうかい。なら、俺と戦え靈夢！

今の俺はお前の守るべき主『結神』様じゃないそこに倒れてる『全知神』と同じ
ただの半人半妖の『白雲双覇』で、お前を倒しに来たんだよ・ガツ!!」

「そうですか、なら本気で潰します。

この異変を起こした時に双覇と戦いになることくらい分かってました・・・
私は巫女としての誇りを捨ててもこの異変をなしとげますっ!」

瞬間、靈夢の姿が消えて

あたりが静寂に包まれる・・・

「なるほどな・・・全然気配がつかめねえ。

瞬の奴がボコボコにされるだけはあるな・・・! (ひゅっ!)」

当たる寸前に、気配が感じれるようになる拳を

ぎりぎりで躲す。

「なるほど、一瞬気を抜くと気配を悟られますか・・・
ならそこを治せば良いだけのことっ!」

まだまだ、休む気配の無い……むしろギアを上げていく
感じでどんどん速度が上がる……。

「へえーやっぱすごいな!! 霊夢は!

天才だよ……ま、鬼子母神ほど重くはないし文ほど速くもねえけどな。(ぱしっ!!)」
適度に除け、最後は手で受ける。

ただし、半分変化した状態で……。

「なに……その中途半端な変化体……。

それで強くなったとでも言う気っ!？」

霊夢がどなってくるので、手を解放してやる。

「ああ……強くなってるよ。

なぜかこの状態になるとみんな中途半端って言うけどさ……

この空間じゃ、この形態が一番やりやすい面白いもんだよなっ!!)」

「夢想天生・乱打!!!」

相変わらず気配の感じれない、霊夢の動きをギリギリまで

感知できずに今回ののは数発喰らった……

「おいおい、半分は人間なんだぜ? 巫女さん。ま……即死級の威力じゃないから良いけどなッ!! おらあッ!!!」

振るった拳には、少しの血が付いていて

目の前には苦々しい顔の靈夢さんが立っていた……

「どうして!! どうして、私の姿を追えるのっ!?

駄目……この異変を成し遂げるの……私は絶対につ!!!!」

靈夢の存在感が瞬間的に爆発して、物理的に負荷をかけてきそうな威圧感に代わり……そしてなにも無かったように消える。

「やっぱり……か。

八門遁甲! 第六『景門』……開っ!!!!!!」

さてっ! あの日取れなかった最後の一本取って……

この異変を終わらせるとしようか！

第58話―博麗神社での宴会、陰陽異変ここに終幕!

「靈夢・今回であの日取れなかった一本を取って

この異変を終わらせるっ! 八門遁甲! 第六『景門』……開っ!!!」

靈夢が習得したという『夢想天生』……

俺の予想が正しければ。。。たぶん、これは靈夢の夢想天生とは違う方向性だ。

「っ?! 雰囲気が……変わった?」

第六門……『景門』を開門したからな……

これで、俺はさらに上に行ける!!

「変わったのは雰囲気だけだと思ふなよっ!!

(ひゅっ!!)」

言葉が届いたか、どうかは全く確認せず
風を切つて接近する・・・そして、思いつき殴り飛ばす!!!!

「確かに、速いわね・・・」

でもその程度ならまだまだ対応可能です・・・よっつ!!!」

が、かがんで避けられそのまま足元に足払いが決まり
転倒してしまう・・・

「これで・・・おしまいですっ!!!!!! (ゴオツツ!!!)」

顔に向かつて霊夢の拳が振り下ろされてくる。

まあ、このまま顔をつぶされるわけにはいかなかったので転んだ時の勢いを殺さずに
転がって避ける。

「あつぶねえなっ!!!よっつとー!」

霊夢の拳が振り下ろされた位置に、散らばっていた砂利が真上に吹き飛ばす・・・
嘘・・・だろ?拳の風圧で石を真上に吹き飛ばす??

あんなもん、まともに喰らえねえじゃねえか・・・

「おいおい・・・靈夢。」

10年ごしの決着なんだから、もっと楽しもうぜ!!」
につこりと笑って、拳を握りなおす。

「そんな暇はない・・・」

最大出力で一気に終わらせて私が・・・幻想郷を完成させる!!!

.....

私が・・・この命に代えても!!!」

ん? 幻想郷の完成??

命に代えてもって.....

「なあ、靈夢・・・!!!!!!」

すると。

「ぐっ!!なにが……誰が化け物ですかっ!!」

私は……私は、人間ですっ!次代の博麗の巫女を育てるために……いえ、あの娘には本当の……完成された幻想郷で生きてもらいたいんですっ!!」

靈夢が激昂し、拳を振り下ろしてくる……

でも、まあ。

「それじゃ、俺は本気出せねえぞ!

夢想天生解いてんじゃねえよっ
!!!!!!」

夢想天生を解いている、靈夢の拳は容易に避けられる。

しかも何を考えているのか拳の動きが単調だ……もしかして、今なら。

『絶対中立—ヘイト・キャンセラー』

「なあ……靈夢。お前がそんなんじやお互い全力でやれねえだろ?

なら一回この異変を起こした理由を教えてくださいませんか?」

ちらりと横目で、確認するとちようど良く

全員が集まっていた・・・祥磨に肩を貸してもらっていつの間にか瞬も起きていた。

「そう・・・ですな。」

良い機会ですから、一度ちゃんと話して置くとしましょうか・・・

私がどういう風に育ちどうしてこの異変を起こしたのかを・・・

「私は、人里の中でも目立たない方の

ごく普通の小さな、小さな家の生まれでね・・・」

霊夢さんの過去・・・

俺も良く知らないんだよな。

「その家自体には特に何か問題が、会ったわけではないのだけど・・・

私が生まれてしまった時にきつと何かが狂ったの・・・

私のこの髪はね？生まれつきなのよ・・・

霊力が高すぎるためにどこかに漏れ出し、変化する必要があったの。」

そのあたりのことは軽くだけど、紫に聞いている。

確かそのせいで家の住人に気味悪がられて家の前に捨てられてたところを紫が拾って育てたとか……

「そのせいも、あつて私は周りの人にも忌み嫌われ……」

あまつさえお腹を痛めて産んでくれたはずの母でさえ私を捨てることに……
少しも躊躇しなかった。」

だんだんと、靈夢さんをどす黒いオーラが包み込んでいく……

「私は、妖怪じゃないのに……人間なのに……」

みんなが私を化け物と呼んだ!!!」

紫の髪は、さらに濃くなり……

オーラの影響で紫が黒に見えるほどだ……

「いくら、私人間だと言っても無意味だった!!」

霊力が感じれない人には私は……ただの化け物でしかなかったっ!」

もはや、比喩ではなく怒りによる威圧感で潰されそうになる。

「いつそ身も心も化け物と化して里で暴れられればどんなに、楽だったか!!
でも……それでも、私は人間で居たかつたっ!

それでも、人として人間を愛していたかつた
!!!」

靈夢が、目に涙を浮かべて肩を震わせる……

「そして私……『博麗 靈夢』は人間を愛する巫女でありながら……
妖怪という『化け物』も愛することに決めたのよ。」

なるほどな……俺と似たような境遇だけど。

早々に親を見限った俺なんかより、強いな……

「まだ、10歳にも満たないころに相当酷い経験をしたんだな……同情なら10年前
にしてもらいたかつたわね。『夢想天生・衝打』んがっ!!!」

ちっ!また動きが捕えられなくなった・・・

「10年前?あの勝負の時・・・」

俺はあの時お前に何かしたのか??」

一瞬、困惑してしまい声を荒げて問いかける。

「あの時、あなたは言った・・・私のことを『人間の切り札』と。」

私は『博麗靈夢』!人間の両親に生まれ、妖怪の賢者に育てられた人間と妖怪を繋ぐ博麗の巫女よっ!!『人間の切り札』なんかじゃないっ!」

なるほどな・・・

まじで、人間も妖怪も一緒に一つの『生命』として愛してる彼女としては。。。

『人間の切り札』って二つ名は嫌なものかも知れないな。

「そうか・・・」

それは、悪いことにしたな。」

「今更、謝って貰ってもうれしくないわ!!」

早く本気とかいうのを使ってほこほこにされて、私の目標を……

『人間』を『化け物』に、『化け物』を『人間』に変えることでお互いに理解してもらうという目標の達成に協力してもらおうよ。」

そつか。『妖怪』を『人間』に、『人間』を『妖怪』に変えることで

お互いにわかりあつてほしかつたのか……自分はいくら嫌われても良いから……

たとえ誰の記憶に残らなくても良いから自分と同じ考えを持つ者が増えてほしかつた

『化け物』も『人間』も等しく扱い、愛し差別しない……。

「化け物と呼ばれた巫女が、化け物も人間も、全てのものを、『世界』を。

その愛で包み変革しようとした異変。か」

目標としては、立派だしそれ自体は間違つて無いと思う。

俺やゆかりんもこの世界が好きだと言つても結局は無理と判断して、実現しなかった

事もあった。

「そうよっ！あなたたちがなせなかった

完璧な『幻想郷』を・・・私の力なら作れる！私と同じことを想ってくれ
人が妖怪が協力してくればきつとっ！『夢想天生・乱打』

靈夢の拳が風切り音を、どんどん激しくしながら
勢いを増していく。

「ぐっ！がっ！ほん・・・とにつ!!!

それで良いのか!? 「この状況でおしゃべりする余裕があるのか!

ふざけるならば殺すぞっ!!!」ほんとにそれが・・・

お前の目指したものなのかッ!!」

ここで、本気で戦うだけなら

簡単だ・・・でも！気付いてもらわなきゃこの異変は終われない!!

「靈夢・・・確かにゆかりんや俺の力が足りずに

この理想郷にも救ってもらえない者たちが居るんだと思う。。。

それらの者達を救えるのなら、それ以上に良いことはないだろう・・・」

「だったら!!」「でもっ!」っ!!」

「お前のやってることは本当に、お前と同じような優しい人間を

生むことに繋がるのか?ならここからでも聞こえてくるこの叫びは何だ?

この叫び声をあげてる人たち、妖怪たちは・・・よけいにお互いを恨み合うだけだろ!!」

「お前の能力は、強力なものだよ・・・」

でもだからこそ使い方はちゃんと考えなきゃいけないんだよ!!!

今のこの世界は、俺やゆかりんが夢見た『ニセ物』の『未完成の理想郷』でも

靈夢が望んだ『誰もが協力しあえる』、『完成された理想郷』でも無い・・・

一人の人間のエゴが生んだ『阿鼻叫喚の地獄』のような『崩壊した理想郷』だっ！」

俺は出来る限りの怒りを込めた、声で叫ぶ。

本気で怒れなかったのは自分が原因でもあるからだ・・・
ゆかりんや俺がなせなかった本物の理想郷を創ろうとしたのだから・・・。

「そん・・・な・・・」

それじゃ、私は何のためにこの力を。何のためにここまで努力してきたの・・・

「ガアアアつつつ!!!」

靈夢の拳が俺に迫る。。。

まあ今回ははつきり見えるけど……

「でも、だから……これだけは言わせてもらいます。

靈夢さんは化け物なんかじゃありませんっ! この世界を愛してくれる大切な……

この世界に居なきやいけない人です。

だから、言わなきやいけない……

貴女は間違ってる!!! この異変は俺が貴女を倒して止めますっ!

八門遁甲……第七『驚門』……開!!!」

これで、終わりだ……

靈夢さんはたしかに天才で最強の巫女だろう……神にすら届きうる力を持つてる

でも、俺には勝てねえ!!!

「一歩で崩し……(どぞ)おんっ

!!!!!!!」

半妖の力で思い切り大地を踏みしめ、地割れを引き起こす……

「ん!? ……」

この技は………マズイっ!! 「遅いっ!!!」 なっ!

突然の、地割れで隆起した地面に足を取られ!!!

前のめりに重心が崩れる靈夢。いつもの調子なら冷静に手をつけて跳んで回避しただろうけど、七門を開門した俺の速度はその辺の鴉天狗よりも速いしさつきまでの靈夢はお世辞にも冷静とは言えねえしな。

「二歩で打ち………三歩で必殺!!!」

二歩目の踏み込みと同時に、ちょうどにちらに向かって倒れこんでくる
靈夢に渾身のボディブローを叩き込む
!!!!!!

事はしなかつた。
なぜかって
??????
それは・
・
・

「おい文一。

悪いけど、靈夢さんを神社の中に運びこんでくれ〜！」

当てる前に、とつくに限界を超えていた

靈夢さんの体が強制シャットアウト。つまり『氣絶』したからだ・・・

・その後、氣絶した靈夢さんを文が運んで介抱し目を覚ました靈夢さんが降参したため今回の異変は無事に解決!!!

ということに、なった。

靈夢さんが氣絶した時点で結界に及んでいた『陰と陽を操る程度の能力』の効果も綺麗さっぱり無くなっており『幻想郷』はいつもの日常に帰って行った・・・

・・・〈異変解決後・夜〉・・・

「はあ!!!」

まだまだああつつつ!!!!!!
!!!!!!
「どどん来いやあああ!!!」

異変解決後の夜、昼間に一度自分たちの能力が

使える事を確認した俺たちは一度天狗の里に帰り休息を取った。

俺と文の家は、もともとそれなりに大きな文の家をさらに増築したので

祥磨と優、瞬の分の寝室を用意しても部屋は余ってた。

「そして、現在は・・・」

もう一度博麗神社に戻って異変解決メンバー全員で宴会中だ。」

もつとも、どっから湧いて出たのか

鬼やら、天狗やらその他大勢の魍魎も集結していたが。。。

「いや～～・・・」

良い食べっぷりに飲みっぷりですね・・・

ところで主。私もこの神社も今大変資金難でこれ以上続けられるとまずいのですが

。。。 (かちやかちやつ)

おとなりの巫女さんは、

どういいうわけかももう泣きだしそうな顔で料理(俺と祥磨作)を運んでいた。

「はあ……」

しようがないだろ？ ゆかりんの思いつきで異変解決後は起こした側が料理やお酒を提供して宴会を開くつ！ て決まったんだから……

大体、本来なら運ぶのもお前一人の仕事なのに

重い体に鞭打って手伝ってんだから我慢しろ……。 (かちやかちや)」

八門遁甲の驚門開門後の反動は、悪い意味で

予想どおり……。 とんでもない疲労感どころか杜門く驚門までを休み無く

開いた影響はすさまじく三步必殺を打った直後にはもう気を失うほどの激痛が襲ってきた。

「なんだ、かんだで目覚めるのが

ついさつきだったんだから……。 しかも、

起きた直後に優のやつに『白雲流』の指南を頼まれたしな……」

まあ、俺が教えるって約束したんだからちゃんと教えたつもりだけど……

妖忌に教えられたとうりに教えただけだからな。。。

「一応型は完璧にマスターしてたし、後はあいつ次第だろう。。。

無理に俺の剣術を詰め込んでもあれだしな。。。そういえば。。。」

どういうわけか、あいつ（優）とは

契約しても俺の霊力が譲渡されてる感じは無かったな。。。

こつちには『縛鎖を出現させる程度の能力』つてのが増えたのに。。。

「優には、稽古をつけていたのでそれでキャラで良いとは

言われたけど。。。あんまり稽古らしい稽古もつけてないような。。。」

そんなことを考えながらふと、宴会の中心を見てみると。。。

消化不良だったのか祥磨、優が近接訓練。鬼に喧嘩を売られたらしい瞬が

手あたり次第に、買っていた。。。ふっ

「なに、たのしそうなことしてんだよ!!!
!!!

俺も混ぜろつつつ!!!!!!
「

俺も我慢できなくなり、次の瞬間には料理をその場に置いて
駆け出していた・・・せつかくの宴だ!! 楽しみにや損損!!!!!!

・・・〈双覇サイドアウト〉・・・

・・・〈靈夢サイド〉・・・

「え・・・ちよつと!!!!!!

なによ・・・結局全部私がやることになるんじゃない・・・」

ほんつとうにあの神様は、適当なんだから・・・

いつも神社には居ないし。修業も結局10年前の一回だけだったし・・・

本気で殺しにかかった私にも笑顔で接するし、狂いそうになった私を死ぬ気で止めて

くれるし………

いざつてときには、いつも守ってくれるし……」
口にだしたとたんに頬の熱がぐんぐん上昇し、体温も上がってきた……

まただ・・あの人のことを考えるといつもこうだ。

「もう・・・・」

分かってるんですね。10年前のあの時よりも前に私はあなたに会つてると言うのに・・・・」

思えば、そのころから憧れていた・・・・

あれはたしか4つか5つの時。

「あの日、私は行くあても無く里をぶらついていました・・・・」

自分は化け物なのだ、人として生きる事を諦め存在価値が分からなくなり・・・・

紫とあなたに出会った。」

紫には、巫女になれと言われ・・・・人間に戻る気にもなれず

かと言って完全に人間を諦める気にもなれず・・・・

「そんなときにあなたに出会い、あなたに背中を押された・・・・

『俺からしたら、よっぽどまともな人間だけだな・・・・』

俺や俺の友達のほうが化け物だぜ？まだまだ可愛い女の子なんだから自分を大事にしろよ?』その言葉がどれだけ救いになったか・・・」

双覇のほうを見ると、どうやら私のところに来た四人で弾幕ごっこをしてるらしい・・・

「ふふっ。なんででしょうね？」

あなたの周りにはいつも笑顔があふれてる・・・だから私も好きになったんでしょようね。あなたの周りの空気が・・・いえ、貴方自身が。」

最初は純粹に憧れだったのに。。

いつのまに変わってしまったのでしょよう・・・

「でも、あなたのその笑顔はきつと私以上に向けたい女(ひと)がいるのでしょよう・・・」

瞳にうつるのは、双覇によりそう一人の鴉天狗。

たしか・ ・ ・ 射命丸 文さん。

「それでも、私は貴方が・ ・ ・ 人間が・ ・ ・ 妖怪が・ ・ ・
貴方の創ったこの幻想郷が。大好きですっ!!」

その時、私は久しぶりに笑った・ ・ ・

10年前・ ・ ・ 双覇にたいする想いの変わったあの時からずいぶん長い間仏頂面を
続けていた私の顔は大輪の花を咲かせた。。。

・ ・ ・ ・ ・ 〈靈夢サイドアウト〉・ ・ ・ ・ ・

こうして、博麗の巫女により引き起こされた今までも・ ・ ・ ・ ・ そして恐らく

これからも起こらないであろう幻想郷史上最大の事件

妖怪と人間の共存を望んだ一人の女の子が起こした異変

『陰陽異変』は大宴会で幕を下ろした。

これにより、博麗の結神 白雲双覇

の名は幻想郷の歴史に刻まれることになるのだがそれはまた今度・・・

そして、この後白雲双覇は・・・

今回以上の大事件に別世界で巻き込まれることになるのだが・・・

その話は時空を超えて確かめてねっ!

番外話―知識と鎖の幻想郷編陰陽異変まとめ

はあ・・・はあ・・・

いきなりひどい目にあつたな。

氷「えへへ・・・すまぬすまぬ」

まつたく・・・可愛いから許す！

さて、それじゃあ早速陰陽異変で活躍したキャラ達の説明に移ろうかつ！

はいっ！それじゃ一人目は・・・

〈白井 瞬〉しらいしゆん・・・種族 神（全知神）

二つ名 ラプラスの悪魔 全知を有する博麗の神

能力・・・知識を司る程度の能力

双覇とは違う世界の転生者兼博麗神社が祀る神様！

能力『知識を司る程度の能力』は強力で敵になってしまおうとほぼ誰もが手がつけられない・・・また派生にも富んでおり現在は、

『検索』、『情報付与』、『概念付与』、『形状変化』、『指令』、『憑依』、

『能力創作』、『概念消去』(ラプラスの悪魔起動時のみ)等がある。

氷「ほえろ。すごい数の用途に別れておるんじやの・・・

ご主人様と戦ったたらどちらがすごいのかのく〜!」

前に一度、戦ったことがあるけどその時は途中でうやむやになったんだよね〜

それにあの時の双覇じゃたぶん勝てなかっただろうね・・・

氷「なんと。そこまで強い神様と共闘しておったのじやな・・・」

うん。なんだかんだで瞬はいつも助けてくれてるねえ・・・

でも・・・次に会った時は全力戦闘させてみたいもんだねく〜。

勝てるかどうかはわからないけど・・・こつちも苦心して生み出したキャラだから
ね・・・

次は、絶対に勝つよ。

さて瞬の能力は派生も多いし軽くどんなことができるかまとめてみようか。

『検索』——自分に欲しい知識を瞬時に導き出せる（ぶっちゃけネット検索）
 『情報付与』——自分の持つ様々な知識を、別の誰かに送る（与える）。

『概念付与』——自分の持ち物や自身に、なんらかの概念を付与する能力（例 粉碎——クラッシュ）また単純な力や斬れ味などを付与する際には良く『Level』を用いて、
 段階分けをしている。

『形状変化』——概念付与の派生系で、自分の知識の中にある形状に

物の形を変化させることができる。例 刀↓槍

『指令』——同じく概念付与の派生系で、物に対し言葉で指令する。

その言葉を概念として付与し物に指令どうりの働きをさせることができる。

『憑依』——今まで、遭遇した誰か（生物）を概念として扱い自身に憑依させる。

消費神力の燃費が悪いのでめったに使わない。

『能力創作』——瞬が最近になって使えるようになった新しい派生技。

神力の燃費が悪いのと集中する必要があり使用の際には少しの間休み、無防備になる

『概念消去』——瞬の中の封印が解け、現れた最強の力『ラプラスの悪魔』起動時に

使える『知識を司る程度の能力』の最終派生技。

ラプラスの悪魔の力を使い、触れた物（者）全ての概念を消去し完全に消しさる。

消せないものは今のところ大きさ（範囲）も含め存在しない。

氷「こうして、まとめてみるとすごいのお。。。。」

よくもまあこれだけの数の強大な力を使いこなしながら自我を保てるものじゃ。」

そうだね。特にラプラスの悪魔は『超越的存在』と呼ばれその知能をもつてすれば、完璧な未来予測もできるんだってさ。。。。ところで氷柱も相当強い力を持つてるよね？

氷「うむ、私の能力は『視認（体感）したものを凍てつかせ、焼き払う程度の能力』じゃからな。実際にご主人様にこの体を貫いうけ契約を交わしていただくまでは私
も

狂っておったからな・・・」

そういえば、そうだったね。

そっか今は双覇と力を共有してるから正気なんだね。

氷「うむ！ご主人様がいなければ

私はいまだにご主人様の体で暴れていたじゃろう。。。。」

そっか（ニコっ）。さて二人目の紹介は・・・

〈銀野 優〉ぎんのゆう・・・種族 人間

二つ名 銀の剣士 勇気ある外来人

能力・・・鎖を操る程度の能力 『白牙』には全てを断つ程度の能力 『黒爪』には全てを斬る程度の能力

瞬とともに、紫の手によってこの世界に連れてこられた

別の世界の人物で能力を持っていながらどういいうわけか使いこなせるだけの量の『靈力』が無い。

氷「ご主人様が言うには、封印されてるようだと言っていて

あの後私の能力も試してみたのじゃがどういいうわけか焼き払うことが出来なかったのじゃ・・・」

うん。生きている人間だから生きれるだけの靈力はあると思うんだけど・

それすら感じれないってことは相当特殊な封印術で封印されてるんだろうね。

能力の『鎖を操る程度の能力』は鎖を出現させて、使えるほか鎖の概念も操れる。

武器の『白牙』と『黒爪』に付与されている

『全てを断つ程度の能力』と『全てを斬る程度の能力』は、

二本の能力を解放すればその名のとうり、どんなものでも断ち斬る事が出来る

ただしこの二本の能力を解放している間優本人の能力である『鎖を操る程度の能力』は使えなくなる。

氷「そういえばこの童とも、ご主人様は契約しておったの。」

ああ、そうだね。

契約の内容は……

1、双覇は優に対し、剣術の指南をする。

2、双覇は優の封印に関し許可無く手を出してはならない・

3、優との出会い。この異変を忘れてはならない。

だよ……

優に許可を取って氷柱の能力を試してみたらしいけど無理だったんだね。

よしっ！それじゃどんどん行くよ。

3人目っ!!

〈博麗 靈夢〉はくれいれいむ……種族 人間（半変化体）

二つ名 人妖を愛する幻想の人 博麗の巫女の努力の形

能力……『陰と陽を操る程度の能力』

陰と陽を操るとはこの世の正反対の概念、事象を操ることが出来る能力。

境界を操る紫の能力に近いがその気になればそれ以上の力も引き出せる・・・

水「ご主人様が苦しめられた、今回の異変の首謀者じやな。」

そう、今回の異変で能力によって引き起こしたのは合計3つかな。

1つ目は『有』と『無』の反転。これによって能力を持つ双覇やほかの妖怪、人間達の能力が消えて代わりに能力を持たない普通の人間達に能力が開花したりしたね。

2つ目は『人』と『妖』の反転。今回の異変の肝と言っても良いところだね

靈夢さんは妖怪も人間も一緒に存在している『幻想郷』を愛するが故に、『人』と

『妖怪』が助け合える自分の中の完璧な『幻想郷』を創るために、

妖怪は人を喰らい、人は妖怪を恐れるという自然の摂理を

それぞれの種族を反転させてお互いにお互いの気持ちを知ってもらうことで、壊そうとしたんだよ。

水「たしかに、それが実現すればより一層理想的な郷になるじやろうが・・・」

うん。人は妖怪を恐れ、妖怪は人を喰らう。

人喰いじゃないにしろ妖怪は人肉以外にも人の『恐れ』、『怯え』を栄養とするものもいるからね。

水「人が妖怪を恐れなくなれば、共存という目的が果たされる一方

妖怪たちは恐れも人肉も喰らえず死に絶えてしまうの。」

そうなると、『ニセ物』の『理想郷』も崩壊する。

となればこんどこそ本当におしまいだ。

氷「靈夢という巫女は、叶わぬ願いを持ち続けておったのじやな」

そうだね。。。

でも、きつといつか報われる時が来るよ・・・生き物の想いを繋ぐ『結神』があそこにはいるんだから。

3つ目は『愛』と『憎』の反転。

愛しいものは憎くなり、憎いものは愛しくなる。。。

氷「なかなか、こちらもキツイものじゃなく。」

そうだね。。。

これも妖怪と人間の間の溝を埋めようとした結果何だろうけど・・・

それ以上に、願望が強いかもね？

氷「願望とな？」

うん。彼女は博麗の巫女として里の人間たちに頼られる一方心の内では恐れられて

いた・・・それに妖怪からすれば天敵だからね・・・

氷「なるほどの。一時だけでも自分を心から好いてくれる者が欲しかった。。と」

そのとうりだね・・・

本当に数奇な運命をたどってる人だね・・・

年齢は20代だけどもまだに幼さの残る高校生くらいの顔だしね・・・

氷「さて、それでは最後に靈夢の切り札

『博麗の秘術』についてじゃー！」

博麗の秘術ってのは、双覇が説明したとうり

博麗の宝である『陰陽玉』を使つての技群のことなんだけど中でも『奥義』と呼ばれるものは博麗の神である双覇が直接作ったものなんだ。

氷「今日説明するのは『夢想封印』と『夢想天生』じゃな！」

おk！

最初は夢想封印だね。

『夢想封印』は、相手の周りにお札を投げつけ針で固定。

その後地面に手付き霊力を流すことでお札を媒体として相手を地面に結び付け固定し封印する技だね。

氷「なんか、説明だけ見てると簡単そうに思えるの・・・」
 なにを言います氷柱さん。

双覇のやつは簡単にやってのけますが普通は能力でも無い限り霊力で敵を縛るのはむずいのですよ。

氷「ふむ。。歴代の巫女達もこの奥義を習得するのにすら

半生をつぎ込んだもの・・・」

つまりはそれだけ、習得困難なんですよ。

まあ靈夢さんはそれまでの巫女が苦勞していた地面に流す靈力量を

一年から二年で完璧に調節したそうですが・・・

氷「ほえく・・・まさに天才というやつじゃの・・・」

次は夢想天生か。ご主人様が言うにはご主人様もふざけて作った技ということじゃったが？」

うん、靈夢さんは習得しちやっただよねく

これが・・・まあ技術はほぼ関係ないから技と言っていいのかもわからないもの何だ
 けど。

『夢想天生』はそもそも技と言っていいのかも怪しい。

理由は・・・努力や修練でだれにでも使えるわけじやなく完全に才能で習得できるか
が、分かれるからだ。

そのため発動時の能力も発動者によつて違い、靈夢の場合は・・・

『存在感の超増加』。

氷「ふにゆ？どうゆうことなのじゃ??確か姿が消える技・・・

では無かったか？」

まあ、そうだけどね・・・

相手の気配や動きが察知できない時っているんな種類が有るんだよ。

単純に動きが速すぎたり、気配を完全に消すことができたり（存在感を薄める）、次元を飛び越えたり、次元の狭間に潜んだり。

氷「ふむふむ。。。」

ただ、その逆。

速度で『分散』させるのでも次元を捻じ曲げて『消す』のでも無く

あえて自分はここにいるっていうのを強くすることで見えなくなるんだ。

氷「どうということじゃ？」

生き物は生存本能で、自分より格上の相手に近づかないように作られてるんだ。

そんでその格上の判断材料の一番最初は『存在感』、『オーラ』だ。

霊夢さんは、あえてそれを強くすることでほんとは

どこにいるか見えてるしわかるはずなのに『そんな格上のやつに近づきたくない』つていう本能に作用して相手の視界から消えたんだ。

神様と腐女子が出会ったら、修羅場フラグが立ちました
!?

第59話—平和な郷。。 舞い降りるは早な えっ!?

ここは、幻想郷……

日本という国のさらに一部を使って創られたこの土地は『博麗大結界』
という結界に遮られまた、守られている。

大結界の外。通称『外の世界』ではすでに神や妖怪、妖精等の類は

一部の者しか信じておらずそれらの存在は次第に外の世界には居られなくなった。
それによりこの幻想郷は『全てを受け入れる理想郷』と言われている。

「はっ！はあっ!!!……」

幻想郷のほぼ中心部……

ここに一つの神社が建っている……名前を『博麗神社』

この世界の命運を賭けるほどの大事件。『陰陽異変』の面影はすでに消え去り

平穩を取戻した……その境内に見える人影が4つ。いや、正確には人影ではないものもあるが……

「ハアアアアア……」

『白雲流』龍焰躍る虹の架け橋。(キインツツ!)」

一つ目の影は、白雲双覇。。。

彼は人間ではない……失敬。正しくは元人間ではあるが今は人間ではない。

彼の種族は半人半妖。人間の部分を半分残してはいるがれつきとした妖怪だ……
そして、

「主様くくく！その剣術は結界を張ってから練習してくださいと何度も……」

今、駆けてきたのはこの博麗神社の家主。(守り人と言ってもいいかもしれないが)

『博麗の巫女』という妖怪退治の専門家であり博麗大結界の守護をする者。

博麗 靈夢だ。彼女は霊力を持ち過ぎたが故に髪の毛が紫色になってしまっている
が

人間である。

「ん？ああ靈夢さん境内の掃除ご苦労様っ！

「仕事ひと段落ついたんなら、一緒に里に行ってみない??」

「いえ、主さま……」

私は剣術に関して注意をしに來ただけで……」

半ば呆れ気味に、靈夢は神の前でため息をついた・・

それもそのはず。このやり取りすでに何10回も何100回もしてきたものだからだ。。。

先ほどから、双覇が呼ばれている呼び名主（しゅ）……

それもそのはず双覇は半人半妖の身でありながら博麗神社に祀られし結神という神様でもあるのだ……

「そうですよっ!双覇……」

あの異変いらい全然休ませてもらえなかった分今日はたっぷりデートするって約束したじゃないですかっ!!」

3人目の人影の正体 射命丸 文は叫ぶ。

実際は彼女も人間ではなく鴉天狗という古来から生き続ける妖怪の実力者だ。

双覇の恋人でもある。。。

「そうだよっ！今まで私を無下に扱ってきた分たつぷり

楽しませてもらうよっ!!!」

4人目の人影の正体 夜神 さつき

彼女は双覇が転生するまえからの知り合いで幼馴染。幼いころ双覇の孤児院での生活のさなか家に招き入れ、家族として扱った少女。

射命丸 文にうりふたつな外見をしており

双覇と祥磨という幼馴染コンビでも無い限り一目で見抜くのは不可能。。。

双覇に恋心を抱いており文に対しはちよつと冷ややかな態度を取ることもある。

「そんなこと言ってもなく・・・」

今日は修業の後に里で甘味を食べに行くって予定だろ？

ならみんなで食べたほうがうまいだろっ！☆」

双覇の言葉に二人は、むすつとしたが

当の本人はまるで気付いていない・・・・・・

「せ・・・せっかくのお誘いですがすみません主様。

私は人間です。いつ何が起こるかわかりませんし次代の博麗の巫女のためにも今の技より上を目指さなければなりませんので・・・」

後ろの二人の冷たいオーラに若干ビビリつつ、

靈夢が断りを入れようとすると・・・

「大丈夫だよ靈夢さん。

俺は貴女に何かあるなんてありえないって信じてるし、それに。。。」

「？」

ぼかんとしている靈夢に双覇はくりだした・・・

「俺は最初から、女の子に守られようなんて思って無いよ。(にこっ)

それじゃ男として情けなさすぎるからな・・。むしろ靈夢さんも少し気を抜いた
ほうが良いんじゃないか？抱え込みすぎるのは体に毒だぜ。(ぼんぼんっ)」

許容量を振り切っている台詞、さらに『にこっ』と微笑んだ表情、さらに頭をなでる
というまだ、外見年齢20歳の少女博麗 靈夢にとっては殺人ともとれるコンボを

「風邪でも引いたのか靈夢さん……。」

そして、縁結びの神のくせにとんでもない鈍感な神様である……
後ろの二人がそろって舌打ちをしたのにも、もちろん気付いていない……。

「え……い……いえっ!!そういうわけではありませんから!!!
分かりましたもうちよつと境内の掃除をしてから行きますっ!」

それだけ、言っつてそそくさと立ち去っていった……

「おくじやあ後でな~~~~~!!!!

さて、じゃあ俺達も修業の続きするかつ!!」

「そうですね。私たちは修業にも付き合うのに

お団子貰うだけなんですもんね。双霸さんの愛というのも薄いものですね」
急に、冷たい口調でしゃべりだす射命丸……

「そうだよね。双覇は昔からの友達を無下にしすぎだと

思うなっ。私だって・・・」

なにか口をもごもごさせているさつき・・・

「え・・・・・・・・ええと・・・。

ふう・・・文。(ぎゅっ)言ったる？俺は誰よりも君が好きだよ・・・。

もうすこし休みあるんだからまた今度な？」

そうして、文が満足そうに頷いたのを確認してから

距離をとり今度はさつきに向きなおる・・・・・・・・・・

「さつきも、ごめんな？」

迷惑掛けてきたのにこんなことでしか返せなくて・・・

俺に出来るのはこれくらいしかないんだ、ほんとにごめんな。(なでなで)」

そうして、さつきと文の機嫌が直ったのち修業再開。

『上下一対の黒い服』、『早苗に似て特徴的な緑色の髪を一本結び』、『かと思えば頭には黒のリボンが巻かれた白い大きな魔女っ娘帽子』……

総合的に考えて・ ・ ・

「うん。君は一体誰で要件はなんだい? (にっこり)」

結局、考えてもその特徴に当てはまりそうな知り合い+原作キャラは

思いつけなかった、俺が知らないだけで原作キャラとして居るのかもしれないし

魔女帽子つてことは祥磨がイギリスで知り合った人かもしれないが俺は知らないし、初対面のはずだから誰だ?と聞いても問題は無い……

はずだ。

「ああこれは失礼しましたっ!!」

ハローツ☆ハワユ☆ はじめましてっ!私、上白沢 古河音(かみしらすわこがね)と申しますですっ!以後お見知りおきをばっ!!」

少女が名乗った時向こうから靈夢さんが駆けてくるのが見えた・・・
その瞬間に悟った・・・

また、別世界からのお客だと・・・。

といつても今回の場合は紫の召集が、原因ではない。

俺が正式に博麗神社の神となった日からどうやらこの神社つうか社（やしろ）は俺に対しての願いを持つ者がどこかの世界で博麗神社に祈ると

自動的にこちらの世界に連れてくるといふ機能がついてしまったらしいのだ・・・
靈夢さんが言うにはそういう風に連れてこられた人物は目を離れた瞬間突然に、賽銭箱の前に現れるらしい・・・

「まあ・・・なんだ。

神様のお仕事やりましようか・・・とりあえず要件を聞きましょうか・・・」

後ろから、ブーイングが分かりやすく強烈に耳に

届いたがこうして突然にこちらの世界に現れた依頼者をほつとくわけにもいかない

・・・もともと仕事の日でここ（神社）に居るのだし・・・

こうして突然現れた少女、上白沢古河音の願いを聞き届けるといふひとつの小さな小さな事件が幕を開ける事となった・・・

第60話—さてさてさくで、お仕事をしますかね。

「えくと……」

とりあえず俺に用があるってことは仕事（縁結び）の依頼ってことでいいのかわ？
要件はなんだ？それと慧音とはどういう関係なんだ。」

彼女の外見には、全く心当たりがないが先ほど名乗った名字には酷く
覚えがある……つい最近も強烈に頭に刻まれた名前だ『上白沢』東方プロジェクト
でも数少ない『半人半妖』という特殊な種族の女性

『上白沢 慧音』さんだ。

もちろんこちらの世界の慧音さんに姉妹が居たという話も、結婚して
娘ができたという話も身に覚えが無い。。。

「ああ。慧音……（ふるふるっ！）」

お姉ちゃんはお姉ちゃんですよ。私少し前まで記憶喪失でして……

それと先ほどはすみませんでしたっ！特訓のお邪魔でしたよね。本当にごめんなさ

い

!!でも結神さまへの敬意を表すためなので（うるうる）．．．

さてっ！こんなに、健気な少女が土下座までして頼んでるのでから

お願い聞いてくれますよねっ☆」

慧音との関係性は理解できた．．．

先ほどの奇行（妙技）をした理由もなんとなく理解した．．．

そもそもとして、自分を訪ねて世界まで超えた客人を突き放す気など神として毛頭

無かったが．．指をからませ両手を組んで顔の横に添えて目に☆を浮かばせている

少女を見て、無性に願いを叶える気が失せてきた。

ついでに願いを聞く気も失せてきた。

まあでも、仕事は仕事だだけ嫌な人からの願いでも聞かなければならない．．．

できることなら絡みたくない相手でも積極的に絡まなければならぬ

双覇の仕事はそういうものだ。

「わあ〜ったよ。どつかの外来人．．．

さて願いを言え．．．」

テキトーにやり過ぎて、某7つの球の龍神さまみたいになつたが・・・
まあ良いだろう・・・

「……………実は今、私の住んでる人里では酒蔵の息子、小次郎さんと言う方が
います。とても真面目な好青年です。

(なるほど、その人に恋してしまつたから接点が欲しいって願ひかな?)

よくあるんだよなあ・・・やっぱり女性つてそういうタイプが好きなんだろうか)
それともう一人現役バリバリの大工の若頭。

ちよつとおちやらけてるけど面倒見の良い平八さんという方・・・

(あれ?二人?)

ああ、二人がなんかの拍子に喧嘩しちまつて迷惑してるから関係を修復してつ!
てかんじかな?これもよく有るんだよなあ・・・)

ぜひっ！この二人の縁を結びつけ性別という垣根を飛び越え、

お互いがお互いを求め合う愛欲に溺れる関係にして頂けないでしょうか!!？」

「頂けねえよっ。」

少しでも、まともな思考をしていると考えた俺がバカだったらしい・・・

どこの世界でも転生者や外来人は良い意味でも悪い意味でも頭のネジがぶっ飛んでやがった・・・

「なんですとおっ!!なんですすかっ!？」

困ったことはなんでも解決・結神様でしようっつ!!?」

「俺が何時!何処で!

そんなどこぞの甘党万事屋(よろづや)みてえな宣伝をしたんだよっ!?

ていうかその二人。どこをどう聞いても名前から男だろ!!!ケンカを止めろっ!

とか……

精々、度が過ぎてもその二人どちらとも私に振り向かせたいみたいな願いだと思った
ら……愛欲ってなんだよっ!!」

「ヤダそんな……。セクハラですよ結神様?

愛欲っていうのは……//。気持ちだけでは抑えられない感情の波を

互いの体に求m……「みなまで言うなっつ!」ふう〜。」

セクハラだと言つといてノリノリで説明するんじやねえよ……

てか、こいつさっきの手の組み方といい瞳の潤ませ方といい、今の思考回路といい・

完っつっつっつ全に!!!

(オタクだ……俺はあんまり興味無いけど、

全く知らないってことは無い……たぶんさつきも察しがついてるだろう。)

こいつ、完全に腐女子だ……

とりあえず。なんとかもうちよいマシな願いをひきださねえと・

「性別の壁がなんだって言うんですかっ！男同士が恋愛したって良いじゃないですか

大体ねえ！やれ『ホイホイチャーハン』だとか『ヤラナイか』だとかみんな男同士の恋愛をネタにしすぎなんですよ!!女同士の恋愛なら手放して喜ぶくせにつ！

(ああ……言葉を挟む暇がねえ……)

頼むからここには女子が二人いる事を考えてくれ腐女子よ！それにネタになつてるのは男同士の恋愛だけじゃ……だけ……かも。

いや、なにも手放して喜ぶわけじゃ……喜……ぶかも。)

私はそんな、笑いを起こすようなのが見たいんじゃないんですよっ!!!

もつとセンチメンタルにつ!!性別の壁に悩みながらも心から溢れるその想いに真剣に悩む甘酸っぱい姿を物陰から阿求ちゃんもニヤニヤして楽しみたいんですよっ!なんのためにわざわざお賽銭まで払ったと思ってるんですかッ!

俺に二の句が告げさせず、少女は吠える吠える。。。

いや、最後のほう完全に俺のせいじゃねえだろうが・・・

それとどんな神がいるか分からなくても博麗神社まで行ける力があるのならそちらの世界の巫女さんのためにお賽銭入れてあげてください・・・

「・・・オーケーお前がその趣味に関してどれだけ強いこだわりを持つてるか

は良くく分かった。いや、正直分かりたくは無いがわかった。

ただな。俺の能力つまり神としての力でどうこうできるのは『縁』つまりは繋がらないんだ・・・。

だれかに想いを伝えたい!でも縁が無くてタイミングが無い。

誰かと喧嘩をしてしまった仲直りがしたいっ!けど、どう気持ちを切り出せば良いのかわからない。。。

外の世界でたとえ話をするなら好きな人と隣りの席に座りたい!

けどいつも縁が無くてはなれて座っちゃう・・・

俺はそういう人たちの願いを聞いて、人間関係を修復したり想いを伝えるまでの下準備を整えることができる。わかるか？

そもそも、縁っていうのはその人が少なからず相手に対して何かをしたっていう下地が居るんだ結局最後は自分自身で結び・強固にしないと繋がりは解けちゃうからな。人の心自体をどうこうする力は無いんだよ。」

なるべく、相手が話した趣味思考は否定しないように・・・
たくさんの言葉を使って慎重に説明すると。

「わかりました・・・ちなみに今のところ接点の無い二人を

お友達にすることは？」

できるのか？ということだろうか・・・

うん。まあ、

「そのくらいなら、できるかな。」

ただし相性やら何やらでいろいろと変わるから・・・お前の思いどうりに行く可能性

はずいぶんと低くなるけどな」

「じゃあ、それでお願ひします。」

力説していた割にずいぶんとあつさりとした折衷案だった・・・
まあ良く分からない男同士の恋愛の成就なんてものからしたらだいたいぶ楽になるので
異論はもちろん無いが。さてそれじゃさつさと叶えるか・・・

「・・・ていうかアレ？文さんじゃないですかあ!!」

どうしたんです？こんなところで・・・あつ突如現れた博麗神社の結神様の取材
ですか???さつすが！ぬかりないんだからあく!!」

少女が、さつきに向かって文と呼びかけ、肘で脇腹のあたりをつついていてる。

このこのおく、というやつだろうか。ネタがいちいちオタク臭い・・・というか
まさか。

「ちよつと・・・なんなんですかあなたは!？」

突然現れて双覇にべたべたする挙句、変なお願ひまでしてっ!!!」

「そうだよっ！別に人の趣味をとやかく言うつもりはないけど・・・／＼／＼」
それに双覇を巻き込まないでよっ！」

二人が叫び、少女は二人から距離を置く。

「どうやらさつきが文ではないことに気付いたらしいまあ・・・一回カメラの有無を確認してたけど・・・そしてそのまま考え込む。」

しばらく経って。

「あのお～～・・・」

もしかしてここって、別の世界だったりします??」

もう一度視線を俺の方に戻し、少女が問う・・・

はあ～～～～。

「やっぱり気付いて無かったのか・・・」

そして、俺の言葉を正しく理解したらしく慌てふためく

「え。ちよつとコレどうするんですかつ!!」

「私このまま帰れないなんてこと無いですよねえ!?!」

「大丈夫だ。どこぞの神隠しとは違う・・・」

こっちの神社に誘われてしまったやつは俺が願いをかなえる事で元の世界に戻れる」

正直、慌ててる感じが初めてこの娘に対して可愛いと感じたので

そのままにしようとしても良かったが女の子の不安はいち早く取り除かなければならな
い

ってラブコメの主人公が言ってたからな・・・

帰れると聞いて目に見えて安心したらしい少女は、

なにやら周囲を見回している・・・なんだろう？なんかの気配でも感じたかな??
とりあえず危険な妖怪とかを警戒しておく。

すると・・・

「……………ラブの匂いがする。」

突然ボソツとなんか呟いた・・・

「え？なんか行った？」

古河音ちゃん………」

聞き取れはしなかったが。確実に何かつぶやいたのは分かった……
文達にも聞こえてないみたいだしまたロクでもないことだったら困る……

「いいえっ☆なんにも！」

それよりも『双覇』。私のことは古河音と呼び捨てにしてください！

それと、さっきのお願いキャンセルで。」

え。キャンセルってじゃあどんな願いなんだろう

それに呼び捨てって……

「結神様っ♪今からデートしてくださいっ！」

「……………っっ!!?」

「は……はああああああああああああああああああ!!?」

突然の発言に、一同困惑・・・

俺としてはご褒美以外の何物でもないけど文とのほうが絶対に楽しい・・・
でも依頼者だし・・・

「ふふっ♪デートと言つても・・・」

私とじゃ無いですよ？ここに居るみなさんと一日かけてゆつくりデートしてください
い

それが私のお願いです！ そ・れ・と・も

みなさんはデートしたくありませんか??

なら私もかっこいいなあつて思ってるので私が入りますけど？（グイッ！）

古河音が俺の腕を抱き寄せる・・・

体勢を崩してしまい古河音ちゃんにのしかかりそうになった瞬間！

「バカ言わないでくださいっ！」

双覇は私の彼氏ですっ!!ほかのだれにも渡しませんよっ（怒）

ふざけたお願いはやめてくださいっつ!!

文が自分のほうに奪い抱き寄せる・・・

右肘に当たつてる柔らかさに思わず全神経を総動員しそうになる・・・

「まあまあ、いいじゃんっ☆

まさかそんなお願いをしてくるとは思わなかったけどちようど私も今日双覇と

二人の用事もあつたしそれをデートつてことにすれば依頼達成だよっ!」

「そ・・・そうですねっ。

となると私も今日、主には話しておきたいこともあつたのでちようど良いかと。」

「それなら、私も双覇さんと一緒にデートしたいです!」

一世一代の文様から奪い取るチャンスですから!!!

!!!!!!

「そうじゃのっ! 私もなんだかんだと最近ご主人様と一緒に居なかつた

からな! デ・・・デートをして今まで私を頼らなかつたツケを払ってもらおうとする

のじゃっ!!」

「椛が大急ぎで飛んでいったから何かあったのかと

思えば、面白そうなことしてるなあ私も混ざろうつつ!!これでも昔は妖怪の山で最も美しい妖怪と言われたものだ。」

「何おかしなことやってんのさ。」

それはあたしだろ、天魔。まあ今も圧勝だけどねえ!というわけで、

天魔が参加するならあたしもするさ・・・面白そうだしねえ
!!!!!!」

上から・・・さつき、靈夢さん、椛、氷柱、陽葉（ふたば）、焰（ほむら）だ。

こうして古河音の願いを達成し、古河音を元の幻想郷に返すため・・・
俺の超連続デートが幕を上げた・・・どうしてこうなった（orz）

第61話—結神様のお仕事①（デート開始）

．．．〈双覇サイド〉．．．

「あららら。結神様？」

「これってなんてエロゲですか??？」

開口一番、とんでもないことを言ってきた。．．．

「別にエロゲ主人公になったわけでも、なりたいたいわけでもねえよ!!」

つかどうすんだよ古河音!なんか人数増えたんですけど!追加人数カウントしたら絶対に今日中に全員は無理だよね!」

俺の体が一つしか無い以上、物理的に今日の残った時間で

文、さつき、靈夢さん、氷柱、椛、陽葉、焰、7人とデートするなんて不可能だ。

「私にそんなこと言わないでくださいよっ!」

私のお願いは『この場にいる全員』ですから増えた人数もカウントということになりますけど．．．」

この娘は、上白沢 古河音（かみしらすわこがね）

東方プロジェクトの世界には本来存在し得ない人里の守護者

知識と歴史の半獣こと『上白沢慧音』の義理の妹だ・・・

俺は今、神としてこの娘の願いを聞き届けようとしてるんだけど・・・

その願いが『現実世界でBLを創ること（強制的に）』まあさすがに断つたら。次の

願いが『なら一歩手前の友人関係にすること』それもさつきキャンセルされ

最終的なお願いは・・・

『この場に居る女性一人一人とデートすること。』

「こんなに、大勢居たんじゃ一日じゃ確実に無理だ!!」

最初の予定では、俺と文とさつきと霊夢さんがここには居た・・・。

依頼人である古河音をデート対象とみなさなければこの3人で適当に一人ずつ俺と行動するだけで良かったはずが・・・なぜか、今は7人。

どうしてこうなった（orz）

「どうしてもなにも、結神様が節操無くそこらじゅうの女性にフラグを建築する

所為じゃないんですか？ けっ！ ここまで私欲にまみれた神様だったとは……」

「ちよつと待とうかつ!?! 誰が私欲にまみれた神だつ!!」

確かに俺の能力でそういうことができなとは言わない、恐らく狙った女性をこちらに振り向かせるくらいのは余裕だ。でも俺はんな事してないっ！

ここに居るメンバーの中でだって告白されたのは、文と権だけだし……
そんなに異性に好意的に見えるような顔はしてないし、そもそも二人に告白されたのも未だに……とにかく！

きつと、ここに居るメンバーもおもしろ半分で来ただけで。」

背後からの空気（女性軍団）が一瞬のうちに冷えてきたので、

勢い良く否定。いや、俺も人間の男だし……この能力を手に入れた頃は確かにそんなつかい方も考えてたけど……でも違うっ!!

「そうですか、まあとりあえず。」

能力を使用していないという話は一応信じます。
それとご心配無く！私は鈍感属性肯定派ですので!!!」

「答えになつてねえ!!」

「あ。時間制限の件でしたらご心配なく！

私も鬼じゃありません。このお祭り騒ぎをたつぷり楽しみたいですからね・・。
元の世界に変えるのは明日の夜まで待ちます二日あげるので頑張れっ☆ b」

俺の怒りもなんのその、華麗にスルーして
サムズアップ。

「鬼じゃねえかつ!!!」

「なに言つてんだい？鬼は私だよ？

その娘は魔力もあるようだけど、人間だろう。」

「お前に言ったんじやねえ!!」

「いや〜〜!!!」

酔い覚ましに、あの巫女かあんたと一発殴り合いでもしようかと
神社に通りかかったらこんなことになるとはねえ〜!!」

「あ それお前が言っちゃうのか。

つか俺はもうお前と殴り合いなんてしたくないって言つたら？ 鬼子母神。」

あつはつは！と大口を開けて笑っているのは最初のデ・・デート相手。

『鬼子母神』要するに鬼という種族を生み出した神のような存在・・・名前

『姫神 焰』大口を開けてはいるが彼女らしいといえ、彼女らしいしこんなことを考え
ては「失礼かもしれないがその様は彼女に似合っているようにも見える。

いちいち小さな事を気にしない彼女らしい可愛さだと思う。・・・

「そうかい？ うれしいこと言ってくれるねえ。

まあ祭りごとにはなんも考えずノリで参加するに限るってもんさ。それより、私は双覇つて呼んでるのにあんたが種族で呼ぶのは他人行儀過ぎやしないかい？天魔のやつも二人の時は、名前で呼んでるって聞いたよ？私はもう鬼の頭は退いたんだからさ。」

「あれ？声でちまつてたか・・・。」

まあいいか恥ずかしいけど事実しか言つて無いしな・・・それと呼び方なく。解かったよ焰。これでいいか？」

「ああ！それで問題無いよ!!（ニカッ☆）」

隣りの焰が大輪の向日葵のように、笑顔を浮かべた・・・
今までの彼女なら見せなかつたような本当の・・・女の子らしい笑顔にドキッとしてしまふ・・・

「・・・焰、少し・・・変わったか？」

照れ臭くなってあからさまにごまかす。

「良くも悪くも、ね。アンタのおかげで天魔との仲も改善したし良い笑顔を浮かべるようになった。て言われるし、

アンタの所為で前より、戦闘ばっか考えるって事ができなくなっちゃったし・・・
長を退いたのもそれが原因さ。」

言葉とは裏腹にあまり困って無さそうにむしろ、笑顔で言う焰。。。

「そっか。そいつは良かった。いや、悪かった?」

「ぶはは!!どっちでもいいさー!」

二人が笑顔を浮かべて、歩みを進める中それを見守る・・・いや
むしろ見張っているかのような7つの視線。

無論、今デート中の焰を抜き

古河音を含めた7人でさすがに固まることはせず各々ばらけて行動している。

.....

「ねえ……」

「え。ちよつと！今良い所なんですけど……。なんですか？」

夜神さつきと上白沢古河音……

さつきが飛んでの移動は不慣れということもあり、二人一組での行動を

余儀なくされた二人は同じ建物の影から二人の様子を覗いていた。

覗きを邪魔され、若干不満気に応じる古河音……

繰り返すが邪魔されたのは、『他人のデート風景を覗く事』だ。

「あの。。。なんで……。今回みたいなお願いしたわけ？」

自分のお願いきャンセルしてまで……。その……。双覇とのデ。デートなんて／＼／

言いきる前に、顔が真っ赤だ……

古河音はこう言う状況を表す言葉を知っている。そう『ベタ惚れ』というやつだ

普通客観的にこんなのに遭遇したら

「ああはいはい、ご馳走様」か「相手の男リア充おつ」か「砂糖吐きそう・・・」
て感じた・・・だが。

「さつきさんつてラブコメとか、読むほうですか？

少女コミックも少年コミックもで。」

「え？ま、まあ読む方だと思っけど・・・普通のねっ!？」

ごく普通の一般向けの週刊少年ジャ○プ！とかに載つてるようなやつね!!?」

質問の意味が一瞬理解できなかつたらしく・・・

ちよつと間を置いて答えるさつき。答えた直後、古河音の性癖（腐女子）を
思いだし慌てて念を押す。

万が一にもソツチ方面の話題で、同族だと思われてしまつては
さつきには対処のしようが無いからだ。

「あはは。ええそれでかまいませんよ。

あーいうのって、結局主人公とくつつくの予想がついちやってそれまでの周りの女の子たちが可哀そうじゃないですかそういう人たちのルート……応援したくありません？」

「っ!!分かるっ!最近のラブコメ漫画やラノベは幼馴染なんてキャラ設定をばんばん使うくせに、まるで報われないんだもん!!（ぎゅううううう!!!）」

「うおっ!?力の入ったりアクションありがとうございます。でも、ちょっと痛いので力を抜いてもらえると……」

「あ。ごめん（ぱっ）」

古河音の言葉で我に返り、握った手を離すさつき。

なにかやると言ったらやる気迫に満ちていた……

その反応を確認し古河音は確信した……

（この人やつぱり。）

「まあ、理由としてはそんなところです。」

たしかに文さんは魅力的な女性だと思いますし双覇さんの『王道ルート』には彼女が必要不可欠なルートだと思えますけど・・・

私としてはやっぱり小さいころからコツコツ好意を積んでいった

何処かの幼馴染さんに勝ち取って欲しいんです。(にこっ)

「わ。。。私は別にあんなやつ・・・／／／

あいつと付き合ったりけ・・・結婚するくらいならまだ祥磨のほうが。。。」

律義に赤面しなおし、伝家の宝刀『ツンデレ』を

繰り出すさつき。そんな彼女を見て微笑み・・・

「ほんとともつと素直になってこんなことになる前に落とす予定だったのにくく!! 二次元のキャラクターしか見えてないから他の娘が近付く危険も無かったはずなのにアイツく!でも・・・でもっ!・・・」って

感じが顔からでも読みとれますよん? まあ、私としてもあそこまでの人数が来るとは思つて無かつたですが・・・」

「ほんとにね……。て

そんなんじゃないってばあああゝゝゝ！／／／

ほんの少しだけ、距離の縮まった二人だった・ ・ ・ ?

・ ・ ・ ・ ・ 〈双覇サイド〉 ・ ・ ・ ・ ・

「ところで双覇？」

「ん？どうした焰?？」

「デートというのはどういうことをすればいいのだ?？」

「デスヨネー……」

そもそもが酒と喧嘩を道楽とする種族 鬼

の長にして姫君なのだ、そんな恋だのデートだのと知っていると思うべきでは無かつ

たか・・・

「そもそもデートは外来語だし・・・

うくん・・・そうだ。恋仲にある男女が連れ添って買い物やお互いのしたいことをするのがデートだ・・・煽っなんかやりたいこと無いか？」

「やりたいこと・・・喧k「は、無しの方向で頼む。なんか好きな人になりたい事って無いか？」ふむ。。。」

しばらく考えて、やがて思い付いたらしく顔をあげる。

「なら、『接吻』がしたい!!

私は良く分からないがああ古河音という少女が言うには恋仲の男女は昼夜も一目も気にせず接吻するらしいからなっ！」

「なっ・・・」

ちよつと待つ・・・アイツ（古河音）

すんげえ偏見の知識教え込みやがって
!!!!!!

「んゝ．．．」

段々と焔の唇が近づいてくる。。

「まってまって!!!」

それは一部のやつらだけでだれでもやるわけじゃない！それに、
焔!!女の子のソレは男よりも大事なんだ。こんな事で使うべきじゃない！
後で本当に好きなやつに．．．」

「だから双覇に．．．」

私は双覇となら、良いって思えるんだ私より強くて優しくて．．
私を女の子として見てくれる双覇となら。」

What!?

い．．．いつの間に焔とフラグが．．．

いや、ちがう今はんなこと考えてる場合じゃない!!!

「いや、俺じゃなくても焔の事を可愛いつて言う奴はたくさん・・・て

待て待て!! そうだ焔! 甘いものでも食べよう!! なっ☆」

未だ唇をすぼめて迫ってくる焔をどうにか引き剥がす・・・

文達の気配はずっと感じてる。つまり、何処かの影で俺らの行動は監視されてるということ。もちろん気にならない程度のもものではあるからよほど集中しなきゃ俺以外の強者たちにすら感づかれないレベルで薄い気配ではあるが・・・。

問題は、その全ての気配から大なり小なり『殺気』がひしひしと伝わってくるってことだ・・・

「電桜―狼牙は今水柱に変じてるし、結月―龍爪はデートなんだからって文に回収された。今あの刀で襲われでもしたら・・・(ぶつぶつブルっ!!!)」
リアルに寒気がしたし冷や汗が出た・・・

神がこんなことでビビるなど言われるかもしれないが、考えても見てほしい。あの刀元々は戦神 スサノオの愛剣『天叢雲劍』から武の神タケミカヅチによって作られた

ものなのだ・・

生半可な妖怪や人間の实力者はもちろん、下手したら神それも所有者すら斬り捨てる可能性がある。元のソレは物質どころか概念すら斬り捨てる

『万物を断ち切る程度の能力』を持った神剣なのだから・・・・・

「なんだい。残念だのう・・・

まあでも私も甘いものは好きだからな！誰かと一緒に団子を食べてみたかったんだ。

部下の鬼達はなぜか一緒に食べてくれないからな・・」

その原因は恐らく鬼の食事だろう。。。

酒と喧嘩が生きがいのこいつ等の事だ食事は酒が付きものの宴会に代わり甘味の時間もそのうちに、喧嘩大会が始まるに違いない。

そうなれば、勝てるわけがない相手と一緒に場所に居られるわけも無い。

「あ・・あはは。

そっかそっか・・・・・」

乾いた・・・憐れみとも取れる笑顔が自然と口からこぼれ。

俺達は焰と隣り同士で焰のペースに合わせて、ゆつくりとした足取りで団子屋に向かった。

追記、ため息を吐いてももの悲しい雰囲気はとて

可愛かった・・・少なくとも鬼にはとてもじゃないが見れなかった・・・

第62話―結神様のお仕事②（デート回氷柱&?）

「全く!!!わかっておるのかの!？」

「ご主人様は肝心な時に限って私のことを式として、扱わず武器としてのみ扱って。。。私も女なのじゃぞ！」

そうやって、頬を膨らませながら俺の隣を歩くのは

俺の妖力の元々の供給源にして今は電桜狼牙という刀の九十九神でもある妖獣。

『氷柱』だ。

「ああ。そうだな・・・悪かった

でも一つだけ訂正させてもらおうとするなら、俺はお前のことを式・ましてや武器として扱ったことなんて一度も無いぞ?守りたい繋がりの一部なんだからさ。」

そう言いつつ、彼女のほうを見る。

白髪・・・ところどころ青めの毛が混ざったような髪の毛少し小柄ではあるが

幼女とまでは行かないくらいの身長。そして何よりも目を引くのが髪の毛に合わせ

たように青白い狐の耳。

静かな雰囲気ながらも普段なかなかこうして外に出していなかった所為も有り、何にでも興味を示す活発性は、先の

焰と真逆のようだとどこどこ似ている彼女に気付けば笑みをこぼしていた。

「な・・・何を言ってるのじゃ!!」

大体!ご主人様は軽率すぎる!そのような歯の浮いた台詞を何人の女性に言って来た

のじゃ!それでは文さまが悲しみ不安に思うのも当然じゃぞ!」

あれ?なんかさらに怒ってるよ?な・・・

というか、何でここで文の話に

「いやなんで文の話n

?????????

「そ・れ・に!あの時もあの時も、あの時も~~~~!!私に元のこの体を

与えて下さってれば、助けに成れたことはたくさんあつたはずじゃ!!よもや、

私の能力すら忘れたわけではあるまい!!!」・・・」

忘れられるわけがない・・

思い返せば俺と祥磨の二人で、洞窟に住んでいたころ火元不明の火災で洞窟が壊れた事がある、あれも氷柱が原因なんだ。

『視認（体感）したものを凍てつかせ、焼き払う程度の能力』

それが、氷柱の能力。

物体だろうが能力だろうが、概念だろうが体感もしくは視認さえしてしまえば

凍てつかせ（固定、硬直）焼き払える（焼却、炎上）・・

『視認したものを凍てつかせ、焼き払う程度の能力』だろ？

忘れられるわけないだろ。ちゃんと頼りにしてるよ・・ほとんど一心同体見たいな物なんだからな。」

「うむっ！ならこれからはきつちり私を刀として以外にも頼って

貰うことにするのじゃ。さてと・・着いたぞご主人様!!!」

こんな感じで雑談を交えつつ、歩くこと10分ほど・・!!

どうやら目的地に着いたらしい。ここは・・

「へえ。山が良い感じに木々も色づいてるしたしかに、
楽しめるかもな・・・て。」

眼前に広がるのは妖怪の山ほどではないが巨大な山。

到着した場所はその麓。今回のデートコースは『ハイキング』ということらしい・・・

「そうか、確かに紅葉も綺麗じやの。」

けど今日はこっちじや！」

そう言う氷柱の中の何かがはじけ飛んだ感覚があり・・・

直後。とてつもない冷気を放ち始める。。。

「おいおい。。。まさか・・・」

待て待て待て、そんなことしたら立派な異変もn・・・」

シャンシャンと・・・

そんな表現はもう生ぬるく・・・豪雨のように降り注ぐ雪。

え？雪は原理上そんな風には振らない？知らねえよじゃあ今俺の目の前で起こって
る

現象をどうにかしてくれ。

「さて、ご主人様！」

私と『雪山デート』をするのじゃ！」

雪山デート・・・読んで字のごとくカップルが雪山にでかけ

「寒いねえ〜?」、「ほら、腕貸して?」とこんな感じでいちやつくデートの一つだ

え? 偏見がすごい??

まあそれは置いて・・・今の季節は秋。紅葉はすれど雪が

振るには早すぎるそんな時に雪山デートとはこれいかに・・・

「いや・・・するのじゃ! って言われてもここで何をするんだよ?

それにこの状態を誰かに見られでもしたら・・・」

即異変もの・・・

霊夢さんはこちらを監視しているとはいえ、下手をすれば慧音や紫が

出張ってくる可能性も・・・

「大丈夫! 結界術は得意じゃからの！」

今だけは我慢しないと決めたのじゃっ!!!」

つまりは、視覚に関して誤認させるような結界を張った。

そういうことだろう。氷柱の種族は妖狐元々、妖獣の中では妖術が得意な種族でありましてや実際にどうかはわからないが氷柱は妖狐の祖かもしれないほど大昔の妖獣だ・・・実力は言うまでもない

「みたいだな、牙も尻尾も女らしくないから

嫌いって言ってたはずなのに妖力全開にした所為で出ちまつてるし。」

ちなみに尾は九本あり、それぞれに青白い炎が

灯っている。毛並みはもちろん青白くさわり心地は最高!!!

「はあ・・・しゃーないか。(ぶるっ!)

寒い寒い・・・もっふもふー！ー！ー！ー！！」

こんな感じで、氷柱とのデート『雪山ハイキング』も終えた。

ただでさえ結構急な道のりが雪の所為でさらに酷かったけど

終始氷柱は笑顔だったし俺がももふもふした時は顔赤くしてたし・・・

総合すると、すっげえ可愛かったからまあ良しとすることにした。

ところ変わってここは、とある道。
俺は次のデート相手とある場所にむかっていた。

「次は、陽葉か。」

「ああ。よろしく頼む結神どの！」

隣りを歩く俺に、笑顔を向ける仕草は可愛らしいが・・・

彼女の名は『八咫 陽葉』（やたふたば）。

八咫と聞くと『八咫鴉』（やたがらす）を思い出すかもしれないが、

彼女は八咫鴉ではなく『天魔』天狗たちの長つまりは、妖怪の山のトップだ。

「今更かしこまんよ・・・」

お前から言ってきたんだぜ？山みんなが見ていない二人の時は敬語禁止！
って・・・その口調だとやりづらいいな。」

「ふふ。そうだな。」

私もこっちの方が気が楽だ、ところで双覇いま向かってる場所が『そう』
なのか？」

『そう』というのは、今回のデートに関してだ・・・

てつきり焔の時とおんなじ感じで教えたほうがいいのかな？とか思ったが

陽葉はちゃんとやりたいこと、行きたい場所を考えていたらしい。

「ああ。俺の知ってる限りじゃ

あそこ以上にお前が見たがってるものを存分に見せてくれるところは無い・・・と着いたぞ。ここだ。」

俺と陽葉の前に広がっているものそれは・・・

『花』。とんでもない量の向日葵、それに負けないくらいに咲き乱れる

コスモスに、桔梗(キキョウ)に、シクラメンに、ダリアに、チョコレートコスモスに、ニチニチソウに、マリーゴールドに、バラに・・・

俺の知ってるだけでも9種類。

しかしまだまだ沢山の種類の花が『百花繚乱』という四字熟語にふさわしいほどに咲いていた。

「ふわぁ〜!!!すごいです!!

噂には聞いていましたがここまでとは・・・立場上なかなか山の外にも出れず。部下の感想を聞いて、なおこの圧巻の光景!!!」

そのまま、花畑の中に駆けていく陽葉・・・

「あれ?置いてかれた??・・・」

飯とはいえ、デート中に置いてかれるのって結構キツイんだなあ。「あら。なら私と一緒に回ってあげようかしら?!?!」

陽葉が走り去り誰も居ないはずの、隣りから

ずいぶん懐かしい威圧的な声がした・・・

「なんだ、幽香か・・・」

今日は陽葉のためにここ（太陽の畑）解放してくれてありがとな? おかげで何とか満足してくれたよ・・・」

遠くで花を見たり、匂いを嗅いだりして楽しんでる

陽葉を見つめ話す。

「まあね・・・花の良さもわからない人だったら殺してたけど・・・」

『美しい花が見られる場所』でここをせっかく選んでくれたのだから、一応ね。

見た限りではきちんと花を觀賞する時のマナーも守ってるみたいだし。」

「そか、にしてもほんつとに綺麗だな此処は・・・」

それに秋でも向日葵つて咲いてるもんなのな。」

「そんなわけがないでしょう？寺子屋の子供でも知ってるわよ

向日葵は夏の花で秋の花じゃないって・・・能力でなんとか咲かせてるのよ・・・

今くらいの気温ならまだ花が痛むほどじゃないからね。

ここにきてくれたのなもの。見せたいじゃない余すこと無く・・・ね。」

そう言う彼女の顔には、わずかな笑みがあり

夕日の光と相まってとてもきれいなものだった・・・

第63話―結神様のお仕事③ (デート回 椀)

「ふんふんふん~~~~んっ♪」

陽葉とのデートも、ほどなくして無事に

終了して次のお相手は・・・妖怪化した俺とそっくりな風貌けれど毛並みは純白。妖怪の山、天狗の上下社会その申し子。

白狼天狗という、文達鴉天狗の部下に当たる種族の女の子

『犬走 椀』

「椀・・・もう少しだけ離れてくれないか？」

機嫌が良いのは嬉しいけど・・・この距離はお前も歩きづらいだろ・・・？」

いかにも機嫌が良い！と言わんばかりの鼻歌＋尻尾がすごい椀に

声をかけてみる・・・時刻はすでに、秋の見事な月が昇り地上を照らす夜の道。

今歩いているのは比較的人通りが多い『人里』・・・

だが時刻が時刻ゆえに、出歩く人は少なく、精々営業時間が長めの

家の店主がちらほら居る程度他は皆人喰い妖怪や妖怪に見つからないように自らの

で過ごしているようだ。。。

「ぜえくんぜんつ。

そんなことありませんよー♪私は目が良いですから大丈夫です。

なのでこのまま行きましょう！」

今の体制は、椛が俺の右腕を抱きしめて寄り添ってきている状態だ。

時刻的にも他の女性陣的にはおもしろいシチュエーションじゃないことは確かだ・
現に後ろの殺気は、増すばかりだし・・・

陽葉とのデートの途中で目を覚ましたと思われるもう一人はどうやら、例によつて
ものすごい煽ってきてるが。

「はあ・・・ある意味椛が今回のコレを

一番良く理解して有効活用してるかもしれないな・・・」

「どうしましたか？ 双覇さん。（むにゅっ）」

「な・・・にやんでもないひよっ!？」

なんでもないよ・・・

そう言いたかったのだがいろいろな情報が一気に頭に流れ込んだせいで処理しきれず

噛んでしまった。

事故なのか、それとも故意なのか、

椈の決して小さくない『ソレ』は俺を動揺させるには十分すぎた・・・

「いらつしやい！ おお天狗と神様たあ珍しい・・・

おっとそんなに珍しくも無かったなこりや失敬。ちよつと待つてな!!」

しばらくして着いた先は、人里内を探して見つけた

開店中の甘味処だ。どうやら月見だんごなるものがあるそうなので注文することにした……

「いやー。開いてる処があつて良かったですね。

双覇さん？（むにゅむにゅ）」

結局歩いてる間も外されることの無かつたその腕は店主のおつちやんが出てきた一瞬で外し、店に戻つた一瞬でまた俺の腕を拘束した……

「も……椛、どうしたんだ本当に……」

酒でも飲んだのか？」

俺は一滴も飲んでいない。なかなか酔わない（具体的には鬼に呑み比べで勝てる位）俺だがさすがに女の子と歩くときにまで酒を飲む気にはなれない＋なぜか文がもの凄い剣幕で止めてきた……

「ふふ。お酒なんて飲んでいませんよせっかくのデートですからね……」

酔ってだらしの無い姿は見せられませんから・・あ。そのほうが双覇さんは良かったですか？」

「い．．．いや、そういうわけじゃないから。。。」

椀の眼には艶めかしい光が灯っているような気がした．．
つい、目をそらしてしまう。

「はいよ！秋限定月見団子だよ!!」

そのとき、店主の豪快な声と共に大きな皿に乗った
白い球体で出来たピラミッドが運ばれてきた．．．

「美味しいですねえ!!」

このお団子．．あ。そうそう双覇さん今日は良い月ですねえ。」

「そうだな．．。『中秋の名月』とまでは

いかずとも今日は満月に近いし秋は良く見えるしな．．．．．あ。」

それでようやく彼女の行動に納得が言った・・

確かに、これまでのメンバーで言えば一番積極的な方だとは思いますが椛は基本は『恥ずかしがり屋』なのだ。

酔っても居ないのにこんなことができるわけがない。

という事は酒ではないものに酔っているという事だ・・・つまりは

『月』に。

「基本的に妖怪は種族問わず月を見ると気分が高揚するという性質がある。

オオカミは月と密接な関係にある妖怪だし棍もたぶん相当………」

どうりで、里に人間が少ないはずだ……

こんなにきれいな月の日に外を出歩いたりすれば命を捨てるようなもの。

「双覇さん？」

お団子食べましょう……甘くておいしいですよ？

頭がぼやっとしてきますよ？」

つまり、現在彼女は『発情』している状態ということだ……

現在の季節が秋だった事に感謝するべきだろう。『春』の『満月』の日であれば、流石の俺も本能を抑え込める自信が無い。

俺も狼天狗の一種なのだから。

「あ……………」

椀の誘惑に耐えつつ、団子を食べ進める事10分ほど・

ついに残りは1個を残して無くなっていった。

量が量だったため、さすがにもう一皿頼む余裕は俺にも椀にも無さそうだ。

つまり……俺と椀のデートはコレで最後。

「……………です。」

きつと、頭をなでたり髪の毛や尻尾を優しくすいてあげれば

泣きじやくるこの娘は涙を止めて笑顔になつてくれるだろう．．．でも、それは逃げだ
彼女が望んでいるのは俺に優しくされることじゃないから．．．

俺の本当の意思が欲しいのだ。

俺自身にそばに居てほしいのだ。俺が文に抱いているこの気持ちを向けてほしいの
だ

「ごめん。「え．．．」俺は、文が好きだ。

椛の上司であり自由気ままな新聞記者であり、俺をどこまでも癒してくれた彼女が
大好きで、愛しているだから椛のそばには．．．椛には文に向けるべきこの愛情を
向けられない。」

いろいろ逃げようと思えば逃げれた。

その場で形だけで彼女に恋して本当の恋人のように、扱って泣きやませる方法はたぶんいろいろあるしその方が良いのかもしれない。

でも、俺はそんなことはしたくない。

いくら人間出来て無くても・・・女の子を泣かせるクズヤローでも、俺は覚悟を決めて本気の意味で向かってきてくれたこの娘に嘘を吐く位なら。。。いつそ軽蔑されて、傷つかれて、憎まれて、嫌われてしまいたい。

「椛が頑張ってることも、可愛くて、気高くて、強くて、綺麗な女の子なもの

解かってるでも、俺にとっては君が一番じゃないんだ・・・

本音を言うともしかしたら君を好きになつていたかもしれない。

文に嫌われたままで俺が文に興味を抱いていなければ
椛が好きだったかもしれない・・・嫌ってくれてかまわない!!デート中に彼女を
振るようなクズ罵ってくれてかまわない!

・・・もう一度だけ言う。

その顔は『笑顔』だ．．．どこからどうみても魅力的な笑顔．．．でも本心を隠し切れてはいない。

「あく．．．んっ!!!双覇さん。

コレで私とのデートは終わりです．．．でも、改めて言います!

私は貴方を諦めません。たとえ誰が相手でも貴方を譲りたくはありません。

貴方が大好きだから．．．だから」

残っていた最後の一個を食べ、

彼女は誰よりもまっすぐな瞳で．．．

「貴方の心を私という狼が狩れた時．．．

そのときは、私が貴方の一番になれたその時はまた私と．．

デートしてください!!」

言いたい事を全て言ったららしい純白の少女は、山に向かって飛び去って行った．．

俺は、涙を残したその笑顔に．．．

その決意に満ちた眼差しに。。。

月の光を受けてまっすぐにこちらを見つめる姿に。。。

自分でも酷い男だと思いつつも、確かに・・・。

文以上に惹かれてしまった。

その夜は月の綺麗な日で・・・
俺は一睡もする事無く、ただ空を見上げて夜を更かした。

第64話—俺と幼馴染と、舞い降りるキューピッド・・・？

「あはは・・・。なんか、変な感じだね？」

ほら私たちっていつつも祥磨も含めて3人だったし。。。」

夜がすっかり明けたところに現れたのは、

かれこれ5人目のデート相手、俺の幼馴染。姉のような相手でもある

『夜神 さつき』だ・・・。

「そうだなー」。

俺達の場合デートっていうよりかはいつぞやみたいのに、3人で帰ろうとしたときに祥磨のやつがドタキャンして・・・しようがなく二人で遊んでって感じだったし。」

いつぞやとは言うまでも無く外の世界に居たころの話だ。

あの時は、本当に大変だったいくら二次元にしか興味が無いって言われてた俺でも

さつきは文に激似だし・・・

(作「ちなみに、外の世界に居たころの祥磨は

さつきと双覇の関係を知ってたから双覇を現実に戻すために、良く二人をこう言う風にデートさせてました。まあさつきにとってはデートも双覇にとっては・・・)

「実際、可愛いしな・・・」

俺としては、ぽつりとつぶやいたはずなんだけど

どうやらさつきにはぼつちり聞こえていたらしい。。。

「んなつ!!・・・か、可愛いとか

で、デートとか言うなあ~~~~~~~~!!!!」

耳元で、叫ばれた(耳鳴りがすごい。。)

「・・・って双覇?目の下くまがすごいよ。

眠れなかったの???

俺はとつさに頬を欠いて、さつきに顔を見せないように

顔をそむけた。。。

「ま・・・まあな、ちよつとどうにもモヤモヤしっぱなしな

事があつてさ・・・」

言うまでもなく、昨晚の椀の事だ・・・

あの時俺は『本心』を言った。彼女がソレを望んでると思つたから・・・
けど、本当にアレでよかつたんだろうか・・・

椀に対して文と同じ感情を向けられないのはそうだけど、それでも何か有つたんじや
椀に悲しみを抱かせたまま山に帰す以外の方法が・・・

「・・・まあ、私には起きてる時の双覇ですら分からない難問なんて、

解けないけど・・・もしそれが『女の子』に関しての問題なら・・・」

さつきがふと、口を開いた。

「双覇。この世界の娘（こ）達は、みんな強いよ？」

貴方がもし女の子を傷つけるような事を言つたんだと思つてるならそれは間違い。

きっとその娘は、今まで以上に強くなってるはずだよ。」

さつきは、俺を傷つけないようにか具体的な名前は出さなかった・・・
そつか・・・これで解決！モヤモヤが晴れた。なんて言うつもりは無いけど。
すこしは楽になった・・・

これも、女の子の強さってやつかな。。。

「ありがとなっ！さつ・・・・・・・・・・き・・・・・・・・・・」

お礼を言ってる最中で、俺はとんでもない者を見つけた・・・
急に足を止めたためさつきに数歩分追い越される。

「どうしたの？双・・・・・・・・・・覇・・・・・・・・・・」

さつきも、俺の目線を追いやがて表情が凍りついた。。。

なぜなら・・・・・・・・・・

「ふふふ。イメージ（想像）してください。

「貴方達がこれから過ごすことになる。私という恋のキューピッドが導く完璧なデートをつつ!!!」

漆黒とでも、言うべきかとにかく真っ黒なコートを羽織り

髪は緑がかったいたはずが今は真つ赤、まあ紅魔館ほどではないが……

そして服はこれまた赤めのシャツ。。。

そして虹色の渦を巻くカラコン（だいぶ見えにくそうである。）

「いや、イメージしてください。（キリッ）じゃねえよ!!

その方は今現在、闇堕ちしてないし良いリーダーやってんだろうが!!!

しかも、律義にカードもってるけどどっから持ってきた!

最後に、てめえにPSYクオリアが無いのは明らかだろうが古河音!!!!
!!!!

だいぶ奇妙な出で立ちで、道のと真ん中で某TCGアニメの一期のラスボスになっっている今回の騒動の張本人。

「ふふ。この力を使わずとも手に取るように分かりますよ……

結神様貴方は、今激しく動揺している!」

コレが、アニメの世界なら『バアアアアアンツツツツ!!!』

って感じの効果音がつくだろう勢いで、てんでの外れな方向に向かって

指をさしている古河音・・・

「いや、見知った顔・・・てほどでもないけど

少なくとも他人ではない女の子が道のと真ん中で奇行をしてるんだから、動揺くらい誰だってするだろ。」

そう言うてはつきり肯定するが、目の前の少女は

「くつくつく」と喉から笑い声をあげ声を張り上げる・・・

「やはりそうですかっ！

そうですねえ・・・今まで私がついて来ていたのはとくに私の『カリスマ』で気付かれてるだろうと思っていました。」

えらく、自信たっぷりに話しては居るが本来それは自分の質問に相手が無言で返した場合に使うんじゃないだろうか？

後、本人はカリスマでばれてると思っていればいいが

尾行してるつもりだったなら少しくらい存在感を薄めるべきだっただろう・・・

あんだけダダ漏れにしてたら、雑魚妖怪にすら気付かれるぞ。。。

「そして、これまでの尾行で私は気付いたんですよ……

結神様……。貴方……

ヲタクですね!!それも重度の!

二次元の世界に行く方法とか本気で探してた口でしょう!!!」

「ま・・・まあ、もとの世界でかじる程度にはな。」

聞かれるとマズいメンバーもいるので、極力

ポリュームを下げてその場にだけ聞きとれるようにしやべる。

「ええ〜〜。。。。かじった程度の人が、

反応出来るネタぶつこんだ事、ありましたかねえ〜〜〜〜〜。」

確かに、今まで合間を見つけてはラノベ漫画見境い無く

ネタをブつ込んできてツツコミが大変だった記憶がありすぎる・・・

後ろのさつきが、笑い声を抑えていた。。。

そういえばさつきには、東方の世界に行くための方法を一緒に

探して貰ったこともあったっけ・・・

「そ・・・そんなことより、どうしたんだよ！

まだお前の願いを叶えてる途中だろ？まさか、お前もメンバーに含めるとか

言いだす気か!？」

「おっとそうでしたそうでした!!!」

この後私の台詞が私側の作者は少し長めに有るんですが、文字数の都合上ぎっくり省略いたしました。。。。

かくかくしかじかで今回は、私ときつきさんとダブルデートして貰いますよ!!?」

うおいつ!!いきなりメタすぎんだろつつ!!

そして『かくかくしかじか』で理解できる自分が怖い・・・
簡単に言うると今回のコラボ私の出番が無いからよこせっ!って感じだな。

「おおメタいメタい・・・」

じゃねえだろ、大体なんもんさつきをやつが・・・」

納得しないだろ。と言いかけ

「そうだよ!そんな話聞いてないよ!!」

たところで、すでにさつきは古河音に直談判していた。

女子の行動力ってすごいな・・・

「べっ・・・・・・・・！！別に私は双覇の事なんて・・・・・・・・」

全然！なんとも！思って無いってば！！今回の事だつてあんたを元の世界に返すために仕方なくだし。。。大体あんな奴の何処が魅力なわけっ!? 私は・・・これまで浮かれてた人みんなの思考回路が良く分からないよ!!!」

ごふっ
!!!!

そ・・・・・・・・んな・・・・・・・・俺ってやつぱり魅力無いのか。。。

さつきにすら、同情の余地が無いなんて・・・

・・・・・・・・〈少年少女移動中〉・・・・・・・・

「草原で昼寝だぁ・・・・・・・・・・・・・
???

シヨツクの所為でいまいち良く、ここまでの道のりを思い出せないが

古河音の案内でついた先は草原だった。。。ピクニックにちようど良さそうだな。

「はいっ！初デートって言ったら草原で昼寝！」

コレが鉄板でしょう？私としてはそこでどうして疑問を感じれるのかが疑問ですよ！あ。さては結神様デート経験あんまりないですね？」

んぐっ！古河音の発言にじやあお前は？

と聞こうとも考えたが、やめた・・・どうせこんな二次元丸出しのコースを選ぶのだから無いに決まってる。それに俺も外の世界で女子とデートしたことなど一回も無い。

「・・・どうする？双覇。」

さつきがコツチを不安げに見てくる・・・

その後視線を草むらに移す。いくら綺麗な風景の草むらでも虫や肌に悪い毒草。下手をすれば蛇やらも潜んでる可能性もある。

「俺は野宿とかで慣れてるけど、いくらなんでも女の子のさつきにこんなところで

寝転がせるのはな・・・なあ古河音さつきの周りを結界で囲んでも良いのk・・・

「あつ手がスベツタ〜☆」おいコラっ!!!うおっっ！」

女の子の力とはいえ、不意打ちの全体重をかけた体当たり。

耐えられるわけも無く前傾姿勢になりそのままさつきめがけて倒れこむ・・・
さつきはどういうわけか放心状態。。。

のやる・・・次は『ラツキースケベ』ってか・・・お前の突撃がトリガーなら
ラツキーじゃねえじゃねえか!!

「さつきっ！避け・・・へブっ!!!」

避けろと、声をかけようとした瞬間こつちに気付いたさつきは的確に俺の体を吹っ飛ばす突き飛ばしを繰り出した・・・

だいぶ距離も近かったが、さつきの能力なら何とか反応が間に合ったらしい・・・
どうせなら突き飛ばすんじゃなくて止めてほしかったが。

「へ・・・。まそっぷー」

突き飛ばされた俺は当然、自分の力で推進力を止められるわけも無く。

最初に突き飛ばした古河音の方に戻りぶつかった・・・

「痛ってえ・・・」

おい。大丈夫か古河音？怪我とかは……」

「ダ……ダイジョウブデアリマス。」

「おい、カタコトになってんぞ。」

本当に大丈夫なのか？頭でも打つたんじゃ……」

俺は、患部と思われる頭に手を触れようとしてようやく、

今の状況に気付く。古河音に突き飛ばされる↓本来ならさつきに当たり押し倒すの

☒

になる↓だが、さつきによってさらに突き飛ばされ逆再生のようになる……

↓俺が古河音を押し倒すの☒完成。

「あ……あ……あああああ!!!

ご……ごめん!!!わざとじゃないわざとじゃないんだ!!!」

すぐさま跳ね起き、古河音に土下座する……

もうどっからどう見ても『と○ぶる』の主人公みたいな図だが、あるいはコレも古河音の思い通りかもしれないがそれでも地面に頭をつけ謝る。

ぼた。ぼた。

不意にそんなリズムを奏できるように、上から何か垂れてきた。

「ん？なんだ・・・血??!?!」

反射的に顔を上げ、上を向く・・・
そこには・・・

「ダ・・・だいじょう・・・ぼわあぁー!!」

口から、耳から、目から・・・

そこから中顔の穴という穴から血が吹き出ている自称ヒロインの姿だった。

「え。ちょ・・・お前。。」

おい大丈夫か古河音!!おいお~~~~い!!!!!!

言うまでも無いと思うが、この後の俺とさつきのデート時間は
全て古河音の止血タイムになった。妙な事に鼻からは血が吹き出ておらず・
・
ヒロインの意地という物を知りたくないところで知る事になった。

第65話―博麗靈夢の覚悟!力試しの珍客?

「さて。それでは取り掛かりましょう双霸さん?」

古河音の止血もなんとか、手遅れになる前に済み時刻は正午。

俺の次なるデート相手は『博麗靈夢』

俺が神を務める俺の依り処でもある『博麗神社』の

巫女さんであり、妖怪も含め幻想郷内でトップクラスの実力者・・・

「とりかかんのは構わないけど・・・」

ほんとに良いのか?デート内容が『昼食作り』で。

こつちに来てた時は大抵同じ事やってたろ・・・」

現在地は、博麗神社の居住スペース。

その『台所』。

「はいかまいません!もう伝えていたと思いますけど、

今回ちょっとお伝えしておきたいことがあるので此処のほうが気が楽なんです。」

そういえば、そんなことを言っていた気がする。
先日この騒動が起こったときに。

「そか、じゃあさつさとつくるかな」

靈夢俺は何をしたら良い？」

そう言つて、靈夢の指示で調理に取り掛かる。

さていつちよやりますかっ！

．．．．〈双覇サイドアウト〉．．．．

．．．．〈傍観者サイド〉．．．．

「ぐぬぬ．．．．靈夢さんめ。。。。

昼食の時間という口実で双覇の胃袋をつかむつもりですか．．．．」

神社近くの木の影に隠れ、限界まで気配を消して
神社の中を監視している女の子。

今作品のヒロインにして、最速の鴉天狗
射命丸文その人だ・・・

「へえ〜。君はあの子のこと好きなんだ?」

そんな、幻想郷の妖怪でも屈指の実力者にまるで物怖じせず。

問いかける『人間』が一人・・・

「はい、大好きですよ。」

だから今のこの状況は誠に遺憾です。それがどうしたんですか・・・あれ?」

射命丸が振り向くと、そこには先ほどまで会話していたはずの
人の気配も姿かたちも無くなっていた。

綺麗さっぱり。最初からそこには何も居なかったかのように・・・

「今、私の後ろに誰か居ましたよね？」

いやそんなことより、何で攻撃しなかったんだろう……。私が背後を取られただけじゃなくいつの間にか気を許していた……。？」

困惑する少女をしり目に少年は神社に進む。

古河音はもちろん、現在残っている幻想郷最強クラスの強者たちにも

『結神』ですら彼の存在にも接近にも気付けていない。

……〈傍観者サイドアウト〉……

……〈双覇サイド〉……

「ああ。うまい！」

やっぱり靈夢の料理の味付けはすげえな〜〜。

味付けが全部クドくも薄くも無いぜ……。コレが勘じやなかったら教わりたかった……。」

本日のメニュー

鮭の塩焼き、漬物、白米、茸と山菜の味噌汁。

「双霸さんが手伝って下さったおかげです。」

それに、料理の腕ならば双霸さんも十分においしいではないですか。」

あれ? 靈夢さんに料理を作ったことなんてあつたっけ?

「ふふっ! 実際に食べなくても味の想像くらい付きますよ。」

私が頼んだ食材の下処理全部私以上に丁寧に出来てましたからね……

あれほど食材に感謝出来るのなら、美味しくないわけないです。」

思った事が顔にでてしまったらしく、靈夢さんは俺に笑顔で答える。

「お〜たしかにこれは、うまいな……」

靈夢は良い嫁さんになるな。あれ、巫女って嫁入り出来ないんだっけ?」

「まあ、大体はそうだな。

確か祭り事の時、神楽奉納の指導を次の代にやる場合は、結婚しても巫女を続けるって事はあるらしいけどな。」

「へえそうなのか。。。」

「ああ。ところで……………」

お前は誰だ？」

ふと、自分が靈夢ではない『少年の声』と会話していることに異和感を抱き声のした方向を向くとそこには、俺の分の鮭をほじり盗み食いしている白髪の少年が一人。

「むぐもぐ……ごくんっ!」やあ、久しぶり。

いや、また記憶にないだろうからはじめましてかな?めんどくさいね〜。
あんまり登場できない最強ってのは……」

「質問に答えろよ。

最強くん……ふざけるなら叩きのめすぞ?」

真面目に質問に答える気が無いらしい目の前の少年に若干イラつきを覚え、脅しにも似た事を口に出す。

「ふ。やってみるかい？」

たぶん俺の方が強いよ……。それに食事中はふざけないのは君の流儀だろ？
食材に命に感謝するって」

「……俺に用があるなら場所を変えるから早くしろ。

それと、俺の仲間や恋人に危害を加えるようなら容赦なくやらせてもらう。」
それだけ言って、食事に戻った。

別に目の前の少年が肯定したため信じたわけではない……
ただ、少年の言葉に恐怖を感じたのだ。

もしかしたら、俺でも勝てないかもしれないと。

……少年少女＋α食事中……

「ふう〜。美味しかった!!」

さて、俺の目的だったっけか……大きく分けると二つ。

まず一つ目、『結神』白雲双覇。お前に渡すものがある……」

そう言つて少年が取り出したのは、一つの木箱。

「なんだコレ? (かぼつ) 短刀か???

いや、それにしては重さが足りないし素材も……なんだコレ???

重いのか軽いのか全くわかんねえ……」

それどころか、視認できているのは一本のはずなのに

何十、何百の刀を持つてるようにも感じる。

「ソレの名前は『結刀 輪廻』—むすびがたなりんね

お前の結いの力でのみ扱える武器でその形状、性質、個数、素材、全て自在に変化するお前の『神器』だ。」

少年はさも当然のように、とんでもない事実を口にする。

「おいおい……」

どういうわけだ、そんな化け物武器を作るには数百年じゃ足りないはずだ。お前ほんとに何者だよ。」

タケミカツチも冗談みたいな、刀を二本つくっていたが

それは能力もあつたというのが大きいはず。ならば、この少年もソレ系の能力か？

「いんや？俺の名前は天白雲。」

ただの普通の人間だよ？この世界の創造主ということ以外は。ね……
まあ、気軽にシロとでも呼んでくれ結神どの。」

「創造主だと……」

お前、マジで何者だ……まあそれは後で良い。
んで？二つ目の用事ってのは？」

「その、巫女さんのお願いを叶えてあげようと思つてね……」

ただし双覇、君が俺に勝てればの話だ。もちろんその神器は使っても構わない。」

靈夢さんのお願いだと？

「靈夢さん、今この神社以外のこの世界の時は止まってるから
安心して話してくれていいよ?」

その言葉を聞いて靈夢さんは、大きく息を吐くと
まっすぐにこちらを見据えて言った。

「主。私は・・・神になろうと考えています。」

・・・数秒ほど、周りの空気が凍りつく。

次第に思考が追いついて脳が回り始めてきた・・・

「なっ！ 靈夢さん・・・」

何を言ってるのか分かってるのか？ 神になるなんて。

そもそもどうやって!？」

「だから、俺が来たんだよ結神くん。

俺の能力は『妄想を具現する程度の能力』俺は妄想の中で描いた能力も力も武器も、世界でさえも創造出来るんだよ。

その力によって靈夢さんに特別な術式を施し、

『博麗』という幻想の世界を守る者たちを守護する神になつてもらおう・・・」

俺の疑問に対し、少年が説明してくる。

今初めて、少年の能力が明かされたが別段驚く事じゃない・

「靈夢が望んでる事なら、俺は口出しするつもりはないが、

それによるデメリットは？」

「そうだねえ〜。まず、人間の体をベースとするため

信仰を得ずまた必要ともしない特別な神になると言うことそして・・・・

一度、完全に彼女の存在がこの世界から抹消される。。。」

その一言で、完全にキレた。

「『契約解放』氷狐王 氷枯(ひようこおうつらら)!!!!

『日本刀 輪廻』うおらっ!!!!」

解放した瞬間に、俺の体から冷気が漏れ出す。

すぐさま輪廻の持ち手で!!シロを殴り上に吹き飛ばす。

・・・・・(双覇サイドアウト)・・・・

・・・・・・・・天白雲サイド・・・・・・・・

「痛いな・・・・・・・・それに、その刀。

氷柱の力を受け継いでるね俺の服がカッチンカッチンなんだけど。
どうしてくれるんだよ全く。」

関係ないと言葉ではなく、斬りかかるといふ行動で示してくる

主人公くん・・・・・・・・

「血気盛んだこと・・・・・・・・

元人間のくせして、戦闘狂みたいなのやっちゃな・・・・・・・・
まあそうじゃなきゃ面白くないけどね！」

瞬間、俺と双覇の周りを覆うように薄い膜が張られる。

もちろん。俺の作った結界だ・・

響く。

「ハア……！ハア……！」

今のも耐えきるなんて……一体どんな体してやがるんだよ……
未だ、一撃もまともに当てられていない双覇が憎々しげに

呻く……

「もうへばったのか？」

なら、もう終わらせてやるよ!!! 形態変化。『俺』↓『創造神』

コレが俺の全力の姿だ。」

全力を出した俺の神力は『夢現』（むげん）。

誤字じやなく夢現で、この世界に居る間俺は神力も霊力も妖力も魔力も、
全てが上限無し。

「誰が、へばったってえ……!?」

ちゃんと相手の様子を良く見たら良いんじゃないやねえか最強さん！」

「何っ……っつっ」

瞬間、俺の頬をかすめたのはクナイ。

しかも、この感じ……あいつまさか……

「羽が生えてるってことは、半人半妖形態とも

妖怪形態とも違うな……てことはそうか。お前ももう身につけてたのか『夢現』俺のと発動条件は違うみたいだけどまあ、その姿見たら大体分かる。」

リミッター解除のトリガーまで……

やっぱりこいつをこの世界に生み出して正解だったな。

「俺に一発だけでも、掠らせたのはお前が初めてだよ双覇。

そんなお前に敬意を表していや、こんなテンプレ必要ねえか? w w w

じゃ、儀式が終わるまで少し寝てな!!

そのころにはもう、幻想郷最強の巫女は存在しないことになってるけどな!

そう言つて、剣を大上段に構える。

「『解放』神火を屠ふる豪衝斬。

ふうく。。。。 やつと終わったか・・・さて、さつさと儀式を済ませるか。」

・・・・・・・・天白雲サイドアウト・・・・・・・・

その日、とある神社のとある巫女が幻想郷の歴史から消えた。

しかしそのことを知っている人物は存在しない知っているのは消した張本人だけだが

彼もまたその日以降姿を消し。

幻想郷の静止した時間は、またいつものように日常に還る。

何事も無かったかのように・・・博麗の巫女はまた受け継がれ先代の存在は歴史に、記憶に残らずに。。。

しかし、だれも知らない誰もが驚愕するであろう事件が会ったことをここに記す。

願わくばこの記録が『幻想』とならぬように。。。

第66話—黒翼の少女・・・結神の決意と別れ!

「そ．．．．．は!!!」

誰の声だろう。

声の高さは女性、それも女の子のものである．．．

「そ．．．．．は!!!」

なんだろう、誰を呼んでるんだろう．．．

酷く悲しげに聞こえる。なんだろう胸が痛い．．．

「そ．．．．．うは!!!」

そうは．．．．．双覇つて俺?

なら起きなきゃ．．．アレなんで寝てたんだろう??

「ううん．．．」

「ここは・・・？俺は確かあれ・・・何処に居たんだっけ。」

「双覇っ!!!!!!」

「よかつた目が覚めたんですね！・・・よかつたっ！本当に・・・」

起床そうそうに、目に飛び込んで・・・いや

物理的に俺にダイブしてきたのは『射命丸 文』俺の彼女。。。

「(っ)は・・・博麗神社？」

「どうしてこんなところにいや、それよりもこの食器・・・ガッああああ・・・」

「どうしたの!?!と心配する文の声が遠くに聞こえ。。。」

「目の前の景色に意識を持っていかれる・・・何度確認してもそこにあるのは

『二人分の配膳された昼食の跡』・・・」

「(なんだ!!!急に頭が・・・)」

「ここに住んでる巫女は一人暮らし・・・」

「たしか名前は・・・『博麗 蒼』(はくれいそら)・・・」

「違う!!!!!!」

「違ちがい!・・・博麗の巫女は・・・そんな名前じゃ・・・」

そんな名前じゃない。その名前には違和感がある・・・

そう言いきりたかったが、自分の記憶の中では確かに『蒼(そら)』だ・・・
黒髪の色が白くて、気が弱い感じで・・・

(誰だ・・・そいつ・・・)

俺の知ってる巫女は気弱じゃない・・・『そら』なんて名前でも無い・・・
でも思い出せねえ!!!!)

「どうしたんですか・・・双覇・・・」

博麗の巫女にまたなにか酷いことされたんですか?ならすぐに私がとつちめt・・・」

「ちよつと・・・待って・・・」

「文、今代の博麗の巫女の名前は?どんな容姿でどんな性格でどんな能力?」
「すぎるような思いで文に答えを求める。」

もしかしたら、俺が間違ってるのかもしれない体が疲れて記憶がおかしくなってるのかもしれない……

でも、なんとなくこの人物がいなかったことになるのは嫌なんだ・

「双覇……やっぱりいつの間にか頭とか打っちゃったんですか？」

今代の博麗の巫女と言ったら『博麗 蒼』さんで、容姿は黒髪で私より多少長いですがね。能力は『霊力を扱う程度の能力』で……

修業を良くサボる癖があつて、その所為で霊力の扱いすら能力に頼つてしまつて。うまくできない巫女さんですよ。」

彼女のその言葉を聞いて俺は、もう一度眠つてみることにした……

あの食器を見てから頭痛がすごい……それに何度もフラッシュバックする女性の姿どう考えてもこの神社の巫女服。

「あつ双覇……」

ふふっ！全く……ほんとに心地良さそうに寝ちやうんですから……

枕が無いと眠りにくいでしょ……(ぼすっ！)「

・・・少年就寝中

「ここは、どこだ・・・？」

うぐつ

「まただ!!!謎の頭痛フラッシュバックするあの食器・・・
そして謎の女性・・・」

「うう・・・ひぐ・・・んぐつ・・・」

思いだそうとすればするほど一層に、痛みや苦しきは増していった。

誰かを守れなかったのは解かった・・・誰なのかを思い出させてくれ。。。

頼む。頼む!!!

「俺は誰に謝らなきゃいけないんだ・・・」

俺は誰を守れなかったんだ。俺は何で守れなかったんだ・・・」

なにも、分からない・・・

解かりたいのに。思い出せない・・・思いだそうとするほどに苦しい・・・

守れなかった虚しさが積もる。

「俺は一体誰と昼ご飯を食べて、誰と笑い合ったんだ・・・」

あの時あの異変を起こしたのは誰だ・・・」

『陰陽異変』現博麗の巫女有能力じゃ、あれほどの異変は・・・

俺と祥磨、瞬や優が苦戦をするような異変は起こせないはず。

「思いだしたい・・・」

思いだせない・・・

「思いだしたい……」

思いだせない……

「思いだしたい……!」

思いだせない……

「う……うん……むにやむにや……」きやくやく。むにやむにやつて……
可愛い!／＼／＼(ぼそつ)ん……ああ、おはよう文。」

目を開けるとそこには、一人の女の子

『射命丸文』が居た。

「ええ。おはようございませす双覇!

どうしますか? 私は双覇となら何処でも楽しいですから疲れてるようならこのまま
眠っていただいてもかまいませんよ? なんなら添い寝してあげましょうか・

(ニヤニヤ)」

つい今、眠りから起きたのだが
どうにも体に全力で動いた後のような疲労が蓄積されているらしく
眠気は一向に減らない・・・

「ああ・・・頼む。

ちよつと調子が悪いみたいでさ、文と一緒に和らぐから・・・」

「ふえ!!!

い・・・いいいいいいいいいんですか!? あやややや・・・
もう寝ちやつてる・・・

ちよつとくらいなら、良いよね？」

．．．．少年少女添い寝中．．．．

「ん．．．んう。。。

あれ、なんか息苦しいような．．．もがつ!？」

二度目の就寝から覚め、ようやく眠気も無くなってきたと思い目を開けると
どアツプだった．．．．

何が？つて??

それは・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の恋人、射命丸文。

それだけならまだ良かった・・・・問題なのは俺の顔が埋もれてる場所・・・・
まあ・・・・なんだ。簡単に言うとなんの胸に埋もれてる状況だ。

「と・・・・・・・・とびかぐ・・・・・・・・

どうにばびでだっびゆぶしないと……」
冷静に状況を整理したら、鼻血が……
文のシャツに垂らしたらまずい!!!!

「ま……まぶは距離をとらないと……
なっ!?また首が固定されて……」

というか、前にも思ったけどどうしてこんな細い腕でここまでの力が出るんだ・
全然ふりほどけねえ!いや、血を垂らさないようにそれと起こさないようにあんまり
激しく動いてはないけど……

「ちよっば……まぶいつべ!!

ぼれじゃあばびで、我慢が……もごっ!(むにゅっ!)

ぬおおおおおおお!!!

誰か……助けて……

「ふわぁ・・・双覇。

どうしたんです？私の胸に顔埋めたりして・・・発情するにしては時期的に
早いはずですが。やっぱり今までにない種の狼天狗だから発情のタイミングも違う
のかしら。。。」

助かった!!!

文が起きた・・・・・・・・んちよつと待てよ。

「まあ、私は双覇が求めるのなら何処でも準備は良いですから関係ないですね!

それでは・・・・・・・・ん」

文が口元をこちらに寄せてくる・・・・・・・・
のわつ!!!マズイとどめが・・・・・・・・

「ちよ・・・・・・・・びよつぽまっぺぐれつ!!!!
まぶは首!首を解放して・・・・・・・・」

じやなきや、鼻血が・・・・・・・・

「へ。首……あややや！」

ごめんなさいつい、抱き枕にしちやつてたみたいですね……。(ぱっ)」

文の腕から、首が解放された瞬間一気に

厠に急ぐ(無論、すでに吹き出しそうになつてるこの鼻血を安全且つ的確に処理するためだ)

「ふう〜。助かった……。は！」

ち……違うんだ文！別に嫌だったとかそういうわけじゃなくて……

むしろ俺としては嬉しかったんだがまだせいぜい精神年齢15の俺じゃ刺激が強すぎたというかなんというか……」

茶の間に戻り、急いで嫌だったわけじゃないことを説明する……
 なんか俺、文に対して謝ってばっかだな。

「ふえ？ああ……。別に良いんですよ私はどんな形であれ双覇の近くに居るのが。

双覇を感じれるのが好きなんです。」

その少女の柔らかな笑顔に、一際大きく心臓が鳴った。

やっぱりだ。今までに俺なんかとデートしてくれた皆には本当に謝りたい気分だけ
ど

いつもそうなんだ。

君の笑顔は俺に力をくれる。君の涙はどこまでも俺を不安にさせる。

君が怒ると俺はその顔が可愛くてつい怒られてるのにふざけてしまう。

君が楽しむと俺も楽しくなる・・・

「ほんとに・・・俺は文に助けられてばかりで。

文に心配をかけてばかりだな・・・。なあ、文・・・。」

文の隣りに座りこみ、俺が声をかけると

その娘は「はい？」って疑いもなく振り向いてくれる・・・

この瞬間でさえも俺は手放したくないんだ。

だから、

「この機会にプレゼントがあるんだよ。」

これまでの誰にも渡したくない文にしか渡せない贈り物が・・・はい。コレ。」

そう言つて、小さな紙を渡した。

「何でしょうね？（かさつ）『白雲 文』（しらぐもあや）

え・・・コレつて・・・その・・・つまり／／／

文が顔を真っ赤にして俯いてしまった・・・

ほんつとにも・・・かわいすぎるだろ

「文。場所変えようぜ・・・」

玄武の沢に行こう。そこではつきり言わせてもらおう。」

どうにも、視線を感じてやりづらいから場所を変える提案をする・・・

具体的には6人分の殺気にも似た視線と一人分のバカの「ひやつはあああ

プロポーズキタコレっ!!!」て絶叫。

!!!!!!

・・・〈少年少女移動中〉・・・

神社から出ると、大分寝過ごしていたらしく

あたりはもう夕日が沈みかけていた・・・

「よつと・・・よし、到着！」

やっぱいつ見てもここの景色はすげえ壮大だな。」

玄武の沢―妖怪の山麓に位置する光苔という暗闇で光る苔が群生している沢。

河童の住処だったり、ここもあまりこそこそ話すのに適してるとは思えないがまあ景色も景色だしロマンチックといえればコッチだろう。

神社でつてのもの、ロマンチックなのかもしれないが・・・

自分の神社だしな。

第67話―お願い完了? 安定のフラグ回収乙でした―。

「文?一回離れるぞ……」

さて、どうせどっかで見てるんだろ?みんな。あとバカ。」

俺が、声をかけるとすぐにその辺の木の影やら岩の裏やらから

物音がして古河音をふくめ女の子が7人姿を現した……冷静に考えたら、なにをどうしたらこんなエロゲみたいな修羅場フラグが立つんだ。。。

「あ~~~~あ!!!やつぱりヒロイン級の女の子が

たくさん居ても、ラブコメの主人公相手じゃ正ヒロインが確立しちやつて敵わないんですね~~~~。

これじゃ、私の願い事(野望)叶ったんだか叶って無いんだか……」

いつものふざけた様子も、場の空気を読んでか一応は無く

白い大きな魔女帽子を目深にかぶって、表情を隠したバカ(古河音)が話しかけてくる。

「オイオイ!まさか、やっぱ気に食わないから

これまでのチャラにしてもういっかいとか言わねえだろうな・・・」

さすがに、ここからもう一周とかは無理だぞ・・・

せつかく文へのプロポーズが成功したのにそんな波風立てたくねえ!

それに、これまでの事だつて元はと言えばこいつを元の世界に戻すために

やってきたことで・・・

「大丈夫ですよー。ほら、私の体が光輝いてます

おそらくはもうそろそろこちらの世界に居られないということですよ・・・」

確かに、良く見ると古河音の体は光っていた・・・

といつてもホタルの光くらいなもので少なくとも輝いては居ないが。

「やっぱり、コンテニューしてルート選択からやり直さないとこの手のフラグは

簡単には移ってくれませんね・・・最後のほうになると一度確定したルートは変更

利かないから性質が悪い・・・。こうなったら、

リニューアル版で新たな選択肢とルートを解放するしかないようですね・・・」

「おいおい・・・。俺達の関係図を妙な知識で解き明かそうとすんな!」

お前の言つてる事が少し理解できちまう自分が嫌になるよ……」

ルート……つまりは、恋愛ゲーや18禁ゲー（要はエロゲ）においてどの子と付き合ったりするかの分岐の事だ。フラグ（旗）をその子の性格によつて変えながら進めないと狙っていないヒロインに行つたりするのだ……

俺も、18禁ゲーはやったことないけど実のところ彼女ができた時ように有名どころの恋愛ゲーはやってたことがある……

（同居し始めたころにベッドの下の本共々文に吹き飛ばされたが……）

「アラ、結神様つたらー！ ついに白状しましたねっ!? 今度オレと一緒に語り合わないかい？」

うっかり、失言したところを耳聴く聞こえていたらしい古河音は

顎に手を当て昭和のナンパのように問いかけてくる。どことなく、嬉しげなのは素直に興味の合いそうな奴を見つけたからだろう……

一応、共感はできる俺も中学入ったころには立派なオタクだったから祥磨が居てくれて本当にうれしかったしな。

「悪いな、ナンパ師さん。

あんたは確かに可愛いが・・・俺には結婚を約束した彼女が居るんだ。

俺にとっては誰よりも可愛くて綺麗で強い彼女がな！（にこっ）

だから、そのお誘いは断らせてもらう」

その発言の時の彼女はいつものふざけた調子じゃない、

普通に可愛いオタクっ娘に思えた。見間違いだったのかもしれないけどw

だから、多少真剣に断ることにした。

「ん。そうだ、この出会いも何かの縁だ俺と『契約』してくれないか?」

これまでもそうだったように、ごく普通にそう問いかける・・・

すると。

「なっ!わわわわ・・・私に魔法少女になれって言うんですか!?

そうやって騙くらかして最終的に私を魔女にするのが目的なんですね。このイン

キュベーターめっ!!!」

突然、持っていた『しるばーど』と書かれた箒を振りまわす・

「誰がインキュベーターだ!? つくかそもそもお前魔力あるんだから普通に魔法使いだろうがっ!!!」

ちなみに、インキュベーターというのは

『魔法少女まどか☆マギカ』において、主人公まどかを魔法少女にした張本人のことらしい・・・俺も、ネットでたまたま見ただけだから良くは把握していないが。

本来の意味は卵生の生物の孵化を人口的に促す装置らしい・・・さすがに今回は前者の事だろう・・いくら俺の嫁が鴉だからってさすがに後者の意味ではないはずだ。

「はあ・・・そうじゃなくて、それが俺の能力なんだよ。」

最初に言っただろ? 『結を司る程度の能力』この能力は元は『契約を司る程度の能力』『他と繋がり昇華する程度の能力』って二つの能力だったんだよ。

神になったときに一つになってな。俺は他人と契約して能力や力を少しづつ借りる契約した人には俺の力が渡るんだ。」

とりあえず、落ち着かせてしつかりと説明する。

「なんだ、そういうことですか・・・」

「しっかしアレですね・・・ザ・中2病の考えた能力みたいなチート差ですね

私の『魔法を把握する程度の能力』に目を付けたのはお目が高いですが・・・
すいません私はいらないや。そういうの。」

少し、少しだけ意外だった・・・

こう言ってしまうては失礼かもしれないが彼女はこういう美味しい話（自分で言うのもアレだがw）には二つ返事で乗ると思っていた。

「今、意外だと思われてるでしょうけど。」

私って『自分で強くなりたい派』なんですすよね。もちろんチート主人公や

主人公補正は否定しませんしむしろ胸熱ですが・・・ほら、良く隠された才能が努力によって！みたいな展開あるじゃないですか。

私アレのタイプだと思うんですよく。

空を飛ぶのもコッチの幻想郷だと速いほうだしスペカや弾幕も工夫すれば

魔理沙さんやルーミアちゃんにも、結構当たるんです。

魔法のバリエーションも増えてきましたね！

だから、私はこの『才能』でいつか魔理沙さんや霊夢さんですら手の届かない実力者

になりたいんです。」

おしげもなく、歯を見せにかつと笑う少女に正直外を通り越して『驚いた。』
彼女はまったくもって疑っていけないのだ自分の実力を。

言つてしまえば、彼女の魔力は『そこそこ』

見る者が見れば一発で解かる。こつからどんな才能を引き出そうが

あの化け物（霊夢と魔理沙）には勝てないと・・・

でも、彼女は信じている『信じ切っている。』

どれだけ無謀だと言われようが自分の力を・・・可能性を・・・

「ちっ・・・そうかよ。なら、がんばりな。」

つい、舌打ちしてしまった・・・

自分は出来なかつた『自分を信じる事』を成し遂げている彼女に。

「いえーすっ!!」

古河音の突きだした拳に、自分の拳を軽くぶつける。

この少女の願いが叶うように『この少女の周りにいつもにぎやかな人々との繋がり』
ができるようにと、願いをこめて。

「と。契約の代わりと言う訳ではありませんが……(しゅるっ!)

はいコレ。私の思い出と汗と油とフケが染みついた『髮紐』をどうぞ!!!!
少年漫画でよくあるでしょ? 『また出会うための印交換』みたいな!」

確かに、スポーツ物では結構あるかもしれないが……

またえらくリアルな人体の汚れをだしてきたなオイ……思い出だけで良いだろうに。

「……お、おおう……。」

恐らくは、キチンと洗ってるはずなのでそんなに汚いはずは無いのだが

言われたことが言われたことなので、つい摘むように持つてしまう……

周りの女性陣や古河音自身も、こればかりはこういう反応でも仕方ないとおもったのか怒りも悲しみもなかった。

「じゃあ……俺もなんか渡さねえと……あ。

まずいな。基本的に祥磨の能力で必要なものは必要な時に出してるから私物とか

あんまり……。」

というか、全然と言っても良いくらいに私物は持っていない。
ライトノベルくらいポケットに入ってたかと思つたがそれも無かつた。。。
なにしろ、この時代に高校の制服ではどう考えても変な格好なので今は
基本男物の和服（じんべえのような）だからだ。

「それなら、大丈夫ですよ？」

もうもらつてますから・・・・・・・・・・」

はて。自分は古河音に何か贈り物をしたことがあつたらうか？

いや無い。一応デートということもあり基本的に食べ物を買つたり買物を出来る
ようにお金は用意しておいたが・・・

贈り物は長いデートの中で文に対する『名前』だけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・結神様。」

「昨夜、お風呂の脱衣所から『パンツ』が無くなりませんでしたか？」
・ ・ ・ ・ ・
時が、止まった。

いや、実際にはその場の空気が一瞬で凍りついた・ ・ ・
たしかにあった。昨夜は椀の事で結局眠れず一度風呂にはいったのだ・ ・ ・
そこであがった時に・ ・ ・ たしかに消えていたことが会った。
しかし、その時は無くなったからと言って新しいのを取り出せる下着を探そうという

気分ではなかった。男物の下着を盗む変態など普通は居ないのだから。そう。『普通』は……

「……おい。」

「はい。なんででしょう?」

バカがすごく良い笑顔で問いに応える。

その先を聞くのが、ものすごく嫌になったどうせなら発情した棍が持つて行ったとかの可能性のほうがどこのエロゲだ。って感じだがまだ良い……

「俺は、信じてるぞ?」

お前がまさかそこまで、人として堕ちて居ないと……

俺の恐る恐るの問いに、バカはいつぞやと同じく

喉から笑い声をくつくつくくとだし、そして……

「残念でしたねえ……。パンツはすでに我が手の中に!!」

「本当に残念だよっ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

本当に、いろんな意味で残念だった

別世界からの依頼者として出会った少女がここまで、変態だったとは……
俺の感心にも似た驚きを返してほしい。

「おう〜とつ!!勘違いしないでいただきたい。

別に私はこのパンツに顔埋めて、クンカクンカしてたわけじゃありません。
ヒロインがそんな汚れ仕事やるわけありませんからね……」

「人のパンツ盗んでる時点で十二分に汚れた。バカ野郎!!!」

てか、頼むから盗んだ用途ソツチにしてくんない!?ソレ以外だと続き聞くのが
怖いんですがっ!」

正直、今の俺が口走ってる内容も相当ひどいが……

なりふり構わない。俺はあいつを女子じゃなく腐女子(変態)という認識にする!

「言つときますが、絶対に返しませんよ?」

これは私が元の世界に帰った時の夢に必要なものなんですからっ!!」

ふたたび、くつくつくと喉で笑う変態……

ついさつき告白した場所だというに、どう考えても二人の思い出の地じゃなく
トラウマの地になりそうだ。

「私の夢……ソレは、

このパンツを霖之助さんにプレゼンツ！すること……
好奇心旺盛な、霖之助さんなら『神様のパンツ』とでも言えば受け取るでしょう……
そして、その時私の願いは完全に叶う。そう！間接パンツの夢が!!!」

「間接パンツって何だコラっ!!!」

間接キスみたいな感じで、言うんじゃねえ!!!」

もうヤダこの変態……

俺じゃ、扱いきれない。

「まあ？ある意味間接キスと言えなくもn「さすがに自粛しろバカ!!!」
はいはい。たしかにR15じゃ庇いきれないセリフですね」

この野郎……

いい加減に跳びかかってやろうと思ったが異世界の住人が帰る時に跳びかかったりしたら、なにが起こるかわからない。

そんなことを考えていると、古河音の体の光が強さを増してきた。それこそ視認しにくいほどに・・・

「おおつと!!!そろそろ時間のようだ・・・」

さてそれじゃ、私の髪紐大事にしてくださいね結神様☆

アドュー サヨナラ また会う日まで! サ・ラ・ダ・バーーーーー!!」

最後の最後まで、ネタとメタさをぶっこんでこの日一人の珍客が俺たちの世界から消えた・・・

ついでに、俺のパンツも一枚消えた・・・

「いや、いい感じにシメようとすんな!

どう考えてもバットエンドだから!!今すぐ戻ってこいーーーー!!!

「うわー。俺の嫁が覚りの能力を身につけてるー」

文が強くなってうれいなあ~~~~(棒).....

えちよ。みなさんそれマジでヤル気じゃないですよね?

待つてさすがに死んじやうよ?ねえ!ダメだ...もうおしまいだああく。

みぎやあああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

今回の教訓。

「気付かないうちのフラグ建築は死亡フラグに繋がる。」以上.....

番外話―神様の修羅場フラグ編まとめ

さて、そんなやさつさとキャラと能力の説明してくぞー。

皆気合いれてけよー(棒)

大「作者が一番気合はいつてねえだろうがっ」

うるせえなく。二つ名吟遊詩人のくせに肉弾戦!!!!!!!

俺はリア充が目の前に居て萎えてんのー。

大「私的理由で気合を落としてんじやねえよ!

お前も、もうちよい瘦せればすぐに……………あ」

ん?今なんて言つた大和……………

最近よくボーつとしちやつてね。良ければもう一回言つてくれない?

優「はあ……………最初からなに、文字数かせいでるんですか。

いいから早く一人目紹介してください。」

はあ。わかつたよじやあ一人目は……………

〈上白沢古河音〉かみしらすわこがね……………種類 人間(魔法使い見習い兼腐女子)

二つ名 人里のいたずら娘 神すらたじろぐ奔放娘

能力・・・魔法を把握する程度の能力

双覇から言わせれば、ただの変態腐女子！だけど・・・

魔法を使うという普通の外来人とは違う可能性に満ちた少女。

自分自身の力で、幻想郷最強クラスの異変解決のエキスパート

『博麗 霊夢』と『霧雨 魔理沙』を倒すという野望のため双覇との契約を断った。

意外と努力家な一面があり、

弾幕やスペカも幻想入り当初より格段にレベルアップし進化し続けている。

能力の『魔法を把握する程度の能力』は目の前で、展開されている魔法を見る事で

『内容』、『度合い』、『使い方』まで瞬時に把握できる。

呪いや魔法薬、魔導書（グリモワール）にかけられている魔法も当然理解できるが、

性質上苦手なものは当然使えないし理解しても修練を積まなければ使えない。

（ちなみに、得意な特性は『風』と『水』）

人格は『萌え』を探求する所謂、オタクツ娘であり

さて、今までと違いのあるキャラは改めてキャラ紹介しようと思っただけど．．．
書くことないやw

大「なら、とりあえず容姿とか技の整理とかしたらいいんじゃないか？」

それだっ！優華のおまけだけど発想は、良いな！

それじゃそうしようか。

容姿—今のところは男物の和服。腰に『結月』と『電桜』を差して『輪廻』は普段は一本の脇差にして懐にしまっている。

髪は、少しだけ伸びたらしい．．．

そのうち切るから伸ばしてみるのも検討中だとか。

技のリストとしては．．．

〈スぺカ（予定）〉

『刃符』一夜の惨劇 『神域』白雲式多重結界 『結刃』結界爆散陣

『神斬』神を断ち切る龍の爪 『神技』人妖一对の理

〈剣技〉

『白雲流』常世の五月雨、『白雲流』疾風狂乱の日照雨、

『白雲流』龍焰躍る虹の架け橋、

『白雲流』蒼天に刺す死化粧、『白雲流』結の乱気流、『白雲流』劍神天舞の嵐
こんな感じですね！

まあじつさい技の種類は契約解放を含めれば無限になりますのでとりあえず
登場したものを書いときます。

(劍術の『結の乱気流』、『劍神天舞の嵐』、『龍焰躍る虹の架け橋』は

『玄武 水滸様』に考案していただいたものをこちらですこし改造しました・・・
ちなみに『とある東方の知識録』にて登場してます)

水滸様。ありがとうございますっ！

優 「そろそろ終わりにしないと、番外にしては長すぎじゃない？」
そうだな。

今回呼べなかつた優華の登場回でもあつた訳だけど次で最後だな。

それでは、3人目！

〈博麗 蒼〉はくれいそら・・・種族 人間

二つ名 博麗の巫女さん

能力・・・霊力を扱う程度の能力

霊夢消滅に当たって、そのズレを修復するようにあらわれた巫女。

基本スタンスは能力さえ使えれば妖怪にあんまり負けないので修業は（全くと言って良いほど）しない。

能力の霊力を扱う程度の能力は、自身の霊力を最大まで引き出し

霊力弾や形態変化、性質変化等を行える程度。

形状変化などはソレに特化したものにも劣らないほど行える・・・・・・・・・・
はずだが修業をしないためそこそこである。

姿こそ、小柄なためおとなしそうな印象をもつが性格は酷く飽きやすく

新しいものへの好奇心にあふれている。（そのため、同じことの繰り返しである修業が嫌い。）

博麗の巫女特有の天性の『才能』と『勘』は健在で今のところ、

出会った妖怪には全戦全勝。妖怪たちの脅威の対象となり・・・・・・・・・・

『博麗の巫女』の印象を確立した。

よしっ！こんなとこだな。

ここから博麗の巫女は妖怪と人間が手を取り合う世界を目指すんじゃなく妖怪から人間を守る『人間の切り札』になっっていく。

あつ。〈天白雲〉 〓俺を忘れてた・・・

そんじゃほんとにラスト！4人目

〈天白雲〉 あめのしらくも・・・種族 創造者（創造神）

二つ名 妄想を創造する中二患者 最強の夢現人（むげんびと）

能力・・・妄想を具現する程度の能力

俺の説明としてはそうだな。

めつたに登場しない最強・・・・・・・・以上

優「いや！もうちよつとなにかあるでしょう・・・」

これじゃ読者納得できませんよ。」

はあ・・・。わかったよ・・・

能力としては中2特有の恥ずかしい妄想を（自分の創った世界限定で）

ノーリスクで具現出来る。

祥磨の能力に似てるように感じるかもしれないが。

アイツがなにを呼び出すにもまず想像する必要がある一方、俺はソレを必要としない過去に妄想の中で使った能力や、武器、技、世界

それらすべてをストツクでき、今までに妄想しなかった武器だとしても妄想さえできれば形などを想像しておく必要はない。

こんな感じで終わりだな・・・

神様のフラグ回収終了！原作入り&紅霧異変開始！！

第68話―紅き霧と紅白の巫女

「うしっ！それじゃ行ってくるよ文。」

氷柱。文のことしっかり守ってくれ頼んだぞ？」

ここは、妖怪の山の山頂付近の木造家屋・・・

要は文の家。

「しかし、あれからもうだいぶ経ったんだな・・・

あちー！！こんな真夏でも哨戒任務あるってんだから天魔様も人使い粗いよな・・・」

古河音がこの世界を後にしてから、約500年ほど経った。

外の世界からゆかりんが連れてくる妖怪たちもずいぶんと種類が増えたらしい・・・

まあ、神社に行く以外はここで新婚気分をずっと味わってたけどな。

「双覇！「ん？」」

霊夢さんのところに行くんですよね？嘘じゃないですよ？」

ああもう・・・俺が、出かけるたびにコレだ・・・。

可愛すぎるぞまったく。

この可愛い娘が俺の嫁なんて・・・信じらんねえな。

「文。「はい。」(ちゅっ)

大丈夫、ちよつと参拝客のお願いを聞いてくれるだけだよ・・・

お昼には帰るからご飯お願いな？」

少し瞳の濡れた少女の顔をこちらに向かせ、そつとおでこにキスをする・・・

文との結婚はとりあえず式を執り行うのは少し後になることになった・・・

ゆかりんに相談してみたら、別に結婚すんのは勝手だが

『子孫』やらの面で今までに無い何かが起こる可能性があるのと、俺ら夫婦が

式に呼びたい人達が異世界の者もいるのでそう簡単に挙げる事が出来ないらしい。

それと文は、新聞の執筆もあるから料理くらい俺がする気だったんだけど・・・

「こういうのは奥さんの役目です！しっかり夫の胃袋をつかんで見せますから！」と

譲ってくれなかった・・・

・・・〈少年移動中〉・・・

「まあ、實際文の作ってくれるご飯は美味しいし。

元々心をわしづかみにされてるんだから今さら、料理に関しては何も言わないよ。」

空を飛びながら、だれに言うでもなく自慢げにぼそつと口に出す。

料理は俺と出会ったころ、天魔に教えてもらったりしていたらしい・・（元々女の天狗は上司から教わったりもするらしいが。）

なぜ、文がわざわざ天魔に指南を求めたのかはわからない（聞いたら顔を赤くして、しゃべらなくなってしまう。。）が、

あれだけ美味しいものを手際よく作れるのだから相当努力したのだろう・・・

「初めて、文の手料理食べた時はつい泣いちゃったな。」

手のひらに傷がついてて・・・」

慣れないことでも、頑張ってくれたのが良く解かった・・・

「おっと、そろそろか・・・」

ありやりややつぱり今日もだいぶ楽そうだな．．．．」

下降しつつ、下を見下ろすと案の定人っ子一人見当たらない．．．

「お〜い。霊夢．．．．」

今日も参拝客は来てないのか？」

そうして、しっかりと地面に足を踏みしめて歩き．．．

縁側に座り込みお茶をすすっている人物。

独特の腋が完全に見えるデザインの巫女服を着た、黒髪の少女に声をかけた。

．．．．〈双覇サイドアウト〉．．．．

．．．．．．．．．．〈???サイド〉．．．．

はあ。。。。また来たわね。

「どうも……。ご覧のとうり人っ子一人いやしないわよ。

アンタ本当にここの神様なの？」

正直、ここまで信仰されないのはむしろ本当にこの神社に神がいて信仰を得られることを知らない人が多いからって気がする。

「失礼だな。俺はれっきとしたここの神だよ！

紫のやつに聞いただろ？」

私は、博麗神社と呼ばれる神社の巫女……。通称 博麗の巫女

名前は『博麗 霊夢』はくれいれいむ

「そうねー。

でも私は人間だもの、妖怪の言うことなんて信用する気は毛頭ないわよ。

たとえそれが紫やアンタみたいに、敵対してない妖怪でもね……」

そう。博麗の巫女の仕事は人間を守ること……

そして妖怪は人間の敵。なら博麗の巫女であるわたしが妖怪の発言を完全に信じきるの馬鹿げてる。

「あいあい。わあ〜つてるよ!

全く……まだ十にも満たないころは「双覇兄ちやくん!」って
素直に可愛かったのにな……」

……(怒)

ほんとに人の神経を逆なですることしか、言わないわね。。。

「うっさい!!!」

どうせ、すること無いんだから縁側にでも座ってなさい!!!
お茶持ってきてあげるから!」

……〈霊夢サイドアウト〉……

……〈双覇サイド〉……

「……縁側にも座ってなさい!!!」

お茶持ってきてあげるから！」

くくくつっ!!!

どうやら、逆鱗に触れてしまったらしい……

「にしては、お茶は出してくれるのか……………」

女心って良くわかんねえ……………」

いや、純粹に客だから茶くらいは出すってことか？

ソレはそれで嬉しいような、悲しいような……………」

「でも、霊夢の茶は最高にうまいからな！」

客（つてか神だけど）つてだけであの茶を飲めるなら役得、役得！

ん？あれは……………またか。」

ちよつと、テンションを上げながら

縁側に向かつて歩くと上空に気配を感じた、見上げてみると案の定……………

真つ黒な帽子をかぶった金髪の女の子が猛スピードで突っ込んでくる所だった。

??? 「霊夢……………!!!遊びに来てやったぜ……………!!!」

「あの野郎……やっぱり速度落とす気は無いらしいな。」

『安全』 交通ルールは守りましょう コレでも喰らえ!!」

!!!」

相変わらず、神社に突っ込む気マンマンの魔女っ娘に向かって

俺は何枚も作ってるスペカを発動させた。

「威力も、速度も無い代わりにとにかく量に重点を置いた弾幕だ!」

??? 「そんな、弾幕じゃ私には効かない! (ぐいつ!!)」

コレは、しとめるための弾幕じゃない

だから威力は必要ないし速度は向こうから来る暴走箒があるからコレもいらぬ。

俺はこの弾幕を避けるために回避しようと速度を落とした彼女を……

「今だな。輪廻—縛布……よつと!」

俺のつばやきで、輪廻は大きな布に形を変え

少女に向かって行き……綺麗に箒ごとその体躯をからめ捕り縛った。

「なああああああ!!!」

おい！コラっ離すんだぜ!!私がおかしかったか!？」

いやいやいや。

どう考えても、神社に突っ込んできたのが悪いだろうに・・・

「速度違反だ。」

魔理沙お前、あのまま神社に突っ込んでくる気だったろ?」

さすがに、他人から見たら俺の方が犯罪者にしか見えない絵面なので

輪廻を脇差に戻し問いかけると少女・・・『霧雨 魔理沙』きりさめまりさ

は悪びれもせず。

「ん?それがどうかしたのか?」

別にあのまま突っ込んでても神社が倒壊するわけでもないんだから

気にしないんだぜ!」

むしろ、堂々とニコツとした良い笑顔でサムズアップしてくる魔理沙・・・

「そりゃ、お前には実害ゼロだからな!」

霊夢がここに住んでんだよ!! わかってやってるだろ! 怒られんのは俺なんだぞ……。」

縁側や居間がぶつ壊れるたびに、怒りの弾幕噴らつてしかも何日もかけて修理までやらされるんだ!!!
そのたびに、文にはさみしいって泣かれるし!!!

「とにかく! 今度からは速度落としてこい!!!
いいな? 次はこんなもんじゃねえからな……(怒)」

多少、怒気を含めて注意してみたところ

一瞬で『シユン』とした……あれ? ちよつと怒気が強かったかな……調整がムズいんだよな。

俺は、縁の神として生き物の感情にもだいたい密接な神だ。だから怒気等の自分の感情が強めに相手に伝わるらしい……

「ちよつと〜どうしたのよ双覇?

あら、魔理沙じゃない弾幕ごっこのお誘いだったら受け付けないわよ？
面倒だし・・・」

弾幕ごっこというのは、少し前に紫が考案した

『霊力』、『妖力』、『魔力』、『神力』を弾幕として放ちその被弾数によって

勝敗を決するという『妖怪』に『人間』が、つまり強いものに弱い者が勝つための
ルールだ。

無論、この幻想郷の治安とバランスを保つためのもので
詳しい説明はやれそうな時にやる。

「違う違う!!!」

ほら、見ろよあの空！きつと『異変』だぜっ!？」

異変。嫌な予感がする・・・

「はあく・・・」

真夏にしては、ちよつと肌寒くなってきたと思つたら・・・

ほんと面倒臭いわねくくく!」

霊夢が隣りで、怒りマークの浮かびそうな勢いで叫び声を上げる・・・

それもそうだろう・・・『異変』。博麗の巫女という存在の一番明確な存在理由
幻想郷全体に及ぶような、摩訶不思議な奇奇怪怪な出来事・・・
その日は唐突に・・・幻想郷中を覆うように『紅い霧』がかかり。。。

『日の光』がその地から消え失せた。

第69話―白黒の魔法使いと紅白の巫女＋普通の神様

紅霧異変―吸血鬼レミア・スカーレットが自身の弱点である日光を消し去り
昼間だろうと関係なく活動するために妖力で出来た『紅い霧』で幻想郷を覆うという
異変。

「俺の記憶の通りなら、確か大方こんな感じだったはず。」

今回、起こってる異変がソレだ。

俺は特に用意する物は無いので今はストレッチしながら頭の中で今回の異変の情報を思い出していた・・・

「はあく・・・コレがただの霧なら別に私が出る必要もないけど・・・」

この濃さも範囲も色も何もかもが異常ね。

これじゃ洗濯物が乾かないじゃない!!」

神社の中から、準備を終えた霊夢が出てきてそんな愚痴を言いだした・・・

気になるときは間違いなく霧によって洗濯物が乾かなくなることに。じゃなくて、妖力を使った霧で覆われた所為での人体への影響だとおもうが・・・

まあ、こうじゃないと霊夢じゃないよなw

「おいおい霊夢。

どうせ、ボーっとしてても参拝客は来ないんだから少しでも活躍して

参拝客ふやそうぜ？」

俺は、そう言っでなんとか目の前でさっそくだらけ始めてる腋巫女のモチベーションを上げようとするが・・・

「博麗の巫女（私）が、異変を解決したところで

誰も感謝しないし参拝にも来ないわよ。異変解決が仕事の巫女がその仕事をやってるだけだもの。」

不満タラタラの返事を返されて、こちららも乾いた笑いしか出ない・・・

「ま、その『お仕事』すらもさぼっちゃったら本当に参拝客（来るもん）も

来ないから私の出来る範囲でやるけどね・・・メンドくさいけど（ぼそっ）」

一応、責任感は強いらしい・・・

博麗の巫女という仕事をやると決めた以上は何がなんでも、面倒でもやりとおす。ということらしい。

「そうかい……そうだな！

じゃあ霊夢の気が変わらないうちに出発！……したいんだけど。

魔理沙のやつがまだらしいな。」

ほんとマイペースなやつだなあ

自分から、解決に行こうぜ！って言っというて遅れるなんて……

「まあ……魔理沙だしね（苦笑）」

霧も発生したばかりでまだ人里への被害は出てないでしょうから待ちましようか。」

俺は、そうだなw

と同意してとりあえず二人で縁側に座って待つ事にした……。

．．．．．〈少年少女祈祷中〉．．．．．

「おいおいおいおい．．．．．」

さすがに遅すぎると魔理沙のやつ．．．」

お昼前に突っ込んできて、皆で異変解決に向かうと決めてからすでに

半日近く時間が進みあたりは暗くなっていた．．．．（ちなみに、正午に一度帰宅して文には絶対に取材には出るなど言っておいた。）

「悪い！遅くなった!!」

噂をすれば．．．

という奴で、遠目にこちらに向かって猛スピードで飛び込んでくる少女の姿を確認。

「ふう〜．．．．．到着!

さあ、行くとしようか!!!」

にかつとしながら、サムズアップする金髪の魔女っ娘。

うん。元気なのは良いことだよな……

「いや、お前の所為で遅れてんだよ!?

なに「遅かったな?」みたいな空気出してんだよ! 「遅くなつて悪いっ!」つて
空気出せよ!!」

「うっ! ええくと……そのく……」

ZE? ☆

おれの文句に、彼女は何やら迷つた拳句にネタ発現をかました……。

この世界にはまじで東方M—グランプリでもあるのか……? というか……。
殴りたいこの笑顔……

「何やってんのよあんたら……」

良いから、準備できたんなら早く行くわよ? 本当にこの霧迷惑なんだから。」

呆れながら、飛び立つ霊夢のあとを追うように

俺と魔理沙も飛び立った……

……〈少年少女移動中〉……

「『靈符』 夢想封印!!!」 「『恋符』 マスタースパーク!!」

えっと……

今何が起こってるか、説明しようと思う……

思うのは山々なんだが……

「『夢符』 封魔陣!!!」 「『魔符』 スターダストレヴェアリエ!!!」

正直に言うとな、靈夢も魔理沙も最初からクライマックスだ!!!

というやつらしく目の前の情景が一瞬で変化していくため説明が出来ない……

なにから言っているのかわからん……

あ。青い髪の妖精の女の子と緑の髪の妖精の女の子がぴちゅった……

まずい! 落下してる!!!

お友達にチルノちゃんが迷惑かけてしまつてごめんなさい。あ。

チルノちゃんつていうのはその青い髪の子のことで私は、

『大妖精』だいようせい

と言います皆からは『大ちゃん』つて呼ばれてます。」

そんな感じで、お互い自己紹介を終えて

チルノちゃんという子を大妖精に任せて二人の後を追った。

・・・〈少年移動中〉・・・

「うわくく。こりゃ酷いな・・・可哀そうに。」

大ちゃんに二人の行つた方向を教えて貰い、飛び続けることちよつと。

なにやら頭の悪い彩色の『真つ赤な館』が見えてきたので降りてみたら・・・

惨い事に門がブチ破られていた

どう考えても「はいどうぞー」じゃなくて「降参など、誰が許可した? (どごん!)」
って感じの情け容赦の無い破り方だ。

??? 「誰か〜。助けてくださ〜い! このさい、咲夜さんでも良いですからー!
巫女を通したバツは受けますから助けて〜!!」

俺が、心の中で合掌しつつ門(とは名ばかりのさら地)を後にしようとする
と突然! そこらに散乱している大き目の瓦礫の下から女の声が出た。

「はあ〜・・・」

『契約解放』! 炎狐王 氷柱(えんこおうつらら)

瓦礫を『焼却』」

なので、先を急ぎたい衝動を抑えてひとまず助けることにした。
氷柱の炎の力を使って瓦礫のみを綺麗さっぱり焼却する・・・

??? 「だれか〜!!!
・・・て、あれ?

私いつのまに、自力で脱出してたんでしょ・・・まあいいかお昼寝お昼寝〜」

すると、瓦礫の下からは中国の軍服のようなものを着た女性が出てきた……俺より身長は多少上で胸は文以上……は！俺は何を考えてるんだ。

「いやいやいや、門番さんよー。」

あんたの上司やら雇い主やらが中で戦闘してんに寝るのは酷いつてもんだぞ？ それに侵入者はもう一人いるしな？（びゅっ!!!）うおつとー！」

話しかけた瞬間に、綺麗に俺の顔の前に蹴りを突きだす中国女。

まあ本来なら今の蹴りで首を折るか飛ばす気だったのだろうか……

「ありや？瓦礫の下で強そうな気配を感じたから注意はしてたんですが……今のを避けれるなんて……貴方何者ですか？」

「こつちが聞きたい……いきなり人の首を折る気できやがって……

お前こそ何者だ?！」

俺がそう、問いかけると……

「あはは……。私はただここの門番をしてる普通の人間ですよ?」

まあ『気を使う程度の能力』を持っているのは普通とは違うかもしれませんがね。申し遅れました！

『紅 美鈴』ほんめいりん

と言います。これからよろしくお願いしますね？」

と、普通に自己紹介してきたのでこちらも名前、能力名と簡単に自己紹介して通して貰った（霊夢や魔理沙にポコポコにされた所為もあってちよつと戦うのは無理らしい）

．．．．〈少年移動中〉．．．．

美鈴と出会った門を後にして、屋敷に入る直前。

俺の眼に見えてほしくないものが見えてしまった．．．『黒い翼』に『黒い髪』、『一眼レフのカメラ』に『ネタ帳』を持った可愛い少女。

「おい文．．．．」

「何やってんだよこんなところで？」

「あややや?! ばれちゃいましたか~~~~~」

何って取材ですよ取材! 突如現れたこの紅い館の謎を暴こう! と
思っただんですが……」

文の話によると、なんどもこの館に近づこうとするも失敗

なぜか何度も同じ所に戻るといふ現象が発生したのが、原因でついさつきその現象が
消えたとか……

「へえ、となると考えられる理由は今まさにその現象を引き起こしていた奴は
それどころじゃない事態に陥ったってとこだな。」

ならこつちとしては、好都合。

そんな現象を起こせるのはこの館の中じゃ一人しかいない……

【完全に瀟洒な従者】 『十六夜 咲夜』 いぎよいきくや。

「とりあえず、文は戻れ!

取材ならこの件が終わった後で俺からこの住人に頼んでやるから・・なっ?」

「嫌ですよ〜だ!」

そんなに、帰ってほしかったら私に追い付いてみるんですね!!!」

黒い翼を羽ばたかせ、文が館の中に入った瞬間!

その体が無数の何かに刺され吹き飛ばされた・・・・・

第70話―時を操る瀟洒なメイド と 激昂する結神

．．．．〈靈夢サイド〉．．．．

「ほんつと！異変を起こす奴つてどうしてこう。

自分一人で起こさないのかしら．．．数がいるからより面倒なのよね〜」

すでに私が出会った（倒した）だけでも、

妖精×数十（まあ妖精は遊び感覚でしょうけど．．．）、妖怪×2

「それに、まだ出てくるでしょうし．．．．

ほんと迷惑な連中ね〜〜！」

??? 「あら？迷惑な連中はそちらのほうよ。

お掃除の邪魔ばかりして、ついて来ても私は絶対にお嬢様には会わせないわよ。」

無駄に広い屋敷（というか、外から見た時より確実に広い．．．）の

中を飛び、勘を頼りに進んでいるとなにやらエプロンをつけて掃除中らしい女が居た

「そんなに、汚したかしら？」

私はコレでも巫女でねどちらかといえは綺麗好きな方なのだけど。」

女が悪態を吐いてきたので、私がそう返すと・・・

「ええ理解してるわ・・・博麗の巫女。

人間としては異例の桁はずれの霊力と実力を持つ巫女で・・・お嬢様の目的を阻む者
つまり、私の敵!!!」

女は、そう叫びどこから取り出したか数十いやもつと。

無数とも表現すべき数のナイフを投擲してきた・・・

「はあく。なんなのよ！

アンタにとってその『お嬢様』がどんだけ大事なのかは理解できないけど・・・
せめて、名前を名乗ってから攻撃したらどう!？」

私の問いかけに対し、顔をこちらに向け・・・

「もう死ぬことは確定しているのだから、

死人に自己紹介するみたいで気が乗らないけどまあ、お嬢様のメンツを私が汚すわけにはいかないものね。

私は、誇り高き吸血鬼レミアお嬢様に使えるメイド長。

『十六夜 咲夜』いざよいさくや よ。」

「へえ。今回の異変の主犯はそんな名前なのね………

ならさつさと案内していただける？メイド長さん。それと、

私の名前は博麗の巫女じゃなく霊夢よ。

『博麗 霊夢』」

向かってきたナイフ全てを、お祓い棒や弾幕で撃墜しメイド長『十六夜咲夜』に
問いかける。こいつを倒してさつさと主犯の元へ行く!!!

……〈霊夢サイドアウト〉……

．．．．〈咲夜サイド〉．．．．

「．．．．なら、さっさと案内していただける？メイド長さん。」
つつ!?

あの量のナイフを．．．。しかもこの10年間お嬢様を守ることだけを考え、
訓練した私の投げナイフを．．普通、人間なら怖がるはずでしょ．．。

「どうして．．．．どうして怖がらないの!?

あなたは人間なんでしょう!どうして、妖怪に向かっていけるの!?
死ぬのが怖くないの?」

私が、つい声を荒げて聞くと彼女博麗霊夢は当然のように答えた。

「は？何言ってるのよ・・・」。

怖いに決まってるでしょ。博麗の巫女が里の人間達や妖怪たちにどういう風に

見られているのかは知らないけど私だって人間よ。妖怪といつまでも、戦つてたら死ぬ

かもしれない。今だってスペルカードルールが無ければ

とつくに死んでる可能性すらある。そりゃ、怖いしもう嫌になるわ・・・

でも私は博麗の巫女だもの。私しかやれない事があるのなら怖くても、面倒でも

やるしかないのよ。あんたもそうでしょ？」

・・・

「吸血『鬼』なんて、凶悪そうな妖怪の従者なのだから

あんたも相当な物好きで引き受けたことを断れない性質なんですよって聞いてんの」

「ふっ・・・うふふ」。

そうだったわね、私としたことが自分の技が決まらなかつたのは相手が強いから

だなんて考えるなんて・・・」

私の技（ナイフ投げ）が当たらなかつたのは、私の訓練が足りなかつた。。。ただそれだけのこと。柄にもなくとりみだしちやつたわね。

「ありがとう巫女さん。」

私を、冷静にしてくれて……………」どーいたしました。」

お礼に本気で排除してあげるわ……………」

さあ！ 貴女の時間も私のもの!!」

お嬢様に仕えると決めたあの時から、私の命も時間も『運命』も

お嬢様に捧げた……………」ならやることは一つ！

侵入者を排除し、お嬢様の目的を遂行する!!!

「あら、やっと本気を出してくれるの……………」

眩きは眩きになる前に凍りついた……………」

さて残りは……………」

「残念だけれど、貴女の相手ばかりしてる暇はないわ・・・」

『メイド秘技』殺人ドール、『幻世』ザ・ワールド コレで終わりよ。（パチンツ）

私の能力は、『時間を操る程度の能力』・・・

任意のタイミングでまるで凍らせるように自ら以外の時間を止め、任意のタイミングで解除できる。

ソレと、時間を早めることも出来る・・・いつも以上に体力を

使うからやらないけれど・・・。

「・・・nね つつつつつつ」

!!!?????

「あら、そんなに驚いてどうしたの？」

まさか戦闘中によそ見でもしてたのかしら。残念だけれど貴女にかまっていられない

い

用事が出来たの・・・また会えると良いわね！（生きていたらだけど・・・）

お嬢様の事を、考えれば博麗の巫女は真つ先に仕止めるべきだけど・・・

今入つてしようとしてる人……いえ妖怪、それとも何……
解からないけれど、とにかくお嬢様のもとに行かせるわけにはいかない！
いくら博麗の巫女でも、あの数なら無事じゃ済まないはず……いえ！たとえ無事
でも疲弊させればそれでいい。

「それで、お嬢様なら勝つてくださる……
今は……居たっ！（びゅっ!!!）」

射程距離に侵入者を発見したため、迷いなく時を止め勢いよく突入してきた少女に
ナイフを10数本投げる……。自分の感じた、強大な存在が彼女ではない
ことに気付かずに。

……〈咲夜サイドアウト〉……

．．．．．〈双覇サイド〉．．．．．

「．．．．．え。」

文を追って、紅魔館に入った瞬間目の前で文が吹っ飛ばされた．．．
しかも鋭利なもの．．．あれはナイフ。。。

「ふう．．．鴉天狗だなんて何処から入って来たのかしら。」

やっぱりさつき巫女と交戦したときに能力を一瞬だけ解除しちやっただのが原因？
まあでも．．．．お嬢様の邪魔をする害獣なら排除対象だし関係無いわね．．．。

あい．．．つは．．．．

確か。咲夜．．だっけ？そうだ．．『十六夜 咲夜』．．．

レミリアの従者で『時間を操る程度の能力』を使って戦う紅魔館のメイド長……
そういうえば……

周りの景色がなんか違うな……灰色いや色なんか無いような感じの……

「まずは、鼠一匹。」

さてそれじゃ巫女の所に戻らないと……最悪のケース。生きていて無傷の場合あの先はすでにお嬢様の部屋なんだから（パチンっ!!）」

咲夜が指。パッチンをした瞬間。『色の無い世界』は指先に吸収されるように消え元の真つ赤な景色に戻った……

「おい……待ちやがってくださいよ。」

メイドさん……」

落ちつけよ……俺。

文が紅魔館や他の場所に侵入して迎撃されるなんてシチュ『二次創作』で散々、見た
だろ。。。

それに、いくら時止めを使われたとしても

あの位の速度なら一瞬しか猶予が無くても文なら無傷で避けれる・．．．そうに決まって
(じゃあ、この傷は何だ?) え．．．

(頬に出来てる切り傷は何だ? 血が伝ってるぞ?)

そ．．．ソレは．．．

(恐らくは．．．だ。俺を守るためにあえて先に気付いた文はゆっくり飛んで自ら
受けたんじゃないか?)

「あら? 何かしら．．．っ! 妙ね．．．

あなたから良く解からないけど異常な力を感じるのだけど?」

(俺を守るために文は、自らを盾にした．．．だとすれば。)

俺は、また文を守れない．．．

また目の前で傷つけられるのを見てることしかできない．．．

「．．．だ。」

コンなヤツも、コンナ屋シキモゼンブぶっ壊して……
アヤヲチリヨウスル……!

『武創』黒剣士の双剣!!!! (ギイイイ!!!!)
よう……久しぶりの! 再会には! はずいぶん……
刺激的じゃねえの双覇!』

第71話—真つ黒剣士と結びの黒雲。

．．．．〈祥磨サイド〉．．．．

「よつと!!さて、いっちょ狂友を叩きのめすとしますかね．．」

なんとか競り合いを押し切り眩く。

まあ見た感じ勝てる確率は一桁あれば、奇跡なんだがな。というかどうなってるのコレ．．妖怪なんだか人間なんだか神なんだかわかりやしねえ。

「全ての力が、ダダ漏れになってるな（ビシイつつつ!!バキめきつ!）」

おいおい、壁にヒビが．．．」

ここ（紅魔館）の壁結構、厚かったはずなのに

完全に貫通してんじゃねえかよこのヒビ．．．．

「ガアアアアア!!!（ブーン）」

俺が、被害総額その他もろもろで青ざめていると．．．．

双覇の腕が赤紫の妖気と共にこの屋敷を粉碎出来るほど巨大に変化した。。。

「いついつ……萃香の能力なんていつの間だ。

このまま、振り下ろされちゃまずいな・・・咲夜!!俺がこいつを引きつける。

お前はさつさと文を治療してレミリアのそこに行つて来い！」

俺は、双覇の視線を真上に移させつつ

下の咲夜に指示を出す・・・こいつがキレてる理由は文だ。なら速やかに治療する
ひつようがある・・・

「な・・・なら私も・・・馬鹿!いいからさつさつと行け!!」二人で戦つた方が・・・今
のこいつには時止めは使えない!それに・・・前に言つたる戦闘では心で負けたら
もう勝てない。邪魔だ!!」わかりました・・・(タタツ!)

よし、咲夜の速度なら能力が使えない状態でも

戦闘に巻き込まれるようなへまはしないだろ・・・

「こつちだ！馬鹿ヤロウ！！（ひゅんっ！！）」

「ガアアアアアアアアア！！！！（メキメキっっ！！バゴンっ！「あぶねえ！（ギインツ！）」

ふう~~~~~。

なんとか、捌ききれたな……。

「屋根が全壊、壁という壁にヒビ、ついでに俺も重傷か……

最悪一步手前の状況って奴だな……。」

瓦礫の雪崩を二本の剣という無茶な装備で切り抜けたため、

俺の腕は戦う前にすでに限界……

「まあ……だからって、戦えないわけじゃないけどな……。

ツクヨミンとこと此処での修業の成果って奴を見せてやるよ……『召喚』万有引力
これで俺は重力を、操れる。」

化け物の友達がこの程度で死んでたまるかよっ!!! 『剣舞』
スターバースト・ストリーム 双星黒連斬—!!』

修業中に、つくったスペカでその名の通り某アニメの黒剣士の技の

再現スペカ……

「無駄だ! 『焼却』」

んでもって喰らえ! 『白雲流』 剣神天舞の嵐!!」

威力も、速度も普通以上の弾幕にも関わらず……

双覇は一言。たった一言呟いただけで全て消し去ってしまった。

そして双覇の刀が宙に舞い俺の剣全てを弾き落とした……

「ようやく、戻ってきたかよ!

『召喚』約束されし勝利の剣(エクスカリバー)!!!」

双覇自身も、構え突っ込んできたので受ける。

「ありがたいな祥磨……」

おかげで、ようやくついさつきから頭が冷えて来たぜ……

助かった。(ぎちぎちっ!)

「そうかよ．．．なら、さつさとこの刀をしまつてくれねえかな．．．いつ友達に斬られるかわかつたもんじゃねえ(ぎちぎちっ!)」

ま、返答はわかりきってるけどな．．

「そうだな．．たしかに、俺とお前がここで斬り合う理由も

無くなったしさつさと魔理沙や霊夢のどこに行きたい．．．だが、断る!

お前が紅魔組なら俺の相手はお前なんだからなく．．．」

やっぱりな．．．

ま、俺も楽しくて仕方ないんだけど!

「俺も、お前と戦うのは久しぶりだから続けてやりてえのは山々だが．．
双覇あれを見ろ!(ギインツ!!!)」

．．．．〈祥磨サイドアウト〉．．．

．．．．．〈双覇サイド〉．．．．．

「なんだよ、急に。。。。」

ん。ありやあ．．．レミリア!?もう霊夢との弾幕ごっこは終わったつてのか．．

そんな馬鹿な．．．．ん?」

祥磨が下を見るように促してきたので技を解き、

結月を持ち直して輪廻も懐に戻して、下に視線を移すとこの屋敷の主。

永遠に紅い幼き月 『レミリア・スカーレット』

が、こちらを見上げていた．．．

「ハア．．．ハア．．．貴方!」

白雲 双覇．．．だったかしらっ!」

胸を抑えるようなしぐさと共に、声を駆けてくる．．．

なるほどお嬢様ともあろうものがプライドもカリスマもかなぐり捨てて、走ってきたのか。。。

「ああそうだが・・・何の用だ？」

まさか、従者の仇打ちかなにかかい？ならお門違いだ・

お前の従者が先に、手を出しちやいけない奴に手を出したんだからな。」

まあ、キレすぎた俺も悪いけどな・・・

ほぼ無意識で何をしたのか思い出せねえけどまあ咲夜を見た覚えはあるしな。

「そう・・・やはり貴方が白雲双覇なのね。(ブォン)」

こちらを見上げたままで、レミリアは手に妖力を集中させて

一つの紅い槍を作りだす・・・見覚えがある・・・レミリアのスペカの一つ『神槍』スピア・ザ・グングニルにすごく似ている。

スペル宣言はしてなかった。つまりは、殺傷性のものだろうか・・・

「なんの真似だ？もしかして、そいつをぶっ放して

当たりさえすれば俺を殺せるとでも思ってたのか・・・？」

少しだけ、殺気を織り交せて問いかける。

壁のヒビが増えパラパラと欠けていく・・・

「・・・ふうふう・・・」

無理ね。解かつてはいたけど私じゃ貴方には勝てないしどうすることも出来ないわ。

そんなことはお父様や祥磨にいい様に聞いて解かった。でも、

私にはやらなきゃならない事がある。」

そう言って、体の力を抜きつつ右手に持った槍を消滅させるレミリア。

「どうあっても、その怒りを晴らしたいのなら・・・」

私を殺すと良いわ・・・。主として目の前でこの館も従者もなにもできずに失うのは

絶対に嫌・・・！それに、従者の失態は主の責任そうでしょう？」

「ふうん。。。まあ俺は別に、どうでもいいが・・・」

お前の家族やらになんか言われんのはごめんだぞ？ちゃんとここのやつらに別

「それは告げたのか？」

なるほどな……

とりあえず、主としてのプライド・まあカリスマ性は抜群なわけか。

「私の家族は一人いるけれど……悲しまないわよ。」

あの娘には今まで酷いことをしてきてしまったもの・生きることすら辛いはずの事を……それに、こここの皆も元はといえば私の我儘について来てもらっただけだもの。

皆、私がいなくとも大丈夫よ。いいから早くしなさい。」

両手を広げ、迎えるような姿勢でこちらを見据えるレミリア。

はあくくくくく。

「お前。名前は？」「レミリア・スカーレットよ。」そうかなら、レミリア。

お前は優秀な上に立つ者だが3つだけ間違ってる……(びゅっ！)」

急降下し、言葉を続ける。

「1つ目は、俺はお前がいなくても此処は大丈夫か？じゃなくて、お前の死を嘆く奴は居るのか？と聞いたんだぜ。」

結月を抜きさり、さらに続ける。

「2つ目、お前の従者たちや家族がお前の我儘ややったことに対してどう思ってるかはお前が決めることじゃない。」

上段に構え、振り下ろして告げる。

「3つ目・・・お嬢様をお守りするためなら・・・『メイド秘技』殺人ドール!!」

「友達なのよ。確かに迷惑な思いつきも多いけどね・・・『日符』ロイヤルフレア」、

「ここはほかほかした気があふれてるんですよ! 『彩符』極彩颱風!」

お前が思ってるより、お前はこの屋敷の家族全員から好かれてるらしいぜ。

その繋がりを理解せずに命を賭けるなんて言うな・・・!」

結月が、レミリアを引き裂くより先に

赤、青、緑、ナイフ型やら球体やら紅魔勢全員の弾幕が俺を襲った。。。

「お前の周りに居るやつら・・・そいつらは全員お前の事を

想ってる家族だ。ちゃんと信じてやれ。」

氷柱の能力で、弾幕を消しレミリアに告げる・・・

「それに、文の事ならもう祥磨のやつから説明されたしな・・・

俺もキレすぎちまって悪かった。ただし今度からは気をつけてくれよ・・・
祥磨や霊夢達にはまだ言つて無いがあいつは俺の嫁なんだ。」

「ええ・・・気をつけるわ。咲夜、今度あの鴉天狗がきたらやり過ぎちやだめよ？」

それと絶対に傷は付けないようにね。「はい、お嬢様。」

レミリアの発言に、お辞儀をして肯定する咲夜。

「頼むな？その代わりと言っちゃあなんだけど・・・」

後の事は俺の責任でもあるし、任せろ。「どういこうこゝ（ゾクツ！）もしかして」

「ああたぶん俺の所為で壊れ、出てきちまったはずだ。」

大図書館の地下室・・・屋敷の主レミリア・スカーレットの最狂最悪の妹が・・・な。

第72話—開戦! 紅き館に集いし者

．．．．〈双覇サイド〉．．．．

「さうと．．．靈夢や魔理沙もがんばってる事だし

俺も、俺の役目を果たすでしょうか!」

フランドール・スカーレット—紅魔館の地下（大図書館の地下?）の部屋にて

産まれてすぐに約495年間もの間閉じ込められ過ごしてきた

館の主『レミリア』の妹．．．

理由としては、生まれた直後に発覚した『気の触れよう』所謂『狂気』の所為で、

二次創作において大半の場合主人公が命がけで助けるのだ。

「この世界を仮に『俺主の物語』だと、捉えればアイツを助けるのは

俺の役目だ．．．．「それと、俺のな!このためにソツチに行きたいのを我慢し続けて

きたんだからな。」わあくったわあつた!」

そう。コレが祥磨がコツチでいろいろあつたにもかかわらず（色々の内容はさつき、聞いた）此処に残り続けた理由。

ベル・スカーレットとイヴ・スカーレットの二人に頼まれていたらしい。
曰く、娘たちが自衛出来るようになるまで見守ってほしいと……

「しっかしお前も、頭おかしいんじゃないのか？」

経緯はどうあれ此処の吸血鬼がお前の恋人を殺したんだろ？俺なら、そんな奴らの言うことお前と同じ状況下で聞けるかどうか……」

いや、間違いなく聞けない。

俺の目の前で仮に文が殺されたとしてそいつの娘を育ててくれと頼まれてもしたらまず間違いなくそいつもそいつの家族も何もかもぶっ壊すだろう。

一番大切なものを守れなかった俺自身も……

「頭おかしいってひどくねえっ!? まあ、そう思われてもしょうがないか……

別に……ただあの二人の境遇は二次創作で良く知ってたしなんとなくほつとけなかったんだ。それに……此処はあいつの最期の場所だしな。」

というか、俺とドリズルは恋人じゃねえよつ。と笑う親友。

なんだその……

「うん。お前がイケメン対応してると無性に腹立つな・・・」

「ボッコボコにしてえ。。。」

まあ、これからフランとの戦闘なんだから戦力は一人でも多いほうが良いか・・・いやフランの攻略はなんとなくイメージできてるから人数が要る攻略法でもないけど

「いきなりひでえこと言いやがるな・・・つと。」

妖力・・・というか殺気が尋常じゃ無くなってきたなそろそろフランドールの部屋だこっからはちよつとばかし、息がつまるぞ?」

祥磨の言うとおり、俺と祥磨で向かっているのは大図書館。

その方向から感じる妖力が桁違いに濃くそして殺気を孕んだものになってきた。

「そりゃ、自分で注意しとくんだな。」

この程度の妖力なら俺はほぼ毎日あびてるからな・・・息もつまらないし辛くも無い。それにあいつのカリスマに免じて目の前で言うのは避けたけど俺にとって・・・

いやここの多くの妖怪、妖獣にとって『500歳』は正直言つて若すぎる俺は例外にしても大体のやつは1000歳超えじゃないとプレッシャー感じねえだろうな。」

せつかく注意を促してくれた祥磨や、レミリアたちの妖力が負荷に感じる奴には自慢してようであるが実際ここ最近目に見えて相手の力や殺気に負荷を感じなくなってる。

「ふう〜ん。そりゃ心強いな・・・」

ならさつさと行くぜ！（がちやつ!!!）

そういつて祥磨が、大きな・・・巨大な扉を開け放つと。

その内部はすでに見るも無残なものだった収められてる本こそパチュリーの魔法で守られてはいるが、本棚は粉々に或いは焼き尽くされ壁や床はこれでもかどと抉れ、天井からは月明りが覗いている。そして、その中心で一心不乱に

炎に包まれた大剣いや杖？を振りまわす少女が一人・・・

「アハハハハハハ!!!壊れちやえ!!!

お姉さまも、お姉さまの大事なものも、お姉さまの大事な人が大事にしているものも全部全部・・・コワレチャエ!!!」

!!!!!!!!!!!!!!!

この紅霧異変において最狂の少女。
フランドール・スカーレットがそこには居た。

……〈双覇サイドアウト〉……

……〈霊夢サイド〉……

「なんだかよく解からないけど……レミリアだっけ？」

あんたが走って行ったのは私の友達が原因でその目的はもう達成した……てことで
良いのよね？」

面倒だから、あのメイドが戻ってくる前に決着つけようと思ったのに……
追って来てみたらなぜかあのメイドと合流してるし……

「ええ。そのとおりよ……」

そしてもう大丈夫。誇り高き吸血鬼が客人をほおっておいて屋敷を走るなんて

とんだ無礼をしてしまったわね。。お詫びに貴女の無力を痛感させてあげるわ。

二度と人間風情が私を止めるなどと、おかしな事を言わないようにね。」

そう言つて、不気味に微笑みをうかべると

レミリアの妖力はドンドンと高まり背中の翼が奇妙に大きくなっていく。

「さあ・・・決めましょうか？」

貴女と私で・・・この幻想郷が辿る『運命』を・・・」

「私がかまわないわよ。でも、せっかく二人いるのに

一人でかかってくるの？2対1は覚悟の上だからめんどろだけどもかまわないわよ？」

そう言つて、咲夜とかいうメイドのほうをみる。

「ええ、貴女一人程度私だけで十分いえ・・・」

むしろ私が疲労していない状態で相手をするのだから敵ながら同情してしまうほどの

実力差よ．．．言葉で語るのはもうおしまい。。。

さあ、こんなにも月が紅いから本気で殺すわよ．．．!」

宣言通りというやつか、レミリアが紅色の弾幕をまっすぐに放ってくる。

大小様々．．．逃げ場を塗りつぶすように。

「そうね．．．。私も本気で応じるとするわ。この弾幕^{かいわ}。。。

こんなに月も紅いのに永い夜になりそうね。。。はあつ!!!」

迫る弾幕に、鏡合わせのように迎撃の弾幕を放つ

目論み通り全ての弾幕がそれぞれにぶつかり爆発する．．．。

「私の弾幕を相殺できるなんて、さすがは博麗の巫女ね．．．。

でも。ほめてはあげるけど手加減はしないからそのつもりでね。スペルカード宣言

!

『天罰』スターオブダビデ!!!」

どうやら、本当に実力差を見せつけて倒しに来るらしい

早々にスペルカードを発動してきた……

赤のレーザーと青の球弾で形成された弾幕。

レーザーは常に、私を囲む檻のように形成され青の球のほうは2種類・

わたしの回避を阻害する『バラつき型』おそらくレーザーよりも本命の『リング型』

「めんどくさい弾幕ねえ……!!」

でも、だからこそよけきつてやるわ……ふっ!!! (ひゅおっ!)

ここでスペルを使わずによければ、その分この勝負の優易に立てる……

つまり後々が楽になる! 楽に終わらせられれば嬉しいしね……

「さてと……私のほうは、なんとかするけど……」

魔理沙のほうは……結構苦戦してるみたいね。大丈夫かしら?

私が、視線を移すとよそ見するな!と言わんばかりに

弾幕が猛威をふるってくる。。言われなくたってよそ見なんかしないわよ……

魔理沙。こんなこと言ったら貴女は調子に乗るでしょうからただ思うだけけど……

貴女は私のライバルで友達なんだから。。

私以外に黒星付けられたらぶっ飛ばすわよ……!

．．．．．〈靈夢サイドアウト〉．．．．．

．．．．．〈魔理沙サイド〉．．．．．

「ちっ! 私の魔法が．．．．．

おい、お前! 同じ魔法使いなら正々堂々と、避けずに受けるんだぜっ!!!」

星型の魔力弾と、レーザー型の弾幕を放ちながら

対戦相手の紫色が全面に出てる魔法使いに叫ぶ．．．．．

「はあ．．．．．私の名前は『パチュリー・ノーレッジ』って名乗ったはずよ?

それに、貴女はただの魔法マニア。本物の魔法使いの苦悩も何も知らないのだから
一緒にしないで? 不愉快よ。」

私の渾身の魔力を込めた魔法は、無残にも

あいつ．．．パチュリーの光弾によって撃破される．．．

「私たち『魔法使い』は、魔法を研究し自分の知識を増やすことを

最大の喜びとするの．．中には私のようにそれで体がボロボロになる者もいるのよ。貴女のように、リスクも背負わない、

戦う相手を見極めて出す実力を加減することもしない、肝心の魔法は単調。コレでどうやって私に勝つの？」

「う．．．うるさーい!!!」

弾幕はパワーだ。どんな困難でも私の魔法はブチ破る!!」

なおも、レーザーで狙う今度はさつきより数を増やして．．．

「ただ数を増やすだけ．．．ね。

それしか、出来ないの？ならもういいわ．．．レミイのお客なんて

久しぶりだし今日は体調も良いから図書館から出てきてあげたのに無駄だったわね。私が．．．『魔法使い』というものを『本当の魔法』を見せてあげる。

スペルカード宣言！『日符』ロイヤルフレア。」

無情に告げられるスペルカード宣言。

『日符』に『ロイヤルフレア』その名の通りに私の前には、太陽を想わせる
紅い球体が現れそれが崩れる……

「ま……まだやれ……」

スperl……うわあああああああああああ
「!!!!!!」

こちらスperlカードを宣言しようとした……

だが、向かってくる弾幕に気付いてしまった。自分の魔法では破れないと……
あの弾幕全てを打ち消すには自分の魔法はあまりにも……

「魔理沙っ!?!……」

ちっぽけだった……

「霊夢……私……私には……」

私の力じゃ……」

目の前が紅で覆われる直前に見た霊夢の顔は、『心配』でも、『失望』でもなく

ただの横顔・・・つまりは、『信頼』だった。

第73話—巫女と魔法使い・・・少女達の絆!

・・・〈魔理沙サイド〉・・・

「ぐ・・・うわああああああああ!!」

まずい・・・避けないと・・・

でも、どこに・・・どうやって・・・? アイツの魔法はもうすでに私を
囲むように展開されてる。

「私の力じゃ、無理なのか?」

私は『魔法使い』じゃ無かったのか? 『ボク』は・・・また大切なものを
守れないのか???

私は・・・ボクは・・・

あの日の約束を守りたい。これ以上私ボクの所為で、
アイツに皆に迷惑は掛けたくない・・・

・・〈少女回想中〉・・

「はあー。今日もお賽銭は入ってないわね〜・・・

毎度のことながらどうしてここまでスツカラカンなのかしら？立地??

さすがにおかし過ぎるでしょうよ・・・」

あの日、私は魔法の研究がバレてしまい親にこっぴどく叱られた・・

そして私を解かってくれる人は家族には居ないと・・そんな想いで飛び出して『アイツ』に・・・博麗霊夢に出会った。

「なんだ・・・あいつ。」

「こんな山の上の神社なんて、参拝者も来ないだろうに・・・巫女か？」

とにかく人から離れたくて、家を飛び出して無我夢中に飛びまわって
気付いたら神社があったんだ。

「お〜〜い!!!お前ここの巫女なのか〜?」

興味本位。正直最初のあの時はただそれだけだった・・・

特に神を信じてるわけでもその巫女と友達になろうと思つたわけでもなれると
思つたわけでもない。

でも、なんとなくアイツなら私を見てくれるんじゃないかと思つたんだ。

「ええそうよ。博麗の巫女人はみんなそう呼ぶわよ・・・」

というか貴女も人間なんだから私の顔くらい見たこと無いの?もしかして、妖怪?」

そう言つた霊夢は、ちゃんと確認もせずにお祓い棒やらお札やら出してたな・・・

「うわあつ!違う違う違う!!」

私の家はちよつと此処から離れてるから、お前のことを見たことが無かつただけで

私は最近魔法を研究してて、それで飛べるってただけだぜっ!!」

私の言葉を聞いて、「魔法使い：ちよつと危険だけど完全な妖怪じゃないならいつかとか適当な事言ってたな。」

「普通の一般人に対して、危険も何もないぜ・・・全く。」

とりあえずはじめまして！私は霧雨 魔理沙。歳は・・・ひい、ふう、みい・・・
10歳？いや、11歳だ。これからちよくちよく遊びに来てやるぜ！」

自分の歳を数えるなんて事も最近してなかったせいで、

すぐには言葉に出せなかったけど（もちろん誕生日とかはお祝いもしてたけどなw）
なんとか、必要最低限の事を話して手を差し出した。

「ちよつと、あんた自分の歳も覚えてないの？まあいいわ・・・」

私の名前は博麗 霊夢。今代の博麗の巫女で人里じゃ人間の切り札なんて呼ばれる
る

仕事は妖怪退治。貴女も妖怪被害がでたら来なさい。歳は同い年よ。」

あいつはあの頃からぶつきら棒で・・・

私の手を取りもせずに、さっさと神社に戻ろうとしてたな。

「そうか。それじゃあ呼び捨てでも良いよな？」

それと私は霧雨 魔理沙って名前がある！ちゃんと呼んでくれ霊夢？」

しようがないから手を引つ込めて、そう告げると。

あいつは結局そのまま中に入つちまった・・・だから次の日も、その次の日も、なんどでも神社に通った。

時には、何気ない会話をした。時には神社の境内で魔法を研究して怒られた。

時には、神社に祀られてるはずの神の話をした。時には、手合わせに付き合った。

そしてそのうちに、

「わかったわよ魔理沙。私で良いなら友達でもなんでもなつてあげるから・・・

速く家に帰りなさい。どうせ来るなつて言つても来るんでしょ？（すっ）」

「・・・？（パチくり）」

なんだ、ようやく私は霊夢の友達になれたのか。全く友達になるだけなのに
どんだけ時間使わせる気だよ（笑）（がしっ！）」

その一言で、私たちは友達になったんだ。。。

・・〈少女回想終了〉・・

「そう・・・だ。

そうだったぜ・・・だから、私は負けられないんだ・・・」

あの時、決めたんだ・・・

いつも一人ぼっちの神社に居るアイツを見て友達になったあの日から。

私がこいつの隣りに立ち続けて友達として絶対に一人ぼっちにさせないって。。

「私は！博麗霊夢の友達でライバルだ!!」

スパアアアーク!!!!!!!!!!!!!!
」

迫る弾幕を、しっかりと見て避ける。

密度も速度も下手をすれば当たりそうだったけどアイツが咳き込んだせいが一瞬だけ

弾幕の来ない場所が生まれた。

すかさず、潜り込み放つ!

昔一度だけ霊夢から白星を奪った私の最大にして最高のスペルを!

「えっ!私のスペルが……」

なぜこんな魔法マニアの作った魔法なんかで……ムキューーーーーー!!!

パチュリーの放つ、赤、青、緑の弾幕全てを打ち消し飲みこみ。

私の八卦炉（はつけろ）から放たれた虹色のレーザーがパチュリーに向かい直進!!
そのまま飲みこまれ悲鳴（?）を上げて墜落していった。

「よっしゃ!私の勝ち!!^{ポッ}やっぱ弾幕はパワーだぜ!!!」

・・・〈魔理沙サイドアウト〉・・・

・・・〈靈夢サイド〉・・・

「アイツ・・・何恥ずかしいこと大声で叫んでんのよ。。」

まあそんなことよりあつちは終わつたみたいだしこつちも速攻で決めなきや・・・ね
!!!」

未だに続いている、レミリアのスペルを避けながらも

隙を見て追尾の効果が付与されてるお札を投げ陰陽球からも、弾幕を放ち続ける。

「ちよこまかと・・・私には、貴女と遊んでる時間はあんまりないのだけれどねっ!

速く貴女を片づけてフランの所に行かなきゃ・・・

スペルカード宣言！『神槍』スピア・ザ・グングニル!!!」

ちようど、最初のスペルが終わる頃合いにレミリアがもう一枚スペルを宣言する。彼女の妖力が右手のひらに集中していくのが解かる。

「あら。ずいぶんかつこいいもの使うのね？」

家宝かなにか？なんにせよそんな物騒なもの一人間に向けないで貰いたいわ。怖いじゃない。」

そして、それは徐々に槍の形をとり……
ついには一本の紅い豪槍と化した。

「まあ、たしかに少し情けない行為かもね？」

けれど私は自分の全霊をもって貴女を殺す。そう決めたわ？だから私は貴女を高く評価している。。その証明とも思つてちようだい。

この技は私の全力……。コレを打ち破れるのなら打ち破つてみる!!!!

博麗の巫女————」

紅い槍は、禍々しさを通り越し……

絶対に成功させなさいよ……」

……〈霊夢サイドアウト〉……

……〈双霸サイド〉……

「お……。すつげえ暴れてんな……」

壁とか本棚とか、いろいろ修理費どうなのコレ？」

「そんなのんきに話をしてる場合かよ……」。

まあそうだな。ベルとイヴの遺した遺産も結構使っちゃったし……まあなんとか
なんだろう。」

俺に注意した祥磨も、かなり軽い調子で質問に応じてくる……

俺らほんつと緊張しなきゃいけない場面で緊張できないのな……ww

「危つぶねえ……いきなり殺す気マンマンだなアイツ……
まあ、それくらい血の気があるくらいがちようどいいけどな!!!!」
さてと。まずは……

「祥磨！お前にやってほしいのは一つだけだ!!」

『フランの動きを止めろ！』どれくらいって明確には言えねえけどな。」

フランが一定時間暴れなきや……

後は俺がなんとかできる！

「相変わらず、作戦とも言えねえ作戦たてやがって……」

おまえなあ。ふわふわにしか浮かんでねえならさつきも連れてこいや!! 「なんで

わざわざ恩人を死に目に合わせなきやならねえ！幼馴染だぞ！」いや、俺もだろうが
わかったよ。。多少手粗になるが勘弁してくれよレミリア!!」

叫ぶと同時に、剣を作り出し重力操作で頭上で操り

自身はもう一本剣を持ってフランに向かっていく祥磨……

「すっかり気に入ってんだな……」

ダークリパルサーにエリユシデータ、それにルミナスだっけ?ま。

俺は俺で始めましょうかね……『喰結び』結神—フランの狂気!!!!」

祥磨が足止めしてくれてる間に、あいつの狂気を喰う……。

sonde代わりに俺の妖力を微量ずつ与える。

「さて、うまくいってくれよ!!!」

．．．．（霊夢サイド）．．．．

「ちよつとく？こつちはもう終わったわよ．．．

さつさと帰りたいんだから早く戻つて．．．熱い!?!?それにこの妖気．．．

双覇！無事なの!?!」

炎に包まれた図書館のなか、私の目に映ったのは．．．

床に倒れ伏した人影3つだった。

第74話—狂気の破壊姫。紅霧異変の終幕!

……〈双覇サイド〉……

「くっ！全然つかってなかった所為だな……」

スサノオの時よりは楽なはずだけど、これじゃ遅い!!!」

かといって、喰うのを速くしすぎると狂気のもとになってる感情……

それも巻き込んじゃう可能性もあるし……

「いや、スサノオの時はただ取り除けばよかったけど……」

こいつの場合は生きている間ずっと溜めこんできたものなんだ、なら下手したらほんとに時間がかかりすぎる……」

「アハは！おにいさんすご〜〜〜い!!!」

全然コワレ無いね？いままでみ〜んな壊したのに……私はね？

ただ遊びたいの……だからおにいさん。

コワレテ遊んで?」

主の呟きに呼応するかのように、**裂**を纏った剣は

一層轟々と燃え上がり祥磨に迫る

「ちっ！もつてくれよ……」

『武創』！&真名解放。約束されし**勝利の剣**!!!

両手で構えていた、黄色い紋様の美しい**剣**。「ルミナス」を

他の二振り同様重力操作で浮かし新たな剣を作りだす。『エクスカリバー』

その昔、ブリテン島において『キャメロット』という国の王・

恐らく世界でもっとも有名であろう英雄。

『騎士王』アーサーペン・ドラゴンの持つ泉の妖精から授かりし『聖剣』だ。

もちろん、アーサーが実在したかどうかは解からないし

本来なら剣はただの剣だが祥磨の召喚した剣とはある作品に登場するアーサー王の

剣なのだ。

「ちよ、お前そんなんぶつ放したら屋敷ごとぶつ壊れる……」

ああもう！強度全力……**結界**!!!

祥磨の持つ『聖剣』が光を放ち、その光が巨大な斬撃となり放たれる！

にしてもやつば吸血鬼って速いんだな~~~~~。

「それじゃ、おにいさんから死ンデ???(シユツ!!)」

背後から、フランドールの手が俺の胸めがけて伸びる。

風切り音から見て相当な速度だうん。でもな~~~~~。

「俺てきには遅すぎるぜ~~~~。なつてつたつて俺には最速の嫁がいるんだから~~~~。

なつつつ!!!妖力解放!」

突きが俺の胸に刺さる前に、反復横とびの要領で左に跳躍。すでに妖怪変化している
せいか飛ぶ瞬間に踏みしめた床はヒビが入って少しへこんでいた・

「あれ?また壊れなかったの?」

すごい!!オニイサンすごいヨ!!!私ともつともつと

い~~~~~つぱい!!!!遊んでく。フオーオブアカインド!!!」

フランドールが、唱えると信じられない・・

いや信じたくない光景が俺の眼に飛び込んできた。。。

「うそだろ．．．ここで、フォーオプアカインドかよ。」

俺は結びのほうに集中しなきゃいけないしかたって祥磨にフラン4人を任せるのは

キツイだろうし。」

4人のフランドールが無邪気（恐怖しか伝わらないが）な

笑みを浮かべて、全員が大剣を持って襲いかかってくる．．．．．

「オニイちゃんまだマダ．．．フラン満足してないよ？もっともっと皆で遊ぼうよ．．．
!!!」

フランB「遊ぼう。壊れるまで．．．．ずっと!」

フランC「皆いっしょに．．．遊ぼうよ。」

フランD「そうそう．．．みんなで!永遠に!!!」

オニイちゃんが壊れるまで．．．!」

フォーオブアカインド。自分の分身を4体出現させるという

先ほどから振りまわされている炎の大剣『禁忌』レーヴァテインと同じように
フランドール・スカーレットの代表的な技だ。

今は、スペルカードルールなんて知らないから威力が
桁違いだけどな・・・

「そうだな・・・俺も楽しい遊びなら引き受けてやってもいいけどな。

荒っぽいのはごめんだね。(スッ)

迫るフランを無視し、目を閉じる・・・

段々と死が近付いてくるのが解かる・・・威圧感的にも物理的な熱波としても。
でも、

「ちよつと待った!!!

まずは俺と遊んで貰おうか・・・双覇の邪魔はさせねえよ。(ガギイツツツツ!)」

これまでに召喚した全ての、剣とさらにアレは……

某ゲームの英雄。黒の剣士と某英雄使役ゲームの青騎士王さまか……

二次元を代表する名剣が4つ。最高クラスの剣士が3人で俺の護衛とは心強いな。

それらを召喚し、操り俺の目の前でフランの猛攻を防ぐ親友。

「悪い祥磨！そいつら頼む。「言われなくてもやってやるよ……良いからそつち

さつさとおわらせろよな？」了解だ……『喰結び』」

妖怪化もシテいるため、さつきよりは速度も早まってきた……

これなら一時間もしないうちに安全圏まで喰える！

「な……あれ？チカラ抜けチャウ……」

まだ遊びタリナイのに……折角タノしくなつてキタの二……!!!

フランの反応が、変わってきてる……

この感じならほんとにそんな時間かからずにイケるな……

「そうかそうか、お前もノツテ来てたところだったらしいが悪いな。

もう終わらさせてもらうぜ『神域』白雲式多重結界！」

叫び、元々の結界に『支配を司る程度の能力』を付与する。

元々展開出来る範囲が図書館内と狭く、フランドールの方も落ちていたので楽に無抵抗状態に出来た。

「そんで、コレで全部喰い終わったな。

ちよつと疲れた・・・・・・・・・・・・・・・・な・・・・・・。(ドサツ)

・・・・・・・・少年少女熟睡中・・・・・・・・

所変わって此処は、紅魔館中庭・・・

ある者は暴れまわっていた家族の無事に安堵、涙を流し・・・

その者の周りにはその者と家族を見つめ涙を浮かべる従者、

良かったわね。とぶつきらぼうに言う魔女、涙ぐみながらも笑顔で見つめる門番。

号泣する使い魔・・・そして

周囲の目も気にせず、声を上げながら泣き抱きついてくる姉にただ困惑するかつて狂気によつて暴走していた。吸血鬼の女の子が居た。

「で？今の言葉もう一回聞かせてもらえろ??」

私たちが大変な目に会つてる間あの部屋であの娘と何をしてたつて?」

そして、もう一方では・・・

「えっと・・・その。フランドールをすくうために・・・

図書館で彼女と戦闘をしましてですね・・・そのく」

怒りをあらわにし、しかし真隣りの感動を壊さないように近くの人には聞こえる程度の声で彼・・・白雲双覇をまくしたてるのは、かの博麗の巫女

「率直に言いなさい。何をしていたの?」

あくまで、声音は優しい。

怒鳴るようなこともせずあくまで冷静だ。・・だからこそ双覇はとてつもない恐怖に襲われていた。。。

「じゅ・・・熟睡してました。。。

で、でもそれは慣れない技をつかったからで。・・俺だってさぼりたくてさぼったんじゃない無いつてさつきから。・「あやややく。なんか面白そうな会話してますね?」

つつつ!」

おわかり頂けたらどうか?

双覇の言い訳(?)に聞こえてしまった双覇が今一番聞きたい。・・しかし、一番聞きたくない人物の声があつたことに。。。

「双覇? どういうことですか?」

私が、寝てる間に何をしたらこんなに女の子が増えるの? (ニコッ)

双覇はこの時初めて知った。

本当に好きな女の子の笑顔でさえ、時と場合によつては可愛いと思えない……
むしろ恐怖に変わるものなのだ……

「あの……この……コレはえ〜とその……」

ちよっ! 待ってくれ違う。俺はなにも……」

弁解しようとするも、状況が状況(文の気絶中に女の子が増えているのは事実)しかも恐怖で口が回らずにやましいこととしていないのに、どう考えてもしてる奴に見えてしまう。

「あら〜。双覇の彼女さんかしら?」

ちよっ! 良いから私達のこと紹介したら双覇。私たちもう

深い間からじゃない?」

加えて、泣きやんだレミリアのこの悪ふざけである・・・
ここまで確定的な冤罪というのも珍しいのでは無いだろうか？

「なるほど、全部わかりました・・・」

双霸私は貴方に愛してもらえなくなつたんですね・・・「え？何言つて・・・」
でも私は貴方が好きです。。手放したくありません。」

「文？俺の話をきいて・・・えちよ・・・」

待つて!!手放さないつてまさか貴方を殺して・・・的なやつ!?

落ち着いて・・・話を。。ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

宴に喧嘩は付き物・・・それも夫婦でいれば、痴話喧嘩は当たり前。

だが、いくらなんでも吸血鬼と鬼巫女が共闘してでも止めた夫婦喧嘩（嫁の一方的な暴力と取れなくもないが・・・）などと。。

いかに幻想郷といえど信じる者は・・・いや、信じれる者は・・・

この時その場に出席していた異変解決者と異変首謀者。辺りを舞う妖精くらいなも

の

だろう。

・
・
・
・
〈紅霧異変完結〉
・
・
・

番外話―原作入り！紅霧異変まとめ。

文「あややく・・・双覇。（キュウウウンッ？）」

・・・リア充を避けようと、命がけで文を単体で借りたつてのに
なんだろう。この結局かよって感じのイラつき。

文「双覇くく。。。」

はいはい（ムカツ

ネタはスピードが命だから、最初のキャラに行くぞ文く

まずは紅霧異変とさえはこの人!!

へレミリア・スカーレットく・・・種族 吸血鬼

二つ名 永遠に紅い幼き月、スカーレットデビル

能力・・・運命を操る程度の能力

『紅魔館』とある国では、悪魔の城と言われている屋敷の

城主であり今回の異変『紅霧異変』の元凶。

スカーレットデビル・・・レミアは吸血鬼であるが故に生き物の血液を好んで飲むそのさい、決して大喰らいでは無く尚且つ吸血鬼として少食ですらある彼女は多量の血を吸いきれずあまつさえ良く溢しては自身の身を鮮血で汚した。

その姿を見た者達が口をそろえて、言ったという

『Scarlet Devil』—紅い（血濡れの）悪魔と・・・

実際は、紅魔館を齡500歳という（妖怪としては）若い身ながら

まとめあげる『実力』そこに住む者達に絶対なる忠誠あるいはそれぞれの形の尊敬を抱かせる『カリスマ』を兼ね備えた主の器。

また、フランドール・スカーレットという5歳年下の実の妹が居る。

能力の『運命を操る程度の能力』は、とてつもないポテンシャルを秘めた能力であるだがしかし強力な能力ゆえにその力を使いこなすにはやはり彼女自身の年齢が若すぎるため、

現状では、自分の手に包み込める範囲の物の運命操作をしたり

ちよつとした未来視（精度はかなり低い）をしたり、彼女を知るものの運命を大小様々な範囲で操れる。（こちらは彼女自身気付いてないものもある）

文「今回の異変の首謀者の方ですね。

500歳の吸血鬼ですか・・・妖怪は歳をとるほど魔性の美貌も能力や妖術の強さも上がると里でも習いましたが・・・

こう実際に年下が居ると思うとなんかムズムズしますね。。。」

まあまあ。文はまだまだ綺麗で可愛いから大丈夫だよ。

少なくともアイツは老けたなんて思わないだろうし・・・

続いて二人目!!

〈フランドール・スカーレット〉・・・種族 吸血鬼

二つ名 悪魔の妹

能力・・・ありとあらゆる物を破壊する程度の能力

紅魔館の地下深く、大図書館のさらに下にあるパチュリーの魔力に阻まれた一室に彼女は生まれたところから閉じこめられ、閉じこもっていた。

元々の閉じ込められた原因は、フランが持っていた姉も両親すらも

凌ぐその妖力の量と質・・・さらには強力すぎるその能力、産まれ持った狂気。

それら全ての要素がレミリアに、『妹を閉じ込める』という

苦痛以外の感情や想い等を抱くはずの無い行為をさせた。何よりレミリアが恐れられたのは、両親を殺したのが『自分』だとフランが・・・

妹が自覚してしまうことだった。

フランドールが生まれてすぐのことのため、フラン自身は覚えていないが・・・

当時5歳のレミリアや祥磨は鮮烈に記憶しているイヴとベル。

スカーレット家の前当主二人は、イヴの能力で解かっていた通りフランの誕生により死んだ。

文「どんな感じだったんですか・・・？」

祥磨に聞いた話じゃ、そりや目も当てられない状況だったらしい。

双覇のやつがそう言った。

能力は『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』で、自分の手のひらに破壊したいものの『目』を移動させソレを握りつぶすことで『距離』、『硬度』、『温度』、『力』全てを無視して手のひら一直線上の物を破壊できる。

文「目とは、世界に存在する全ての物体に存在するその物の一番『弱い』場所のことです。そこに危害を加えると生き物で言う『骨』などの固いものでも簡単に砕けたりする。。。ですか・・・」
そう。説明ありがとね文

この能力の恐ろしいところでもあり、弱点でもある部分だね
文「弱点？」

ありとあらゆる物を破壊する程度の能力は、メカニズムとしてまずは『目』を手のひらに移動させる必要がある。
だから、最初から目が無い『物体』を持たないものは破壊できないんだ。

続いて3人目！

〈十六夜 咲夜〉いざよいさくや・・・種族 人間

二つ名 紅魔館のメイド、完全に瀟洒な従者

能力・・・時間を操る程度の能力

二つ名の通り、紅魔館にてメイドそれも他の妖精メイド達を指導する

『メイド長』を務めている少女。

文「妖・・・精メイドですか?・・・メイド?」

ああ・・・メイドっていうのは、主の下で働く従者で主に女性のことを言うんだ。

昔の外国では貴族の従者つてのは職業でもあったんだ。ちなみに、

妖精メイドは咲夜の主、レミリアが質より量と考えて

メイドとして館に入れた妖精の事で大半は遊んでるらしい・・・

文「そうなんですわ。まあ妖精ですしね。(メモメモ・・・)」

能力は『時間を操る程度の能力』で、

時間を止める、時間を進める、時間の流れを遅くする等の時の流れに干渉したり、

時と密接に関係する『空間』もちよつとだけ操れる。

文「そういえば、あのお屋敷たしかに外から見た感じより明らかに大きくて広かったですよね。」

うんうん。主に使用するのは、移動の際や戦闘時に時を止めて一瞬で移動したり、周りの時を遅くすることで高速で動いたり、逆に速めて治癒をしたり。

文「どおりで、あの銀髪人間なのに治癒が速いと

思ったんですよね・・・そういえばあの人一体どういう経緯で吸血鬼の従者になったんでしょう？」

それも、レミリアの能力に関係してくるんだけどな・・・
元々咲夜は親に捨てられた孤児だったんだけど・・・偶々レミリアの眼にその能力の高さを見染められて事実上、命を助けられたのが原因だな。

そんじゃ4人目！

〈紅 美鈴〉ほんめいりん・・・種族 妖怪

二つ名 華人小娘

能力・・・気を使う程度の能力

紅魔館の門番で、作中では人間と名乗っているが妖怪。

中国の軍服のような普段着、さらには特技は能力を用いた拳法（太極拳）のため中国の妖怪と思われる・・・

種族の正確な、判別は出来ていないため今のところは唯一種族である。

能力の、気を使う程度の能力は自身の気力を飛ばしたり相手の気に干渉することもできる。

文字数凄いから、5人目!

〈パチュリー・ノーレッジ〉・・・種族 魔法使い（魔女?）

二つ名 知識と日陰の少女、動かない大図書館

能力・・・火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力

幼い見た目と裏腹に、すでに1000年を生きている魔法使い（魔女）である・・・

本来、魔法使いは膨大な魔力を持ち全ての属性の魔法を扱える者の事であり先天的に魔法使い（妖怪）として生まれる者も居れば『捨虫・捨食の魔法』によって人間の身を捨て魔法使いになる後天的な者も居る。

魔理沙の場合は、魔力を持つ事は出来るも

『捨虫・捨食の魔法』を行っていないため他の魔法使いからしたら

『魔法使いモドキ』と言われることもしばしば・・・

能力は、魔法を使う際の属性のことであり実際の物質を操るわけじゃない。

次、6人目！

〈博麗 霊夢〉はくれないいむ・・・種族 人間

二つ名 楽園の素敵な巫女さん

能力・・・空を飛ぶ程度の能力（宙に浮く程度の能力）

言わずと知れた主人公！

妖怪退治と博麗大結界の守護を生業とする博麗神社の巫女。（通称 博麗の巫女）

裏表の無い、すっぱりとした人柄の持ち主で

どんな時も常に自分は自分。他人は他人と考えているそのため誰かと一緒に行動していても仲間とは考えない。

誰に対しても平等に接するが、平等に興味も無い。

周りから冷たい人間と言われることもしばしば・・・

能力の『空を飛ぶ程度の能力』は彼女自身を表した様な能力で、

普通に重力を無視して空を飛ぶ意味でもあるがその実質は、どんなものにも縛られず自分の空を『飛ぶ』能力である。

最後、7人目!!

〈霧雨 魔理沙〉きりさめまりさ．．．種族 人間（魔力が使える）

二つ名 普通の魔法使い、東洋の西洋魔術師

能力．．．魔法を使う程度の能力

第2の主人公！

魔法の森と呼ばれる、魔法使い以外には有毒という不思議な瘴気に溢れた森の『霧雨魔法店』に住む魔法使い。

白黒の魔法使いとも呼ばれ、黒の大きなとんがり型に白のリボンが巻きつけてあるまさしく『魔女つ娘帽子』をかぶっている。（服装も完全に白黒統一である。）

能力の魔法を使う程度の能力は、種族人間であるが故に属性を絞ってつかうため魔理沙は主に『光と熱の属性』で魔法を開発し使う。

白雲と黒翼の結婚式! 参列者さん異世界からいらつしや
い編

第75話—突然の宴! け、結婚式!?

．．．．〈双覇回想〉．．．．

コレは、もう十数年前の話。

「さて、今日も哨戒任務か〜．．．

俺神様なんだけどなあ．．．「神様だろうとなんだろうと此処に居て種族『天狗』
なんですから働いてください。」はあ〜．．．

古河音事件の後、天狗の里はビックリするほど平和．．．なんも起きなかつた。

精々俺と文の関係を茶化すやつが出たぐらい。

起きたら起きたで困るけど．．．

「あと、一刻ほどなんですから頑張ってください双覇さん。

頑張ったら良いこととして上げますよ?／／／／」

それまで妖怪の山の警備という役を放棄（博麗の神でもあるのに・・・）したため罰として天狗の一員『黒狼天狗』として山の警備つまり哨戒任務を天魔から言い渡され新婚の文を家に置いてせつせと働いていた頃。

なぜか真面目に仕事をして、付いてこなくても良いはずの顔の赤い白狼天狗と共に・・・

「やめろやめろ。俺はもう文に告白までしたんだ。

今更、この意思是翻らない・・・文にはもちろん、椀にも悪いからな。」

そして顔を一層染めてそのまま、黙りこくってしまった。

「じゃあ、椀は向こうを頼む！」

俺はこっちの方をみてるよ・・・（びゅっ！）

飛び去りながら、確認してみたら尻尾がコレでもかと言わんばかりに振られていたあの様子なら機嫌を損ねたという事は無いだろう。

「あ・・・居た居た。

おっ、ガキどもく！此処は妖怪がうろうろしてる山だから早く戻れ。」

予想通り、俺の来た方には何人かの子供が遊んでいた。

一人女の子も居ておろおろしてる・・・

子供A 「なんだ、お前!? よ、妖怪?

平気だよ! 俺は強いんだ・・・皆を守るくらいにはな!!」

そんな風にまくしたてる、体格の良い(つつてもガキだが・・・)男の子を周りの友達がいさめている・・・

なんか俺の外の世界の時とそっくりだな・・・

「へえ〜・・・なら、これはどう・・・だっ! (ザッ!!)」

出来る限り、手加減した速度で後ろに移動し(たぶんソレも見えてないが)

力をほぼ入れてない足で足払いをすると・・・少年はいともたやすく転んだ。
速度と力は比例する。

たとえ、力を入れてない足払いでも速度がついてれば人間の子供の足くらいなら枯れ木並みに軽く折れる・・・

「いたっ! お前・・・.. やったな〜! (ぶんっ!!)」

転ばされた少年の周りに、友達が集まり声をかける・・・

少年はソレを無視して殴りかかってくる。

「はいっ不正解。(ばしっ!)

怒って周りが見えなくなるようじゃあダメだ。俺どころか人間にも勝てない。」
ソレを手のひらでゆっくり受け止めるこういうときは、ちゃんと話さにやらならん。
なにをくく!と熱くなる少年をたしなめる。

「お前が守るって言ったのは誰だ?俺の覚えてる通りなら

お前がさつき突き飛ばしたそこのお友達だろ。良いか?守るために戦うのとただ戦うんじゃ全然違うんだぞ?お前のその拳は今、守るためじゃなく

俺に対する怒りで握られてる。

本当に妖怪に勝ちたいなら友達を守りたいならまずは自分に勝て!

『自分』に勝つのは簡単じゃない。でもただ妖怪に勝つよりは絶対に役に立つ・・・」

俺の話を聞いた少年は、泣きながら友達のところに行って・・・

子供A「ご……ごめん!……ごめん。ごめんなさい!!!!」

そう謝った・・・友達もいいよ。と許してくれていた。

!!!

「おい。ガキ!!

もう、この山には近付くんじゃねえぞ。」

「いつまでも、ガキって呼ぶな〜!」

俺の名前は『森羅（しんら）』だ。次に会った時は絶対に勝つからな〜!!」

そんなこんなで、俺は哨戒任務の時に会った里のガキに

ライバル認定されたんだ。

・・・〈回想終了〉・・・

なんでそんなことを話したのかって？

「へえ〜! そんなこともあつたんですか!!」

どおりで最近双覇が良く家を離れるわけですな〜!」

俺の彼女で妻。

射命丸文に哨戒任務での、エピソードを聞かれたからだ・・・

鴉天狗である彼女はもちろん山の安全を守るのは重要な仕事だが

基本的に、自由に過ごせる役職『報道担当』である。

つまりよつぼどのことで無い限りたとえ『異変』でもいや、だからこそ彼女たちは

山から離れられるのだ。

「楽しそうにしてくれるのは、嬉しいが手伝ってほしいところだな．．．
全く『狼天狗』の扱い酷いと思うぞ？」

「1対1の立場なら俺も天魔の言いなりじゃないが、周りの目が絡んでくると話は別だ
あいつも天魔としての立場がある。最近産まれたばかりの奴に見られたらどうなる
か」

「少なくとも天魔の威言を脅かす問題になる。」

「あはは。しょうがないですよ」

「天魔様も天魔様であなたが気に入ってるんです。むしろ、哨戒のお仕事無くなったら
天狗とみなされなくなると不安に思った方がいいですよ？」

「笑いながら、文が昼食を運んでくる。」

「まあそうだな．．．「ちなみにその子．．．森羅君でしたっけどうなりましたんですか？」ああ。
出会ったころとは比べもんになんないくらいに強くなったよ。」

「今では、当時一緒に山に来てた幼馴染の女の子と結婚して子供も出来て．．．
守るものが増えたからってすっかり修業相手にされてるよ2割位本気だしても対応
出来るようになってきたし。霊力の扱い方も解かってきたみたいだな．．．」

まだ、わかんないけど能力もあんのかもな・・

能力使用禁止なら文も苦戦すると思うぞ」

あいつには、靈力や神力の消費を抑えて俺の能力に関係しない

『白雲流』を教えてるからな。まあ威力は落ちるし大切なものを守るため以外の使用は禁止してるけど。。

神の剣術だ。人間相手や中級妖怪相手くらいなら十分通じるはず・・

「あやや。私もずいぶんなめられたものですね〜」

これでも一部の大天狗様や天魔様、鬼の四天王様方を除けばトップクラスですよ?」

文の実力は解かっている。個人的には条件次第ではたぶん『勇儀』にも勝てる

でもアイツの『成長』は並大抵じゃない。

「面白い話してる処悪いけど・・・」

ちよ〜と失礼するわ〜あひゃんっ!!!」

なんとなく、来る予感がしたので文と会話しつつ虚空にデコピンの構え・・

ピンポイントで飛び出してきたバカ（ゆかりん）に放つ。

「おつとスマン。ちよ〜と虫が人の周りを煩く飛んでてな?」

いいかげん撃ち落とそうと思ったらおまえが・・・」

『貴方達のもうひとつの疑問であろう『子作り』の件だけれど・・・』

とりあえず、何も問題が無いことが解かったわ。神様とはいえ半妖である双覇は問題無く妖怪との間に子を作れるという研究結果よ

今までお互い我慢してたんでしようからこれからは、思う存分励むことね。
ただし、周りの目は気をつけるように。。』

そう書かれていた。

「待て紫~~~~~!!!!!!」

お前、なんてもんを置いていってくれやがる!~~~~~!」
その後、文が目にもとまらぬ速度で俺を襲ったのは言うまでも無い・・・

・・・〈少年、少女(と)格闘中〉・・・

「はあ・・・はあ・・・危なかった。」

何がって?俺の貞操がだ。

「洒落になんね〜位に、文の眼が血走ってたもんな・・・」

ま、まあとりあえずは招待状だな文にも納得してもらえたし。。。」

『俺の居た地区の文化で、男女の子作りは結婚式を上げてからって言うのがある。

だからそれまで待つてくれ!』

そう言つて、俺の服をはぎ取ろうとしていた文を納得させた・・・

でも俺は知っている文の眼にはまだ獰猛な鴉が残っていた。たぶん俺は式を終えたら

枯れ果てるのだろう（いろんな意味で。）

「さてと、時間も無いしさっさと配るか・・・」

まずは魔法の森に・・・と！（びゅんっ!!）」

全速力で空を駆け、とある店の前にたどり着く。

『香霖堂』—幻想郷のなんでも屋。つまりその名の通りの品ぞろえで『外界の道具』、
『妖怪の道具』、『魔女の道具』、『冥界の道具』普通に過ごしているとまず

お目にかかれないものも大量に置いてある。（珍しいもののほとんどは非売品だが）

店主の森近霖之助とはあいつが子供のころからの付き合いだ（もつとも会った時には捨てられていたのだが。）

「お〜い! 霖坊 (りんぼう) !!

ちよつと、出てきてくれ〜〜〜〜〜。

俺が声をかけるとはたして、奥の方から音がして

長身の青年が出てきた。外見は高校生ほどだろうか。

「やあ双覇さん．．．この歳で霖坊は勘弁してほしいんだけどな。」

今日はどうしたの? 珍しいものでも見つけた?? ソレかなんか買つてく?」

「じゃあ、そこに置いてあるこたつを．．．「ああごめん。それ非売品なんだ。」

だよな〜 (笑) まあ冗談だ．．．ほいコレ。」

自ら、なにか買つてくか? と聞いたのに

客が気に入ったものは非売品。香霖堂こいっはそういう店で霖坊は

そういう奴だ．．．すでに慣れた。

「コレは．．．ふ〜ん双覇さんもついに身を固めちゃうんだね。

ふつうらしいけど、さみしいよ。」

その後二言三言、言葉を交わして店を去った。

霊夢や魔理沙、祥磨に紅魔勢・・知ってる奴には片っ端から渡して回った。

さすがに地底の鬼には渡せなかったが・・酒を飲み漁ってた

焰には渡しておいた。

「さうと！式当日が楽しみだな・・・」

第76話—式典準備!参列者さん方ごあんな〜い。

「なにっ!?!お前……式を挙げるのか!

確かに先だつて紫のやつが私のもとにも来たが。。。そうか、事実だったか。」
妖怪の山頂上。

天魔並びに大天狗等の現妖怪の山最高機関の座る屋敷内。

「はい。天魔様……」

私、射命まら・白雲 文はこのたび『黒狼天狗』白雲双覇と結婚致します。
それに伴い宴会を開くので山の者たちを招待したいのです。」

俺の隣に正座している文が頭を下げ、恭しくこちらの言いたいことを伝える……

「ま……待て!射命丸。

今まで色恋沙汰など噂にも無かったお前が結婚だと!?

どうしたんだ急に。しかも、相手は神だぞ!種族間の違いがどれだけ大変か
解かっているのか?」

天魔が苦い顔をするのを、唐突な報告のせいと勘違いしたらしい大天狗が

異議を唱えてくる・・・が。

「大天狗様。恐れながら申し上げます・・・」

私はたしかに『黒狼天狗』という皆様方にはあまり知られていない存在でしょう。

それに神でもあり種族間の違いはたしかに大きな問題です。」

そ、双覇？と話しかけてくる文を手で制しつつ発言する。

実際はお偉いさんにこそ俺みたいな『異端』は知られてるはずだろうがこの中には俺のことを知らない若い大天狗も居る。

なら、波風をたてるより誠心誠意言葉で納得させる方が良い。

「なら・・・この婚儀は諦め」 「ですが。」 何イ？

「私は文さんを本気で愛していますこの婚儀に対しても本気です。神が妖怪と・・・」

などと思う者も居るでしょう・・・でも神だろうがどんな種族だろうが好きなものは好きなのです。

文を幸せにするためならば・・・文と共に歩くためならばどんな犠牲もどんな試練だろうと受け、そして突破する所存です。」

そう告げるといよいよ、何人かの大天狗（俺を知ってる者は除く）が怒りをあらわにまくしたててくる。

「キサマアつつ!!黙って聞いておればぬけぬけと・・・」

その射命丸文は我が天狗の中でも五指の実力なのだぞ!ソレをどうしてキサマ如
き

が幸せに出来よう・・・見れば対して鍛えてもおらぬ。それでどう守る気じゃ!?!」

たしかに、俺の体は人間として外の世界に居たころと図体はほぼ変わって無い。

つまり筋肉ついてんの? って位なよつとしてる状態からちよつとカツチリした程度
だ

目の前の天狗達。女性の天魔にすら体格では負けるだろう。

「い・・・これ!!」

そのほう私語を慎め!この場の決定権は天魔様のものじゃ。それに・・・

そ、その方を知らぬのなら下手な物言いは、「事実の何を口籠る必要がありますよ
私はなにも間違っていない!」

俺と文の結婚に不満を抱いていない大天狗(よく見たらなんといつかの俺がぶっ飛ば
した奴だ。)がいさめる。

「はあくく．．．仕方ない。ちやうど良い機会だ．

こたびの婚礼。文句のあるものはその黒狼天狗 白雲双覇と戦ってみろ。

屋敷への被害は考慮せんで良い！」

ため息を吐いた天魔が、俺はもちろんその場の大天狗全てに聞こえるほどの声で
そう号令をかけた。3人ほどの大天狗が腰の妖刀を引き抜き立ち上がった。

ある者は上段に構え、ある者は構えず刀身を風のようなもので覆い、ある者は脇構え
の型をとり妖力を高めている。

「ふうく．．．なるほど、天魔らしい解決方法だな。

さて、来いよ。」

要は、力をこの場で示せという事だ。

わざわざ「被害は考慮するな。」と言ったってことはつまりあいつらは屋敷を壊す
勢いでくる．．．天魔はおれにソレを屋敷に被害を出さずに倒せって言ってるんだ。

天狗A「なら、遠慮なく！（ゴオツツ!!）」

先ほどから、俺に話しかけていた大天狗が刀身に台風並みの風を

纏わせ襲ってくる．．．それが合図だったかのようにほかの二人もそれぞれ襲ってくる

上段に構えた奴は刀身が巨大化し、脇構えの奴は刀身がなんかうねって、そのまま鞭のように襲いかかってきた。

「ふうん．．．さすがに天狗の実力者なだけはあるな。

だが少しくらい周りのやつは攻撃方法を理解して戦えよ．．．『結い』風+手中」
劍の鞭は、となりの大天狗が奮う剛劍によってお互いに弾かれてしまっているし
残りの一人の『風』は能力によって俺の手中に収めれる範囲でしかない。

「じゃあ、お前ら全員もうちよつと相手の力量測つて文句言おうな？

俺の壁にしては低すぎるぜ? (タンっ)」

何かを話そうとする3人．．．一歩で接近し、

耳元でそう言つて後ろに回る。そして全員の首に手刀を叩き込む!

全員が気絶して、膝から崩れ落ちて行った

「コレでいいか天魔? つゝか．．．もう敬語やめて良い? w」

さすがに、一撃で終わると思っていなかったのか

視線を向けると天魔は若干冷や汗をかいて首肯していた．．．

・・・〈少年少女移動中〉・・・

その日の夜・・・

「全く。天魔様も天魔様だったとはいえ・・・

双覇も双覇ですよ相手は大天狗様達ですよ!? 怪我でもしていたらどうするんですか
私は貴方が傷つくのも嫌なんですからね?」

その後が続いて、「反論してくれたのは嬉しいですけど。。。／＼」って
たぶん聞こえてないつもりらしく聞くこえた。

「悪かった。悪かったって!」

とりあえず、神社に行くぞ? 紫ももう大体人集めたらしいし・・・」
結婚式と聞いて、やっぱりまずは式場の問題だろう・・・

俺たちの場合は結局『博麗神社』での『神前式』にすることにした(結婚相手が神の
時点で神前式なのか不明だが。)

まあ、俺の希望で『白無垢』じゃなく着るものは『ウエディングドレス』という
良く解からない物に決定したが(余談だが、採寸の時はドキドキした・・・)

「そうですね。双覇が希望してたあの〜。『うえでいんぐどれす?』

でしたっけ・アレ結構着るの大変なんですよ。椀やはたてに手伝ってもらってもかなり時間とりますっ! (びゅおっ!!)」

速度を上げて、前を飛ば嫁・たしか山に初めて行った時もこんな感じだったな。まあ今は全く警戒してないのか目の前に純白の『モノ』が見えてるんだが・若干愚痴を言われたので心の中で(ご迷惑をおかけします。)と呟いて、速度を上げて並走しながら二人で神社に着いた。

「よう、双覇。お前もついに結婚すんだな」

とりあえずまだ時間はあるんだから紫が連れてきた奴の説明頼む。瞬しかわかんね」境内に降りると、すでに何人かちらほらと招待状を渡した人妖が集まっていた。

「おう祥磨、それに皆も!

このたびは俺と文の結婚式に参列して頂き感謝申し上げます。て。。なくんで、お前が居るんだ? 古河音く〜。」

その場に居たのは『白井瞬』、『斎藤衛』、『笹塚俊』、『予頼優』、『上白沢古河音』……

「あつはつはつは!!!何をおっしゃいますやら兎さん。

私だつて貴方と関わつた者ですよん?なら呼ばれなくても来るのが礼儀でしょうよ

!

それと、髪紐使つてくれてるようで嬉しいですよう!!!」

そう告げるバカの服装はいつかの時とほぼ変わらず、若干身長や髪が伸びたようにも見えるが屈託の無いその笑顔はむしろ幼さを感じさせる。

その所謂『ドヤ顔』を見て恐らくその場の異世界からの客全員が思つただろう。

(こいつ……めんど臭い奴だ……)と。

「こら、古河音!相手様は婚礼を挙げる方なのだろう?

ならもつとキチンとして敬意を払え!全く……私の義理の妹が失礼な態度を。。。

すまなかつた。私は『上白沢慧音』だ。このたびは誠におめでとうございます……

貴方は?」

俺の・・・正確にはこちらの『幻想郷』でも良く知る。

たぶんこの幻想郷にも居るだろう原作キャラ『上白沢慧音』が名前を聞いてきた。聞く前に、古河音を諷め頭突きを喰らわしていたし・

俺の知る慧音とはどこことなく雰囲気が違う。

「あ・・・ああえ〜と。「ご丁寧にどうも。こちらは私の夫で白雲双覇です。」

あ、うん・・・よろしく頼む。」

言いたかったことはほとんど、文に取られ慧音が差し出してきた手も文がとりぶんぶん振る。

「ほ・・・ほら、文。

ドレス着るのに時間かかるんだろ?なら先に行つといってくれ俺は皆と話してから行くからさ。」

しる文を、なんとかその場に迎えに来ていた霊夢とはたてに任せてそれぞれにそれぞれの紹介をする。

「なあ、双覇。調理場はどこにあるんだよ?」

せつかくの宴会だろ、皆で作りあげたほうが良い・・・というわけで！

なんか作ってやるよ。たぶん人も足りないだろうしなっ!!」

足りないのは本当だろうし、正直に台所の場所を教えたら俊はそっちの方向に吹っ飛んで行った。

「おいおい・・・アイツどんだけ料理したかったんだよ?」

あいつがどれくらい料理得意かなんて、わかんねえぞ・・・
周りをちやんと見れる目はあるから大丈夫だとは思うが。

「まあまあ、そんなことよりお前はさっさと準備しろって!」

そろそろ始まつちまうぞ・・・まったく。コレだからリア充は。。。」

いつかの俺のようなことを言って優が、皆が俺を送り出した・・・

「しゃあねえな・・・そんなじゃ、行ってくる!」

押し出された背中に皆の視線を感じながら、神社の中に向かって歩いていく。

よっし! いっちょ・・・気合いれますかっ!!

第77話—白雲に集いし乙女。決別の結び!

「あ〜! やつと見つけた!!」

まったく、勝手に人の家借りて結婚式なんて始めたくせに何ゆつくりしてんのよ。」

送り出されて、社内をうろついていると

遠くからでも目立つ紅白の巫女。『博麗霊夢』が向こうからやってきた。

「おう霊夢。悪い悪い・・・」

それよりさう、霖坊から送られてきてると思うんだけどもう用意されてる?」

霖坊に招待状を送った時に、一緒にちようど良いから

結婚式用の男衣装。つまり『タキシード』を発注しておいた。

男だけ和の正装つてのも変だし。

「とつくに送られてきてるから、こうして貴方を探しに来たんじゃない!

とにかく早くコレ着てよ? 私はあの鴉の着付けしてるのを抜け出して渡しに来ただけで、暇じゃないんだから。」

そう言つて俺に、タキシードを押し付けした霊夢は

未だ着付けの終わつていないらしい文のもとに戻つて行つた。

と言うか、2〜3個隣の部屋だった・・・（もちろん障子戸）

ちよつと妄想して顔が熱くなつた。

〜〜（少年着替え中）〜〜

「さ〜とつと。俺も着替え・・・つて

もう終わつちまつたんだよな〜」

まあしょうが無いよな。男物の服なんて基本どんな時でも

手早く着れるのばっかだし。。。

「霊夢のやつは衣装渡すなり、さっさと文の着付けに戻つちやつたし・・・」

「アンタの嫁の着付けが終わつたら、呼んであげるから

それまでは此処で待つてなさい！」 霊夢はそう言つて怒り気味に戻つてつたから

この場には俺一人しか居ない。

「マジで暇になつちまつた・・・おつと、

とりあえず俺の服をスキマに回収しとくか。」

今回は慧音さんも居るし、あそこまでの暴走は無いだらうけど・・・

古河音のことだ。どこかに潜んで俺の服を盗もうと企んでる可能性が

少しでも有るなら用心し過ぎるという事は無い。

「まさか、神社の中で剣の練習するわけにもいかねえし。

かといって文が気になって瞑想も出来ないし・・・」ふくん。そんなに暇なら私たちの相手をしてくれる?」ん?」

突然女性、それも二人と思われる声がかかった。

幸いあの変態ではなかったが・・・今の状況的に言えば正直古河音よりも

会いたくない二人の声だ。

「よおさつきに椀。何の用d・・・いや

解かりきってる・・・か。」

暇ゆえに出掛けた欠伸を噛み殺し、声のした方向に視線を向けると

装いを正した椀とさつきがこちらに向かって微笑んでいた。

「ええ。解かりきってる事ですよ双覇さん。

文さんとの婚儀を済ませる前に・・・私たちと決着つけましょう!」

「私の考えも椀ちゃんと大体一緒だよ。

と言つても・・・私の場合は双覇との関係というか自分の心に。だけどね？」
椛との事は確かに、心の中でまだくすぶり続けている

正直このまま結婚式を挙げるのは俺としても本位ではない・・・
つまりは。

「ああ。俺もこのまま結婚しても後味悪いからな・・・

付けようぜ？ 決ちやk（パアンツツッ！）」

言いかけて、椛に思いつきりはたかれた。

女の子の外見とはいえ妖怪・・・ソレも狼天狗だ。とてつもない痛みが襲うが
気合で持ちこたえる。

「私はっ！双覇さんの事が好きです!!

今でも・・・文さんに。文さんなんかに渡したくない！きつきさんにも、

氷柱ちゃんにも、天魔様や他の誰にも・・・

絶対に負けないくらい貴方が好きだし、貴方を奪うためなら私は・・・
私は・・・どんなことでも出来る・・・したい!!」

文が近くに居るといふのに、椛は声を荒げる。

千里を見渡せるその目からは涙がこぼれる・・・

「ほん．．．とうにつ。好きで．．好き。なのに．．．」

どう．．して。私は貴方のためなら! 双覇さんは私のこと．．嫌いですか?」
すでに涙でぐしゃぐしゃになった顔で．．

俺に問いかける少女。

「俺．．．は。俺は、椀のことは．．好k (パアンツ!)」

俺なりに、正直に答えを出そうとしたらもう一度椀にはたかれた。

隣りのさつきもなんかコレだから双覇は．．．。つて感じの顔をされた。。。

「もう一度聞きますよ．．．私のこと。」

好きですか? 愛していますか? ちゃんと、女性として．．誰よりも好きですか!?

その瞬間に気付いた。コレは．．．

あの時の。古河音がこつちに来た時に始めたデートの続き．．いや

今回はあのときよりもさらに俺の本音を聞きたがっているのだと

あのときは、正直まだ椀との関係を修復出来る．．なんて

生ぬるいことを考えていた。違うんだ本気の恋愛はそんな適当なものじゃない．．

「椀．．．俺は、お前が大っ嫌いだ。」

俺にとってお前は．．山の仲間の一人に過ぎない。お前に恋する気は無い。」

彼女の想いは聞いた。なら俺も伝えなければならぬ

彼女は本気の想いを伝えようとすでに破れてるのを解かっている上で決着をつけにきた

なら、俺が適当なことを言つて保険をかけるのは絶対にダメだ。

「そう……ですか。ふふっ！あははははははは！！

解かりました変なこと言つてしまつてすみません。本つ当に！大だいっ好きききですよ双覇さんっ♪」

そう言つて、白狼の少女はまた参列者で一杯の境内に戻つて行つた。

いつかの……誰よりも見惚れる笑顔で。俺にはもう二度と見せてくれない笑顔で

「あくあ……椛ちゃん振られちゃつた。

元は全然モテなかつたのに双覇も悪い男だね……」

椛とバトンタッチしたかのように、入れ替わつてさつきが俺を茶化してくる。

「うるせえな。向こうが求めたんだ……」

ならああ言ううしかないだろ。大体お前も最初に選んだ台詞はナイワーつて顔してただろうが。」

「ソレもそうだね。まあそれじゃ……」

「椀ちゃんも勇気を振り絞って、玉砕したんだから私も本気で決着つけなきゃ」
 さつきその言葉に、今更ながらに疑問に思う。

てつきり椀の付き添いで勇気を出させるために来たのだと思っただけど．．

「なあ、ちよつと不思議に思ってたんだが．

お前は一体何をしに来たんだ（パアンツ）」

これなんて、デジャヴ？
 !!!!!!

目の前に立ったさつきについてさつきの椀と同じようにピンタを貰った。

「私は．．．私もっ！双覇が好き。」

たぶん気付いてないだろうから言っちゃうけど．．向こうに居た時からずっと好きだった。」

笑顔とも悲しそうとも違う、良く分からない表情で伝えてくるさつきに

内心驚きを隠せずに声をかける．

「え．．？ど。どうしたんだよさつき！」

エイプリルフルはまだ早い．．．て言うかエイプリルフルでも言っちゃまずいんじゃないのk「もう10発殴るよ？（ニコニコ）」すいません．．」

「本当にもー。全然気付いてくれないんだもんね．．双覇ってば

まあいまいち勇気が出せなかった私にも非は有るんだけど。」
ハニカミながら、軽い調子で告白を続けるさつき。

「でも……さ。ひどいよ……こんなに好きなのに。」

向こうに居たところは一緒に遊びもしたし、双覇の一番近くに居れたはずなのに誰よりも双覇の近くに居れたのに……！」

「ゲームやアニメの女の子が好き？別によかった！」

だって、私が双覇の好きな女の子たちを超える現実の女の子になれば済む問題だもん
孤児院で育った？だから何!?!双覇はむしろ人より優れてない環境でも人に
優しく接する力があるじゃん!」

段々と涙が頬をつたい、さつきの顔を濡らしていく。

それをただ見ることしかできない……

「私、最近思うんだ。あの日が来なければ双覇の隣りは……」

まだ開いてたのになって。素直じゃない幼馴染の女の子が立候補できる席は……

ま……だっ（ひぐ！）……あつたのかな？つてさ……」

『あの日……俺と祥磨が轢かれさつきだけを向こうにおいて

こっつちの世界に来てしまった……俺のターニングポイント。

「ねえ。双覇……」

こんなこと言うの本当に、恥ずかしいんだけど……さ、私と付き合ってください。結婚してください。貴方との子供を……家庭を作らせてください。」

今まで、見てきた中でも一番に顔を真っ赤にして

文に良く似た幼馴染の女の子はそう告白してきた……

「さつき……ごめん。」

俺が好きなのは、射命丸文で……夜神さつきじゃないんだ。」

だから、さつき白狼の女の子に言ったように自分の気持ちを伝える。

解かっているさつきの場合は向こうの世界の想いの分もまとめつつけている……

だから俺の返事はこれじゃ生ぬるい。

「さつき。俺はたとえこっちに来て無かったとしても……」

向こうの世界では、フィギュアやゲームキャラで触れ合う事も話すことも絶対がない

そうだったとしても、俺はずっと文を愛し続ける。だから……さつきの入り込める

スペースはすでに無い! 思春期を迎えてから俺の部屋はすでに文と俺の愛の巣に

なってるからn (パアンツ!!!)

もはや暴走と言つても、過言ではない俺の口にさつきがピンタで

ふたをした。

「ほんつと。どうして、こんなオタク好きになっちゃったんだろ！」

双覇さつきのたぶん。女の子を振るうえで一番気持ち悪いし一番酷いことばだよ？」
苦笑するさつきがその声をかけてくる。

「だろうな。さつきじゃなかったら殺されても文句言えないくらいに

キモいし最低な理由だよw」

だから、俺もそう返す。

「ふくん……じゃあ最後に、一発だけ！」

これで本当に最後にしてあげるからさ？ 避けないでね双覇。」

そう言ってさつきは、拳を握りしめ笑顔で数歩……距離を取る。

そんなに俺を殴れるのが嬉しいのか？ と思ったが俺がうだうだ言ったところで
さつきは止まらないだろうし。

「あのなく……俺がお前の攻撃を避けたことがあつたか？」

能力を使った実戦ならたぶん、避けれるはずだ。

でもこういう時は大抵避けれない……初撃を避けても俺の動きを観察分析して
正確無比な追撃が来るんだ。

付いた異名が『幻想を見抜く観察眼』、『神霊を巻き込む分析者』
アナリスト

「それじゃ、行くよーーー!!」

廊下の向こう。ちと遠くから聞こえるさつきの声・

「おおー!何時でもかかってこいや!!」

声をかけると同時に、すぐにでも来るであろう衝撃に耐えるため

歯を食い縛り、地に足をめり込ませるように踏ん張り、最後に拳を握りしめる。

「ハああああああつ!双覇。だいすきだったよ。(ちゅつ)」

そんな俺の迎撃態勢は・・・

やはり、目の前一杯の少女には歯が立たず。まるで最初から無かったかのように気がつけば壊れていた。

薄い・・・塩分を感じるキスと共に・・・

第78話―結びの神と天狗の結婚式！ 　　幻想到吹く愛 の風

「双覇。準備できたからそろそろ位置に着くわよ・・・って

また派手にやられたわね。慰めとか要る？」

椀とさつき、二人の女の子と決着をつけ泣かせた俺は

どうにも落ち着くことができず患部を冷やすこともせずつつ立っていた。

「お・・・おう霊夢。慰めってなんだよ。」

要らねえよ、そんなことよりも着付け終わったんだなそれじゃ行かねえと。」

歩きながら霊夢に聞いてみたら、鏡を貸してくれたので

確認してみたら両頬に見事に紅く紅葉もようが出来ていた・・・。

椀にやられた方は青痣になってる。。。

「につしても、お前良く許可したよな」

外の世界じゃこんな立派な場所とてもじゃねえが交渉した値段じゃ借りらんねえよ」

位置に着く・・・神社の中じゃあ皆が入れるような広さの部屋は無いから

必然的にこの格好で外に行くわけだが。

霊夢と並んで歩いてるときに、ふと疑問に思ったので聞いてみた。

「外の世界の場所の貸し借りや、金銭の流通に関しては全く知らないし

今回の事を外の世界でやったらどれくらいかなんて興味無いわよ。私は神社を貸すかわりに宴会にありつける。。。

ついでに、あんたがこの博麗神社の神であることをキチンと公言すれば参拝客も増えるでしょ?」

変わらず前を向いて無表情ではあるもの・・・

少しだけ悪い笑顔の気配を纏った霊夢がそう告げた。

「ふうくん。お前はお前でいろいろ考えてんだなく」どつかの神様は献身的な巫女の事なんか全然考えてないみたいですけどね。」うぐっ!」

霊夢からの口撃にナイフか何かが胸に刺さるのを幻視する。

実際神社の経営難なんてのは神主か、神が肉体を持てるこの世界じゃ神の仕事かもしれない・・・少なくとも巫女が頭を悩ませる問題では無いだろう。

「で、でもさあ? 今回の宴会に来るやつって妖怪やら何やらで

この神社に遊びに来れるような奴ばっかだろ？なら公言しても意味無いんじゃない？」俺がそう言うのと、霊夢は目に見えて肩を落とす……

「問題はそこなのよねえ。今回の参加者って基本参拝じゃなく遊びに来る連中だしまあそれでもちゃんと神は居ますって言わないよりはマシってもんよ。」

「それもそうかもな……」

まあ、しようがないから式が終わったら俺と文で記事作って配るよ。

人里にもちゃんと言つといた方が良いだろうし」

それと……少しくらいは、神社の周りの整地やら周りの妖怪たちの

管理やらもやつとくかな。神社のことは本来巫女である霊夢が気にかけるような事じゃないんだし。

「え。それは私としては嬉しいんだけど……」

なにか裏があるんじゃないや。場合によっては今日が命日になるわよ？」なんて失礼な巫女なんだろう。。。

というかコイツ、神を殺せるとも思ってるんだらうか？……

そりゃ弾幕ごっこだと負けることもあるが。。。

「さ。そんなことを話してる間にもう着いたわよ？」

「この襖をあけて少し進んだところで待って。あの鴉も呼んでくるから・・・」

言われた通りに、襖を開け外に出てみるとそこにはたくさんの人妖が

白い布で作られた簡単なバージンロードの周りに集まっていた。

「おお〜! 今回の主役の登場だな。」

魔理沙。ここからだと思から隅まで見えるぞこつち来いよ〜。」

一人目、神薙・・・誰だっけ? まあとりあえず一人目。

「結婚おめでとう。おまえなんて言うか・・・」

タキシード似合ってるなw 射命丸とお幸せにな。。。」

二人目、白井瞬。

あの野郎・・・必死に笑いを堪えてやがる・・・

「双覇〜! 結婚おめでとう〜!!!」

しやめ・・・っ! 射命丸のこと・・・俺の分まで幸せにしてやってぐれえ!!」

三人目、斎藤衛。

だからと言って自分の事でも無いのにあそこまで泣かれるのも困るな・・・

「おう、っ(結婚おめでとう)ございます・・・」

パールパールパール

四人目、予頼優。

外の世界でも無いのに。パルパル言うのは避けてほしい・・・不気味がられてるから。
「双覇〜！結婚おめでと〜う!!」

タキシード似合ってるぞ〜!!!射命丸とお幸せにな〜う!」
5人目、笹塚俊。

なんかの調理中らしく台所付近の特設調理スペースから大声で祝福している。

「えらい良い匂いしてくるな〜・・・というか意外とまともだ。」

「うわ〜お！双覇さんってばカッコイイですよ〜!!」

結婚する文さんは幸せ者ですね〜・・・あ、そうそう双覇さ〜ん!

そのタキシード終わったら頂戴して良いかnギャンつつ!!!」

「古河音・・・お前という奴はあ〜う!」

双覇くん、改めてご結婚おめでと〜う!天狗の娘とお幸せに。」

6、7人目 上白沢姉妹。

妹がバカなことを口走っていたのでお姉ちゃんが手早く鈍器のようなもの（頭）で殴打し流れるように気絶させていた。

アレは、家族間のDVにはならないのだろうか?・・・いやよそう。

この世界では常識が常識じゃないのだから。

「どいつもどいつも好き勝手に言いやがって・・・」

まあ・・しようがないか。」

なぜ? って。

俺があいつらの立場なら誠心誠意冷やかすから。

「ご主人様あ〜! かつこいいですよー!!

文様と二人仲良くお幸せに〜!!!

「双覇あ〜! 酒エ」

じゃなくて。おめでと〜う!!!

刀から元の姿に戻った氷柱、すでに出されていた酒をかつぱらって煽りまくる焰。

二人がそれぞれの反応で祝福してくれる。。。

「おまえらまでえ〜・・・・・。(シヤっ!!

文っ! (バツ!!! ツ・・・!」

それぞれの形で祝福。あるいは煽ってくる周りの奴らを適当にあしらっていると俺の真後ろ・・・さつき俺が通った襖が再び開く音がした。

さらに会場中から息を飲むような声が漏れる・・振り向くとそこには・・・

「あ……文。」

『純白』。その一言に尽きる衣に身を包んだ文が居た……

い……一体誰だ！この娘を嫁に貰えるなんていう世界で一番うらやまけしからん奴は!!!

俺だ！……いや、じゃなくて。

「ふふっ……さ、行きましよう旦那様？」

そう言つて（恐らく父親役なのだろう）はたとと組んでいた腕を外しこちらの

腕に絡めてくるその姿は、美しく且つ何処となく妖艶で……

ウエディングドレス本来の『純真』、『無垢』とは違った魅力に映る。

「お……おう。そういえば霊夢が司祭の役なんだな。」

だからこそ、どうしても顔が赤くなってしまうわけで……

俺は至極当たり前のどうでもいいことを小声で質問した。

それにドレスを着るにあたって元々健康的に細いウエストをコルセットでさらに

締めているらしく・・・どうにも腕に当たる感触がマズイ。

「そうですね。私も驚きましたよ・・・」

てつきり追加の要求でもされると思いましたからね・・・しかし

無料なら無料でこつちがいたたまれないですよ。」

文に聞いたところ、どうにも「この神社の巫女である私の役割だから・・・」と

霊夢にしては珍しくやる気だったらしい。ゆえに遠慮することも無いと判断したんだとか。

「そんなことよりも、頬が酷いことになってますよ?」

「え、あその・・・ちよつと柱にぶつけちゃつてな〜〜?」

なんとなく気恥ずかしくなり、ごまかす。

俺に非があるわけでは無いがどうにも女の子を泣かせてしまったという事実だけがへばりついている。

「ごまかさなくても大丈夫ですよ?」

権とさつきさんをけしかけたのは、何を隠そうこの私なので。」
え。

俺の生涯を懸けて文を守り、愛し抜く。」

自分の心にもしつかりと問いかけ、結論を出す。

考えるまでも無かったけどな。

「続いて新婦、射命丸文。

貴女はこの者白雲双覇を夫としその生涯を懸けて愛し続け支え、どんな時も想い続けることを誓いますか?」

文も、感動を胸にしまいこみ少し整理を付けるようにしてから。

「はいっ! 誓います。

もう二度とこの人を離しません。永遠に想い続けます!!!」

天にも響けと言わんばかりの大声でそう宣言した。

二人を祝福する司祭であるはずの霊夢ですら「・・・うるさい」と小声で文句を言うほどだ・・・言った本人は満足そうだが。

「ん〜つと・・・それでは、指輪の交換を。」

気まぐれで、転生前に調べた結婚式だが・・・

驚いたが本来西洋の文化である『結婚指輪の交換』は最近では神前式にも取り入れられてるらしい……

この時代じゃ、さすがに不思議がられたが。

「これからよろしく。文。。。」

「ご丁寧にちょうど良い高さの台に、『薄い緑色の宝石がはめ込まれた指輪』が二組置かれていた。この日のために創って置いた『星嵐石』の指輪……ソレを純白の衣に負けないほどに、綺麗な文の左手の薬指にはめる。

「はいっ！双覇こそ私に置いてかれないでくださいね？」

「私からもよろしくお願いします。」

そして文も、俺の左手薬指へ……

余談だがこの結婚の際のお決まりの行為は『左手の薬指』には『心臓』つまり『心・ハート』に繋がる太い血管があり、ソレに『永遠、輪廻』を意味する輪をはめることで相手と永遠に繋がることを意味するらしい。

「ええと……それでは『神楽奉納』に移りませう」

「霊夢がそう言いかけたその時！」

「お〜い長いぞ〜！早く宴会にしようぜ〜」

「外の世界じゃ、結婚式で誓いのキスなんてのをするんだろ？早く済ませろ〜〜！」

そんな声が『魔女っ娘ぼうし』をかぶった、白黒の女の子から発せられた。。。

おいおい・・・いくらなんでも恥ずかしい。

ていうか神前式に『誓いのキス』は無い!

「「「「「キースッ!キースッ!キースッ!キースッ!キースッ!」」」」」

俺が指摘しようと思ったのもつかの間・・・

会場中から強烈なキスコール。

「あつ!魔理沙・・・アンタ何もうお酒開けてんのよ~~~~!!!

私も混ぜなさい!!」

頼みの綱の博麗の巫女はたった今墮ちた。

「双覇〜!諦めてキスしろ~~~~」。

魔理沙に言ったの俺だけど・・・・・・・・・・」

バカ野郎が応援(?)してくる。

「やめろ、キスなんてするなりア充が~~~~~!!!」

創造神が大絶叫・・・

「双覇も俺と同じく、家庭を持つんだな〜〜。」

(いろんな意味で)「頑張れよー!!!あと早くキスしろ〜〜!」

全知神さまには、こんな大衆の面前でキスすることの

恥ずかしさは理解して頂けないようだ。

「瞬の時は大変だったな〜。」

全然進展しやがらねえんだもん・・・双覇〜!お前は肉食系で頑張れよ!!

あと酒の肴に濃厚なキスシーン見せろ。」

龍の神様には・・・最初から助けなんて求めてねえよ畜生!

あと、祥磨と意気投合してんじやねえええ!!

「結神様あああああああああああああああああああああ!!!!

は、早くキスを・・・そしてめくるめく快楽への旅を!!!

直訳するとこの場でヤツ(閲覧削除)「こ〜が〜ねえええ?」お姉ちゃん!!!

みぎやああああああああ!!!」

あのバカは、まじでなんで来たんだらう・・・

いい加減に慧音の頭突きに耐えられなくなつて二度と目を覚まさなければ良いのに。

「ああもう・・・解かったよ!!!」

やんややんや騒ぐ馬鹿共の言葉を意図的に無視して、文に向き直ると俺の視線に気づいてか皆のほうを見ていた文もこちらに向き直る。

「文、お前が・・・お前だけが大好きだ。

もう二度とお前を離さない!」

目を見て、真剣にコレが大事なことを伝える時の基本だ

「私も・・・貴方のこの手を離さない。

一生傍に居ます。居させてください双覇・・・いえ旦那様。」

こうして、幻想郷中の皆に見守られ（ギャーギャー言われ）ながら

全員の前で口づけを交わし・・・夫婦になった。

舌を入れられそうになって、本気で抵抗した・・・

ちよつとだけぬるつとした感触があったがまあぎりぎりセーフだと思っ。

??? 「あれ?ここって・・・どこ???文さくん!」

この時、俺たちはまだ気付いていなかった。

異世界からの客はコレで終わりじゃないという事に。。。

第79話―神の結婚？・そんなことより宴会だ！

「ぶつはあーちよつとおく。

こつちまだまだお酒足りないわよ！持ってきてく〜く。」

とある神社の境内。

今まさに新たな夫婦が誕生したばかりのこの場所で人妖入り神乱れての大宴会が主役ほつぽつて行われていた。

「おいおい、霊夢う〜

進行はもう良いのかよ．．．て、もう聞いちやいないか？

にやはは〜〜！」

紅白の巫女装束という、縁起の良い格好をしているのは博麗霊夢。

ついさきほどまではかなり凛々しく進行と司祭を兼任していたのだが．．．．．
今となつては頬を紅潮させ服とセットで自分まで縁起の良い色に染まっていた。

「お、おいおい．．．

二人とも大丈夫なのか？酒はちよつと休んだ方が良いんじや。。。」

それに負けじと、飲み比べでも無いのに酒を次から次へと煽る

白黒の金髪魔女っ娘霧雨魔理沙。

そしてソレを心配する白き龍神と幾億を生きた人間……こちらは全く酔って無いようだ。

「一人は神だから当然として……」

祥磨ももう純粹な人間とは言えない年齢だもんなら。」

外見年齢が17〜8位の時に、祥磨のやつも不老になった。

経緯?聞かないほうが良い……ちよこつとだけ言うならば……。

もともと能力でなるつもりではいた……問題はツクヨミに脅されたか否かだ。

「おお双覇!改めて結婚おめでとう〜!!」

どうだ射命丸さんコイツの妻になれた気分は?」

酔っては無いはずなのに、若干呂律の回って無い口調で

訪ねてくる衛。一応俺達がもう夫婦であることを意識してるらしく俺を冷やかす時

には『射命丸』だったのが『射命丸さん』になってる。

「もちろん。さいつこうに心地いいです!

ようやく……幾百幾千のあいだずっとここに憧れて、この未来にたどり着くために待ち、攻め、信じて、嫉妬して、怒って、笑って……ずっと……。

ずっと目指してきたものがようやく叶ったんですから！」

どこか幼く、どこか艶やか。美しくも可愛らしい

爽やかな表情で文はそう告げた。

「ははっ！そりやうらやましいな。」

どうだ双覇。お前もついに念願のリア充になれた訳だが・・・

やっぱ嬉しいもんなんだろ。」

祥磨が、今度は俺に聞いてくる。

だが質問文というにはいささか変だ・・・その証拠に・・・

嬉しいもんなのか？じゃなくて嬉しいもんなんだろ。だ

「ああ、もちろんだよ・・・」

向こうに居た時から好きで・・・憧れてそんな娘とようやく相思相愛の

結婚を迎えられたんだ。嬉しいに決まってんだろ？」

俺の言葉を聞いた祥磨は、満足気にうなずいてまた人ごみの中

魔理沙のほうに酒を持って戻って行った。

あいつ・・・酒をひかえさせたいのか勧めたいのかどっちだ？

「さて、じゃあ時間も無いし一献だけ貰って

ほかのみんなのところに行ってくるよ・・・（グイっ！）

近くに置いてあった盃をとって、衛から酒を貰う・

ソレを文が注いで俺が飲み干す。

ん、伊吹瓢と星熊盃?

確かに俺ならそれでも酔わないとおもうけどわざわざ鬼殺しの酒を飲む理由もないからな。宴会だし。。

「おう。おっと忘れるところだった・・・

ほい、今回のご祝儀代わりにでも受け取ってくれ」

そう言つて衛が渡してきたのは、青白く輝き光に当てると

内側が波紋のように揺らぐ宝石をあしらつたペアペンダントだった。

「お前が、まともなもん贈つてくるとはな・・・」

というか、この色どっかで見た覚えが。

「お前なら、覚えてるだろ瞬のやつが暴走しちまったときに

俺が創つた再生の炎。アレを結晶化させてペンダントにしてみた。

お前と射命丸が死ぬような状況なんて無いとは思うが・・・」

再生の炎・・・あの時のか。

「とりあえず、ふつうに装飾品として使つても良さそうだし

受け取つとくよありがとな!」

衛から、ペンダントを受け取り文と一緒に身につける。
お礼を言つてそのままその場を離れた

~~~~~ (少年少女移動中) ~~~~~

「あ、主人様~~~~!!こつちです!!」

誰のところに行こうかと思案しながら、人ごみを行つたり来たり。

途中「Hey! そのお二人さんお茶してかないかい?」と宴会の席でまじで茶を啜っていた馬鹿を発見したが・・・

アイツのところは慧音さんが居るつてわかつていても、なるべくあとに回したい。

「氷柱……。コレ一体どういう状況だ?」

俺と文にとっては、娘のような存在の氷柱に呼びとめられて来てみれば

どういふわけか天狗や河童なんかが転がっている状態。

「おつ! 満を持って登場つてかい!?

こつち座りな! 今、アンタんとこの狐の娘借りて飲み比べしてたのさ」

なるほど……、これで二人の周りに転がつて(白目向いて泡吹いて)

いる天狗や河童の謎が解けた。

まさか、焔が自分の正体をばらすわけはないだろうが

種族としての本能を感じ取ったんだろう・・目の前のコイツは自分たちには

逆らえない鬼支配者である。と

しかも、氷柱も決して弱い訳じゃない。

幼い姿や言動こそ目立つが彼女もまた九尾の狐。恐らくは八雲んとこの狐よりも

上位・・つまりは彼女も俺と一緒に何億という月日を生きた

神にも届きうる妖獣という事だ。

「おいおい・・一人で飲み比べんのはまだギリギリ良いかもだけど

そこらの妖怪に絡み酒すんなって。あと俺はこの後もあいさつ回りあるから無理だ」

まあ、ギリギリしやべれるくらいのもよゆうを持つてんのと

今のところ人間が巻き込まれてないのが救いか・・

俺と文の呼びかけのおかげか、最低限の自衛が出来る人間の何人かが

人里代表としてここにきて祝福してくれてる周りの妖怪は俺が押さえるからきてく

れ

と頼んだので、ここで焔に暴れられるわけにはいかない。

止めることが出来ても、俺も会場も無事じゃ済まない。



死傷者がでる可能性も十分あり得る

「なんだ。つまらん!!!」

俺と焔がそんな風に会話していると、俺に腕をからませてた文の力が強まる。

コレだとむしろ抱きつくという表現のほうが正しい

「そ．．．そそそそうひゃーこ、この妖力．．．」

このつこの．．この方つてもしかして焔様では．．．」

周りの状況を考慮してか、後半は声を落として文がまくしたてるように質問してくる。

「そうだよ。鴉天狗の娘．．」

あの時はすまなかったな。闘いと酒こそが鬼の求めるすべてとはいえ、自らが治める可能性の有った山の者を自ら手にかけてよう等と思つては．．．．．  
思えば、あの時すでに決着はついてた。

絶対的な力を見せつけるだけでは長になどなれん。ソレで得た信頼なんぞ

あたしは望まん．．それはあたしが、鬼が大っ嫌いな『嘘』というものだからね。  
鬼が山から出て行つたあと、どこで何をしているのかは解からない。

ただ焔以外の鬼達は封印された者達の居場所『地底』に移り住んだと聞いている

それから、地底と地上の不可侵条約をゆかりんと地底の長のもとで行い  
焰は家族である鬼のみんなに会えなくなつた。

「い……いえ!大丈夫ですます!!!

ほ、焰様こそお疲れ様です。」

目の前の相手が、焰だと明かされ文も疑惑だつたついきつきより

余計に緊張して声を発している。

「ぶははっ!かまわないよ。

そもそも私は今、美味しい酒を飲めればそれでいいのさ。もちろん家族には  
会いたいけど……少なくともいまさら山に戻ろうとかいう魂胆はないよ。」  
だから、上司でもなんでもない。もつと楽にしな?と焰は続けるが……  
長年続けてきた低姿勢は簡単にやめられるものでも無く。

「は……あ……ひゃい!」

こんな感じで、終始緊張しっぱなしで滝のように汗をかいてるので  
「おっと、そろそろ他のやつらにも挨拶してくるよ。」

それじゃあな焰に、氷柱……最後まで楽しんでつてくれ!!」

なけば、強引に話をきりやめさせ

文の手を引つ張つてその場をダツシユで離れる。すると、

「ひゃつ！ 痛つつつつつ．．．」

とにかく、勢いで飛び出したせいで宴会に来ていたであろう誰かにぶつかってしまった．．．しかもかなり幼げな外見。

「あつー、ごめん!!」

怪我はない?．．．つてもしかして、鞆ちゃん!？」

ぶつかってしまった子が、膝のあたりの土を落として立ちあがろうと  
していたので手を貸すと．．．よく見たら見知った顔だった。

「いって．．．、大丈夫です!」

僕のほうこそすいませんn．．．つて双覇さん．．．ですか?」

シヨートカットにあしらった黒髪、俺の隣を歩く文より小柄な体軀、そして．．  
僕。の一人称と．．この見事に凹凸の無い体で男の娘に間違われることも多い。

少し前に会った友達『鞆』。が驚きの表情で見ている．．

## 第80話―披露えん・・・宴会の終わり?

「いってて・・・、大丈夫です!」

あの・・・僕の方こそ周りを見てなくてすいません・・・って双覇さん!」

焰たちの絡み酒から、逃れるため文の手をつかみダツシュした・・・が良いが。

さすがに、こんだけ人が居る中を走るんじや無かったな。。。

というかこの娘・・・なんで俺の名前を? あ。

「鞆ちゃん!?なんでこんなところに・・・?」

向こうの文は元氣?いやそれよりも治療が先か・・・」

良く見たら見覚えのある顔だった。何時だったか俺と文が迷った(俺はともかく文が幻想郷で迷うわけないのだから別の世界なのだが。)時に出会い・・・

俺の能力で帰れるようになるまで向こうの文に頼んで匿ってくれた娘だ。

「え、ええ。文さんは元氣ですよ・・・」

この前も唐突に『冥界』?に連れていかれましたし後は『博麗神社』にも行きました  
まあ、元氣過ぎて多少暴走してしまうんですけど・・・でお二人はもしかして?」

小柄な少女の手を取り、愛用の薬膳酒で洗い外傷用の薬を付けていると周りの熱気で何かに気付いたのか鞆が話しかけてくる。

「ええ。今日は私と双覇の結婚式を挙げたんですよ。」

ちなみに此処はこちらの博麗神社ですよ」

俺の様子を察してくれたのか、文が応える・・・

別に会話ができないほど集中しなきゃいけないものでもないが一応は治療。

集中するに越したことはない。

「ほ・・・ほんとですかっ!?おめでとうございます!!!

いやゝ。あの時も文さんと二人で早く結婚しないかなこの二人。と思つては

居ましたけど。

こうして本当に自分の知る人が結婚するのは妙な気分ですね。。。」

流星は、幻想最速の天狗の雑よ・・・基い弟子。

早口言葉は得意なようだ。今もどちらから告白を?とか結婚への経緯は?とか。。。

矢継ぎ早に質問をする姿は完全にブライダル雑誌の記者だ。

もちろん、優秀な俺の奥さんはときどき「言っちゃって大丈夫?」と俺に許可を

取りながら丁寧に応答している。。。

「よし、コレでオーケーっと。

つか鞘ちゃん。。さつきからどうしたの？結婚は女性の夢らしいから

憧れるのはまあ解かるけど・・・鞘ちゃんの歳でそんなに慌てる必要あるの？」

鞘ちゃんの外見年齢は女子中がk・・・いや女子高生くらい。。。

幼い容姿と背格好、それと女性特有の部位の未発達が目立ち下手をすれば小学生と

言つてもギリギリで信じられるかもしれないけど・・・

いくらなんでもさつきからの必死さは婚期を逃した3〜40代女性といった感じだ。

「え。。。あつはは・・・」

いえ、ちよつと最近自分の性別というか女性としての自分に自信を無くす

出来事がありました・・・」

うん？何が合ったのかは解からないけど・・・

さつきからなんか最初の方とは打って変わって美しさの秘訣だの、

男性を虜にする方法だの聞いているのはそういう理由だろうか？

男性っていうか元人間とはいえ、男神だし文の魅力はたぶん妖怪特有のものも含まれ

てるんじゃないだろうか。

「なにが合ったのかは、分らないし聞かないけど。。。

鞘ちゃんは普通に魅力的な女の子だと思うよ？別に気にするほどでは無いと思・・・

って文・・・やめて！頭が、頭がくくくく!!」

至極普通にフオローしたはずなのに、どういうわけか俺の嫁に

アイアンクローを決められている・・・てシヤレにならんくらいに痛ひ!!!

「あ、そ・・・そうなんですか・・・」

で、でもちよつと急に言われても困つてしまう・・・というかその。。。」

鞘ちゃんもなんか、顔真つ赤にして目の前の惨劇に気付いてないし！

だ・・・誰か助けてくくくくく!!!

「あれれ☆なくんか、修羅場な空気・・・」

ラヴの匂いがすつごくしてくるよくくく!!どっこカナくくくく???

あー。双覇さんじゃないデスカー、奇遇ですネー!!」

俺の切なる願いを知つてか知らずか、白黒の魔法使いの反対の色合い。

白の魔女つ娘帽子に黒のリボン・・・つまり『黒白の魔法使い』だろうか？

かの人里の守護者上白沢慧音の義妹・・・『上白沢古河音』。

かの少女はどうやってか、義姉上白沢慧音の目を盗み

我慢の限界とばかりにこちらに突撃してきていた・・・

「お前は呼んで無えええええええ!!!!

つか、どうやって慧音さんの監視を抜けてきた!!!?」

頭の痛みが別の意味で増したが、聞かないわけにもいかず近くまで来た古河音に問いかける。

「よくぞ聞いてくださいました！ソレはですね・・・」

これを使つたんですよ!!」

懐をごそごそとまさぐる古河音・絵面ではえば相当ヤバい。こいつは黙っていれば可愛い部類ではあるのだから、どうにも俺には全く魅力的な絵には見えないが。そして目の前に出されたのは。。。

「キノコ・・・か？なんかすごい毒々しい色してるんだが。

コレを使つたつていうのは・・・」

形や大きさこそ、キノコの王様マツタケにそっくりだが

カサの色からカサの裏の色・・・果ては茎から根元まで赤、青、黄色と

原色だらけのどこからどうみても毒キノコ。。。

「ええ。コレはお察しの通り魔理沙さんから教えていただいた

毒キノコなのですが。。。」

さも当然のようにとんでもないことを、抜かしやがった!?





馬鹿の絶叫（悲鳴？）を聞き流しながら、どうにか文に

頭を解放してもらってその場を離れた・・・鞆ちゃんは。。。今回のお客を  
帰す時に紫に頼もう。うん。

「おお、双覇！」

おめでとう。こつちにも来てくれよ!!!」

馬鹿と鞆ちゃんから、ある程度距離を置いてから

文に走ってしまったことを謝ると鞆ちゃんに言ったことのフォローをして  
機嫌を直してもらい、時刻はそろそろ夕刻。

境内では、結婚式というより宴会や祭りというのがふさわしいほどの  
にぎわいで・・・ちらほら食事処も見える。

「ん？アレは・・・笹塚と瞬か？」

そういや、笹塚のやつ今日は朝からなんか料理作ってたな・・・  
文。呼ばれてるしあそこで夕ご飯にしよう？」

文の許可を取り、手をしっかりと握って呼ばれてる輪の中に入る。

「おう。この幸せ者め！」

良いなあ。俺も結婚とかやっぱ憧れるわ～～」

最初に声をかけてきたのは、笹塚だった。

なんだか式の始めに役立つ事が出来ないか探したり、話す内容もこうだったり『友人代表』感がすごいな。。。

ほんとの友人代表は祥磨だろうけど。

「しっかし、結婚式なんて懐かしいな。」

俺ん時は、身内集めて小規模で終わらせたんだけどにぎやかなのも良いもんだな。」

次は瞬。こいつはなんか

父方みたいになってんぞ・・・歳変わらねえはずなのに。

「どいつもこいつもリア充しやがって。あーもー妬ましい!!」

バレンタイン?クリスマス? はっ!好きな人には振られましたー。

自棄酒すれば良いじゃない。って!?!俺は飲めないんだバカヤローー!!!  
!!!」

最後の優に至っては、どっかで聞いた非リア御用達の曲を

エアマイクで熱唱していた。

「いやいや・・・、お前自体が飲めないわけじゃなくて

禁酒してるんだろうに。」

なんか、笹塚と一緒に禁酒してるんだとか。

原因については良く分からないが・・・酒癖がどうのこうのと言っていたので

たぶんそういう事だろう。

「そくんな、ことよりほら！」

射命丸さんどうなの？ 双覇と結婚した気分っていうのは！」

笹塚が、飲んでないはずなのに酔ってるようなテンションで文の肩を

手で軽く叩くようにして聞いてくる。祭りの変なテンションというやつか・・・ん？

あれ、アイツ手袋してなくないか？

確か、この前能力が未だに暴走することがある。って言ってたはず。

ちなみにあいつの能力は『ありとあらゆるものを消し去る程度の能力』だ・・・あ。

「(バチンっ！ ぷるんっ) あややや？ ぐぐぐッ！ (／／／／)」

案の定、小規模だが能力が暴走したらしい。

文が着ている着物(ドレスは汚したくないとの理由で俺がスキマに保管した。)の

腹部より上。。。まあつまり。

本来、さらしによって抑えられていたはずの文の胸が

笹塚の能力によってさらしが消され本来の状態になり着物ではとてもじゃないが

抑えられない状況になっていた。。。

「あ、文！ 神社に戻って早くさらし締めてこい！ (／／／／)」

笹塚・・・てめえ！ そういう契約の時に言ってたよな俺と戦いたいって。。。

今ここで全力で相手してやるよ。今の見た全員記憶が無事で済むと  
思うなよ……?」

こんな感じで、負けられない闘いが始まった。

「勝負は一本！能力の使用はOK。スペルは2枚まで。使用武器は近接武器に限る。  
これで良いな??」

原因が原因なためか、笹塚もさすがにこの申し出を断らず。  
いま俺と笹塚で適度に距離を取って飛んでいた

「ああ良いぜ。それとこの契約は『こっちで』したものだからな

封印・・・後で直せよ? 『妖怪化 東雲修也』はああああ!」

すでにボロボロのミサンガを一つ引きちぎる。

すると人間の証である霊力はみるみるうちに妖気と妖力に変わり、

黒髪は銀髪、紫の瞳は藍に変わっていた。

「さつてと、向こうさんも本気のようにだ。

氷柱〜！戻っておいで〜。」

俺も妖力を50%だけ解放し、半人半妖の姿に変化する。

氷柱に向かってかざした手にはすでに『電桜―狼牙』が握られていた

腰にさげ狼牙と龍爪を構える。

「それと、『契約解放』 笹塚 俊。

これで準備OK・・・っておいなのでスマホ出してヘッドホンの設定してんだよ。  
ふざけてるのk・・・っ(ゾクツ わけじゃねえみたいだな。」

「ああ。俺も本気でやりたいたいんでな・・・

曲は・・・とりあえずこれで。ようし!(すつ 音楽再生!」

再生を押す動作とほぼ同時に修也の手が刀に添えられる。

たしか、名刀白鷺はくいろうし だっけ?

「大胆不敵に ハイカラ革命」

ん? 初音ミクの『千本桜』?

一体どういう事だ・・・一応警戒をしとk・・・

「磊々落々 反戦国家。」

日の丸印の二輪車転がし悪霊退散 ICBM(シャッ!」

「え? あぶねえ!

嘘だ・・・何時の間に此処まで移動した? 高速移動・・・いや

ほぼ零距离移動。」

突然感じた殺気は、真横から発せられており

そこにはいつの間にか移動していた修也が白鷺を振り下ろしていた。寸でで避けてまた距離を取る。

「環状線を走りぬけて東奔西走なんのその

少年少女戦国無双 浮世の随に（キインツ!!）」

またしても、零距离移動。

いつのまにか後ろに立っていた修也の剣を狼牙で受け龍爪で突きを入れる！

「千本桜 夜二紛レ君ノ声モ届カナイヨ

此処は宴鋼の檻 その断頭台で見下ろして」

「何処に……っ！あぶねえ!!（ヒュンっ!）」

突きが届く前にすでに、移動し俺の後方少し上に移動され

当たる直前に俺の首を狙っていた剣をかがんで避ける。

「教えてやるよ。これは

俺の家に伝わる身体能力向上術の奥義『死の境地』だ……

化け物と戦うために俺の先祖が作った人間が化け物になるための術。。。」

歌うのをやめ、修也が話かけてくる。

「そうかい……。神を化け物扱いすると天罰が下るぞこの野郎。

この勝負・・・何が何でも勝ってやるよ。。。」

「そうか・・・なら出し惜しみせずに全力でその命狩りとしてやるよ・・・。」

結婚したばかりの新郎に、物騒なことを言つて

また歌い始める。歌詞的にもう終盤・・・そろそろ決めるつて言う事らしい。

「三千世界 常世之闇 嘆ク唄モ聞コエナイヨ

希望の丘遙か彼方 その閃光弾を打ち上げろ（キンツ キンツ ギイインツ!!」

消えては現れを繰り返し、連続で斬りかかってくる・・・

なんとか対応しソレをはじく。

「此処まで、死の境地を攻略されたのは・・・

優と双覇だけだよ。経緯を表して・・・最後のサビ心して聞いていけ!」

その言葉を残して、修也はまた消えた。

「千本桜 夜二紛レ 君ノ声モ届カナイヨ

此処は宴鋼の檻 その断頭台を 飛び降りて」



「・・・上か!ぐうっ!!! (ぶしゅっ!)

コレは・・・抜刀術?一瞬見えた構えは『天翔龍閃』あれを実際にコピーされたとしたら・・・(グイっ! まずっ!?)

空中に足場を作つての抜刀術・・・

ここならではだと感心してる場合じゃねえ!まずい修也に引き込まれる。

「千本桜 夜二紛レ 君が歌い僕は踊る

此処は宴鋼の檻 さあ光線銃を撃ちまくれー!! 東雲一閃流 奥伝!

『喰<sup>く</sup>餓<sup>が</sup>絶<sup>ぜ</sup>刀<sup>とう</sup>・裏<sup>うら</sup>』

修也はとどめの一撃を準備しているらしい。

いつの間にやらさらしを締めて戻ってきた文が心配そうにこちらを見上げてるのが目に入る。。全く!

「そんな顔されたら、男としてがんばるしかないでしょうが!

ぐっ。うおおおおお!白雲流『龍焰躍る虹の架け橋』!!!!!!」

多少無理をして、向きを変え修也に狙いを定め・・・!!!!!!」

自身の靈力と妖力を放出させて狼牙と龍爪にそれぞれ黒と白の炎を纏わせる。

そして『結い』と『消去』の能力を発動!

「コレで・・・決着だぜ!」

お互いの刀身がぶつかった瞬間、限界まで高まった妖力と靈力が爆炎とともに爆発した。

・・・〈少年休息中〉・・・

「ふい〜！お前・・・」

俺の結婚式だと言ってるのに飛ばし過ぎだろ・・・死ぬかと思ったぞ。」

結果としては、俺の勝ちだった。

煙が晴れた時俺の剣は修也の腕を吹っ飛ばしていた・・・

まあ手ごたえで解かったから腕と血はすぐさま回収して結果を修也に解からせたあとすぐにくつつけた。

「わ・・・悪かったって。」

お詫びと言っちゃあなんだが、俺が作った飯でも食ってってくれ祥磨に好物聞いて作ったから。」

まじか！こいつはうれしい・・・あ。

マズイ、外の世界の時の俺の好物ってまさか。。。

「さあ！『鶏のから揚げ』に『肉じゃが』に『筑前煮』。。。

鶏肉のフルコースだぞ。うまそうだろ。」

「あ．．．ああ、うまそうだ．．．

正直めっちゃ食いたいけど。。今は出してほしくなかったぜ『鳥料理』。。。」

誤字じゃない。鶏以外にも鴨や雉．．．

食用の鳥という鳥がところせましと並んでいた。。。。すごいまそうだ。

唾液もどばどば口の中であふれている。。。

久しぶりの好物だ。めっちゃ食いたい．．．．

文が隣りに居るといふこの状況は勘弁してほしかったが。。。

「な。。。。なんですかコレはくくくく!!!」

と。。鳥を調理するなんて．．．酷いです。。。。貴方の血は何色だー!!

だいたい鳥を食べたり双覇に食べさせようとすただけでも腹立たしいのに．．．

貴方絶対に素材のオスメス確認してないでしょう!?

ふざけないでください。双覇を食べて良いのも双覇が食べて良い鳥も．．．

私だけです”!!!」

案の定、怒り狂った文は激しくまくしたて



## 第81話―結婚初夜つてナニすれば良いの・・・？

「はあ・・・はあ・・・！結局、向こうで食べられなかったわね。」

ちよつと待つてて双覇。すぐに晩御飯作るから・・・」

博麗神社から妖怪の山までは、俺と文なら対して時間も体力も使わないはずだが家に戻ってきた文はちよつと苦しげに胸を押さえていた。

先ほどあんなことを叫ばれたこともあり、

晩御飯（意味深）ですかっ!?!とか思ってしまったがどうにも普通にご飯を作るようなので、俺も手伝うと言つて二人で作ることにした。

・・・〈少年少女調理中〉・・・

「ん。鳥が食べられなかったのは確かに残念だったけど

文の料理はおいしいから仕方がないか・・・（ズズツ！ うまい！）  
ちなみに、今日のメインはうなぎ。

妖怪御用達の人気屋台飯 八つ目ウナギだ。あとは里芋の煮付けや

古代米なんかが置かれている。

「褒めすぎですよ。もう。」

そんなことより、お風呂も沸かしておきましたからもうすぐ入れると思いますよ？

片づけは私と氷柱でしておきますから。」

妖怪としての力や年齢は氷柱のほうが上のはずなんですけど・・・。

どうにも山に居た時もだいぶ関係性が近いせいか娘って感じがぬぐえないんだろうな

上の者に謙って無い文ってちよつと新鮮。

「おゝ。今日は慣れない格好で疲れたからなく・・・

お言葉に甘えてゆつくり入らさせてもらおうとするよ。氷柱、文の手伝い頑張れよ？」

氷柱は、刀にしたときに一緒に持ってきていたので今は元の姿で一緒にご飯だ。

わかった。まかせておくのじゃご主人様！と元気いっぱい返事してくれる愛娘と

妻

を笑顔で見つめ、風呂場に向かった。

「さあ〜てっ！この服は・・・

洗濯しとくかな。こういう時に現代の外の世界がほんとに偉大だと言わざるを

得ないな。。家電三種の神器・まさしく神器という感じだもんなく」  
ぼやきつつ、脱衣場のかごに着ている和服を脱ぎすて入れる。

外の世界に居たころも部屋着は基本ジャージかスウェットだったから脱ぎやすかつたけど、男物の和服というのはそれ以上だ。

基本的に内側と外側でむすんだ紐をほどくだけ。その下はふんどし。

俺の場合は締め方わからないからトランクスだけ。。。

「よいしょっ！(ぎ)ばあっ!! ぶっふうく!!

きもちいいなあ・シャンプーとボディソープ。それにリンスと

うくん。毎日外の世界の温泉見たいな風呂に入れるのは素晴らしいんだけど。。。」

どうにも、この狼天狗という種族になってしまったせいだ

体毛が濃くなってしまっている。まあ主な原因は尻尾と髪なんだが。。。

人間状態になれば無くなるのだから、それで良いと思うんだけど

山の中ではこの状態のほうがすごしやすい。妖怪の巣窟であるが故かもしれないけど

若い天狗には俺のことも半人半妖のことも知らない奴が居るからな。

??? 「大変そうですね。体洗うの手伝いしましょうか双覇?」

「ああ、そうだな。助かるわくく。。。。て

アレ？今の声ってまさか。。。(むによんっ！ この感触・・・！) (〃〃〃〃)

謎の声の直後に、背中に当たる柔らかな感触。

しつとりしててむによむによしててすいついてくるような幸せな感触。。。  
こ・・・これってまさか。

「あ、あのさ・・・文？どうして。。。」

どうして、ここに居るの？氷柱はどうしたの？

聞こうと思ったことを口にする前に文が口を開いた・・・

「ハあ・・・どうしてなんて言わないでくださいよ双覇？

式を挙げると決めた日・・・言ってくれたじゃないですか。。。もう我慢が限界

なんですよ。」

ため息のようにも、聞こえたが違う。。。。

吐息と声を同時に出すかのようなこの感じは・・・官能的とでも言うべきか。

振り向いたら俺もおわるから振り向かないが恐らく体を隠すものは持つてきてない。

振り向いたら、妖艶で獰猛な鴉が居るはずだ。。。

「俺が言ったって・・・まさか、あの約束のことか。(むぎゅっ！

ま・・・待て！待ってくれ文・・・今ちよつと俺も大変なことになって。。。」

結婚式を挙げられると決まったあの日。



興奮した文に理性を取り戻させるべく、『結婚が済んだら良い!』って  
言ったんだっけ・・・

「大丈夫ですよ。私は気にしませんから・・・」

ほら体の力抜いてくださいよ。私だって女の子ですよ? なにも我慢できないからつ  
て

どこでも良いってわけじゃないんですから。。。」

つまるところ、ここ最近文はドンピシャで『発情期』らしい。

人間こそ自分で制御できるが妖怪や動物はそうもいかない。とくに・・・  
『動物』と『妖怪』両方の要素を持つ俺達天狗は『発情期』というのが特に酷い。

俺も、長いこと生きてるおかげかそこまで辛くはないが

最近が発散させることも満足にできず文には春の時期には必ず襲われ(椀にも)、

「正直言って・・・、俺の理性もそろそろ限界だ。。。 (ぼそつ)」

文に聞こえない声量で呟く。最近ついに俺でも制御できない

発情期がきてしまったらしく四六時中『そういう事』を考えてしまう日が少なくな  
い。文の目や顔をまともに見れない始末だ。

「流しますよっ!」

「おう。(ぎぼっ！ ああゝ・・・」

やっぱ気持ちいいな。」「じゃあ、次は私の番です。はい！」え？」

俺の体中についた泡を洗い落した後、

文が俺の隣りに腰かけてそんなことを言いだした。。。

「え？じゃありませんよ。良いじゃないですか夫婦なんですし

洗いつくらいい。。ちゃんと自分で洗った方が良いところは自分で洗いますから

お願いします。」

さきほどまで俺の尻尾や耳、体を洗っていたスポンジ(もちろん俺が出した)を

泡が立っている状態で突き出してくる文はどうにも洗わなきゃこの場を離れる気も

無いらしい。

「わ。解かったよ・・・(ごしごしっ

こ、このくらしいの強さでどうだ？」

スポンジを受け取り、とりあえず弱めに文の真っ白な背中に押し当て擦る。

近付き過ぎると俺の暴走した部分が大変なことになる・・・

ある意味、今までで一番の命がけだ。

「んっ！良いです。気持ち良いですよ・・・」

もう少し強くしてもらっても大丈夫です。」

解かってほしい。いまの俺にはこの発言が全く別の意味に聞こえる．．．  
気を紛らわせるように力を強めて（ごしつごしつ！ と洗っていく。

「んーんう．．あぁあ!!!

強すぎですよ双覇。背中やけどしちやいます。もう少しゆつくり。。。」

ヤバイ。。。密着とかそんなの関係なく理性も

俺の暴走してる部分も限界寸前だ．．．すくなくとも外の世界に居たころの  
俺ならとつくに限界振り切ってる。。。

「おう。。。（ごしつごしつ）

これくらいで良いよな．．．。。。」

洗いつこの続きはもう記憶に残って無い．．．。

おそらく、文の喘ぎにも似た声に反応しないように無心になるのに成功したのだろう  
「ふい〜！気持ち良い〜！！

しかし、ほんとうに広いよなこの風呂。。。鴉天狗って相当大事にされてんだな。」  
当たり前だ。鴉天狗それも射命丸文は

俺の知る限り天魔に次ぐ天狗の世界のナンバー2の実力を持っている．．。  
優秀な人材にはどこだって残ってほしいってもんだ。

「あやや。そんなことありませんよ。」

双覇が自分の家を天魔様をお願いすれば此処よりもっと大きくて立派なのを建てますよきつと。」

家の大きさが実力で決まるのなら、確かに一理あるが。。。

「良いんだよ。俺達3人で住むには広すぎるし、

俺は此処を気に入ってるしな〜・・・」

俺の言葉に文は笑顔になって。

「そうですね〜。もう一人二人増えるにしても

確かにスペースは余りますからね〜。壊すのももつたいないですし。。。ん〜！

（ふるんっ〜！）

伸びをした文の胸が水面でその自己主張を強め・・・

顔を赤くしながら目をそむける。

「双覇？私の体・・・好きじゃないですか？」

自信はあつたつもりなんですけど。。きつきから見えてくれないのはどうしてです？」

少し泣きそうな顔で問いかけてくる文。。。

ちよ、待って・・・

「いや、違う！文はどこをとつても俺の大好きな女の子だし

体だつて・・・その・・・魅力的だけど。。。だからそのちよつと困るつて言うか。

じ、実はいまだどういふわけか唐突に発情期に入つちやつたみたいで。

最近そういう事我慢してたからちよつと見過ぎると抑えられそうになくて（／＼／＼）  
顔を思いつきり、赤くして事情を説明する。

「そ・・・そうですか！（／＼／＼）

わ、解かりました今暴走されてもうれs 困るので先に上がつておきますね」

なぜか、赤面しながらも嬉しそうな口調で

文はお風呂を上がつて行つた。。。

・・・少年入浴中&瞑想中・・・

「ふい〜！良いお湯だつた〜・・・

文・・・はさつきもう入つてゐるから。氷柱入つてきて良いよ。

氷柱も疲れただろ？ゆっくり疲れを取つてきなさい。」

了解したのじゃ！と返事をするやいなや、「おつ風呂！おつ風呂！」と

実に楽しそうに浴場に向かつて行つた。うん実にほほえましい。

「やっぱ、ほとんど俗なこととは知らない氷柱は

精神が年齢に反して子どもなんだろうな・・・可愛くて結構だけど外に出す機会を増やしてもっと学ばせてやるか・・・(スツ)

そう思つて、寝所の襖をあける。。。

「ハあ氷柱はお風呂ですか・・・ここからなら距離がありますから好都合ですね。

あの娘をどう遠ざけるかを考えてましたが問題なしです。ハあハあ・・・」

すると、中には案の定・・・というか

文が居た。部屋の空気が悪かったのか完全に発情中だ。。。目がもうヤバイ。

具体的には言えないけど俺の一点から焦点がぶれない。

「なあ、文・・・俺も言ったことは守るけど。。。

ちよつとだけ我慢していくつか質問させてくれ。俺はどうして今発情期に

入ったんだ？後、痛い思いをするかも知れないのにどうして嬉しそうなんだ？」

俺の言葉で少し。ほんの少し、ギリギリの理性を取り戻し

質問に答えてくる

「発情期に関しては、全部の妖怪、妖獣、動物がそういうわけではないんですが、

確か天狗の文献にごく稀に自分の『想い人』でしか発情出来ないものが居ると書かれ

て居ました。。。

私が嬉しそうに見えるなら、それは当たり前です。好きな人の子を成せるのを

喜ばない女は居ません。。。それに」

一拍置いて続ける。

「もし、貴方が慣れていなくて私が痛い思いをしたとしても

それは私が貴方の一番で最初であるという証明です。貴方なら痛い思いをさせるのも

一瞬だと信じているしむしろ私にとつてはそれすら喜びです。」

そうして、俺の質問に答え終わった文は・・・

ゆつくりと衣服を脱ぎ始め、ついには一糸纏わぬ姿をさらけ出した。

「どう・・・ですか？あやや。」

すいません。お風呂場でも聞いたのにムード壊れちゃいますよね。。。。

でも、急に自信が無くなつて（どんっ きやつー！）

二度目いや三度目の彼女の体は、今回はじっくり見ているけど・・・

健康的な肉付きに白く艶やかな肌・・・この世の美人画は全てこの娘をモデルにしているんじゃないかとあり得ない想像もあり得るほどに綺麗だった。

「はあ、はあ。文・・・俺も我慢できそうにないんだ。。。。

でもせめて最初は理性があるうちに。。。」「ええ。。。（ちゅっ）ん。。。んう！」

押し倒した文の手が首に回され、唇を重ね合う。

もちろんお互いに嫌がらず最初から思いつきり深く・・・

「んっふうんっ！んくん・・・ふはっ（ツ・・・）」

ペチャ、クチヨと水音を立てながらからませ合い

どちらともなく離すと粘液質な唾液が糸を引いた・・・

「双・・・覇・・・（クチユ　んっ貴方の手で・・・）」

お願いします。。貴方じゃないと駄目なくらいに。。。」

読者のために少しだけ詳しい説明をしよう。（メタい？細かいことは良いんだよっ！

俺の右手は今、文の手に導かれて文の下腹部に触れてる状態。

そして熱い液体？がくちゅっくと音を立ててる。

「ああ・・・絶対に誰にも渡さねえ。」

お前は。全部・・・心も体も全部俺だけのものだ他のやつのことなんて

考えられなくしてやる。。。（クちゅっ！くちゅっ！

あれ？なんか、楽しくなってきた。。。

俺が弄り水音が鳴るたびに文の体が逐一反応してくれる・・・正直めっちゃ嬉しい。

何時の間にやら文の手もこっちに伸びてきていたが。

「あっ！は・・・あ!!んう・・・」

双・・・覇も。誰にも渡したくない。。貴方は私の・・・あああ!!」



手で触れられるだけで、もう限界を超えそうなので

文には悪いけど弄る範囲を胸まで拡大して攻めに集中できなくさせる。。。

「ほくひた？（あむっ！ はやも・・・

ほれをひぶんのものにするんだひよ・・・（ちゅー！」

まあ、スキは無い。

揉む、噛む、吸う・・・もちろん試したことなど一度もないが文はそんなつたない攻撃でもだいたい感じている。。

「ひゃーあ・・・そ、そうひゃ。。

わたひ、無理無理でひやう！も、もう限界・・・はやくはやく!!」

声的にコレ以上続けると、文の理性が壊れるんだろうと判断した俺は胸と下腹部から手と口をどけ改めて向き直る。

「はっ！はっ！・・・びっくりしました。。

双覇。。しぶつてた割にノリノリじゃないですか全く早く結婚して正解でしたよ。」  
胸を激しく上下させながら、気合をいれるように呼吸を整える文。

「あはは。でも文が悪いだろ・・・

そんな体でそんな声で、思いつきり誘惑されたんじや俺でも我慢は不可能だよ。」

俺は俺で、理性を保つために肩でめいっばい呼吸を整える。

「そう・・・ですか（／＼／＼）でも、

私が誘惑するのは・・・一つになりたいのは貴方だけですよ〜！

さ。もう我慢しなくて良いですから・・・興奮しちゃったら私に任せてください。

子供・・・育てるの位は手伝ってくださいね？（がばっ）」

足を開いて、迎える体制を整える文。。

子供が出来たらもうこういう事できなくなるんじゃないや・・・とか余計なこと考えたがその行動の所為で一瞬で吹き飛んだ。

「文・・・愛している。俺はお前のために生きる・・・。

この世界で一緒に・・・生きていこう。（くちゅっ）」

たどたどしい手つきでなんとか、自分も準備してから声をかける。

「んーええ・・・私も貴方を愛しています。

たとえ、この世界が無くなっても。貴方のそばに居続けますだから・・・  
安心して？双覇（くちゅ！ぬぷっ ああっ!!!」

この時二人の純潔が同時に散った。

体温と体臭がたちこもり、限界まで興奮した俺と文に引き返すなんて選択肢は無かった。二人の体温が重なりどちらの物かわからなくなったころ・・・

俺の意識は途切れた。



むしろ、記憶にあるかぎりでは昨日の夜のほうがまだ

元気だった。なぜ寝て起きたら疲労困憊なんて状態なのだろう。

「つか、まずはこの部屋をなんとかしねえと・・・」

服は今着ても汚れるからどうにかして風呂に行つてからとしても、この空気は換気する必要があるな・・・」

好きな人の匂いだったら、嫌悪感を示さず興奮するのとか思つたが。

全然だ。嫌悪感しかない・・・そもそも自分の物も混ざつてるわけだし・・・

「あ、でもこのまま換気するにしても・・・」

その臭いで山のみんなや氷柱にばれるか？ううん・・・」

氷柱は幾億歳の妖狐。山の哨戒天狗はこの時間ならもう任務についてるかもしれない

い

狐も狼も臭いには鋭い者だ。そんな奴らが居る中でこの空気を外に逃がしたりしたら・・・

「もうちよつと抑えるように。とか、言われたら恥ずかしすぎる。

初夜とはいえないくらなんでもそのことで怒られるのだけは嫌だ」

「ん．．．んにゆ〜．．．」

どうしたんです？ 双覇．．．ってこの臭い。。 んうっ

あは。。 良い臭いですね〜？」

一人言のつもりが、声を出し過ぎたらしく文がさすがに起きてきた。

そうだ！ 換気して文の能力で一気に吹き飛ばしてもらおう。それなら気付かれにくい

そうと決まれば．．．．

「おはよ。文．．．ちよっとお願いがあるんだけど あ．．．」

気付いただろうか。俺と文の状態は昨夜からなにも変わっていない。

『発情期』で『一糸纏わぬ姿』。。 トリガーさえあれば．．自身のを止めるのは

ほぼ不可能。

そんな状態で、俺は見てしまった。。

文の姿を．．．当然俺の体はすぐさま反応する。疲れ過ぎて襲わなかったのは不幸中の幸いと言えるだろう。

「この臭い．．．誘ってるんですか？（とろん）

私は別にかまいませんけど〜．．」

しかし、文のほうは昨日のこともう抑えるという気はないらしい……  
目は焦点が定まらず発情しきつてるし指もエライ方向に伸びている。  
なにぶん、何も着てないのだ全く隠せない……

「いや、そうじゃなくて今日もこれから皆にあいさつとか

お別れとかしないといけないんだから……頼もうと思つたのは換気だよ。

さすがにこんなに臭いがこもつてちや普通に換気してもアレだし……」

自分が反応してしまつてることに関しては、思いつきり投げ捨て無視する。

こんな状況だ……反応しないほうがおかしいと開き直すことにした

「あやや。まあそうですね……」

ちよつと二日連続で腰が立たなくなつても困りますし……。

換気。やつておきますのでお風呂行つてきてください!」

え?ちよつと待つてほしい……

昨日の俺よ……妖怪相手だぞ。あの射命丸文だぞ?……腰が立たない?え……

一体昨日の俺はどれだけ頑張つたんだろう。

「あ、ああうん。ごめんな?

よろしく……俺はお風呂行つてくるよ……」

それ以上は考えてもきつと頭が痛くなり、顔が熱くなるだけなのでその場を離れ氷柱を起こさないようにお風呂に向かった。

．．．．（少年少女入浴&準備中）．．．．

「はあ．．．．朝から疲れた。。。いや。

昨日の疲れが全く落ちずに今日は精神的に疲れたっていう方が正しいか．．」

今朝の騒動を周りに、知られずに秘密裏に処理して

俺と文は今お互いいつもの格好に着替えて博麗神社に向かつていた。

話せなかった相手も居るし、なにより主催者としては皆が無事に帰るのを見送る

義務がある。

「むう．．それはもう良いじゃないですか。」

私も嬉しくて暴走しちやったのは反省してます！やり過ぎたとは思ってますようでもお母さんから言われてたんです。

自分が好きだっと思ってた人とはなるべくどんな形でも一緒に居ろって。」



俺と文の意識が無くなる前、文が言っていたこと・・・

自分の好きな人と子を成せるのを喜ばない女は居ない。それは裏を返せばその喜びを味わえなかつた人が居るということ・・・

射命丸文の今は亡き母親もその一人だつた。

まあ、好きでも無い人と結婚させられ子供を作らされたがそこから

自分の夫にベタ惚れしていったと言うのだから、たくましいことこの上ないが。。。

「そつか。じゃあもうこの話はやめるか・・・つて

なんだこれ・・・宴会いつまで続いてたんだよ。」

神社の境内に立つた俺達を迎えたのは、酔つた人や妖怪が

所かまわず眠りこけてる絵面だつた・・・いや昨日夕方の段階で里の人間は

全員もれなく帰したから、此処で言う人間は半人半妖や霊夢、魔理沙等だ。

「ん・・・んゝ！もう朝か・・・つて双覇。

昨日はアレから一体何があつたんだよつ!?! 俺らのほうはアレから宴会が

激化しちまつて・・・俺や俊、優はすぐに誰かに眠らされちまつたけど

たぶん、大体のやつらは今寝たばつかだろうな。。。」

眠らされたつていうメンツに若干、なんらかの意図を感じるが・・・まあ

瞬が言うなら事実だろう。

ちなみに俺たちのほうはもちろん、はぐらかした。

ナニがあつて自分たちもほとんど寝てないなんて口が裂けても言えねえ。。。。

「そつか。じゃあ、俺たちが来たタイミングで瞬が目を覚ましたのは

相当ツイてたつてことだな。」

瞬の奴に、昨日の俺らのことを嘘を織り交ぜ説明しつつ

話の流れを切り替える。こいつのことだ雰囲気でなんとなく気付かれる可能性が

無いとも限らない。

「そういうことかもなく。あつとそうそう。。。。」

昨日渡そうと思つてただけど機会が無かつたから今渡しとく。。。。

結婚おめでとう。 双覇。 射命丸さん。」

そう言つて瞬が渡してきたのは。。。。

「これは。。。。『ガントレット』か？

それに『手帳』。」

恐らく、手帳は文への贈り物だろう。

俺が持っていてもしようがないし何より名前を記入する欄に『白雲 文』と偉く達筆に書かれている。

「ああ。ガントレットの方には『絶対防御』つまりどんな物を使っても

傷つけられないし壊せないっていう概念を付与してる。名前は無いから自分で

つけて使ってくれ。片手分作るのが精いっぱいだったけど

銃や靈力の弓矢を使う時の反動も防げるはずだ。」

片手分作るのが精いっぱいだと申し訳なさそうに言ってくる瞬だが、

別世界の一神と一妖怪の結婚式のご祝儀としては正直言って高価すぎる代物だろう。

俺の持つ『輪廻』と同等クラス。もはや神器といっても過言じゃない

「なら、なるべくカツコイイ名前を付けないとな！んく……」

『結守』ゆいしゅ 細くて強靱な結び目レ・ポットツティレ エロプスト目つていう名前にしよう……！

ちなみにイタリア語だ。

「おう。大事にしてくれよ？ まあ滅多なことが無きや壊れないが。

射命丸さんに渡した手帳はまあ『文花貼』もそろそろページ切れそうなんじゃないか

と思つてな……

それには『知識流出』、『増加傾向』っていう二つの概念を付与してる。

それと俺がしゃめい m . . . 白雲さんの名前を書いたからその手帳を開けるのは白雲さんだけって寸法だ。」

好奇心を駆り立てられたのかさつそく、使っている文 . . .

ペンを使わなくても書きたいことを思えば書き込めるうえにページを気にする必要も無い。。 記者にとつてはうれい贈り物だろう。

「ふむふむ . . . コレは確かに便利ですねえ。」

多忙などときにはありがたく使わせてもらいます！ まあ . . . 普段は文花貼こっちを使わせてもらいますが。。

双覇からの最初で最高の贈り物ですから。 それにメモをとるといふ行動も

記者つぼくて好きなので！」

俺が大昔にプレゼントしたもの . . . さすがにどんだけ節約しても

残ってるわけないから実はもう結構何回も新しくしてるんだが . . .

それでも文はアレを最高の贈り物だと言ってくれた。 涙が出た。。

「あはは。 りよゝかい。

何時まで経つても変わらぬ愛を願ってるよ。 まさに『死が二人を別つまで』つてなまあおまえら夫婦は何があつてもそう簡単には死なないだろうけどな！」

そう言つて瞬は、神社のほうに進んで行つた．．．帰るまでの暇つぶしつてとこか

「よつ。リア充おつゝ．．．」

ほれ、祝いたくはないが宴の席を私怨で汚すわけにはいかねえからな。」

後方から欠伸をしながら歩いて来たのは、俊と優だった。

瞬の話だどこいつらも大宴会の酒気で酔う前に眠らされたはず．．．

このタイミングで測つたように目を覚ましたな。

「おゝす。うわぁ．．．豪勢な花束だな。」

『鈴蘭』、花言葉は『永遠』 『アイビー』、花言葉は『永遠の愛』 『千日紅』、花言葉は『変

わらぬ愛情、不朽』 『ポインセチア』、花言葉は『祝福』．．．

めでたい意味の花言葉の花ばっかだなく．．．つてこれは『無花果の花』．

お前どさくさにまぎれてセクハラやめろよ。」

ちなみに、イチジクの花言葉は実りある恋、平安。そして．．．『子宝』だ。

「せつかく俺が、選んで特注で作つたんだからその位のイタズラには

目をつむりやがれ。」

俺が食つてかかるが、優はひょうひょうと受け流した．．．

野郎。。。

「それよりも双覇。 さっそくで悪いんだけど……」

コレ直してくれよ？ この創造神に頼んでも全然直してくれねえんだこのケチ。 つくわけで頼むな。」

俊がミサングを巻けつけた腕を突き出してくる……

「了解。 出来る限りやってみるよ……」

輪廻—封糸&封断刀。 まずは、もう壊れかけてつけてても意味の無い

封印を斬る……」

輪廻を変化させて作った『封断刀』は封印の効力を残したまま、媒介のみを

破壊することのできる神器だ。 もちろん、封印自体を強制的にぶっ壊すこともできる

「それで、封糸を編む……ふうふうふうふう。」

神力を針の形状に変え、深く息を吐きながら

少しずつ編んでいく……1時間ほどすると額や腕に汗が浮かんできた……

「よし……。後はここをぎつちりやって……」

ほい出来たぞ。」

完成した瞬間に俊の腕に出来たミサングを付けて、封断刀の効果を解除する。

「おお……。サンキュな……」

さつて！戻るまで時間あるみたいだしもう一眠りすつかな．．．「あ、ちよつと待つてくれ．．．」．．．ん？」

二度寝に移りそうだった俊を呼びとめ、昨日から思つてたことを伝える。

「．．．俺に、『死の境地』を教えてくれないか？

俺は．．．もつと強く成らなきゃいけない。。　なんていうかまあ勘．．．なんだけど

この先このままの実力じゃ俺は駄目だと思ふんだ。。。

なんか、ここでさらにレベルアップしないとこれから後悔するような気がする。」

「．．．ふうん、予知や未来を見る力も無しに気付いたか。。。

双覇の未来が姿を変えつつある．．．（ぶつぶつ）」

俊のほうに視線を向け、思案する様子を眺めていると

ぶつぶつと優が何かを呟いた．．．が、まあ今は気にしなくていいや。。。

「ふうん．．．『死の境地』を教えると来たか。。。

無茶言つてくれるなあ　あれは俺の家系ならほぼ全員が習得させられるが

死ぬ瞬間．．．その瞬間の集中力を引き出す技術だからな。

教えられるものじゃないんだ．．．感覚だからさ．．．

どうしても身につけたいなら死をま隣に感じなきやな」

申し訳なきさそうに俊がこちらに説明してくる・・・まあ、

一子相伝だから何も教えられないってよりはましか。

「死を隣に感じる・・・か。。。(ゾオツツツ

ツツツ・・・!!!) (ギインっ」

眩くと同時に『ナニカ』が迫るのを感じ、結月で受ける。。。

何かがぶつかつた感覚と共に殺気が消えた。

「優・・・? 何のつもりだよ。

俺がおまえの速度に対応出来なかつたら死んでt・・・「だからだよ。」

なっ・・・。(ギインっ!!」

もう一発斬撃が飛んできて、宙への追いやられ・・・斬りやられていく。

そしてアイツの狙いに気付いた。。。

(まさか・・・、俺を死に目に合わせて強制的に伝授する気か・・・?)

まさか、神たるアイツがそこまで考えなしの事をするだろうか?

大体こんなことで習得できる可能性は少ないのに。

「くっ!がっ・・・くっそがああっ!!」

結月でなんとか対応・・・



電桜もあればまだ対応できるけど。。。。 結月だけでコレ以上対応するのは不可能。

つまり。死ぬ。。。。

「ん。。。。おい優。

おまえ、なにやってんだ？ 双覇のやつめつちや睨んでるけど。。

つかそもそもアイツ何やってんだ??」

俺の異変に気付いた俊が優に声をかける。

ちなみに文はあの一件以来、俊が苦手なように無意識に距離をとっている。

「いんや？ 俺はな〜んもしてないぞ。(ぼっ

アイツが勝手に空飛んでんだろ。。。童心に戻るってやつ?」

優のやつが、腰に差した刀から手を離し何もしてないと

白々しくアピールしてくる。だがそれが普通のやつになら通じる。。。。

なぜならアイツの使う剣術は。。。

### 『神速』の領域

にあるからだ。 神にしか扱えぬ神にすら感知出来ない剣術。

それが創造神『金見 優』の斬撃……

「俺はすでに一度、ボロボロに体験させられたからな……

反応が完全に追い付けはしないとはいえ感知できる。ぐっ……（しゅっ）」

さっそく、対処しきれずにグレイス（かする）する。

しかも良い具合に追いやられているせいで俺が攻撃されてることに気付いてるものは  
居ない。

居ない。

「ほぼ寝てんだから当たり前だが……ぐっ！」

がっ……がふっ!。」

あの野郎……峰打ちに切り替えて来たな……

内臓破壊する気か!?

「がっつ!!! ぐっ……

や……べえ……。血が足らな……」

吐血と、思ったより深く斬られた傷により意識が朦朧とするほどの出血。

「ふうん．．．この程度か．．．」

なら最後だ。自分の大切なものを守って見やがれ．．（ひゅつ）

優が何やら眩き、手を動かしたように思う．．． 完全には見切れないが

（おい．．． お前の大事な嫁さんが斬られるぞ？

ちとばかし．．．オレに身体を貸せ”!!!）

ナニカの声が聞こえ、一瞬意識を失った。

「アヤ。フセロ!!」「え？双覇．．??」 ウツ．．．身体ノハウガ

モウモタナイ．．．カ。 チツ！（どんっ！）

次に俺に意識が戻った時、俺は文を突き飛ばしていて．．

俺の体にはすさまじい悪寒が走りその場所に優の剣が迫ってることを容易に想像させた

皮を裂き、血があちこちから出てきたところで悪寒と殺気が止まった。

「お前．．．．．なんで防がなかった？

文を守る．．それは結構なことだがおまえ自分の身を粗末にしすぎだぜ？」

人を切り刻んどいて、また一瞬で治した優がそう声をかけてくる。

「んじゃ。俺らはもう行くわ．．．．」

あ、そうそう・・・双覇。。 『お前は死の境地に至ることはない。』  
今後無理しないようになよ？」

それだけ言って、優達もどこかに消えてった。

帰りの時間はゆかりんに聞いてるらしいしまああいつらの実力ならスペルカード  
ルール

無用の妖怪にも勝てるだろうしほっとくか。。

しかし、俺が『死の境地』に至ることはない。 か・・・

「双覇・・・？ そんなに暗い顔しなくても大丈夫ですよ！

私、そんなに弱くないんです。自分の身の安全は自分で確保出来ますから！ ね？」

精いっぱい励まそうとしてくる文に、今出来る最高の笑顔で

「ああ」と反応してから昨日が命日になってたらと思うと内心安堵すr・・・基い。

内心ひやひやしていたやつのもとに向かう。

・・・(少年少女移動中)・・・

「わっひや~~~~！ もっと飲みましようよう!!

ほらほらあ~~~~」

ようやく見つけた、あの馬鹿は・・・

残念なが r . . . 基い。 喜ばしいことに無事蘇っていた。(あれ? 無事じゃ無くね)  
 すでにお茶飲みながら鞆ちやんに絡んできた。

「ひやつ! ちよ . . . ちよつと古河音さん!?

飲み過ぎ . . . ? ですよ! というかなんでお茶でそんなに酔えるんですか!?

顔が真っ赤になつて古河音の突進を必死に、回避する鞆ちやん。

加害者と被害者が傍目にも一目瞭然である。

「おいこら、人の神社十式場で何やってやがる。。。」

さすがに、見てられなくなったので口をはさませてもらう . . .

俺を見つけた瞬間鞆ちやんが突つ走つてきて俺の後ろに隠れてしまっている。

「ああ〜! 結神さま . . . . .」

昨日はよくもわたしを見捨てましたね〜。 おかげで私の艶やかな柔肌に

こんなにくつきりと痣が出来ちやつたじゃないですか〜!!!

そう言つて、自分の体のあちこちを見せてくる古河音。

見た感じ、頭に思いつきりギャグ漫画並みの内出血たんこぶが出来てるのと

あととはちよこちよこつと肩や背中に黒字 . . . ? が出来てるのが

一番の怪我かな。

「自業自得だ。結局暴走しちまったんだからな。。。」

「というか柔肌はともかく艶やかかってのは文みたいなのを言うんだっ。お前のは艶やかとは言わない。」

その後も、何十分か口論を続け・・・俺の後ろから飛び出してきた鞆ちゃんが叫んだ「も・・・もうやみえてくだひゃいっ!!」と思いつきり噛んだ静止によつて終わったその声を聞いた全員の胸の内がほっこりしたのは言うまでもない。

・・・(少年少女挨拶周り中)・・・

その後はまあ・・・いろいろあった。古河音の世界の慧音さんに会つて改めてお礼をしたり、祥磨に襲われたり、瞬と決闘したり・・・まあ・・・ざっと思っただけでもこんだけのことがあつて。

ゆかりんの準備が終わる瞬間まで騒いでから、異世界からの友人たちは帰つて行った。

古河音からは優のと内要ダダ被りの花束を貰つたりしたが。既に貰つてることに関しては伏せといた。折角あいつが持つてきてくれたものだからな。

まあそんなこんなで俺と文の結婚式は無事に終了し、今宵めでたく夫婦と相なった。

結婚式終了！コレで終わっちゃいますね・・・『亡霊少

女の想い 幻想に咲く 死の絆編』スタート！

第83話—白き春、開花する終わりの桜。

「ふあ〜。。。ん。。。んう〜!!!」

いつも通りの冷え込んだ空気によって、目を覚ました。

旧姓射命丸・・・現白雲家は幻想郷でも最高峰の標高を誇る『妖怪の山』の山頂近くにある。。。

だから、山下よりも冷える。 雪も未だに残っている・・・

「いや、雪が残っているっていうか・・・降りっぱなしだな。

これってもしかして。。。」

言いかけたところで・・・隣りから衣擦れの物音がして

起き上がってくる。 まあシルエツト的にも先日新婚となった俺の奥さん

『白雲文』なのだが・・・。



「ふああ．．．むにや。 あややく

また双覇に負けちゃいましたか。それでも早起きな方なんですけどね．．

それじゃ、ご飯作らないと．．うつ」

起き上がろうと、手を着いたところで文が謎の嗚咽をもらす。

大丈夫か？と声をかけてから身体を支えようとすると．．．．

「ちよつと熱がある．．．か？

嗚咽といい、今日はすつきり目覚められてないみたいだし。 一応、陽葉の奴に

相談してみるか。 とりあえず今日は全部俺がやるから文は横になつてろ。 な？」

多少無理やりに、文をその場に寝かせ

朝の仕事を始める．．． 風呂掃除に炊事、洗濯ものを取り込んで最後に陽葉の所に

相談に行く。 陽葉の顔が何やら微妙な表情をしたが．．．

症状を聞くや、思い至つたようですぐに飛んで行つた。

「うくん。 大丈夫かな．．．」

心配でしょうがないんだけど陽葉が絶対に部屋の中に入るなつて言つてたしなあ。

なに話してんだろ？」

気になるなあ．．．、病気とかじゃないよな？

でも最近ウソみたいに寒いし風邪とか．．．妖怪の風邪つて何をすれば直るんだ？

「ううむ。人間と同じように看病していいのか？」

いや人間に無害でも妖怪に有害とかある可能性も・・・こんな時のために霖坊に妖怪の看病の仕方みたいな習つときやよかつたな。

それか、ソツチ系の道具買うか・・・（ぶつぶつ）

いや、やつぱ教えてもらうんだつたら慧音のほうが良いか・・・

薬は霖坊売つてんのかなあ・・・ あんだけごちやごちやしてたら置いてそうだけど。

こんなときに頼れる永琳は今、それどころじゃねえか。

俺の原作知識もあやふやだが今頃はたぶん、月の兎の介抱中だろう。

「アレも駄目、コレも駄目・・・ううん・・・なにをうなつてるんだ？」

あ、陽葉・・・文の様子は?」

陽葉の顔を見るや否や、すぐさま跳ね上がって尋ねる。

「落ち着け。顔が近いだろうが!」

全く・・・射命丸の様子については問題ない。ありやただの『妊娠』だ・・・

最近の男はそんなことも判断できないのか。

とりあえず、おめでどう。 椛達お前のことが好きな天狗はまた愚痴を言い合う羽目

になるな・・・はあ。」

溜息とぼやきだけを、残して陽葉は来た時より幾分かゆつくりと落ち着いた足取りで屋敷のほうに消えていった。

「……………え? 『妊娠』…え?」

なあ陽葉。それってどういう意味だ あれ居ない…………… ってんなことより!

文……………!!! (ばっ!)

思考が回復したころには、すでに陽葉の姿は無く…

『妊娠』という言葉が頭の中をぐるぐると回り、ようやく理解できたと思ったら今度は文の反応とか具合とかがすごく心配になり飛びつくように襖を開ける。

「双……………覇……………うう……………」

うっ! ひぐつうつく! ……」

な……………ない……………泣いてる……………  
「ど……………どつどうしたんだ文!?!?!?!?????」

あの……………その……………さつき天魔から聞いた。『妊娠』したって……………

お、俺と子供作るのはその……………嫌。だったか? ……」

目の前の状況に、大混乱し呂律の回らない口を無理やりに動かして問いかける……………すると、ふるふるつ と文は首を横に振り。

「ち、違いますようつ！ ようやく．．．ようやく！」

貴方との．．双覇との子をこのお腹に宿せて．．嬉しくて、嬉しくて。ううう！  
夢．．．じゃ、無いですよええ？」

ボロボロと涙を浮かべ、問いかける少女に答えを伝えるように．．  
俺はその柔らかく細い体を抱きしめた。

「夢なんかじゃない。ありがとう文．．．」

ゆつくり身体を休めて元気な子を。産んでくれ。。。」

妖怪の子というのは、どう産まれてくるんだろう？

言い方があれだが作り方が人間と一緒になのだから出産も一緒なのだろうか．．

それとも、鴉天狗という種族なのだから鳥類同様卵で産むのか？

どちらにせよ。子供が無事で元気に産まれるようにこれまで以上に文を

サポートしなければ．．

「．．．。はい。」

がんばります、初めてですけどだからこそこの子には早く会いたいです。

飛べるなら親子そろってこの空を飛びましょう。

飛べなければ、山を散歩するのも楽しそうですね（なでなで）」

俺と文の血をひく子だ。十中八九飛べるとは思うが．．

人間の血を残してる俺が片親である以上完全な人間が生まれる可能性も否定できない。

「そうだな。此処がどんなに良い場所かってことを俺達で教えてあげよう。」

ここに吹く風の気持ちよさも自然の景色の美しさも、豊かな実りも、そして……  
たくさん繋がり。 (なでなで)

妊娠初期のため、まだお腹が大きくはなっていない。

だが俺も文もその手の中に存在する確かな生命を感じながら、ゆつくりとお腹を撫で続けた。

…… (少年少女イチャつき中) ……

「ん？ そろそろだな。 それじゃ文。」

俺は神社に行くてくるからあとのこととは陽葉にまかせとくな？

何かあつたらちゃんと伝えろよ？」

最近、俺も『風の噂』の感覚が解かってきた……

といつても感じるのは俺に対して伝えたい！ っていう強いものだけだけど。

「むう…… (きゅつ) こんなときくらい少しも離れないでほしいです。」

お願いです双覇。 今日くらい私のそばから居なくならないでください」

立ち去ろうとする俺の袖をつかみ、まっすぐに見つめながら訴えてくる文。

「文……。 大丈夫。」

霊夢といっしょにちよつとした確認をしてくるだけだから……たぶん冬が長く続いている

「ただだよ……すぐ戻るから。」

袖をつかむ文の手を握り、しやがみ込んで目線を合わせる。

ギリギリまで近付いてそう言う。

「……双覇。 浮気しちゃだめですよ？」

本当に……本当にすぐに帰ってきてくださいね？ 愛してます双覇……（ぎゅっ）」

握られた手を背中にまわし、抱きしめてくる文……

本当にちよつとした確認になればそれが一番いいんだけど。 俺はこの先どうなる

かを知っている。

つまり、冬が長引いてるこの状態は場合によつては最悪の奴を呼び起こすかもしれない

『異変』であるということを知っている。

「ああ……俺も、大好きだよ。 愛してる。」

それじゃ、行ってくる。。　　とうか浮気なんてあり得ねえな．．

俺はお前を遙か昔から好きだったんだから。（ちゅっ）

真正面の文に、軽くキスをしてから家を出て博麗神社に向かう。

ちゃんと陽葉のやつには文のことを頼むって伝えといた。

．．．．（少年移動中）．．．．

「おお．．．．やっぱ、どこもかしこも一面の雪景色だな。

もう5月も半ばなのにな。。（．．しゃっ！　なあ霊夢、この戸のたてつけ悪くない

か．．．．ってうおっ！」

いつもより、若干重く感じる襖を開け放ち茶の間に足を踏み入れると．．．

外の世界にて主に実況動画で良く見る一頭身の生物．．『ゆつくり』がそこには居た

ただし、霊夢達のデフォルメにしてはリアルすぎるような。

ていうか、機嫌が悪い時の霊夢の顔そのものじゃん．．？

「．．．．（ぶるるっ！　ちよっど。　人の顔物珍しそうに眺めてないで

襖しめてくれる？　だいたい．．私の顔なんて赤ん坊のころからずっと見てるでしょ。

今更もう見飽きたでしょ．．（もぞもぞ。）」

新種の生物、『ゆつくり霊夢』だと思ったものはどうやら普通に霊夢だったらしい・  
一頭身と思いきやただ頭以外の部分が全て炬燵の中に押し込まれているだけだった。  
まあ、霊夢は基本寒がりだしな。

「いんや？ 霊夢は美人で可愛いからな。

ずっと成長し続けてるし見てて飽きないよ?? それより俺も炬燵に・・・」

霊力的にも神社に来るときに、霊夢を見てはいつも測っている。

特に修行や特訓をしてるわけでも無いはずなのに気が付いたら霊力の質や量が大幅  
に

変化してるのだから守られる身のはずなのに追い付かれないように

会うたびにビクビクしている。

「なっ!! (カアアツ／＼) ちよっこのっ!

入ってくるな馬鹿あつっ!!! (ひゅんっ!!!)」

炬燵に入ろうとしたところで、家主の少女が赤面状態で霊符をぶん投げてきた。

一応反射で防いだがそれでも耐えきれなかったらしく立付けの悪い襖ごと吹っ飛ん  
だ。

この巫女・・・半妖の神に対してかなり高度な霊符ぶつけてきやがったな。。。

「うおっ! 神社から人が吹っ飛んできた!?!? .. ってなんだ双霸か。」



ビックリして損したぜ・・・」

吹っ飛んだ先には、見覚えのある金髪と見覚えのある茶髪が居た・・・

おいこら魔理沙でめえ損したってのはどういう量見だ・・・？

こちらら防いだ衝撃で、両腕火傷みたいになつてんですけど？　なんかプスプス言ってますけど？　まあ、数秒もすれば治るが。。。

「よう双覇。　まゝた霊夢のやつとイチヤついてんのか？

射命ま r ・ ・ 白雲さんに言つちまうぞ？　それよか・・・」

コイツ、今両腕チラ見して・・・「うわあ、今回もエグイなあ・・・」みたいな顔したのによくもまあぬけぬけと。。。

「お前ら、イチヤ付いて無いで早く話しあおうぜ。

コレは異変だ（ぜ）。　なあ？　双覇（霊夢）！」

原作の知識があるものとしては、ああ。　つて答えるべきだろうが・・・まずは言っておかなきゃ行けないことがある。

霊夢のやつもその点は同意らしい。　じゃせゝの！

「俺（私）はアイツ（あんなの）とイチヤ付いてたわけでは（じゃ）、  
断じて無い（わよ）　っ！！」

節

時は皐月、本来花々が咲き乱れ動物たちが騒ぎだし、桜吹雪にもなるであろうこの季  
絶叫響く幻想の郷は・・・未だ極寒の銀世界。

## 第84話―異変? そんなことより家の嫁!

「俺はアイツとイチャついてたわけでは断じて無い!!!」

「私はあるのとイチャついてたわけじゃ断じて無いわよっ!!!」

俺と霊夢の叫びはほぼ同時に発せられ、一つの声になり

目の前の二人にぶつけられる・・・やはり、考えてることは同じだったn・・・ちよつと待て!

「霊夢! いくらなんでも、『あんなの』は失礼だろ!

俺は、こここの神としてお前のことはずくつと赤ん坊のころから知ってるんだっ!

少しくらい敬えよ! 巫女だろっ!?!」

この紅白・・・酷過ぎるだろ。。

昔はずつと遊び相手だったと言うのに。。。 10歳を過ぎたころからコイツ

霊力も爆発的に増え、手を出すのも早くなった・・・

このまま成長し続けたら20歳には俺も本気を出さなきゃならなそうだ。

「あんなのはあんなのよっ! 『失礼』?」

自分とこの神社がこの有様なのに何もしない色ボケ神に払う礼なんて少しもないわ

よ!

つまり、そもそも『失う』『礼』なんて有りませんよくだつ!」  
んなつ!?

「霊夢のやつ・・・いつからこんなに毒舌家になったんだ。。。」

「おいおい・・・ そりゃあんまりつて奴だろう。。。」

「流石に泣ける。。。」

俺が、本当に泣きそうになってる所で・・・

「まー、漫才はその辺にして・・・もう一回言うから良く聞くんだけ!」

「霊夢、双覇・・・これは異変だ。 解決しに行くべきだ!」

俺の心のダメージもなんのその。

霧雨 魔理沙はこの『雪が降り続く現象』を異変と信じて疑わず・・・

隣の魔法剣士では飽き足らず、俺たちを異変解決に動かそうとしている。。。」

はあ・・・

「なあ魔理沙く? これが異変っていう根拠はどこに有るんだ?」

ただ、冬が例年より伸びてるだけって可能性もあるだろ。。。」

祥磨が、「お前はこれがヤバい異変だつて知ってるだろつ!」つて目で

訴えてくるけど・・・お前には言えない深〜い事情(文のこととか文のこと)が有つて

異変解決に迎えねえんだよ！

「つ……確かに、根拠は何もない勘だぜ……」

でも、さすがに今回が長すぎるってことくらい解るはずだろっ!？」

魔理沙が、そう言い返してくる。。。

確かにこの土地で長いこと暮らしてきたがここまで永い冬は無かった……

どう返したもんかな……。

俺が次に言う言葉を思案していると、今度は霊夢が。

「勘なんて適当すぎるわよ？ それに現状、何か被害が出てるわけでもない。」

ここは様子見するのが一番よ。解ったら貴女も炬燵に入ったら？」

勘なんて適当ってお前（勘で大抵のことを完璧にやっつてのける化け物）に言われたく

は無いだろうに。。。

「……..そうかよ。よく解かったんだぜ。」

お前がそんな調子なら私が今回の異変解決してやる！ 後になってやっぱり……

とか思っても遅いからなっ！ 祥磨、行こう……..」

擬音をつけるとするなら完全に『ぶんぶん』といった感じで

霧雨魔理沙は箒に跨り、雪が振り続ける白い空に向かって浮上していった。

「あつ! . . . . . たく。」

双覇! 早く来いよ . . . ? お前の事情だつてわかつてるつもりだが

お前とこの天才巫女が居ないと今回は厳しいんだからなつ」

祥磨も、魔法陣から箒を取り出しそれに乗る . . .

跨らずに普通に乗つて箒を浮上させていく。昔は結構失敗してたけど今じゃ

あれで自由自在に飛びまわる。

「 . . . . . 良いから、さっさと行け。」

俺だつてわかかつてるよ。『原因の調査』うまくやれよ?」

俺がそう言うのと、あいつは「ああ」とだけ言つて魔理沙を追つた . . .

ほんつと。俺が後を追うつてことを微塵も疑つてないな。

「祥磨 (魔理沙) の奴 . . . . . ほんつと . . . . .」

俺 (私) は良い友達を持った (わね)。」

そういえば、魔理沙のやつも来るな! とも言つてなかつたな。

ただお前の手柄にはならないぜつて言つてた感じだったな . . .

「よ。 霊夢 . . . . .」

お前も本当に良い友達を持ったな。 どうする?」

同タイミングでのぼやきを聞き逃さず、霊夢に尋ねてみる。

まあこいつの指示とどうか選択を仰いでおけば間違いはないからな。

「あんたもね。だから・・・さっきも言ったけど

ここは様子見が一番よ。本当にただ雪が降ってるだけって可能性もあるし。

何かあつたらアイツに持たせたお札が知らせてくれるわよ。」

はて？ そんなもの魔理沙のやつは持っていていったか??

「別に、今持たせたわけじゃないわよ。

元々あの子昔つからよく怪我してたから・・・呆れたことに、大体研究中の傷で痛みも傷が出来たことにすら気付かないのよ?」

そんなの、私が気付いて処置しないと大変でしょ。。。」

至極、面倒くさそうに言う霊夢。

歪んでしまつてる俺は一瞬百合の花の背景を想い浮かべたが、霊夢の表情はあくまで『めんどくさいけど、悪化されても困る』って顔だ。

こう言う時、自分がオタクだったって実感してしまう。

「そっか。なるほどなく・・・」

前に魔理沙が大事そうに持つてるポーチを見ようとしてこっぴどく怒られたって祥磨が言ってたけど。そんな中に入ってたのかもな?」

素直じゃない親友の『真心』が。」

大方、持ち主が重傷を負う。もしくは任意で発動される符・

効力は位置の特定と、込められた霊力を霊力弾としてばら撒くつとこか。

「何馬鹿なこと言ってるのよ……。」

お茶、飲む?」

いつも通りの無愛想な表情で勧めてくる霊夢……。

「ああ。霊夢のお茶美味いからな……。」

霊夢、お前気付いてるんだろ? この雪景色……完全に異変だ。」

台所の方に、消えていく霊夢の背中に声をかける。

「……んなもんわあ〜ってるわよっ。」

悪い予感はずつとしてたし、感覚でわかるもん異変かただの氣象の乱れか……なんて。

でもいくらあいつに叫ばれたところで私が此処を長期間開けるわけにはいかない

どうせ、あんたも気付いてるんでしょ?」

ここ最近、博麗大結界が安定してない。

俺と霊夢にしか解からないことだが……いつも長時間の気の緩みがあるとブレるが、

ここ最近はずつと外来人が入ってきた並に安定しない。



「まくな。。。 おつサンキュ。。(ずずつ)」

台所から出てきた霊夢から、お茶を受け取り手を温めながらソレをなるべく熱いうちに飲んでいく。

「あんた、お茶を飲む時だけは毎回残るわよね。。

そんなんじゃないや奥さんが心配するわよ。」

ジト目で俺の心を抉るような発言をしてくる霊夢。

「うぐつ。。。しようがないだろ。」

霊夢のお茶はうまいんだから、きつと文も許してくれるさ。(ずずつ)」

なお、確信はない模様。。。。

これだけうまい茶なのに目の前の少女の勘でしか作れないのだから

此処に来た時に飲むしかあるまい。。。

「はいはい。 さ、飲み終わったんなら早く帰って奥さんの面倒見てあげなさい。

あんたも人の心配できるほど気楽な立場じゃないでしょ」

飲み終わったと判断し、さっさと湯のみを下げる霊夢。。。

「そくだな。 お前が様子見するっていうんなら

俺も急いで追いかける必要はないし、一回帰るとするよ。。。。。心配だしな」

正直、今回の異変。 早急に解決する必要がある。。。。

俺も行かなきゃいけないんだろうけど・

「事情が違う……つていうのは『逃げ』なんだろうなく。」

でも、今の俺は死ぬわけにはいかない。自分のために・家族のために。。。

情けないけど・じゃなく霊夢。」

台所の霊夢に、一言声をかけてから神社を後にする……

祥磨のやつは確かに心配だけ。

あいつは元々、俺のブレーキ役だからな・引き際は解かってるはず。

……(少年移動中)……

「ただいま……。文、大丈夫かつ!? 具合とか・体に変化は無いかつ?」

家に帰った瞬間に、文が寝てるはずの寝室に走り込んで……

襖を開ける。

「……あ、双霸さん。」

文様。双霸さんが帰ってきましたよ。(ゆさゆさつ)

ちやうど眠っていたらしい文を軽くゆすつて起こしているのは  
犬走椛。千里眼を持つ白狼天狗だ・

「椛。ありがとな、文のこと。」

哨戒のほうは大丈夫だったか？ 天魔の協力はあおいどいたけど・・・  
実力ナンバー1のお前が来ることも無い・・・」

そんな俺にジト目を向けて・・・

「双覇さん？ こう言う時の女性は男の人が想ってるよりもすつごく心細くて

何でも無くても不安に押しつぶされそうになるんです。せめて貴方の代わりにな  
る人くらいは知ってる人じゃないと・・・

文さん、ストレスで流産しちゃっても良いんですか？」

良いわけないっ！とすぐに否定すると椛は少し笑顔になって・・・

「ですよ。私の心配をしていただけなのは嬉しいですけど！

今は一秒でも長く文さんの傍に居てあげてください。初めての赤ちゃんでしょ？  
私にもちゃんと元気な姿見せてくださいよ。そうそう、

文さんの傍につくことになったのは私以外にもはたてさんとさつきさんです。」  
ちやんと労ってあげてください。ということなのだろう眩きを残して

椛は飛び去っていった・・・

「双覇……! おかえりなさいっ!!

どう……でしたか?」

腕をこちらに向けてふつてくる文に近づき、ぎゅつと抱きしめて答える・  
なにかあつてどういう結論だったかを。。。

## 第85話―調査開始！ 白き世界に走る魔法。

「靈夢の奴！．．．良いところだけ持っていこうとしても

もう遅いぜ。 絶対に靈夢に手柄は渡さない。。。」

双覇と靈夢の二人が全くやる気を出さず、説得しても無駄と判断した俺と魔理沙はとりあえず知識の豊富な奴⇨パチユリーノレツジのもとへ向かっていた。

「なあ魔理沙。 神社を離れてから、もう10回は同じことをぼやいてるぞ．．．

大丈夫か？ ん。．．．．．なんか肌寒いな。。。」

肌寒いつて言うか、普通に寒い．．．．．っ

進むごとに寒くなってる!?

!!!??

「くっ．．．(カチカチツ 寒．．．いつ!」

魔理沙っ！ 避けろっ弾幕が来てるぞっ!!!!

冷気で肌が貫かれていく中、不意に俺たちの目の前まで迫ってきた弾幕。

青白く．．．この凍てつく寒さを体現した様な弾幕を回避するように促す．．

「なっ！ (ひゅっ!!!

く．．．．．手が悴んで操作が．．っ！ (チツ!!

くうつ掠ったぜ。」

マズイ……あの操作方法じゃ避けきれない。

それにしてもこの弾幕見覚えが・・

「今は……んなことどうでも良いか! (ひゅっ!!)

魔理沙! そのまま全速力で前進してろ……行くぜ、俺の魔法。。。

『緋符』ファイアンマ・フラグメント (炎の欠片) !」

スペルを唱えた瞬間、術者の前に現れた魔法陣……

そこから少しずつ……橙色の小さな球を放つ。

「カラー! 最強のアタイのちようスペルにそんな弱そうな攻撃

ぶつけるな〜!!」

そんな感じで弾幕をまきまくってたら、なんとなく予想してた……

そして予想通りの人物……いや予想通りの妖精 (バカ) が叫んできた。

「おいおい……折角、姿も見せずにこれだけの攻撃を仕掛ける

最強感がでてたのに台無しだぞ。それに……俺のスペルはちよつと特殊だな?

『焰符』ポリイドダンツァ (踊れ火の球)。」

新たなスペルを詠唱し、未だ存在する魔法陣に手をかざす……

橙色の小さな火種は俺の魔力を食い……燃え上がる!

「俺の発火魔法は、小さな火種を豪炎に変える。

一発で大技にできないから・・・スペルカードルール向きじゃないけど。

真に必殺の技を出すには準備が重要なんだ。ちやくんと頭にいれとけよ?」

急激に大きさを増した、俺の弾幕はチルノの氷を包み蒸発させる。

最初に撒いた火種は量を重視しただけありドンドン火炎球が出来る・・・

そしてそのすべてが踊り狂うがごとく、周りの氷の弾幕を巻き込み蒸発させる。。。

「嘘だ・・・アタイの氷が。。。」

認めない! アタイは最強なんだ~~~~~!!! (ビュオオツ!!)

吠えたチルノが、両手を前に出すとそこからまた氷が生成され

氷柱となって飛んてくる。

「恐らくはこの異変の影響だろうが・・・無駄だ。」

興奮して軌道が単調になってる上に、俺のスペルはもう発動してる・

お前に勝ち目は・・・無い。

『ノン ブルチアーレ。』(燃え尽きなな。)

そう言つて、背を向け魔理沙を追いかける。。。

直後に爆発音と熱風が届きピチュ音も響いた・・・

「はあく……。まさか氷精相手に撤退を強いられるとは。。。」

なんにせよ……これで確定だな。今回の異変も前回同様かなり危険だぜ」

指先から炎を出して、魔理沙の手を温めてやりながら

並列飛行するとそんなことを言ってきた。

「そうみたいだな。どうする？」

戻ってあいつらに報告してやっぱり来てもらえるように説得するか？」

俺の好きな彼女ならどう答えるかは解かりきっていたが、一応聞いてみる。

「祥磨。そんなこと絶対にしないしさせないよ。」

この異変はボク達で解決するんだからっ！」

相変わらずちよくちよく口調が変わる……いや。

「なあ……間違ってたただの独り言だが。。。」

もしかして、自我が残ってるのか？……ドリズル。」

大昔に死んだ俺の弟子……告白は出来なかつた想い人。。。

あいつにあいつが最後に残した魔法『転生』をかけたのは俺だ。。。

転生先の予想もついてたからこの質問をしたんだが。。。

「……っ！」



もはや自供しているようなものだろう・・・このビクつき加減は。

しかしドリズルが霧雨魔理沙に転生することまでは予想できていたが・・・  
おかしな点がある。

「なんで自我を持つてる？」

自我を持つ。ということとは記憶を保有すると言う事。

そしてあの魔法は転生先に自分の記憶及び努力の結晶（魔法の大部分）を持ちこめな  
い

・・・はず。

「・・・別に？ 自我を持つてるわけじゃないよ。

この身体・・・ボクの子孫で有ってるよね？」

その通りだと首肯する。

だよね。と言いつつ彼女は続ける・・・

「あの時、祥磨の機転で死ぬ前に転生の魔法を使ってもらえたボクは

10年くらい前にこの娘に生まれ変わった。あの魔法は本来『記憶』や『智慧』を

引き継げない。自我なんてもつてのほか・・・ボク自身がそう設定した。。。

でも、この身体の娘どうやら人間でしょ？

ボクはこの子の魔力として転生したんだけど・・・ボクの魔力を引き継ぐにはまだ器

が小さかった。」

転生といつても様々だ。

俺や双覇みたいなのは例外中の例外として、意識（自我）ごと別の生物に移るほか：魂となり自我も持たずに移る。その場合転生者は無意識に前の自分と似た人生を選ぶ

あるいは、なにかの力に姿を変え移る。今回のドリズルのように。

「まがりなりにも元王家の吸血鬼一族だったからね。

嫌な思い出だけど・・・アレでボクの魔力は普通の人間の限界くらいは超えた。

だから産まれたばかりのこの娘。

魔理沙にはその力を自分で受け取りきり処理することは無理だった。。。」

なるほど。 力とはほぼ魂と同義・・・

霊力なんかはとある地方ではもろに『魂』という扱いになってるしなく

「なるほどなく。 だから魔力であるはずのお前が意識として手を貸さざるを得ない。

魔理沙の中に魂を二つつくり器を二つ置かざるを得ないと?」

俺の質問に、ゆっくりと首肯し答えるドリズル。

「出来るかどうかは賭けだった。」

出来なければ、元々のこの娘の魂を残してそろそろ諦めようかなと思つてたんだあ。だつて魂の状態で会話できないとはいえ祥磨・・・勝手に行こうとするんだもん」  
本人いわく、幻想郷に行こうとするのを必死に止めたい・・・  
どうりで直前までポルターガイスト現象及びラップ音が止まらなかったわけだ。  
アレはドリズルがやってたのかギリギリまで引きとめるために。

「なあ・・・ドリズル」

俺が声をかけると、ドリズルはすぐあわてて・・・

「うわあっ!? まずいよ・・・」

この身体はあくまで魔理沙のもの。祥磨と話せたのが嬉しくてつい・・・

これ以上は影響が出ちゃうかもしれないからもう戻るね?」

待つて。もうちよつと・・・

伝えたいことがある。と言つて少しの間引きとめた・・・(引きとめられたのかな?)

少女に伝えなかったことを伝える。

「なあ、霧雨。

俺・・・お前が好きだわ。だからその・・・お前と生きていきたいって思う。。。

愛してるぞ。」

名字で呼んだのは、目の前の少女ともう一人彼女の中で眠る少女・・・

二人に共通した名前だったからだ。　ドリズル（霧雨）と霧雨魔理沙。  
二人に伝えたくて名前で呼んだ。。。

「・・・なっ（カアア／＼／＼　なに言ってるんだよ！

こんなっ急に・・・せめて心の準備を・・・じゃなくて！　変なこと言うなよ!!!  
とりあえず。　目の前の少女にはちゃんと伝わったらしい。。。

たぶん・・・こいつの中の少女脳な大人の女性にも届いて、大差ない反応をしてる・・・  
はずだ。

「変なことは言ってるねえよ魔理沙（ドリズル）。

ちゃんと正直に自分の気持ちを伝えただけだ・・・」

もう二度と、伝えずに大切な人を亡くすなんて後悔をしないために。

大切なことは全て伝え、共有するために

「なっ!・・・(グイッ

全く、言いたい放題言いやがって・・・今度。。。

今度私の家に来い!　こつちも言いたい放題一杯言ってる!!!

私のこの気持ちそっくりそのまま送り返してやる!」

赤面しつつ、帽子を深く被って少女は吠える。。。

それがたまらなくうれしい・・諦めていた彼女の声が聴けた。  
伝えたかった想いを伝えられた。。

「わあつた。でもまづは・・・・・」

あいつらに有力情報を伝えるためにがんばろうぜ？」

立ったまま飛んでる箒に跨り、隣りを飛ぶ少女に手を差し出す。

「・・・・ん。」

控えめに。　けれどしっかりと握られた手に暖かさを感じながら  
俺は空を駆ける・・もう二度と守るべきものを失わないために。

## 第86話—恋の魔法使い。 異変調査!

「・・・貴方達。。。」

人に物を頼みに来た者の態度じゃ無いわよね? (けほっけほっ。)

10数分後。 俺たちは目的の人物『パチュリーノーレッジ』に会えた・・・は良いんだけど、どうにも機嫌を損ねてしまっていた・・・それもそのはず。

「よっ! ほっ!

そんな弾幕じゃ、まだまだだぜ! フランドール! (ひゅんっひゅんっ)

自慢の箒捌きで次々迫る弾幕を避けつつ、対戦相手に

自らの星型弾幕を放つ金髪の少女。 霧雨魔理沙。

「ああっ! もう・・・避けるの反則!!

そろそろ受けて・・・よっ! (ゴオツ!!)

受けるどころか、掠っただけでも怪我につながりそうな

弾幕をばらまくのはすっかり狂気に悩まされることも無くなったフラン。

レミリアの奴も最近は皆と一緒に過ごして笑顔も増えたって言ってた・・・  
「はははっ！ まだまだあつ!! (ひゅんっふっ)」

あの弾幕をよくもまあ、笑顔で迎え打てるもんだ・・・  
万が一にも当たれば大怪我するぞ。

「ま、まあ・・・。仕方ないだろ？」

フランがすっかり魔理沙に懐いちまって弾幕ごっこをしてみたって言うんだから」と、そこまで観戦したところで・・・

この館に来た本来の目的。 もっと言えば先ほどから俺に対しずくつと『ジト目』を向けてる紫もやsげふんげふん！

パチュリーノーレッジに気がついた。

「はあ。 良く此処に来ては魔法の本だけを読んで戻る。

そんなフランドールの姿を見るのはたしかに少し心苦しかったのだけど・・・  
いくらなんでもいきなりあそこまで元気かつ礼儀知らずの友達を

連れてこないでくれる？ むきゆう。」

ジト目を続けられ、さすがにバツが悪くなる・・・

というか『むきゆう。』って何だ。 語尾か？

「あはは．．．。それに関してはすまねえとしか言えねえn「良し!燃えてきたぜ

スペルカード宣言!!」は?おいちよ「なら、私も! スペルカード宣言!」

お前ら〜! さすがにスペルはやりすぎだろ!!」

俺の言葉は精一杯張り上げてみたが、はるか遠くの二人には届かず。

今にも己の魔力と妖力の結晶であるスペカをぶつけようと発動を待っている．．ちつ

こくなつたら!!!

「性格に難はあるが．．．あいつを呼ばなきやどうしようもない。

『召喚』球磨川禊。頼む! 『オールフイクション大嘘憑き』であのスペル

消し飛ばしてくれっ!」

俺の必死の叫びに俺の召喚した過負荷マイナス様は．．．

『うわー。 此処どこっ!?!』『学園に居たはずなのに。』

『あつ!綺麗なお姉さん。』『僕の勘だけど貴女は裸エプロンがすごく似合う!』

どこから持ってきたのか、フリル付きのピンクのエプロンを

パチユリーにぐつと力強く進めていた。

「なつ．．なつ．．何を言ってる。」



「というか、祥磨！ この人間は一体……早くあの二人を止めてっ！」  
本人曰く。 見るに堪えないその顔をこれでもか！と

近付ける球磨川をなんとか止めながら叫ぶパチユリー……

「おっい。 球磨川……」

頼むからもう早くやつちやつてくれ……」

『祥磨君。 僕は必戦必敗の過負荷だぜ？』 『あんな綺麗で肌にはびりびりする攻撃してる連中の怒りを買うような真似は……』 『うん。 やめようと思ったけどもしかしたら面白いかもしれないぞ！』 『それじゃあ…… It's All Fiction!』

何がお気に召したのか一瞬で自分の思考を切り替え、腕を振り上げ指。パツチンをする球磨川。

その瞬間、発動直前だったスペルが二人ごと消えた……。

「球磨川っ!? なんで二人まで消して……」

いや。 おまえはそういう奴だったな。」

俺がそう言って、近づくと球磨川は答える。

『そりやそうさ。 過負荷である僕を頼りにしたのが間違いだよ』

『君にとつてのあの娘たちがどれだけ大事かはわからない。』

『けどごめんね 今の僕のトレンドは巨乳なんだ。』『あの娘たちは僕にとつて誤差の範囲で死ぬ人間だよ。』

だから、思いつきりぶん殴って・・・

「良いから、あいつらを戻せマイナス。」

こいつが使ったのが本場に『大嘘憑き』なら・・・あいつらを戻すのは不可能だ。

でもその可能性は無い。

『解かったよ。 戻せばいいんだね?』『彼女たちを。』

『全く・勝手に僕を呼びつけておいて最近全然使つて無かった『虚数大嘘憑き』ノンファイクションを使わせるなんて。』

そう言つて、球磨川は『無かったことにした』現実を『無かったことにした。』

・・・今回の異変についてパチュリーは何かを知つてるようだったが機嫌を完全に損ねてしまったらしく。「森の魔法使いの所に行きなさい」とだけ言つて

追い出された。

・・・(少年少女移動中)・・・

「さつてと。もうそろそろ魔法の森だぜ！」

それよりもどうしてパチュリーの奴あんなに怒ってたんだ？ んく・・・」

どうかんがえても『あの愚行』（弾幕ごっこ）の所為だが・・・

ソレを指摘したところで彼女たちにとってはただの遊び。なぜ怒るのかの理解は

できないだろう・・・

盗んだ本を『死ぬまで借りてるだけだ』と言い張っているし。

「ま・・・まあんなことより、アリスの家つてこの辺りなんだろう？

降りてみようぜ。」

魔理沙の疑問を適当にはぐらかし、地上に降りる。。

しばらくすると魔法の森特有の湿気や瘴気が纏わりついてくる・・・

魔力を持っていない者には有害という不思議な場所だが、俺と魔理沙には効果無い。

・・・（少年少女移動中）・・・

「おっいアリス。」

ちよつと聞きたいことがあるんだけど、入っても良いか？」

少し歩き霧雨魔法店を過ぎたあたりの一軒の家の前・

魔理沙が家主の名前を叫びながらノックを繰り返す。結構な大きさなので中に人が

居るとしたらかなりの迷惑行為だ・・・(汗)

「お〜い。 お〜い。(ドンドンッ

ア〜リ〜ス〜! 居ないのか〜〜〜?」

なおもドンドンとノックを繰り返していると・・・

「・・・人の家のドアを壊したいのかしら?」

普通そこまで騒がしくして応答が無ければ、留守だつてわかるでしょ・

はあ。 あなた達が聞きたいのは今回の異変の事かしら?」

俺達の後ろから、探していた家主。

『アリス・マーガトロイド』が歩いてきた・・・手に持つカゴには

透明な桜の花弁のようなものを持っている。

「えつと・・・とりあえず。 家にながって行って・・・

ちよつと長く説明する必要があるから。」

正直入れたくは無い。 言外にひしひしとアリスから伝わってくるが。

まあ本人に良いと言われたのだ・・・多少はためらうが遠慮なく上がらせてもらおう。

「えくと．．．それで？」

今回の異変の原因は何なんだ？ アリス。」

全員で適当な席に着き、とりあえず俺から切り出す。

「まずは、『コレ』がなにか解かる？」

カゴ（バケツトかな？）から、例の桜の花弁を取りだすアリス。

それをテーブルの上に置くが．．．やはり見なれないものだ。

「ん〜。見たことないな．．．」

コレが異変と関係あるのか？ アリス。」

魔理沙が少し触れて見てみるも．．．やはり解からない。

「ええ。コレは『春度の結晶』。」

コレが多く集まる場所は春になると言われる『春そのもの』とも呼べるもの．．

今回の異変は何者かがこの春度を幻想郷からどこかに持ち去っているのが原因。

残念ながら、『どこに』『誰が』は解からないけどね。」

お手上げというジェスチャーと共にそんな報告をするアリス．．

俺たちが聞きに来ると予想して、此処までの調査をしたのだとするとかなりすごい。

「いやいや．．．そこまで解ければ十分だよ。」

犯人は春を必要としてる奴ってことだな．．．後は俺と魔理沙でなんとかするよ。

「ありがとな! アリス。」

「ふむ。春そのものを強奪してることか……」

「まあ主犯の検討はついてるけどとりあえずはまだ色々見て回る必要があるかな。とりあえずアリスにお礼を言っ、別れた。」

「なあ祥磨……。今回の異変、妖精が多いな?」

「こどもどんどん出てこられるといちいち相手をするのがめんどくさいぜ……」  
「魔理沙が愚痴を溢しながら、迫る妖精たちを弾幕で撃退する。」

「妖精っていうのは自然現象そのもの……」

「今回の異変では四季が乱れちゃってるから、妖精たちも興奮して好戦的になってることじゃないか?」

「そういう俺の周りにもかなりの数の妖精が湧いてきている……」

「さすがに邪魔だな。」

「たぶん暴走してるだけだろうし、あんまりやりたくは無いんだけど。」

「仕方ないな……『光符』シャイン シード からの……」

「魔法陣を両手に展開し……光の粒を放出する。」

「そのすべてが回転し始め楕円形に形を変える」

「『光符』ルーチェ バレット!! 全員……不可避の弾丸に打ち抜かれる!」

糸を縫うように、背後にも配備した光が全て弾丸になるので  
量が居ると言っても光の速度の弾丸を避けれず・妖精達が勢い余って魔理沙の分ま  
で

全てピチユった・・・

「なあ魔理沙。春度なんだけどき・・・」

たぶん『あそこ』に持っていかれてるんじゃないか？」

そして、俺はある一点を指さす・・・

「んく・・・。でもただの空だぜ？」

「って・・・アレ？」

そう。ただの空が割れ・・・

春度を吸い上げていったのだ。それになんか人影も・・・

「行つて・・・見るか？（すつ）」

差しだした手をぎゅつと握つた魔理沙を連れて・・・

怪しさ満載の割れた空に向かう。

（この異変。俺らだけでどこまで踏み込めるかな・・・

双覇の協力が無いと踏み込み過ぎればどっちも死ぬ。）

そんな不安を覚られないようにしながら。

## 第87話—風纏て少年は翔る。

祥磨と魔理沙が異変解決に向け（たぶん）、動き出した頃。

俺……白雲双覇は。。。

「えっと……料理はもう少し米を漬けとかないとだし。

洗濯……は、もう干したし。掃除……は今やつてる……（とつとつとつ）」

かなりの広さを持つ、旧射命丸邸・現白雲邸の雑巾がけを行っていた。

もちろん氷柱にも手伝ってもらってるけど。

「ご主人様〜！ こちらの方はもうかなり終わりました。

後は……どうすれば良いのじや？」

蒼と白の髪を左右に振りながら……（撫でたら絶対にモフモフしてるんだろな〜）

向かいから氷柱がやってきた。

「ああ〜。俺もちようど今終わったところだし……

とりあえずこの後は何も無いし、文と一緒に空飛んでみるか。

もちろんちゃんと暖かい格好でな。」

すでに妊娠した母体ではあるが、まだ初期段階であることに変わりはない。



そんな段階から安静に！ 絶対に動くなッ！ なんて言っていては息が詰まってしまう

安静にしていたほうがいいのは確かだが行動が制限される前に

こういう家族団らんをしておくべきだろう。

文が溜めこまないためにも、新しい家族のためにも。

「文〜。(しゃつ 家のこと終わったし・・・

新聞配達がてら散歩という名のデートでもしないか？」

襖を開け、中を覗くと・・・

「あつ双覇。 ちようど良い所に。

ちよつとそのまま動かないでくださいねえ〜？ (シャツシャツ)

なにやら真剣な面持ちで机に向かっていた文が、こちらを見るや・・・

目を輝かせて机ごとこちらに向きなおした。

何度も見ながら、ペンや筆で紙に一心不乱に何かを描き続ける。

「ん〜と・・・何してんだ？」

ダレそうになるたびに、動かない！と釘を刺され・・・

ピシツとしつつ尋ねてみる・・・

「あや？ 言ってませんでしたっけ・・・。

阿求さんからお仕事の依頼を受けまして。 まあ書くのではなく絵という事で  
少し不安はあったんですけど。。。

大事な愛する人の事ですから、ちゃんと心をこめて描きたくて。」

結論から言えば、稗田からの依頼とは

忙しくなり自分がいけないので変わりに文に俺の容姿を描いてほしいとのことらしい。

文曰く、十中八九『幻想郷縁起』にかかわる仕事なのでミスは出来ないとか。

それといろいろ尋ねたいこともあるから、今度祥磨と一緒に来てほしいという

伝言も・・・

「はあ・・・まあ、解かったよ。 んで、何時までこうしてれば良いの？」

正直・・・結構こうしてるのは辛いんだけど。。。」

昔から背筋は悪い方だったし・・・冗談じゃ無く辛い。

「あとちよつとなので・・・(シャツシャツ

ん)。 もう少しカツコよく描きたいんですが・・・私の画力ではここが限界ですね。

あ、一応本人にこれで良いかも聞かなきゃですよね。。。

恥ずかしいんですけど・・・どうぞ。」

そう言つて、いそいそと先ほどまで熱心に描いていた俺の絵を

差しだしてくる文・・・受け取って赤くなってくれる文を横眼に見てみる。。。

「えっ・・・あの・・・コレ。かつこ良過ぎないか？」

俺、全然こんなんじゃないぞ?？」

受け取った半紙には『誰っ!?』って思うくらいに、美化された・・・

それこそ主人公達のようなかつこよすぎる俺?が描かれていた。

腕としてはもう職業でも良いレベルだろう。

こんなイラストが描けるイラストレーターさんなら、作品全買いついて位に俺の琴線に思いっきり触れている。。

「何を言ってるんですかつ?! こんなんじゃまだまだです。。

でも私には力が無いんですよう・・・」

どうやら、文はいまだに『恋は盲目』という奴らしい。

結婚してからも好きに成り続けられるって言うのは嬉しいし、正直俺もだけど

なんというか・・・むず痒いな。。

「んまあ・・・俺の美化のことは置いといて・・・

クオリティとしては、凄く高いんだし 大丈夫じゃないか? 俺は文にこんな風に

みられてたつてというのがすごく嬉しいし。」

コレが俺だつてことで幻想郷中に広まるのは、アレだけど

イケメンだと思われるなら別に不都合は無いし。

「……／＼／＼（カアア……）わ、解りました。」

じゃあコレで届けることにします。と、ところでどうかしたんですか？

外行きの服のようですけど。。。」

描くのに夢中で、俺の声は届いていなかったらしく

もういちど説明して尋ねてみる。

「良いですねえ〜！ 3人でお出かけですか!!」

あつでも……。」

『自分たちに構っていて、祥磨達のことは大丈夫か。』そう目で語っている。

「……大丈夫だよ。俺はお前の……お前たちのそばにいたい。(ぎゅっ

だからデート。しないか?)」

もちろん、あいつのことは気になってる。

言い争ってても幼馴染で悪友で親友だ。気には……なってるけど。。。

そう簡単にやられるやつじゃねえって解ってるから、心配は無い。

「はい……(ぎゅっ) 行きましようか！」

あつちよつと着替えますね〜。。 見たかったら見てもかまいませんよ?」

いたずらつ子のように笑い、本当に目の前で服を脱ぎたした文に。。。

俺は・・思いつきり顔を赤くして部屋を飛び出した。

「とりあえず、文も参加つてことで氷柱に伝えておくか・・」

ふう〜。最近ああいう事を良く言うってくるから顔が熱くなつてしようが無いな。」  
ちようど良いから、氷柱に冷やしてもらおう。

・・・・・(少年少女移動中)・・・・・

「ん〜っ！ 昨日は部屋から出させてもらえませんでしたから

風が気持ちいいですねえ〜！ やっぱり何か軽い運動を考えないと鈍っちゃいます。  
なにか妊娠中でもできる運動が有ればいいんですけど・・」

出来ることなら、無理してほしくは無いが・・

だからといって部屋に缶詰状態も精神的には良く無いだろうし。

「そうだな〜。 確かにあれだと

ストレッチもたまるだろうしな〜・・・」

何より最速としてのプライドもあるだろう。

「そうですね。結婚してから双覇つてば、全然デートに誘つてくれないんですもん  
解かってるんですか？ コレでも結構傷ついて何がいけないのかずつと考えてたん

ですよ？」

そういつて、少し表情が暗くなつていく文に罪悪感が募る・・・

たしかに異変解決、異変の後始末、式の準備、各世界への影響無くあいつらを返す・・・その他もろもろ。確かにデートの回数すごく減つてたな。

「ああ・・・悪い。確かにな・・・」

これからは一緒にいろんなところを見ていこう？ お前が居れば

俺はそれでいいから。」

本当に・・・俺は、文だけは失いたくない。

何が有つても。文だけは絶対に・・・

「.....。(カアア／＼／＼ はいつ。

これからも、ずう／＼と先まで私と居てください双覇！（ギユッ）」

控えめに握られていた手を、力を込めて握つてくる文・・・

少しだけ痛いけど。。。それ以上に離したくないと思つてくれるのがうれしくて・・・

俺からもしつかりと握り返す。

「うん。・・・あ。

氷柱、ほら。手・・・貸して。」

あぶない。周りが見えなくなることが良くあると言われてきて居たけど・・・

また氷柱が見えなくなるところだった。

「・・・全く！ 一緒に出かけている相手を放っておいて

よもやこちらには見向きすらしないのではとしばしばハラハラしたわっ！

もうちよつと周りを見る目を持たないと戦闘でも取り返しのつかないことになるのじゃ！（・・・キュツ。」

俺の差しだした手に、ぼやきを残しながらも・

遠慮がちに握ってきてくれるところがやっぱり可愛い。 うん・・・どつちかと

言うことやっぱ娘って感じの可愛さかな。

今はもう、逃げずに全ての人からの好感度を視てるから・・・

氷柱が少なからず俺を異性としてみてくれてるのは解かるけど。（といっても恋と呼べるほどのものじゃないが）やっぱり、娘は娘かな。

「うん。解かっている・・・イテツ。 解かったからそんな握りしめないで・・・

折れる！ 指だから軽く逝っちゃうから!!」

妖狐は、主に妖術の扱いに長けた種族だし力には秀でてないと思われがちだが。

妖術の中には身体能力を向上させるものもあるし、獣の要素が強い妖怪は基本的に身体能力が高い。

つまり、人間状態の俺の指の骨くらいなら小枝のごとくポキッと逝く。

「ふいふいっ。・・・ねえ双覇?」

私、今のあなたは少しだけ。嫌い。。。」

俺たちのやり取りを見ていた文が、頬笑み。。。

そしてあの夜以後・・・はじめて俺を拒絶した。 繋がれた手を離し・

まっすぐに伝えられた言葉に俺は。。。

「え・・・あの・・・文？」

どう・・・して・・・？」

混乱し、困惑し、理解できなくなつて・・・尋ねた。

「なぜ。 その答えはきつと・・・私が好きだった双覇ならもう持つてる。

解かつてることのはずです。」

俺なら、解かつてること・・・。

「双覇。 貴方は今私に隠していることが有る・・・

中身までは解かりませんが記者をなめないでください。 私の新聞は・・・

仲間内にも霊夢さんたちにも嘘で塗り固められてるだとかでまかせだとか。

脚色だらけで真実が無い・・・そういう風に言われています。」

文・・・でも、そんな風に言われているのを知っていてなお・・・

コイツは作り続けている。 自分が見つけた面白いと思う事、伝えたいと思う事を



一人でも多くの人に伝えるために。

「ええ。天狗は嘘吐きですよ？」

特に私は。何考えてるのかわからないって身内にも良く言われたもんです。だからですかね？

自分の感情は隠して見せ無くなり、変わりに……人の感情が見えるようになった。」  
だから、確信が有ると……

俺が文に嘘を吐いていると言う事に……

「俺は……べつに」別に。は無しですよ。」……」

流石俺の嫁……先を潰された。

俺が最近想ってること……

「気になってるんですよ？ この異変のこと。」

解決に向かってるのも祥磨さん……信頼はしてる。でも行きたいんでしょう？」

……やっぱり、文には全部バレちまうらしい。

「……いつの間にか。お前たちを言い訳にしてたんだな。」

離れてる間に失ってたらって、もう誰も……大切な繋がりを無くしたくないって……  
うん……。 (パンツ！) 文。俺決めたよ。」

いい加減に驕るのをやめよう。俺が居なくても文は……

妖怪の山のみんなはちゃんと強い。

「ちゃんとみんなに助けてもらう。」

俺一人じゃ、全部は守れないから・・・今はお前じゃ無く親友の所に。

まだ届く。なら俺は、ちゃんと守ってくるよ。

愛してる。行こう！ 氷柱。」

見つめ、キスを交わし・・・契約解放。

半人半妖モード（ver文）で超高速飛行・・・もちろん、氷柱には付いて来てもら

う。

待ってろよ・・・もう迷わない。俺が行く！

## 第88話―白雲流と魂魄流。

「ご主人様。勇んで行くのは良いが・・・

祥磨さまたちが行った先はちゃんと解かっておるのかの？」

氷柱が話しかけてくる。

まあ、氷柱的にはこの異変について全く調べてない俺に心配するのは当り前だろう  
俺はちゃんとこの異変について知ってるし・・・

あいつからも情報は貰ってる。

「ああ。ちゃんと情報は貰ってるよ・・・

今回の異変の黒幕は『冥界』に居る。あいつらはもう先に・・・って

まあそう簡単には事は運ばないわな？」

あいつらを追ってはみてるが・・・

四季が乱れるってことは、妖精や季節の妖怪の暴走がすごい。

「うふふ。春ですよ？」

春ですよ・・・なのに・・・どうして！雪が降り続けてるんですか！」

今日の前に居るのは、リリーホワイト。

通称『春告精』 能力は『春を告げる程度の能力』・・・

普段はほかの妖精同様（どこかの⑨を除き）危害を加えてこない

温厚な奴なのだが、春先になるとその特性上興奮状態に入るらしく下手に春告げの

邪魔をすると弾幕をばらまき襲われる。。。

「いや、俺たちは今からソレを解決しようと・・・うおっ！」

今もその例外では無く、むしろ今までにない春の様子に荒れてしまっている。

荒んでる妖精ほど怖いものは無い（性格のギャップ的に。）

「春ですよ。春ですよ。春ですよ。・・・なのに、

雪が降り続いてますよ！ はるるでくすよく!!!」

桜色の弾幕が迫る・・・

!!!

ありやあ・・・イツちまつてるな。。。

「よっほっ・・・ 氷柱。 タイミング合わせろ・・・

1・・・2・・・3！」

3カウントした直後、氷柱が完璧なタイミングで能力を発動。

敵の弾幕に思いつき突っ込んだ俺の目の前から弾幕が全て消失した・・・

「悪いな。 すぐに解決してくるから終わったら、思う存分

春を告げてくれ!!」

コレ以上はかまつてられねえっ!

冥界までは遮断されちまうとさすがに、俺の力も届かない。。。

つまり、全速で飛んでいくしかない・・・

まあこういう風と考えてると邪魔が入るつてのが世の常だ。

「くろまくろ。 そんなに急いでると危ないわよ?」

私と少し遊んで行きましようよ。」

青い服、白い帽子・・・全体的に寒色でまとめた衣服。

正直この寒い日に見るとうんざりする服装だ・・・

「悪いが、遊んでる時間は無いな黒幕さん。俺は友達助けに冥界に

用が有るんだよ!」

彼女の名前は、『レティホワイトロック』

種族は雪女の一種。妖精とは違うが季節によって気性に変化の出る妖怪。

今は案の定、普段の倍以上は荒い・・・

「そう・・・。なら遊びじゃなく

本気で来れば良いんじゃない? はっ!!」

かざした手から放たれる白い弾幕。

結構な速度。雪女は現れるとき吹雪を纏うというが

アレはどうやら本当だったらしい。

「俺が、本気を出すと奥のやつらに気付かれるかもしれないからな……（ふっ。

少しの間。眠っててくれ？（すっ……）」

瞬きの隙に、背後に回り込み布に含ませた睡眠薬を嗅がせる。

少しの間抵抗し……眠りに落ちた

「ご主人様……その突破の方法はどうかと思うのじゃ。」

自分でも理解はしていたけど、客観的に見てもやっぱり酷いらしい。

まあ美少女（妖怪）を背後から薬で眠らせるって完全にヤバイ奴だからな……

「ん……氷柱。確かにそうだし解るんだけど……」

も少しだけ優しいめにコメントしてほしいな……辛い。」

そんな風に弾幕ごっこを回避。もしくは一瞬で終わらせつつ……

俺と氷柱は空に現れた切れめに突入した。

余談だが、案の定『騒霊』の奴らも現れたがちようど咲夜と霊夢が

追いついてきたので任せてきた……あの二人なら大丈夫。

……（少年少女移動中）……

「……相変わらず、西行寺の家の奴らには文句言いたいな。

この階段の長さはどうなつてんだよ。」

久しぶりに来てみたら、案の定すさまじい長さの石階段・

馬鹿正直に歩いて登る気は無いから飛んでいるが……良く見ると、石段一つ一つ

すべてが見事に掃除されていた。

桜の花弁は落ちているが、アレはおそらく後から落ちたものだろう。。。

「なるほど。 今代の『庭師』もすごく優秀なんだなあ……

しかし。。『魂魄』……か。」

妖忌さん……今は隠居し、愛孫である『魂魄妖夢』にその任を任せている。。

つて聞いているけど今はどこに居るんだろうなあ。。。

「……………(ひゅんっ!）」

「……………(すっ!）」

気配を消す技術はまだただだけ。 剣技がここまで鮮やかならば……

間違いない強者と言えるだろう……

「よう。 妖忌さん……魂魄妖忌の後任がずいぶんと可愛らしいな？」

それと急に斬りかかってくんない。」

無言で目の前に現れ切りかかってきた少女は、何も言わずもう一本短刀を抜き構える・・

「先代様の名前を知っているものは、ごく僅かしか居ない。

私と幽々子さま・・・そしてそのご友人のみ。つまり、貴方が『白雲双覇』さんですね？ 先代の指南を受けていたと聞きました。」

あの目・・・・

俺と、本気で戦いたいって目をしてる・・

「ああ。妖忌さんは俺の剣術の師匠だ・・・

あの人のおかげで俺の兎戯みたいな剣は敵に届く剣になった。」

すると、妖夢の雰囲気が変わった。いや・・

隠していた雰囲気が隠しきれなくなったのかもしれない。

「私は・・・貴方と戦ってみたかった。」

先代の最初の弟子である貴方と剣以外においては先代を圧倒しつつには剣ですらも、勝利したという貴方と。だから・・

遠慮はしない！（ひゅんっ！）『キーンツ!!』

妖夢の姿が消え、一瞬で距離を詰める。



振り下ろした長刀を結月で受け止めると、甲高い金属音がした  
「くっ……仕方ない。」

数分だけ本気でやってやる！ 氷柱、先に行つて祥磨達の手助けを頼む。」  
わかつたのじゃ！と言いながら、遠ざかる氷柱を確認し  
妖夢の剣を受け、鏢迫り合いにする。

「……(キンツ！)」

歯を食いしばり、憎々しげに鏢迫り合いを諦め・  
氷柱のほうに跳ぶ妖夢……

「行かせないよ。(ひゅっ 主人を守りたいならさつさと決着付けようか・  
お先にどうぞ？(氷柱・頼んだよ。)」

妖夢の進行方向の前に立ち、めちやくちや煽る。

……卑怯だけど勝つために。

「くっ……嘗めるなあ!!! (ギイイイ!!!)」

まあ、成功確率が少なくとも50%以上だと思つたからやつただけど・  
ここまで簡単に決まるとちよつと心配になるな。

「はああああああああああ!!!」

キンツッ！と何度も金属音を鳴らし、ぶつかる俺と妖夢。

二本の刀を結月だけで捌くのは、妖夢が冷静なままだつたら恐らく無理だつたな……でも……なんだかなあ。。。

「なあ。 もうちよつと落ちつけよ……」

やっぱり冷静じゃない妖夢に勝つても仕方ないからな。」

叫びながら、剣をふるう姿は夜叉と呼べるもの。

どこからどうみても女の子ではない。。。

「うるさいっ！」

私は、貴方なんかには負けない！ (すうく……ふうく……)

「……行きますよ。」

一応は、聴きいれてくれたらしい妖夢が深呼吸し

二刀をもう一度構え直す……

「……んっ (ゾクッ)

夜叉が武神に変わったな。 来いっ！ (チンッ すっ)

間違いなく。 来るのは相手の全速全力の一撃……

なら……居合これじゃないと太刀打ちできない。。。。

……… 実際は一分経つか経たないか。。。

だが俺達に限ってその間は途方もないほどに長く感じた．．．  
そして。

「．．．『魂魄流』桜花閃々！」

姿が消え、桜の舞い散るイメージが浮かぶ。

先に仕掛けたのは案の定妖夢。だが．．．

俺も一瞬負けた程度．．．この技なら間に合う!!!

「ふううっ．．．『白雲流』招雷一閃！」

契約解放。『建雷命』（タケミカヅチ）

雷を纏わせ．．．雷速。そして反射で切りかかる。

お互いにお互いを視認してはいない。だが．．．．．

「．．．お前なら。真正面に突っ込んでくるって思ったよ。

フェイントもかけずにまっすぐに。」

倒れこむ妖夢にそう声をかける。

「．．．ぐっ．．．う．．．貴方こそっ．．．先に技を仕掛けた私に真正面から

突っ込むなんて．．．馬鹿ですか．．．？」

そんな風に聞いてくる真面目な辻斬りに．．．

先輩として、答える。

「・・・お前の覚悟に答えさせてもらったただけだ。

それと今回使った力は・・・かなり信頼してるやつの方だからな」

「・・・そうっすか・・・(どきっ)」

妖夢が倒れると同時に。。

俺のわき腹に、痛みが走り・・・出血していた。

「・・・これからも、頑張れ。」

お前なら妖忌さんに追いつける。絶対に。。」

倒れてる妖夢に微笑み。どちらの傷も治して・・・

氷柱を追いかけた。。

## 第89話―異変終結？　　亡霊少女と死の桜

「くっ．．．氷柱を先には行かせたけど。

ちよつと後れちまった．．．」

昔からこういう時に無駄に余裕を見せちまうから、文や氷柱や祥磨に怒られるんだよな。。。

「はあっ！　はあっ！　．．．みんな、大丈夫か!?

ってこれは．．．どうなって。」

階段を駆け上がり．．．祥磨や魔理沙氷柱が居るはずの庭にたどり着いたでも．．．

「何で皆倒れてるんだ．．．まさか!」

「ぐっ．．．うう．．．」

ご主人様！　この亡霊．．．明らかにおかしい！　これほどまでの妖力。いくら身体があると言っても幽霊に持てる限界を越えておる!!　はっ．．．  
があっ!!!」

アレは・・・幽々子?

いや。。普通の状態の幽々子が『九尾』の氷柱と対等に戦えるわけない・・・  
となると。。。

「・・・予想通り。だけど出来れば外れてほしかったぜ。

早すぎる。。 どうしてもうあの化け物の力がたまりきってるんだ・・・」

俺の目の前にそびえている巨大な桜は、すでにその枝の一つ一つに

この地全てを覆わんばかりに満開の花を開かせていた。。

「くっ・・・うろう・・・」

やはり異常じゃ・・・このままでは・・・九尾でももたぬ・・・。。。」

幽々子の力じゃ・・・氷柱をここまで苦戦させるのは無理だ。

本気だしな・・・あの妖力。。。

「氷柱! 契約解放だ・・・」

すぐにこっちに! そいつはもう幽々子じゃない・・・ただの化け物。。

その桜の妖力に吞まれた・・・ただの『西行妖』だ!!」

俺一人じゃ無理だし・・・

この弾幕の量・・・氷柱の力が無いとまともに存在もできない。

全ての弾幕に『死』が込められてるんだから掠ることすら許されない・  
「りよ……了解じゃ。」

正直、わしのみではもたぬ・すぐにわしの力を！

『焼却』！

炎狐王の力で弾幕を消し去りつつ、雹桜となつてこちらに来る。

「よしっ！（ガシヤッ　それじゃあ……また力借りるぜ氷柱。」

『契約解放』全狐神　氷柱……」

……なんか変な気分だな。

狼天狗だったはずなのに、妖狐の神になるつてのは……

金色の毛に10本の尾……頭には狐耳か。

強力な契約解放を行う時……俺はその力を出し切るために何度か種族が変わつてる。

「ふう、今回は……妖狐である氷柱の力だから『狐変化』か。」

こうコロコロと自分の存在が変わると、どれが本当の『我』かわからなくなるな。」

どうして狐になるとこんなに自尊心があふれるんだろうな……

まあ……これも心地いいが。

「ふむ。　亡霊の娘にとつてもない妖力を持った大樹……

確かに我もいささか本気でいかねばなるまい。　消滅させん程度にな。」

やっぱり・・・契約解放にも相性が有るんだらうか。

氷柱とはもうだいたい馴染んでるからかすごく心地良い。。。

なんだろ・・・ベタな表現で表すなら

「今の我に・・・出来ぬ事など無いな。」

さあ、見たところマズイのはあの大樹だな・・・お前はそこで跪いている亡霊の娘。」

暗いオーラに、表情の無い顔・・・

『死』そのものをまきちらし襲いかかってくる幽々子（西行妖）。。。

だから、弾幕は燃やして本体を凍てつかせて動きを封じる。

「・・・・・・・・（ぐっ・・・ぐっ・・・）」

「・・・諦めておけ化け物。」

その凍結は物質を凍らせたわけではないのだ。その空間自体の凍結は

誰にも破れない。（すたすた・・・）」

何度か身じろぎしてるが、そもそも破る気もあんまりないのか全く激しくは動いてな

い

「さあて・・・じゃあ、やりあうとしようか。」



久方ぶりだな『西行妖』。数千年前までの我だと思ふなよ。(ゴオオツ!)  
振り下ろされる細い枝(サイズ的には十分巨大だが。)を、  
妖力と一緒に体から放出した熱で炭化させる。

「・・・終わりなのか？」

ならば・・・その鬱陶しい枝の全てを焼き尽くし・・・

存在を凍結させてやろう。我直々にな。」

氷柱の能力を刀に結びつける。

「我が刃に顕現せよ。『焦土』と『冷獄』

祖の力を『斬り結べ』・・・」

引き抜いた二本の愛刀。

『結月』は刀身が黒く俺の左腕にも伝わるほどに強烈な熱気を放ち、

『電桜』は青みが増し、冷気を放っている。

「これで準備完了だ。さあ待たせたな・・・

それじゃあ行くぞ(パァン!!!)」

(ゴ)主人様!・・・(ゴ)主人様!!)

余裕ぶっこいてる俺に、西行妖の容赦ないツツコミ(さっきの比じゃない枝)

が振り下ろされ氷柱が叫ぶ。全く・・・無事ですか? つか? 可愛いなあ。

さて、こんな風に思考出来てるんだおわかりだろう。

「ふむっ・・・やはり、余裕の表情で受けきることは難しそうだ。。。」

だがまあ今の我には効かぬ！（ギリリッ!!）

振り下ろされた枝は、二本の刀で受け止めた。

足は地面にめり込んで腕の筋肉もかなり無理させてる・・・（文と一緒に鍛えといえ良かった。）

「ふっ・・・」自慢の強靱な枝もやはり植物だな。

このままでは触れてる場所から焼滅するか凍結するぞ？ くっ!?・・・ぐうっ！

ううう・・・!!

押し切る気か・・・？

あの化け物がどこから力を出してるのか解らないからまだ膂力があるかどうかも解らない・・・押し負けっ・・・

「て・・・たまるかああ!!!」

龍と狼よ・・・私の妖力を喰らいその力解放せよ!!

握る手の先から、自分の力がどんどん持ってかれてるのがわかる。。。

それと同時にそれぞれの刀の特性もガンガン強化される。

「はあっ・・・はあっ・・・」

俺を潰そうとしていた10数本の枝のうち半分は、炭となって崩れ  
もう半分は凍りついて動かなくなった。

ここまででは計算通り。全力の俺と氷柱なら出来るって確信はあった・・・が  
「まずいな。我としたことが・・・(ズキツ!!!)

ぐっ・・・このままじゃ消し去る前に私の両腕が使い物にならなくなるかもな。」  
力が上がる分。両刀は両刃を帯びる。。。

つまり、使用者の俺自身の手も熱と冷気にやられそうになっている。

「獣妖怪の超回復と言えども、傷は一瞬では無くならない。

スタミナ切れは避けなければ・・・使うか。」

この二本の愛刀同様に、最も信頼できるものを使おう。

「流石に手数が足りないのな。悪く思うな。

『妖技』惑わし分身狐。それに我が神器の力で武装する・・・

『神術』千狐兵隊 少しの間頼んだぞ！」

印を結び、舞い散る花卉を片っ端から狐分身に変え

無制限に現れる輪廻によって武装。その間に多重結界を張り消耗した体力を

回復させる・・・

「はあっはあっ。ぐっ・・・やはりそう簡単には行かぬか。

あの葉狐たちでは数が居ても長くは持たない。」

だが、俺一人だとのぎ切れないだろう。。。

俺にひけをとらない強さのやつがもう一人必要・・・って。 あ。

「そういえば。 祥磨も居るんだよな・・・

あやつならば我に付いてくれるはず。 となれば・・・探すしかあるまい。」

結界解除・・・最高火力で熱を放出!

「ぐっ・・・あ・・・ちい・・・(ふらっ

祥磨く! どこだ! どこに居やがる・・・こんなところで死ぬたまじやねえだろ!!

やつぱり、この力は自傷の力だな。。。

んっ・・・この感じ。 近くに!!・・・っ! まずい・・・

「アアアアアアアアアアア」!!!!!!

西行妖が激昂しながらその枝をこちらに向かって叩きつけてくる。

しかも・・・何本かを束にして。

「この・・・人ならざる化け物のくせにいつちよまえに学習しおってからに。。

確かにこの束ねた枝ならば燃やしつくす前に首をふっ飛ばされ死ぬ。 だが・・・

残念だがこつちはすでに補足済みだ。・・・誰よりも信用できる『親友』を。」

能力を発動し見つけた霊力の地点まで、距離を結びその場から消える。

(ドゴオオオオオオオオオオ)

!!!!!!!

「ぐっ．．．衝撃がこつちまで。　祥磨。　いけるよな？」

祥磨は、どうやら気絶しちまった魔理沙の奴を逃がしていたらしい．．

本来の歴史と違い正史よりも強くなっていたがそれでも幽々子を倒すので精いっぱい

西行妖。。。EXですら生ぬるい化け物にはなにも出来なかつたとか。

「．．．はあ。　無茶な要求してくれるよな．．

なんだアレに勝つ手段があるのか？　フュージョンでも試すか？．．というか何だ？

その超<sup>スーパー</sup>○○人！　みたいななの。」

ふむ．．『ドラ○ンボール』のアレか。。。

今は、一刻を争うし試したこと無いから出来るかもわからないが試してみたいな。

．．．今は金髪でボサボサの髪が少し逆立つてる様に見えるかもしれないが全く違うけど。

「くく．．やってみても良いかもな。

『祥磨と双覇で『祥覇』か？　それとも『双覇と祥磨で『双磨』か。』

ま・・・今は我が力を溜め切るまで面倒な枝をなんとかしてほしただけだ。」

『だけ』と言つても、それがとんでもない鬼畜難易度のことだが。

「ああ・・・解つた。俺は魔理沙こいを守るために戦う。

・・・力。貸せよな。親友。(すっ)

霊力と魔力を放出させつつ、こちらに握り拳を向けてくる。

「ああ！ ラストは任せとけ。。。 それじゃあ・・・頼んだ！（がっ ばっ!!）」

拳をぶつけあつた瞬間を合図に、若干祥磨を先に。

二人で西行妖に向かっていく。

「さあ・・・始めよう。二人で・・・確実に勝つ。(す・・・)」

目を閉じ、引き抜いた二本の刃に意識を向ける。

ぶつけてやる。俺と氷柱の持てるすべての『焰』と『氷』そして・・・力を！

頼んだぜ祥磨。この技は・・・時間がかかり過ぎる。

・・・(双覇サイドアウト)・・・



「グウウウウ! ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

『コレでどうだあつ! 消えされ!!!』

「なるほど、流石に束ねる枝を増やされたんじゃ手が追いつかないな。

でもま。 なら『俺を増やすさ。』」

皆は、表裏一体って知ってるか?

この世界の物全てには表と裏の二面性がある。 今の俺を光としよう。

ホープ。 希望の光を使う魔法使い。

そんな俺に。 裏が有ったら・・・どうなると思う?

「答えはこうなる。」

ホープスパークの光を浴びせられながらも押しつけてきてる枝。。。

それを真横から切断する『黒い魔力』

「・・・なにがなんだかわからねえって顔してんなあ西行妖。

俺は、そこでちんたら生半可な攻撃してるやつゝの裏だ。 詳しくは・・・後で。

ま・・・お前は聞けるかわかんねえけど(笑)

・・・この程度で消えんなよ? 『闇符』デイスペアスパーク。」





「……………(すつ。)」

「……そうだ。 思いだしてきたこの感じ。」

『仲間』を『友』を『人』を『妖怪』を『家族』を……『文』を。

守りたいものを全て守るための力・不可能を可能にする力。

「怖がつてちやだめだ。 これが失敗すれば皆終わる……けど！」

我に失敗はない……我ならばどんな不可能も可能になる。 逆境も追い風になる。

『結月龍爪』『電桜狼牙』……結神の御魂において命ずる。 一つとなれ。」

青白き氷獣の刃と灼熱の繋がり刃。

一方ずつでは限界が有った。 ならば……それすら無くして見せる。

「……ふう。 フュージョンよりもよつぽど制限のある力だな。」

行くぞ……『神器』ゆいそらうきぐものたち結天浮雲太刀……

我が友……瞬よ。 また使わせてもらおうぞ『神技』えんどうのゆい焰凍ノ結」

……こちらの行動にもきちんと気を配りすでに回避行動をとつてる祥磨。

助かる。 別のことに力を回せる余裕はない。

一つになった刃を焰が舞い、氷結が走る。

火の玉と雪の結晶を螺旋状に纏った刃は峰から腹は純白に輝き……刃には



ザンツ!

・  
・  
・  
その瞬間。

途方もないほどに巨大な妖樹が倒れた。

## 第90話―西行妖？ いや、『ボク』だよ？

「はあ．．．！ があ．．．！ なんとか。。。

やれ切れたか．．．」

ここに封じられていたもの。

『西行寺幽々子の肉体』．．．どこか別の場所に封じよう。

すでに封印の媒介としてあいつの妖力を吸いすぎてる

「双覇！ 今の技は．．．

というか。 終わった。 のか？」

『焔凍の結』の衝撃から逃げていた祥磨が、戻ってきて声をかけてくる。

「はあつ．．．ふう．．．

まあな。 さっきのはとある剣士が使ってた流派の奥義だよ。

なんの因果か俺が習得することになってな」

瞬．．． 契約が切れてるってことは．．．

そういうことだよな。 せめて安らかに。 要さん向こうで瞬を頼みます

「……あいつのことだから、また復活するかもしれないけどな（苦笑）  
さて! じゃあ幽々子が起きる前にまたこの身体を封印するか・・・!!!」  
・・・何だ?

西行妖の中。 誰か・・いや何か居る。。。

「おー・・まさか、このボクと『君』以外に。

正史から外れた化け物を此処まで木端微塵に出来る奴が居るとはねく。。。  
流石の君でも驚いただろうね? ここまで主人公が強くなっちゃ。」

なんだこの声・・懐かしいような?。

つて『君』つて誰のことd・・・っ

「……ああ。 まあな。

!!!!??.?

全くめんどくせえな探し回つてようやく見つけたと思つたら、その封印。

内側からじゃ、破れなかつたら。 『化け物。』」

あいつは・・・『シロ』!

「ははは。 まあそうだね。

おかげでボクの能力もだいぶ落ちてしまった。 これだと君にも負けちゃうかも  
だからさあ? 見逃してよ『僕を生み出した創造者』」

・・・どういふことだ。

あの二人知り合いなのか？　だとしたらなんであそこまでエグい力の放出を。

「嫌だね。　お前を生み出してしまったからこそ、消してやる。」

お前の存在は歴史を・・時間をめちやくちやにしまうからな・・・」

・・・あいつ。　警戒してるこの声を。

あいつの能力は『妄想を具現する程度の能力』・・なにを警戒してるんだ？

「交渉失敗か。　じゃあ・・この世界ごと消されたんじゃ敵わないし、

久しぶりに、やろつか。　どの程度まで実力が出せるのか把握しておきたいしね」

その声が聞こえると同時に、西行妖が輝きだし・・・

目の自由が戻ったところにはシロがふつとばされ。　小さい子供が宙に居た。

「おく。　綺麗にふつとんだねく・・・

でもまやつぱり落ちてるな。　昔なら向こうの山くらいまで飛んだのに。

それとも君の力が上がったの？」

戻ってきたシロに言葉をかける少年。

「いや。　お前の力が落ちたんだろうよ・・・

じゃこつちからも行くぜ。　手加減はしない・・終わらせる！

『創造』　黒雷　はあああああ!!」

シロは黒い雷を両手に纏い、そのまま少年に振り下ろす。

目視で拳が当たった瞬間閃光が爆発・

「ふふっ。 もうすこし楽しむことを覚えようよ?」

ボクの力が怖いのは解るし、すぐにでも消し飛ばそうと思っただらうけど。

ふざけるなよ? その程度でボクが死ぬとも思っただか・・・

はあっ! (がっ!)

あいつ・・・あんなのを受けてまるで堪えてない?!

一体何なんだ。

・・・(双覇サイドアウト)・・・

・・・(天白雲サイド)・・・

「なっ・・・ぐう・・・くるっ はあっ!!! (ガガガッ!)

まずい。 コイツ、ほとんど弱ってないじゃねえか。

全力の『黒雷』で全くダメージを受けてない。

「それどころか、衝掌を叩きこむ余裕もあるとはな。」



「ははっ！ それに瞬時に反応して、今は君のほうが連撃を

叩きこんできてるじゃない。雷残してるみたいだしかなりビリビリ来てるよ〜？」

それでも、余裕あるくせに良く言うよな。。。

こいつ・・・さつさと終わらせたい事情を解って遊んでやがる。

「余裕みせんなら、一瞬で終わらせるぞ。」

コレが・・・全力だ。『創造』天罰剣 乖離。」

出し惜しみはするべきじゃない。。。

なら、『創造神』として戦うとしよう・・・

「ふくん。今の状況じゃその剣はマズいな。」

ボクも馬鹿じゃない。力がうまく使えない状態で本気の君と戦いたくなんてない。

だから・・・どうだろう？ 双覇くん達とボクで勝負するというのは。」

こいつ・・・何言ってる。

「俺は、お前を消し去りに来たんだ。」

双覇はまだまだ成長の途中・・・俺の力で終わらせてやる。」

こいつは・・・俺のミスで生まれた存在。

俺が消す! 絶対に・・・コレ以上存在させない。。。

「じゃあしようがないかな。」

ボクも、限界ギリギリで戦ってあげるよ・・ボクの力。 そのすべてを

一つに紡ぎ、形にする!

・・・ふふっボクの剣。 くらいなよ? 『忘却剣』

あれは。。 能力の結晶。

つまり、くらったらまずいってことか

「くらってたまるかよ!

・・・双覇! すぐに幽々子の身体を封印して此処から出るんだ!!

お前たちへの被害を考慮出来るほど甘い奴じゃ無い。」

地上の二人に声をかけ、剣を構える。

「・・・そいつは一体何なんだ!

封印だったら、もう済んでる。 それだけ答える!!」

双覇が叫び返してきた・・

そっか、アイツに集中しすぎて把握出来て無かったか。 情けない。

「あいつは・・かつて、『八岐大蛇』として出雲国の肥河で暴れ、『安部清明』として平安の地の妖怪を滅し、『織田信長』として安土桃山時代に変革をもたらし・・・

今は……」

「この西行妖の封印の中でやり過ごし現在まで生きながらえた。

どこにでもいる普通の化け物。　名前は……『黒霧ソラ』だよ！

よろしく〜！」

・・黒霧ソラ。

それが今のあいつの名前か……たく、ころころと変えやがって。

「……ふう。」

無駄話お疲れ。　コレで完全に消し飛ばしてやる。

創造神の天罰だ・・重く受け止めろ。　『創乖離』」

乖離……とある事象や理から背き離れること。　結びつきが離れること。

そしてその力を集中させ生み出した新たな物質。　全てのを理から乖離する

力の塊。

「ふうん。　たしかにまずいな……」

それをまともに食らえばボクでも消し飛んじやうね。　まあ……

本来ならそいつを武器や自分の身体に纏わせ闘う気だったんだらうね。

でも、出来ないんだよね？　何かに纏わせたらそれ自体が乖離されてしまうし

そもそもその状態から力を分散させたらボクを倒しきれないから」

この野郎……人の考えを見透かしやがって。

「……別にその程度の計画のズレ。」

お前を消すのには関係ないからな。 さあ執行させてもらうぞ!」

多少イラつきを覚えつつ、そのまま突撃!!

「あんまりボクを舐めるなよ? そんな重いもの持った奴の単調な動き。」

読めないわけないだろう……ふざけてるの? 「それでもないぜ!!」ぐっ!

なにつ!」

……あいつは! まさか。

「お前ら……なるほど、結界の力と並行して咲夜の能力を使ったのか!」

ぐっ……うう。 「俺がダメージを与えてやるからしっかり維持してろ馬鹿!」

……わあつたよ!」

……(天白雲サイドアウト)……

……(双覇サイド)……

「……んくつ。。 祥磨。。」

やっぱり試してみるかフュージョン・残念だけど俺はあいつに勝てる気がしない」  
それには祥磨の奴も同意らしい。

流石に、二人がかりでも無理だ・・桁が違うあしらわれて終わってしまう。。

「……ああ。。 このビリビリ来る感じ・・」

自分の力でつて思うけどまあこりや無理だな。 んで？ 『精神と時の部屋』でも  
用意するのか？ 時間なさすぎるぞ。」

そうだな。 一時間で一日になるあの空間でも時間は足りない。

ならそれ以上に協力的な時空間を生み出す必要がある。

「まあ・・多重結界！」

今回は靈力で作る空間。。

ここなら、時間の流れは俺の意思で変わる。

「おく…… 良いな。」

じゃ、『召喚』十六夜咲夜！ 流れの管理はまかせておこう。

俺たちは早速練習だ！」

とりあえず。 フュージョンポーズをたとえ無意識でも完璧に合わせるために

3日ほどずっと反復練習してみた。



はあああああああああああああ．．．らあつ!!! (ドゴンツ!!!)

俺も力を爆発させ、そして祥磨に少しだけ合わせる。

まあ微調整の範囲だが。。。

「ふう．．．お互いに力の同調は完璧。

じゃあいくぞ!」「おう!」．．．．．

「フユ．．．ジョンツ! ハアツ!!」

練習し続け完璧にマスターしたフュージョンポーズの指先から、

光が溢れ俺と祥磨の体と力が混ざり．．．一つに纏まっていく。。。

「俺は、神薙祥磨でも白雲双覇でも無い。。俺は．．．貴様を倒す者

神白シヨウハだ!!」

結界内なので当然、誰も倒す相手はいないが。

原作リスpektという感じでとりあえずそう叫んでみた．．．咲夜はまあ

これまで通り驚きながらも引き気味だった。

「その後は、この状態での修行をしまくって。。今に至るってわけだ。

望み通り相手になってやるよ化け物。」

あ、もちろん。今は結界から出る寸前にフュージョンしたから

時間の方もまだ余裕が有る。まあ・・・近くに來て解らされた・・・

フュージョンでもキツイ。

「ふふ。。。きつと君たちなら來てくれると信じてたよ。

ボクにどこまで通用するか・・・もちろん快く試させてあげよう。ねえ・・・シヨウハ  
あ・・・もちろん、チャンスが有ったら狙ってきなよ? 創造者。」

そう言つて・・・ソラはシロに気味の悪い微笑みと視線を送っていた。。。



## 第91話―『創造』と『忘却』・・・『主人公』

「よっ・・・んっ・・・なかなか筋は良いねえ。

この世界トップクラスの實力者二人の合体・・・素晴らしい。

相手がボクじゃければすでに君の前に立ててないだろうね。」

あれから3分ほど・・・絶賛實力差を思い知らされてる。

こいつ完全に遊んでやがる。

「くっ・・・輪廻。『千劍』見果てぬ戦場！ はああ！」

大量の剣を生み出し、その全てを別方向から叩きつける。

所謂物量攻めだけど・・・まあ当たり前だがこんなんが通用するとは思って無い・・・

「んっ。すさまじいね・・・」

千？ 万？ それとも億なのかな？ あ、答えはいらないよ。

ボクに事実はいらない・・・ 全て『忘れれば』良いのだから!!!」

あいつから沸き立つオーラ・・・

振られる剣先からも吹きだされる黒い霧状のもの、得体が知れないけど

アレに触れた瞬間。何もかもが消え失せてる・・・気味が悪い。

「忘れる・・・それがお前の能力ってことか。

・・・ふざけやがって！ お前は・・・過去を。。 歴史を。。

なんだとおもってやがる!!!」

俺の激昂にアイツは空虚な笑みを浮かべて、嘲るかのように言う。

「何・・・ってねえ。。 意味の無いものだよ。

これまで起こった革命・・・戦・・・人々の想い？ 数々の偉業？

そんなものを残して何になる？ 我々が生きているのは現代だ。

そんな死人たちを敬って何になる。 生前優秀な指導者といえども今となってはた

だの骸となり果てているのに。」

俺が、何も喋らないでいるとあいつはさらに続ける。

「もの言わぬ死人・・・停止した時間の中にあるただの物。

歴史とはその先々の人間たち。 常に今ある人間たちが自らの信じる者を英雄とし

その敵を魔物とする・・・生ある者の醜く、差別的なエゴによって作られる！

むしろ教えてほしい。 歴史になんの価値が有るのさ？

今ある事実が真実であると何故言いきれる？ 何故信じれる？ 慧音あたりに聞い

てごらんよ。 意味の無さが・・・良く解かる。」

・・・慧音の妖怪としての種族は『白澤（白沢）』

古来中国に伝わる聖獸で政權者のもとに現れるとされる人語を解する獸。

古来、中国の政權は支配者が変わるその都度歴史書を改竄しあるいは

捨て去り・自らの汚点を隠し、武勇伝を国の歴史としてきた。

「そしてそれはどこの国でも使われる手法。 たしかに・・・

過去は過去を知るものしかその事実を知らない。だから現代に伝わる物に虚偽は

あるだろうな。」

でも・・・だからって。。。

「過去は過去。二度と戻らないから大切なんだ！」

全人類が思う事だけど・・・それは実現しないから・・だから今を大切にできるんだ

・・・お前が、自由にどうにかしていいことじゃない!!!」

自分でもあんまり熱く成るべきではないのは解かってる。。。

だけど・・・!!

「ふうん。クールだと思ったのに結構熱いところもあるんだね。

それはそうと・・・もう時間切れも迫ってるんじゃない?」

マズイ・・確かにそうだ。。。



「・・・カオストルネディア・・・」

余裕の笑みで目の前まで近づいてきたソラに。

ラストの技を当てる。ただ当てるだけで・・・それだけでいい。

俺たちと天魔の力なら・・・

「もう、攻撃として打つ力も残ってないんだn・・・なっ!?

ぐっああああああ!!?(ツツツドゴン!!!)」

俺達の力が生み出した、『螺旋』

それにのまれて一気にソラは真下に吹き飛んでいった。。。

「があっつっ!!! はあ・・・はあ・・・」

「だあああっ! げほっ・・・がはっ・・・勝つには足らなかったか。。。」

フュージョンは、最後の攻撃の一瞬後。

何秒も立たないうちに解除されてしまった・・・でもあの攻撃なら。。。

流石にダメージ入るだろ。。。

『『流石にダメージ入るだろ。』 そう思ったら、大抵の場合。

その敵ってほぼダメージ負ってないよね。』

嫌な気配。 空気と声・・・徐々に。

それでいて一瞬のうちに戻った絶望を目の当たりにすることもなく俺たちは、意識を刈り取られた。

・・・(双覇サイドアウト)・・・

・・・(シロサイド)・・・

「・・・また調子に乗りやがってもう。

しかし。 ほんとにアレでも勝てないとはなく。。。」

いやまあ、解つてたけどもつと消耗させられるとおもつ・・・

いや。。。

「うっ・・・ぐうっ・・・ ..ん？」

なんだ、結局一度も戦闘に参加しなかった臆病な創造者様か。

さあ。。 いい加減終わりにしようか。」

そんな風に。 あくまで口調に動揺を表わさずむしろ嘲るように・・・

ただし明らかに先ほどまでより怒りを込めて。こちらを煽るソラ。

「俺を此処まで手こずらせてくれた人外も、主人公には。」

それなりに空気を乱されたみたいだな。」

やっぱり、封印で力落ちてるのにあんなもん食らったら

思つたよりもヤバかったのかねえ。

「ふふっ・・・ そんなわけないだろ？」

ボクは『アイツ』で『アイツ』がボクだ。『ボク』にボクは倒せないよ。

そう・・・君が創つたんだろ？ ねえ・・・創造者。」

言葉の節から感じる、かすかな憎しみ。

「お前。そこまで俺を恨んでんのか。」

ま、それだけのことはしたかな。・・・すまなかつた。俺は、お前を消す

それが俺の通すべき筋だ。」

力が消えないように、維持しながら隙を窺う。

まあ・・・

「来ないなら、殺す！」

そうなるよなっ！

「ぐっ・・・ あんまりなめんじゃねえ！」

『ワールド・エンド』からの・・・『絶符』力の代償」

『力の代償』は、まず技をかけた相手に何かを与える。

そして与えた分だけ別の何かを奪う。

「ん・・・？ コレは・・・『力』があふれていく。

ボクの腕力・・・霊力・・・妖力・・・その全てが高まり、上昇している。

まあ良い。これで・・・消えろ!!」

振りかざされた剣は俺に向かって振り下ろされる。

腕力が上がっている分、すごい速さだ。

「・・・一撃くらいなら、よげきれない速度じゃないが。 な？」

その場から、斬撃を避けつつ。 回り込んで咄く。

でも・・・アイツはそれに『気付かない』

「お前が、俺が避けたという事実と・・・俺の声。

俺の居場所に気付くのは・・・どれくらい後になるのかな？

・・・じゃあな。俺が創りし最大の『失敗作』。」

そうして俺は、『創乖離』をソラの背中に・・・ごく普通に触れさせた。



## 第92話―終わりが始まる

「聞こえてないだろうが・・・ 教えとく。」

力の代償は何かを得させる代わりに何かを奪える技だ。『腕力』『霊力』『妖力』等の『武力』をお前が得る代わりに『反射』『認知』の『速度』を奪った」

俺の触れる場所から、段々と消えていくソラにもう聞こえないだろう声をかける。

「ようやく決着を付けられるな。俺がお前を消す。」

俺の責任を果たしてやる・・・」

・・・おかしい。

乖離の力は確実に働いてる。それは目の前のソラの力が薄れて消えていつてるから間違いないはず。

「なのに・・・この。へばりつくような気味の悪い嫌な感じ・・・」

こいつだけが全然消えねえっ・・・」

まるで、目の前に居るはずのコイツが。。。

ただの抜けがらに見えてくる。これほどの力を持つているのだから本物だと、

思う反面なぜか嫌な予感が消えない。

「あはは！ そりやそうだろうね。

なぜってボクはこうして君の後ろに立って見せてるからさ。(どしゅっ！)

声が聞こえると同時に警戒し、自らを霊力の膜で覆う。

が・・・間に合わない。すでに攻撃を終えていたらしい。

「かふっ・・・そう簡単にやらせちゃくれないってことか？

だ。。。 どうやって抜けた？」

俺に突きたてている剣ごと、奴の身体を吹き飛ばす。

纏っている霊力を四方に放出しただけの荒療治だな。

「君が。 ボクの全てを知っているキミがそれを言うのか？

この世界にボクを生み出さなかった理由、ボクを没にした理由。それが答えだ。

ボクは君ですら扱いに困る人外。それが売りでね。」

はあ・・・はあ・・・ まずいな、出血が少し多い。

なるか。 全力。

「はあっ！・・・なあ。 一つだけいいか。

お前らを創り出した俺が言うのは、たぶん一番筋違いの愚かなことだ。

でも。 俺はまだ死ぬわけにはいかない。 消えるのは怖い。

「だから、今この場から俺を逃がしてくれ。」

創造神になってみたが……。 やっぱりコイツを消せる力を俺は持つてない。

なら、こいつとの戦闘を避けるべきだ。 此処をむやみに破壊するわけにはいかな

い。 俺じゃ勝てない。 でも、俺に出来ることがなにも無いわけじゃない。

「あははは!!!。 . . . . . そうか。 君は怖いんだね消えるのが。」

ボクと同じように。 ボクの片割れと異なるように。 . . . . . まあいいさ。

ほら、行きなよ。 ボクも思わぬ痛手を受けたからねもう少し休む。

まあ。 . . . . . すぐにでも此処を蹂躪するけどね？」

ちようどいいい。 . . . . . 無理にでも逃げるつもりだったが逃がしてくれるのか。

なら一刻も早く。。。 逃げる！

「. . . . . (ひゅんっ!!!)」

. . . . . 〈ソラサイド〉. . . . .

「うおっ。。。 おーい。。。」

まあ、聞こえてたらボクが不利になることだけだね。 . . .

さてさて。ボクの『事実を忘れ、真実を思い出す程度の能力』を越えられる奴なんて、どう生み出すつもりだろうね？」

とはいえ。封印から解き放たれたばかりのこの僅かな力じゃ。

追ったところでさらに無駄に消耗するのが目に見えている。

「なら休ませてもらう以外に方法は無いだろう。」

ボクの能力で傷は忘れられるにせよ、本調子じゃないなら完全無欠のボクを

思い出せるかはいささか不安が残るしね。」

おっと。ボクは元々創られる存在じゃないからシロのメタ・・・とか言うのは、

気にする必要が無いのでこの場で読者の皆に紹介しようか。

ボクの能力は、簡単にざっくり説明するなら『過去変更の力』

「まあ。実際は好きなように変えられるわけじゃないんだけど。

実際無限に近い選択肢から選びとってるんだし、似たようなものか。」

ボクの能力。その本質は過去を変更すると言っても可能性が無ければ成立しない。

今までに起きた事実。その中でこうなっていればこうなった。さっきの回避で言

うとボクがアイツのしたことに気づいていて、冷静になつていたら。

あっさりと対処し、背後を取れる。そういう理屈だ。

「あの時ボクは、シロの罠に嵌まった自分という事実を忘れ。」

もういちど思い出したんだ僕自身を。だからシロ・・・君は確かにボクを葬り去っている。そのボクはすでにボクが忘れた物だが。。ね。」

ボクの能力において不可能なのは、物理的障害が起きている歴史の改変だ。

たとえば『本能寺の変』あの事件において織田信長を羽柴秀吉が救う。という物語にすることは不可能。なぜなら当時秀吉は中国地方に居たのだから。

彼らの速度ではどうあつても物理的に間に合わない。だから、無理なのだ。

「まあ？ 懐刀の森蘭丸・・・彼が偶然にも敵を壊滅させる。

という感じならそれに近いことはできるだろうけどね。 なのはともあれ存在するはずの無い過去に塗り替えることはできない。」

忘れるだけなら出来るけどねー？ 文字通り、過去を冒瀆しあくびを嘯み殺すように

さあ。 どうなるかなー・・・あの小さな英雄たちは。

.....〈双覇サイド〉.....

「うつく・・・ あいつはっ！！!??」（ばっっ！

痛っ.....」

ぐっ..... ハハハは.....

「博麗神社か。。。俺と祥磨のフュージョンでも遊び相手にしかならないなんて

あれも・・・これまで闘ってきた奴以上の化け物ってことか。」

って言うか・・・この気配。

そういえばあの化け物はアイツと・・・

「まあ、そのあいつ。俺も敵わなくてこうして逃げてきたんだけどな。

はああああああああ・・・」

聞こえた声の方を見ると、シロが何かを創つているところだった。

「おまえっ！・・・なんでこんなに怒りが涌くのか。

自分でもよくわかんねえけど・・・！とにかく、あのソラって奴は何者なんだ!?

お前の関係者だろ。」

えらく集中している様子のシロは俺の方を見向きもせず、俺に話しかける。

その様子が無性に気に入らなくて・・・でも、邪魔をするのは悪いし。

「あいつは・・・創り出した俺が言うのも酷い話だが・・・

この世界のバグさ。それも、とびつきり手の出しようのない。な。」

良く見れば、あいつが創りだしているものにあいつの霊力や神力は

どんどん注ぎ込まれ・・・目に解る勢いで体力をすり減らしている。

「・・・お前、それいつから創ってたんだ?」

昨日、今日じゃないのはお前の衰弱具合で察するが・・・というかそもそもそれ何だ？」

純黒に包まれた、箱形の空間。

視認するだけで肌にビリビリくる威圧感。本能的に感じる恐怖。

「・・・」いつは、お前らがやってた修行用の空間の俺版だ。。。

昔、俺が自分を鍛えるためにとある神話の知識から妄想し具現化した物。

今の俺でも・・・この中で一日自我を保てるか解らない。。。」

神話・・・箱状の空間。これまでの物とは異質の恐怖。

「まさか、コイツは。。。」

俺のつぶやきに反応するかのように、ソレを創造し終えた

シロがこちらに振り向き・・・ぶっ倒れた。・・・つて。。。

おいっ・・・

「はあっ・・・！ はあっ・・・！ 双覇。

お前が俺を憎んでいるのは解る。だが、緊急事態だ・・・選べ！

幻想郷が滅び、愛する者たちが消え去るのを見守る覚悟で俺を殺すか。

幻想郷を・・・愛する者たちを守り抜くために、自分すらも見失う

あの・・・絶望に染まりきった修煉場。『パンドラの箱』に入り修行するかつ！」

やっぱり…… 神代の昔に伝わる決して触れてはならない領域。

『パンドラの箱』……くっ。。。

「お前の話に乗ること、力を借りることは癪だけど。。。

お前の実力は信用している……お前がそうなつてまで用意したつてんなら。

やつてやる。 お前以上に強くなつて。。 ソラを止める！」

きつと…… やみくもに鍛えたつて遠く及ばない。

祥磨も疲労しきつてるはず。 俺が……やるしかない！

「……今のパンドラの箱は一度入つたら出られない。

出られるのは、中に入った奴が完全に絶望に染まりきるか……」

「……何にも変えられない『希望』を見つけ出した時。

そうだろ？ ……見つけてやる。 俺の希望を絶対に……

文や皆のこと。 頼むな？ ……氷柱。 お前は文を守っていてくれ。

俺は絶対に帰ってくる。」

シロに、幻想郷の皆のこと……そして電桜を手渡して

漆黒の箱の中へと俺は歩を進めた。



．．．うつ。 入った瞬間気持ちが悪りい．．．  
それに重力もだいぶ違う。

「ん．．．この匂い．．．血．．．？」  
なんで急に。 いや、それよりもどこから．．．  
ん．．．？ 奥になにかある。

「．．．なんだ？ 人の．．．首？

いや、ちよつとまで。 この髪型．．．耳の形。 まさか．．．

俺は、気付いた。 毎日一緒に居たからこそ．．．

誰よりも愛していたからこそ．．． どんなものよりも鮮明に記憶していた。

・・・・思い出さなければ良かった。そして目を鼻を封じれば良かった。  
次の瞬間。 風も吹いてなければ振動も無かったのにその首はごろんつと。。  
こちらに転がり、足元で止まり、目が合った。

この世界で最も愛した女の子。 今もなお、誰よりも会いたいひと・・・

「あ・・・ あ・・・ あ・・・ や・・・ ? (違う、文じゃない・・・ 違う違う違う違う) ..  
で・・・ も・・・ この・・・ 顔・・・ あ・・・ ああ・・・ ああああああああ

俺の妻。 白雲文は・・・ 温かい血を流し続け。。。

変わり果てた姿で・・・ こちらを見上げていた。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
「

## 第93話―希望

…シロサイド…

「のお…。 お主、この世界の創造主だと言ったの。ならば、教えて欲しい。」

飛びさって早々に氷柱から、質問がとんできた。

少しだけ怒ってる。だがソレを表面に出さないし自分の中で静かに少しずつ燃やしてる。

頭を冷やしながら、怒りを燃やせる。

目の前の妖狐にはそれができるようだ…。 やりにくい。

「ん？ 何をだ？ 氷柱さん。 内容に寄っちゃあ教えるぜ。」

ちよつと、性格作るか。

嘘は言わないけど。 こうなつちまったら答えるしかないしな。

「別に交渉をしようというわけでは無いんじゃないかな。。。

まあ良い。 お主とご主人様それに…。 あのソラとかいう奴の関係じゃ。

永く生きてる私だから解るが。 お主たち、表面上は別じゃが良く見れば霊質がほぼ

同じじゃ。 同一人物でなければならぬほどに。」

・・・っ!? 何を気付かれたのか気になつてはいたが・

そこに気付かれたか。　　しゃあない。

「気付いちまったのか。　　なら、こう答えようか。」

お前が見て聞いたものがお前の真実だ。　　他の物は気にして意味は無い。」

霊質は、魂の適合率。

普通の生物からは見えないし普通の生物には見えない・・・。

野生の勘でわかる動物もいるけどな。

氷柱は神狐。お見通しだったらしい。

「はぐらかすのはやめよ！　凍りつかせるぞ・・・。」

俺も、あれから無事で居られる自信は無いが。。

はぐらかしてるわけでもないんだけどなあ。。。。

「別にはぐらかしてはいないが・・・　まあなら教えるさ。」

お察しのとおり俺と双覇とソラ・・・この三人は同一人物だ。　　ほとんどな。」

霊質は偶然で一致したりする簡単なものじゃない。

少しでも似た部分があるなら、確実に生まれ変わりとかだ。

「氷柱。　俺とあいつらの霊質は？」

まあ・・・知ってるけどな。



だから、俺たちは同一人物なんだ。ただし…」

わかつてる。自惚れてなんかない。

あいつらと俺は、もうオリジナルがどうだとかいう話

じゃない。

「あいつらは、もう俺の一部じゃない。

俺は絶望を克服することも、受け入れることも出来なかった。あいつらと俺はもう

別々の存在だよ。」

何万…何十万…何百万年。はつきり覚えてはいないが。。あの時、パンドラの箱の  
中で俺は。

「はあ…があつ…はあ…はあ…!!」

あの、恐怖は…忘れられない。

俺は二度と入りたくない。ソラなら、喜んで住めるだろうし。あいつなら。

「氷柱、文さんのところに急ごう。

あいつには必要なんだ。きつと。」

俺も、結局あいつに頼ってるんだな。

あいつの隣に必要なのは最高のヒロインだ…。

だから連れてこないと。

そんな事を考えながら、俺は氷柱と文さんのところに向かった。

…双覇サイド…

「ああああ…あああ…!!」

文…文…文…!!もう…もうやめてくれ。」

首を落とされ死んでいる文が居た。俺との結婚を許せなかった大天狗達の手によつて。大病を患い大量の吐血の中で息絶えた文が居た。俺は薬草を集めるために傍に居なかつた。怒りに我を忘れた俺に殺害された文が居た。川に溺れ、溺死した文が居た。俺は哨戒任務の真つ最中だった。

鬼達に虐待され、凌辱され、蹂躪された文が居た。

天魔の指示で俺は動けていなかった。

「文…文…文…。俺の所為で…。」

何度も文が目の前で死んだ。むせるほどの血の匂い…氷よりもさらに冷たく、重たくなつた身体、深い絶望を灯した瞳…  
全てが、はつきりと思ひ出せる。

叫び声も．．怯えも、苦しみも。 助けを求めて俺を呼んだ声も．．  
だから、もう見たくな．．（ドスッ．．

「え．．？（ふっ．．）」

死んでいたはずの文が起き上がり．．俺の腹に短刀を突き立てた。

良く研がれ、妖力を込めたその冷たい刃は容易に俺の腹に致命傷を与えた。

．．．でも、救われた。

「がっ．．．ふっ。。。 文．．生きてたんだな．．。。」（ぎゅうっ．．．

腹の痛みなんて、辛くない．．

あの絶望は．．文が死ぬ場面はもう見なくて済む。。。

救われ．．．「汚いです。」（ガッ！

「あがっ．．．」（どさっ．．．

「さっさと死んでくださいよ．．。 子供なんて作るつもりじゃなかった。

天魔さまに一目おかれてる彼方の妻であった事実が有れば良いのです。 私の本当

に

愛してる方はこの方なんですからっ？ この方に私の全てを捧げるんです。

全てを愛していただくんです。 ．．．だから、さっさと死ね！（ガッ！ ガッ！





「双覇…… 双覇……!! 私は此処に居ます!

貴方はきつと戻ってくる! だから待つて……ま……」

真後ろから声があった。振り向いても誰も居なくただの闇が広がっていたが……でも間違い無く聞こえた。アレは……

文、氷柱、祥磨、さつき、霊夢、魔理沙……大切な仲間達。

その声……俺は気付いた。

自分の中の、自分にとっての一番の希望に。

「俺は、独りじゃない。どんな場所に居たって独りじゃない。

隣には居られなくても俺たちは繋がっている……俺の結びは俺たちの繋がりには、距離も世界の隔たりも関係ない。」

俺が皆を想えば、きつと皆も俺を想ってくれるんだ。

だから俺は強くなれる。独りじゃないから。

俺達の力ならきつと、どんな絶望だろうと跳ね飛ばして進める。先に!

「スペルカード宣言。『希望』結ばれる未来」

皆……俺が、この試練から戻るまで幻想郷を……

皆が一緒に居られる場所を頼んだぞ!

・・・〈双覇サイドアウト〉・・・

・・・〈幻想郷サイド〉・・・

「双覇つ!!! 待ってます・・・! ずっとずっと・・・貴方は、

きつと戻ってくるから!」

パンドラの箱を取り囲むように、人間。妖怪。神。亡霊。

白雲とかかわった全ての者たちが集う。もちろん中心は鴉天狗の少女。

「残念だけどー。その英雄は箱に眠ったままだ。

君たちは英雄に守ってもらえず、僕たちの手によつて無残に・・・死ぬ!

行けつ・・・忘却の悪魔たち。恨みある生者を蹂躪しろ!」

「があ。。 がああああああああ!!」

幻想郷上空。忽然とソラが現れる・・・忘却の悪魔という黒いもやが具現化したよう

な怪物を引き連れて。

「・・・お兄ちゃんは帰ってくるよ。お前なんか負けるかあつ!!!

ぎゅつとしてええ・・・ドカンッ!!!

「がああああ!!!」(ダンっ!!)

「嘘・・・きやあああああ!」

フランドールの破壊も通じず、その剛爪がフランドールの華奢な体を引き裂く・・・

その瞬間・・・!

「私の大切なフランを・・・怖がらせるなあっ!!!」

肩を少し過ぎるくらいに整えられた紫がかつた青色の髪、紅い瞳に蝙蝠の翼。

背丈は咲夜に少し劣るほど・・・。だがそのプロポーションに見惚れぬ男は存在しな

いと言えるほどに美しく・・・。両の爪は肉を裂き、その犬歯は血液を吸いつくす。

悪魔を殺すは。レミア・スカーレット・・・今、この時 3000歳

## 第94話―希望の神風

「私の大切な妹に、その汚らわしい獣で触れるな！

次は・・あなたを殺すわ。 ソラ・・吸血鬼の女王たる私を怒らせたこと

後悔するが良い！」

怒りに身を任せ、声を荒げながら実際は戸惑っていた。

私にはフランを宥めてあげられるだけの力もなかった。つまり本気のフランよりも

強い敵に私がかなうわけがない。でも・・なぜか力が湧きあがってきた。

力に見合った器になるように身体も成長し、能力まで成長している。

「はああ！ スカーレットシユート!!」

紅色の光弾が、化け物の一体を貫いて爆散させる。

今のところ。あいつらに勝てるのは私だけ…

私が最高戦力ってこと。 なら、今出しきる！

他の皆にもこの現象が起こる可能性はあると言い切れないけど。 少しでも戦力を

削る！

……！

「お嬢様。微力ながら、私も加勢致します。

お嬢様の足手まといにはなりませんので従者が主の隣に立つ無礼をお許しください。」

咲夜にもこの現象が……!

「あら……? でも、成長していない……。?」

身長が少し伸びて大人びた程度。

これは一体……。

「私の考えで話を進ませていただくとするならばお嬢様。

これはおそらく。そのものの中で最も力ある姿に強制的に成長している。と思われます。私はあくまで人間、この身は成長を続けてしまえば老いてしまう。

ならばこの私はどうするか……その答えはきつと自分の最も力が持てる年齢で自らの時間を止める。」

淡々とそう語る咲夜に、私は声がかげられない。

私の記憶が確かなら今の彼女には対象の全体の時間は止められても、一部の時間は止められなかったはず。つまり、この彼女は先の未来。変わらず私と居てくれたのだろう

自らの成長を止めるなんて、きつと怖かったろう。

それはもはや人間をやめてしまっている。私のような吸血鬼と居るために。

「……咲夜。貴女は私のことなど気にせず人間で居なさいね？」

「……主としての命令よ。貴女まで化け物に付き合う必要はない……貴女を拾って育てたのもただ運命がそうであっただけ。気まぐれ・なの・っだから。」

私は……やはり、主になるには早すぎたのだと思う。

吸血鬼の王家のくせに……人間の娘に……。咲夜にここまで情を抱くなんて。

「お嬢様。お顔が濡れていらつしやいます。」

それでは、せつかくの命がきちんと伝わりませんよ……お拭きください。(すつ

それと……ありがたきお言葉です。今の私にはまだ決断できないことです……

確かに。……怖い。

ですが、この未来に絶望などしておりません。主に身をささげるために。

決断した自分が……誇らしい。貴女の戯れに救われたのです……こうなる運命であつ

たなら私はこの身この力貴女に捧げます。」

ハンカチを差し出してくれた咲夜が優しく微笑む。

私は、きつとお父様のような主にはなれないだろう。私には支配など難しすぎる。

お母様のように優しくはなれないだろう。私にはその器が成長しきれていない。

……私はやっぱり魔法使いの友達が。寝ぼすけ門番が、一生懸命な小さな悪魔が

破壊の力を持っていても私を優しく抱きしめてくれた妹が、こんな私に付き従つてく

れた私の愛娘さくやが。　　こんなにも大切だから。

「・・・ふ・ふつ。　　なら咲夜、命令よ。」

私と一緒にこの幻想郷を守ってちょうだい。」

身長もすぐく伸びて、妖力もけた違いに上がっている。

こんな状態じゃ・・・普通思うように身体や力を動かせないはずなのにむしろ、今までよりもスムーズに動くような気がする。　　誰かにどう動けばいいのか直接教えてもらってるかのよう。

「お嬢様の命とあらば！　　お嬢様・・・（こくつ

彼方の時間も私の物私の全ては貴女のもの、『咲夜わたしの世界』。」

咲夜の眩きを最後に世界から、色が無くなった。

化け物たちも全てあのソラでさえ今は静止している。　　どれくらいの範囲かは

解らないけど時間を止めたということね。

状況の整理が終わったら、指先に妖力を集中させ紅い爪を生み出す。

「咲夜。　　今この世界はどれくらいの範囲で何時まで時を止めるの？

はあっ！」

今までより、幾分も大きくなった翼を羽ばたかせ全速力で飛行して手当たり次第に引き裂いていく。



「今の私なら．．．そうですね。　　まだまだ余裕はあります。」

まだこの自分の成長を図りきれてはいませんが．．．自分で解除もしくは相当のダメージを受けない限りは止め続けることが可能かと．．．「へえ。なら先に君を殺そうか。」

．．．ぐああつ!？」

「咲夜の悲鳴っ！　はっ．．．きゃああああつ！」

作戦は理解していたはずなのに、つい咲夜の悲鳴に反応してしまった。

まったく．．．今回は見逃してあげるけど今度こんな危険なこと考えたらお仕置きしなきゃいけないわね．．．。

でも。　　これで．．．この戦局の運命は私たちのものだ！

「ソラあああつ!!!『カオス．．．トルネディア』!!」

．．．へレミリア&咲夜サイドアウト．．．

．．．少し遡って、射命丸サイド

レ．．．レミリアさんのあの変貌は一体。

力が尋常じゃない。　　フランさんでも倒せなかったあの怪物を一瞬で．．．!？」

「この・・・かすかに感じる温かいもの。」

これは、双覇の力。きつと中で何かを掴んだんだ。」

間違い無い。レミリアさんの纏っているあの力は双覇の・・・

「この変化が起きる順番は、正直読めない。」

でもきつとなにか規則性があるはず・・・（俺達の幻想郷を守ってくれ！） んっ！

今、頭に流れた声は・・・双覇。！

守る。。もしかして・・・

「お嬢様を・・・守るっ！ あ・・・あああっ！」

咲夜さんにも。。これは確定ですね・・・

おそらくこの現象が発生するトリガーは、何かを守ろうとする意思。。

その決意。

「こ・・・この姿はっ!? はっ・・・お嬢様!!（シュツッ！

・・・（ちらっ ひゅんっ!!）」

さすが、完全で瀟洒な従者といったところでしようか。。。

自身の変化に多少戸惑いながらもすぐにレミリアさんの元に駆け付けるとは。

・・・それにしてもさっきの視線。完っ完全に、私もトリガーに気付いていることに気

付いてましたねえ。。

「どうやら、作戦が有るようだったのですが。。」

「これは急いでこのトリガーを引く必要は無い・・ということですかねえ。」  
「と。なれば、こちらとしてはどう動くべきか。。」

「まあ・・無難にこのトリガーを広めることですかねえ。」

「そうと決まれば、まず知るべきは霊夢さんの位置。」

「えつとー・・。・・はっ！」

「今の感覚は・・咲夜さんの能力。」

「なるほど。今なら!・・。私はこの子を、双覇を守る!」

「幻想郷・・大切な私たちの居場所。」

「でも、今の私が守るべきものは・・。世界なんかよりも大きな。家族です。」

「この力。 やつぱり双覇・・。貴方が居てくれるんですね。(ひゅんっ!!!)!!」

「はあああああ・・。ソラあああっ!!! 『カオストルネディア!』!」

「!::っ! 時間を止めようが! ボクには、見えてるんだよ!::!!!」

「今の私なら、これまでよりももっと桁違いの風を」

「扱いこなせるはず。どうやら、双覇の風も使えたようですねえ。」

「ソラのあの反応。一瞬でしたが、身体が強ばり」

うまく隠していましたが驚いてましたね。

「止まった世界を見て、感じれるのは事実ですね。

嘘なら突然の接近に戸惑うはず。技をだしてから驚いたということは… ふっ

!!」(びゅー)おおっ!!

ソラはこの技になんらかの、警戒を抱いている

なよりの証拠。牽制は大成功のようですしこれは真下の化け物たちの数を減らしましょうか。

「はあっ…はあっ に…しても、なにやら先ほどから

やけに息苦しいですね。身体的変化による不調はレミアさんも咲夜さんにも見

られなかったはずですが。 …て あややや! これは…」

胸が…大きく!? なんぞ…

妖怪は歳を重ねるごとに美貌や妖力を上げていきますが

胸が大きくなるとは… は。

「あ、もしかしてお腹の子が生まれたから?」

だから大きくなった… いくらサポートがあつてもこんなに大きいと息苦しさがでますか。」

双覇に喜んでもらうためのものが、今はこんなにも

憎々しく思えるなんて。。

ソラは…もう、攻撃してきそうですね。

「なら…今の私の力。」

その全力を…見せる！ 「風神纏い！」

その瞬間、私の身体は羽衣に覆われ。

ソラは…触れることも出来ずに吹き飛んだ。

## 第95話—風神。 さらなる希望

・・・〈ソラサイド〉・・・

「『風神纏い』」

「組織の一部、ただの鴉天狗の雌の分際で。

あいつと同じ技を使い…あまつさえ神を名乗るだど？

笑わせるなああっ!!!」

このボクを、ここまでコケにしやがって。。

どいつもこいつも自分の無力に気づかないクズが!!

「…無力かどうかは。私を見てから確かめてくださいよ。(すっ」

葉団扇か。あの程度の風ならボクの速度は打ち消せな…いつ!?

「ぐっ!?! ああああ”っ!?!」

そんなっ。 さつきまでは確かにここまでの力は無かつたはずっ。。

押し…負ける

!!

「私は…今、家族を守るためにここに居ます。

私一人の力はきつと貴方の足下にも満たない。 それでも、私を信じてくれる人が愛

してくれる人が居るから戦えるんです。」

そんな…綺麗事ごときにこのボクが負けるわけが無い！

「確かに綺麗事です。大昔の妖怪の山で人間を殺し、

食べていた時。人間を破滅に追いやっていたあの頃の私にこれを話したところで

理解しないでしょうね。」

「余裕で居られるのも今だけ…すぐにつ!？」

動けないっ!?! 射命丸の能力は風を操る。

てことは…上から風で。? こんなに強力に!?!

「貴方の方は、余裕が無くなってますねえ。

誰かを想うことは、私が思ってたそして、貴方が思ってるよりも強力なんです。貴

方は…なんのためにここを壊そうとしてるんですか? 貴方は今のままなら、私にも

勝てませんよ。」

ぐっとうう!!?

押し潰され…。 圧殺する気か!

「なら、そのボクを忘れれば良いだけ。

ボクにはどんな攻撃も通じな…いつ!?! かはっ…。」

なぜ動きが読まれ…!?

「私を、嘗めないで欲しいですねえ。」

忘れる能力。　なら、次は確実に私を殺せる位置で思い出す。　となると背後が最も

可能性がある。

とおり一辺倒に負けてあげる気はない!」

なんで。　こんな綺麗事なんかにはボクが!

射命丸がボクに拳を打ち込もうとしている。

…ひとしきりキレたら冷静になってきた。

「ありがとう。　文おねーちゃん!

…なんてな。　ボクに冷静さを返してくれたお礼だよ?」(すつ…　パ…パンっ!!

…〈幻想郷サイド〉…

『戦う決意のある方!　この力は、皆さんの良く知ってる人からの贈り物です。』守

る』想いを持ってください!』

「これは…あの姿だと、不特定多数に情報を共有できるのかしら?　なんにせよ一人ず

つよりは効率が良い…んっ!!」

お嬢様と私でこいつらを仕留め続けるのにも限界がある。　ここは、少しでも戦力を増



やさないといけない。

「咲夜っ 伏せなさい！ はっ！（ほんっ!!!）」

後ろから、羽交い締めにしようとしていた化け物を

咲夜を伏せさせて紅弾で爆散させる。

「本当に、キリがないわね。」

相当な強さなのにこんな量産できるなんてね…!?

咲夜!!」（ぼっ!!）

羽を出して、反射的に咲夜を庇うように抱えて飛ぶ。

少しかすったかしら…!!

「お嬢様！ お怪我を…。」

はっ。。 あいつ…再生してる。？」

そう。。 確実に殺したと思ったのに再生してる…

「このくらい平気よ。すぐに治る。」

それより…あの再生速どっ…!? ぐっ!!」（キイイツ！

こうもり？ それに、これは…血液。。

まさか。。。

「咲夜！ あいつ…ソラに強化されてるみたい！」（ぎしゅつ！）

「はい！ お嬢様…おそらくこれは。」

吸血鬼の力！ 驚異的な再生能力… こうもりを操り、血液を飛ばす。 間違いな

いかと。」（ぐしゅつ！）

確認のため、もう一度撃つ。

紅い爆発のあと、現れたばらばらの肉塊はくつつき

ぐちゃぐちゃと混ざって元通りに蘇生。

爆炎に乗じて、投擲された銀のナイフは深々と突き刺さり…周辺を爛れさせ地に落と  
していた。

「肉塊レベルに吹き飛ばしただけでは、蘇生し。

ヴァンパイアに効くとされる銀は、肉を爛れさせる。

予想通りね。」（ぎゅつ！）

咲夜と背中を合わせ、口に出す。

「そのようですね。しかし…吸血鬼であるお嬢様との戦いの最中に、吸血鬼の力を得る  
というのはいささか出来すぎています。恐らく、やつらが力を得るにはこちら同様トリ  
ガーがあるはず…！」

咲夜とそう話していると、忘却の悪魔（吸血鬼 ver）が

その巨体に似合わない速度でその剛爪を構えている。  
あれも吸血鬼の速度つてことね。

「考えてる時間はあまり無さそうね…!?」

「ぐおおおおお”がぁぁー!!!」(ばしゅっ…)

化け物が…消えた。 不死身に近いレベルの再生能力を

持つ化け物がまるでそこに最初から居なかつたかのように。

「あたしの大切なお姉さまと咲夜をいじめないでください！ あたしにも…吸血鬼の女王としての誇りがあります。」

私たちを助けて、目の前に降り立ったのは…

金髪はロングに腰まで、すらつとしなやかな手足と身体。 胸は私より少し…大きい

…!?

紅い目の奥にどこか、無邪気さと黒いものを秘めた

私の自慢の妹。 二人目の女王にして切り札。

フランドール・スカーレット。

あの子は、どんなものでも無邪気に『壊す』

「おねーちゃん 今まで、頑張ってくれてありがとう！」

咲夜も、ありがとう。 少し休んでて？あたしが…ぱぱって壊して来ちゃうから！」

私のとは違い、歪ながらも七色の宝石を付けた翼を広げ  
ぐんぐんと妖力を放出していく。

その背は、かつて狂気に囚われすべてを壊そうとした

やんちゃ娘でも、双覇との弾幕ごっこでつい屋敷を破壊してしまつた困つた妹でもな  
い。

とても、頼もしい背中に成長していた。

「待つてフラン！ あなたこそ、少し待つべきよ。

皆の覚醒を待つてからでも……」

「大丈夫。さっきの声で皆さん思い出したみたい。

本当に守りたいものを。それじゃあ……レミリア。行つてきますわ。」（にこっ！

……〈射命丸サイド〉……

「ぐっ……。がああつ……。あああああ!!!」

これ……が、ソラの本当の力ですかっ……

い……一瞬で両腕と両脚を折られた。さ……再生……

間に合いませんね……（苦笑）

「まだ、笑つていられる余裕があるのだけは素直に凄いと思うよ。でも、両腕と両脚は修

復不能レベルに折った。ボクの前で神を名乗った君にはちようど良い罰だ」  
首を掴んで、持ち上げながらそう声をかけてくる。

先ほどの攻撃。。 どう捉えても拳を一振りしただけだった。。。

「不思議って感じだねえ。 両腕、両脚折れてるつてのに…答えは簡単だよ。 ボクは君の四肢に全力の弾幕をうち、最初の一つだけを殴ったんだ。

そして一個ずつ破壊してる過程は、忘れることで消した。 結果として拳一発で四肢が全て折れたのさ。」

なるほど…本当に強力ですねその力。。。

それはそう…とっ！（ズバアツ!!

「はあっ！ この形態のかまいたちは切れ味バツグンなんですよ。 飛ばば、折れた腕と脚も関係ありません！

私の全力を…ぶつける！

『無双風刃』！」

黒い翼を一度だけ、羽ばたかせ自分のだけせる最速で

接近する 手は刃にかざし…あいつを…斬る!!

「はああああああああっ!!」

「お寒い友情ごっこは、他所でやってくれ。

まったく家族を守る想いだけか想いの強さだとか。。。

くだらないよ。君たちはこうして…ボクに膝まづくしかないのだから！」（ぱ…ぱんっ。

一対の翼ももぎ取られた…。

激痛と一緒に、背中から血が吹き出す。

でも、諦めてたまるか。

「諦めて…たまるかあー!!!」（びゅおっ!!

これが、正真正銘最後の攻撃。

風にのせて刃を飛ばす。

「いい加減。茶番は終わり。

君には、ボクにダメージも与えられないよ。」（ふっ

…最後の攻撃は。あたりきるまえにかきけされた。

「なんか、君程度に屈辱的なまでに痛みを与えられた気もするけど全部気のせい。だつて…忘れたから。

どう？ 体…綺麗なままだよ。完封勝利ってやつ。」（ぐりぐり。

「あっ……ああああああ!!!」

痛い……。辛い……。でも……

諦めない!

「あ、そうそう。君……誰だっけ?」(ぼしゅっ……

その瞬間……幻想郷からの一人の鴉天狗が。

消えた。

「文っ！ ……ソラ。お前の気味の悪い笑顔を

吹き飛ばしてやる。俺の結びと…文の神風でな！」

『絶ちきれぬ赤い糸』

文を…俺のもとに！

「そ…うは？ 双覇っ!!」(ぎゅううっ！)



## 第96話―其は結びを司る『神』

「…っ大丈夫か文？」（なでなで

なんとか…間に合った。

こつちでは、あの絶望を繰り返してたまるか。

文は…うん。 怪我也回復してるな。

怪我…させちまったな。

「文。 ちよつと待っててくれ。

ちよつと世界救つてくる！」（ぎゅんっ!!

文の頭をもう一度優しく撫で、あいつを見据える。

そしてふつ飛んでいく

「ソラあつ!! 好き勝手やってくれたな。」

『神器』結天浮雲太刀

契約解放…! フェル・スカーレット

「もう戻ってきたのか腰抜けが。

ボクがせっかく、素晴らしいプレゼントを贈ろうと思っていたのにさ。」

西行妖を斬り倒した剣を受けてなお、余裕を崩さず

ニヤニヤとこちらを見てくるソラ。

「ようやく。終われるぜ…ソラ。」

俺が、お前を消してやる。無駄に永かったお前の存在

今日ようやく消滅する！

白雲流 『焰の型』」

太刀に炎が走り、俺の体にも流れていく。

『焰凍の結』を神器に纏わせ攻撃するんじゃないかただの

力として自らに『常時』纏わせる。

「よくそこまで行けたねえ。このボクが火傷しちやいそうだよ。ほら、かかってきなよ

主人公！

教えてやるよ圧倒的な絶望を。ボクという存在を！」

俺は、神器をソラはその腕を刃に変えてお互いを迎え討つ！

「白雲流焰の型… 焰刀の結！」

刀身に灼熱を纏わせ、上段から斬りかかると

あいつは左に避けて横薙ぎを繰り返して出てくる。太刀を持ち替え真下に突き立てるよう

「主人公くん。ボクの動きが見えてるみたいだねー。

なるほど・・・少しは楽しませてくれよ！」

上 上 右 左 上 下・・・etc

よし追いつけてる。 加速してくかつ！

「契約解放 斎藤衛！ 龍神王の力よ・・・

全てを焦土と化す爆焰よこの身に宿れ！さあつ燃え盛つていこうか！

白雲流・・・『龍神王の刃燐』！」

纏う炎が橙と白の二色に変わる。

全てを守る白き覚悟の炎と、敵を射ち滅ぼす赤き剛の炎。

「・・・あいつが設定したキミの力。良くぞそこまで物にしたものだ。

だけどもまるでキミのほうが世界を破壊する怪物だね・・・ 十尾の神狐、吸血鬼の王、純

白なる守護龍、

全知を司る神、境界のスキマを生きる妖怪賢者、

剣と雷の武神、日輪、月光、武勇の姉弟神、支配と慈愛の祖神、死に翻弄された亡霊

姫、怨霊祓いの剣豪、

死を親しむ死神、妖殺しの消却者、縛鎖と断斬の剣士、永遠と須臾の月姫、英知の薬

師、

神霊と戯れる月の剣、幻想を育む母なる巫女、叶わぬ想いの観測者、白く気高き狼牙の天狗、

魔と剣を統べる創造者、恋とパワーの魔少女、全てを狂わす波長の瞳、この世を破壊する吸血少女、

時を納め運命を握る吸血女王、時を捧げる従僕なる剣、黒き狼の牙宿す天の狗。

幻想と生きる無垢なる巫女、神風纏う神速のブン屋。

そして。 幻想の世界。」

右、下、上、右、左、左下・・

鋭く研磨され焔を纏った鱗を叩きつけ、神器で斬りかかる。

「あいつもキミがそこまでの力を得るとは流石に予期していなかったろう。

普通なら神妖の肉体でも耐えきれないほどの力を、キミは世界の創造者にも成りえる『夢現の器』で

成し得ている。 だけど、醜いとは思わなにかさまざまな神妖人の力が混じった君はまるでキメラだ。

ボクには自分が何でありたいのか、どういう存在なのか見失っているようにしか：見えぬねっ!!」

「がああああっ!!」

右手の剣を受けてる間に、何倍にも肥大化させた左腕にぶん殴られた。べきつばきよつメキツ・・・！という鈍い音と一緒に吹き飛ばされる俺の身体・・・地面に叩きつけられながら

折れた骨や破裂した臓器、皮膚の修復。　龍神王の堅固な鱗でも重傷。

それに衝撃で契約解除されたか・・・

「はあっ・・・はあっ・・・ゴぶッ。」

契約・・・解放っ　姫神焰・星熊勇儀・伊吹萃香！」

鬼の三位解放だっ。

これやると、伊吹瓢と星熊杯がなぜかどこからか装備されるあたり。

鬼と酒は切れない結びらしい。

「んくっ・・・ふいー。」

酒も入ったし捻り潰してやろうかのう童。」

鬼との契約解放はすこぶるパワフルな戦いをする。

たとえば・・・

「そうらっ・・・一発アカイのくれてやろうっ。」

豪拳『驚天動地』!!」

拳を振り上げ、地に叩きつける。

それだけでかなりの深さまで砕け真上に吹き飛ばされて行く。

「知っておるか？物体を真上に飛ばすには、本来飛ばすのに必要な力よりも  
もつと何倍にも力を加える必要があるんじゃないよ。まあ聴き流してもかまわんがの。

結び—黒霧ソラ」

真上に舞つた岩がソラに向かつて、次々と吹つ飛んでいく。

まあこんなのが効くなんて思つてないさ・

「よっ・・・ほっ・・・とっ・・・」

お返しだ化けもんが！ 『真祖三步必殺』」

「三步必殺は、地と接してなければ威力がガタ落ちする。

それくらいのことには予習してい・・・るっ?!」

空中で身動きが取れないなんて、変な感覚だろうな。

遠慮なく・・・叩きこむっ!

「一で撃ちっ・・・二で壊し・・・三で必殺!」

思いつきり殴り、焰を注ぎ込み。

爆破で吹き飛ばす! 腹にデカイ穴を空けながら吹き飛ばされたソラは

またたくまに叩きつけられた。

「ぐあつ．．．おおおおつ．．．．．！」

一瞬で回復して、起き上ったがダメージを忘れるのに少し時間がかかるみたいだな。  
ならっ！

「白雲流 『山脈崩し』！」

「調子に．．乗るな。（がっ

お前は。忘れない．．．お前のことはボクの手でぶち殺してやるっ！

全く良い子ちゃんしてて腹が立つんだよ!!

お前とボクは同じなんだ！ その身体に秘めた力．．その危険性！

何も変わらない。」

萃香と俺の能力の複合行使で、『○夜叉』に出てくる『鉄○牙』並みの刀身にして斬るというより殴ってるんだが。掴まれた。

「お前は．．ボクと同じだ。 あいつから生まれた光と闇だ。

その力の危険性もなにもかわらない．．持つて生まれた性質が違うだけだ  
あいつが考えなしに実行したばかりにこんな運命になった。」

ぐっ．．．こいつどんな握力してやがるっ．．．

「なあ主人公。悪はな滅ぼされるんだ。

どんな綿密なプランがあるうが、どれほど宿命の戦いだらうが、どれほどの物を背

負ってしようが、

どれほど強くなるうが、どれほど追い込もうがねえ！

だから、ボクもこの滅びゆく運命の門出にせめて一つ成し遂げたいじゃないか。

悪らしく世界の崩壊って奴を！」

「くっそ．．離しやがれっ!!!」

ズガンツ！という音とともに、掴んでいた指が引きちぎられ

距離を取ることに成功した。すぐに『忘れて』元通りだけどな。

「ボクは忘れるよ主人公。かつてボク達が憧れた英雄たちを．．

何度も何度も悪を討ちいくつもの世界に希望を照らした主人公たちを。

お前が大好きなこの世界を！そう、蟻でも潰すかのように忘れてやるよ。

あいつもお前もどうせなら一つに戻ろう？ あの時英雄に憧れた無力な少年に！

終わらせようかこの茶板劇を！」

ソラの前に生成されるドス黒い塊．．（どしゆ

「え．．．がふっ。」

超速度のソレが腹に当たり、腹が消失した。

ぐっ．．痛ええ。。。

「忘却のエネルギーかっ．．．契約解放．．んっ!!?」



口がっ・・・消失したっ。

「ふふっ・・・つまらないよ誰かの力を借りなきやそんなのもひっくり返せないのか？  
ボクを倒せるのはお前だけなんだろう？　そうだよなあっ!!? 主人公？  
ほらやれよ。お前の力で。持つてるんだろう逆転のなにかを。」

・・・意識が。。沈む。

「・・・ほんとにそれっぽっちか。ほんとにそれっぽっちなのかよ！

ふざけるな！お前が：ボクが：皆が憧れた英雄は倒れないだろ!!?　そうだよなあっ  
?

ボクを消してみろよ。変身か？武器か？力か？不屈の魂か？

こいよっ！全部忘れてやるから！ヒーローを・・・否定させろおおっ!!!」

・・・くそっ。。 あ・・・や・・・守らねえと。。

ここを・・・みんなを・・・

「・・・拍子抜けだったのか。楽しみにしていたのに。

もういい全て終わらせよう。。あいつももう止めるのも諦めたようだしなっ・・・?  
これは・・・鎖。ばかな。こんなもので。



「契約解放。 白井瞬・笹塚俊・東雲修也・斎藤衛・銀野優・雲母策士丸・全狐神氷柱・伊邪那岐命・天照大御神・月読命・建御雷神つ。

まだ・・終わらせねえよ。 本当の戦いはここからだつてな・・皆。 力貸してくれ！

絆の力お借りしますつてな！」

助かったぜ・・衛。 『再生の焰』

無けりやヤバかった。

「優。 縛鎖の力使わせてもらおう！」

白雲流『雷火の型』！ 今なら何でもできそうな気がする・・

瞬の知識が俺の力をさらに引き出してきてるしな。」

・・化け物か。 たしかにな。

他人の力を個性を。 譲り受け強化して自分のものとする力。

俺は、いつもみてた物語のチート野郎になったんだな。

主人公に。 ご都合主義や絶対のハッピーエンドや逆境を無理やり跳ね飛ばす力をもった存在に。

「衛・・力使わせてもらおうぞ。 俺は『白雲双覇』を超える！」

っ『白雲流捕縛術 狂狼縛る神糸』！」

俺は。誰かを守ることが出来たんじゃない。

守ることしかできなかっただけだ。

与えられた力を悪用しなかったんじゃない。

悪用できなかっただけだ。

「たしかに、人間にしては奇妙な存在だな。俺は。

主人公っていう役割だったから…なんだろうな。」

パンドラの箱の中で、いろんな可能性を見た。

絶望も希望も。いろんな俺がいた。決して善人じゃない俺も居た…

そのなかには…ソラもシロも。

「…ボクを消すのか。それで満足か？」

自分の片割れを消し飛ばして。悪が無くなってこの世界も無事でハッピーエンドか

お前以外は。ボクという悪が居なくなったら

お前はどうかなるのかなあ…？主人公。」

ソラを倒したら…か。ここで文と暮らしていたい。

いつまでも。でもそうは…行かないんだろうな。

「神器『輪廻』。瞬。イザナギ。策士丸。衛。氷柱。

お前らの神力……そして皆の力を俺に貸してくれ！

神技『東<sup>オ</sup>ね<sup>リ</sup>紡<sup>ジ</sup>ぐ神の贗<sup>コ</sup>作<sup>ビ</sup>』

全てを断ち斬り 万象を凍てつき焦がす俺の神器

『結天浮雲太刀』俺の両手に、そして周りの中空にいくつも浮かぶ刃。その全てが神器  
そのものだ。

「ソラ。 お前を倒したらどうなるかなんてわかんねえ

俺がしてることの正義と悪も。

だが、俺はお前を倒す！ ここは守り抜く！」

守り抜くことの難しさ。あなたとあなたの息子のお陰で

わかった。ありがとうございます。

「……『死の境地 結』（スウ……ッ

俺が死ぬことなんてないって思ってたんだけどな・

完全に自惚れてた。

「創造神。 お前の言った通りだ。

俺には……『俺だけ』じゃ死の境地に辿りつけなかった。」

皆が、幻想郷が。

俺を受け入れてくれたからここまで来れた。

「長つたらしい講釈だ。縄抜け一つくらい十分に可能なほどに。

なかなか堅固な糸だったけど所詮糸まとわりついた糸くずは意識すればうつとおし  
いが

忘れてしまえばなんの不都合もない。」

やっぱり抜けだしてきたか。

「キミの力なんて、この世界の力なんて一つに束ねたところで無意味なんだよ！

『虚無刀おぼろづき尽』！ もう一度・一度は一気に！消し去つてやるよ！」

もう一度黒い塊を・今度はさらに大きいものを精製していくソラ。

その塊がどんどんとドス黒さを増していく・来たつ！

「3、2、1・今つ！」（シユンツ

うしつ避けれる！ 反応出来る！

死の境地・笹塚の感じていた感覚はこれだったのか。

いつもの何十倍く何百倍も研ぎ澄まされている・

結の力も相性良いな。研ぎ澄まされてる中でもちゃんと解る区別できる。

殺気と友好が。

「もう・通用しない。それじゃあなつ！

『白雲流奥義 焔凍の結』！」

身体から焔と赤い雷をスパークさせながら放つ奥義。

全てを護る焔と氷交わりし刃。

これで・・・終わらせるッ！

「ぐっ・・あああああああああああああああ!!!」

両断された体躯を火焰と凍結がつつみ、幻想を忘れる悪魔 黒霧ソラは。  
その空しい命を虚空に消した。



## 第97話―幻想防衛戦線！

「双覇！ 良かった．．．」

ちやんと．．．戻ってきてくれたっ。」

ソラを斬り裂いたその瞬間、背中に暖かいものが触れた。

俺の護りたかったもの。 その一部、でも何よりも護りたかったもの。

「んっ。 文っ！ ずいぶん長いこと留守にしちまったな悪い。」

俺がそう言つて謝りながらその身体を抱きしめるとこちらを見上げて、

笑いかけてくる。

「ふふっ。 ほんとですよ双覇？ こんなに美人な奥さんになにも言わずに

どこか行つちやうなんて．．．こんどお仕置きしちやいますっ。 覚悟してくださいね

？」

お仕置きとききたか．．． どんなお仕置きが来るものかとちよつぴり震える。

「あややつ そんなに怖がらなくても大丈夫ですよ。」

．．．二人目覚悟してくださいね？」

そういってお腹のあたりをつついてくる嫁に、心底敵わなくなつて思う。

「たはは．．わかった。 文も覚悟しろよ？」

愛してる。 俺が『どこに居た』としても絶対にお前を守り抜く。

絶対だ。」

俺の思いつく限り最悪の方法。 実行したくは無いけど．．っ！

この心配っ。

「えっ．．どこに居てもっ。 双覇．．？」

「文。 しっかり捕まっておくんだ。 全速力でここを離れるっ」きやつっ!!

．．！ この心配っ。」

しっかりと抱き抱えて、 飛び立つ。

文も気付いたな。 ち．．やつぱり『倒せて無かったか』。

「うー．．痛い痛い。 まさかこんなにすぐ殺されるとはね。

でも、主人公．．敵が不死身なんて今じゃボスですらない奴が持つてるくらい。

テンプレだよねええ!!」

解つてた。が、もうかつ・・・

早過ぎる・・・とにかく全速で逃げるっ。

「ふふっ・・・良いよ行きな。恋人を巻き込みたく無いなんて

さすがに主人公。いやそれともボクに人質にでもされるのを恐れたかな？

・・・ん？」

ドゴオツガツポッドーンツ!!!

「特性の・・・霊力爆弾か。やるじゃんっ・・・

そういえば、機転は回るって設定だったなあ。。律儀にイザナギの力まで。

ほんと・・・むかつくなああ!!」

支配を司る程度の能力

少しは再生に手間取ってくれると良いんだがなッ。。

・・・(少年少女離脱中)・・・

「はあっはあっ・・・なんとか離脱できたな。。」

「こは・・・だだっ広い草原だな。。」

・っ血の匂い。

「(い)も・・・戦場か。」

戦場・・・になっちゃった。。。」

俺が、転生して此処に来た。

あいつとの因縁は此処に来る前生まれた瞬間からだし、

もし外の世界で遭遇してしまっていたら俺は強くなれずに・

外の世界を守れずに死んでいただろう。

「でも・・・(い)を戦場に。」

ソラの言っていた・・・『忘却の悪魔』

大量に生み出され続けるソレが幻想郷の地を荒らし、空を汚す。

戦場と変わった地に生々しく傷跡を残す。

「双覇。今は、とりあえずこちらに加勢しましょう。」

私たち以外のみなさんも双覇の力を受け取って食い止めているようですっ

貴方のせいでは無いですよ双覇。 思い出して下さい。

この幻想郷の傷以上に貴方が救ってきたものを。

貴方は独りじゃない。 私たちが居ます。 この幻想郷も必ず

必ずまた戻りますっ 私と貴方が居るんです世界くらい救えますよ!」

そう言われて、肩を叩かれる。

「んっ．．． また弱気になつてた。」

ああ！ 救つて見せる。幻想郷を．．．またあの綺麗な姿に戻す！」

その意気です！と向けられた笑顔。

本当に元気になる。なんでもやれるつて気分になる。

「ん．．．？ あれはっ！」

文つ俺はあつちの方を行つてくる！文は反対側を頼む。

それと．．．片付いたと判断したらソラのところに向かう。

俺が飛ぶのが見えたら．．．一緒に来てくれ。一緒にあいつと戦おう。」

返答は聞かずにすぐさまうち合わせた方向に跳んだ。

聞かなかつたのは．．．答えが決まつてるのを感じていたから。

．．．．（祥磨・魔理沙・霊夢サイド）．．．

「ぐっ．．．『光符』ホープスパーク！」

「たくっ．．．キリが無いぜ。『恋符』マスタースパーク!!」

「なんか、強くなってる気もするし・・・いずれにせよこのままじゃスタミナで負けるわね。『靈符』 夢想封印!!!」

靈夢、魔理沙、祥磨つ間に合った!

「大丈夫か? 3人ともつ。こいつら・・・」

パンドラの箱の中で感じてたより強くなってる。。」

余計な消費を抑えるために、多重契約解放と『神の贋作』

を解除こそしてるけど『焰の型』は殺傷力重視なんだけど・・・

自信無くすなあもう。。

「『双覇つ!?!』おかえりつ。」「」

突然現れた俺に、三者三様に声を上げる。

なにか言いたそうにもしてるけど今がそんなときじゃないのを理解してか

それ以上はなにも言ってこない。

「首をふつ飛ばしても蘇生・・・か。・・・ぐつ!!?!」

速いっ。。 ぐつ吸血鬼並みの再生力に、鴉天狗並みの速度。

腕を武器に変化させることまで出来るようになってる。。。

「白雲流『雷火の型』! 全部間に合わない速度でたたつ斬る!

・・・死の境地に達した今なら。きつとやれる。アイツ用に力を残しつつこいつらを切り抜けるにはこれしかない。

契約解放つ 『炎狐王の右腕』『氷狐王の左腕』

部分開放つ・・・今までよりも繊細な集中力が必要だな。

慣れるのに少しかかるか。

「『白雲流』焦天の流星！」

輪廻を分裂させ焰の力を纏わせてあたり一面の奴らを斬り裂くつ

氷柱の炎は概念すら焼き尽くす！

「俺はこのまま攻撃し続ける！ 霊夢、魔理沙、祥磨！」

広範囲攻撃で薙ぎ払え！こいつらはもう蘇生できないからつ。」

俺と顔を見合わせて、頷く三人。

「『双魔砲』デュアル・・・スパアアアアック!!!」

「『霊符』夢想・・・封印!!」

祥磨が掌の先に魔法陣を展開し、魔理沙が八野炉を重ね合わせる。

二人の手を重ね合わせて二人分の魔力を流し込んで放つ特大の魔砲。

霧雨魔理沙のラストスペル ファイナルマスタースパークよりもさらに強大。

「霊夢の夢想封印もさつきより明らかにでかい。」

あいつ、攻める機会が来るまで敢えて温存してたな……」

『靈夢』さんに似て、神がかった戦闘センスと才能だな。

……靈夢さん？

「……思い……出した。」

……博麗靈夢さん。

歴代最強の博麗の巫女。

「靈夢っ！ 陰陽玉っ少しだけ貸してくれ！」

「はあっ？ 何言ってるのこんな時にっ！」

「いいからっ早くっ」

手早く靈夢から陰陽玉を受け取り……

うん。 見えたっ！

『封断刀』 この封印を断つ！

今、貴女の力が必要だ！ ぐっぬぬぬ……うおおおおあああ！」

博麗の巫女に伝わる博麗の秘術を扱うための宝具。

『陰陽玉』の奥……懐かしく頼もしい靈力。 それを解き放つため俺は……



力を縛りつけていた糸を断ち切った。  
そして・・

ドゴンツ!!!!!!  
爆発的な霊力と神力の奔流、土煙のその中から彼女が。

「・・んっ。。これは懐かしい空気。でも、  
おかしな空気が混ざってますね。あれからどれくらい経ったのでしょうか。」  
最後に見たあの日より大人っぽくなってる。  
20代後半くらい・・かな。

「おかえりつ靈夢さん。その髪。。。」

「・・・ん? これは。懐かしいお久しぶりです主よ。」

いえ・・・ただいま。ですね!」

久しぶりに、本当に久しぶりに会った彼女の髪は紫から白に変わっていた。  
おそらく・・・神力の影響か。

「封印の中、自らの中に何かいつも使ってる靈力と感覚の違うものが  
送りこまれてくるのを感じていましたが・・・なるほどこれが神力ですか。。。  
使い方も靈力とほぼ同じ見たいですね。」

髪の色・・・また変わっちゃった。。。」

なんか、しよぼんとしながら髪の毛弄ってるな。。。

うーん。

「まあまあ、前の髪も今の髪も似合ってるから大丈夫ですよ。」

それより・・・今は目の前に集中しましょう?」

「ちよちよちよ・・・ちよつと待つて!」

その人・・・一体。。こんな澄んだ靈力いままで感じたことも。。。

いやっそれよりも、どうして陰陽玉から。。。」

あ、霊夢達をなかば空気扱いしてた。

「落ち着け霊夢。とりあえず、周りのこいつらを・・・て、うお。」

これは・・・俺達に近づいてくるやつらが片っ端から吹き飛んでる。。。

再生能力消せて無い個体だから再生してるけど。もしかしてこれは・・・

霊夢さんの霊力と神力の庄で消し飛んでるのか・・・!?

「れいっ・・・いや貴女は・・・ 当代の博麗の巫女ですね？」

私は『博麗霊夢』。貴女の・・・何代前でしょうね。 まあご先祖様という

ところですよ。」

「ご先祖様・・・!?!名前、おんなじ。」

「ふふっ。そうね。でも・・・ご先祖様でもあるけど

今は神様でもある。霊夢・・・やっぱりこっちの方が呼びやすいわね。

さつきは初めて会ったみたいいな反応をしたけど実は私は貴女のことを知ってるの。

ううん。貴女だけじゃない・・・陰陽玉を通して歴代の博麗の巫女を見てきたわ。

霊夢。貴女は間違いなく歴代最強の巫女よ。」

「・・・博麗の巫女になってからいろいろあったけど。

こんなにも奇妙な出会いは流石に初めてね・・・。ご先祖様。

貴女がどういう存在かは正直興味無いわ。私生活を見られてたのは腹立つけど干渉してくるわけでも無かったしね。」

貴重で、奇妙で、奇跡の出会い。

それでも全く。いつもと変わらぬ調子でかの博麗の巫女 霊夢は言う。

「歴代最強なんてものも別に欲しくない。

私は、私にしかやれないことをやる。変わりが立てれるならこんな仕事さつさと

やめてるわ全く。ご先祖だか神様だか知らないけどとりあえず・いつも通り居間でお茶飲みたいから手貸しなさいっ!」

「ふっふっ・・・本当に。歴代ここまで『自然体』の巫女見たこと無い。

霊夢・・・貴女には背負うなんて似合わないわねっ!」

息を合わせてるわけじゃない。むしろこの二人ほど私の強い人など

居ないだろう。でもそんな二人のコンビネーションはまさに阿吽の呼吸・

正直、負ける姿が想像できない。

「魔理沙、祥磨(さむら)は離れるぞっ!」

「へ？なんでだ。二人も博麗の巫女が居るんだし叩くのは今だろっ？」

俺の声に先に反応したのは魔理沙。

次に祥磨が

「魔理沙。あの二人の戦闘はあの二人だから合わせられる呼吸が

多すぎるんだ・・俺たちが無理に入っていくとピンチを招きかねない。」

それに俺が。

「それに、あの二人は正直に言っただけ切札だ。

最高クラスの切り札が二枚あるここはもう大丈夫ほかの防衛に回ったほうが

効率がいい。」

ジョーカーは切るべき時に切るべき場所で切る。

じゃないと、ここを守りきれない。

「なるほど、そういうことならっ霊夢ー！」

私たちはほかのところの奴らと戦ってくる！ここ任せても平気か!？」

魔理沙が大声で確認をとると、霊夢は当たり前前よつと叫び返してきた。

本当にいいコンビだなこの二人。

「よしっ。ならっこつから東に飛ぶぞ！」

「東?ここから、東っていうとたしか妖怪の山のあたりか。」

妖怪の山は、博麗大結界に干渉することのあるポイントの一つ。

ほかには博麗神社に彼岸。

「ああ。幻想郷が結界で覆われてまもないころたまに迷い込んだ外来人は

その三か所に現れたんだ。当然俺や文や靈夢さんや紫みんながすぐに気付いて外に返したりしたんだけどな。

おそらく、その三か所はなにかの原因で結界の綻びがでやすくなってるんだ。

アイツはたぶんそれを使って、結界を破り幻想郷を破壊する気だ。」

幻想郷を破壊するには、戦争より結界という弱点を突くのが速い。

それは確かだ。だからきつとこれまでよりもっと仕掛けてくるはず。

「なるほど。内側で喧嘩するよりよっぽどでかい弱点が有るもんな。

・・・双覇っ!あれ!」

祥磨の指す方向を確認するとやつぱり、さつき相手してたやつより

獣・・・おそらく狼天狗の性質か。っ!この妖力。

「急いで行くぞ! この妖力・・・天狗の皆や鬼の皆も闘ってる。」

焔に萃香、勇儀・・・他にもこんなにくさん。

地上と地底は不可侵のはずだけどこんな例外の事態には

さすがに地底の協力も仰いだってとこか・・・さすがに状況判断が適切だ。

・・・・・(少年少女移動中)・・・・

「焰！萃香！勇儀！楯！陽葉！ 皆無事かつ!？」

天魔と鬼子母神を筆頭に、鬼や天狗ほかにも獣妖怪が多めか。

はては河童なんかの本来戦闘に向かない種族まで・・

「『双覇(さんつ)!!』」

おお・・やっぱり驚かれたな。

こつちに意識を回す余裕はあるらしいな。

「おうつただいま！ さて・・数が多すぎるな。

皆つ！俺が攻撃するそうしたら各自最大限範囲の広い攻撃で一掃してくれ！

『炎狐王の右腕』性質焼却！ 『氷狐王の左腕』物理凍結！」

こいつらの今まで得た力を焼却して、凍結で身動きを封じる！

「『はあああああつ!!』」

剣をふるい、閃光が走り、燃え盛り、爆発しありとあらゆる攻撃がそこから

飛び交った。周囲への被害は俺が逆方向の群れにつなげて数を減らす。

「ふいー・・・流石にすごいな。このあたりは一気に全滅。

さてと。次に行くか!」

残すところはあと二つ。

さっさと鎮めて、あいつとの戦いを終わらせてやるっ!



## 第98話―彼岸到着。異形象る狂影。

―彼岸―

生と死の狭間、あの世とこの世の境目にある

死んだものの魂がたどり着く場所。三途の川で隔たり、ここには閻魔様

『四季映姫・ヤマザナドゥ』を唯一にして絶対の最高裁判官とした裁判所がある。

幻想郷へ、博麗大結界を越え踏み居るには常識の世界から忘れられ幻と実の境界に誘われる必要がある。

ある。

そしてかつて外の世界の死人がこちら側にやってくるのが有った。

死体ではないが死にかけ、そして長くもなく妖怪に食われる。

すでに事切れたはずの人間がなぜこちらでかろうじて生きていたのか。

なぜあちらで裁きを待っていたはずの魂が流れてきたのか。

俺と紫で調査を重ね、どうやら博麗大結界が緩んでいるらしいことが解った。

「そんで、紫の幻と実の境界の強さの調節と俺の力を込めた輪廻を刺して

ひとまず安定するまではそのままにしてたんだが・・・」

「だが？」

隣を飛ばす祥磨に聞き返され答える。

「ここ最近、靈夢さんや靈夢を筆頭に才能にあふれた博麗の巫女が続いたろ？」

それにともなつて緩みもだんだんと収まってきてたから靈夢が産まれる少し前に紫と様子をみながら輪廻を取っ払ってきたんだ。」

おそらく緩みの原因は距離もあつたんだと思う。

彼岸や無縁塚は幻想郷のほぼ端っこで靈力が届ききつて無かつたんだろう。

「なるほど。そこを突かれたのかもしれないってことか。

今あいつが根城を張ってるのは神社方面。博麗神社には靈夢が居ないし・・・」

「このまま、数も強さも増え続けたら・・・」

仮に靈夢と靈夢さんが本気を出さざるを得ないほどに強大になつてしまつたら。すげえフラグみただけで正直今感じてる結界の揺れはまずいんだ。

なるべく急いで、なんとかしないと。

ただ・・・もう一度輪廻を刺せば良いわけでもない過剰供給はむしろ壊れちまう。「紫の力は全然俺に追いついてない。大結界だけ強めてもシステムが狂う。」

「つ・・双覇。そのあたりは後だ。着いたみたいだけ彼岸。」

祥磨の言葉で眼下を見据えると、見知った奴が居たのでそこに降下。

「久しぶりだな小町。それと・・映姫さん。」

予想通りここにもかなりの数の忘却の悪魔が差し向けられていた。

そして目の前に居るのは

「んんー？ あんた、双覇!？」

まさか死んだわけないしというかそんな連絡来てないし。

また生身でここに来たね・・？」

赤い髪を上の方で二つに結び、青と白の衣を纏って

その手には奇妙な歪み方をした形の大鎌。

三途の川の船頭にして幻想郷で最も有名な死神 三途の水先案内人『小野塚小町』

「小町、ひとまず集中してこいつらの対処を。」

情報の共有と整理、指示は私の方が得意分野でしょう。」

そして、少々小柄ながら絶対的な威厳を感じさせる彼女。

肩にかかる程度の緑色のショートヘア。紅白のリボンと金で装飾を施された帽子。右手には悔悟の棒を持ち、所持する手鏡は浄玻璃の鏡。

少々幼いようにも見えなくはないが、彼女がこの世界の閻魔様。

その眼は真実を見据え、その判断は絶対なる審判を下す。

楽園の最高裁判長『四季映姫・ヤマザナドゥ』

「・・・貴方、今少々失礼なことを考えませんでしたか？

顔に出やすく嘘の付けない人間性なのは結構なことですが時には伏せなければいけないこともあることを解っているのですか？

そう・・・貴方は少し協調性が無さ過ぎる。そもそも！」

まずいつ!!!

「あー。映姫さん。ちよつといいか。

説教ならあとにして欲しいんだ・・・今は最初に言ったように情報交換と現状そんで対策とか話さなきゃいけないことがたくさんだろ？

あそこで鎌を振りまくってる部下も泣きそうな顔してるからさ。」

そう遮ってくれのは祥磨。 た、助かった!!

「ん・・・それもそうですね。現状、説教を強行する方が黒。

感謝しますが・・・貴方と貴女・・・は霧雨魔理沙さんでしたね。」

ああ……そう言えば此処には俺一人で来たんだつた。

「ああ……ええと。俺は神薙祥磨と言います。」

この白雲双覇の友人です。魔法を行使できること以外は普通の人間です。」

「やつと喋れるぜ……。私は霧雨魔理沙。」

幻想郷の異変解決を霊夢とやったり魔法の森で魔法の研究をしてる。

これから宜しく頼むぜ。」

祥磨、そして俺と祥磨の話が処理しきれていなかったのかプスプス状態だった

魔理沙がそれぞれ自己紹介をすました。

「ふむ……。嘘は無さそうですね。」

全員白。とはいってもそのお二人は私の能力でどこまでを推し量れているのか疑問を感じることはありませんが。

さて、ひとまず現状は小町や死神達そして私であの影たちを

三途の川へと返していくそれを作業のようにしている感じでしょうかね。」

映姫さん……浄玻璃の手鏡を持ってきてたのか……。

てことは多分俺と祥磨の秘密はもうばれてるなあ……。

「ん？あの川に落とすと倒せるのか？

あいつら、めつちやくちや強いのにそれはすごいぜ。」

魔理沙のつぶやきに

「いいえ。倒すというのは適切ではありませんね。

三途の川の底にはその者の魂を喰らうものがあるのです。

ゆえにもし亡くなってここに死者としてくることがあったなら絶対に船から飛び降りてはいけませんよ？

それは実在せず。ただ魂を無に帰す者。」

主たる映姫さんが答える。

ほんとに・・・恐ろしいところなんだよなあ。。。

「ん？でも、あの悪魔たちに反応するのか？

その・・・魂を喰らう怪物？は。」

「あの影が出現するようになってからすぐに浄玻璃の鏡で確認しましたが

なんらかの能力下に存在するためかぼんやりとしか見えませんでした。罪と過去が

見えました。つまりあの影は主の罪と過去を引き継いでる。」

・・・正直、さすが映姫さんだわ。



「小町、この方々を無名塚に案内しなさい。」

あそこはたしか今でも歪みの起きやすい場所のはずです。」

「はあ……はあ……っ うえええ!!」

四季様、さつき最後の奴ふっ飛ばしたばかりで腕が上がらないですよツ!」

「……良いから。小町、貴女は私の部下でしょう。」

なかなかの凄味を伴つての閻魔様の一言。

これには死神も。

「は……はいつ……。行けます! 何度でも何人でも!!」

「……全く。それで業務終了です。あとはしばらく休んでなさい。

この件が終わったらしばらく休暇を与えますので。

私は貴女の上司です 貴女の限界くらい解ってるんですよ。

三人送り届けたら本当に限界でしょう。いつも仕事に出し尽くさないので叱ります  
が

限界を認めず無理をするつもりならいつもの倍説教ですからね。

私の元で働く以上、一切の妥協も一切の無理も禁止です。」

「四季様……。……小野塚小町行って来ますっ」



ええ。しつかりね。

言葉を交わし俺、祥磨、魔理沙の三人を連れて小町は斧を振った。

「んっ!!!…ふうううう。」

すまないね。。ちつとだけ距離がズレちまった。」

次の瞬間、そこは無名塚。

小野塚小町 能力は『距離を操る程度の能力』

自身の居る地点と目標地点の距離を自由自在に制御し移動できる。

主に渡し船に乗せた霊の現世での善行に応じて、三途の川の彼岸までの距離を変えることに使用する。つまり悪行が多ければ長く長く恐ろしい川を渡ることになる。

「いや、この程度なら全然大丈夫だ。映姫のところに戻ってやってくれ。」

よっ…とこれで帰り分くらいは力が戻ったろ？」

さらつと手を握り、能力発動。

自分の力をわけろ。

「…力が戻った。これが結を司る程度の能力ってやつかい？」

全くすごい通り越してあきれるね…。」

「あはは・・・良く言われるよ。道中、気をつけてな？」

「ふふ・・・道なんて、有つて無いようなもんさ。」

それじゃあ。頼んだよ。」

来た時と同じように鎌を振つて距離を『刈り取つた』かのように消えた。

「行つたな。ほら、魔理沙ー大丈夫かー？」

祥磨が手を繋いだ先の魔理沙に声をかける。

「う・・・うううううううん。」

金髪魔法使い・・・どこのおせうさまだ。

まだピヨつてるみたいだな。

「おーい・・・キスしちまうぞー。」

ようやく聴こえたのかハッ！とした魔理沙は。

「つつつ!! な、何を言つてるんだぜ!!」

祥磨・・・わたつボクと私・・・キス・・・へっ!!」

別のベクトルでピヨらせたら意味が無いじやろうが祥磨さんや。

その気持ちを含めて視線を向けると、めちやくちや良い笑顔の祥磨が居た。

「あははー。まあ無理やりはしないからな。」

そう言つてポンポンと頭を撫でる。

ああ・・・リア充爆発しろ。

「リア充爆発しろ。」

「聴こえてるからな。さて、魔理沙も帰つてきたし行くk

『ガッああアアああアアああアアああ  
!!!!!!』

「どうやら、向こうから来たらしいな。」

言うとおりに、なかなかゴツイやつが目の前に現れた。

無名塚と彼岸の歪みが合わさつてとんでもないエネルギーが取り込まれて  
行つてゐるらしい。

「外見上は、これまで通りだけどなんかまた進化してそんな感じだな。」

『ネダマジイ””””!!!!』

っ!?! 飛べっ!!!!!!  
!!!!!!

あいつが殴ったところから俺達の後方。目測100mまで  
地割れ、地盤沈下を引き起こした。

「このパワーは妖怪の山での戦闘によって、鬼のパワーもキャパいっぱいまで  
学習したらしいな．．．いや、そんなことより。っ!？」

消えたっ．．．? いや。

「祥磨! 後ろっ!!!」

「なっ? ぐっ!!!??」(ズ．．．ガンツツツ!!!)

ギリギリガードしたけど、その上からアームハンマーを喰らった。  
結構な勢いで叩き落とされたけど．．．

「八門遁甲第五杜門 開! はああっ!」

八門遁甲の第五杜門を開門し、全力で右ストレートで吹っ飛ばす。

そして能力で魔理沙を引き寄せて抱え祥磨のところに降る。

「しょ．．．と。おい大丈夫かよ親友。」

まさか、死んでは居ないと思うが声をかけると。

「おおおお．．．痛ったたたたた．．．」

双覇．．．あいつやつぱり。」

割と元気そうだな。

「ああ。鬼のパワーと鴉天狗の速度。殴った時の手ごたえと良い．．

ありや特別製だな．．．恐らくはここに満ちてる霊の記憶．．憎しみや怨念に

よって形作られてる。だから人間みたいに頭を使うことも習得してるぞ．．。」

『オバエルアガ．．ゴンナ姿にシダノガツ!?

ユルザナイ．．．ゴロズツ!!!』

しつかりとした発音じゃないけど、聴き取れるレベルで言語も使えるのか。

相当知能が高い個体ってことみたいだな。。。

さつきも、あたる瞬間後方に跳んで衝撃を受け流してたし。

「わ．．わわわわ来たぜつ。 どうするんだよう。。。」

「双覇つ。 お前の絶対中立（ハイトキヤンセラー）で怨念の浄化は出来ないのかっ!?!」

投げかけられた問いに残念だが。と返してやる。

「絶対中立は敵意に干渉できるけど、憎悪や殺意みたいな強い意志には干渉できないつ。

それにあれは生物じゃなく死者の怨念。干渉できるのは死（向こう側）の世界の存在かもしくは

さつき出会った

閻魔様くらいだよっ！ 避けるっ!!」

こんどはカマイタチかっ!!

近づく隙が……

「第六景門……開。ふっ……んっ……よっと……」

景門でさらに身体能力を向上させる。

何か……何かないか奴を消滅させる方法……いやそれより先に近づかなきゃ。

「うっああああ!!」

「っ！魔理沙っ!!! 大丈夫だすぐに治すっ。」

被弾して足に怪我を負った魔理沙を祥磨が助けに入る・

肉盾にしてる背中では血だらけでズタズタになっていく。

「しょ……祥磨。私おぼけ……苦手でごめん……っ。」

背中……しょう……まつ!!」

「ぐっ……あつつがつぐ。 だいつじょうぶだっ！ お前のマスパに比べたら。

こんなの石ころと大差ない……。よし。魔理沙もうこれを飲んで。 少ししたら歩

けるようになると思うけど  
ゆつくりだからな。」

『ゴロズ・ゴロス・コロズ・スイネエエエエエエエエ!!  
オマエガラダ・マモツデスイネ・ガあああ!!!』

狼天狗の聴覚で聴こえてたのか!?

マズイっ!! あのでかさは。

「祥磨ああアアっ!!!」

間にあわ・・ツ!?! (ゾクツ・・

「(ボクの)私の所為で傷つけるのは、もう・・やだっ!!!  
全部。全部をここで! (いくよっ) いくぜ!!! 『魔法』<sup>マ</sup>最後<sup>ス</sup>と最上<sup>タ</sup>の輝<sup>ス</sup>き<sup>パ</sup>」  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

立ち上がった金髪の少女はその両の(掌)から、生あるものの象徴を。  
絶大で膨大な生命の奔流を。

いつかのように・・・

今度は愛する人に『見せる』ためにじやない。

愛する人を『護る』ために。

溢れ出る想いを、生を、自らの全てを注ぎ迫る闇を吹き飛ばした。



第99話—HOPE．．．．．  
DESPAIR.

．．．(???)サイド)．．．

このままじゃ．．．祥磨が危ないっ。

魔理沙っごめん．．．身体借りるよ!!!

『お前は．．．誰だ?』へっ．．．

『お前．．．私!? なんで!? どうして私が二人いるんだよ!?』

えっ．．．えっ!?

なんでボクが見えてるの．．． どうしてボクのがわかるの!?

ボクが出てくるときはいつも魔理沙の方は見えなかつたはずなのに．．．

どうして．．． いったい．．． なんで．．． (ぶつぶつ．．．)

『だああつ! 先に質問したのはこっちだけ!』

だからこっちの質問にまず答えろよな偽物! 私はそーいうぶつぶつ考え込むの

大っ嫌いなんだ!!』

に．．．にせものーっ!?

なんだよー！ そんな言いかたしなくても良いだろっ  
ボクだってこんなことになったのは初めてなんだ！

イレギュラーな自体には、冷静に良く考えて対処する必要があるっ。

そんなの魔法使いとして当然の事だろうっ!?

『なっ・・・魔法使いとしてってなんだよ！』

私には師匠も友達も居なかつたんだ。 独りぼちで夢中になつたものなんだ！

それが当然とか、当たり前とかそんなのわかるわけないだろっ!?

パチュリーもアリスも、私の中の私にまでそんなこと言われなきゃならないのかっ』

あ・・・ごめん。・・・言いすぎた。

ボクも普通なんて当然の事なんてぜんぜんわかんないで死んじやつたのに・

『はあっ・・・はあっ・・・。え。。っ死んだ・・・?』

あはは。。一旦落ちっこっか。

わからなくてもこうなつた以上、お互いちゃんと自己紹介しないといけないもんね。

ふう。。それじゃ、まずボクからだね本来部外者だし・・（苦笑）

ボクの名前は・・ドリズル。ドリズル・グリーンム。

日本語にするなら淡く光る霧雨・・かな？ あはは・・。ちよつと変だね。

『どりずる・・ぐりいむ・。。 いや、外の世界の言語は聴き取りづらいけど

その意味は良い名前だと思っぜつ。 私は魔理沙。霧雨魔理沙だ。』

うん。ありがとう魔理沙つ。

私の住んでいた国・・イギリスっていう国はね、吸血鬼の支配が他の所より強くて  
王城が有つたの。『スカーレット王家』っていうね。

『・・・！ スカーレット・。。』

あはは・・。。うん。君の中に入って幻想郷じやうきやうに来た時驚いたよ。

まさかあのスカーレット王家の館がここに來てるなんてね・・。

『あの時・・・紅霧異変の時ずっと私の中に居たのか？』

どうしてそんな憎い相手のところに行くのに黙ってたんだ・・。』

・・・うん。えとね。

ボクは本来、ここに居るべきじゃないから。

ほんとはね？ こうして君の中で意識を持って存在してるのも

イレギュラーな事。だからなるべく干渉しないようにしようって。

ボクが居ることで魔理沙の人生が変わってしまったら。

狂ってしまったら、それはボクが昔されたとても辛いことと同じだから。

『辛いこと・・・？ あ・・・ごめん』

んーん。ここは意識の中だからねー。

言葉に出さなくてもわかるのさ。ボクは・・・昔、吸血鬼と契約した。

お祭りの日街にはたくさん魔法使いが居て。その人も周りの人たちも、

きらきらーっ っって輝いてて。

ボクは、魔法が大っ好きになった。

魔法が使いたくて不思議なこと綺麗なこと、カッコイイことぜーんぶやって

皆に笑顔になってほしかった。

『私も。魔法ってすっげー！ってこんな風にかっこいい魔法使いになりたいっ

て、今でも思ってるなー。』

うんっ。でもね、ボクは間違えちゃったの。

その日ボクは知ったんだ自分に魔力が無くてその才能も無くて能力も持つてなかったってことに。

それを教えてくれた魔法使いさん。

いや・・姿を変えていた吸血鬼に契約を持ちかけられた

魔法使いになれるならーって受け入れちゃったんだよね・・あはは。

『どりずる。。。』

それからボクは、ドリズル・スカーレットになった。

命令が出された時や真夜中になると頭がぼーっとしてたくさん。たくさん罪を犯した

笑顔にしたかった人たちはみーんな僕が消しちやっただ。

家族は・・・『グリーム』を嫌った王様が真っ先に。

『どりずる・・・。どりずる・ぐりーむ。』

それが名前なんだろう？さっきそう名乗ってたじやないか  
名乗るっていうことはそれが自分ってことだぜ。』

・・・ふ・ふふっ。君はボクが怖くないの？

ボクには確かに流れてた吸血鬼の・・化け物の血が。

契約は、与えてくれるだけじゃ決して無かった。

『だから、私に難しい話をしないでくれー。』

さつきも頭が爆発しちやいそうだったんだ　んと、

全然怖くないぜ。　私もここで過ごしてたくさん妖怪たちに出会ってきた。

外見が私そっくりなのは度肝を抜かれたが、良く考えたら化け狸と大差無かったぜ』

・・・あはははっ　・・・あはははははははっ!!

化け狸って　・・っひどいよーボクは狸じゃないってばきゆうけー・・

『吸血鬼でも無いぜ。　お前はドリズル・グリーンム。』

今は　・・・私に手を貸してくれる助っ人だろ?』

あはははははははっ!　・・・はあーひいー　・・っ。。。

・・・うん!　やっぱり師匠が好きな女の子は違うねー。

ボクとそんなに似てない気がするんだけどなあー　・・

ちゃんと問い詰めないとねっ。

『・・・っ祥磨。』

この感覚は　・・・っ。。。』

マズイ　・・。　行こう魔理沙っボク達で祥磨を守るよ!!!　『とーぜんっ!』

．．．(双覇サイド)．．．  
「ぐっ．．．すっげえ威力．．．」。

地面に足めり込ませないとふつとばされちま．．．うっ!!!」

どうなってんだ。俺は助けようとしたけど間に合わなかった．．

だから魔理沙がああして祥磨を守ってる。自分の魔法で一番信頼してる

『マスターパーク』を撃つのもここまでは理解できる。

「でも、魔理沙のマスパにここまででの力は無かったはず。

なによりこれまで道中で魔力を消費してるのに全開以上に放出してる……。」

「はあああああああッ!!! 絶対に……護るっ!」

なっ……まだ、上がるのかっ!?

まじい……。まじで……ふきとばされっ!!

「くっ。。。」 『結い』 — 結神 + 神薙祥磨っ。

祥磨っ大丈夫か?」

普通の魔法使いにふっ飛ばされる神なんて、笑い話にもならねえからな。

とりあえずここなら大丈夫か。。。

「ああ……。つつてもっ痛ってえええ。。。

さすがに肉壁なんてするもんじゃないなめちやくちや痛てえ……

でも、そんな事より魔理沙のやつ明らかに魔力量が異常だぞ。

何が起こってるんだ? この位置じゃ良く分からなくてな。。。」

「とりあえず、俺の妖力と霊力で治癒力を底上げしてやるよ。」



何が起こつてるかなんてこつちが聞きたいよまったく。とつくに魔力が底を尽きても可笑しくないのにあいつの目が青くなつたと思つたら突然……」

俺が見えた限りで状態を説明すると……。

「ドリ・・ズル。まさか、あいつが力を？」

「ドリズル。ドリズルつて確かお前がイギリスで会つた恋人か。

そいつがこの状況とどう関係あるんだよ？」

そういえば、話して無かつたな。と語り始めた。

ドリズルと霧雨魔理沙の関係。 事の顛末。

「だから、魔理沙の意思を人生を尊重してたドリズルはめつたなことじゃ表には

出てこなかつたし。出てきた時も、魔理沙の意識は眠つていて今みたいに二人の意識が二つとも表にでてくるなんて状況は無かつたのに……。」

ふむ・・自身を魔力に変換して未来の肉体に宿る。『転生』の魔法か。

膨大な魔力と高度な術式、かけられて耐え抜ける肉体が無ければ無理な魔法……

「いや・・今はこんなこと考えてる場合じゃないか……。」

おーいっ!! 魔理沙ーっ! ドリズルーっ! 聴こえるかっ!!!

聴こえるなら、出力を落としてくれ!!

俺は大丈夫だから　　つつっ!!」

祥磨が・・・。

二人に声をかけたその瞬間・・・その魔力の奔流が爆発した。

「ドリズル魔理沙っ。・・・私達ボクの全部、ありったけのきらバきらワを！　くらええええええええ

!!!」

「ばっ・・・やめろっっ!!　ぐっ。。。あああああああっ！」

目の前で爆発が起きたような或いは超強烈な向かい風が発生したような衝撃になすすべもなく吹き飛ばされる俺と親友。　くっっ!!!

拮抗していた光と闇の力の均衡はあっという間に崩れ、少女曰く  
太陽と虹の輝きが包み込んでいく。

「はあつ……はあつ……はあつ……ううん……」(ガクッ

「まずつつ……お……」

俺の能力より先に祥磨が前に出て、倒れかけた二人を抱きとめた。

「まったく……俺の立つ瀬がねえなあ。」

「……まったく。無茶しすぎだ馬鹿弟子ども……」

そう言った親友の顔は酷く荒れていて……

怒って良いのか、感謝したらいいのかわからない微妙な表情だった。

「今回は、俺も馬鹿師匠だったけどな。なんでこんな状態になつてるのかはわからんが。なんでこんな無茶をしたのかはわかる。俺の為に戦ってくれてカッコ良かった最高の魔法使いだよ。」(なでなで・

「えへへ……。ボクも、ちやーんと強いんだから！」

だから。無茶するなよな。もう見たくないよいっばい傷つく姿。」

「ああ。ごめんな……」

「私も、ごめん……。でもドリズルと二人でちゃんど！  
乗り越えられたぜ？ なっドリズル。……。？ ドリズル？」

……。！ 二人の意識の同調が解除された。

「いや良いんだよっ。……。？ 魔理沙、ドリズルがどうした？」

「……。聴こえないんだっ。さっきまで重なるっていうか  
繋がってる感覚が合ったのに！ 今は何にも!!!」

意識の同調……。混同？ はイレギュラーだったらしいし  
意識してやったものじゃないなら意図せずして解除されるのもわかる。  
でもこれは……

「ドリズルっ！ドリズルっ!! 私の中に戻ったのか。

返事してくれドリズルっっ!!! うぐっ……。っ?」

自分に向かって叫び続ける魔理沙が突然、呻きだした。

魔理沙っ? 大丈夫かおいつ!! 祥磨が背中をさすりながら声をかける

「祥磨、大丈夫。彼女が出てくる……。」

ちやんと聴いてあげろ。その義務が有る。」

「あつ〴〵？　こんなときに何言つて．．．」

「あはは。祥磨のお友達つてすごいね。なんでも知ってる神様みたい。

心配させちゃつてごめん．．．どうしても伝えなきやいけないから無理やり出てきたんだ。そのせいで魔理沙に負担かけちゃつた。」

負担にならないつもりだったのにやっちゃつたな．．．たはは。

笑顔の少女は瓜二つの少女を心配して苦笑した。

「びつくりさせるなよつ．．．　なんだ？　伝えなきやいけないことつて。」

問われて。　少女は笑顔をやめて話した。

「．．．うん。　祥磨。ボク、祥磨のこと大大大大だーいすきつ！

転生して。　まあボクがズルしたけど二回ともこうして会えて．．．君に、大好きで大切な師匠の貴方に。好きつて言つてもらえた。」

．．．少しだけ、距離を置いて見守ることにしよう。

妬ましいからじゃない。　石を投げつけるためでもない。

今、必要なのは二人の空間。

「・・・白雲流結界術。」

ただの丈夫な結界。魔法の森のいつもの家の投影はサービスだ。

・・・(祥磨サイド)・・・

「ボクと君は何度離れても、悲しい運命に引き裂かれてもきつと。」

きつとまた何度でも出会って結ばれる運命だつてちつちやな女の子みたいに  
そう想えたんだ。だから・・・きつとお別れしても大丈夫。

ボクの事、魔理沙の事きつと幸せにしてくれるもんねっ!」

・・・は？

「ま・・・てくれ。」

「祥磨、言ったよね？ボクは魔理沙の魔力だつてだからお役目を果たせたんだよっ

ちよつと普通じゃないやり方だったけど・・・ボクの私情もはさんじやったけどそれで  
君を助けられた。今度はちやーんと、護れた!」

ちがう・・・そうじゃない。

「待つてくれっ! つてそう言つてるだろ!!」

「はあっ・・・はあっ・・・声荒げてごめん。。」

でも、いきなりそんなこと言われても何が何だか・・・どういうことだよ!」

・・・質問じゃない。。 返答しないでくれ・・・。

わかりたく無い このままわからないで居たい。

「気付いてるでしょ師匠。 さっきのマスタースパークでボクは魔力を使い果たした

魔理沙にはばれないように魔力消費の比重をボクに強めてね。」

「この身体にはまだ、魔力が残ってる。でもそれは彼女の分。」

ボクの方の器いっぱい魔力は全力全開っ！ですっからかんになっちゃったんだよ」

・・・確かに、今彼女の身体から感じる魔力は微量で良く感じると

彼女のものとは違うような感覚を覚える。つまり・・・

「察しれたようだねー。うん。このボクは消えちゃうんだ。」

この身体をちゃんと元の持ち主に返してそれで大きくなつた魔理沙の器

それに溜まる魔力の一部になる。」

「・・・それで良いのかよ。」

なんか・・・なんで・・・むかむかする。

「それで良いのかーって、ボクは元々魔理沙の『魔力』でしかないんだよ？」

人格も姿かたちも持たずにこうなるはずだった。こうなってるのが異常で

これからなる形が正常なんだよ。」

・・・なんで。



「なんで、諦めてんだよ。馬鹿弟子1号のお前なら諦めないだろ!」

俺と・・想いは同じじゃなかったのか!? すぐに・・諦められてそんな・・

気持ちの整理簡単につけられて! 捨てられるみたいじゃねえか!!」

・・・・違うだろっ。引きずってほしいわけでもない。。。

正しいのは向こうだ・・間違ってるっ。でも。。。

「・・・無いだろ。」

「・・・え? ぐあっつ!!?」

思いつきり殴られた。グーで・・。吹っ飛ばされた。

「気持ちの整理なんてついてるわけ無いだろう!!?」

ボクだって、皆とまだまだ居たかった! 祥磨を愛して居たい!

同じ自分だけど! 魔理沙なんかに取りられたくない!!

でも! これが自然なんだよ! ボクにもボクが作ったこの魔法は解けない!

君が幸せで居られるように・・ボクがしたかった全部をこの子に・・私まの子孫りに託して居なくなるしかないんだよっつっつ!!」

ドリ・・ズル・・。

「大体っ! 君だって、気持ちの整理? 抑制っていうの?」

上手すぎるんだよ！ 何でも無いようにされるのは辛いんだからなっ！

少しくらいボクの事見てよ！ 考えてくれてるのは解るけどっ

好きって言ったくせにつ！て・・ボクに・・み。魅力ないのかなって！

魔理沙も不安になつてるよきつと!! このダメ男ー!!」

・・・

「じゃあ、どうしたら許してくれる？ 諦めないと約束してくれる？」

俺は諦めないお前らに恋したんだ・・最期まで諦めてほしくない。」

今さら・・遅くなつたけど。 なんだつてする。

失いたく無い想いは俺だつて強いんだ。

「・・・ならそーだなー。 最期だし抱いて。」

・・えとつ意味は師匠の・・考えてる・・のであつて・・るから。」

ぷしゅううううう・・身体が震え、顔を真っ赤にして

こんなこと言われるのは。 流星に予想してなかつたな・・。。。

「・・・わ。わかつた。」

「・・・へ？ ふえつつ!!?」

返答に驚いたのか、ドリズルはあわあわしながら後ずさりしてベットにすつころんで  
しまった・・・可愛いな

まったく。

「・・・冗談でもからかいでもない。ドリズル、お前もだろ？」

なら俺だつて本気で応える。」

と・・・とりあえず上から覆いかぶさつてみよう。。。。

あ。。目、きゅつて閉じた。。

「・・愛してる。こんな時に言つて良い台詞じゃないけどドリズルも昔のお前魔理沙も。」

ま。。まずはキスからだよな・・・？

こういうときつてどこまで・・？いきなりだし軽く？

いやでも・・向こうは覚悟完了して・・。。。。

ええいままよっ!!!

「・・。。んつ。。。」

えと・・これで良いんだよな・・？

どこか臭くないか・・？こつちは幸せだけどドリズルは・・？

というか・・・ほんとにしても良かったのか・・・？　もしかして歯とか当たった???

思考がぐつちやぐちやだ・・・

「．．．．ぶあ。　んっ!？」(ぎゆううううっ!)

えちよっ・・・離れようとしたらしがみついてきたっ!?

ちよ・・・ちよちよちよっ!!

自分もしたこと無いのに、一生懸命キスしてきて・・・

背中にまわした腕におもいつきり力こめて・・・可愛い。。。　じゃないっ。。

「んーっ!!んっ。　んんっ!!!」(とんとんとんとんっ!!)

唇がふやけるっというか、口ごと吸引されてるっ

ダイオンかつこいつっ!!

理性が溶ける・・・のもあるけど、呼吸っ！呼吸をさせろっ!!!

「ふっ・・・ふあ・・・(ぽー)。。

・・・はっ。ど、どう師匠！ボクだってこんなこと出来ちゃうんだからねっ！  
この調子でめ・・・めろ・・・メロメロにするんだから。。。」

控え目な胸を張り、ぼそぼそとなにやら宣言してる馬鹿。

「・・・はあつはあつ。このっ馬鹿弟子め。」

こんな状況で窒息死でもしたらロマンチックの欠片も無いだろうが。」

デコピン一発。　そこでデコピンした場所にキス。

「つたく、最初からメロメロだ。ほら。怖いんだろ。」

あんまり無理にしなくて大丈夫だよ。　こつちも初めてなんだから。」

師匠を舐めすぎだな。　不安がつてんのも小さく震えてるのも気付いてるっての。

「・・・うん。　ありがとう祥磨。　というか、初めてって初耳なんだけど

大切なモノ、ボクで良いの？」

「そつちの方がはるかに大切なモノだろうに。　俺はお前が良「ボクもっ！」い。」

・・・これ以上は、怖気づくのが失礼だな。。。」

「お前、可愛すぎだからな。」（ぎゅううううっ。。）」

「えへへ。。　・・・師匠。」

やっぱりずっと。ずっと居たくなっちゃうよつ。「ぎゅーぎゅーぎゅー。

もし一つだけ叶えられる我儘があるなら。

頼むから、このまま・一緒に。。。

「一緒に居たい。」

その瞬間。 俺の願いとは裏腹に・・・

現実はどうしようもなく非情なのだど伝えるように。

なんの前触れも無く、ようやく消えたくないど吐露した少女は

淡く光り虚空に散った

第100話—理想と絶望の終わり。 幻想の雲。

咆哮・・・慟哭・・・

外の世界で過ごしていたころのあいつからは聴いたことが無い想像したことも無いほどの叫び。

今、最愛の少女と一つになっているはずの親友の

悲しさと苦しさと悔しさと・・・ありとあらゆる負の感情の糸がその声とまとめて俺に叩きつけられた。

「ぐっ・・・くううう。。。！ 祥磨あつ!!!」

眼前の結界にみるみるうちにヒビが入り・・・

バキッ・・・バリントッ・・・バキヤンツツツ!!!!!!

木が折れる、或いはガラスが粉々に砕け散るような音・・・



「ドリ．．．ズル。　ドリズルっ！ドリズル．

ドリズルドリズルドリズルドリズル————！！！！！！

はあっはあっはあっはあっ．．．　あああああああ！！！！！！！！！！

俺の境界を内側から粉微塵の状態にまで分解し吹き飛ばす。

それほどまでの爆発を引き起こしたソイツは、次は自らの身体を爆散させんばかりに叫びながら霊力と魔力を放出し続けている。

「．．．．．」(ぎっぎっぎっぎっ．．

放出され続ける力に吹き飛ばされそうになり、身体中の骨が砕ける。

太くトゲが生え鋭利な刃先に返しの着いた糸が俺の心に突き刺さり抉る。

それでも。進む。

「はあっ．．．はあっ．．　あああああ”””っ！

もう。守れないなら．．．全部っ。　俺なんてあああああ””！！

「．．．．．」(ぎっぎっぎっぎっ．．



魔理沙が居ることを忘れるな。 さつきや、俺。

お前を知ってる全ての生物が居ることを忘れるな。 どうするつもりだったよ。」

絶対中立は使わない。 俺の知ってるこいつはそうしないと行けないような

そんな馬鹿じゃないし、コイツとはちゃんと喧嘩したい。

それに祥磨の絶望は祥磨のものだ。

俺にも、誰にも理解することはできないしするなという権利も無い。

「……じゃあ。 どうすりゃ良いんだよ!!!」

「……俺に任せろ。 お前、転生の魔法の術式。

今この場で細部まで詳しく俺に教えてくれ。」

これは、俺個人がそうしたいと思ってることだ。

倫理観や価値観やいろんな物に違反して、酷い行為だ。

善の部分だと言われたけど……これは『独善』

「結びつける事は、俺の専門だろ？」

その術式さえ理解できれば俺にならなにか出来るかもしれない。

ドリズルさんの魔力は人の形を保てず拡散しただけでまだ消滅したわけじゃない。」  
祥磨が少しずつ話し始めたその術式は確かに高度なモノだった。

何より魔法の術式だけあって緻密な魔力コントロールが必要不可欠。

「瞬の世界に行った時フェルに影魔法と魔力を教えてもらった。

だから、魔力はある・・・けどまずいな俺はそこまで緻密な魔力コントロールは・・・」

「・・・そっか。。。」

「だから、そこはお前に任せたぞ親友。」

そう言うと、何を言ってるのか解らない。

そんな顔でこちらを見てくる。

「どっかの馬鹿が自責の為に発散しまくった魔力。

この新しい術式に必要な魔力は俺がお前に補給し続けてやる。

補給と仕上げは俺に任せろ。 術中の作業は・・・頼んだ。

作業手順は、まず俺が身体を糸人形で作る。

それに散る直前に集めたこのドリズルの魔力を編み込んでいく。

この時に、転生の術式で術者となったお前の魔力が必要になる。」

散った瞬間に出来る限り集めたが、それでもかなり消滅してしまっている。

それを補填するために術者となった祥磨の魔力が必要だ。

特殊な血液型みたいなものだ。彼女に混ぜられるのは祥磨の魔力しかない。

「はつきり言っておく。この術式は成功するか解らない。

成功したとしても、お前を経由して供給する俺の魔力はどちらかと言えば

妖力に近い純度の高いものだ。彼女はまず人間じゃ居られない。」

「・・・成功させて見せる。俺に出来ることはあいつを想い続けること

ただそれくらいのことだけだけどあいつがどんな姿になったとしても愛する。

双覇・・・やろう。」

その言葉を聴き届けた俺は、『神の贋作』と『イレギュラーマリオネット共同体の操り人形』の感覚をヒントに先

ほどまで存在していた少女を形作っていく。

「・・・よし。まず依代は完成だ。」

「それじゃあ・・・選手交代だ。」

・・・  
(少年、少女復活中)・・・

「……ん。ボク……は確か。。。」

「よ……。お目覚めのようだなお姫様。」

「……しよまのとも……だち？　ボク、どひて……？」

無理やり繋ぎとめた弊害か、彼女はうまく発音出来ないようだ。

祥磨の友達……？ボク、どうして……？か。。。

「魔力が尽きてそこにぶっ倒れてる君の想い人と新しい術式を試してみたんだ。

最初に言っておかなきゃいけないことが有る。君は、完全に生き返ったわけじゃない。その身体は俺の能力で生み出した人形みたいなものでそこに君自身の魔力とそいつの魔力を注ぎ込んで君が消滅する前に新しい容器に詰め込んだようなものだ」俺の言葉を聞いた少女はちよつと考える表情をして

「……しまも……あなはも……きつといっぱい考えてこうしてくれたんだよね  
らから。。。ありがとう。この身体……にんげんにやない？」  
やつぱり……気付いちやつたか。。。

「……その身体は、吸血鬼だ。

俺の魔力を祥磨を介して浄化して注いだんだがそれでも、妖力の成分が強すぎたみたいなんだ……  
肉体が適正のあつた吸血鬼に変化した。」

あいつには、確認する前に倒れたから伝えてない。  
伝えたらたぶんドリブルの事を気にすると思う。



「あはは。うん、たぶんボクの事いっぱい心配してくれるんだろうなあ。でもまあ・・人間とか人形とか吸血鬼とか、もうどうでも良くなっぴやった」

ボクの譲れない人は、ボクの種族を気にするような人じゃない。

それに。ボクはまた祥磨と魔理沙・・皆と居れるんだから大満足！

そう言っつて満面の笑顔で少女は眠りについた。

「最期に、親友にすこしは返せたかな。」

幸せになお二人さん。 あとは・・・俺の相手だ。」

ドリズルの手に軽く触れて能力を発動。 結びつける。

そしてドリズルが抜けて改めて一人となった魔理沙を含めた3人を魔法の森の魔理沙の家に能力で移動させる。

「・・・待つてろよ。 ソラ。」

契約解放・・・射命丸文。

これで俺が向かおうとしているのが文に伝わるはず。

俺は、その場から空中に飛び上がり

決戦の場所、博麗神社に向かって飛び立った。

「そ．．．は!! 双覇~~~~!!」

ん．．．文も追いついてきてくれたか。

最終決戦、こんなときに想うのほんと不謹慎なんだろうけど可愛いなあ。

「決めたこと．．．曲げちまいそうになる。」

「双覇．．．?」

「ん？ ああ、ちよつと勝算を考えててな・・・。

あいつは。本当にどうしようもないほどだからなあー・・・」

「双覇。だーいじようぶ！ですよ。

私たちは貴方を信じてます。それに貴方は独りじやないんですから。

こーんなにもつ可愛い奥さんである私も一緒に戦うんです！

どんな奴が相手でもぜーつたいに負けませんよ！」

自分も怖くてたまらないはずなのに、胸を張ってまつすぐにこちらを見つめて

鼻高々にドヤ顔でw・・・そんな風に俺を一生懸命に鼓舞してくれる大切な人。

本当に・・・迷ってしまう。自分が選択しているこのルートは正しいのか。

周りの暖かさに触れるほど・・・大切な存在を愛しく思うほど・・・躊躇いたくなる。

「ふふっ・・・あははっ。ありがとう文っ！

そうだな。俺たちなら絶対に大丈夫 誰よりも愛している・・・

俺は文・・・君を誰よりも。」

数秒の間も置かずに同意を返してくる文としつかり手を握り合う。

・・・瞬きをするころにはもう博麗神社に付く。この事件の終わりの場所に。

・  
・  
・  
夫婦。  
出陣。  
・  
・  
・  
・

「  
・  
・  
・  
・  
よーやく。  
よーやく消される心構えができたみたいだねえ。

テンプレ的にここは大切な家族たちは置いてきた方が良かったんじゃないかなあ？  
ああごめん・・・足手まといで邪魔な雌鴉と女狐だったね!!」

博麗神社の上空には渦巻状の捻じれが発生していた。

それほど、今博麗大結界は不安定ということなんだろう・・・。

「さっきぶりだなソラ。 お前の思い通りに動かされてやったら

遅くなっちゃった・・・悪いな。 ここが今この瞬間この場所が!!!

俺たちとお前との決戦場だ」

あの捻じれが致命的なものになる前に・・・勝負を決める。

難しければ・・・奥の手・・・に・・・？

蒼い・・・糸。

「ぼーっとしているとすぐに終わりにしちゃうぞ★ 主人公つつ!!!」



「ッ!? おらっつっつ!!!!」

殴りかかってきた相手の右拳に右拳をぶつける。  
つぎ・・・膝かつ。

「おっつっらっ!!!!」

「ちっ。」

軽く後ろに跳んでひざ蹴りとの間合いを開けて、顔面にハイキックを叩きこむ。  
けど・・・防がれたか。

「・・・っふふ。 さーすが主人公くん!

ボクの考え、意味不明だよなあ!? ボクの上してること・・・許せないよなあ?  
ボクという存在。 消し去りたいだろう。

それが君という存在だ。 ボクは君の為に用意された君の劣化品。  
主人公と敵キャラつてのは大抵そういうものだからねっ!!!!」

跳びひざ蹴りっ・・・ ガー d・・・!?

スライディング・・・っ。

「こんな単純なブラフにひっかかってちや勝てないよ〜？」

ほらっ が ん ば っ てっ!？」

体勢を崩されたところに、衝掌が入り酸素が吐き出される。

右っ左・左・下・上。いや右っ!？ 捌き切れず、右頬の鈍痛と一緒に左に吹き飛ばされる。

「・・・手ごたえ無いなあ。再戦イベントなんだからさっさと覚醒しときなよ？」

ああ〜それとも・・・自分のHPじゃなくて仲間のHPで起こるイベントかなっ!？」

こちらに歩みながら、右手に黒い玉を作り文に向かって発射するソラ。

ニタニタと笑って声をかけてくる。たぶん、愛する嫁が消えてどんな気分だとか覚醒する気になれたかとか そんなところだろう。

・・・あんまり、人の嫁を嘗めるなよ。

「この程度で私を討ち取ったつもりとは・・・」

天狗の前で天狗になるのは控えたほうが良いと思いますよ?」（カシヤツ）

『風神纏い』：だっけ。天女のような羽衣を纏った文が俺とソラの間に軽やかに降り立ち、思わず見惚れそうな笑顔でシャツターを押した。

「・・・な。ちいつつ！」（ブンッ!!!）

苛立たしげに大振りな右フックをしてくるが・・・

緻密な風のコントロールにより拳にかかる風圧のみを強めた文によつてたやすく受け止められ、そのまま合気道の要領でひねられた手首ごと地面に叩きつけられた。

「ぐっ・・・っあつ。。。ボ・・・ボクが。。。」

許さない。ボクの相手は主人公だ・・・お前なんかじゃ・・・無いっつっ！」

一連の事実を忘れ新しい自分を思い出したのか、地べたから眼前に移動したソラはその右手に周囲に漂う黒い霧のようなものを集め、煙を無理やり形にしたような漆黒の剣のようなものを握りしめその刃を振るつた。

「人の奥さんに物騒なモン向けるんじゃないやねえよ・・・っ!!」

結月龍爪と電桜狼牙を一つに結び、編んだ神器結天浮雲太刀で迎え討つ。

ギイイツ!!と空を切り裂く音を響かせ俺とソラとの罅迫り合いになる。

「ほんつと鬱陶しいなあ．．．　ボクが君たちに付き合っただけで遊んでいる理由も

もう．．．無いんだからさ。　主人公。君の周りの人物を消そうと思ってもどうにも

上手いかなかったんだ．．．。

あの時、射命丸文を消し去った時に君は存在しなくなったはずの射命丸文を記憶していて挙句の果てには妙な赤い糸とやらで呼び戻していた。」

ん．．．？

「ボクの推測の域を出ないが．．．さてはその能力。『結を司る程度の能力』

とやらは、完全なるボクに対するメタのようだね。ボクが忘れようと思ったことも

君が結び繋げた事柄は改変できなくなっている．．．と

恐らくは。ゲームのセーブ機能、あるいは本のしおり。

君の能力で繋がった全ての物はその存在と歴史を固定。確定されるんだろう。」

ソラに対するメタ能力・・・セーブ。。 固定に確定。。  
言われてみれば・・・確かにそうなのかもしれない。

「まあ・・・ボクが先に生まれ手を焼いていたあいつが頼みの綱として生み出した  
そんな存在が君だ。　ボクに対して有用過ぎる能力を持っていても不思議じゃない  
し

むしろそれが当たり前だとも言えるだろう・・・」

チャキ・・・ギチ・・・キイ・・・

お互いの白刃から、そんな音を響かせてソラからの一方的な言葉は続く。

「だけど、セーブされたデータを削除することはできなくても。

君を！　つまりは・・・君というセーブ機能それ自体を忘れてしまえば・・・  
後は簡単だって言うことだよつつっ!!」

「・・・・・・・・ツ　うぐつつ。。。」(どきつつ。。。。)

腹に蹴りを入れられ、その場で膝を折る・・・

何を・・・する気だ。

「じゃあね主人公。 忘却の楽園からも忘れられるが良い。」

その手から放たれた漆黒の球は俺を包み込み・・・

「双覇あああああああああああああああああああああ・・・!!!」

私は、混乱する頭で・・・ただ泣き叫ぶことしかできなかつた・・・

「そんなに泣くなよ文。ちゃんと説明しただろう？

大丈夫だってさ。」

消し去ったはずの奴が再び目の前に現れて、ひどく動揺した面のソラを見据える。

「・・・ボク的能力は過去の君を忘れる。無かったことにする力。

現在の君が何をしたところで過去の行いを変えることが出来ないように・・・

ボクの力をどうこうすることはできないはずだ。」



「お前には解らないだろうな。 繋がりをごくくらないと断じるお前には。

過去が有って現在が有り、未来が創られて行くって言う当たり前の事が。」

この幻想郷を創る時、俺は幻想郷自体と結びの能力で繋がった。

まあ・・・それもあつて博麗神社の神になりゆかりんと博麗の巫女のサポートをしていったんだが。

だから、この幻想郷とここに生きる人たちの歴史は俺がここに生きている限り。

ソラの言う真実として確定される。

「お前が消そうとした過去を真実にしたんだ。

結を司る程度の能力で過去の俺、現在の俺、未来の俺を結びその存在を確定した。

俺はお前みたいに自分の要らない過去を無かった出来事になんかしない。

自分にとって都合のいい歴史を、真実なんていう響きの良い言葉でねじ込んだりしない！」

過去に犯したことも、現在の困難も、未来への希望も不安も

全部が俺だ。 どこかを捻じ曲げようなんて思わない。

「・・・せつかく今度は数奇な運命など辿らない

ただの人間として幼馴染たちと普通に幸せに暮らせるそんな真実にしてあげようと思つてたのに。 残念でならないよ主人公。」

ソラの提案・・確かに魅力的な提案だろう。

こつちの世界よりもあつちの世界のほうがはるかに便利で刺激的で。。。

家族なんてのも味わえたかもしれない。

「残念でならないな確かに・・俺は、ここに護るべきものが出来た。

俺の生き方を可哀想だと思う人もいるだろうけど、俺の半身のお前が俺を一番理解してくれるのかもしれないけど。 でも俺は俺で居たい。

お前に創られた二度目の人生なんてまっぴらだ。」

「・・・やっぱ理想と絶望は相入れないみたいだね。 殺す。」

言葉と動きどちらが早いか・・

俺の頭を吹き飛ばそうと跳びかかりながらのハイキックがくる。

「俺は、そうじゃないって信じてるっ!!」(ガッツツツツ!!)

左腕をL字にして右手で支えながら、攻撃を受け止めると

周囲の地面に軽く亀裂が入った。

「んぐっ……おらあっ!!!」

軽くはじき飛ばして、腹に拳を叩きつける……

この感触は上手く入ってないな。

「よっ……と。ボク的能力で君たちを消せなかつたとしても。

そう時間もかからずにこの結界は崩れ去りこの場所は露呈することになる。

そーなっちやつたら……ここに居る奴らみーんな居られなくなっちやうね★」

吹き飛ばされた体勢から地面に手を着いて跳躍、着地。

……ほとんどダメージ無しか。。。

「ボクの身体にいくらダメージを入れたつもりになつても、ボクはその事実を忘れる

君たちがどれだけ頑張つて攻撃しても何の意味もないんだよ。」

俺たちへの干渉を食いとめたところで、奴自身が能力を使えなくなっているわけじゃない。。 結界の崩壊も加味して長期戦は避けたいが……

「まだです。諦めちや相手の思うつぽですよ双覇っ。

やれることはまだあるんです……幻想郷の。私たちの子の為にも未来を！」

「まだ、そんな綺麗事を吐けるのかい？」

残念ながら射命丸文。どれだけ未来を希望をと。

そう言ったところで絶望はあるんだよ。」

「君が今、想い描いている未来。

それは主人公とのものだろうか？ いや聞かなくても解る

君はこいつと居ることをなよりの幸せだと想っている

ならこいつが居なくなってしまうたら？

新しい未来を見つけられるのかな。ならその未来も。」

激しい苛立ち…

「今、想い描くその未来が突然その存在を失う事もある

考えたことは無いかな？ 君の過去は今に果たして繋がっているか。

君の今は

想い描く未来に繋がるのか？」

「そもそも、君という存在は必要だったのか？」

どれか一つでも考えたこと直面したこと…あれば簡単に

大抵の人は絶望に支配される。」

蒼い糸が黒く染まっっていく。

「怖いんですね。」

「ボクの言っていることは、大概正論だと思っただけ。」

「ええ。正論だと私も思いますよ。」

同時になぜあなたがそんな能力を得たのか良く解りました。未来が見えないからですよね？

あなたは……いやあなたの元の人物が。でしょうか。

未来という見えなくて不確定なものを信じれないし恐怖でしかない。」

……文。

「だから確かなものを弄くことにしたんです。」

過去は変えられない。同じように言うなら未来は変えようが無い。まだ確定していない出来事を変えたとしても自分が変えたのか。変わってしまったのか。元々こうだったのか……確かめようが無いから。

自分が変えたのだと思えるものは過去にしか無い。

過去を変えれば現在も変わる不確かな未来をこれを通り返して思い通りの現在にする」

未来は少し先の現在。過去を変えて常に現在を塗り替え修正していく。

「きつと自分をなによりも嫌って憎んで、消し去りたい

そんな元の人物の想いからあなたが生まれた。」

だから、過去を改変する力を持った。

そう文は結論付けた。

「…ボクを知った気になってもこの戦況はどう覆す？」

それに過去を捻じ曲げる気は無いと言った。それはつまりボクへの拒絶だろう？  
なら…役割に徹しよう？」

瞬間、身体が霧のように消えまた眼前に現れる。

文の首を刈り取るように手刀を振られるが風神少女の目に捉えられ、いなされる。

左・右・下・上。

「最初ほど、あなたを拒絶しようとは思っていませんよ。

はあっ・・・はあっ・・・。。 なにも知らないうちに倒しておけばよかつたと  
そう思いたくなるような相手ですね。」

「あははははっ！ 拒絶しようと思っていないだと？」

おいおいおいおいおいおい・・・あまり笑わせんじやねえぞ雌鴉が。。

この後におよんでそんな甘ったるい言葉を吐きかけるなんて・・・」

・・・!? 腕が・・・消えて現れた。。

身体の一部を忘れて思い出したのか・・・？ いや、攻撃の後出しか。。

「ソラっ・・・!! その手、離しやがれつつっ!!」

白雲流・・・雷火の型。。 ！

(ズドンツツツツ)

!!!!!!

剣・・・!? 足止めかつ。。

次から次へと降り注いでくる・・・

「おっと・・・邪魔するなよ主人公。手荒く剥がれるところが見たいのか？」

衣服がじゃなく皮膚と肉が・・・ 射命丸文・・・中途半端な希望は絶望を育む。

より高いところから落下した方がダメーჯが大きいのは当たり前だろう？

ただまあ、それでも中途半端な希望すらなければ壊れてしまうだろうね。

ボクミタイニ・・・ そんなにボクをしりたいのなら語ってあげよう。」

ぐうつ・・・らちが明かない。 神器に合体させてる氷柱の能力は今使えない・・・

蘭のやつと契約解放すれば『千狐兵隊』が可能かもしれないけど。

氷柱以上には。。。ならない・・・

「ボクというより、ボク達の元の人物。そうシロと名乗ってるあいつの事だ。

ボク達を生み出す前あいつはこことは全く別の世界の何の力も持たない子供だった。

父親、母親、兄たち・・・噛み合わないことも衝突もあったが、問題というものは

何一つ無くあいつは普通でそれでいて幸せに育てられた。



ある時彼は希望と絶望を経験することになる。まばゆく暖かく幸せな光だ。あいつは固執し、依存し、全てを希望に任せた。

さぞかし嬉しかった事だろう。さぞかし幸福だった事だろう。

不安も恐怖も、現実を見据えることを放棄した彼からは取り除かれたのだから。

そして、目の前にあつたはずの希望は消えた。

まばゆく。暖かく。幸せを願う健気な光だ・・・生きることを放棄した彼を良しとする理由は無い。

あいつに残ったものは、その決断をさせたことへの罪悪感。

見ないようにならただけで存在していた未来への不安感。

進むためにはあまりにも脆すぎる現在への自責感。

その絶望はすぐに膨れ上がった。

罪悪感は全てに広がり、不安感は恐怖となり行方を遮った。

なにも成長していない自分を見るたびに生まれ生きている無意味さに溺れた。」

・・・攻撃が止んだ。

「……文っ！」

ソラが掴んでいた首から手を離し、こちらに突き飛ばしてくる。すぐに駆けより抱きかかえる。息は……してる。。。

「結局、あいつはその後前に進むことなど無かった。

時間が進むことに怯えながら、変われない自分を責めながら、不幸なニュースに自分が代わりになってしまえば良いと空想しながら、絶望の中で見た孤独死に進んだ。ボクが知っているのはここまでだ。恐らく一度目の人生の結末だろう。

その後何があつて人外になったのかは分からないが。ボク達を創つたのは希望も絶望も要らないと感じたからだろう。」

あいつの言ってることは……本当なのか……？

そんな人生を送つたようにはとてもじゃないが見えなかった。

「生み出された時ボクの方に傾いていたからか……それとも一つだった時の記憶が

純粹で正義で真つ白な理想たるキミを濁らせる事を案じたのか。

何にせよ、主人公君の記憶には最初から無いんだろうね。

でもまあ、仮にあったとしたなら笑顔だけだったと思うよ。

ボクの記憶には無関心以外には怒り、哀しみ、憎しみ・絶望の顔しかないからね」

「キミはアイツの希望だったものの集合体なんだよ。

ボクは絶望だったものの集合体だ。ボクとしてはハズレを引かされたそんな感じか。

まあ・・・別にだからどうしたって話なんだけどさ。」

(ギイイイイイイイイ!!!)

この扉が軋むような音は。

そろそろ・・・結界の限界か。クソ・・・

「ふふ・・・アハハ。まあ主人公とラスボスが決戦をやるには

整ってきたんじゃない？　・・・よつと。。　ほらキミも御自慢の神器を

かまえなよ主人公。」

残された時間はどれくらいかな・・・

相変わらず霧から生成した黒い剣のようなものの切っ先を向けてくる。

「・・・もう考え直すのは無理だな。 紫つつつつ!!」

体勢を落とし、両足は軽く開いて軽く曲げる。

右足を少しだけ前に出し、つま先すぐ対象に・・・神器は左腰に。 見えない鞘に納める。 その姿勢を崩さず合図で紫に文を移動させてもらう。

・・・紫の能力で意識を切り離されているはずの文の。 泣き叫ぶ声が聴こえる。  
文。文。文。。。 ごめん。 紫、頼む。

「・・・正義の主人公様としてはやっぱり、愛する奥さんを守りたかつたのかな？」

ま。。。 散々現在だ未来だとぬかして結局女の子の顔をあんなに涙で濡らさせるんだからキミもそーとーなクズだねえ。」

「・・・そうだな。 最期の最期まで泣かせることしかできなかった。」

紫に頼んだのは、合図をしたら博麗神社から文を遠ざけてほしいってこと。 つまりここまでしか伝えていない。 俺に勝算が無いことも。

「・・・その構え、抜刀術で来るんだろう？ ボクは仕掛けないよ。」

ボクの目的はここまで結界が歪んだ今ただ待つていればいいんだからさ。」

まあ・・・当たり前だなあ。

「白雲流―風雲の型。。　ただ速く・・・ただ精密に。。。」

瞬き。瞬間・・・死の境地に没入する。

身体が芯から冷たくなり、ただ一つだけ強く想うものは・・・

射命丸文。　彼女を守りたい。。。

「  
・  
・  
・  
・  
ふっ  
!!!!!!  
」

詰まった息を二気に吐き出し、右足・左足と力を込めて接近。  
左腰に納めていた神器を風を纏わせながら思い切り振りぬく。

止められたと視認する前に、右手を離し左手を持ち手に叩きつける！

「ングッ・・・痛つたいなあ!!!　ッ!?!」

のけぞるのを、視認する前に両手で持ち手を握り直し

上段から斬りかかる・・・のを読まれてるから。

一度手放し、下でもう一度掴んで打ち込む！

「ぐっ・・・抜き胴ねえー。　斬るのをまるで躊躇わないんだから・・・」

横一文字に斬り裂いた手ごたえはあつただけだな。

こうも一瞬で戻されるとほんとやになるな。

(ピシイッツツ・・・)

・・・!

(パキッ・・・ズンッ。。。)

「はあっ・・・はあっ・・・ついに。神器もへし折れちゃったか。

これで本当に対抗手段は無くなっちゃったらしい。」

折れた神器が光を放ち、二つに分かれた。

一つは氷柱に・・・もう一つは龍爪として俺の手に。

「・・・ご主人様。」

「・・・氷柱、本当に長い間俺と一緒に居てくれてありがとう。

最期の命令だ。射命丸文のことを宜しく頼む・・・それじゃ。」

「!..ごしゅっ!!!」

足元にスキマを開いて、文のもとに飛ばす。

二人が出られないように危険な目に合わないように最大出力の結界も付けて



「ふふふふ．．．っ あはははははははは!!

いいねえずいぶんボク好みのシチュエーションじゃないかつ!!!  
独りになったお前とこの幻想郷に引導をくれてやる!」

「．．．くっ!!! うおおおおおおおおあああああああああ!!!」

ギ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
ン  
ン  
ン  
ン  
ン  
ン  
ツ  
ツ  
ツ  
ツ  
〃  
〃  
〃

!!!!!!!!!!!!!!

「お前のやりたいこと、これじゃないんだろ。ソラ!

．．．ぐつ。お前が俺の反対だとかそんなのどーだつて良いんだよ!!」

痺れる腕に力を込めて、必死に結月を握る。

もう受けるのが精一杯だけだな．．．．．

「残念だけど、キミがどう思っているかがボクのやることはこれだ。

ボクの役割は……これなんだよっ！理想を叶えるのはキミの役目だ。夢、希望、ボクはそんなもの抱かない……ねじ伏せ見せる真実を!!!」

またそれかよ……くっ……。

「俺たちはっ！もうシロの半分ずつじゃねえんだ！

あいつが氷柱にそう言ったんだ創りだした奴にそう言われてるのに！

お前はいつまでその言われた役割を続けるつもりだ!!!

定かじゃない未来が怖いなら、俺と一緒にやってやる。

もう歴史をゆがませるのはやめろ……お前が居なくなったら俺は!!!!」

っ！突きっ……ぐっ!!!

「はあっ……はあっ……はあっ……ボクに理解者は居ない。

元のあいつに捨てられたように次なんてものは無い！要らないんだよそんなモノ!!

どうせ、また捨てられるだけだろう？負の感情だけを固めたものなんて誰が必要と

するものか。愛されるのは君だ！明るい未来を目指せるのは君だ！

必要とされるのは君だ！努力できるのは君だ！君だけが必要なんだ。

ボクはキミの劣化コピーで生まれた意味を持たない粗悪品なんだよ！」

「ぐっ……はあ。 はあっはあっ……ぐぬぬぬ!!!

俺に必要なだろうがっ!!! お前が言ったんだお前は俺の半分だつて!

半分欠けてる俺もお前も生物として異常だつて。

俺は……お前を受け入れる!

俺が個人として生きるためには受け入れなきゃならない。 お前も!」

あああ”! 血が止まらねえ。

痛つてえ……

「ボクは。。 もう繋がりにんて……」

「俺とお前が戻つても……独りが一人になるだけだ。

真つ白も真つ黒ももう飽きただろお互い。 モノクロはそろそろ時代遅れだ……。

……黒霧ソラ! 左手だしやがれつつっ!!!」

おそらく無意識のうちに出されていたであろうその左手を右手で掴む。

これで終わらせる・・・。

黒でも白でもどっちでもいい。

「ばいばい  
ばいばい  
．．．  
結神  
．．．

『契約破棄』  
」



・  
・  
・  
数日後  
・  
・  
・

此処は、東の海に浮かぶ小さな島国 日本。

その土地の一部を、『博麗大結界』と呼ばれる結界によって区切り



その外側の世界とのかかわりを断絶した今はもうその存在を忘れ去られた者たちの幻想の者たちの楽園。

その名を『幻想郷』

「……あややや。今日もなかなかネタが見つかりませんねえ？

んっ。。。空はこんなにも良いお天気で、こんなに風も気持ちいいのに。。。

なんでしょう……。このなにかが足りない感覚は。」

本当に、『雲』一つ無いどこまでも続く青空。。。

ここ最近ずつとこんなにも良いお天気が続いてる……………

「霊夢さんのところにも行きましようか。。

あそこなら面白い事件……。基い良いネタが有るかもしれませんし。」

……………(少女移動中)……………

「おはようございます霊夢さんに、霊夢さん。」

博麗神社に降りてみると、いつも通りに白髪の巫女と黒髪の巫女が居た。

どちらも『はくれいれいむ』のため本当に呼びづらい。

「あら・・・おはようございます文さん。」

今朝も新聞配達ですか？ 毎日、ご苦労様です〜。」

「・・・あんだまた来たのね。 残念だけどここには記事に出来るようなことは

なーんにも無いわよ。 ほんと・・・このところ不気味なくらい何も無いわ。」

妖怪である私にも丁寧な口調で接してくれる霊夢さん。

妖怪である私が良くここを訪れるのを喜ばしく思わない霊夢さん。

本当に対称的な二人だ（苦笑）

「あやや・・・取材しようとした矢先に潰されてしまうとは。。。」

しかし、そうですね。 霊夢さんはこれを異変ではないと考えてるんですね。」

「・・・何よ。その言い方だとあんたは今まさに異変が起きていると  
そう考えてるってことなの？」

博麗の巫女の怒りを買うのはまずいですね・・・。

「いえいえ・・・。ただ少しだけ何かがおかしいような

そんな気持ちになってるだけです。霊夢さんが異変ではないと言うならそうなの  
でしょう。気にしているのも私だけ見たいですし。

それでは、今度は紅魔館の方にも行ってみます。

今度はお茶くらいだしてくださいよ？ お客をもてなさない神社って書いちゃい  
ますよー。」

少女の怒号を聞き流し、今度は紅い吸血鬼の館に向かう。

・・・（少女移動中）・・・

「えっへへへ 祥磨あ〜?」(ぎゅうううつ。)

「ドリズル・・・あんまりしがみ付かれていますと本が読みにくいんだが。

あとその翼で飛べるだろうになぜおぶさる? そんなで魔理沙、そろそろ落ち着いてくれないかな。。。パチュリーの目が。」

「こおらあつ!! 離れろおつ! 誰の彼氏だと思ってるんだく!!!」

「あやや・・・。 あのお三方来るたびに此処で喧嘩してますねえ。

よいしょつと 昨日ぶりですパチュリーさん。 その後どうです?」

件の三人と少し離れた位置にこの大図書館の主。

魔法使い パチュリーノーレッツさんが頭を抱えていた。

「・・・どーしたもこーしたも、一日やそこらでなにか変化が有るわけないでしょう? 本当にあいつらいつまでここで喧嘩してるのかしら・・・図書館なんだけど

まあ。強いて言えば、私の頭痛の回数が増えた位よ。今まさにね。」

おお・・・なかなか殺気のこもった視線ですね。

「ん〜。『大図書館の主。不治の病かっ!?』『魔法の森の三角騒乱』どっちもぱつとしませんね〜。新鮮さも無いですし。」

「・・・うるっさいわね! どいつもこいつもっ!

此処は私の図書館なのつつつつ出ていきなさい〜~~~~い!!!

・・・むきゅー」(どきっ)。

つつつ。まさかパチュリーさんがこんなに大きな声を出すとは。

仕方が有りませんね〜 あの従者が来る前にお暇します(パチンツ) k・・・

「パチュリー様・・・頭に血が上り過ぎてしまっただけみたいね。

いつものお薬と。念のために血圧を下げるお薬も用意しておきましょうか・・・  
 ・・・・また来たのねこの新聞記者。まあ・・・良いか。

一度くらい、ちゃんとお客として正面から入ってほしいものね?

次は投げるから・・・」(パチンツ)

か・・・？

なにか・・・鳥肌が。。。

「ま、まあ次の取材先に行きましようか！」

・・・(少女駆け周り中)・・・

「ふひひ．．．けーつきよく。一日中飛び回って成果0ですかー

このままでは花果子念報に部数で負けるどころか．．文々。新聞が終刊になって私のこれからがー．．．」

自室に帰ってきて、うなだれては見ますが実際問題書けるネタが無い。

このままでは本当にマズイですねー．．．。

「文さま~~~~~！ ご飯出来ましたよ~~~~~！」

「ん。。ひとまずご飯ですかね。 は~~~~~い!!!

今行きますよ~~~~氷柱~~~~!!」  
これからの思うと重くなる腰を持ち上げ・・・

(とさっ。。)

ん？ なんの音でしょう。。

「なにか落としましたかねえ？ ……『文花貼』  
なにか無意識のうちに良いネタでも書いてありますかねえ？」



どんなに、注目されそうな記事のネタよりも。

どれほどに興味を持たれそうな一面のタイトルよりも・・・

過去の私が最も、たくさん楽しそうに・・

幸せそうに記録していた『白髪青年』

「・・・っ。。　そう・・・は。。。。？」

雲無き幻想の空・・・  
一筋の希望は・・・その眩きか。